

博士論文

論文題目 フィリピン革命第2フェーズにおける領外活動から見た
崩壊の過程——フィリピン、香港、スペイン、アメリカ、
日本——

上野 美矢子

目次

序章

-1-

0-1. 第2フェーズまでの経緯	4
0-1-(1). スペイン領フィリピンとスペイン	4
0-1-(2). スペイン領キューバとアメリカ	9
0-2. 本稿の目的	10
0-3. 主に使用する史料	12
0-3-(1). 比米戦争押収関連史料	12
0-3-(2). 日本語史料	15
0-3-(3). 西語史料	15
0-3-(4). 米語史料	15
0-3-(5). 固有名詞及び記述について	16
0-4. 先行研究	17
0-5. 本稿の構成	23

第1章 第2フェーズにおける香港委員会とフィリピン革命の推移 -26-

1. 香港の重要性の高まり	29
2. 米西戦争初期（1898年5月1日—6月30日）	36
2-1. 3つの可能性を巡る駆け引き	36
2-2. イサベロ・アルタチョが引き金となる対立	40
2-3. エミリオ・アギナルド・イ・ファミイ帰還後の香港のリーダー	42
2-4. フェリペ・アゴンシーリョと一部の革命家との対立	43
3. 米西戦争後期（1898年7月1日—8月13日）	47
3-1. 先の見えない不安	47
3-2. 海外活動の組織化	49
3-3. 香港の植民地当局の対応	51

1. 米西戦争マニラ湾海戦勃発までの概略	
(1895年8月—1898年4月30日)	108
2. 新たなフィリピン人革命家の来日と比米戦争までの活動	
(1898年6月19日—1899年1月)	110
3. 陸軍観戦武官を中心としたフィリピン領内での革命家との交流	
(1898年5月—11月)	118
4. 軍事インストラクターの派遣 (1899年2月—1900年7月)	126
4-1. 長野義虎歩兵大尉の派遣	126
4-2. 原禎砲兵大尉たちの派遣	129
5. 時澤右一砲兵大尉の活動 (1899年2月—1901年12月)	131
5-1. 陸軍視察員としての活動	131
5-2. 土筆ヶ岡養生園での静養	142
5-3. ホセ・アナクレト・ラモスの「帰国」	144
5-4. スクーナー船の購入と武器の輸送	147
6. 奈良原忍歩兵大尉の活動 (1900年5月—1901年12月)	150
6-1. マニラ駐在	150
6-2. マリアノ・トリアス・イ・クロサス将軍との会見	151
6-3. 物流・人的交流・資金サポート	153
7. ビジネス関係の構築	156
7-1. ツアソン社構想	156
7-2. ホセ・アナクレト・ラモスへのビジネス・サポート	158
8. ミッションの終了 (1901年12月—1902年初旬)	160
8-1. アメリカ当局の家宅捜索	160
8-2. 奈良原忍歩兵大尉の講話	166
9. 小括	167

第3章 マドリッドの革命新聞

『フィリピナス・アンテ・エウロパ』の主張

-169-

1. 新聞について	171
1-1. 『フィリピナス・アンテ・エウロパ』の概要	173
1-2. 発行者のイサベロ・デ・ロス・レイエスについて	173
1-3. 新聞の性格	178
1-4. 投稿者	180
1-5. 創刊の辞	180
1-6. フィリピン委員会との関係	181
1-6-(1). 香港委員会	181
1-6-(2). マドリッド委員会	183
1-7. 新聞発行への障害	185
1-7-(1). 新聞記事に関するスペイン当局からの訴訟問題	185
1-7-(2). アメリカの弾圧	187
2. フィリピン人の政府の正当性とアメリカの不当性	188
2-1. フィリピンが独立国である根拠	188
2-2. フィリピン人の統治能力	189
2-3. スペイン刑法	190
2-4. アギナルド独裁政府への支持	191
2-5. アメリカ軍政への異議	193
2-5-(1). 残虐行為・不正行為・挑発行為	193
2-5-(2). 裁判所問題	194
2-6. 人種差別	196
2-6-(1). アメリカ人の人種差別	196
2-6-(2). 国際的人種差別の中での相対化	198
2-7. フィリピン委員会への異議	199
2-7-(1). フィリピン委員会のステートメントへの反論	199
2-7-(2). 国民投票	201
2-8. アメリカ帝国主義への批判	202
2-8-(1). アメリカ帝国主義と反帝国主義	202
2-8-(2). 帝国主義アメリカの搾取の構図	204

3. 宗教問題と思想	206
3-1. 宗教問題	206
3-1-(1). キリスト教徒としての神の摂理と信念	206
3-1-(2). 修道士問題と聖職者の現地人化	208
3-1-(3). プラシド・ルイス・シャペル教皇代理への批判	210
3-2. 暴力の容認	213
3-2-(1). アナーキズムと暗殺	213
3-2-(2). 戦争の容認	216
3-3. スペインとの関係、スペイン共和主義者・自由主義者の共感	218
3-4. フリー・メーソン	221
4. アメリカ協力者への批判	222
4-1. アメリ...カイン、アメリ...カニン、アメリカニスタ	222
4-2. ペドロ A. パテルノ	226
4-3. フェリペ・ブエンカミノ	229
4-4. フェデラル党	230
5. 近代化	233
5-1. オーロラ・ヌエバ	233
5-2. 戦術	235
5-3. 法律家の育成	237
5-4. ヨーロッパ化	237
5-5. 教育	239
5-6. 政教分離	242
5-7. 日本	243
6. 小括	243

**第4章 在香港アメリカ（総）領事報告から見た香港委員会と
 在香港アメリカ（総）領事の対応**

-247-

1. ラウンズヴィル・ワイルドマン在香港アメリカ（総）領事の略歴	248
----------------------------------	-----

2. ラウンズヴィル・ワイルドマン在香港アメリカ（総）領事在任中の 香港（総）領事館について	250
3. ラウンズヴィル・ワイルドマン在香港アメリカ（総）領事の フィリピン人革命家・香港委員会への見解と態度の変化	252
3-1. 米西戦争初期から7月後半まで (1898年5月1日—7月25日)	252
3-2. 米西戦争後期から米西戦争勃発まで (1898年8月8日—1899年2月4日)	255
3-3. 比米戦争勃発後（1899年2月5日—）	259
3-4. イサベロ・アルタチョへの見解	263
4. 武器・物品調達	264
4-1. 汽船「アビー」を使った調達	266
4-2. ジャクソン・アンド・エバンス社を使った調達	271
4-3. 上海からの調達の失敗と巨額の損失	277
4-4. その他の武器調達と関連する出来事	281
5. ラウンズヴィル・ワイルドマン総領事の妨害工作	285
5-1. ジョージ・デューイ提督の警護	285
5-2. マカオへの軍艦停泊要請	286
5-3. 私的調査員の雇用	289
5-4. 香港総領事館への軍人の派遣	293
6. フィリピン人革命家の懸念	293
7. 小括	294

終章 **-298-**

各章の要約	298
結論	302

史料と参考文献 **-311-**

史料	311
(1) 未刊行史料	311
(2) 刊行史料	313
(3) 雑誌	313
(4) 新聞	313
(5) 官報	314
参考文献	315
日本語	315
外国語	321

地図

口絵 1. 比米戦争当時のフィリピンの地図とアメリカの侵攻	-viii-
口絵 2. 1896 年のマニラ湾内のカビテ州周辺の地図	-ix-
口絵 3. 1899 年のフィリピン諸島とマニラ市街地の地図	-x-

巻末資料

1. 人物相関図

人物相関図 1	1
人物相関図 2	2
人物相関図 3	3
人物相関図 4	4

2. 年表

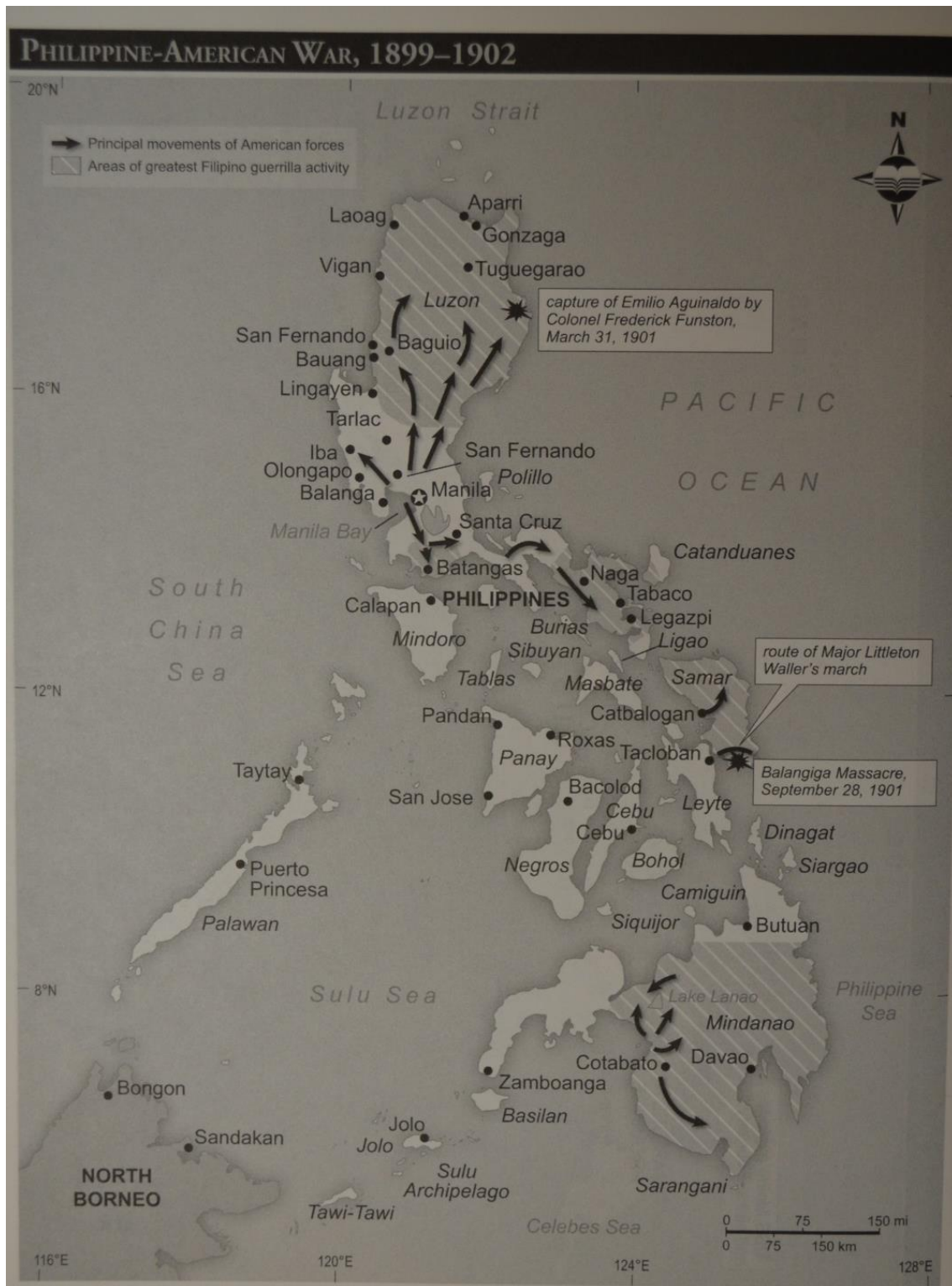
5

3. 人物プロフィール

18

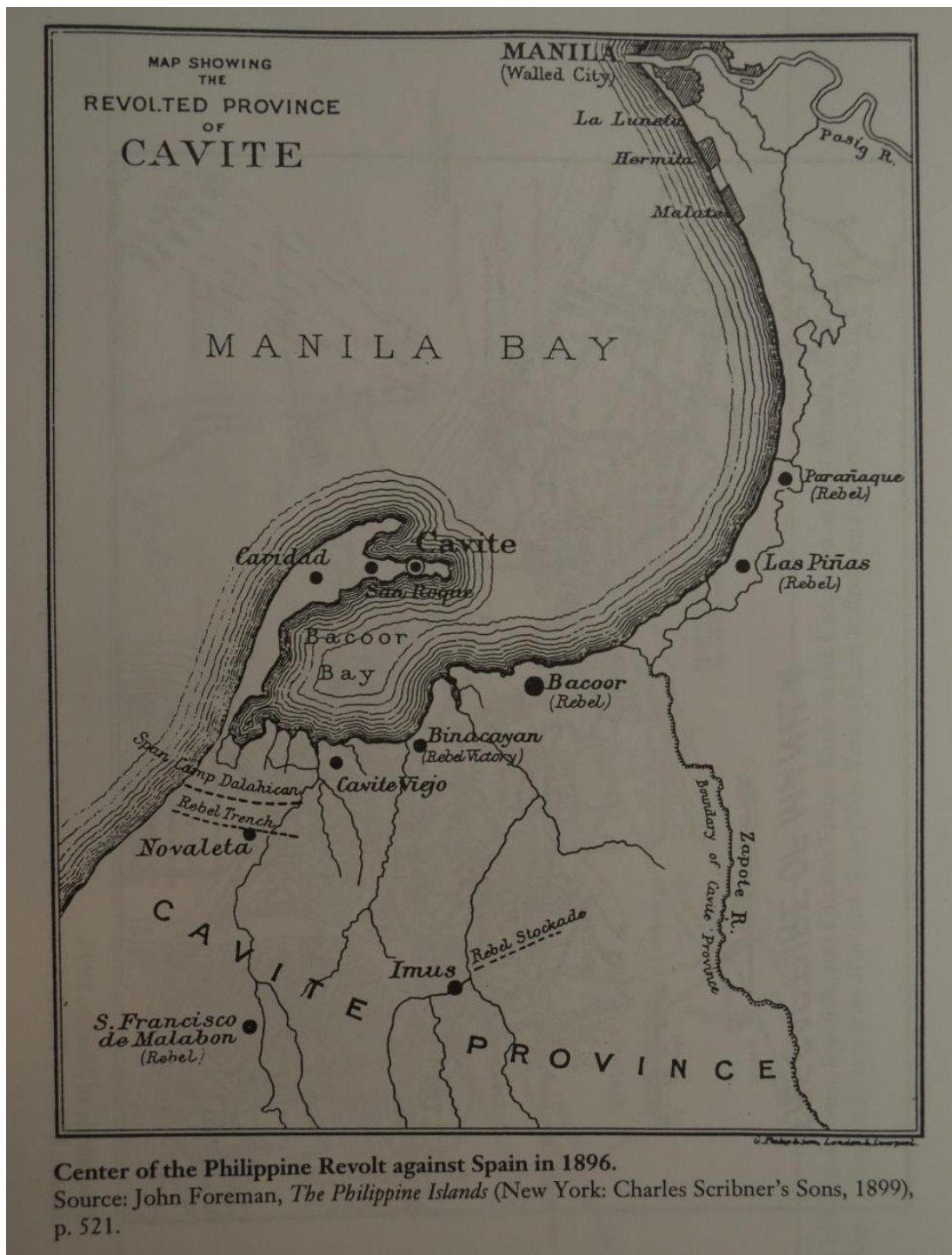
4. 『フィリピナス・アンテ・エウロパ』目次

42



口絵 1. 比米戦争当時のフィリピンの地図とアメリカの侵攻

出典 : Tucker, Spencer C. ed., *The Encyclopedia of the Spanish-American and Philippine-American Wars: A Political, Social, and military History*, Vol. I, California: Abc-Clio, LLC. 2009, General Maps xxvi.

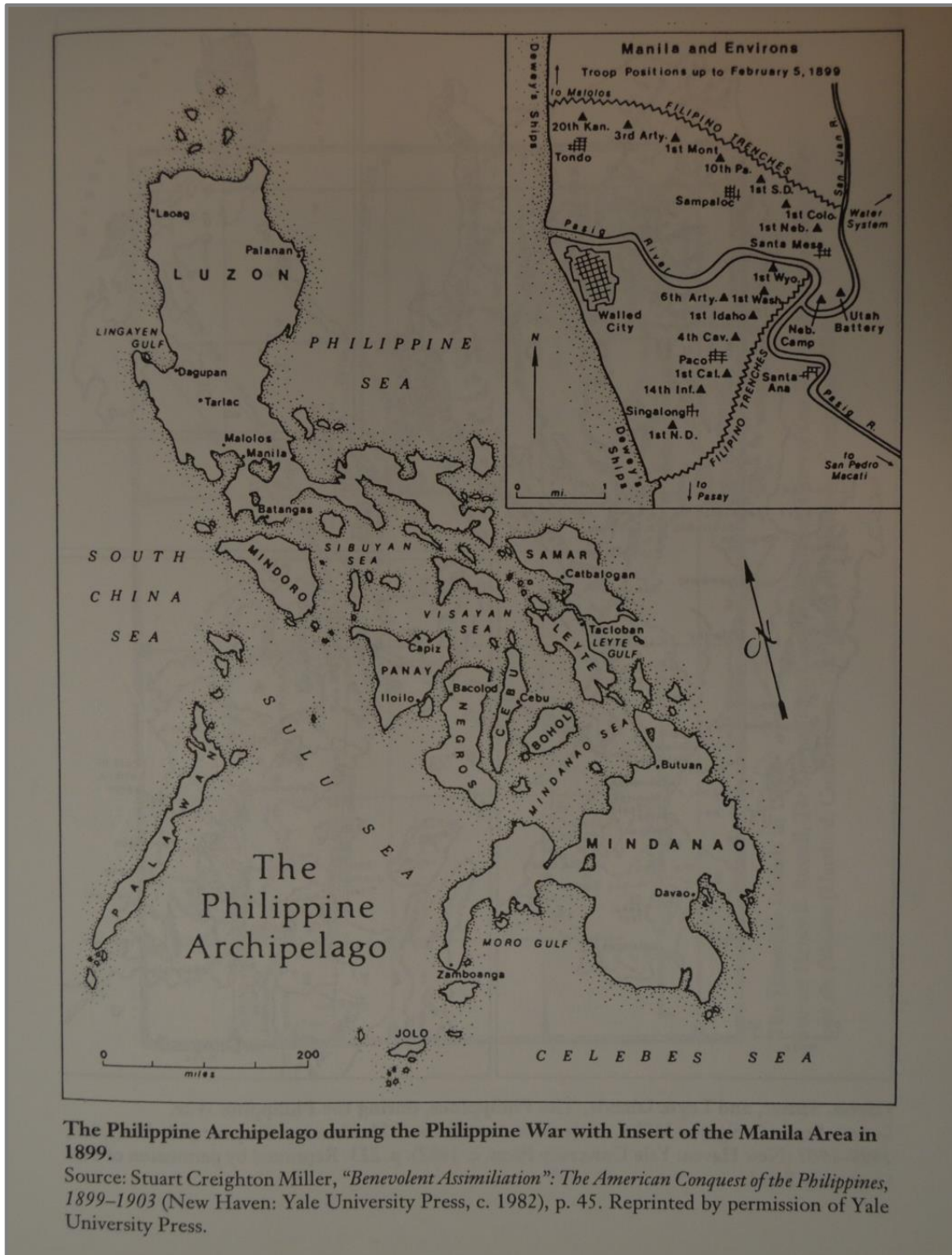


口絵 2.

1896年のマニラ湾内のカビテ州近辺の地図

出典：Beede, Benjamin R., ed., *The War of 1898 and U.S. Interventions 1898-1934: An Encyclopedia*, New York:

Garland Publishing, Inc., 1994, p638.



口絵 3. 1899年のフィリピン諸島とマニラ市街地¹の地図

出典 : Beede, Benjamin R., ed., *The War of 1898 and U.S. Interventions 1898-1934: An Encyclopedia*, New York:

Garland Publishing, Inc., 1994, p.639

¹ Walled City が当時のマニラの中心地であったイントラムロス Intramuros (防壁都市)。

序章

1896年8月末から武力闘争が始まった「フィリピン革命」は、東南アジアにおける最初の国民国家創設運動、言い換えると、フィリピンというスペイン王国が作った領土に住む「フィリピン人」¹の民族解放革命運動²であった。当時のフィリピンでは、スペイン人は支配者以外の何者でもなく、フィリピン人は何があっても彼らを凌駕することはできなかった。したがって、当時のフィリピン人たちはスペイン人を支配階級と考え、フィリピン人はたとえどんなに大きなアシエンダの地主や企業家であったとしても、自身を搾取される被支配階級だと認識した。したがって、一部のフィリピン人知識層は当時のスペイン領フィリピン諸島の中で、フィリピン共和国という国家を設定し、その枠組みの中に住む人々を1つの民族として考え、スペインからの民族解放運動を行うことを決断した。それと同時にフィリピン人はスペイン人修道士によって支配された政治を「神権政治 Teocracia」〔*Filipinas ante Europa* N°6 Enero 25, 1900〕³と呼び、この神権政治の打破と、スペイン人による封建的絶対主義の破壊、そして社会の近代化⁴を目標にして社会を改革しようと考えた。彼らはスペイン支配に対抗する意識として「反スペイン・ナショナリズム」を作り上げ、民族解放と近代化、神権政治の打破などを「革命」⁵と呼んだ。

¹ スペイン支配以前に「フィリピン」という名前のついた領域は存在せず、したがってスペイン領フィリピンが成立する以前は「フィリピン人 *Filipinos / Pilipinos*」という考えもなかった。「フィリピン人」という考え方は、スペインがフィリピンを植民地にした時から創出され、その定義は時において変化した。スペインが統治した約300年の間に、フィリピン領内では、スペイン征服以前から土地に住んでいた人々と、スペイン人、そして中国大陸から渡ってきた人々の間で、混血化が進んでいった。こうしてスペイン統治の間に、フィリピンでは、支配者であるスペイン人に対して、以下の4つのカテゴリーに分けられる被支配者——1) スペイン人と原住民の混血、2) 中国人と原住民の混血、3) これら3者の混血、そして4) 原住民——という人々が生み出されていった。これらの人々は19世紀末頃になると、支配者であるスペイン人に対して、「非スペイン人（非支配者階級）」という1つの意識を持った。そして1896年のフィリピン革命時になると、スペイン人に対して、自分たちは「フィリピン人」であるとの主張を始めた。したがって、1896年の革命当初の段階では、フィリピン人はパトロン・クライアント関係や上記カテゴリーに関係なく、団結してスペイン人に抵抗したのである。

² 1900年に香港で活動していた革命家のエミリアノ・リエゴ・デ・ディオス *Emiliano Riego de Dios*（リエゴ・デ・ディオス）は祖国の解放という表現を使った〔PIR 530-3〕。

³ フィリピン人革命家は政教分離を明確にするためにも、修道士によってコントロールされたフィリピン統治を「神権政治」と呼んだ。

⁴ 近代化については第3章で扱う。

⁵ 先行研究ではフィリピン人同士での格差是正なども革命運動の目標に含めているものもある。しかし革命当初は主に、スペインと「神権政治」からの解放が目的だった。また、

本稿ではテオドロ・アンドン・アゴンシーリョ Teodoro Andal Agoncillo (T. アゴンシーリョ) ⁶の『フィリピン民衆の歴史 History of the Filipino People』⁷にしたがって、フィリピン革命を2つのフェーズに分ける。第1フェーズ [T. Agoncillo 1990: 167] は、1896年8月30日のサン・ファン・デル・モンテ San Juan del Monte⁸での武力闘争開始 [T. Agoncillo 1990: 173] から、エミリオ・アギナルド・イ・ファミイ Emilio Aguinaldo y Famy (アギナルド)⁹が、ビアク・ナ・バト協定 Pact of Biyak-na-bató / Pacto de Biak-na-Bató¹⁰を受け入れ、80万ペソ¹¹を受け取ることを条件に武力闘争を停止し、香港に追放される1897年12月27日 [T. Agoncillo 1990: 185] までである。この第1フェーズは、スペイン当局とフィリピン人革命家との独立闘争であり、スペイン領フィリピンでの内戦であった。武力衝突が起きた当初は、革命側が勝利を重ねたが、その後戦闘はこう着状態が続き、革命側とスペイン当局は話し合いで武力闘争を終結させることにした。第2フェーズ [T. Agoncillo 1990: 187] は、1898年5月19日のアギナルドのカビテへの帰還から始まり、

本稿で扱うフィリピン領外にいた革命家は、スペイン人とフィリピン人の格差、またはスペイン人修道士による圧制からの解放などには頻繁に言及したが、フィリピン人内の階級差について述べることはあまりなかった。領外革命家に限って言及するならば、彼らの革命とは、民族解放とスペイン人修道士の「神権政治」からの脱出を目指したものであり、そこに社会主義革命の意味は殆ど含まれていない。しいて言えば、アナルコ・サンディカリズムの影響が発言に見られるくらいである。彼らはフィリピンの民族をほぼ1つの民族と考え、スペインやアメリカの「軛 yugo」からフィリピン人を解放し、スペイン領フィリピンを、独立国であるフィリピン共和国に変えることを主眼に置いていた。「軛」という言葉は領外革命家が頻繁に使う言葉であった。民族については第3章で扱う。

⁶ T. アゴンシーリョ (1912-1985) はフィリピンの著名な歴史研究者。本稿ではフェリペ・アゴンシーリョ Felipe Agoncillo という革命家も扱うので、混同を避けるために、T. アゴンシーリョと略す。

⁷ この著書は国立フィリピン大学の一般教養の歴史の授業でも使われているものであり、本稿ではこの呼び方を採用する。

⁸ マニラ首都圏に位置する革命軍とスペイン当局で武力衝突が起こった場所。武力衝突が起こった場所については諸説あるので、本稿ではT. アゴンシーリョの本に従い、サン・ファン・デル・モンテとする。

⁹ アギナルド (1869-1964) は、革命組織「祖国の子たちの最高でもっとも尊敬すべき結社 Kataas-taasang Kagalang-galangang Katipunan ng mga Anak ng Bayan (カティプーナン)」[イレート 2005: 125] の長であったアンドレス・ボニファシオ Andres Bonifacio に代わって、1897年5月10日からこの革命組織の長となり武装闘争を率いた。

¹⁰ スペイン当局とアギナルド側は、アギナルドと革命の中核を担った人々が、スペインから80万ペソを3回に分けて受け取ることを条件に香港に追放される旨の「ビアク・ナ・バト協定」に合意した。これによりアギナルドは香港へと追放された。しかしスペインから実際に支払われたのは40万ペソであった。

¹¹ フィリピン側の記述には、ペソとドルが混在して記されている。革命側は基本的に、1ペソ=1ドル(銀)として考えている。したがって、本稿でも使用する史料によって、ペソとドル(銀)、またはドル(金)が混在している。

米西戦争、フィリピン革命軍とアメリカの戦いを経て、1902年7月4日のアメリカ合衆国（アメリカ）¹²のフィリピン平定宣言で終わる。この革命軍とアメリカ軍との戦いの終了をいつにするかについては、研究者の中でも意見の分かれる部分であり、T. アゴンシーリョも上記の著書では終了日を明確に示してはいないが、本稿では、アメリカによる平定宣言が行われた1902年7月4日を終了日としたい。

第2フェーズ開始当初は、革命軍の倒すべき相手はフィリピンのスペイン当局であったが、スペインが米西戦争¹³で負け、フィリピンを1898年12月10日に2,000万ドルでアメリカに売り渡した〔T. Agoncillo 1990: 212〕ため、革命軍と敵対する位置にアメリカが就き、1899年2月4日に革命軍とアメリカ軍の間で武力衝突が起こった。

第1フェーズでは敵対者が以下の2つ、1) フィリピン領内に存在する前近代的な圧政を行う修道士、2) 墮落したスペイン人官吏とそれを助けるフィリピン人協力者——であったことから、革命家たちは国際法などもあまり気にせず武力闘争を行うことができた。しかし第2フェーズでは、そこに新興列強国のアメリカが加わったことで、フィリピン人たちは否応なしに国際社会のパワー・ゲームの中に放り込まれることになった。その上フィリピンがアメリカの「所有物」となったことで、革命は複雑な状況に置かれることになった。1899年2月4日からの革命軍とアメリカ軍との戦いは、当時の国際法では宗主国アメリカに対する反乱と考えられ、新聞やアメリカの公式史料も「反乱 *insurgence / insurrection / rebellion*」¹⁴という言葉が使われていることも多かった。革命家自身も、反乱という言葉を用いたが、彼らがこの言葉を使う時には、不屈の精神で徹底抗戦をするという意味で使っており、宗主国の存在を認めた上で使っていたのではなかった。革命家は反乱という言葉の他に、「戦争 *guerra*」という言葉を使うこともあり、マドリッドの革命新聞『フィリピナス・アンテ・エウロパ *Filipinas ante Europa*』などでは、彼らの「戦争」を肯定し正当化する記事を掲載していた¹⁵。「客観的」¹⁶な立場で第2フェーズに向き

¹² 本文では () 内で示したようにアメリカと略すが、引用、題名、肩書きではアメリカ合衆国と略さずに記述する。

¹³ フィリピンにおける米西戦争の戦闘は1898年5月1日のマニラ湾海戦から、同年8月13日のイントラムロスにおけるスペインの敗北までであるので、フィリピン革命を扱う本稿では米西戦争の戦闘期間を1898年5月1日から8月13日までとする。

¹⁴ 文脈によって単語を使い分けている。

¹⁵ これに関しては第3章で扱う。

¹⁶ 本稿における客観的は、太平洋戦争による日本のフィリピン占領という出来事によって、戦後長い間、日本人が踏み込むことができなかった——配慮をして発言を控え、必要以上に日比協調行動を強調するような、または、日本の侵略への贖罪を含ませて書かねばなら

合う本稿としては、どちらの言葉を使うべきであるのか非常に悩むところではあるが、1899年2月からのフィリピン革命軍とアメリカ軍の争いは、アメリカのフィリピン支配に対して、フィリピン人が国民国家と民族解放¹⁷を掲げて戦ったという現実を踏まえ、独立戦争と位置付けて、現在フィリピン史で使用されている「フィリピン—アメリカ戦争(比米戦争) The Filipino-American Hostilities」〔T. Agoncillo 1990: 213〕という名称を使用したい。

当時のフィリピン人たち、特にフィリピン領外で活動する革命家 *revolucionario*¹⁸は国家間の駆け引きの中で翻弄されながら、革命をサポートせねばならなかった。フィリピン人革命家たちの一部は、第1フェーズでもフィリピン領外で活動をしていた。しかし、第2フェーズになるとアメリカという新興列強国が加わったことで、アメリカにかかわる国際的影響に大きくあおられ、活動範囲も広がらざるを得ない状況になり、フィリピン領外で活動することを以前にも増して強いられるようになった。1898年から1900年代初期という世紀転換期時代は、義和団の乱など国際社会を巻き込む大きな変動がアジアで始まった時期でもあり、フィリピン人革命家たちは、欧米の影響だけではなく、これらアジアの変容と近代化の影響をも受けることになった。

0-1. 第2フェーズまでの経緯

0-1-(1). スペイン領フィリピンとスペイン

本項では、第1フェーズ終了時までの、スペイン領フィリピンとスペインの経緯を、簡単に述べておきたい。

16世紀にフィリピンを「発見」したスペインは、キリスト教と修道士を利用してその支配を広げていった。19世紀後半になるとスペイン領フィリピンでは、スペイン人修道士が圧政を行い、スペイン人官吏は自身の利益だけを追求し、フィリピン人下級官吏はそのスペイン人の顔色を伺うというような、賄賂と腐敗が蔓延する状況に陥っていた。本国スペインではすでに修道士の圧政の時代は終わっていたが、フィリピンでは依然として宗教改

なかった——部分に、そのような感情を入れずに切り込むという意味で使う。フィリピンを蔑む視点でも、日本を卑下する視点でもない見方、つまり、フィリピンと日本を対等な立場で検証するということである。

¹⁷ 革命家の民族などに対する認識などは、第3章で触れる。

¹⁸ 本稿では1898年8月30日の「フィリピン革命」武力闘争開始前までは、活動家と呼び、その後は革命家と呼ぶ。これ以降、フィリピン領外で活動する革命家を領外革命家、フィリピン領内で活動する革命家を領内革命家と呼ぶ。

革以前の前近代的な宗教支配が続き、フィリピン人社会の中には修道士の横暴に対する不満が蔓延していった。

このような状況の中で、1872年1月20日、マニラ湾の東側に位置するカビテ兵器廠内で反乱が起こった〔Schumacher 1998: 23〕。これがフィリピン史で述べられる「カビテ反乱 Cavete mutiny」〔T. Agoncillo 1990: 124〕である。この反乱自体は兵器廠で働く労働者が待遇改善を求めて起こしたものであり、スペイン当局に反抗して蜂起したものでなかったと言われている。しかしこの反乱が、植民地体制の崩壊を誘発することを危惧したスペイン当局は、フィリピン人に対し激しい弾圧を行い、当局にとって都合の悪い人物を逮捕・処刑していった。その弾圧と混乱の中、スペイン人が独占していた聖職をフィリピン人に戻すように運動をしていたホセ・ブルゴス José Burgos (ブルゴス)、ハシント・サモラ Jacinto Zamora (サモラ)、マリアノ・ゴメス Mariano Gomez (ゴメス) の3人のフィリピン人聖職者が、スペイン当局によって処刑された¹⁹。この処刑は当時のフィリピン人社会に大きな衝撃を与え、この3人は後に聖職者の現地人化問題におけるシンボリックな存在となった。その他にも、多くのフィリピン人たちが、スペイン当局から冤罪を言い渡されたり、言い掛かりをつけられたりして、フィリピン領から追放された。その後それらの人々の一部は、フィリピンの近くにありながらも、スペインの力の届かない「外国」である香港に移り住んだ。

しかし、当時のスペイン本国の政治はフィリピン以上に揺れていた。スペインは1873年に王制が倒れて、第1共和政(1873-1874)が成立したにもかかわらず、その政権は安定せず、翌年には王政が復活した。この不安定な王政下で国家を安定させるために、自由派と保守派が交互に政権を握った。このため、宗主国の政権に合わせて、フィリピン総督も自由派と保守派の人物が交互に任命されることになった。フィリピン領内では、自由派の提督が自治を求めるフィリピン人に対して同情を示し、自治を与えることをほのめかした後で、保守派の提督が着任して自治を完全否定し、政策を引き締めるということが繰り返された。これにより、フィリピン、特に総督府に近いマニラ近郊では、総督が代わる度に、自治への期待と落胆が起こり、役人の不正と修道士の横暴が相まって、人々の不満が蓄積していった。

¹⁹ フィリピン史ではこの処刑のことを3人の名前の最初をとって「ゴン・ブル・サ Gom-Bur-Za」と呼んでいるので、以下本稿でもこの3人をまとめて「ゴン・ブル・サ」と呼ぶ。

このような不安定な政治状況が続く 1889 年、自由派のプラクセデス・マテオ・サガスタ Práxedes Mateo Sagasta が首相であった時代に、フィリピン人活動家たちがフィリピンの現状を伝え、スペインのフィリピン政策の改革を訴えるため、バルセロナで『ラ・ソリダリダッド La Solidaridad』という新聞を創刊した。フィリピンで迫害を受けて、スペインの自由主義に希望を求めてスペインに渡ったフィリピン人活動家や、欧米の教育を受ける機会に恵まれスペインの自由主義の風に晒されたフィリピン人知識層の一部は、活動を制約されるフィリピンではなく、宗主国スペインで活動することを選んだ。

1872 年の反乱による弾圧で香港に逃れたフィリピン人の 1 人ホセ・マリア・バーサ Jose Maria Basa (バーサ)²⁰は、この新聞がフィリピンでも流通するように尽力した。1891 年、このプロパガンダ運動の指導者、ガリシアノ・ロペス・ハエナ Gariciano Lopez Jaena (ロペス・ハエナ) が香港を訪れた際、バーサはロペス・ハエナとともに香港で協議会を組織した。フィリピン領内でもスペイン自由主義の影響と、1877 年にスペインがキューバに自治を認めたことで、スペイン人から自治を獲得するための運動が起こり始めていた。1895 年には、フィリピンを追われた改革運動の活動家ホセ・アナクレト・ラモス Jose Anacleto Ramos (ラモス)²¹が改革運動のサポートを求めて、香港を経由して日本にやってきた²² [Philippine Insurgent Records, 1896-1901, with Associated Records of the United States War Department, 1900-1906. 780B] [外務省外交史料館文書 米西戦争一件 雑 第一巻 馬尼刺人ニ関スル報告 281-283]。こうして香港を中心として、革命家の領外活動の輪が広がっていった。その後もフィリピン領内では改革運動が続けられたが、フィリピン人は自治を得ることができなかった。落胆した一部の活動家はスペインからの独立を熱望するようになった。

こうしてスペインに対して武力蜂起もやむなしとの気運が一部の活動家たちの間で高まった。1896 年 8 月 30 日、フィリピン国内において、ある偶然から、活動家たちが武力蜂起せざるを得ない事態が起き、「フィリピン革命」と呼ばれるスペイン当局との武力闘争が始まった。スペイン革命の第 1 フェーズの始まりである。したがってこの時には、フィリ

²⁰ バーサ (1839-1911) は 1872 年の「ゴン・ブル・サ」の処刑後、スペイン当局によってグアムに追放された。1874 年、スペイン当局はバーサに対して恩赦を行い、バーサは香港に移住し、商人として成功を収めた。バーサは香港で、リサールの小説や『ラ・ソリダリダッド』をフィリピンに密輸する援助をしていたと言われている。

²¹ ラモスはこの後、日本で活動を行い、1900 年 7 月頃、日本に帰化する。

²² ラモスの日本での活動については、第 2 章で扱う。

ピン人の中には、改革を望む者と独立を望む者、武力闘争を主張する者、現状維持を望む者など、多様な人々が混在していた。

1896年11月下旬になると、革命家のホセ・アレハンドリノ José Alejandrino (アレハンドリノ)²³が香港に向かい、「同地在住のフィリピン人 Jose M. Basa、Felipe Agoncillo、Mariano Ponce、Mariciano Rivera、Mariano Marti、Idelfonso Laurel、Pepito Leybaらと香港委員会 Hong-kong Committee を組織した。」〔池端 1989: 10〕。この香港委員会²⁴は、この後の領外活動の中心となった。1897年11月には、1年程前に香港に避難してきたフェリペ・アゴンシーリョ Felipe Agoncillo (アゴンシーリョ)²⁵が在香港アメリカ領事のラウンズヴィル・ワイルドマン Rounseville Wildman²⁶ (ワイルドマン) を訪問し、武器調達の支援を要求したが、この時、ワイルドマン領事は独立運動側への援助を断っている²⁷〔香港アメリカ領事館報告 No.19 November 3, 1897〕。

1897年7月、アギナルドはビアク・ナ・バト共和国設立²⁸の準備を始めた。その後 11

²³ アレハンドリノ (1870-1951) は第1フェーズから革命に参加し、日本で活動した。第2フェーズでは、香港で、マニラ湾を攻撃しに行くアメリカ艦隊の船に乗り込み、フィリピンに帰国して革命に参加した。

²⁴ 香港の委員会は色々な名前では呼ばれることがあるが、エステバン A. デ・オカンポ Esteban A. de Ocampo (デ・オカンポ) によれば、アギナルドたちが香港に追放されて最初に作った組織が、香港委員会 Hong Kong Junta と呼ばれ、アギナルドが政府を作った後に改組されたのがフィリピン人中央委員会 Filipino Central Committee と呼ばれた〔De Ocampo 1977: 73〕。しかし、第2フェーズで、この委員会は、フィリピン人革命家の手紙や新聞・その他の中で、上記名称以外にも、香港革命委員会、香港中央委員会など色々な呼び方で呼ばれているため、どれが正式な呼び名なのか確定することが難しい。したがって、本稿では全てをまとめて、香港委員会と呼ぶ。

²⁵ アゴンシーリョ (1859-1941) は、1896年に日本を経由して香港に移り住み独立運動を始めた。第2フェーズのスタート時には香港委員会の代表となった。

²⁶ ワイルドマンは、シンガポール領事、新聞記者を経て、1897年7月に香港領事に就任した。香港領事館は1898年7月1日に総領事館に格上げになり、それと同時にワイルドマン領事も総領事になった。領事の期間は領事と記載し、総領事になってからは総領事と記す。また領事と総領事の期間を通して、ワイルドマンを指す際には(総)領事と記す。在香港アメリカ領事館の場合も、領事館と総領事館の期間を通して示す場合には(総)領事館と記す。ワイルドマン領事に関する詳細は第4章で述べる。

²⁷ デ・オカンポの本にはマニエル・アンティガス・イ・クエルバ Manuel Antigas y Cuerva の本を引用元に挙げ、アゴンシーリョが1897年末にワイルドマンの助けを借りて武器の密輸入に成功したと述べている〔De Ocampo 1977: 72〕。しかし、現在手元にある一次史料ではそのことを確認できていない。

²⁸ フィリピン共和国は、1) 1897年11月2日のビアク・ナ・バト共和国、2) 1899年1月23日にマロロスで宣言されたフィリピン第1共和国、3) 1943年、日本の軍政下でホセ・パシアノ・ラウレル José Paciano Laurel が大統領を務めた第2共和国、4) 1946年マニエル・ロハス大統領下で成立した第3共和国、5) マルコスが大統領を務めた第4共和国を経て、6) 現在は第5共和国が進行中である。

月 1 日にキューバの憲法を模したと言われるビアク・ナ・バト憲法が發布され、翌 2 日にはビアク・ナ・バト共和国が発足して、アギナルドが大統領に、マリアノ・トリアス・イ・クロサス Mariano Trías y Closas (トリアス)²⁹が副大統領に、アントニオ・モンテネグロ Antonio Montenegro (モンテネグロ)³⁰が外務大臣に、イサベロ・アルタチョ Isabelo Artacho (アルタチョ)³¹が内務大臣に、エミリアノ・リエゴ・デ・ディオス Emiliano Riego de Dios (リエゴ・デ・ディオス)³²が陸軍大臣に、バルドメロ・アギナルド Baldomero Aguinaldo (B. アギナルド)³³が財務大臣に就任した [T. Agoncillo 1990: 183-184]³⁴。しかしこの体制は長続きしなかった。最終的にアギナルドが率いる革命側は、ペドロ A. パテルノ Pedro A. Paterno (パテルノ)³⁵というフィリピン人知識人の仲介で、1897 年 12 月 15 日、スペイン当局と戦闘停止の最終合意に至り、ビアク・ナ・バト協定を締結した。この協定により、革命運動の第 1 フェーズは終わりを告げた。

12 月 27 日、ビアク・ナ・バト協定にしたがって、アギナルドとその仲間はフィリピンを出発し、29 日に香港に到着した。到着後アギナルドはスペインから受け取ったお金を、香港上海銀行 Hongkong and Shanghai Banking Company Limited とチャータード銀行 Chartered Bank of India, Australia and China の 2 つの銀行に預金した。しかしフィリピン領内では、この条約に従わず戦闘を継続した革命家たちもいた。この後、スペインとの戦争を計画していたアメリカは、香港にいた革命家たちと接触を図ることになる。そして米西戦争開始後の 5 月 19 日、アギナルドはアメリカのサポートを得てフィリピンに戻

²⁹ マロロス政府では財政長官だったが、その後比米戦争がはじまり南ルソンの司令官になる。アギナルドの降伏後、アメリカ軍に降伏した。

³⁰ モンテネグロは、1897 年 11 月 2 日のビアク・ナ・バト共和国内閣では、外務長官を務めた。

³¹ アルタチョは、第 1 フェーズ時、日本の援助を求めて活動し、1897 年 11 月 1 日にサインされたビアク・ナ・バト憲法を起草し、11 月 2 日に成立したビアク・ナ・バト政権では、内務大臣に就任した。しかし、その後アギナルドに反旗を翻した。

³² リエゴ・デ・ディオスは、革命第 1 フェーズ時に革命に参加し、その後第 2 フェーズでは香港委員会で活動を続けた。

³³ B. アギナルド (1869-1915) はエミリオ・アギナルドの従兄弟である。第 1 フェーズ時、カビテ州カウイト Kawit にあったマグダロ Magdalo 人民評議会の議長であった。

³⁴ 池端の論文によると「バタンガス地方政府は憲法批准式にも代表を送らず、憲法発布後も独自の闘争を継続した」[池端 1980: 169]とあり、この時のアギナルドの政府が必ずしもフィリピン人を代表するものではなかったと述べている。

³⁵ パテルノ (1867-1911) は富裕層のファミリーの出身で、マニラとスペインの大学で教育を受けた。

り、革命の第2フェーズをスタートさせることになる³⁶。

0-1-(2). スペイン領キューバとアメリカ

キューバでは1868年にスペインからの独立戦争である第1次キューバ独立戦争(1868-1878)が始まった。1877年にスペインがキューバに自治を認めたことで、第1次キューバ独立戦争は翌年に終結した。キューバが自治を得たことは、自治を持たないフィリピン人に大きな衝撃を与えた。しかし、キューバ内での独立要求は再び盛り上がりを見せ、1895年に第2次キューバ独立戦争(1895-1898)が始まった。独立戦争が始まった時のアメリカ大統領は、民主党のスティーヴン・グローバー・クリーヴランド Stephen Grover Cleveland (クリーヴランド)³⁷であった。クリーヴランド大統領は1896年4月にキューバの改革をスペインに提案した〔O'toole 1984: 11〕が、キューバに対して積極的な介入はしなかった。この時のスペイン・アメリカ・キューバの関係については、林が2001年の論文の中で詳しく述べており、その部分を簡潔にまとめると以下になる：

キューバの革命中央委員会はニューヨークに本拠を構え、アメリカ世論に積極的に働きかけた。キューバの惨状はイエロー・ジャーナリズムによってアメリカ国内で報道されたため、アメリカの世論もキューバの独立に好意的であった。1897年3月に大統領に就任した共和党のウィリアム・マッキンレー William Mckinley (マッキンレー)³⁸も、就任直後はキューバへの直接的な介入は避けた。「メイン」号の爆発が起き、キューバの騒乱がアメリカの不利益になると考えたマッキンレー大統領は、スペインへの宣戦布告を議会に求め、連邦議会はキューバ独立を宣言し、合衆国が軍事介入する権限を大統領に与える決議を承認した。〔林 2001: 55-57〕

また同論文によると、海軍では1897年にはスペインとの戦争を想定した戦闘計画も練っていたようで、林は「海軍次官セオドア・ルーズヴェルト (Theodore Roosevelt) がスペインとの戦争の際にはその植民地であるフィリピンを攻撃することを、1897年9月にマッキンレー大統領に示唆していた」〔林 2001: 57〕と述べている。

³⁶ 1897年12月27日以降は第1章で扱う。

³⁷ クリーヴランド (1837-1908) は第22代 (1885-1889) と第24代 (1893-1897) アメリカ大統領。

³⁸ マッキンレー (1843-1901) は第25代アメリカ合衆国大統領 (1897-1901)。1897年に大統領に就任し、2期目の1901年9月6日、自称アナーキストのレオン・フランク・チエルゴッシュ Leon Frank Czolgosz に銃で撃たれ、14日に死亡した。

しかし、総じて言うなら、アメリカはフィリピンではなく、キューバ問題を第一に考えて行動しており、米西戦争以前は、フィリピンは米西戦争に勝つための戦略拠点の1つでしかなかった。

0-2. 本稿の目的

フィリピンにおける19世紀末という時代は、圧政を行う外国人為政者が個を抑え込む時代が終わり、「フィリピン国民」と「個人の自由」を自覚した個人が、強く自己主張を始めた時代であった。むろん国民や民族という個人を包摂するような、「国家」に関する定義も考察はされたが、国家の運命を決めるのは個人個人であるとの自覚だけが1人歩きすることもあったため、革命家は合議や国家内におけるハーモニーを無視して、自己主張だけを繰り返すこともあった。換言すると、革命家は「個人の」理想と名誉欲を原動力にし、その個人が「全体」の利益につながると信じたことに向かって、1人で暴走することもあったのである。多くの人々が、その所属するグループや階級の中で生活を完結していた時代はすでに終わりを告げ、個人が置かれた社会環境への不満が原動力になり、社会環境を変化させていくという「社会環境と人間の行動」の相互のアプローチが、社会の大きな変化につながる時代に入ったのである。

革命の第1フェーズは、圧政と搾取のスペイン植民地体制の打破と民族解放を成し遂げるという目標を持って、フィリピン領内で行われた「内戦」であった。しかし第2フェーズになると革命家は、民族解放に加え以下の4点、1) 新興列強国アメリカとの駆け引き、2) 国際社会との邂逅と摩擦、3) フィリピン人が設立した「政府」の脆弱性、4) 革命を利用して利益を得ようとする外国人（非フィリピン人）——とも向き合わなければならなくなった。つまり、フィリピン人革命家は欧米が支配する国際社会の中で、列強国のアジア領土獲得合戦に巻き込まれながら、有象無象に囲まれて、生まれたばかりで右も左もわからない自称「フィリピン国家」の生き残りを模索せねばならなくなったのである。その中でも領外革命家たちは、国際社会のリアクションを常に肌で感じているという自負があったため、それぞれが最良だと思う方向へ物事を進めようとした。しがたって時として、領内革命家とだけではなく、同じ領外革命家たちの中でも、意見や理想の食い違いが生まれることがあった。領外革命家たちはそれぞれ、立場や経歴も違うため、意見は大きく分かれ、その溝が埋まらないことすらあった。一見独立に向けて一丸となって活動していたように見える領外の革命組織は、対立や行き違いを内包しながら、活動を行っていたので

ある。

領外革命家たちの活動には、西欧の影響を受けた個人主義の傾向と、フィリピンにもともと存在していた集団主義の傾向が混在していた³⁹。領外活動家たちは、基本的には集団の目標である独立を個人の目標にも据えていたが、時として個の決断や好みを優先させることがあり、これが革命運動の協調性に影響を及ぼした。その上、第2フェーズはアメリカが参入したために、第1フェーズのようにナショナリズムと呼ばれるような内部の力だけが革命を動かしたのではなく、フィリピン領外からの多様な影響力が、革命の行く末を左右するようになった。アメリカの参入により、第1フェーズで活動していた領外革命家の一部はナショナリズムを持ちつつも革命を諦め、その他の一部の革命家はスペイン人と同等の権利がフィリピン人に与えられるならば、スペインに帰属してもよいと考えようになった。また革命家の他にも、ナショナリズムなど全く意に介さない人々も、革命に参入した。第2フェーズでは、フィリピン、スペイン、アメリカ、日本などの「国家」の他に、ユダヤ人武器商人や、自国の利益よりも個人の利益を優先させたアメリカ人など「個人」というファクターが、革命に大きな影響を与えた。したがって、第2フェーズの歩みを、国民国家設立のための動きというようなナショナリズム論で整理することは不可能である。革命家や革命家と関わった人々の認識、行動、人間関係という細部にこだわり、人々の本音を引き出し、フィリピン革命の領外活動の流れを再構築しないと、彼等の活動の全体像は見えてこない。そして、その全体像がない限り、正確な分析は不可能である。早瀬は歴史研究についての著書の中で、「マイクロマクロの相互関連のなかで、マクロだけでは気づけなかったこと、マイクロだけではその意味がわからないことを、理解することが重要」〔早瀬 2004: 50〕だと述べている。第2フェーズは上記の複数のインシデントとアクターが複雑に相互干渉し、国家設立に失敗する結果に終わっていることを考えると、その崩壊のプロセスを見ていくのには、ナショナリズムだけでは説明がつかず、マイクロの視点で物事を見てゆく必要がある。

フィリピン人歴史家のフィリピン革命に関する描き方は、フィリピン中心史観で描かれることも多く、「未完の建国」という神話化されたコンテキストの中で、一部の革命家たちの行動が性善説を基盤に描かれる場合がある。そのヒストリオグラフィーに影響されて書

³⁹ 心理学者のハリーC. トリアンディス Harry C. Triandis (トリアンディス)は「個人的・社会的健康の最適状態は個人主義的傾向と集団主義的傾向とのバランスにかかわっている」〔トリアンディス 2003: 2〕と述べている。

かれた論文では、その記述が精査されることなく引用され、一次史料のチェックがなされないままで、孫引きされていることがある。また一方で、米西戦争や比米戦争に関するアメリカ側の本や論文は、当たり前ではあるがアメリカ中心史観で描かれ、アメリカがフィリピン人の抵抗にあいながらも、苦勞してフィリピンを平定したというストーリーの上に論を進めているものが多い。したがって本稿では、どの歴史観にも影響を受けず、客観的に出来事を見直していきたい。特に対外活動は、組織で動く戦闘行動とは違い個人で活動することも多く、その上1人1人に課された任務が重かったため、個に焦点をあて細部にこだわり、客観的な目で精査して流れを組み立てていくことが求められる。したがって、独立と併合、フィリピン人とアメリカ人など、対立するどちらかを善、どちらかを悪と設定して二元論的にストーリーを組み立て、結論を導き出すことはしない。

フィリピン革命第2フェーズは、沈みゆく帝国スペインに加えて、「後発植民地主義」〔藤原 2011: 4〕と呼ばれたアメリカや日本が加わったことで、20世紀前半のフィリピンの行方を決める出来事になってしまった。その中でも特に領外活動は、以下の3つの点、1) 革命のアジアへの波及、2) 日本の南進と北進、3) アメリカのアジア進出——から、後の太平洋戦争へと進む方向に、舵が切られるきっかけを作ってしまった。米西戦争と比米戦争によって、フィリピン領内はアメリカ植民地となったが、その間の革命家の領外活動は、東アジア世界を変えるきっかけをも、作ってしまったのである。したがってこの第2フェーズを細かく分析することは、フィリピン近現代史のみならず、アジア史、ひいては世界史にとってもとても意味のあることだと考える。本稿では前述した作業を通して、世紀転換期の混沌とした国際社会と向き合わざるを得なくなったフィリピン人革命家が、第2フェーズ時に、1) 近代化と民族解放を目指して海外でどのような活動をしたのか、2) フィリピン人革命家に出会ったアメリカ人、日本人。武器ブローカー、その他の人々が革命家たちに対してどのような対応をしたのか——を明らかにし、領外活動から見た革命運動崩壊の過程に、ある一定の解釈を加え、それがどのような影響を残したのかについて考察したい。

0-3. 主に使用する史料

0-3-(1). 比米戦争押収関連史料

本稿はフィリピン側の史料として以下の2点、1) 『フィリピン反乱記録 1896年から1901年まで、アメリカ合衆国陸軍省の関連記録とともに、1900年から1906年まで

Philippine Insurgent Records, 1896-1901, with Associated Records of the United States War Department, 1900-1906』(PIR)のマイクロフィルム版に収録されたドキュメントと、2) 米西戦争時に情報将校としてこの押収史料の翻訳・分析を主に担当したジョン・ロジャー・メイグス・テイラー John Roger Meigs Taylor (テイラー)⁴⁰が1971年に出版した『フィリピンの対アメリカ合衆国反乱 The Philippine Insurrection against the United States』——を主として利用する。PIRは比米戦争時の、アメリカ軍が押収した革命側の書類を集めたものであり、1971年の出版本の方は、テイラーが押収書類の中から興味深いと考えた文書をセレクトして英語に翻訳したものである。PIRについては多少の補足説明が必要だと思われるので、PIRのマイクロフィルムのパンフレットをもとにどのような史料であるのかを本項で説明しておきたい⁴¹。

PIRは比米戦争中、アメリカ当局側が押収したフィリピン革命側の文書を、最終的には、陸軍省諸島局 Bureau of Insular Affairs, War Department がファイルしたものがベースになっている。当初、押収文書はフィリピン諸島・在マニラ・フィリピン軍司令本部・軍事情報資料部門 Division of Military Information, Headquarters, Division of the Philippines, Manila, P.I.がファイルしていた。しかし軍事情報資料部門に運び入れられた押収文書は膨大であり、その大部分が個人的な書類か、日常的な書類であったので、情報収集に必要と思われる文書だけがセレクトされて保存されることになった。その後これらの文書は、軍務局長 Adjutant General の電報による命令で、1902年7月8日にワシントン D. C. に送られた。テイラーはすでに1901年には、軍務局長に報告を上げるため帰米していたので、テイラーが1902年10月24日にワシントン D. C. でこの文書を受け取った。

テイラーは、この文書の出版を計画し、政府印刷局 Government Printing Office において、彼が興味深いと思った文書を PIR からセレクトした後、英語に翻訳してタイプして、『フィリピンのアメリカ合衆国に対する反乱：注記とイントロダクション付きの書類集 The Philippine Insurrection against the United States: A Compilation of Documents with Notes and Introduction』というタイトルをつけ、印刷所に回す準備をした。しかし

⁴⁰ テイラーは1885年にウエスト・ポイント陸軍士官学校 West Point Military Academy を卒業し、1899年10月10日、大尉に任命され、フィリピンでの任務を言い渡された。〔Farrell 1954: 390〕。

⁴¹ アメリカ当局の PIR の扱いの経過やテイラーの作成した文書の経緯は、PIR のマイクロフィルムのパンフレットとファレルの論文に詳細が記されている。

1906年、当時陸軍長官であったウィリアム・ハワード・タフト William Howard Taft (タフト)⁴²が、来るべき議会選挙を見据えて、この出版を棚上げにさせた⁴³。出版の話は完全に流れ、同年、テイラーは原隊に復帰した。

PIRが入った複数の文書ボックスの方も、ワシントン D. C. 内を複数回移動した。この移動によって文書の一部が紛失してしまった⁴⁴。また、文書フォルダーの再編も行われ、一部の史料は、理由は不明ではあるが、アメリカ軍が押収史料を整理する際にフォルダー番号を飛ばされて記録された。

1940年の秋、PIRは軍務局 Adjutant General Office の移動と共に、国立公文書館 National Archives and Records Administration に保管された。1953年にはPIRに対するアクセス制限が解除され、1957年、PIRをフィリピンへ返却する法案がアメリカ議会でも可決された。その後この法案は大統領によって承認された。PIRの返却にあたって、PIRのマイクロフィルム化が行われ、その後、原史料はフィリピン政府に返却された。このようにPIRは、19世紀前半のアメリカの政治とフィリピン政策、そしてその後の2つの大戦に翻弄された歴史を持つ文書なのである⁴⁵。

5巻本の『フィリピンの対アメリカ合衆国反乱 The Philippine Insurrection against the United States』〔Taylor 1971〕はテイラーの死後、1971年になってから出版された⁴⁶。現在では多くのフィリピン研究者が、この5巻本を研究史料として用いている。

以後PIRの史料に関して、出典を明記する場合、「PIR ファイル番号-ファイル内整理番号」で記す。

⁴² タフト (1857-1930) は、1900年、当時のアメリカ合衆国大統領マッキンレーによってフィリピン委員会の長に任命された。タフトは1901年から1903年まで、フィリピン初の民政長官となった。その後タフトは1904年から1908年まで国務長官を務め、1909年、アメリカ合衆国大統領となった。

⁴³ 出版棚上げの理由として、フィリピン人歴史研究者レナト・コンスタンティーノ Renato Constantino (1919-1999) (コンスタンティーノ) は以下の3つの理由、1) タフトが大統領選挙出馬を考え、比米戦争時のアメリカのフィリピン独立運動弾圧の方法を明らかにしたくなかった、2) アメリカ統治の下で服従しているフィリピン人の過去を明らかにしたくなかった、3) 同時期に別の人物が同じテーマで本を書き、それが優先されてしまった——を挙げている。

⁴⁴ 本稿の執筆のためPIRのマイクロフィルムをチェックした際、PIRの一部のフォルダー番号が飛び、一部のフォルダーには中身がないものがあった。

⁴⁵ 第2章で扱う日本関連の文書には、1916年にテイラーが書き加えたメモがある。

⁴⁶ テイラーは1949年に死亡した。

0-3-(2). 日本語史料

外務省外交史料館文書の米西戦争関連史料と、国会図書館憲政資料室文書の米西戦争関連史料を利用する。その他にも適宜、日本側の史料を利用する。

0-3-(3). 西語史料

主に『フィリピナス・アンテ・エウロパ』を利用する。これは、比米戦争中にスペインへ追放になったフィリピン人イサベロ・デ・ロス・レイエス *Isabelo de los Reyes* (デ・ロス・レイエス)⁴⁷が、マドリッドで発行した革命新聞である。彼の経歴などの詳細は第3章で述べる。史料は19世紀末のスペイン語で書かれているため、アクセント記号の付け方や、スペリングに関して、現代と違う部分がある。また、史料は当時の印刷技術で刷られているため、文字が消えていたり、アクセント記号が消えていたりする部分が多くある。これに関しては本文で引用する際に、なるべく補完するようにする。ただし巻末史料のタイトルに関しては、スペリングやアクセント記号などに関して、史料に近い形で掲載する。

0-3-(4). 米語史料

主に以下の在香港アメリカ領事報告書と、在シンガポール・アメリカ領事報告書を使用する：

MS Despatches from U.S. Consuls in Hong Kong, 1844-1906 Volume 19 and 20.

(United States National Archives and Records Administration)

MS Despatches from U.S. Consuls in Singapore, Straits Settlements, 1833-1906

Volume 22. (United States National Archives and Records Administration)

PIR 内にもアメリカ軍当局の革命運動への見解などの記述があり、それについても使用する。

ここで記した史料以外にも、適宜、トピックに合わせて史料を利用する。太平洋戦争以前、比米戦争やフィリピン統治に関わったアメリカ人のテイラーや、ディーン・コナン・ウースター *Dean Conant Worcester* (ウースター)⁴⁸などの著書や記述を、フィリピンの

⁴⁷ レイエス (1864-1938) は南イロコス州、ビガン *Vigan* 生まれ。1897年スペイン統治下のフィリピンから、反逆の疑いをかけられてスペインの刑務所に送られ、釈放後はフィリピンに帰ることを禁じられて、スペインで暮らしていた。1899年10月25日からマドリッドで革命新聞『フィリピナス・アンテ・エウロパ』を発行する。

⁴⁸ ウースター (1866-1924) はアメリカの動物学者でミシガン大学の教授。かつてフィリ

歴史研究論文として扱う場合があるが、当事者の記述であることから、本稿では研究論文ではなく史料として扱い、精査して利用することとする。

0-3-(5). 固有名詞及び記述について

* 本稿で使用する人名の姓と名の語順は、その人物が通常使っている語順、または史料に掲載されている語順を使用する⁴⁹。

* 本稿で使用する人名・地名などは、史料に登場したスペリングを使用する。
フィリピン人の名前に関しては、一般的にはスペイン語（カタルーニャ）読みを採用する。

日本人に関しては、史料に登場する漢字を採用し、史料内でローマ字表記がなされ、その人物が特定できない場合にはカタカナで表記する。

その他の人々は、適宜史料に沿った読み方を採用する。

* 本文中⁵⁰の人名の初出時には：

1) 漢字の名前の場合は漢字でのフルネームを記し、日本人の場合は、日本語論文であることから略名を苗字とする。

2) アルファベットによる名前の場合はカタカナ表記とスペル、そして括弧付の略名を記入する。日本人以外の略名に関しては、個人個人によって略名の取り方のパターンが違うので、できる限り史料に準ずる。

巻末資料の人物プロフィールは、主要な人物をピックアップし、論文中で使用する略名で検索できるようにする（日本人は 50 音順、その他の人々はアルファベット順にする）。

* 研究者は、基本的に苗字を略名とする。

* 文献史学という観点から、史料はなるべく記述通りに翻訳するか、カタカナ表記にする。たとえば、先行研究では、『*Philippine Insurgent Records*』を『フィリピン革命関係未公刊文書』[池端 1898: 34]と翻訳しているが、*Insurgent* は反乱であり、このタイトル自体が、アメリカが押収して編纂した時の比米戦争への見方を示して

ピンをフィールドにして研究していた経歴があり、第 1 次フィリピン委員会のメンバーの 1 人に選ばれ、1899 年 3 月 4 日にマニラに到着した。

⁴⁹ 参考文献は姓名の順で記載する。

⁵⁰ 脚注と前後する場合もあるが、あくまでも本文において初出の場合にこのルールを適用する。

いる歴史的証拠でもあることを考え、『フィリピン反乱記録』と訳す。翻訳の場合はなるべく「意識」「超訳」をせずに記述通りに記載する。

- * 報告書の数字、引用以外の数字などは論文が横書きのためアラビア数字で表記する。日本語の史料を引用する場合、引用内の数字が漢字の場合は史料通り漢字を使う。
- * 史料内の漢字は現在使用されている漢字に、できうる限り直して表記する。ただし日本語史料におけるタイトルに関しては、史料の所在を明確にするために史料で使われている漢字をそのまま表記する⁵¹。
- * 先行研究、参考文献等を記述する際には、筆署名を姓名の順で表記する。

0-4. 先行研究

フィリピンの研究は独立以前、宗主国であったアメリカの影響を大きく受けた。スペイン統治期は修道会による教育が主であったが、アメリカ統治期になると欧米の近代教育が導入されるようになった。アメリカ植民地期、コモンウェルス（独立準備政府）期⁵²、日本軍政期⁵³を経て、フィリピンは1946年7月4日⁵⁴にようやく念願の独立を得ることができた。独立移行期であるコモンウェルス期の途中で、日本がフィリピンを侵略し植民地支配を行ったことで、太平洋戦争後のフィリピン人の心の中に以下の3つ、1) 比米戦争でのアメリカの残酷さへの記憶、2) 日本からの解放と援助を行うアメリカの父性的抱擁力への感謝、3) 侵略者日本への憎しみ——が共存することになった。太平洋戦争後、アジアは東西のイデオロギー対立の場にもなったこともあり、独立後もアメリカはフィリピンとの密接な関係を保ち続け、フィリピンは全てにおいて、他の東南アジア諸国よりもアメリカナイズされた社会を維持した。したがって研究の場でも論理的なことを考察する際には、英語で思考し論文にすることが多かった。

⁵¹ 例えば、外務省外交史料館文書のタイトルにおいては、史料によっては叛徒が使われている場合と反徒が使われている場合がある。その場合は史料館が出している漢字をそのまま表記する。

⁵² 1934年、アメリカでタイディングス・マグダフィー法 Tydings-Mcduffie Act（フィリピンにおいて独立準備政府を設立し10年で独立する）が可決され、1935年にフィリピンに、独立準備政府が設立された〔T. Agoncillo 1990: 351-383〕。

⁵³ 1941年12月8日に日本軍はフィリピンの軍事施設を空襲し、1942年1月2日、マニラを占領、5月7日にはコレヒドール要塞を陥落させた。その後、1943年に日本の傀儡政権であるラウレル政権が発足した。

⁵⁴ 独立を1946年7月4日とするのか、1898年6月12日とするのかという見解についての論争を本稿で行うつもりはない。単純に太平洋戦争後にフィリピンが植民地支配から脱したという意味で前者を採用する。

独立後は PIR のアクセス制限が解除されたこともあり、フィリピン人による革命研究が進んだ。それと同時にフィリピン革命の検証では、アメリカ当局と一部エリートの関係だけでなく、フィリピン革命を民衆の側から見る試みも行われるようになった。こうしてフィリピン人研究者による歴史研究が進み、T. アゴンシーリョや、レナト・コンスタンティーノ Renato Constantino(コンスタンティーノ)などが、次々と画期的な論文を出した。

1965 年から始まったフェルディナンド・エドラリン・マルコス Ferdinand Edralin Marcos (マルコス) 政権 (1965-1986) も、ナショナリズム傾向のあるフィリピン革命像を生み出す一因となった。マルコスが大統領就任後に、ベトナム戦争への限定的な派兵を承認したことで、フィリピン国内で反米ナショナリズムが起きた。この後マルコス元大統領が金権政治を行い、強権によりマルコス王朝とも言える政治体制を作ったことで、反米で火のついた民衆は、マルコス元大統領に反発し、内に秘めていたナショナリズムを醸成させていった。学生たちは、反マルコスの活動をフィリピン革命に模して運動を盛り上げていった。また、マルコス元大統領に反発した一部の知識人たちは、弾圧を逃れて海外に移住した。この間にフィリピン人は、「内なる⁵⁵ナショナリズム」と「民衆の力 people's power」を強く感じるようになっていった。1975 年にコーネル大学で博士号を取得したレイナルド・カルメーニャ・イレート Reynaldo Clemeña Ileto (イレート)⁵⁶は、フィリピン革命における民衆の動きを分析した『キリスト受難詩と革命：一八四〇―一九一〇年のフィリピン民衆運動 Pasyon and Revolution : Popular Movements in Philippines, 1840-1910』[Ileto 1979] を、1979 年にアテネオ・デ・マニラ大学出版会から出版した。イレートも 1972 年にマルコス元大統領が発した戒厳令に反対する政治運動に関わった 1 人であった [イレート 2005: xiv- xviii]。「フィリピン独自の文化」と「民衆」を意識する新進気鋭の歴史研究者の出現によって、歴史研究の民衆史化や脱植民地化が一段と進んだ。

1986 年 2 月、マルコス大統領による大統領選挙の投票結果の不正操作という問題が発火点となって、人々の思いが、階級・学歴を超えて、反マルコスという形で爆発した。人々はこのムーブメントを、1896 年のフィリピン革命になぞらえて、「エドサ革命 EDSA Revolution」⁵⁷または「ピープル・パワー革命 People Power Revolution」と呼んだ。しか

⁵⁵ 「ロオーブ loob=自分の中に内在する」という意味で使う。

⁵⁶ イレート (1946-) はフィリピンの著名な歴史研究者。

⁵⁷ マニラの都市部を縦断するエピファニオ・デ・ロス・サントス通り Epifanio de los Santos Avenue (一般的には EDSA Avenue と呼ばれる) に、人々が終結してマルコス政権打倒を叫んだことから、この通りの名をとって EDSA 革命と呼ばれるようになった。こ

し、ナショナリズムの醸成は逆に、フィリピン人中心史観を生みやすい土壌も作った。これはフィリピン史のみならず、一般的に「国史」などが陥りやすい欠点とも言える。「フィリピン革命」は、志半ばで制圧されてしまったというコンテキストで語られることが多く、それゆえに「未完の建国」としてフィリピン近代国家「創世」⁵⁸の原点に位置し、現在のフィリピン共和国のアイデンティティーとなっている。ある意味でフィリピン革命のストーリーは、多くの国家が持つ国家創世神話と同じ重要性を持っているのである。したがって、ナショナリズム感情によって描かれたフィリピン革命史は、革命で起きた事象だけを追った閉じられた歴史として描かれることもあり、革命の出来事はアジア史や世界史の中で相対化されず、「国史」として扱われ、国民国家への原点としてフィリピン史の中に埋め込まれてしまうことも多かった。それゆえに、一度その出来事の羅列が「事実」として認定されてしまうと、出典の精査が不十分なままで論文を引用していく傾向や、フィリピン人に都合のいいような史料解釈が現れることもあった。

このような流れの中で、アメリカ人の歴史学者グレン・アンソニー・メイ Glenn Anthony May (メイ)⁵⁹が『英雄の捏造 *Inventing a Hero*』〔May 1997〕を執筆、1997年に出版した。メイは、ボニファシオの英雄像の検証を通して史料批判問題を取り上げ、イレートの『キリスト受難詩と革命：一八四〇―一九一〇年のフィリピン民衆運動 *Pasyon and Revolution: Popular Movements in Philippines, 1840-1910*』〔Ileto 1979〕を批判した。しかしメイもまた、アメリカ宗主国の影響を思考の片隅に残したまま、史料分析批判を行った。2000年に永野善子は『歴史と英雄 フィリピン革命百年とポストコロニアル』の中で、この問題に触れ、アメリカ人であるメイの単純な視点を批判し、革命時代のフィリピンにはイルストラードと呼ばれた知識人層からなる特権的富裕階層、プリンシパーリアと呼ばれた地方権力者層、そして民衆という3つの勢力があることを指摘し、フィリピン革命を分析するためには、スペインとアメリカ、そして上記3つの勢力の動き、つまり「大別して五つの要素が重層的に折りなすダイナミックな構造と動態を把握しなければなりません」〔永野: 2000 18-19〕と述べ、革命研究や史料分析の多角的検証の必要性を指摘した。

これを踏まえて、フィリピン革命領外活動を検証する際の、本稿の階級に関する立ち位置を明確にしておきたい。大前提として本稿は文献史学に依拠した論文である。史料は限

のムーブメントにはフィリピン人知識層の多くが参加した。

⁵⁸ 神話化されているという意味で「創世」を使う。

⁵⁹ メイの生年は彼が教鞭をとるオレゴン大学の記録には乗っておらず、イエール大学で1966年にB.A.を取得し、同大学でPh.Dを1975に取得したことが書かれている。

られており、その限られた領外活動関連の史料を読み込み、事実をつかんでいく方法をとる。革命を扱う場合には永野が述べるように、5つの要素を考慮しなければいけないことは十分承知しているが、領外活動を扱う本稿において、分析対象となる領外革命家たちは、文字通り領外で活動し、大部分がスペイン語及び外国語を理解するようなイラストラドス *ilustrados* と呼ばれる「有産知識人たち」〔イレート 2005: 130〕であった。したがって、本稿ではイラストラドスを中心に領外活動を見ていく。これに加え、領外革命家のカウンターパートとなる領内革命家のイラストラドスの動きには触れるが、その他のフィリピン領内の一般民衆の活動については基本的に言及しない。これを前提として、できる限り当時の状況を考慮に入れながら、該当する史料を精査し、領外活動について客観的に分析していきたい。

「フィリピン革命」を取り上げた論文や著書は多くあるが、その中でも領外活動に触れている論文は以下の5つである：

Epistola, Silvino V., *Hong Kong Junta*, Quezon City: University of the Philippines Press, 1996.

Mactal, Ronaldo B., *Hong Kong Junta / Comite Central Filipino: Pulitika at Kontrobersya*, Maynila: De La Salle University Press, 2000.

Saniel, Josefa M., *Japan and the Philippines 1868-1898*, Quezon City: University of the Philippines Press, 1969 (rpt. of 1963).

アンダーソン・ベネディクト著 山本信人訳 『三つの旗のもとに アナーキズムと反植民地主義的想像力』 NTT 出版株式会社 2012年

Anderson, Benedict, *Under Three Flags: Anarchism and the Anti-colonial Imagination*, Manila: Anvil Publishing, Inc., 2006.

池端雪浦 「フィリピン革命と日本の関与」 池端雪浦・寺見元恵・早瀬晋三『世紀転換期における日本・フィリピン関係』 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所 1989年 1-36頁

Epistola (エピストラ) の著書は、先に述べたテイラーによる英訳資料 [Taylor 1971] と何冊かの出版本から構成されている。しかし、独立運動側の一次資料としては、このテイラーの資料 [Taylor 1971] のみを使っているため、資料数が少なく、個々の行動や心理、人間関係が詳細に書かれるに至っていないことがある。また、その著書のタイトルからも判るように、香港の活動のみを扱っており、比米戦争に入ってから記述がかなり少ない。香港委員会とその活動を見つめなおしたエピストラの著書は、フィリピン革命 100 周年関連「1898-1998 独立・自由 Kalayaan」のプロジェクトが動き始めた 1996 年に、出版されている。1990 年代のフィリピンはクラーク、スービック両アメリカ軍基地が撤退し、アメリカとの心理的關係が徐々に薄れていった時期である。特に 1992 年から 1998 年にかけて政権を担ったフィデル・バルデス・ラモス Fidel Valdez Ramos (F. ラモス) 元大統領は、アメリカ企業以外の外国投資も積極的に受け入れ、経済成長を図ろうと努力した。この時代の流れから、エピストラの論文にはフィリピン中心史観の傾向が表れており、フィリピン人はアメリカと同盟を組んだのに、アメリカ人はフィリピン人を騙して利用した [Epistla 111-112] というストーリーの上に、米西戦争期の領外活動が描かれている。またこの論文内には、フィリピン人の主張を確認・精査せずに引用する部分も散見される。これは先にも述べたように、フィリピン人研究者の意識の中で、本人も自覚せぬまま、フィリピン革命のストーリーが、国家創世神話の意味を併せ持ってしまうからなのであろう。

Mactal (マクトル) は香港を中心にした活動を扱ってはいるが、テイラーの英訳本 [Taylor 1971] や書籍を多用し、PIR の原史料を使用せず、日本との活動に関して、日本側の資料を使用していない。また香港の活動で一番重要になる香港領事と武器調達の部分に関して、明確な検討がなされておらず、通り一遍の感は否めない。エピストラとマクトルの論文は領外革命家が行った活動について述べるにとどまっており、彼らの活動がその後どのような影響を及ぼしたのかについて論を進めるには至っておらず、横の座標となる革命家たちの活動の同時代における相対的位置づけと、縦の座標となる歴史的評価が示されていない。エピストラとマクトルの著書の分析は、第 1 章で詳しく行う。

Saniel (サニエル) の著書は、香港についてもある程度は詳しく書かれているが、やはり基本的には日比関係についての論文であり、PIR-622 として存在するテイラーの英訳資

料⁶⁰のみを使っている為、資料の幅が狭く、個人の活動・心理、香港以外の活動についてあまり触れられていない。しかも 1898 年末で終わっているため、比米戦争の部分が不完全なままで終わってしまっている。

池端の論文も、タイトルから判るように日本・フィリピン関係の中で香港を扱っている為、香港などの活動の詳細は書かれていない。また論文が扱う時期も 1899 年初頭で終わっている。両者ともに第 2 章の先行研究でもあるので、サニエルと池端の論文についての分析は第 2 章で詳しく行いたい。

Anderson (アンダーソン) は『三つの旗の下に アナーキズムと反植民地主義的想像力 Under Three Flags, Anarchism and the Anti-Colonial Imagination』で、第 2 フェーズの領外革命などに触れている。しかし、彼もまた「未完の革命」神話のロマンに飲み込まれている 1 人である。アンダーソンの著書の中のフィリピン人革命家たちは、ひたすらストイックに独立を求めて活動していく。アンダーソンは想像と創造を組み合わせる革命や国民国家設立の過程を論じているが、その逆である革命の幻滅と崩壊を論じることはしていない。また時にアンダーソンは、他の論文が部分的に引用した文章を孫引きし、原史料のコンテクストを理解していない場合がある。また、この著書には、センセーショナルな一部を切り取って、自分の主張に切り貼りする傾向も見られる。アンダーソンに関する細かい批判は第 2 章と第 3 章で行いたい。

この 5 つは、「フィリピン人が独立という目標に向かって、自己を投げ打ち、ひたすら努力をした」というプロットに出来事を当てはめて、執筆をしている。しかし、本稿は「国家創生の努力」ではなく「崩壊の過程」を描くことがテーマである。19 世紀末のフィリピンは、アメリカという新興列強国と対峙する中で、フィリピン人の理想や欲望と、彼らと関係を持った人々のそれらが重なり合い、1 つのうねりとなってその行く末を決定していく時代であった。したがって、このうねりを構成する 1 つ 1 つの出来事や人物を捉えてみないと、崩壊の過程は明確に見えてこない。しかも領外活動に関しては、0-2 の目的の節でも述べたように、海外の武器ブローカーから大量の武器を購入するということがあったために、領外革命家の扱う資金の額と責任が領内革命家よりも格段に大きく、革命家 1 人 1 人の活動の成否が革命運動の行く末を左右した。そのため、領外活動から革命運動を見

⁶⁰ 当時はまだ、テイラーの 5 巻本 [Taylor 1971] はなかったが、PIR-622 のカーボン・コピー「Translations of documents showing relations between the insurgents in the Philippines and Japan, 1898-1900」(テイラーが選んだ日比関係の 59 の文書が英訳されているもの) がミシガン大学にあり、サニエルはこれを使用した。

る場合には、革命家個人の活動に重点を置いて、第2フェーズを分析する必要がある。

第2フェーズの領外活動の影響は、長い目で見るとフィリピンだけではなく東南アジア、そして東アジアにまで波及している。領外活動はボーダー・レスに進み、活動に関わったアクターたちは、帰属する国家の国民としてだけではなく、個人の欲望や判断で行動し、彼らの帰属する国家を超えてアジアの経済・軍事・政治に影響を与えた。したがって、もう少し視野を広げ、柔軟に活動を見て行かねばならない。つまり、経済史、政治史、軍事史などの専門分野を超え、日本史、アメリカ史、フィリピン史などの個々の国家中心史観も外して、数々の事象を検証していかないと、この領外活動の本質を語ることはできないのである。少ない史料の中で専門分野に合う史料だけをピックアップして分析しても、第2フェーズの全体像を掴むことは不可能である。既存のフィリピン革命研究の多くは、フィリピン革命をフィリピンの国内問題として捉えているが、第2フェーズの領外活動における出来事の全ては、当時の複雑な国際情勢と密接にかかわっており「フィリピン革命」はもはやフィリピンだけのものではなく、大きな視野で活動を考えねばならない。

本稿では、この5つの研究を踏まえた上で、上記の基本姿勢の上に立ち、対外活動の再構成を行ってみたい。各章において先行研究として挙げておくべき論文に関しては、その章の最初で言及することにする。

0-5 本稿の構成

本稿では中心となる活動場所で、章分けを行う。第1章では、1897年12月29日にアギナルドが香港に到着して以降の、香港委員会を中心とした活動を明らかにする。第2フェーズが始まった日はアギナルドがフィリピンに戻った1898年5月19日であるが、アギナルドとその仲間が再起を決意するプロセスも重要であるので、1897年12月29日から論を始め、香港に追放されたアギナルドたちとアメリカ軍との接近、アギナルドのフィリピンへの帰還の経緯、再起についての決議などについても触れる。続いて米西戦争期と比米戦争期における香港委員会の内情と活動、そして香港委員会から派生していく対外活動などへと話を展開する。その後、崩壊していく領外活動に焦点を当て、その過程を明らかにする。欧米の壁、特にアメリカという新興列強国と対峙し、香港を中心として海外で活動した革命家が、どのように活動し挫折したのかを明確にする。

第1章では、第2章以降の理解を深めるために、なるべく引用を避けながらも出典元は明示し、史料から知り得た事実を列挙すると共に、同時にフィリピン領内での革命の動き

にも触れ、対外活動が革命の動きとどのように連動していたのかもわかるようにする。

第2章では、革命の成否を決める武力闘争に注目し、革命をサポートした日本人、特に日本の参謀本部と革命家たちの関わりを明らかにし、両者がお互いを牽制しつつも、利用しあっていく姿を描いていく。フィリピン人活動家は、すでに1895年には来日し、横浜に居を構えて改革運動をサポートしていた。香港委員会は、1898年6月、日本に駐在する革命家の増員を決定し、必要に応じてサポート要員も送ることにした。一部の革命家は一番近い手の届く「近代」を日本と見なしており、武装闘争を行う上で日本政府と軍の援助に期待した。日本の参謀本部も米西戦争を機にフィリピンに参謀本部員を送り込むようになった。参謀本部は欧米列強のアジア進出に追いつこうと、比米戦争の混乱に紛れて、フィリピンに足掛かりを作ることを画策した。この章では日本の参謀本部のフィリピン革命への関与を中心に、史料を引用しながらフィリピン人革命家と参謀本部が行った活動と彼らの意図、そしてその活動がアメリカに与えた影響を検証する。

第3章では、スペインのマドリッドで発行された革命新聞『フィリピナス・アンテ・エウロパ』を分析しながら、「前宗主国」となったスペインで発行された新聞の主張を明らかにする。スペインは当時のフィリピン人に一番影響を与え、アメリカの影響をあまり受けず、比較的自由に発言できる場所であった。そのスペインでフィリピンから追放された革命家が、1899年10月25日から1901年6月10日まで、定期刊行物という印刷媒体を通して、彼らの主張や国際問題など多くの問題を取り上げて、スペイン語で主張を行った。この章ではこの新聞を通して、欧米の文化に晒され続けたフィリピン人革命家たちが、どのような発言をし、そして、親アメリカへと転向していく一部の革命家をどのように見ていたのかなどについて、領外革命家の主張と思想を分析する。

第4章では、香港委員会と直接かかわった在香港アメリカ(総)領事ワイルドマンの(総)領事館報告書をもとに、香港委員会が行った武器調達とそれを阻止するワイルドマンとの争いを明らかにしていく。ワイルドマンは1898年秋ごろから、香港委員会の活動の最大の障害になった人物であった。ワイルドマンの報告書には香港委員会の武器調達活動について、かなりの労力を割いて報告した部分もあり、彼の報告書とPIRを合わせて、香港委員会の武器調達の実態を明らかにしていく。またその他にも、ワイルドマンと在広東アメリカ領事との反目が香港委員会の活動に与えた悪影響、ワイルドマンの香港委員会への憎悪などについて分析する。香港委員会に関わる雑多な人々、そして香港委員会がワイルドマンの裏をかこうと必死にもがく様子を、(総)領事館報告書から明らかにしていきたい。

終章では、1章から4章で明らかにしたことを踏まえて、結論を述べる。

第1章 第2フェーズにおける香港委員会とフィリピン革命の推移

この第1章では後の第2、3、4章のため、フィリピン革命の領外活動で中心的役割を担った「香港委員会」と、その委員会を中心とした対外活動について通史的に動きを追っていきたい。

当時香港は、シンガポールと並んで、アジアにおける貿易のハブ港であった。マニラから香港までの距離は約1,130キロメートルである。マニラからミンダナオの南にある都市ジェネラルサントスまでが約1,050キロメートルであることを考えると、香港はほぼ国内移動の範囲にあると考えていい。香港—マニラ間は汽船の往来があり、香港—マニラの海底電線も通っていることから、香港は、フィリピン国内よりもはるかに手軽に行くことができ、電報ですぐに連絡が取れる「外国」であった。それに加え序章でも述べたように、香港には1872年のカビテ反乱でスペイン当局から国外追放になったフィリピン人や、弾圧を逃れて住み着いたフィリピン人がいた。彼らの中には、フィリピン領内にいる親族が所有する農園・土地・ビジネスの利益や、香港で起こしたビジネスの利益などで、十分に暮らしていけるフィリピン人富裕層もいた。例えば、バーサ、ラモス、ドロテオ・コルテス Doroteo Cortes (D. コルテス)⁶¹の3人などがそうである。そしてその後1896年になると、反スペイン当局のレッテルを張られたためにフィリピンを逃れ、日本を經由して香港に避難して来たアゴンシーリョが、香港に居を構えた〔De Ocampo 1977: 2〕。このようにして、アギナルドが香港に追放される前から、香港ではスペインの植民地体制の変革を求める活動が行われていた。以下の4点——1) 香港がマニラから一番近いアジアのハブ港であった、2) 国外追放者及び自主避難者にとって、香港はマニラから心理的にも距離的にも一番近い場所であった、3) 香港—マニラ間との通信が容易であった、4) フィリピン革命勃発前から、スペイン植民地体制に不満を持つフィリピン人が香港で活動していた——に、アギナルドが追放されて来たことで、香港は第2フェーズでの領外活動の中心となった。

本章では、フィリピン領内での革命関連の動きにリンクさせながら、香港委員会を中心とした領外活動の詳細と結果を明らかにする。副次的な目的として、領外活動の全体の流

⁶¹ D. コルテスは、反修道士運動を行い、香港に住んだ。1898年当時は、香港に住む富裕なフィリピン人ファミリーの1つ、コルテス・ファミリーの長であった。息子はマキシモ・コルテス Maximó Cortéz (M. コルテス)。

れを明示して後の章に備えたいという意図もあるため、香港委員会を中心とした領外活動の事実関係を通史的に明らかにし、出典元の表示は明確にしながらも原文の引用は最小限に留め、事実のみをクロノロジカルに述べていきたい。本稿は主に第2フェーズを扱うが、アギナルドの香港追放後から第2フェーズスタートまでの時期も、活動の基盤を作る重要な期間であると考えるので、第1章では1897年12月29日から論を始め、新興列強国アメリカとの出会い、米西戦争、比米戦争へと話を展開させる。そしてこの流れの中で、領外革命家が合理的かつ効果的に活動できず、当時の国際社会の中で自滅していく様子を明らかにする。

香港委員会を扱った先行研究は序章でも述べたとおり、以下の2つである：

Epistola, Silvino V., *Hong Kong Junta*, Quezon City: University of the Philippines Press, 1996

Mactal, Ronaldo B., *Hong Kong Junta / Komite Central Filipino: Pulitika at Kontroversya*, Maynila: De La Salle University Press, 2000.

上記 Epistola (エピストラ) と Mactal (マクトル) の先行研究で主に扱われている 1898 年から 1899 年前半に関して、第1章で再度この時期の香港委員会の歩みを書き直す理由は以下の6点である：

1. 両者の論文は、PIR に存在する原史料を使わず、主に序章の史料説明で述べたテイラーの英訳 5 巻本 [Taylor 1971] を利用している。この 5 巻本の欠点は PIR に存在する全ての文書が網羅されているのではなく、テイラーがセレクトしたごく少数の文書が掲載されていることである。またこの本はアメリカ陸軍の将校であるテイラーが構成し編集した本であるため、元になった PIR の文書と比較すると、アメリカに不都合な部分が削除されている場合がある。
2. 先に述べたように、テイラーの 5 巻本 [Taylor 1971] 以外には、日本、アメリカ、イギリスの一次史料を使っていないために、明らかになっていない事実がある。
3. 一次史料を扱う比率が低い。

4. アメリカ側がマニラ湾内で、香港—マニラの海底電線を切断したという事実に触れていないために、以下の2点、1) なぜ香港と言う場所が革命の第2フェーズで重要になったか、2) 1898年8月中ごろまでは手紙によって全ての連絡を行わねばならなかったのか——の説明が欠如している。この2点は香港委員会を語る上で非常に重要な点であり、これが欠如したままで米西戦争期の香港委員会を語ることはできない。

5. 序章で述べたように、両者ともにフィリピン中心史観に立った論文である。

6. テイラーの5刊本〔Taylor 1971〕の中での香港委員会に関する史料は、主に比米戦争前の記述が多いため、両論文ともに、1899年に入ってから活動に関しては、マリアノ・ポンセ Mariano Ponce (ポンセ)⁶²の書簡集『革命に関する手紙 Cartas sobre la Revolution』にたよる比率が高くなっている。

1. に関する1例としては、在香港アメリカ総領事に関する記述の一部などが、5巻本では削除されている。したがって、香港委員会と在香港アメリカ(総)領事ワイルドマンとの関係を、正確に分析することができない。

2. に関しては、2-1で説明する5月初旬に数回開催された香港委員会の話し合いなどが、顕著な例である。この話し合いは、PIR以外にも、日本側の史料、マドリッドで発行された革命新聞『フィリピナス・アンテ・エウロパ』などを参考にしないと、香港のフィリピン人社会が、アメリカ支持、日本支持⁶³、スペイン支持に分かれていたことをきちんと説明できない。また、武器調達に関しても、PIRの文書と在香港アメリカ総領事館報告などを参考にしないと、その活動を明確にすることは不可能である⁶⁴。

3. に関しては、エピストラを例に挙げると、引用146のうちテイラーの5巻本〔Taylor 1971〕からが99、アゴンシーリョの本〔T. Agoncillo 1960〕からが24、ポンセの本〔Ponce 1932〕からが14、他が9である。テイラーとポンセは刊行史料としてカウントできるが、T. アゴンシーリョの本は原史料ではない。本稿でも原史料に当たれない場合、やむを得ず2次史料を引用した場合はあるが、その数は最小限にとどめるべきである。

⁶² ポンセ (1863-1918) は1889年にマドリッドで医学を修め、1889年ロペス・ハエナを手伝って、『ラ・ソリダリダッド La Solidaridad』を創刊。その後香港に移住し、バーサ、アゴンシーリョなどと共に、革命運動を行った。1898年6月に革命への援助の可能性を探るため、革命側から日本に派遣された。

⁶³ 日本支持者がいたことに関しては、池端の論文でも述べられている〔池端: 1989 14〕。これに関しては本章2-1で述べる。

⁶⁴ 武器調達については第4章で述べる。

4. に関しては別節で説明を行いたい。

5. に関して1例を挙げると、エピストラは、アメリカ海軍アジア艦隊のジョージ・デューイ George Dewey (デューイ) 提督が、ワイルドマン領事と共に、テオドロ・サンディコ Teodoro Sandico (サンディコ)⁶⁵に会ったと、サンディコ本人が述べた [Epistola 1996: 114] と記しているが、ワイルドマンの報告書には、デューイはフィリピン人革命家とは直接会ってないと記されている [香港アメリカ領事館報告 No.184 Aug. 27, 1900]。ワイルドマンの報告書を100パーセント信じる訳ではないが、サンディコがそう述べたのであれば、エピストラはその出典を論文上で明らかにすべきである。当時の「アメリカ海軍のアジア艦隊の提督」が、リーダーでもない革命家に会ったか否かは、史料分析の際の大きなポイントとなる出来事である。その出来事を、出典もなく「事実」として扱うのには問題がある。序章でも述べたように、フィリピン人の主張を正しいものとして精査せずに引用するのは、フィリピン革命の既定のストーリーが、フィリピンの「国史」の中に組み込まれ、フィリピン研究者の脳の中で無意識のうちに事実として認知されているからである。このことにより、従来から語り継がれてきたフィリピン革命に関するフィリピン人の主張を、精査せずに引用する結果になっている。

6. に関しては、エピストラもマクタルも同じである。日本に関しては、PIRの日本関連史料と、日本側の史料を使わない限り活動を明らかにすることは難しい⁶⁶。

以上の理由から、先行研究で扱っている期間も含めて、アギナルドが香港に自己追放された後の1897年12月29日から論を進め、再検討をしていく必要がある。本章が、後の章の事実関係における理解のベースになることを考えれば、引用元が明示されていない先行研究を補完することは、本稿では重要なことだと考えている。

1. 香港の重要性の高まり

1897年12月、80万ペソを貰うことを条件に⁶⁷、アギナルドと革命闘争の中核を担ったリーダーたちは、武器を置き香港に追放されることを了承し、29日、香港に到着した。年

⁶⁵ サンディコ (1860-1939) は香港で第2フェーズスタート時に革命に参加し、その後フィリピン領内で活動し、アギナルドの側近となった。この後1899年1月23日のフィリピン第1共和国第1内閣(マビニ内閣)では、外務長官になった。史料では Sandico と Sandiko の両方が使われている。

⁶⁶ 日本に関しては主に第2章で扱う。

⁶⁷ 最終的にスペインからアギナルド側に支払われたのは半分の40万ペソであった。

が明け、1898年2月14日になると、ビアク・ナ・バト協定で追放されたリーダーたちが、香港で会合を開き、最高会議 **Supreme Council** のメンバーを選んだ〔Taylor 1971: Vol. I 451〕。米西戦争の発端となるハバナの「メイン」号爆発が2月15日だったことを考えると、この時点で、革命家たちが第2フェーズを始める具体的なビジョン、またはアメリカを利用する構想を持っていたのかは疑問である。

1898年2月25日、香港にいたアメリカ艦隊のデューイ提督に、海軍次官のセオドア・ルーズヴェルト **Theodore Roosevelt** (ルーズヴェルト)⁶⁸から以下の2点の命令、1) 戦争にそなえて石炭を一杯に積むこと、2) スペイン艦隊をアジアの沿岸から出さないようにすること——が下った〔Dewey 2009: 179〕。その後アメリカ艦隊は、戦争に備えた船のメンテナンスを始めた〔Dewey 2009: 180〕。

フィリピン内部にはスペインに対する不満が依然としてくすぶっており、1898年3月半ばには、ルソン北部のボリナオ **Bolinao** でスペインに対する反乱が起こった。ボリナオの近くのリングエン **Lingayen** では電信線が住民によって切断され、スペイン人はボリナオの電報局に逃げ込み、その電報局が原住民に取り囲まれる騒ぎが起こった。この事件は香港でも報道された〔*Overland China Mail*. March 12, 1898〕〔同 March 19, 1898〕。4月半ばにはセブで反乱が起こったとの報道が香港で流れた〔*Overland China Mail*. April 9, 1898〕。第1フェーズを率いたアギナルドとリーダーたちが、革命が継続していることを香港で伝え聞き、焦りを感じたであろうことは想像に難くない。

1898年4月13日、ビアク・ナ・バト共和国で内務大臣を務めたアルタチョが、スペインからアギナルドに支払われた40万ドルの中から、彼の取り分を要求して、アギナルドを香港最高裁判所に訴える訴状にサインをした⁶⁹〔Taylor 1971: Vol. I 467-468〕。この行為によりアルタチョは、香港にいた多くのフィリピン人革命家たちの反感を買ってしまった。

しかし、アギナルドは1898年4月の始めに香港を離れ、サイゴン経由でシンガポールに入った。アギナルドはシンガポールで、ハワード **W. ブレイ** **Howard W. Bray** (ブレイ)

⁶⁸ ルーズベルト (1858-1919) は、1897年から1898年にかけて海軍次官を務め、その後マッキンレー政権で副大統領を務めた。しかし、マッキンレー大統領が暗殺されたため、1901年9月14日から、1909年まで大統領を務めた。

⁶⁹ 香港最高裁判所訴訟番号 1898-31。原告のアルタチョは、アギナルドに対して、彼の取り分と訴訟費用を要求している〔Taylor:1971 Vol. I 467〕

70と名乗るイギリス人の仲介で、在シンガポール・アメリカ総領事スペンサーE. プラット Spencer E. Pratt (プラット) 71と、4月23日、24日に話し合いを行った。その後25日か26日も話し合いを行った可能性がある〔シンガポール・アメリカ総領事館報告書 No.212 April 28, 1898〕〔同 No.298 November 3, 1898〕。テイラーの5巻本では、1899年にアギナルドの証言をもとに作成されたとされるフィリピン革命の経緯についてのパンフレットの一部を掲載しており、その中では4月21日にアギナルドがシンガポールに到着し、プラット総領事とは4月22日、23日、25日に話し合いをし、26日に別れの挨拶をした旨が記されている72。この時の様子は後々アメリカ側とフィリピン側で齟齬の対象となった73ので、確認のためにも一次史料となるシンガポール総領事館報告書 No.21274と No.294の要約を以下に記しておきたい：

- * 4月23日、プラット総領事は、アギナルドがシンガポールにいることをブレイから告げられた75。プラット総領事はアギナルドに会うことを決め、翌朝の

70 現段階ではブレイの身元は確認できていない。アギナルド側が新聞記事に出した情報では、ブレイは元英領インドの文官で、フィリピンにはプランターとして15年住んでいたが、スペインのせいで財産を捨てることになり、フィリピンを去らなければならなかった経歴を持っており、アギナルドとも旧知の仲だったと記されている。しかし、イギリスの史料を調べる限りでは、イギリス領インドのベンガル管区の官吏に同姓同名の人物はいるが、同一人物か判別できない。この官吏に関して確認できた最後の史料は1897年8月29日付けの、ベンガル司祭 Bengal Chaplain からの退職の書類であった。アメリカの書類の中には、1896年3月7日にビコール地方で彼がアシエンダの売買を行った記録が残されている。こちらの書類はアメリカの押収資料にある売買契約書なので、ブレイ本人の契約書に間違いはないと思われる。

71 プラット総領事は、1886年から91年のペルシャ駐在を経て、シンガポール総領事になった。

72 テイラーの5巻本では、4月22日、23日、25日と話し合いをしたことになっている〔Taylor: 1971 Vol. I 446〕。この5巻本の話は『フィリピナス・アンテ・エウロパ』や他のPIRの文書から推測すると、1899年になって、アギナルド側の人間がスペイン語で書かれたものが元になっていると思われる。しかもこの部分のテイラーの注記には、PIRにファイルされている原稿の字が、アギナルドの字ではなく、アギナルドの政府にいたフェリペ・ブエンカミノの字であると記されているので、信用性に欠ける部分がある。したがって本稿では、アギナルドとの会合の後すぐに書かれたシンガポール総領事館報告書の日付を採用する。

73 第1次フィリピン委員会に参加したウースターの本には「アギナルドは、とりわけ、そして繰り返し、プラット総領事とデューイが彼に対してアメリカ合衆国はフィリピンの独立を認めると約束したのではないかと非難した Aguinaldo has specifically and repeatedly charged that Pratt and Dewey promised him the recognition of the independence of the Philippines by the United States」〔Worcester 2010: 11〕との記述がある。

74 シンガポール総領事館報告書 No.212は総領事館側のナンバリング・ミスにより、重複して存在する。ここで取り上げたのは1898年4月28日の報告である。

75 アギナルド側の主張では、プラット総領事がアギナルドに会いたいと連絡してきたとな

24 日の日曜日にアギナルドと彼のアドバイザーたちに会った。通訳はブレイが行った。

* 翌日プラット総領事は、ワイルドマン領事を介して、「ここにいる反乱者のリーダーであるアギナルドは、マニラの反乱者たちとの包括的な協力について、提督⁷⁶とアレンジするために香港に行くだろう。もし希望するのであれば、電信乞う。 プラット Aguinaldo insurgent leader here will come Hong Kong arrange with Commodore for general cooperation insurgents Manila if desired. Telegraph, Pratt」という電報を、香港に停泊しているアメリカ艦隊のデューイ提督に送った。

* デューイ提督は以下のように返信した：「できるだけ早くアギナルドに来るよ
うに伝えてくれ Tell Aguinaldo come soon as possible. Dewey」⁷⁷

* 26 日火曜日、プラット総領事はワイルドマン領事に以下の返信をした：

アギナルドはブンティンという偽名で部下やセクレタリーと共に汽船
「マラッカ」で出発した。提督に、ランチで彼らを旗艦に連れて行かせ
るようにしてほしい。プラット

Aguinaldo under assumed name Bunting left with aide and Secretary
by P & O Steamer Malacca. Have Commodore launch take them flag
ship direct. Pratt.

* 27 日にプラット領事は以下の電報をワシントン D. C. に打った：「アギナル
ド將軍は私の依頼で香港に行った。マニラの反乱者との協力をデューイとア
レンジするためである プラット General Aguinaldo done my instance
Hong Kong arrange with Dewey cooperation insurgents Manila. Pratt」

〔シンガポール・アメリカ総領事館報告書 No.212 April 28, 1898〕〔シンガポー
ル・アメリカ総領事館報告書 No.298 November 3, 1898〕

ここでのプラット総領事との会談は、後にいろいろな波紋を呼ぶことになった。その例

っている〔Taylor: 1971 Vol. I 446〕。

⁷⁶ デューイ提督。

⁷⁷ デューイ提督の自伝『ジョージ・デューイ艦隊司令官自伝 Autobiography of George Dewey, Admiral of the Navy〕〔Dewey 2009〕では、24 日に電報を貰ったことを認めており、この時アギナルドを香港に呼び戻した理由を、当時の状況では、どんな情報源でも無視はできなかったからだと述べている〔Dewey 2009 : 245〕。

として以下の2点、1) 米西戦争開戦直後に、イギリス領であるシンガポールで、アメリカ領事が反スペイン闘争を行ったアギナルドに会ったということで、在シンガポール・スペイン領事のルイス・マリナス Luis Marinas (マリナス) からイギリス側に対して、国際法上の中立違反に関する抗議がなされた〔イギリス国立公文書館文書 FO 881/7267〕、2) この会談が文書化されなかったため、この会談内で「在シンガポール・アメリカ領事」がアギナルドに独立を約束したか否かで、アギナルド側とアメリカ側が真っ向から対立することになった——が挙げられる。特に後者の点に関して、革命側とアメリカ側は後々まで激しい論争を巻き起こし、革命側はアメリカ領事が独立を承認したと主張し、アメリカ側は約束などしたことはないと否定し続けた。

アギナルドは、プラット総領事との話し合いが終わると、デューイ提督に会いに香港に戻った。香港の1898年4月19日付けのニュースによると、アメリカ艦隊は、すでに香港停泊中に軍艦を戦闘用の暗い色の塗装に塗り替え⁷⁸、戦闘への準備を着々と進めていた〔*Overland China Mail*. April. 23, 1898〕。したがって、この時点で、アメリカ側はマニラ湾内の夜間航行と、カビテのスペイン艦隊への早朝奇襲を決めていたと思われる。戦争への準備が着々と進む中で、香港では、革命家が愛国者委員会 Junta Patóriotica の名前で、フィリピン人に対して、アメリカに協力するように呼びかけた〔Taylor 1971: Vol. I 495〕。

香港当局は中立維持のために1898年4月23日にアメリカ艦隊に対して、25日午後4時までに、香港領海内から退去するように求めた〔Dewey 2009: 193〕⁷⁹。これに応じてアメリカ艦隊は香港を去り、大鵬湾 Mirs Bay に停泊した。4月26日には、在マニラ・アメリカ領事のオスカーF. ウィリアムズ Oscar F. Williams (O. F. ウィリアムズ)⁸⁰が、在マニラ・アメリカ領事館の業務を、在マニラ・イギリス領事のエドワード・ヘンリー・ローソン・ウォーカー Edward Henry Rawson-Walker (ローソン・ウォーカー)⁸¹に託して〔イギリス国立公文書館文書 FO 72/2076〕マニラを去り、27日に香港のアメリカ艦隊に合流した。

⁷⁸ 軍艦は19日に戦闘用の塗装に塗り替えたと書かれている〔Dewey 2009: 193〕。

⁷⁹ デューイ提督は1898年4月25日午後12時15分に本国から開戦の連絡を貰った〔Dewey 2009: 195〕。

⁸⁰ 在広東アメリカ合衆国副領事にもウィリアムズという名前の人物がいるので、O. F. ウィリアムズと記す。

⁸¹ ローソン・ウォーカーは、米西戦争中の1898年8月2日、熱帯性の赤痢による衰弱で病死する〔イギリス国立公文書館文書 FO 72/2081〕。

マニラ湾攻撃を前に、アメリカ海軍は香港委員会の幹部と話し合いを行った。この時の様子をワイルドマンの報告に沿ってまとめると以下になる：

両者が話し合いを行った時点では、アギナルドはまだシンガポールから香港に戻っておらず、アメリカ艦隊との話し合いに応じたのは、アンドレス・ガルチトレナ **Andres Garchitorena** (ガルチトレナ)、サンディコ、アレハンドリノであった。1898年4月27日、ワイルドマン領事が彼ら3人を大鵬湾に停泊中の艦隊に連れて行った。その時の通訳となったのは、サンディコであった、ワイルドマンによれば、デューイ提督と彼らは、直接話し合いはせず、デューイ提督の部下が対応した。当初、彼ら3人は、アメリカ艦隊がスペイン艦隊を壊滅させるまでマニラに帰りたがらず、香港で使っている清潔なりネンと歯ブラシがなければ、長旅はできないと述べた〔香港アメリカ総領事館報告⁸²No.184 August 27, 1900〕。

この報告によると、デューイ提督はフィリピン人3人と直接会っていない⁸³。しかしアレハンドリノの手紙⁸⁴には、彼が旗艦「オリンピア」内でデューイ提督と会ったニュアンスの文面がある〔PIR 636-2〕。双方、どちらの主張が正しいのかは现阶段では判断がつかない。なぜなら、のちに1900年の大統領選挙で「米西戦争の英雄」のデューイ提督が、ウィリアム・ジェニングス・ブライアン **William Jennings Bryan** (ブライアン) と民主党内で候補者争いを行っており⁸⁵、アメリカ人関係者がデューイ提督の名声に傷がつかないように、革命家との接触を故意に隠した可能性も否めないからである。

革命家3人がアギナルドに先んじてフィリピンに帰ることにに関して、彼らの中に躊躇があったのは確かであろう。最終的に彼らは帰国を了承することになった。ガルチトレナは香港に家族がおり、サンディコは自分のビジネスである貸し自転車業の整理があったので、最終的には、アレハンドリノがアメリカ艦隊に同乗してマニラに戻ることになった〔Alejandrino 1949: 90〕。4月28日の『ストレーツ・タイムス **Straits Times**』では、すでに香港からの特別電報 **Special Telegram** として、アメリカ艦隊が、マニラ攻撃の際に「反乱者たち **Rebels**」の協力を確かなものにしたことを伝えており、「アレハンドリニ

⁸² 在香港アメリカ領事館は米西戦争中に総領事館に格上げになった。しかし文書番号は、領事館からそのまま通し番号でつけられている。

⁸³ デューイ提督の自伝には、この3人との会見の記述はない。

⁸⁴ 手紙に日付の記載がないので、いつ書かれたのかは不明。

⁸⁵ 最終的にはデューイ提督が出馬を辞退し、ブライアン (1860-1925) が民主党大統領候補となった。

Aleandrini⁸⁶」が、マニラに向けてアメリカの艦隊で出発したことを伝えている〔*Straits Times*. April 28, 1898〕。アメリカ艦隊には、アメリカ人のみならず外国人の従軍記者も同乗しており、後にマニラ湾海戦の詳細を新聞記事にした。米西戦争マニラ湾海戦では、新聞記事によると少なくとも、フランス、ドイツ、日本の軍艦が戦闘を観戦した〔*Overland China Mail*. May 14, 1898〕。

5月1日の米西戦争マニラ湾海戦では、船の性能や物量で圧倒的優勢を誇るアメリカ艦隊が勝利した。アメリカ艦隊は、カビテの海軍基地にあった全てのスペイン軍艦を沈没させ⁸⁷、この海軍基地と、マニラ湾内の制海権を完全に手中に収め、翌5月2日にはマニラ湾内の電信ケーブルを切断した⁸⁸。その後、革命側がバタアン Bataan のマリベレス Mariveles からマニラへの電信線を切断し〔*Overland China Mail*. May 14, 1898〕、イロイロとマニラを結ぶ電信線も切断した〔*Overland China Mail*. May 28, 1898〕⁸⁹。電信線切断による情報遮断という点において、米西戦争は近代「情報戦」の始まりだったと言える。8月13日にアメリカ軍がマニラのイントラムロスにおいて、事実上の勝利を収め、8

⁸⁶ アレハンドリノのこと。1898年4月30日の『オーバーランド・チャイナ・メール』も同じスペルミスをしているので情報の出所は同じだと思われる。

⁸⁷ 4月28日に香港のスペイン領事は、アメリカ艦隊が大鵬湾を出発したことを、マニラのスペイン艦隊に知らせた。この通報により、スービックにいたスペイン艦隊の船が防衛のためにカビテ海軍基地に戻った〔Dewey 2006: 207〕。逆にこれが仇となって、5月1日のマニラ湾海戦でスペイン艦隊は、カビテ海軍基地内においてほとんどの軍艦を沈められることになった。

⁸⁸ フィリピン人の反乱者たちも、反乱を起こすときに電信ケーブルを切断する作戦をとることがあった。前述したボリナオの事件だけでなく、3月11日にパンガシナン州サンバレスで起こったスペイン当局への反乱でも、電信ケーブルが切断されたことを、在マニラ・イギリス領事が報告している〔イギリス国立公文書館文書 FO 72/2076〕。

⁸⁹ キューバでも同じことが行われていた。「(前略) 之に反して米西戦争に際しては、ケーブルは戦争の経過にとって重大な意義を持つものであった。合衆国の情報部長 Squier がこの戦争を“a war of coal and cables”と名付けたのは全く正しい。(中略) 戦端が開かれると直ちにアメリカ人に依つて、主戦場たるキューバとの電報通信を直接間接に媒介する総ての電信局に於いて嚴重な検閲が開始された。スペイン政府の官報、並びに西印度宛の暗号電報、及び合衆国に敵意ある電報は禁止され又種々なる電報が差押さへられた。ワシントン政府との電報連絡を行ふ為に、フロリダから Key-West を経てハヴナに至る二本のケーブルの中一線は、ハヴナの沖合で一軍艦に依つて切断され、或る軍艦の上で通信を行ったのである。さてアメリカ側はキューバの連絡を完全に断つて仕舞はうと試みた。バタバノを経てハヴナ及びサンチャゴ至る南ケーブルを切断された為に(南岸の) Cienfuegos は孤立となり、その為にはブランコ元帥はサンチャゴ港に包囲された。Cervera 大将とのあらゆる連絡を完全に断たれて仕舞った。(中略) 東亜に於ける戦争に際しても、アメリカ人は同様の事を行った。一隻の軍艦は香港からマニラに至るケーブルを占領した。其後アメリカはスペイン人がボルネオのラブアンに向ふ汽船に電報を送る為のケーブルも又切断した」(筆者注: キューバや地名のスペルなど、引用は原文通り)〔日本無線電信株式會社 184-185〕。

月 19 日にイギリスの電信会社との合意を得て〔イギリス国立公文書館文書 FO 881/7267 No.863〕、21 日にケーブルを接続し、22 日に再開する〔イギリス国立公文書館文書 FO 881/7267 No.871〕まで、マニラからの情報・電報・手紙は、香港へ蒸気船で運ばれて、そこから打電・配信・配達された〔*Overland China Mail. August 20, 1898*〕。

5 月 1 日のマニラ湾海戦の情報は錯綜した。なぜなら、電信ケーブルが切断される前に、フィリピン総督が、アメリカ艦隊が撃退されるとスペインに連絡し、別のケーブルもアメリカ側の死傷者が多いと配信したのにもかかわらず、アメリカの新聞はアメリカの勝利をケーブルで簡潔に報告したからである〔Dewey 2009: 227-228〕。したがって戦闘の詳細は、5 月 4 日にマニラを発ったアメリカの密輸監視船「ヒュー・マカロック Hugh McCulloch」が、5 月 7 日に香港に到着するまでわからなかった。

この電信ケーブル切断によるマニラとの情報の分断により、この時期の香港の重要性は格段に高くなった。マニラから海外にアクセスするためには、まずは香港を経由するしか方法がなくなった。しかも、マニラー香港の連絡は、手紙で行うしかなかった。マニラから香港に手紙やモノを運ぶ場合は主に以下の 4 つの方法、1) 民間の蒸気船、2) マニラから香港に来る中立国の軍艦、3) アメリカがマニラと香港との連絡の為に接収した気船「サフィロ Zafiro」、4) 個人的に蒸気船や軍艦の乗組員に頼む——を使うしかなかった。スペイン民間人つまり非戦闘員の手紙は、厳重に封印して汽船「サフィロ」や、中立国の軍艦などが香港に運んだ。そして香港から、目的地に発送、または配信した。

このように、マニラからの情報を一番早く世界各地に送るのには、マニラから情報を手紙にして香港に送り、香港から電信で送ることであった⁹⁰。また、当時の香港はシンガポールと並んでアジアの物流の集散地であったため、香港は革命家たちだけではなく、アメリカ軍やマニラ近郊に住む全ての人々のモノと情報の中継地点となった。

2. 米西戦争初期 (1898 年 5 月 1 日—6 月 30 日)

2-1. 3 つの可能性を巡る駆け引き

アギナルドは 5 月 2 日に、シンガポールから香港に戻った〔香港アメリカ総領事館報告 No.63 July 18, 1898〕⁹¹。ワイルドマン領事の兄弟、エドウィン・ワイルドマン Edwin

⁹⁰ 香港政庁は、アメリカ軍がケーブルを使うのは中立違反だと指摘したため、アメリカは電信の内容を精査して送るようになった〔Dewey 2009: 241〕。

⁹¹ テイラーの 5 巻本には、アギナルドが書いたとされる文書があり、その中では 5 月 1

Wildman (E. ワイルドマン)⁹²の本によると、アギナルドは香港のワイルド・デル Wild Dell と言う貧しい中国人やポルトガル人の住む場所に隠れた [E. Wildman 2010: 96]。したがって、革命家のアポリナリオ・マビニ Apolinario Mabini (マビニ)⁹³が『フィリピナス・アンテ・エウロパ』の記事「アメリカ国民へ Al Pueblo de los Estados Unidos de la América del Norte」で主張した「デューイ提督が彼の艦隊でフィリピン諸島に来る前に、彼はアギナルドと会議を持った Antes de que el almirante Dewey viniese con su escuadra a Filipinas, tuvo una conferencia con el genral Aguinaldo...」〔*Filipinas ante Europa*. N°2 Noviembre 10, 1899〕というのは、事実ではない。少なくとも米西戦争「直前」に、アギナルドはデューイと会っていないことを、本稿では明確にしておきたい。このように、革命家の主張すら、伝聞の情報を根拠として用いる場合があった。

1898年5月4日、香港で革命家たちが集まり、話し合いが行われ、アギナルドのフィリピン帰還が決定した [Taylor 1971: Vol. I 505] [PIR 1060-5]。この集まりでアギナルドは以下の2点、1) 彼自身がフィリピンに戻るとスペインとの約束を破ったことになり、40万ペソの返還をスペインから要求される可能性がある、2) アギナルドがフィリピン行きアメリカ海軍の軍艦に乗船した後でアメリカ側からフィリピンに不利益な書類にサインを強要された場合、もし断ればアメリカとの関係に亀裂が入り、合意すればフィリピン人から裏切り者として後ろ指を指される可能性がある [Worcester 2010: 25] ——から、フィリピンに帰ることをしぶった。また、ガルチトレナとガリカノ・アパシブレ Galicano Apacible (アパシブレ)⁹⁴もデューイの合意がない限り、アギナルドはフィリピンに行くべきではないと主張した。

しかし、注目すべきは、在香港・日本領事館の上野季三郎(上野)二等領事が報告している5月9日と13日の独立運動側の集会である。上野二等領事はこの集会のことを、機

日の2時に到着したと書かれている。[Taylor: 1971 Vol. I 443]。

⁹² E. ワイルドマンは、香港総領事ワイルドマンの兄弟で、『エルミラ・エコーズ *Elmira Echoes*』の編集者を経験した後、1898年10月から1899年5月まで香港副総領事を務めた。ワイルドマンと区別するために、E. ワイルドマンと記す。

⁹³ マビニ (1864-1903) は第2フェーズからアギナルドの活動に参加。その後フィリピン共和国設立時の、アギナルドのブレインとなった。1899年1月23日の共和国設立で第1次内閣の長となる(同年5月7日辞任)。1899年12月にアメリカに逮捕され1901年1月にグアムに追放される。

⁹⁴ アパシブレ (1864-1949) はマドリッドの大学で学び、その後イギリス汽船「サフィロ」の医者として働いていた。アパシブレはホセ・リサル *José Rizal* とは面識があったが、アギナルドとは、アギナルドが香港に追放された際に、初めて会った。その後アパシブレはアギナルドの下に入って働き、1898年9月からは香港委員会の委員長となった。

密第 11 号、機密第 12 号で報告し〔外務省外交史料館文書 米西戦争一件 雑 第一巻 在香港馬尼刺反徒秘密集会ニ関スル件 210-217〕、小村寿太郎（小村）外務次官には、1898 年 8 月 12 日に直接、親展で「馬尼刺反将 Aguinardo ノ態度ニ関スル私見」という報告書を書き、この集会の内容を報告している〔外務省外交史料館文書 米西戦争一件 第二巻 782-794〕。これらの資料によると、独立運動側は 9 日に再挙に関する謀議を行った。その内容は、革命側が汽船、軍銃、弾薬、ダイナマイトを購入してフィリピンに渡り、5 月 1 日のマニラ湾海戦に乗じて反旗を翻し、西洋諸国の保護も関与も受けなくて日本との関係を結ぶというものであった。しかし 13 日の集会になると、アギナルド派 20 名が、日本派と称せられるアルタチョ派 15 名の反抗を制圧して、前回の決議を破棄するに至ったと書かれている。その理由として上野二等領事は、「反徒の 1 人」であるコルテス⁹⁵がアギナルドと米国との交渉の仲介を行い、両者間で内約が成立したからだと書いている。また、この「変節派」と「反対派」の対立には、資金と武器購入に関する考えの違いもあったことが述べられている。機密第 12 号ではアギナルドが金品を受領した日を 12 日と記しており、9 日の会合以前にもアメリカとの内密な交渉はあったが、再挙の気運が高まっていることをアメリカに示すために、9 日の会議で、まずは再挙が決まるように再挙の気運を扇動して、12 日にアメリカから金品を受領し、その後の 13 日の会合でアメリカの援助を受ける方向に転換したと書いている。

領事は、日本派はアルタチョを中心に、一方の米国派はコルテスを中心に構成されるとし、1898 年 5 月 13 日の 2 回目の秘密会合では、「首領間」で米国派が日本派を制圧し日本派の主だった首領はいなくなったと報告している。一般的にはアルタチョとアギナルドの対立は、スペインから支払われた追放承諾金の中から、アルタチョが自身の分配金をアギナルドに要求し訴訟を起こしたことが原因とされているが、日本側の史料によるとアルタチョとアギナルドの分裂の原因は訴訟だけでなく、日本援助をめぐる意見の対立もあったようにも読み取れる。革命家が日本領事に話したことをまとめた報告書であるので、革命家が話した内容に親日的誇張があることは否めないが、第 1 フェーズで革命家が日本に来ていたことを考えると、日本に援助を求める意見があったことは嘘ではないと思われる⁹⁶。9 日にすでに多数決で決定したことを 13 日に放棄した理由としては、上野二等領事

⁹⁵ ファースト・ネームの記載はないが、D. コルテスカ、息子のマキシモ・コルテスのどちらかであろう。

⁹⁶ 日本人と革命家たちとの関係については第 2 章で述べる。

が述べるように、9日から13日の間にワイルドマン領事とアギナルドの間に何らかの話し合いがあったと考えるのが妥当であろう。第4章で述べるがアギナルドは、シンガポールから戻った5月2日から、カビテに向かう17日までの間に、ワイルドマンと話し合いを持っている⁹⁷。上野二等領事は5月18日付けの機密12号で、アギナルド一派はアメリカから「一万三千磅ノ賄賂」〔外務省外交史料館文書 米西戦争一件 雑 第一巻 在香港馬尼刺反徒秘密集会ニ関スル件 214〕、または機密13号によれば「一万三千磅ノ前報酬」〔外務省外交史料館文書 米西戦争一件 雑 第一巻 在香港馬尼刺反徒秘密集会ニ関スル件 223〕⁹⁸を受領したが、アギナルド一派との協議は「当地駐在米国領事」〔外務省外交史料館文書 米西戦争一件 雑 第一巻 在香港馬尼刺反徒秘密集会ニ関スル件 223〕（ワイルドマン）がその衝にあたったと書いており、この時期にアギナルドがワイルドマン領事と、武器手配の便宜を図る為に金銭の授受をするような関係を築いていた可能性があったことを示唆している。この時、ワイルドマン領事は武器調達⁹⁹で香港委員会に対して便宜を図り、4,000¹⁰⁰を香港委員から受け取っている〔PIR 471-8〕¹⁰¹。

また、香港内にはスペインへの併合を求める動きも続いていた。先行研究ではスペイン併合派について詳しく述べられていないので、第3章で扱う新聞『フィリピナス・アンテ・エウロパ』の第35号「スペイン人著名人たち モレとキログ・バレストロス¹⁰² *Españoles Ilustres Moret y Quiroga Ballesteros*」の記事を以下にまとめておきたい：

米西戦争勃発時に香港にいた革命家たちはアメリカ側から、アメリカのフィリピンの独立承認と引き換えに革命側のアメリカ軍への支援を要請された。しかし一方ではス

⁹⁷ フランス人ジャーナリストのアンリ・トゥローHenri Turotの回想では、トゥローは1899年4月に香港でワイルドマン領事と会う機会があり、その際ワイルドマン領事が、1898年米西戦争初期に香港でアギナルドと会ったことについて、アギナルドは話し合いをするのには薄っぺらい人間だと考えたので何も約束はせず、中国人と同じように、身分の低いクーリーが待つ控えの間で対応したと述べたと書いている〔Turot 1969: 84-85〕。

⁹⁸ ただし、機密13号では、上野二等領事は、香港の新聞の報ずるところによれば、という前置きをして、報告を行っている〔外務省外交史料館文書 米西戦争一件 雑 第一巻 在香港馬尼刺反徒秘密集会ニ関スル件 222〕。

⁹⁹ 革命家は武器や物品の調達に関して、*expedición* という単語を使っている。アメリカ側はこれを *expedition* という単語に置き換えて翻訳した。*expedición* はスペイン語では本来「遠征、探検、発送」という意味であるが、本稿では「調達」という単語を当てはめるのが妥当だと考え、調達として訳す。

¹⁰⁰ 4,000の通貨単位は不明。

¹⁰¹ ワイルドマンが絡んだ武器調達も含め武器調達は、第4章で一括して述べる。

¹⁰² ベニグノ・キログ・イ・ロペス・バレストロス Benigno Quiroga y López Ballesteros（ベニグノ・キログ）（1850-1908）はスペインの自由党員、1906年に内務大臣となる。

ペインにいた「マドリッドの改良主義のフィリピン人居留民 *la colonia Filipina reformanista de Madrid*」やフィリピン革命を支持するヨーロッパ人から、スペイン自由主義者のセギスムンド・モレ・イ・プレデガスト *Segismundo Moret y Prendergast* (モレ)¹⁰³の政治をサポートするようにアプローチされていた。香港委員会の幹部が集まった際、モレとデ・ロス・レイエスの手紙が読まれ、スペインから提案された「武装した自治 *la autonomia armada*」を認めることで一致した。香港委員会は仲間のファウスティノ・リチャウコ *Faustino Lichauco* (F. リチャウコ)¹⁰⁴を香港のスペイン領事の下に派遣し、委員会の決議を伝えた。スペイン領事はスペイン本国にこのことを打電したが、モレが植民地大臣を辞める時と重なってしまい、スペインからの回答を貰う前に、アメリカからの提案を受けざるを得ない事態が起こってしまった。モレは「厳正な精神 *espíritu justiciero*」を持ち、フィリピン人はこのことに共感していた。したがってモレの政策が存続していたら、1901年4月現在でもフィリピンは「武装自治政体 *el régimen autonomico armado*」としてスペインに属していただろう。

[*Filipinas ante Europa*. N°35 Abril 10, 1901]

これらの話を総合すると当時、香港の革命家たちの中には、アメリカに期待をよせる者、日本に期待をよせる者、スペインの自治付与に期待をよせる者、の3派がおり、それぞれが、日本、アメリカ、スペインの当局者とコンタクトをとっていたことになる。その後、1898年6月16日に香港の革命家のポンセが日本に向けて出発し、日本国内で活動を始めた¹⁰⁵。

2-2. イサベロ・アルタチョが引き金となる対立

前述の通り、アルタチョはスペインから支払われたお金の取り分を主張し、香港最高裁判所に訴訟を起こした¹⁰⁶。その後の比米戦争中も、アルタチョはアギナルド側に対して

¹⁰³ モレ (1833-1913) はスペインの自由派に属する政治家。1897年から1898年にかけて植民地大臣 *Ministro de Ultramar* であった。自由派は、フィリピン統治に関してある程度の自治を与える示唆を行い、フィリピン人革命家と交流を持った。

¹⁰⁴ F. リチャウコ (1859-1910頃) は中華系富裕層に属するメスティーソ。弟のクリサント・リチャウコ *Crisanto Lichauco* と共に香港で革命活動を行う。兄弟を区別するために F. リチャウコと C. リチャウコと記す。

¹⁰⁵ ポンセの日本での活動は、第2章で扱う。

¹⁰⁶ 第1次フィリピン委員会のウースターは「4月5日に (アルタチョは) 反乱側の資金

数々の反意を示し、批判を行った。彼はアメリカによる平定後も政治の世界に身を置き、パンガシナンの知事なども務めたが、1910年頃に死亡してしまったため、他の活動家のようにアメリカ統治期の政治の世界に関わってポジティブな人物イメージを形成することが出来ず、「アギナルドを裏切り、アメリカに寝返った裏切り者」のイメージを払拭することができなかった。しかし、前述した1898年5月の上野二等領事の報告からは、少なくともこの時点でのアルタチョには、日本を利用して独立闘争を続けていきたい意志があったようである。また、1898年5月30日のアゴンシーリョからアギナルドへの手紙でも、アルタチョは日本へ武器調達に行きたいと希望し、アルタチョ自身の活動費は自分でまかなうので、同行者の費用を払ってほしいと述べたと記載されている〔PIR 471-3〕。この時期のアルタチョに関しては先行研究では、アギナルドへの訴訟だけをクローズアップする傾向があるが〔Epistla 1996: 99-101〕、アレハンドリノと一緒にいった第1フェーズでの活動を考えると、訴訟の件だけでは終わらせず、彼の他の活動にも目を向ける必要がある。

アギナルドとその仲間たちが来る前から香港にいて独立運動を続けてきたアレハンドリノも、1898年4月18日付けのアルタチョ宛の手紙の中で、アルタチョが分け前を求めてアギナルドを香港最高裁判所に訴えた件に関して、アギナルドは我々の理想と国家を体現化している人物なので、彼を法廷に引き出してしまうことは、無知で好奇心しかない人間の前でパレードを行うようなものであり、惨めで不幸なことだと述べ、派閥的な観点からではなく、フィリピンの利益に反する行動をする者として、アルタチョに対して反意を唱えている。この手紙の中でアレハンドリノは、双方に努力を呼びかけ、アルタチョの件に関しては、どちらかの肩を持つ気はないが、我々の目的達成の為にアルタチョに反意を示すと述べ、アルタチョへの反意は示しながらも、彼への積極的な批判は控えている〔Alejandrino 1949: 84-85〕。第2章で述べるが、アレハンドリノ自身も1897年初旬に日本で活動を行っていた経験があり、アルタチョも同時期に日本で活動していたことがあった〔外務省外交史料館文書 米西戦争一件 雑 第一巻 馬尼刺人ニ関スル報告 276 278 301 303

20万ペソを要求した。たぶん、アギナルドと行動を共にしている人々のためではなく、元のリーダーたちの利益のために、香港で会社を設立する合意のもとに要求したのであろう。しかし香港のリーダーたちはその合意を非難した...on April 5 (Artacho) demanded 200,000 pesos of the insurgent funds, probably under the agreement that he should establish a company in Hongkong for the benefit of the former leaders and not merely of those who had accompanied Aguinaldo. But the leaders in Hongkong had denounced that agreement...」〔Worcester 2010: 14〕と書いている。つまりアメリカ当局はこの争いを、香港のアギナルド派と、アギナルド以外のフィリピン領内のリーダーたちとの内部対立と見ていた。

308] ことから、日本に行って革命活動に何がしかの光明を見出したいアルタチョの気持ちは理解出来たのであろう。しかしアルタチョはこの後、日本ではなくアメリカに接触し、ワイルドマン領事が絡んだ武器調達に失敗し、米西戦争開始当初よりも不利な立場に追い込まれてしまった。

第2フェーズの初期段階の革命家の記述を読む限りでは、アルタチョを完全に敵視する者と、そうでもない者がいたことは確かである。アルタチョとサンディコはフィリピンに戻るため、1898年6月21日、アメリカの輸送船「サフィロ」で香港を出発したが、カビテに到着するとアルタチョだけがアギナルドの命令で刑務所に入れられてしまった¹⁰⁷〔香港アメリカ総領事館報告 No.126 July 25, 1900〕。しかし、アルタチョは1年後の1899年6月末頃、脱走に成功し香港に逃れた。7月19日にはワイルドマン総領事を訪ね、その後アメリカ併合賛成を声高に唱えはじめた〔香港アメリカ総領事館報告 No.126 July 25, 1900〕。これ以降、アルタチョはアメリカ併合を唱え、アギナルド側への反意をむき出しにしたため、彼は革命組織の中で裏切り者と扱われるようになった¹⁰⁸。

1898年6月14日の香港のアゴンシーリョと思われる人物からアギナルドへの手紙では、アルタチョが徒党を組み都合の悪いことを起こすだろうから、アルタチョと彼の仲間を彼の故郷にかえさず監視するように、とのアドバイスをを行っている〔PIR 507-6〕。5月から6月にかけての時期は、アルタチョが自分の意見や立場を主張すればする程、裏切り者の刻印がより深く、濃く、刻み付けられてしまう結果になると言う皮肉な時期であった。

2-3. エミリオ・アギナルド・イ・ファミイ帰還後の香港のリーダー

アギナルドがフィリピン国内での武力独立闘争を再開させるために、香港を出発してカビテに到着したのは1898年5月19日であった（巻末 人物相関図1）。この時デューイはアギナルドがフィリピンに戻るために、アメリカ軍艦「ヒュー・マカロック」に乗船す

¹⁰⁷ アルタチョは6月末に、サンディコ等とフィリピンに帰国し、アギナルド側に拘束された。この際サンディコも逮捕されたとの噂がたち、香港の独立運動側は1898年7月16日の『オーバーランド・チャイナ・メール』で、7月14日の日付で「チャイナ・メールの読者達へ」と題して、アルタチョは拘束されたが、サンディコは逮捕されていないとの記事を投書欄に投稿した。一般的に、アギナルドがアルタチョを殺さなかった理由は、アルタチョを殺してしまうとアルタチョの出身地のイロコス地方の人々からの反感を買い、離反されてしまうと懸念したからだと言われている。

¹⁰⁸ 米西戦争後のアルタチョに関しては後に述べる。

ることを了承している〔Dewey 2009: 246〕¹⁰⁹。E. ワイルドマンによると、アギナルドの出発をワイルドマン領事夫妻も見送った¹¹⁰〔E. Wildman 2010: 75〕。

4日後の23日には、すでに香港から、武器調達の手紙がアギナルド宛に送られている〔PIR 401-4〕。この手紙はアゴンシーリョと思える人物が書いたものである。しかし先に述べた1898年2月14日の最高評議会では、出席者の中にアゴンシーリョの名前は無い。理由として考えられるのは、アゴンシーリョが、1896年8月末の武力闘争勃発時から「フィリピン領内で武器を持って」中心的に指揮をとってスペインと戦い、アギナルドと一緒に香港に追放された革命家ではなかったということである。ここからもアゴンシーリョと追放組の間に、精神的な溝があったことが伺える。

香港で5月4日の会合で取り纏めの地位についても、アパシブレであった〔Taylor 1971: Vol. I 505〕。しかし、アギナルドが出発した後、香港の独立活動の中で中心的な位置に立ったのは、アゴンシーリョであった。

2-4. フェリペ・アゴンシーリョと一部の革命家との対立

PIRに残されたこの時期の香港関係の文書には、仲間割れの激しさと、それに付随するアギナルドへの警告・密告・苦情が多く残されている。先行研究では、アゴンシーリョの活動については触れられているが、彼が起こす対立について触れているものはない。エステバン A. デ・オカンポ Esteban A. De Ocampo (デ・オカンポ) の著書のタイトル『最初のフィリピン人外交官 フェリペ・アゴンシーリョ 1859-1941 First Filipino Diplomat, Felipe Agoncillo 1859-1941』〔De Ocampo 1977〕でも明らかなように、フィリピンでアゴンシーリョは、第2フェーズでアメリカとの交渉などを行ったことにより、「初のフィリピン人外交官」と呼ばれた。革命時の領外活動で最後まで海外で活動していたこともあり、アゴンシーリョは固い信念を持っていた革命家というコンテクストで語ら

¹⁰⁹ しかし、デューイの自伝には、アギナルドとその仲間を軍艦に乗せることは了承したが、アギナルドとその支持者と公的な意味で付き合うのは賢明ではないと考え、反乱者たちとの面倒な同盟を避けたと述べている〔Dewey 2009: 247〕。

¹¹⁰ E. ワイルドマンは、ワイルドマン領事がアギナルドに対して、アギナルドを助けることは法に抵触するので、香港当局に察知されないように質素な姿で港に来るようにとアドバイスしたにもかかわらず、アギナルドが多くの仲間を引き連れ、派手な格好で港に現れたと記している。そしてそれに対してワイルドマン領事が呆れたことも述べている。しかしワイルドマン領事もそのような場に、自分の妻をつれて来ただけでなく、アギナルドが出発する直前に、その妻が高価な宝石を無くしてひと騒動を起こしており、ワイルドマン領事もどこまで秘密保持を考えていたのかは謎である〔E. Wildman 2010: 74-78〕。

れることが多い。したがってデ・オカンポの本はアゴンシーリョが苦難に耐えながら、フィリピン領外で独立の支持を得ようと孤軍奮闘したというプロットに基づいて書かれており、彼が起こした対立には一切触れていない。もちろん、アゴンシーリョが独立の支持を得るために努力したことに異論はないが、彼が起こした対立は、領外活動組織の分裂と崩壊の一因ともなったので、丹念に検証する必要がある。1898年5月から6月前半にかけての、アゴンシーリョのサンディコへの憎悪、そして別節で述べる1899年のアメリカ行きをめぐる意見の相違は、領外活動の躰きの1つになった。

サンディコはアルタチョと旧知の仲で、ワイルドマン領事のサポートを受けて武器調達を行った際に、アルタチョと行動し革命側に損失を被らせた。しかしそれにもかかわらず、当時、サンディコを愛国的革命家として評価し続ける革命家は多かった。結果的にサンディコはこの後もアギナルドの下で活動を続けてゆくことになり、その後のアメリカ統治時代にはフィリピン議会上院議員にまで上り詰めた。サンディコは二心ある行動や日和見的行動をすることがあり¹¹¹、アゴンシーリョはサンディコの本質を見抜いていたのかもしれない。

1898年5月23日のアゴンシーリョが書いたと思われる手紙には、サンディコを徹底的に非難した内容が書かれている [PIR 401-4]。アゴンシーリョはサンディコが行った武器調達に関して、彼が得た武器の数が少ないことや、武器を運ぶ蒸気船の船長への報酬が多すぎることなど、彼の行動を細々と非難し、武器調達に関してはサンディコがどうしてもやりたいと言っているからやらせているだけだと、突き放すように書いている。5月28日の書簡でもアゴンシーリョは、サンディコがアギナルドに向かってアゴンシーリョを非難し、武器の船積みはアメリカに任せろと主張しているが、実際にはアメリカ側は2,000挺のライフルと20万発の弾しか送ってこなかったのではないかと非難している [Taylor 1971: Vol. III 238]。

1898年5月27日のアゴンシーリョからアギナルドへの手紙によると、サンディコは、独立運動の仲間であるモンテネグロ、ガルチトレナ、グラシオ・ゴンサガ・イ・レオン Gracio Gonzaga y Leon (ゴンザガ)¹¹²と新しい委員会を作ろうとしていた [Taylor 1971: Vol. III 238-241]。しかし翌28日、アゴンシーリョは、サンディコ、モンテネグロ、ガル

¹¹¹ このサンディコの行動については第2章で扱う。

¹¹² ゴンサガは、1899年1月23日からのフィリピン共和国第1次内閣（マビニ内閣）では、内務長官であった。

チトレナ、ゴンサガの4人の辞任を確認したが、この日の午後4時にはサンディコに会って彼の辞任を撤回させたと書き、サンディコはアルタチョの影響を受けているとアギナルドに訴えている。この手紙にはサンディコが、どのように影響を受けているのかは書かれていないが、ワイルドマン領事の絡んだ武器調達で、サンディコがアルタチョと一緒に行動し失敗したこと、または両者が日本に何かしらの救いを求めようとしたことなどが、アゴンシーリオのクレームの原因になっている可能性がある。しかしサンディコを嫌悪しているアゴンシーリオが、5月28日にサンディコの辞任を撤回させた理由は謎である。4月27日のアメリカ艦隊内で行われた話し合いで通訳を務めたことでわかるように、サンディコは英語ができることから〔香港アメリカ領事館報告 No.184 August 27, 1900〕、その語学力とコミュニケーション能力を利用しようとしていたのかもしれない。

5月29日の香港のビト・ベラルミノ Vito Belarmino (ベラルミノ)¹¹³の手紙には、ゴンサガとガルチトレナが辞任し、多くの仲間がアゴンシーリオとアレハンドリノに不満を抱いていると書かれており、アパシブレ、リチャウコ¹¹⁴、ルクバン¹¹⁵、アレハンドリノ以外の人間はアゴンシーリオに反対しているとしている〔Taylor 1971: Vol. III 241-242〕。その後ベラルミノは、6月7日の手紙でも、多くの者がアゴンシーリオに不満を持っていると書いている〔Taylor 1971: Vol. II 243〕。

アパシブレの伝記によると、アパシブレは1898年6月13日、何人かのメンバーがアギナルドの下に行って働きたいと言っているが、どうしたらいいのかとアギナルドに指示を仰いでいる〔Alizona 1971: 53〕。こうして、アゴンシーリオと反目した者は、フィリピンのアギナルドの下に帰ってしまった。アゴンシーリオが評価していたのは、リチャウコであった。アパシブレやリチャウコ兄弟は、香港で対外活動を続けているところからすると、この時期アゴンシーリオについての人間が香港の組織内での実権を握っていたと言える。結果的には6月半ばまでに、アゴンシーリオと上手く付き合っていくことの出来る人間が香港の組織に残り、アゴンシーリオ体制が出来上がった。

¹¹³ 第1フェーズからアギナルドと共に戦った生え抜きの革命家。

¹¹⁴ このリチャウコが、兄か弟かの明記はされていない。

¹¹⁵ このルクバンが、ビセンテ・ルクバン・イ・リリエス Vicente Lukbán y Rilles なのか、彼の兄弟のカエタノ・ルクバン Cayetano Lukbán y Rilles なのかは明記されていない。ビセンテ・ルクバン・イ・リリエスは第1フェーズから参加し、ビアク・ナ・バト協定でアギナルドと共に香港に行った。カエタノは、マドリッドで活動をしていたが、1901年3月ごろには香港に移動している。ビセンテは V. ルクバン、カエタノは C. ルクバンと記す。

独立派であるアゴンシーリョの体制が確立してくるにしたがって、この時まではアゴンシーリョの同志であった香港の富裕層との対立も明らかになってきた。これら富裕層の人々はアメリカへの併合を主張していた。彼らは、フィリピンをアメリカの一部として認めてもらい、できればアメリカの州の1つとなって、アメリカから何らかの形での自治を与えてもらうことを考え始めていた。1898年5月6日には、彼らの中から、D. コルテス、その息子のマキシモ・コルテス、そしてその妻のエウスタキア・ドロレス・オチョア・ペレス・デ・タグレ Eustaquia Dolores Ochoa Perez de Tagle が、アメリカ大統領マッキンレーに対して、アメリカ政府を支持することを示し、アメリカ軍がフィリピンを占領し併合することを願う旨の宣誓書を送った〔香港アメリカ総領事館報告 No.42 May 6, 1900〕¹¹⁶。

この報告書には、他にもアルカディオ・ロサリオ・イ・ナルシソ Arcadio Rosario y Narciso (ロサリオ)、ゴンサガ、そしてバーサの3人の宣言書も同封された〔香港アメリカ総領事館報告 No.42 May 6, 1900〕。その後5月14日の領事報告でも、また別の4人の宣言書が国務省に送られている〔香港アメリカ総領事館報告 No.43 May 14, 1900〕。

このような動きを受けて5月27日にアゴンシーリョは、アギナルドに、M. コルテスが、1万ドル¹¹⁷をワイルドマン領事に支払ったと報告し、M. コルテスが、自身が持つマニラの不動産にアメリカの砲撃が当たらないようにするために、このお金を支払ったのではないかと伝えている〔PIR 401-4〕。租界地という特殊な状況下にある香港において、反スペインで一致していたフィリピン人たちも、アメリカという新しいアクターが入って来たことで、それぞれの立ち位置が微妙に変化した。これによって、香港のフィリピン人社会にも亀裂が入り、その亀裂はどんどん深くなっていった。

アゴンシーリョには強い外交への意欲があった。1898年5月23日の手紙では、アゴンシーリョはアギナルドに対して外交を行う権限を与えて欲しいと願い出ている〔PIR 401-4〕。また、27日の手紙でも、外交を行う権限を再度求めている〔PIR 451-8〕。第2フェーズが始まり、彼の行いたかった外交のチャンスが目の前にぶら下がったことで、彼の外交への欲望は一気に高まった。アゴンシーリョが行いたい外交は、欧米との交渉であった。彼は7月21日のマビニへの手紙で、アギナルド側は多くの州を制圧下に置いたの

¹¹⁶ しかし、彼らは心から望んでアメリカに宣誓を行ったのではない。詳細は本章 5-7 で述べる。

¹¹⁷ この1万ドルはワイルドマンへの賄賂だと言われているが、賄賂なのか武器調達費用なのかは不明である。サンディコの証言の中には、この1万ドルと自己資金4万を合わせてアルタチョに渡したと述べている〔PIR 513-4〕。

だから、全ての国にフィリピンの独立を知らせるべきで、アメリカ、フランス、ドイツ、イギリスに権限を持った代表を置かねばならないと述べている〔Taylor 1971: Vol. IV 268〕。そこには、アジアやラテン・アメリカの国々の名前はなかった。

外交を行いたいと言いながらも、この時期にはアゴンシーリョが外交を通じて何を行いたいのかは、彼の手紙からは読み取れない。アゴンシーリョが香港内で他国の領事と話合った記述は見つけておらず、当時、PIR から見る限りはアゴンシーリョの交渉相手は、ワイルドマン領事だけであった。

3. 米西戦争後期（1898年7月1日—8月13日）

アギナルドは、1898年5月24日に独裁を、6月23日にはフィリピンの独立と革命政府樹立を宣言した。7日後の6月30日にはアメリカ陸軍のトーマス・マッカーサー・アンダーソン Thomas McArthur Anderson（アンダーソン）准将と陸上部隊が、本国から到着し、カビテに司令部を設立した。その後7月25日にウェスリー・メリット Wesley Merritt（メリット）准将が、31日にはアーサー・マッカーサー・ジュニア Arthur MacArthur, Jr.（マッカーサー）准将が、増援隊と共に到着した。アメリカ軍は6月末から、徐々に革命軍の手助けを必要としなくなった。

3-1. 先の見えない不安

1898年7月の半ばになると、キューバ側の米西戦争もアメリカ有利で進んだことから、フィリピン周辺でも米西戦争に関して、何らかの決着がなされるだろうとの憶測が流れるようになった。7月18日、マニラの三増久米吉（三増）二等領事から大隈重信内閣総理大臣兼外務大臣に宛てた機密第19号「戦争終局ニ際シ予メ請訓ノ件」でも、マニラ近郊での戦乱が終わりに近づいてきている旨の報告が行われている〔外務省 1954: 325-326〕。米西戦争が終わりに近いという憶測が世間に流れると、フィリピンの先行きに不安を感じた革命家の中で動揺が起きた。7月28日のロンドンのアントニオ・マリア・レヒドール・イ・フラド Antonio María Regidor y Jurado（レヒドール）¹¹⁸からアゴンシーリョに宛てた手紙では、スペインがフィリピンに戻ってくることが決まれば、フィリピンは無政府状態になるとして、アゴンシーリョに対し、マッキンレー大統領にフィリピンを見捨てないで欲

¹¹⁸ レヒドール（1845-1910）は、マニラ生まれ。1872年カビテ兵器廠反乱で逮捕され投獄された。グアムに流刑となり、その後ロンドンで革命運動をサポートする。

しいと打電してくれと頼んでいる〔Taylor 1971: Vol. III 256-7〕。動揺するレヒドールに対しアゴンシーリョは、7月29日に、独立あるのみだと返答している〔Taylor 1971: Vol. III 257〕。

その頃ワシントン D. C. では、スペインの代理を務める在ワシントン・フランス大使のジュール・カンボン Jules Cambon (カンボン) を通じた米西の和平交渉が始まっていた。この時革命家たちは、フィリピンの将来は以下の5つ、1) スペイン植民地への逆戻り、2) アメリカ植民地化、3) アメリカ併合、4) アメリカ保護下¹¹⁹での独立、5) 完全独立——のどれかになると考えていた。またフィリピン領内では、ベルギー領事の M. エドゥアルド・アンドレ M. Edouard Andre (アンドレ) が仲介に入って7月24日から交渉が始まっていた〔Dewey 2009: 273〕。本来であれば、アメリカ領事の代理を務めていたイギリスのローソン・ウォーカー領事が、米西の仲介をするべきところであったが、ローソン・ウォーカー領事は7月に入って体調が悪くなり、ベルギー領事が仲介の労をとった。

1898年8月1日にアゴンシーリョはフィリピン領内の革命運動の姿勢を確認すべく、アギナルドにフィリピンには十分な武器があるのか、アメリカの保護を受ける気があるのかと問いかけ、アギナルドに決断を迫った〔Taylor 1971: Vol. III 260〕。8月2日には香港のアパシブレが、フィリピンにいるマビニに手紙を送り、革命側はアメリカのフィリピン併合を全力で阻む必要があり、政府の態度を早急に決めるべきだと述べ、現実的なのはアメリカ保護下での独立であり、革命側のメッセージをマッキンレー大統領やアメリカの上院議員、そしてプレスに送るべきだと進言している〔Taylor 1971: Vol. III 261-262〕。

それを受ける形でアギナルドは、1898年8月7日にマッキンレー大統領に対して、アゴンシーリョが外交官としてワシントン D. C. に行くから受け入れて欲しいと手紙を書いた〔Taylor 1971: Vol. III 299-300〕。そして同日、ワイルドマン領事には、公的にはアメリカ当局から革命側には何も発言がなされていないのに、協力関係だけが先に行われてしまっている、フィリピン革命政府とアメリカとの関係を正式なものにしたい¹²⁰と要請している〔Taylor 1971: Vol. III 189〕。また、8月7日にアギナルドはアゴンシーリョに対しても、独立宣言書 Acta de la Proclamacion de la Independencia を持ってアメリカに

¹¹⁹ フィリピン人革命家は、この時期にはアメリカがキューバに対して保護国という名のアメリカ軍政体制を敷くとは思っていなかった、フィリピンも保護国として独立したいという希望を持っていた。

¹²⁰ 米西戦争時以降のアメリカと革命側の相互協力を、文書によって確認することを意味している。

行くように命じ、どんな取引にも応じず、保護や併合に関する約束もしないように述べている〔PIR 493-3〕。この時に、アギナルドは初めて、アメリカ政府と直接交渉を行うことを正式に表明した。

1898年8月初旬の混乱の中でも、革命政府から香港に対して、物資の調達の手紙は続いていた。8月7日にはバコール Bacoor のアギナルドと見られる人物からアゴンシーリョに対して2級米1,000ピコと500トンの石炭の受領の手紙が送られている¹²¹。武器調達に関しては日本の特使¹²²が武器の持ち込みのアレンジを早くした方がいいと述べており、モーゼルやレミントンが手に入らなければ硝石でもいいから得ろと命令しており、アメリカに、保護・併合に関する約束はするなども指示した〔PIR 491-3〕。この記述からは、とりあえず様子を見ながら武器を得ようとする姿勢が伺える。ロンドンなどの動揺に比べると、果たすべき使命がある分、香港や日本のほうが落ち着いた対応をしているが、それでも将来のわからない不安が革命組織内に漂っていた。

3-2. 海外活動の組織化

1898年6月23日、アギナルドは革命政府樹立を宣言し、同日に出した政令により海外に革命委員会を作ることを宣言した。この決定に沿って、8月10日¹²³にアギナルドはフィリピン革命政府大統領府の印字がなされているレターヘッドの便箋を使い、アゴンシーリョに対して、香港の組織はアパシブレ、サンディコ、ビセンテ・ルクバン・イ・リリエス Vicente Lukbán y Rilles (V. ラクバン)、ゴンサガに託して、アゴンシーリョ自身は、対米工作のために渡米するように命令した。以下がその要約である：

1898年6月23日の基本法23条の条項によって、革命政府大統領に与えられた権限を持ち、同時に外務省の長として、ペドロ・パブロ・ロハス Pedro Pablo Roxas (P. ロハス) とフアン・ルナ・イ・ノビシオ Juan Luna y Novicio (J. ルナ)¹²⁴をパリ駐在

¹²¹ 内容から見て、多分アギナルドからの手紙だと考えられる。

¹²² この時期には日本陸軍の時澤砲兵大尉が米西戦争観戦武官として、フィリピンに入っていたが、この特使が彼を示すのかは不明である。日本の参謀本部との関係は第2章で述べる。

¹²³ アメリカ軍は最初この日をマニラ攻撃の日を設定したが、武器の用意が間に合わず断念した。デューイはその後12日に突然、翌朝の攻撃を言い渡されたと書いている〔Dewey 2009: 276〕。

¹²⁴ J. ルナは革命家でもあるが、著名な画家でもある。1899年6月5日に弟のアントニオ・ルナ・イ・ノビシオ Antonio Luna y novicio をアギナルドの護衛に殺され、失意の中、J. ルナは1899年12月に香港で客死する。弟と区別するため、兄をJ. ルナ、弟をA. ル

員に、レヒドールとシクスト・ロペス Sixto Ropez (S. ロペス) をロンドン駐在員に、アゴンシーリョをアメリカ駐在員に、ポンセと F. リチャウコを日本駐在員に、エリベルト・サルカル Heriverto Zarcal (サルカル) をオーストラリア駐在員に任命する。管理委員会¹²⁵は海外で政府を代表するが、権限を特別に委任されない限り条約などは結べない。各自、革命政府からの指示にしたがって動くこと。管理委員会は、海外にある政府の資金を管理する。管理委員会は、政府の命令を駐在員に伝える。管理委員会と駐在員の責務は、海外でのプロパガンダ活動、海外政府との交渉、革命に必要な全ての調達や契約（後略）である〔Taylor 1971: Vol. III 198〕。

ここで面白いのは、アゴンシーリョがサンディコを繰り返し非難したにも関わらず、アギナルドはフィリピンに戻ったサンディコを、香港の活動メンバーの中に再度加えたことである。ゴンサガもサンディコと一緒に 1898 年 5 月 28 日に、香港のメンバーからの辞任を表明した人物であった。アゴンシーリョが香港からいなくなることで、アギナルドはアゴンシーリョに配慮した人事を考えずに済むようになり、アゴンシーリョは念願の外交ができるようになった。そして同じ日に、アギナルドはサンディコに対して、香港にいるフィリピン人は一丸となって革命委員会を作るように指示している。このあたりに、領外活動メンバーのパワー・バランスに対する、アギナルドの配慮と苦勞が垣間見える。サンディコもゴンサガも、後に 1899 年 1 月 23 日のフィリピン第 1 共和国¹²⁶第 1 次内閣の閣僚になっている。

しかし、1898 年 8 月 12 日にはワシントン D. C. で、協定 Protocol がアメリカのウイリアム・ルーファス・デイ William Rufus Day (デイ) 国務長官¹²⁷と、カンボン大使との間で結ばれ、米西間で正式な停戦が決定した。13 日にはマニラのイントラムロスで、スペインが降伏するためのセレモニー的な戦闘、いわゆる「見せかけの戦闘 Mock Battle of Manila」〔T. Agoncillo 1990: 196〕が行われ、スペイン軍がアメリカ軍に対して白旗を掲げて降伏した。この戦闘にアギナルドの革命軍は参加させてもらえず、マニラを中心をアメリカ軍が占領することで、これ以降、マニラはアメリカの制圧下に置かれることになった。この 13 日の戦闘とスペイン軍のアメリカ軍への降伏は、フィリピンの運命を決定付ける出来事となった。

ナと表記する。

¹²⁵ 香港委員会など、領外に設立される委員会のことを指すと思われる。

¹²⁶ 以下、フィリピン共和国、または共和国と記す。

¹²⁷ デイ (1849-1923) は、1898 年 4 月から 9 月までアメリカ合衆国国務長官であった。

3-3. 香港の植民地当局の対応

先行研究ではあまり語られていないが、イギリス当局の香港委員会に対する対応は、香港での活動の重要なポイントになるので、ここでイギリス外交文書から見たイギリス当局の動きについて言及したい。5月30日のアゴンシーリョからアギナルドへの手紙には、在香港・スペイン領事のホセ・ナバロ **Josè Navarro** (ナバロ) が香港当局に対し、革命運動側が香港から武器を輸出しようとしているとクレームしたと記されている [Taylor 1871: Vol. II 242-247]。6月6日、植民地大臣ジョセフ・チェンバレン **Joseph Chamberlain** (チェンバレン)¹²⁸から香港当局に発信された連絡では、スペイン大使からイギリス植民地省に向けて、マニラのデューイ提督向けの3万丁のモーゼルと300万発のカートリッジが、香港に存在しているのではないかとの問い合わせがあり [イギリス国立公文書館文書 FO 881/7267]、それに対して同日、香港当局はそのような情報は得ていないと返信している [イギリス国立公文書館文書 FO 881/7267 No.604-2]。しかし6月13日の書類からは、第3代ソールズベリー侯爵ロバート・ガスコイン＝セシル **Robert Arthur Talbot Gascoyne-Cecil, 3rd Marquess of Salisbury** (ソールズベリー)¹²⁹は、デューイ向けの上記ライフルが、香港に存在していることを承知していた [イギリス国立公文書館文書 FO 881/7267 No.628] ことがわかる。7月2日の植民地省 Colonial Office の C. P. ルカス C. P. Lucas (ルカス) の手紙の中には、武器輸出の許可の権限は植民地大臣ではなく、香港の法律で管理すべきであるとの記載がある。米西戦争勃発当時、イギリスは全ての判断を香港当局に任せて、イギリス本国の直接介入を避けた [イギリス国立公文書館文書 FO 881/7267 No.732-2]。イギリス当局は、シンガポールでプラット総領事がアギナルドと話し合い、デューイが革命側と手を組んだ件でも、在シンガポール・スペイン領事からクレームを受けていたため、中立地帯でのアメリカの不注意な行動に対して注意喚起はしたが [イギリス国立公文書館文書 FO 881/7267 No.813-1]、植民地省としての直接介入は避けた。しかしこの後、革命側がアメリカの敵となったことで、香港当局は武器の輸出入に関して監視を強めていくようになった。

¹²⁸ チェンバレン (1836-1914) は米西戦争時イギリス、ソールズベリー内閣の植民地大臣 (1895-1903)。

¹²⁹ イギリスの第3代ソールズベリー侯爵 (1830-1903) は、自身が率いる内閣の首相 (1895-1902) であり、外務大臣 (1895-1900) でもあった。

4. 米西戦争終了後から比米戦争勃発まで（1898年8月14日—1899年2月4日）

1898年8月14日から1899年2月4日に比米戦争が始まるまでは、「名目上」、フィリピンでの戦闘は停止していた。しかしこの間も領外革命家たちは、スペイン、アメリカ、その他の国々の動きを見極めながら、活動を続けていた。

4-1. 中央政府の動揺に共振する香港

マニラでのアメリカ軍の勝利によって、今度はスペインとアメリカのフィリピン処理が問題になった。1898年8月15日、アゴンシーリョはワイルドマン総領事に対する米西戦争勝利の祝辞の中で、米西間の和平会議に参加させて欲しいと要求している〔Taylor 1971: Vol. III 499〕。同日にアゴンシーリョがマビニに、和平会議にフィリピン人が参加できればフィリピン人は自分達の利益を擁護できるので、アゴンシーリョにこの方法をとらせてもらえないかと提案し、将来マビニは海外にいるアゴンシーリョを必要とするはずだから、アゴンシーリョはマニラには戻らないと主張した〔Taylor 1971: Vol. V 74-75〕。しかし、同日のアギナルドへの手紙では、和平会議が自分達の望みを聞いてくれる可能性は少なく、アメリカやスペインがフィリピン側の希望を聞いてきた時は独立と答えておき、それでもしつこく聞いてきたら、6年間で完全独立を得たいと言うべきだと進言している。また、和平会議にはフィリピン人の代表を出すべきであるとの電報を、マッキンレー大統領に打電したほうがいいとも書いている〔Taylor 1971: Vol. III 670-672〕。アゴンシーリョは和平会議に参加する気持ちは十分持っていたが、もし彼が参加できたとしても、革命側の主張が全面的に受け入れられることはないであろうことも、理解していた。

1898年8月26日のアギナルドからアゴンシーリョへの手紙でも、アギナルドは政府の考えは独立だが、「偶然にもそうならなかった」時には、保護か併合を考えると書いており〔Taylor 1971: Vol. III 325〕、アギナルド側の気持ちも揺れ動いているのが判る。9月14日のアパシブレからアギナルドへの手紙では、アメリカがスペインへフィリピンを返還するのではないかと言うニュースを聞いて狼狽しているレヒドールに対して、アパシブレが、委員会はいつも完全独立の感情の上に成り立っていると返信したと述べている。しかし、それにも関わらず、同じ手紙の後半部分では、もし全ての状況が我々の合法的な願望に反したならば、つまり完全独立が認められなかったら、アメリカの一時的な保護と比米両国

政府¹³⁰で決めた制限のある条件での独立になるとの、矛盾する意見を述べており〔PIR 458-11〕、無条件独立や完全独立が得られなかった場合についての対処の仕方にも言及している。この手紙の中からは、フィリピン領内にある革命政府のあいまいな方針によって、香港側も態度を明確にできない様子が伺える。したがって、アギナルドの政府の揺れに共振して、アゴンシーリョや、アパシブレなどの領外革命家の気持ちも、理想と現実の間で揺れていた。

米西戦争が事実上終結し、フィリピンのみならず、キューバを含むスペインの植民地をアメリカがどうするのが焦点になった。特にキューバの扱いが決まらない限り、フィリピンの行く末を予想することは、困難であった、この時期のアギナルドの政府は、アメリカがフィリピン全てを占領するのか、それともスペインに返還するのか、まだはかりかねている時期であった。それは8月18日のフェリペ・ブエンカミノ Felipe Buencamino (ブエンカミノ)¹³¹のノートにも明確に現れている〔Taylor 1971: Vol. V 77〕。この時、ブエンカミノはフィリピン領内でアギナルドをサポートしていた。そのノートの内容を要約すると以下になる：

1. アメリカ領事¹³²は併合を提案した。アメリカ領事は、革命兵の撤退をアドバイスしている。またアメリカ軍は他の島も占領するだろうとも述べている。
2. パテルノは、スペイン人が再びフィリピンを支配するとの情報を持っているらしく、フィリピン人とスペイン人の間で仲裁を行うと述べている。
3. 1と2からフィリピン側は武装した方がいい。
4. ベニト・レガルダ・イ・ツアソン Benito Legarda y Tuason (B. レガルダ)¹³³は、アメリカはイギリスと合意し、イギリスはルソンを、アメリカはビサヤを保持すると述べた。

パテルノのような親スペイン派は、新興列強のアメリカがフィリピンを領有することで、フィリピンが国際紛争に巻き込まれるのを懸念して、スペイン統治の状態に戻した方がよ

¹³⁰ 革命家は1898年6月23日に設立した革命政府および、1899年1月23日に設立した共和国政府を、アメリカ政府と同等に扱われるべき国家政府であると考えていた。

¹³¹ ブエンカミノは、1年後の1899年5月の共和国第2次内閣で外務長官となる。その後アメリカ併合を受け入れる。

¹³² この領事は、O. F. ウィリアムズ在マニラ・アメリカ領事だと思われる。

¹³³ B. レガルダは革命家の1人であったが、その後アメリカに忠誠を誓い、1901年9月1日から1907年10月31日までアメリカのフィリピン委員会に籍を置いた。

いと主張した。そしてB. レガルダはフィリピンが分断統治されることを心配していた¹³⁴。あらゆる憶測と情報が、フィリピンと領内革命家の周りで渦巻いていた。このような不安定な状況は、フィリピン人、アメリカ人双方に心理的悪影響を与え、1898年8月24日には、カビテでアメリカ兵がフィリピン兵に殺されるという事件も起きてしまった〔Taylor 1971: Vol. III 321〕¹³⁵。

その後も革命家たちの意見は、固まらないままに推移し、アパシブレは1898年11月13日に、マニラに対して、個人的な意見であると前置きしながらも、完全独立を達成するか、アメリカに服従するかの選択肢が存在しており、もしアメリカに服従せねばならない状況になれば、アメリカからベストな条件を得るために、列強のパワー・バランスを利用すべきだと進言している〔PIR 476・2〕。列強のパワー・バランスと言うのは、換言すれば、アメリカ以外の列強に保護を願い出るということであつた。しかし、翌日の11月14日のアパシブレからアギナルドの手紙では、両国政府間で決めた条件での、アメリカの一時的な保護と独立を願うと書いており〔Taylor 1971: Vol. V 9〕、この時点でも、革命家は理想と現実の間で揺れ動いていた。

アギナルドの政府や革命家たちの姿勢は、この時期以下の4つ、1) 完全独立、2) 保護下での独立、3) 条件付の独立、4) スペイン統治に戻る——の選択肢の中で揺れていた。この中でアギナルドは、ブレイや独立活動家の発する様々な意見と、刻々と変化する現実の狭間で、その方向性を定められず内股膏藥的態度をとることになり、それが香港の活動にも影響を及ぼした。

4-2. ドイツからのアプローチ

1898年3月6日に独清条約を結び、膠州湾に租借地(1898-1919)¹³⁶を作ったドイツは、フィリピンに大きな関心を寄せていた。『オーバーランド・チャイナ・メール』の1898年7月2日号には、6月末にドイツの軍艦がフィリピンの周辺で不審な動きをしているとの

¹³⁴ 分断統治の噂は日本の対フィリピン政策にも影響を与え、この時期の日本は、アメリカがフィリピンを領有することはやぶさかではないが、もし何かあれば日本とイギリスが共同で持ってもかまわないと考えていた。

¹³⁵ アメリカ軍の第4正規騎兵隊 4th Regular Cavalry の騎兵がリボルバーを振り回し、フィリピン人側がアメリカ人1人を射殺、3人を負傷させた。しかし、この時はアメリカ側もフィリピン側も戦争を起こすのは不利益になると考え、穏便に処理した。

¹³⁶ 膠州湾租借地は1914年に日本軍が占領し、1919年にパリ講和会議で日本に譲渡された。しかし、中国の批判を受け、日本は1922年に、この租借地を中国に返還した。

記事が掲載された〔*Overland China Mail*. July 2, 1898〕。フィリピン領内で不審な行動を繰り返しているドイツに関する記事は、シンガポールの『ストレーツ・タイムス』にも、『シンガポール・フリー・プレス Singapore Free Press』にも散見される。ドイツの動きに関しては、在マニラの三増二等領事も小村外務次官宛ての6月20日付け機密第8号の中で、ドイツの動向に触れており、ドイツ軍艦やドイル領事の動向を報告し、ドイツ領事がフランス領事と一緒に総督に会いに行き、市内に中立地を選定するように話していると記し、その内実は秘密なので推し量るしか方法がないと書いている〔外務省外交史料館文書 米西戦争一件 第二巻 410-413〕。6月21日の機密9号では、この日にイギリス領事から、ドイツがスアール Sual¹³⁷をスペインより割譲しようとしており、イギリス側がこれに対して4隻の軍艦を派遣したので、フィリピンにいるイギリスの軍艦は総計6隻になると言われたと報告している。また、この割譲は反乱などで困っているスペイン人を庇護するために要求したものだとし、同報告書で領事は、アメリカがフィリピンを領有するとドイツはその欲望を達することが難しくなるので、ドイツはまず要地を領有してしまおうと考えており、ミンダナオの割譲もスペインに照会していると述べ、ドイツへの警戒感を露にしている〔外務省外交史料館文書 米西戦争一件 第二巻 417-419〕。

1898年7月18日のワイルドマン領事の手紙には、アギナルドがスペインとドイツからアプローチを受けていると手紙で述べてきたことが書かれている〔Taylor 1971: Vol. I 473〕。9月2日の在マニラ日本領事の三増二等領事の報告書機密第22号も、サンディゴが、米西戦争中に「とある国」から援助の申し入れがあったと領事に話したとあり、領事はその国はドイツであろうと推測している〔外務省外交史料館文書 米西戦争一件 第三巻 1055-1062〕。つまりこの時期、ドイツはフィリピン問題で、多方面にアプローチを試みていた訳である。しかし、一部の革命家はドイツに対して否定的な見方をしており、この事実を知ったと思われるロンドンのレヒドールが、香港のバーサに向けて、7月1日に自分達のスタンスは無条件でアメリカ側にあると記した手紙を送った〔PIR 450-3〕。この手紙でレヒドールは、ドイツ人を信じないように警告し、ドイツ人はスペイン人より酷いと書いている。そして、もしアメリカ人になれないのなら、私達はドイツ人になるよりイギリス人になりたいとまで述べて、ドイツ人との交流を拒否した。また、7月28日になると、レヒドールは香港のアゴンシーリョに対し、マッキンレー大統領に打電して、フィリ

¹³⁷ パンガシナン州リンガエン湾内の港町。三増二等領事はパンガシナン州リンガエン湾内にある良港と説明を加えている。

ピンを見捨てないように、アゴンシーリョに無条件で誓ってほしいと書いている〔Taylor 1971: Vol. III 256-257〕。

半年後、エルウェル・スティーヴン・オーティス Elwell Stephen Otis (オーティス) 准将¹³⁸によりフィリピン領有宣言が発せられた 1899 年 1 月 4 日、マニラに住むドイツ領事館の秘書 Secretary の G. ケオク G. Keok が、サンディコ宛に手紙を出している〔PIR 449-1〕。この手紙の内容の要約は以下のようなものである：

私はドイツ帝国領事館の秘書である。1897 年 8 月に政府の命をうけてマニラに来た。私はフィリピンの人々の活動に貢献したい。私は自分のキャリアを捨てる用意がある。フィリピン共和国に提供できるサービスは以下の 4 つである：

1. 外交エージェントとして外国政府に対応する。今のフィリピンの状態では、列強はフィリピン政府と公的には交渉が出来る状態ではないので、中立な国に属する私人のケオクがエージェントになる。
2. フィリピンに住む外国人との交渉を行う。
3. 海外に行った場合、その地の政府と交渉する。
4. 将来、ケオクがフィリピン共和国のベルリン代表のアシスタントとして働き、ドイツ資本やドイツ人労働者、輸出業者、軍事訓練の将校などを呼び入れる。

〔PIR 449-1〕

そして同手紙内でケオクは、自分がフィリピンにとっていかに有益な存在であることを強調している。比米戦争勃発後、アゴンシーリョがドイツと接触するが、それに関しては比米戦争勃発後の項で扱いたい。ケオクのコンタクトがドイツ国家としての戦略なのか、個人的なものであるのかはわからないが、ドイツ人は、革命家を利用してフィリピンに商業的足がかりを作り、大陸に進出しようとしたのではないかと考えられ、フィリピン進出に関しては日本と同じように、軍事ではない「ソフト」路線をとろうとした可能性もある。

4-3. ガリカノ・アパシブレ新体制

米西戦争に関して、米西間の戦後処理はパリで行われる和平会議で決められることになった。革命側はこの会議でフィリピン代表が意見を述べる機会を得たいと考え、アメリカ政府に働きかけを行うことになった。そのような流れの中で、1898 年 8 月 21 日、第 2 代

¹³⁸ オーティス准将は、1898 年 8 月末にメリット准将からフィリピン軍政長官を引き継ぎ、1900 年 5 月まで 2 代目軍政長官としてフィリピンを統治した。

軍政長官になるオーティス准将がマニラに到着した。そして8月30日にはパリでの和平会議に備えて、アメリカ陸軍のメリット¹³⁹とフランシス V. グリーン Francis V. Greene(グリーン) 両准将が、ワシントン D. C. に向かうためにマニラを去った。

アゴンシーリョは1898年8月26日、アギナルドに対し、自分がアメリカに行く為には、アギナルドによって与えられた肩書きと同行者が必要だと主張し、それが認められることを前提にアメリカへ行きの準備を早急に進めたいと書いている [Taylor 1971: Vol. V 2]。同日8月26日付けのアギナルドからマッキンレー大統領への手紙には、アゴンシーリョに交渉と条約締結の全権を与えるので受け入れて欲しいと書かれており [Taylor 1971: Vol. V 79]、アゴンシーリョの全権大使としてのアメリカ行きは、決定的なものになった。

9月1日、一時フィリピンに帰国していたアパシブレ¹⁴⁰が、アゴンシーリョの代わりに香港委員会の代表になるため、香港にやって来た。アギナルドに宛てたアパシブレの9月2日の手紙にはアゴンシーリョとの引継ぎについても書かれ、暗号などに関しても引き継ぎが行われた¹⁴¹ことが書かれている [PIR 431-8]。アパシブレは、アメリカに帰るメリット、グリーン両准将と一緒に船に乗ってマニラから香港へやって来た。この後アゴンシーリョが、同船でこの両准将と一緒にサン・フランシスコに向かった。

前述の2日の手紙でアパシブレは、革命側が香港で両准将と話し合った様子をアギナルド宛ての手紙に記した。手紙には両准将が革命側に対して、アメリカが未占領のビサヤに遠征に行くようにと提案し、同時にパリに代表を送るように助言したと記載されている [PIR 431-8]。アパシブレはこの両准将の発言から、アゴンシーリョがアメリカ議会で代表になる可能性が出てくるか、少なくともフィリピン人の委員会¹⁴²がアメリカ議会で質

¹³⁹ メリット准将は、マニラでのアメリカ軍の勝利の後、半月だけ初代軍政長官に就任した。8月末にフィリピンを後にしたが、メリット准将自身はパリ和平会議には参加していない。パリ和平協議のアメリカ側のメンバーは共和党上院議員ウィリアム・フライ William Frye、『ニュー・ヨーク・トリビューン New York Tribune』のホワイトロウ・リード Whitelaw Reid、民主党上院議員ジョージ・グレイ George Gray、共和党上院議員ダッシュマン・デイビス Dushman Davis、元国務長官のデイなど、である。メリット准将はこの委員たちに対して、フィリピンは軍事的に脆弱な状況にあり、他国の侵入を防げない状態にあることを主張した [Miller 1982: 20]。

¹⁴⁰ 1898年8月13日のマニラ占領の後、アパシブレは自分の故郷に帰りたいたと、フィリピンに戻った。8月23日にバコールにある独立運動側の本部に立ち寄った際、アギナルドは彼が活動から降りることを承知せず、香港の代表になることを要請した。

¹⁴¹ 彼らは重要なやり取りに関しては、タガログ語を基にした数字の暗号への書き換えを行ったり、文章の一部をスペイン語の意味のない単語に置き換えたりして、情報をやり取りしていた。

¹⁴² 香港委員会など、領外で革命家によって設立された委員会。

間を受けることになるのではないかと考えた。独立運動側の全ての希望や運動の基本姿勢は、憶測の中から作られ、アゴンシーリョは先の見えないまま、秘書の S. ロペスと一緒にアメリカへと出発していったのである。

こうやって 1898 年 9 月 2 日、アパシブレがワシントン D. C. へ行くアゴンシーリョの代わりに、香港の代表になった。アパシブレはイシドロ・デ・サントス Isidoro de Santos (デ・サントス)¹⁴³が香港に到着するまで、副委員長には誰も任命せず、C. リチャウコを財政係にした [Alizona 1971: 65]。この後も、一応財政係は C. リチャウコのままだったようだが [PIR 455-4]、その資金管理は複雑であった。

4-4. 香港委員会の武器調達への焦り

1898 年 9 月 10 日、アギナルドは自身の政府をマロロス Malolos に移動させた。15 日にマロロス制憲議会が設立され、パテルノがその議長に就任した。フィリピン側は議会設立などで浮かれていたが、香港委員会は武器調達に関して焦りを感じていた。その裏にはワイルドマン総領事との関係悪化があった。10 月 1 日、パリで和平会議が始まった。香港のアパシブレと見られる人物からアギナルドへの 10 月 4 日の手紙では、フィリピンを取り巻く状況が変化しつつあり、アギナルドが政府の今後の方向性に関して早く決断を下さないと、パリ和平会議が終わった後では中立国にたよることが難しくなり、武器調達が出来なくなる可能性があるとして述べ [PIR 476-9]、和平協定締結が調達活動のリミットになるとの指摘をしている。また同手紙では、中国の状況がどんどん不安定になっていることを挙げ、この中国の内戦を利用出来ないか¹⁴⁴とも述べている。しかし、実際にはこの後、中国の内戦で武器の価格が上昇してしまい、中国の混乱は彼らのメリットにはならなかった。

この後、1898 年 11 月 4 日の手紙でアパシブレは、アメリカと戦う前に、完全な用意をしておかねばならず、一旦戦争が始まるとコミュニケーションも送金も難しくなると書き、アメリカとの戦闘を予感していることを述べた [Taylor Vol. II 492]。また、11 月 16 日のマビニへの手紙でアパシブレは、今はヨーロッパの列強がアメリカを批判しているので、アメリカは列強と対立しない為に、独立とは逆の方向、つまり併合に向かって歩んでいると分析している [PIR 476-2]。彼らの文章は思い込みが激しいものも多く、論理の展開に

¹⁴³ デ・サントスはスペインで医学を学び、1898 年末か 1899 年初頭に香港のアパシブレの下に入った。1899 年香港で医者として開業登録を行っている。

¹⁴⁴ 内戦をどのように利用するのか、具体策は述べていない。

飛躍があり、その行間を埋めるのに非常に苦勞することがあるが、この文章の意味は、列強がアメリカの中国進出を許さない以上、アメリカはアジア進出の足がかりとして、フィリピンを植民地にするしかないだろうと言う意味だと思われる。香港委員会はパリ和平会議の行方と、中国の内戦を視野に入れて、早急に武器調達を行おうとしていた。

4-5. プレスへの働きかけ

4-5-(1). プレスへのアピール

1898年9月14日のアパシブレからアギナルドへの手紙で、フィリピン革命側に関して海外のプレスの記事に間違いや偏見があることを指摘し、それは、プレスが革命側の出来事を間接的に聞いて報道しているからだと分析している〔PIR 458-11〕。同手紙では、それを是正するために、間違いを訂正してプレスに書き送ったり、直接ニュースを発信したりする人間が、1~2名必要なので、人を送ってほしいとアギナルドに要求している。また、10月16日の手紙では、アパシブレはアギナルドに対して、ローマに使節を送る案も浮上していると述べている〔PIR 431-12〕。バチカンに対する陳情は革命側の長年の懸案でもあった¹⁴⁵。

香港委員会が偏見などを直接訂正した例は、10月15日の『オーバーランド・チャイナ・メール』の、革命運動に関する記事の中に見られる。この記事には、香港のアギナルドの代表が編集部を訪ねた様子が書かれている。その記事を要約すると以下になる：

フィリピン人の政府の香港代表はルソンの革命運動側が分裂しているという『チャイナ・メール』の記事について、分裂しているとする部分を否定し、ルソンの反乱側は完全に調和がとれていると主張したが、フィリピン人の政府がどのような政策を求めるかについては語らず、パリ和平協議の結果をみてから決めると答えた〔*Overland China Mail*. Octboer 15, 1898〕。

この記事から推察するとアパシブレが直接編集部を尋ね、新聞記事の内容の訂正を求めたようである。その他にも『オーバーランド・チャイナ・メール』には、革命運動側が行ったと思われる投書や、革命運動への提灯記事が複数見受けられる。

1898年11月16日のアパシブレからマビニへの手紙によると、アパシブレはシャムの

¹⁴⁵ 独立運動側のバチカンへの主張は大きく分けて2つある。1つは当時認められていなかったフィリピン人の聖職者を認めて欲しいというもの。もう1つは、フィリピンの独立を認めて欲しいというものであった。バチカンへの主張は、第3章で述べる。

アメリカ公使を務めていたことがあるジョン・バレット John Barret (バレット)¹⁴⁶の紹介で、アメリカの AP 通信に彼らの状況を送っている。この AP 通信への投稿についてアパシブレは、アメリカの一般市民に、アメリカとフィリピン革命軍が戦争するかもしれないことを認識させ、フィリピン人が屈辱に無感覚でないことを示す狙いがあったと述べている [PIR 476-2]。つまりフィリピン人革命家が戦争も辞さない觉悟しているのだとアメリカ人に警告し、アメリカの反帝国主義者の共感を得ようとしたのである。米西戦争が終わり、フィリピンの運命がアメリカの手に委ねられたことで、革命側は欧米に対して、自分達の主張を積極的に発信してゆくようになった。しかし、その主張は、革命側の行動の正当性や、彼らが自治を持つ正当性など、「正当性」についてのみ行われたが、独立獲得の為の具体的な行動計画などが示されることはなかった。プロパガンダに対して積極的に活動しようとしていた香港委員会ではあったが、香港において彼らの新聞や雑誌が継続的に出版された形跡は見られない。

4-5-(2). ハワード W. ブレイの利用

先に脚注で説明したように、ブレイの経歴は確認出来ていない。したがって、革命運動側が発表したブレイの経歴には、疑問が残る。1898年6月、彼はフィリピン人に関する紹介記事を『シンガポール・フリー・プレス』に書き、この記事は1898年6月18日の『オーバーランド・チャイナ・メール』にも掲載された。その記事でブレイは、フィリピン人は英領インド、セイロン、ビルマ、西インドの人々とは違って啓蒙されており、何世紀かをキリスト教徒として過ごし、ヨーロッパ人に非常に近く、シク教徒やアフリカ人と一緒に考えるのはナンセンスであると書いている [Overland China Mail. June 18, 1898]。プロパガンダでブレイは、フィリピン人がいかにヨーロッパ化されているかをアピールした。

1898年6月30日のブレイからアギナルドへの手紙では、メリット准将のフィリピン到着前に、アギナルドが独立宣言をすべきだとのアドバイスがなされ、独立宣言に至る手順と細かい指示が書かれている [Taylor 1971: Vol. III 287-289]。8月26日のブレイのアギナルドへの手紙では、メリットを抱き込んで、アメリカとの良好な関係を築き、アメリカ保護下での独立を進め、アメリカ人またはヨーロッパ人のアドバイザーをつけるべきだとのアドバイスしている [Taylor 1971: Vol. V 4]。ブレイは9月14日の手紙で、メリット

¹⁴⁶ バレット (1866-1938) は、1894年から1898年まで、在シャム・アメリカ公使であった。

がフィリピンを出発した後、プラット総領事と話し、プラット総領事が我々の考えを支持したと書いている〔Taylor 1971: Vol. V 10〕。しかし、7月28日のプラット総領事から国務省への手紙では、プラット総領事はアギナルドへの関与やフィリピンの将来に関して否定的な発言をしている〔Taylor 1971: Vol. III 257〕。したがって、プラット総領事がそのような発言をしたとは俄かに信じがたい。また11月12日の『オーバーランド・チャイナ・メール』の記事によると、プラット総領事はオーティス将軍に対して、マニラ占領の作戦行動中に病死した人々へのメモリアルを建設するように提案したとある〔*Overland China Mail*. November 12 1898〕。この記事の信憑性は定かではないが、それでもプラット総領事が独立側を支持し続けたと考えるのは難しい。また翌1899年の8月にはフィリピンを扱った著書の中で、プラット総領事が独立運動側を手助けしたと書かれたことに対し、プラット総領事はその著者を相手取って訴訟まで起こしている。1898年12月8日のシンガポール総領事館報告書では、1898年5月末にアギナルドと面会しデューイ提督にアギナルドを紹介したことについて、義務感と国益を守りたい一心で、成り行きで突き動かされたただけだと述べている〔シンガポール・アメリカ総領事館報告 No.321 December 8, 1900〕。

ブレイはこの時期アギナルドに複数の指示を与えている。1898年9月10日には、革命側がルソンのアメリカ未占領地域と、同じく未占領のビサヤ、ミンダナオ、ホロを征服するようにとのアドバイスを出した〔Taylor 1971: Vol. V 7〕。同月23日には、パリの会議が終るまでアメリカに対する防衛の姿勢は崩さず、アメリカの議会の決議が出てから攻撃に転じるべきだと述べ、マニラ占領がフィリピン占領ではないことをアメリカ側に自覚させるべく、『ニュー・ヨーク・ワールド *New York World*』に記事を書いたとも述べている。また、スペインが撤退する前にアメリカがフィリピンの占領を本格的に始めれば、スペイン側はアメリカに協力して独立側と戦うだろうとアギナルドに警告している〔Taylor 1971: Vol. V 10〕。

1899年の1月12日までに、ブレイはシンガポールから香港に活動の場を移した〔Taylor 1971: Vol. V 36〕。彼の役目はイギリス人または白人だということを生かして、欧米のプレスや欧米人と、コネクションを作ることにあつたと思われる。この時期はまだ、彼は無給で活動していた。ブレイがどれ程、革命運動に貢献していたのかは疑問であるが、革命側としては、白人が彼らの活動に賛同しているとプレスに見せることができるという点で、ブレイは第2フェーズ初期には利用価値のある人間だった。シンガポールや香港という国際的な港湾都市で、革命運動側の主張を『シンガポール・フリー・プレス』や『ストレーツ・

タイムズ』など欧米系の新聞に英語で載せると言う点では、イギリス人の彼は役に立った。『シンガポール・フリー・プレス』には何回か彼の署名投稿記事が載っている。白人のブレイが英語で欧米のメディアにアプローチすることは、フィリピン人が直接アプローチするよりも楽で、効果があったことは想像に難くない。しかし 1899 年夏ごろ、彼は突然給料を要求し始める¹⁴⁷。

4-6. 困難な意思疎通

革命側が暗号を採用したのは以下の 2 点、1) ワイルドマンが香港で革命側の手紙を開封しているのではないかと懸念した [PIR 493-6]、2) 8 月半ばの電信再開以降、アメリカ当局が電信に関して検閲を行うようになった——が理由であると思われる。電信の検閲は、プレスや打電記事等にも及んだ。このマニラにおけるアメリカ側の通信に関する検閲や手紙の開封問題が、海底電線復帰以降も革命運動における対外活動の拠点が香港であり続けた大きな理由の 1 つでもあった。1898 年 10 月 4 日、香港からアギナルドへの手紙では、マニラでのアメリカの厳しい検閲の影響なのか、マルコーニ¹⁴⁸を購入しようとしている様子が伺える [PIR 476-9]。また、手紙の受領確認が不明確なアギナルドに対して、受領証を手紙ごとに発行して欲しいという要望も書かれている [PIR 476-9]。その後 10 月 31 日のアパシブレからアギナルドへの手紙では、日本からの報告がヨーロッパには上がっているのに、香港には来ていないという報告もなされた [PIR 431-10]。香港委員会は、フィリピンでのアメリカ当局の通信妨害のみならず、香港でのワイルドマン領事の手紙開封や妨害も非常に警戒していた。

同様に、アギナルドのいるマロロスから情報が降りてこない様子も、革命側の史料からは伺える。政府の考えが明確に伝えられていないのか、10 月 16 日のアパシブレからマビニへの手紙を読むと、新しく制定される憲法¹⁴⁹の下での、アパシブレの処遇や香港委員会の将来に関して、アパシブレの中に多少の混乱が見られる。彼は、法の下でどのように政府が規定されるのかがわからないので、以下の 2 点、1) 香港委員会が大統領直属になる

¹⁴⁷ これに関しては、本章 6-5-(2)で述べる。

¹⁴⁸ ここでのマルコーニは無線電信の機械の名前として使っている。この時期、マニラから香港までの距離を飛ばせる無線機械は存在しなかったが、マルコーニの存在は有名であったため、革命側はこの機械に期待を寄せたと思われる。

¹⁴⁹ 1898 年 9 月 15 日にアギナルドは、同年 6 月 18 日と 23 日に出した政令にしたがって、マロロスに制憲議会を招集した [T. Agoncillo 1990: 205]。その政令に沿って、憲法発布への準備がなされ、1899 年 1 月 21 日に憲法が発布された [T. Agoncillo: 1990 207]。

のか、国務長官に属するのか、2) 新しい組織と新しい長官の外交プランについて——を説明してほしいと述べている [PIR 431-12]。これは香港側とアギナルドとの意思疎通を欠いていた結果と思われる。また、思慮、知識、そして議論が必要とされる話題は、アギナルドではなくマビニに振られているというところに、アパシブレのアギナルドに対する見解が垣間見える。アギナルドに対しての連絡は物理的な面での意思疎通の困難さと、言語・知識などの面での困難さ¹⁵⁰があった。フィリピン人富裕層の1人であったトリニダード・エルメネヒルド・パルド・デ・タベラ Trinidad Hermenegildo Pardo de Tavera (パルド・デ・タベラ)¹⁵¹は1899年8月22日にマニラで行われた第1次フィリピン委員会 Philippine Commission¹⁵²による審問に対して、1年前の1898年8月の米西戦争終了後にマニラで行ったアギナルドとの会見について述べた。以下はその要約である：

1898年8月13日にアメリカがマニラで勝利を収めた後に、パルド・デ・タベラはアギナルドを訪ねた。アギナルドはマニラに入ることを考え¹⁵³、アメリカ人がアギナルドをフィリピン共和国大統領に据えないことを不満に思っていた。彼はスペイン語をたどたどしく話し、タガログ語を好んで話す。アギナルドは外交や政治にも疎い。したがって、これらの問題が話題に上がると、マビニに振ってしまう。マビニは若く純粋なタガログの弁護士で下半身にマヒがある。彼が物事を指示し、全ての発想の源であることは明白であった。マビニはアメリカ人を憎んでいる。

¹⁵⁰ デ・サントスの手紙の中にアギナルドに対し、スペイン語で書いて申し訳ない、何故なら私のタガログ語は大変下手だからだという文面がある。アパシブレもアギナルドがスペイン語を理解するのが難しいため、タガログ語を使った [Alizona 1970: 18]。

¹⁵¹ パルド・デ・タベラ (1857-1925) は、パリで医学を学び、ホセ・リサルも面識があった。1898年9月の制憲議会にも参加したが、10月には辞任し、比米戦争期になるとアメリカ当局に協力した。1900年12月23日には、仲間と、アメリカ併合を支持するフェデラル党を設立した。

¹⁵² 1899年1月20日、マッキンレー大統領が、フィリピン統治を目的とした調査委員会である第1次フィリピン委員会 (1899年3月4日から1900年3月16日) への任命を行った。委員長にはコーネル大学の学長であったヤコブ・グールド・シャーマン Jacob Gould Schurman が任命され、他に軍政長官のオーティス准将や、デューイ准将なども任命された。この第1次フィリピン委員会は委員長の名前をとってシャーマン委員会と呼ばれることもある。本稿では、後のタフトが長を務める第2次フィリピン委員会 (1900年3月16日—1901年7月4日) と区別するために、シャーマン委員会を第1次フィリピン委員会、タフト委員会を第2次フィリピン委員会と呼ぶ。第1次フィリピン委員会の中では、強硬派のオーティス准将と民間人のコミッショナーの間にたびたび意見の対立があったと言われている。

¹⁵³ アメリカ軍は1898年8月13日のマニラのイントラムロスでの勝利後、アギナルドたち革命家及び革命軍が、イントラムロスに入ることを頑なに拒否した。革命側はアメリカ軍に、革命軍のイントラムロス及びマニラ中心への進駐を、繰り返し要求した。

[*Philippine Commission 1900: Vol.II 390-391*]

このパルド・デ・タベラの証言からも、教育をうけた知識人たちにとって、アギナルド本人と意思疎通を図るのは非常に難しかったことがわかる。そして、そこにアメリカ当局による電信の検閲、郵便物の没収などが重なり、海外の活動家とアギナルドとの直接的な意思疎通は非常に難しくなった。

4-7. 香港内での富裕層との対立の顕著化

1898年8月13日にフィリピンにおける米西戦争が事実上終了すると、5月に続いて、香港のフィリピン人富裕層の一部が、アメリカに忠誠宣言を提出した。以下がアメリカ総領事館報告書に記されていた忠誠宣言を出した人々の名前である：

8月19日付けでマリアノ・リムハップ Mariano Limjap

20日付けでフェデリコ・オルテス・イ・ポオラス Federico Ortez y Porras

29日付けでエバリスト・マウリシオ Evaristo Mauricio とティモテオ・パエス Timoteo Paez

[アメリカ総領事館文書 No.69 Augst 20, 1898 No.70 Augst 29, 1898]

この後、コルテス一族とレイナー族がアメリカに行ったことを聞いたアパシブレは、1898年10月23日、アギナルドに手紙を書き、彼らがアメリカで革命側の交渉、つまりアゴンシーリョのワシントン D. C. でのロビー活動を妨害するのではないかと心配した [PIR 486-8]¹⁵⁴。このように8月14日以降、フィリピン領内外でのアメリカ併合派と独立派の対立は根深くなっていった。また、10月25日のマロロスからパリのアゴンシーリョへの手紙でも、フィリピンは2つに分かれており、1つは完全独立を主張し、もう1つは保護下での独立を主張していると述べている。しかし、その一方で、この手紙の後半ではアメリカの富に惹かれた併合派も少ないながらもいるとし、もしフィリピン人が植民地化や併合を望んだら、フィリピン人は自らの手で終焉を呼び込むことになるとの懸念を示している [Taylor 1971: Vol. III 387-392]。

エピストラは、「富裕ではなかったこれらの追放者たちは、彼ら追放者たちと敢えて知り合おうとはしないように見える富裕なフィリピン人とは、付き合っただけではなかったようである These exiles who were not too well off, did not seem to have mingled with these rich Filipinos who did not seem to have gone out of their way to meet the exiles」

¹⁵⁴ この件に関しては、アメリカ（総）領事を扱う章で述べる。

〔Epistla 1996: 98〕と、アギナルドと香港の富裕層との断絶に関して、「富裕ではない not too well off」と「金持ち rich」というように富の差を強調している。また池端は「香港在住の富裕なフィリピン人家族は、亡命指導部の香港到着以前から、積極的なアメリカ依存派であった」〔池端 1989: 14〕と述べている。確かに彼らが香港領事に提出した忠誠宣言〔香港アメリカ総領事館報告 No.42 May 6, 1900〕や、上記アゴンシーリヨの手紙を文字通りにとればそうなるが、先行研究では引用されていない PIR 412 の併合派の手紙を読んでもみると、実際の彼らの心情は積極的とは程遠く、長くフィリピン領外に住み国際情勢を見てきた故の諦めの方が大きかった。序章で述べたフィリピン中心史観やフィリピン革命の国家創造神話創設の弊害として、フィリピン革命の記述では、無意識にこの時代の人々を「愛国者・独立支持者」対「アメリカ併合支持」という二元論で分類することが多い。しかし、愛国者であってもアメリカ併合を支持する場合もある。PIR 412 の手紙は富裕層の 1 人 D. コルテス¹⁵⁵と見られる人物が、仲間のカシミロ Casimiro¹⁵⁶に対して、1898 年 11 月 12 日にその心情を吐露したものである〔PIR 412〕。この手紙からはアメリカや他の西欧列強への憎しみも伺え、アギナルドと距離を置いたのが富の差ではないことがわかる。D. コルテスは富裕層ゆえに、細かい個人的利益にとらわれることなく状況を分析できた。この手紙を要約すると以下になる：

文明国というのは少数意見を大切にしている。民主主義とはそういうものである。しかし、革命によってフィリピンは思想の自由を得た後なのにもかかわらず、併合という意見を述べた私に圧力が来る。私はフィリピン 1 国の利益だけではなく、全ての利益になると考えるから併合という意見を出したのである。我々のような国が独立を保持するのは不可能だ。豊かな我が国は列強を惹きつけてしまう。このことは、ドイツがフィリピンの一部を欲しがっていることでもわかるだろう。ドイツがスービック基地に向かった時、それを防いだのはデューイが差し向けた 2 隻の船だった¹⁵⁷。平地

¹⁵⁵ 史料にはコルテスとしか記載はないが、息子ではなく父の D. コルテスを書いたと思われる。

¹⁵⁶ このカシミロは特定することは難しいが、独立運動の第 1 フェーズから活動を行っており、1897 年 2 月 1 日の神奈川県知事による秘甲第 32 号内で報告された、ラモスと一緒に横浜に住んでいたことがある J. カシミロ Casimiro〔外務省外交史料館文書 米西戦争一件 雑 第一巻 馬尼刺人ニ関スル報告 307〕ではないかと思われる。

¹⁵⁷ 1898 年 7 月最初、ドイツの巡洋艦「イレーネ」がスービック Subic 近くでアギナルド側の船に対し、スービックから撤退するように命令をした。それを不満としたアギナルド側はアメリカ海軍にこれを報告し、アメリカの軍艦 2 隻がスービックへ急行し「イレーネ」を追い払った事件。

においては、我々が勝つ可能性はない。勝つためには、山に行ってゲリラ戦を行うしかない。

しかしどんな抵抗も無意味である。ヨーロッパも結果的にはアメリカに味方をするだろう。武器無しでアメリカに盾突いても無駄だ。これは自殺行為で、国を破壊に追いやるだけだ。私は市民として国の繁栄を望むから、独立から併合へ意見を変えるのだ。アメリカはスペインを倒し、フィリピン諸島を占領する。それは人道的見地からではない。人道的見地など幻想に過ぎず、アメリカは本来の目的を隠し持っているのだ。他にも自らが独立を望まなかった例がある。それはハワイである。イギリス・ドイツ・日本がハワイに興味を持った。ハワイの人々はこの侵略に際し、自ら望んでアメリカの保護下に入った。独立を考え続けるフィリピン人たちは熱情にうなされていくに過ぎない。私はこの増大した熱情を怖れている。それは人々を武力闘争へと駆り立てるものだからだ。

革命の第1フェーズでは、マニラからスペインを追い出すことは出来なかった。第2フェーズでスペインを追い出せたのは船を持ち、武器弾薬を持ったアメリカがいたからである。スペインを追い出すことが出来なかったから、第1フェーズでアギナルドたちは、ビアク・ナ・バト協定にサインしたのではなかったのか。現在、フィリピン人の国家は地方で存在しているにしか過ぎず、マニラはアメリカが占領している。アメリカは我々の国を認めてくれない。アゴンシーリョが何度要請を行っても、マッキンレー政権は、フィリピン人との話し合いを受け入れない¹⁵⁸。アメリカはマニラから反逆者たちを追い出そうとしている。アメリカは殺人兵器を持っている。その威力はスペインの比ではなく、多くの血が流れるだろう。このような国に勝利することは不可能だ。革命派が主張する保護について、私はこれに反対する。この保護は自由に反したもので、人々を奴隷にするものだ。保護の下に入るとは植民地化するということである。自由主義の論理があっても、自治の論理があっても、保護者が都合が悪いと判断すれば、それが行われることはない。全てが保護者次第で、全てが保護者のものになるのである。オーストラリア・カナダ・カンボジア・シャム・マダガスカルではイギリスやフランスを批判しているが、イギリスは原住民に統治させるのは早いと弁解している。

¹⁵⁸ これはアゴンシーリョがワシントン D.C.でロビー活動をしていることを示していると思われる。

フィリピンは、多くの州をまとめている国家の下に入るのが得策であろう。ハワイのように自分の意志で「州 estado」¹⁵⁹になると、自分の政府が持てる。同様に、強国の下に入って発展した例として、サン・フランシスコが挙げられる。メキシコから離脱して 50 年がたち、羨ましいくらいに発展している。これらが私の意見を変えた理由だ。これはあくまでも私個人の意見である。ロシア・フランス・ドイツなどがフィリピンを狙っている。イギリスは商船航路の近くにあるフィリピンをアメリカに領有して欲しいと思っている。イギリスは陸海軍を増強し、アメリカと一緒に上記 3 国と戦おうと考えている。[PIR 412]

このように併合派と呼ばれた人々は、彼らの心の中にあるネーションを土台としたナショナリズムを捨てたわけではなかった。彼らは、フィリピンの地とフィリピン人の安寧のために、仕方なく「州」となることを選択したのである。この行動には 1898 年 8 月 12 日の、アメリカのハワイ編入の心理的影響もあったと思われる。しかし結果的には彼らの「州」（フィリピン）は、アメリカから「州」としては認めてもらえなかった¹⁶⁰。

4-8. フェリペ・アゴンシーリョのロビー活動

1898 年 10 月に入るとパリで和平協議が始まった。10 月 1 日にアゴンシーリョは、個人の資格でマッキンレー大統領に面会した。3 日に、アゴンシーリョはマッキンレー大統領に向けてメモランダムを書いた。そのメモランダムには、1) フィリピン軍の再編はアメリカの合意に基づいて行われたこと、2) アメリカとスペインは 2 国だけで和平交渉を行い、フィリピン人を無視していること、3) フィリピン人の政府はフィリピン人の支持を受けて成立していること、4) フィリピン人は全員一致で独立を望む——などが、記されてあった。10 月 16 日のアパシブレからアギナルドへの手紙 [PIR 431-12] では、10

¹⁵⁹ 原語の estado は英語に訳すと state である。これが書かれたと思われる 1898 年秋の時点ではハワイは州ではない（ハワイは当時、準州であり 1959 年に州となった）が、フィリピンがアメリカの 1 州となることを望んだコルテスの意を汲んで「州」と訳す。

¹⁶⁰ 中野によれば、1900 年にハワイは、「将来の州への昇格を前提とする「編入領土」すなわち「合衆国」の「本土」と位置づける原案が合衆国議会を通過して、四月三〇日に大統領が署名・成立した。同法は、白人およびネイティブ・ハワイアンが大半を占めるハワイ共和国市民の全員に合衆国権を一括して付与した」[中野 2007: 90-91] が、フィリピンは「一貫して「非編入領土」とされ、フィリピン市民の法的地位も「合衆国人」のまま据え置かれた」[中野 2007: 100]。つまりフィリピン人は「市民権のない合衆国人 the non-citizen U.S. nationals」[中野 2007: 99] として扱われたのである。このように、アメリカ政府のハワイとフィリピンの扱いには、大きな差があった（しかしハワイの中でも東洋系移民に関しては市民権が得られなかったことは、ここで明示しておきたい）。

月 8 日にアゴンシーリョから連絡があり、マッキンレー大統領との会談の感触は良かったとの報告があったと書かれている。

ワシントン D. C. に滞在中、アゴンシーリョは、議員、教会関係者、反拡張主義者にロビー活動を行った。その活動の中で、フィリピンと同じような立場にあるキューバ政府使節団とも交流を持った。このことは、ワシントン D. C. のキューバ使節団から、ポンセへの手紙 [PIR 390-6] に書かれている。この手紙では、アゴンシーリョがワシントン D. C. からヨーロッパへ行く前夜、キューバ政府使節団が 2 時間の会談を持ったことが記されており、使節団は微力ながらフィリピン側の活動を手伝うので、お互いの活動を確実なものにせねばならないと決意を述べたと書かれている。ただ、この後、キューバについてアゴンシーリョが言及した手紙は 1899 年 6 月 8 日のもの [PIR 477-3] しか見つけておらず、アゴンシーリョとキューバ側がどこまで連帯して活動を行ったかは不明である。この後アゴンシーリョは和平協議の行われるパリへ異動し、協議参加者に対して直接、働きかけを行ったが、良い結果は得られなかった。1898 年 11 月 18 日、アゴンシーリョはアパシブレへの手紙で、もしアメリカがこの国を所有したら、独立は与えられず、彼らは多くの兵を我々の国に送るだろうと警告を發し、自分はロンドンへ武器調達のために向かい、その後、ロンドンを経由してワシントン D. C. に帰ると連絡した。

しかしながら、1898 年 12 月 10 日、アメリカとスペインはパリ和平条約に調印し、スペインはアメリカにフィリピンを 2,000 万ドルで譲渡してしまった。このような中、1899 年 1 月 4 日には、オーティスがフィリピンの領有宣言を行った。革命側はそれに対抗し、1 月 21 日に、フィリピン共和国第 1 次内閣人事を發表、23 日に、共和国を宣言し、ドイツ、イギリス、フランス、アメリカ、オーストリア＝ハンガリー、スイス、ベルギー、スウェーデン、ノルウェイ、オランダ、ロシア、デンマーク、ポルトガル、イタリア、日本、ボリビア、メキシコ、ウルグアイの各領事と、オーティス、リベリアの領事に宣言書を送付した [Taylor 1971: Vol. III 451]。

アゴンシーリョは、ワシントン D. C. でアメリカ上院がパリ和平条約を批准しないようにロビー活動をしていた。1899 年 1 月 24 日には國務長官に手紙を書き、なぜアメリカは米西戦争の際の戦友に牙をむくのか、フィリピンには社会秩序ときちんとした政府があるのではないかと訴えている [Taylor 1971: Vol. V 41-43]。しかし一方で、香港のアパシブレに対しては、不測の事態に備えて、武器調達を早く行うように促していた [Taylor 1971: Vol. V 46]。

5. 比米戦争勃発後（1899年2月5日—）

比米戦争が始まってからの、先行研究における香港委員会及び領外活動の記述はかなり少ない。それは一重にテイラーの5巻本の中に存在する史料が少ないからである。PIRを調べてみると多少ではあるが、比米戦争が始まってからの史料も見つかる。多くは日本との関係のものであるが、それは第2章で検証するとして、ここではPIRと他の史料を合わせて、領外活動の中心となった香港を軸として、検証を続けていきたい（巻末 人物相関図2）。

5-1. ドイツとの接触

1899年2月4日、比米戦争が始まった¹⁶¹。そして2月6日にはアメリカ上院がパリ和平条約を批准した。その後2月28日、香港のデ・サントスからマビニへの手紙では、アメリカ政府がアゴンシーリョを敵対視しているため、アゴンシーリョはワシントン D. C. に留まるのはかなり危険だと悟って、モントリオールへ脱出したと書いてある〔PIR 479-5〕¹⁶²。人種差別が激しいアメリカで、メディアなどによって顔が知れ渡っているアゴンシーリョが、戦争相手国の首都ワシントン D. C. にいるのは大変危険であったことは容易に推測できる。しかも同手紙には、アゴンシーリョはワシントン D. C. でロビー活動をしたことが裏目に出て、アメリカ人からスパイと裏切り者の汚名を着せられ、それ相応の対応をされそうになった¹⁶³とも書かれており、モントリオールへ逃げるのは必然の帰結であった。その後、アゴンシーリョは、船が難破したためロンドンに一時滞在し〔PIR 493-12〕、その後パリに落ち着いた。船が難破した際、アゴンシーリョは旅行荷物と書類を失った〔PIR 523-3〕。以後アゴンシーリョはパリに居を構えて活動するようになった。

パリに落ち着くとアゴンシーリョはドイツと接触を始めた。アゴンシーリョは、1899年6月8日にアギナルドに手紙を書いた。以下がその要約である：

¹⁶¹ T. アゴンシーリョによると、2月4日の夜、アメリカ兵1人と、他2人がパトロール中に、サン・フアン San Juan の村でフィリピン兵がいないかどうか確かめ入ってきたところ、フィリピン兵に出くわして、銃撃戦が起きた。この出来事に関して、このアメリカ兵はフィリピン兵が最初に撃ってきたと証言した〔T. Agoncillo 1990: 217〕。アメリカ兵が先に撃ったのか、フィリピン兵が先なのかという論争は前からあったが、現在では場所についても諸説あり、戦争の発端は不明である。

¹⁶² 戦闘勃発後、アゴンシーリョがワシントン D. C. から逃げたのは、反乱側が戦闘を起こすと知っていたからだとの説を唱える人もいた。

¹⁶³ 具体的にどのようなことがあったのかは、書かれていない。

1899年4月に、フェルディナンド・ブルメントリット **Ferdinand Blumentritt** (ブルメントリット)¹⁶⁴が、アゴンシーリョに対して、ベルリンにいるエージェントがドイツ皇帝との会見を仲介してくれると述べた。そこで同月、アゴンシーリョはルナ¹⁶⁵をブルメントリットのいる町ライトメリッツに送り、J. ルナはそのベルリンのエージェントと話をした。しかしエージェントは病気だったので、J. ルナはひとまずアゴンシーリョのところに帰ってきた。24日¹⁶⁶の朝、今度はアゴンシーリョが現地へ行き、件のエージェントに会った。このエージェントは公的機関で働いており、戦争を終結させる為に、アメリカとの間をドイツ皇帝が仲介することを提案した。そして、アゴンシーリョに、アメリカに対して譲歩出来るか否かを尋ねた。それに対し、アゴンシーリョは仲裁の基本はアメリカがフィリピンの独立を認めることだと答え、もし、皇帝がこれを達成できたら、革命運動側はドイツに、フィリピンとの通商条約を結ぶ権利を与えると述べた。

このエージェントとの会談の後、アゴンシーリョはベルリンの植民地統括者 **Director de las Colonias en Berlin**¹⁶⁷や、新聞社のディレクターのヘラルド **Heraldo** という人物と会合を持った。この会合で、ベルリンの植民地統括者は、もし比米戦争が6ヵ月続けば、アメリカ政府はフィリピンの独立を認めざるをえなくなり、マッキンレー大統領は拡張政策を維持できなくなると述べたが、彼らは公には協力出来ないと述べた。しかしアゴンシーリョは、ドイツはたとえアメリカと戦争になったとしても、彼らの独立を承認する意図があると考え、ベルリンのエージェントと合意すれば、ロシアに行く可能性もあると考えた。そしてヨーロッパで彼らの意見を広めたいと、オーストリアのプレスに彼らの独立運動への大義 **Causa**¹⁶⁸への興味を持ってもらう目的で、100ドルとアギナルドの名前で贈り物を渡した。[PIR 477-3]

¹⁶⁴ ブルメントリットは、オーストリア＝ハンガリー帝国のライトメリッツ **Leitmeritz** の教師でリサールとも親交があり、フィリピン革命を支持した人物。

¹⁶⁵ 史料にはルナとしか記載されていない。このルナは革命家で画家の **J. ルナ**だと思われる。

¹⁶⁶ 4月か5月かは不明。

¹⁶⁷ 英語に訳すと **Director of the Colonies in Berlin** だが、ここではこれが誰を示すのかは不明である。ただ、**Colonias** が大文字で複数形であることを考えるとドイツ植民会社の人間だった可能性がある。

¹⁶⁸ 革命家は **Causa** というスペイン語を使った。アメリカはこれを **Cause** と翻訳している。**Causa** はスペイン語では「原因、理由、主義主張、理想、訴訟」などの意味があるが、本稿では「大義」と訳す。

このアゴンシーリョの手紙ではドイツが積極的だったように見受けられるが、アメリカがフィリピンを領有すると決定した後で、このように独立運動側にコンタクトしてきたドイツの真意は判らない。しかし、『フィリピナス・アンテ・エウロパ』によると、アゴンシーリョはウイヘルム II 世に拝謁している〔*Filipinas ante Europa*. N°14 Mayo 10, 1900〕。しかしこの後、ドイツとの関係がどうなったのかは不明である。

5-2. 比米戦争勃発による混乱

アメリカはフィリピン統治のための調査団として、コーネル大学学長のヤコブ・ゲールド・シャーマン Jacob Gould Schurman (シャーマン) を長とした第 1 次フィリピン委員会をフィリピンに送った。1899 年 2 月 13 日、委員会のウースターが横浜に到着した〔Worcester 2010: 6〕。1899 年 2 月 28 日の香港のサントスの手紙によると、第 1 次フィリピン委員会が香港に立ち寄った際に、アパシブレはウースターと会合を持ち、アメリカはフィリピンを植民地化する目的を持っているとの印象を持ったと書いている。3 月 1 日にはそのアパシブレ自身がアギナルドに手紙を送っており、その中でやはりウースターと話した旨が報告され、どの国に援助を頼むのかをはっきりさせねばならないとアギナルドに指示を仰いでいる〔PIR 476-12〕。比米戦争で中立を守った香港は、アメリカ側と革命側が安全に話し合うことができる場所でもあった¹⁶⁹。その後第 1 次フィリピン委員会は、3 月 4 日にマニラに到着した〔Worcester 2010: 6〕。香港のサントスはマビニに対して、第 1 次フィリピン委員会がフィリピンに到着した際に、事態を收拾し戦闘を終わらせることが出来る人間はマビニだと述べ、1 月 23 日にスタートしたフィリピン共和国第 1 次内閣 (マビニ内閣) に対する期待をあらわにした。そして、過去にプラット総領事とデューイ提督が「約束」したことをベースにして¹⁷⁰、独立運動側や彼らの考えをアメリカ側に認め

¹⁶⁹ 1898 年 9 月のアメリカ軍のメリットとアゴンシーリョとの会談の際もそうであったが、香港はアメリカ国内やフィリピン国内と違い、両者が身の危険を感じないで話し合いが出来る場所であった。アメリカ国内ではフィリピン人は人種差別と敵国人ということで身の危険があり、フィリピン領内の場合はアメリカ・ライン内であっても、フィリピン・ライン内であっても、まずは両者がコミッショナーの安全の為に「話し合いの為の話し合い」をして、コミッショナーの安全を確保した上で、本番の話し合いをせねばならないからである。

¹⁷⁰ 「プラット (総領事) がした約束」と「デューイ (提督) がした約束」「アメリカ (合衆国) がした約束」等のフレーズは、独立運動側の人間がいろいろな場面でよく使っているが、実際に独立運動側に明確で統一された定義があったとは思えない。第 2 フェーズ初期の頃から、独立運動側はこのフレーズを、「アメリカの約束＝アメリカによる独立承認」

させるようにしてくれと述べている [PIR 479-5]。

3月13日のアパシブレからマビニへの手紙では、香港で独立運動側の調達に関わってきた契約者¹⁷¹が、非常に恐ろしいからという理由で契約を断ってきたので、アギナルドが下した条件での武器調達は出来なかったとし、とりあえずは銅と紙をフィリピンに送るので、マニラのコマーシャル・ハウスで売って儲けて欲しいと書いている [PIR 493-12]。香港委員会は武器調達以外にも、資金稼ぎのために商品の売買も行っていた。物品調達に関する記述は、紙の輸送について述べたものが多い。たとえば、1899年1月26日の香港のサントスからの手紙には、アギナルドが要求した日本製の高級紙や新聞・雑誌用の紙の発送¹⁷² [PIR 479-8] が書かれていた。紙以外にも販売用と思われる米や石炭をバタンガス港へ送ったこともあった。また、1898年12月には鉄管、小麦粉、塩などもフィリピンに送っている [PIR 476-7]。

1899年3月初めにはネグロスの長老たちがアメリカ側につくことを決議し、4ヵ月後の7月22日には、アメリカの手による初の地方政府がネグロスに設立された。3月20日にはスペイン側もパリ和平協定を批准した。3月31日にはアギナルドの政府があったマロロスがアメリカ軍の手に渡り、アギナルド側はマロロスに火を放って首都を移転させた¹⁷³。マビニからアパシブレへの手紙では、5,000人で防衛しているマロロスを、15,000人から2万人を擁するアメリカ軍が攻撃したのであり、革命側は兵力の拡散と疲弊を防ぐために、自主的にマロロスを放棄したと述べている [Taylor 1971: Vol. IV 206-207]。その後の4月7日の日本陸軍の時澤右一（時澤）砲兵大尉¹⁷⁴の秘報第52号の報告によると、マロロス放棄後のアギナルドはバリワグ Baliwag に移った [外務省外交史料館文書 米西戦争一

というイメージで、使っていた。この約束という言葉は第3章で扱う『フィリピナス・アンテ・エウロパ』でもよく使われていた。

¹⁷¹ 名前が明記されていないので、誰なのかは判らない。

¹⁷² 新聞用紙を1連あたり400ドルで159.5連買い、光沢紙の1級品や4級品の紙は連単位で買い、同時にインクの大壺も142ポンド購入している。

¹⁷³ この部分は、アメリカ側はマロロスが陥落したと述べ、革命側はマロロスに火を放った後に自主的に退去したのだと述べている。

¹⁷⁴ 時澤大尉は1864年群馬生まれ。1889年、第11期士官生徒として陸軍士官学校を卒業。日清戦争時は天佑侠に参加。1896年12月の官報には「免本職補独立野戦砲兵大隊副官」と印刷されているので、1896年の後半には日本に帰国した [官報 第四千四十四號 明治二十九年十二月十九日 土曜日]。1897年砲兵大尉、同年、参謀本部出仕となる。1898年に参謀本部の福島安正（福島）大佐の部下として米西戦争の観戦武官としてフィリピンに行き、その後日本の参謀本部のフィリピン工作にかかわる。1902年、病気のため退役した。福島に関しては2章で詳しく述べる。

件 雑 第二卷 812]。その後アギナルドは共和国の首都をサン・イシドロ **San Isidro** へと移している。

1899年4月24日になるとアギナルドは、サン・イシドロから、アゴンシーリョをヨーロッパ全権大使にする旨の手紙を送った〔Taylor 1971: Vol. IV 210〕。また、同日に、サン・イシドロから香港のアパシブレとサントスの両名に向けて、マロスは防衛的に弱いので「放棄」したとの手紙が送られ、アメリカが我々の主権を飲み込もうとするのであれば戦い続けると戦闘継続の意志を示し、援助国を探す提案を行っている〔Taylor 1971: Vol. IV 211-212〕。戦闘勃発と首都移転、将来への不透明感などが、革命側を混乱に陥れていたが、戦闘継続の意思だけは持ち続けていた。

1899年4月4日には、マニラに到着した第1次フィリピン委員会が近代的な政府を作ると宣言した¹⁷⁵。この後、4月16日には和平をアレンジする目的で、著名なフィリピン人商人と有識者が、革命運動側と調整するための会議¹⁷⁶を開き、会長にはフロレンティノ・トーレス **Florentino Torres** (トーレス) が就任した。また、アメリカのジョン・ミルトン・ヘイ **John Milton Hay** (ヘイ)¹⁷⁷ 国務長官が、第1次フィリピン委員会に対して、フィリピン人に自治を提案するように指示すると、パテルノやブエンカミノなどアギナルドの政府の要人たちは、完全独立を求めるマビニの意見よりも、アメリカと話し合って自治を獲得する方を支持し始めた。この声に抗えなかったアギナルドは5月7日にマビニに新しい内閣案を提出したが、マビニはこれを拒否して辞任し、その後パテルノにより第2次内閣が成立した〔T. Agoncillo 1990: 220〕¹⁷⁸。これにより、アギナルド体制の下には、

¹⁷⁵ シャーマン、オーティス、デューイ、マッカーサーの4名のサインがなされ、1) アメリカの優位性、2) 状況に調和した自由主義的な統治、3) 市民の自由、4) フィリピン人及びフィリピン諸島への搾取の禁止、5) 公正で効果的な市民サービス、6) 妥当な課税、7) 透明で素早い行政、8) インフラの整備 9) 農・産・商業の発達、10) 教育の充実。11) 行政改革——をうたった。

¹⁷⁶ 日本陸軍砲兵大尉時澤の報告書、秘報第62号ではこの会議に触れられており、「土人の重鎮80名」〔外務省外交史料館文書 米西戦争一件 雑 第二卷 833〕。という表現がなされている。このような会議を持たねばならない程、有産階級と完全独立を望む革命家の対立が激しくなっていた。

¹⁷⁷ ヘイ (1833-1905) は、1898年9月にデイから、国務長官の職務を引き継いだ (1898-1905)。

¹⁷⁸ しかし、すでに海外の目はアメリカのフィリピン支配の進行度に向いていた、1899年5月6日の在マニラ・イギリス領事館から第3代ソールズベリー侯爵宛ての報告では、「最近重要なことは起きておらず」、鉄道がサン・フェルナンド **San Fernando** まで開通したことが書かれている〔イギリス国立公文書館文書 FO5/2401〕。世界はアメリカの勝利とフィリピン支配は決定的だろうと考え、フィリピン革命への興味を失っていった。こうし

完全独立を支持する人と、自治さえ得られればよいという意見を持つ人が混在し、内部で対立するようになっていった。

この時期の香港やそのほかの領外組織との手紙のやり取りは、PIRにはほとんど存在していない。したがって、香港委員会がこの内閣再編に関してどのような対応をしたのかはわからない。しかし、1899年5月31日、アパシブレはサンディコに向けて、永遠の日和見主義者のフィリピン人たちの方が、アメリカの大砲よりも恐ろしく、内部分裂は我々の大義に損害を与えるのではないかと危惧している〔PIR 493-10〕ところを見ると、アパシブレはパテルノの内閣を、もろ手を挙げて支持している訳ではなかったようである。また、横浜のポンセは1899年6月15日付けで、パリに住む彼の友人アントニオ・ベルヘル・デ・ディオス Antonio Vergel de Dios (ベルヘル) に向け、自治ではなくて、独立でなければならぬと書いている〔Ponce 1932: 357〕。アゴンシーリョも7月29日の手紙の中でパテルノの内閣の方向性が違ってきていることを批判している〔PIR 450-10〕。ポンセは、1899年秋から1900年2月にかけて香港に一時戻っていた際に、在外革命家や孫逸仙¹⁷⁹、日本の支援者らに手紙を送り、組織の引き締め、愛国心、独立運動の続行などを、訴えている〔Ponce 1932: 404-468〕。したがって、この時点でも、多くの在外革命家が完全独立を願っていた。

しかしこの後も香港委員会のメンバーや在外革命家たちが、第2次内閣で外務長官となったブエンカミノと連絡をとり続けており、彼らは異議はありつつも、第2次内閣をサポートしていた。完全独立か、それともアメリカが提案する自治のみを受け入れるのかという2つの意見が渦巻く中で、6月5日、完全独立を掲げてアメリカと戦ってきたアントニオ・ルナ Antonio Luna¹⁸⁰ (A. ルナ) がアギナルドの側近によって殺害される事件が起きた。

1899年8月にはマニラで、現住民に対して警察官の募集なども始まり、アメリカによる植民地行政機構の土台が、着々と築かれていった。8月20日にアメリカ当局は、スールー王国のスルタンと和平協定(ベイツ協定 the Bates Treaty)¹⁸¹も締結した。フィリピン

て、フィリピン人革命家の関心と世界の関心は、徐々に乖離していった。

¹⁷⁹ 孫逸仙は孫文 / 孫中山である。ポンセは孫宛ての手紙は、当時孫が名乗っていた孫中山ではなく、「Sun Yat Sen」(原文通り)宛てで書いていた〔Ponce 1932: 464〕。

¹⁸⁰ A. ルナは、先に述べたJ. ルナの弟で、1898年6月にアギナルドの革命軍に参加した。A. ルナは、フィリピン人に人気のある革命家であったが、1899年6月、アギナルドの側近によって殺害されてしまう。

¹⁸¹ スールー王国のスルタンとその下に位置するダトゥー(族長)がアメリカの主権を認

国内のニュースは、香港の新聞でも逐次掲載されており、香港委員会はフィリピン情勢をフィリピン領内の仲間からだけでなく、新聞からも知ることが出来た¹⁸²。特に戦闘状況に関しては、アメリカ軍に従軍した欧米の記者が新聞内で戦闘の内容を報告している。

5-3. 武器・弾薬・資金の欠乏

1899年5月の第二次共和国内閣で外務大臣に就任したブエンカミノは、5月27日にアゴンシーリョ、アパシブレ、ポンセの3人に手紙を送っている。その手紙の中で彼は、アギナルドが共和国の大統領として超人的体力で神聖なミッションを現実化してくれると信じており、人員と装備はアメリカより少ないが、勇気とヒロイズムで頑張っていくのだと、強気な発言をしている。しかしその一方で、フィリピン側は少ない資源で戦っており現在は野砲と弾薬しかないので、できるだけ早く武器を送るようにと彼らに要求している〔PIR 485-9〕。ブエンカミノは同手紙内で武器調達要求を再度繰り返しており、フィリピン側での武器・弾薬の調達要求は、かなり切実だったようである¹⁸³。また同手紙には、アメリカ軍によって、アギナルドの政府とルソンの南側とが分断されてしまい、連絡が困難な状態にあることも述べており、マニラに協議会 *Commission* を置き、アメリカと話し合いをして戦闘を中断しようと計画している旨が記されている。ブエンカミノは、アメリカから自治を得ることを考えている穏健派の第2次内閣に所属しながら、一方では香港側に武器調達要求をしていた。ブエンカミノはアメリカの自治提案に希望を託しながらも、戦闘継続の可能性も捨てきれずにいた。

しかし、1899年4月になるとマニラでは、イラストラードスがアメリカ当局に対して証言を始めた：

4月14日：カエタノ・S. アレリャノ Cayetano S. Arellano (アレリャノ)〔*Philippine Commission* 1900: Vol.II 19-27〕

めるかわりに、彼らには毎月いくらかのお金がアメリカから支払われることを了承した協定。

¹⁸² 1899年夏ごろのマニラは、アメリカ当局の報道検閲が厳しく、マニラのプレスはアメリカ当局に検閲を緩めるように申し入れていた。フィリピンにいた外国人記者は、検閲にかかりそうな記事は、汽船を使って香港かシンガポールに送り、フィリピン領外で打電していた。したがって香港にいた方が、フィリピンのニュースを得られた場合があった。

¹⁸³ 1899年7月、前線では武器は足りていなかった様子で、サン・ミゲール *San Miguel* という場所から、革命軍のフランシスコ M. ソリマン *Francisco M. Soliman* 旅団司令へ7月4日に送った手紙では、旅団を維持するためには、ライフルも弾も足りないと述べている〔PIR 575-4〕。

4月18日：エンリケ・ロペス Enrique Lopez (E. ロペス) [*Philippine Commission* 1900: Vol.II 50-54]

4月21日：アウレリオ・トレンティノ Aurelio Tolentino (トレンティノ) とパルド・デ・タベラ [*Philippine Commission* 1900: Vol.II 60-67]

4月27日：フェリペ・ゴンサレス・カルデロン(カルデロン) Felipe Gonzales Calderon [*Philippine Commission* 1900: Vol.II 67-70]

この時点ではまだ、穏健派とは言え、パテルノやブエンカミノはアギナルドの側の人間として、完全独立要求の立場をとっていた。その中でフィリピン共和国は1899年6月6日にタルラック Tarlac を首都にすると宣言した。

1899年6月8日、パリのアゴンシーリョは武器調達に関し、彼にオファーをくれたコマーシャル・ハウスが4つあると述べ¹⁸⁴、モーゼル用3,000万カートリッジとレミントンの薬莖3,000万を155,954¹⁸⁵でオファーされていると書いている。その上でアゴンシーリョは、今のところ革命側には資金が無いので、まずはスペイン人捕虜解放と交換にお金を得てはどうだろうかと提案している [PIR 477-3]。この時すでにアゴンシーリョ¹⁸⁶は、捕虜交換に関して、パリのスペイン大使館の軍事アタシェに接触し、2回分の大きな調達が出来るだけの金額を提案していた。スペイン人捕虜は革命側の交渉における切り札であり、資金源になりうる存在であった。7月27日のドイツ、イギリス、フランス、オーストリア＝ハンガリー、スイス、ベルギー、スウェーデン、ノルウェイ、オランダ、ロシア、デンマーク、ポルトガル、イタリア、日本、ウルグアイ、スペイン宛ての革命側からの通達では、革命側には7,000人のスペイン人捕虜がおり、革命側はこれらの捕虜を人道的に扱い、捕虜の釈放に関してはアメリカの指図を受けないと述べている [Taylor 1971: Vol. IV 236-243] [PIR 633]。

しかし、革命側の資金不足は切実で、1899年7月27日のブエンカミノからアゴンシーリョへの手紙では資金調達のために、国債を売りさばいてほしいと書かれている [Taylor 1971: Vol. IV 234]。9月5日のアパシブレからアギナルドへの手紙では、マドリッド委員

184 パリを拠点にしているアゴンシーリョの発言なので、ヨーロッパ内でエージェントを見つけたのではないかと推測される。

185 単位は書いていないが多分ドル(銀)であろう。

186 この間、アゴンシーリョは、キューバの革命家との連絡も細々と続けていたらしく、キューバ革命のチーフのメストレアンブレ Mestre-Amble がキューバ人は翌月(1899年7月)に蜂起すると、密かに通達したとも書いている [PIR 477-3]。しかし、キューバの革命家とは深く連帯している様子は見当たらなかった。

会には資金が無い旨が書かれ〔PIR 455-5〕、その理由として手紙には、メンバーは郊外に行ってしまうと、彼らのファミリーが資金を送れないからと書かれている¹⁸⁷。アゴンシーリョも、スペインの小隊をフィリピン軍に入れるアイデアをアギナルド側に提案したが、9月12日のブエンカミノからアパシブレへの手紙では、現時点では資金不足でこの計画を行うことは不可能だと回答している〔Taylor 1971: Vol. IV 282-292〕。このような中10月25日、マドリッドでは、第3章で取り上げる革命新聞の『フィリピナス・アンテ・エウロパ』が創刊された（巻末 人物関連図3）。

1899年10月30日のタルラックのブエンカミノから、香港の革命家リエゴ・デ・ディオスへの手紙では、9月6日のアパシブレの手紙以降、何の手紙も受け取っていないがどうなっているのかとのクレームが述べられている〔PIR 442-6〕。ブエンカミノは軍事作戦の見通しは明るくなってきており、革命軍を倒すのにアメリカは20万の兵が必要だろうと述べ、武器弾薬を送ってほしいと頼んでいる。そして、アギナルドの政府はパンガシナンの山岳地域に政府を移そうとしており、戦力不足ゆえに本格的なゲリラ戦に移行せざるを得ない旨の記述を残している。もともと、スペインとの武力闘争が始まる以前から、フィリピン人は反乱を起こした際に自分達が劣勢になると、自分の居住地である平地から山に逃れて隠れる傾向があった。このことを考えると、彼らにとっては、ゲリラ戦は特別なことではなく、通常戦の延長上にあり、近代軍事学における「正規戦の補助としてのゲリラ戦」の感覚とは違うものがあつた¹⁸⁸。また、同手紙では、武器の供給が改善されていないことを述べ、アメリカのヘイ国務長官が、アメリカ軍の武器の性能の良さをフィリピン人は恐れている、と発言したことに言及している。ブエンカミノは香港側に対し、武器・弾薬の調達をして欲しいと要求し、プロパガンダと武器調達と言う、香港のミッションの最大の目的2つが達成されていないことを非難した。武器の不足と資金不足は密接に関係していた。結局5月末から10月末まで、ブエンカミノは一貫して香港側に武器調達を要求していたことになる。しかし1899年11月、ブエンカミノはアメリカ当局に逮捕されてしまった¹⁸⁹。

5-4. 単発的なプレスへのアピール

¹⁸⁷ 全く意味不明の理由なので、資金不足の言い訳ではないかと思われる。

¹⁸⁸ したがって、『フィリピナス・アンテ・エウロパ』は、ゲリラ戦における近代化を主張していた。ゲリラ戦は第3章で扱う。

¹⁸⁹ ブエンカミノは、1900年4月15日に釈放された〔Taylor 1971: Vol. II 307〕

1899年5月6日付け『オーバーランド・チャイナ・メール』では、ブレイが『シンガポール・フリー・プレス』に寄稿したアギナルドについての記事を掲載し、アギナルドがどんなにすばらしい人物かを紹介している。また、同紙では、ロンドンのアドバイザーと称する人物の4月12日付けの書簡のコピーも載せている。そのコピーは、アメリカの委員会の宣言¹⁹⁰は偽善が充満していると批判し、パリ和平条約によって、スペインがフィリピンの主権をアメリカに売ったことに関し、その売買の合法性を否定¹⁹¹している〔*Overland China Mail*. May 6, 1899〕。

1899年7月29日のアゴンシーリョからアパシブレへの手紙では、事の詳細は知らないとしながらも、帝国主義者が、A. ルナ殺害事件の件を例に挙げて、フィリピン人は近代化しておらず、自治政府を作る能力が無く、親の代からの異端者¹⁹²であると断言するのではないかとの懸念を述べている〔PIR 451-9〕。アゴンシーリョがこのようなことを心配したのは、A. ルナの死がフィリピン領外のメディアで、面白半分に取り上げられたからである¹⁹³。アゴンシーリョは、彼らに対抗する勢力やアメリカが、革命軍の名将 A. ルナをアギナルドの部下が殺したと言うセンセーショナルな事件を利用して、革命内部で仲間割れを起こし殺人まで犯してしまうような、または部下の人気や能力に嫉妬してその部下を殺してしまうような野蛮なイメージを、独立運動側に与え、それを世間に広めることを怖れた。近代化され野蛮ではないフィリピン政府の「実態」が周知されないことへの焦りが、アゴンシーリョにはあった。

アゴンシーリョは、国際法の利用の重要性を強調しており、国際法をどのように使うかで、フィリピンが植民地になるのか、独立国になるのかを決めてしまうことになるとして、国際法を学び自分たちに有利に利用しないと、国際社会で独立を手に入れることは難しいと領内革命家にアドバイスした〔PIR 450-10〕。そして、独立運動側の主張を広めるためにもアギナルドに新聞を発行して欲しいと要求した。しかし、この時期に新聞を発行して何処でそれを配るのかなどの細かいプランは記されていない。1899年7月の時点ではフィリピン領内で革命新聞『ラ・インディペンデンシア *La Independencia*』が発行されて

¹⁹⁰ 4月4日に第1次フィリピン委員会が行った宣言だと思われる。

¹⁹¹ 合法性の否定に関しては第3章で述べる。

¹⁹² アゴンシーリョは敬虔なキリスト教徒であるため、宗教的に「異端」であることを非常に嫌悪したと思われる。

¹⁹³ A. ルナの死は『オーバーランド・チャイナ・メール』の6月17日号、6月24日号などにも載っている〔*Overland China Mail*. June 17, 1899〕〔*Overland China Mail*. June 24, 1899〕。

いたが、アゴンシーリョはそれでは満足しなかったようである。

『オーバーランド・チャイナ・メール』の1899年4月28日号には、香港4月26日付けで探求者 *Inquirer* という人物が、編集者宛に香港委員会の名前で、革命に関して記事にする際には、事前に委員会の人間と会って内容を確認してから記事にして欲しいと主張している記事が掲載されている〔*Overland China Mail*. April 28, 1899〕。これは、噂ばかりが先行し、憶測で香港委員会に関する記事が書かれることへの、香港独立運動側の不快感の現れだと思われる。比米戦争が始まった後は、ワイルドマン総領事からの迫害やネガティブ・キャンペーンもあり、香港委員会は人々の好奇の対象にはなったが、実態は世間から理解されないままになった。

1899年10月4日にアパシブレはニューヨークの『アウトルック *Outlook*』1899年12月号のインタビューを受けている。アウトルック側は、アパシブレにインタビューした理由を、マニラで独立運動側の当事者にインタビューするのは難しいので、その代わりに香港にいるフィリピン委員会 *Filipino Committee*¹⁹⁴の代表アパシブレに聞くことにしたと述べている。このインタビューの中でアパシブレは、主に今まで彼らが述べてきた以下の4点、1) 米西戦争前にアメリカとフィリピン人には信用ベースでの独立の約束がなされていた、2) アメリカは侵略者である、3) フィリピン諸島に住む全員がフィリピン政府 *Filipino Government* を認め独立を熱望している、4) フィリピン人は極東で一番啓蒙された国民である——を繰り返し述べている。また、アギナルドが戦死した場合にはどうするのかという質問に対しては、能力のあるフィリピン人が戦闘を引き継ぎ、闘争を続けると答えている。しかし、フィリピン人がどんな条件なら武器を置くのかという問題については、フィリピン政府 *The Philippine Government* なら答えられるが、彼には答えられないとして回答を避けている〔*Outlook* December 1898〕。ここでは将来に対する具体的なビジョンや、彼らの作る理想の政府のアウトラインが示されることはなく、ただ単に独立あるのみということが述べられている。

1899年10月25日にはマドリッドで革命新聞『フィリピナス・アンテ・エウロパ』が創刊される。この新聞ではアパシブレのことをフィリピン共和国香港代表、そしてポンセをフィリピン共和国日本代表と表記している。マドリッドでの定期刊行物の発行は第3章で述べる。

¹⁹⁴ 香港委員会の意味。

5-5. 内部対立の先鋭化

5-5-(1). フェリペ・アゴンシーリョが発火点となる対立の再燃と影響

この時期に起きた在外革命家たちの対立や暴走は、香港の人事にも影響を及ぼした。1899年2月28日の手紙で香港のアパシブレは、サンディコに関して、デ・サントスですらサンディコをコントロール出来なくなっているようだと判断している〔PIR 479-5〕。また、ロンドンのペドロ・パブロ・ラモス **Pedro Pablo Ramos** からアギナルドへの4月23日の手紙では、マビニとアパシブレが裏切り者と通じているので厳しく監視する必要がある、S. ロペスをロンドンから遠ざけると述べている〔PIR 450-6〕。このように比米戦争勃発後は、組織内にあった不満が醸造され、亀裂が少しずつ広がっていった。マビニが内閣から去った翌日の5月8日になると、フィリピン側のブエンカミノから、パリのアゴンシーリョ、香港のアパシブレ、横浜のポンセに宛てて、マビニと他の人たちの間に考え方の違いがあることや、オーティス准将やアメリカとの政治交渉ルートがなくなったことが述べられた手紙が送られた〔Taylor 1971: Vol. IV 216〕。

1899年6月には、アメリカ国内でプロパガンダ活動やロビー活動を再開する為に、人をアメリカに送るか否かの問題が持ち上がり、ロンドンのレヒドールは、S. ロペスを送りたいと主張し、アゴンシーリョは、戦争をしているアメリカに人を送るべきではないと主張した。アゴンシーリョは比米戦争勃発後、ワシントン D. C. から逃げ、途中で海難事故に遭遇し九死に一生を得た経験があり、アメリカに人を送る意見には慎重であった。6月8日のアゴンシーリョからアギナルドの手紙では、レヒドールがアゴンシーリョを非難する電文を香港に送ったと訴え、アギナルドに対して、レヒドールにはアドバイスを与えずに無視して欲しいと述べている〔PIR 477-3〕。それに対して、6月22日には、S. ロペス本人が、アメリカとの独立交渉をやらせて欲しいとアギナルドに直訴している〔PIR 405-2〕。このようにアメリカでのプロパガンダ活動の是非を巡る組織内での対立は、決定的なものになっていった。

1899年7月18日の、アギナルドからブエンカミノに宛てた手紙では、パリのアゴンシーリョに共和国の外交の全権を与えるように指示がなされた〔Taylor 1971: Vol. II 224〕。しかしその後、8月27日のタルラックのブエンカミノから香港のアパシブレへの手紙では、アメリカとの手紙のやりとりをパンフレットにして公開する〔Taylor 1971: Vol. IV

246-256] ¹⁹⁵ために、代表をワシントン D. C. に置いたほうが良いとアギナルドが述べていると書かれている。このあたりの発言は、キューバの革命組織が、ワシントン D. C. にプロパガンダ組織を置いて活動していることに倣ったと見てよい。その手紙の中でブエンカミノは、アギナルドのアドバイスとして、もし革命家をワシントン D. C. に送った場合は、その人物は中立的な立場にあるフィリピン人か日本人のふりをして慎重に行動し、身の安全を守るようすべきだと付け加えている [Taylor 1971: Vol. IV 276-280]。つまりアギナルドは、パリに落ち着いたアゴンシーリョに対しては彼の希望通りに外交の権限を与え、アメリカ行きを主張している人々にはアメリカ行きを承認するという、両者にバランスをとった配慮をしたのである。これらの対立は、余裕が無くなってきている革命側の精神力と忍耐力に、負荷をかける結果になった。

アゴンシーリョは香港の初期の時代にもサンディコと大きな摩擦を起こしたが、ヨーロッパでも上記の理由からレヒドールや S. ロペスと上手くいかなかった。タルラックのブエンカミノと思われる人物から香港へのアパシブレへの 1899 年 9 月 12 日付けの手紙の中では、アギナルドと政府は、アゴンシーリョ、レヒドール、S. ロペスの間の意見の相違を残念に思うと述べ、レヒドールと S. ロペスはアゴンシーリョについて全く語らないので、アギナルドはアパシブレに、この 3 人の仲を何とかして欲しいと要請し、仲裁を頼んでいる [Taylor 1971: Vol. IV 282-292]。この時になってもアゴンシーリョは、アメリカにエージェントを置くことに強硬に反対していた。

この手紙でブエンカミノと思われるこの人物は、とりあえずは香港のアパシブレがアメリカに行き、プロパガンダ活動とロビー活動を行うようにと指示し、リエゴ・デ・ディオスに、香港委員会の委員長を引き継ぐように命令している。アパシブレ自身も 8 月 5 日の手紙で、反逆者として逮捕されずに、アメリカで話し合いをする自信を見せ [PIR 431-1]、1899 年 9 月 12 日のブエンカミノへの手紙では、アメリカの議員やメディアに配るためのメッセージを英語に翻訳しており、1,000 部程を印刷する予定だと書いている [PIR 431-1]。アゴンシーリョ以外の主要な革命家はアメリカで活動することを支持していた。ブエンカミノはアギナルドの書いた「ドン・エミリオ・アギナルド、フィリピン共和国大統領によ

¹⁹⁵ このパンフレットは日本にも送られ、その原史料が在マニラ日本領事館三増二等領事の 1899 年 11 月 10 日の機密第 12 号に残っている [外務省外交史料館文書 米西戦争一件 第四巻 1763-1882]。この報告では、パンフレットは外務大臣ブエンカミノの名前でマニラの各領事館に密かに配られ、その後アパシブレが、これを持ってアメリカに向かったと述べられている。

る、フィリピン革命についての真相 *Reseña Veridica de la Revolución Filipina por Don Emilio Aguinaldo y Fami, Presidente de la República Filipina*」¹⁹⁶を英訳してアメリカに持っていくことを提案した〔Worcester 2010: 32〕。

これにより、アパシブレのアメリカ行きが決定し、香港委員会のとりまとめはリエゴ・デ・ディオスが引き継ぐことになった。1899年10月アギナルドはアパシブレに対し、アメリカとヨーロッパへ行くように命令した。アパシブレの同行者はラファエル・デル・パン Rafael del Pan (デル・パン)¹⁹⁷であった。『フィリピナス・アンテ・エウロパ』第34号の「香港のフィリピン人中央委員会 *Comité Central Filipino de Hong Kong*」の記事によると、委員長はアパシブレのまま、委員長代行にリエゴ・デ・ディオスが就任した〔*Filipinas ante Europa*. N°34 Marzo 10, 1901〕。しかし欧米のフィリピン革命への見方はすでに厳しくなっており、1899年11月21日の在マニラ・イギリス領事館の報告書では、アメリカ軍がマニラ・ダグパン前線を陥落させたことを報告しており、フィリピン人の政府は終わりを告げ、アメリカへの反乱も終わったと述べている〔イギリス国立公文書館文書 FO 5/2401〕。その後の12月23日の報告書でも、反乱の軍事行動がアメリカ軍優位に推移していると報告している〔イギリス国立公文書館文書 FO 5/2401〕。このように一般的には、この時期にはすでに、アメリカの平定は確実であるという考えが優勢を占めていた。

その後アパシブレは、1901年3月にアメリカから香港に戻って来ることになる。

5-5-(2). ハワード W. ブレイの離反

この対立に追い討ちをかけるように、香港にいたブレイとの摩擦も浮上してきた。1899年8月5日にはブレイからアパシブレに、フィリピンの運動の為に支出した私費

¹⁹⁶ この主張は20パートに分かれたもので、革命のスタートから比米戦争が始まる2月4日について書かれ、最後にアメリカを激しく非難する内容になっている。一部はテイラーの5巻本で翻訳されている〔Taylor 1971: Vol. I 443-448〕。テイラーのコメントではこれに関してはアギナルドではなく、ブエンカミノの手書き原稿が押収されたとなっている。完成したものは『フィリピナス・アンテ・エウロパ』にも掲載された。

¹⁹⁷ 1899年9月5日、デル・パンは自分が海外に住んでいた経歴があり、それゆえに革命運動に入りたいという内容の手紙をアギナルドに送った。デル・パンはパリでアゴンシーリョと会い、香港でアパシブレの指揮下に入った。9月12日にブエンカミノと思われる人物からアパシブレに、彼は政府の方針に合う人物だとの手紙が送られている〔Taylor 1971: Vol. IV 282-292〕。

6,000,000¹⁹⁸に対する支払を求める手紙が書かれている〔PIR 398-1〕。彼はボルネオでビジネスを行うのに資金が必要で、このビジネスはフィリピン政府の利益にもなると述べている。8月12日の手紙でサントスはアギナルドに対して、ブレイが6,000ドルを要求してきたとして、彼の本性が判ってきたと書いている。サントスはブレイに対して、以前にサラリーについて聞かれた時にはいらぬと言ったのに、今になって高すぎる金額を要求してきたと非難した〔PIR 455-4〕。

1899年9月5日のアパシブレからアギナルドの手紙では、ブレイはラブアンへ行く為シンガポールに向かって香港を発ったが、革命家たちをサポートし続けると約束したと書かれている〔PIR 445-5〕。9月12日のブエンカミノからアパシブレへの手紙では、ブレイに対して5,000ペソ以上が報酬として支払われることが議会で承認されたと書いてあり、結局、ブレイにサラリーが支払われたようである〔Taylor 1971: Vol. IV 282-292〕¹⁹⁹。

独立運動側はブレイとの関係は切れないと判断し、給料を払う決断をした訳であるが、なぜブレイがこれ程までに特別扱いされたのかは、現在この時の議会の議事録を見つけていないのでわからない。ただこの時期以下の4点、1) 香港委員会はワイルドマン総領事との訴訟²⁰⁰と武器調達で手いっぱいであった、2) ブレイが香港委員会の内情に通じており、敵方に回ると面倒なことになる——から、これ以上のトラブルを抱えることは得策ではないと判断した可能性はある。

5-5-(3). 香港で声を上げるイサベロ・アルタチョ

アルタチョもこの時期で香港において、再度自己主張を始めた。1899年7月22日の『オーバーランド・チャイナ・メール』は、彼が編集部を訪問したと述べている。この記事には、第1フェーズ、第2フェーズと革命を続け、新興列強のアメリカと、革命内部での不和の壁に突き当たり、革命を諦めた彼の主張が明確に表れている。彼の主張をベースに書かれた記事の要約は、以下になる：

アルタチョは、1898年7月、サンディコと3人の仲間と共にフィリピンに帰国した際、アギナルドに投獄され死刑判決を受けた。しかし、アルタチョの処刑がタガログ人の怒りに火をつけることを怖れた原住民の将校が、彼の刑の執行をやめた。アルタ

¹⁹⁸ 通貨単位は記載されていないので不明であるが、他の手紙から推測すると6,000ドルの間違いであろう。以下6,000ドルで表記する。

¹⁹⁹ 正確な金額不明。

²⁰⁰ この訴訟の件は第4章で述べる。

チョは3回目で脱獄に成功した。アルタチョはアギナルドと同様、自分の国を愛しており、現状において、アメリカに対する反乱は妥当ではないとの意見を持っている。アルタチョはアメリカ政府が、議会を通してフィリピンの未来について何の政策も明確にしないのが間違いだと考えている。フィリピン委員会の宣言は思慮深い人間 *the thinking people* や教養のある階層 *the educated classes* には受け入れられているが、「アギナルド—マビニーパテルノ派²⁰¹」が率いる「俗人 *Common people*」²⁰²は、その宣言を聞き入れたり、彼らの行動がフィリピンをどれだけ傷付けているかを推し量ったりもしないと、アルタチョは考えている。編集部は、アルタチョが香港の最高裁判所に、ビアク・ナ・バト協定でスペインから支払われたお金の取り分を貰う権利があるとして、訴訟を起こした意図が理解出来る。編集部は香港でアルタチョに宿を貸している紳士²⁰³が、脅迫状を受け取ったと聞いている。これは香港で投函されたものであり、今後の動向が注目される。〔*Overland China Mail. July 22, 1899*〕

この記事の後半は、暗に香港委員会が、コルテスとアルタチョを脅迫していると述べているのに等しい。また、同22日の「文通 *Correspondence*」欄の「フィリピンの反乱 チャイナ・メールの編集者へ *Rebellion in the Philippines. To the Editor of the 'China Mail'*」ではアルタチョ自身の記名投書が載っている。その要約は以下である：

アルタチョは編集者に対し、フィリピンの最近の反乱 *rebellion* について政治的私見を手渡すことが出来て嬉しい。編集部がこの見解を有益だと思えば公表して欲しい。アルタチョは、最近フィリピンから到着して香港のビクトリアに居住している。アルタチョは、以下のことを述べたい。

1. アルタチョは、南イロコス州のビガン出身である。
2. アルタチョは、フィリピンのどの政党にも所属していないが、フィリピンが奴隷から解放される目的²⁰⁴ならどの派閥にも協力する。
3. この目的の為には革命は正当化されると考えている。しかし、その行為が不当で

²⁰¹ この時点ではアルタチョは、マビニのような完全独立派も、パテルノのような自治獲得派も、同じ派閥に括って批判をしている。

²⁰² *Common* をどう訳すかであるが、ここでは、*Thinking people* の対比語として *Common* を使っているので、俗人とする。

²⁰³ *PIR 463-13* によると、アルタチョが宿泊していたのはコルテス宅である。

²⁰⁴ ここでの言語は *Object the emancipation of the Philippines from slavery* で、フィリピン人が奴隷から解放されるというよりも、フィリピン国民・土地を含む全てが解放される意味合いが強い。

はないこと、残虐でないことが条件となる。

4. したがって、真のフィリピン人として自分の生まれた土地を心から愛する。だから真の愛国主義 Patriotism の中には、自己の欠点を無視したり、過度の感情を育むような行為は含まない。逆に、正直にその弱さと欠点を認め、それを改め根絶する行為は含まれる。

5. アルタチョは、最近の反乱は真の解放からは遠いものだと考えている。これらの反乱は個人的な政治的熱望を満足させる為に行われている。浅ましく卑しい気持ちが、共和国という見せかけの下で、残忍にうごめいている。

6. 現在の完全独立を念頭に置いたアメリカの主権への反乱は、人々を耐え難い奴隷にしてしまう。

7. 今の反乱は、フィリピンに住み、国を構成する人々へのサポートには成り得ない。独立は幸せを運ぶのではなく、自殺行為となり、混乱を招く結果を呼び、人々を悲惨な状態に引き入れる。

8. 力があり寛大なアメリカは、フィリピンの自治を確立し、法と秩序を回復し、民主的な憲法を作り、フィリピンを、個人的・国家的に繁栄するように導いてくれる。アルタチョは、この宣言を、アメリカと分別のある正直なフィリピン人への、無条件服従として捧げる。そしてフィリピン人民の名の下に発言する権利を、不当にも私物化している人々が行う以下4つ——1) 残虐行為、2) 専制政治、3) 犯罪、4) フィリピンや海外で行われる恥ずかしい誇張——の行為に対して、アルタチョは理性・公正・心からの愛国心の名の下に、非難する。

1899年7月19日香港。イサベロ・アルタチョ〔*Overland China Mail*. July 22, 1899〕

この記事に対して、8月19日のアパシブレからブエンカミノの手紙では、アルタチョの問題を大げさにしないほうがいいとし、革命側が彼についての記事を出したり騒ぎ立てたりすることで、アルタチョが実際の人物以上に大物に見えてしまうことを懸念した。そして、独立運動側がアルタチョの挑発にのってしまえば、世間の目がますますこの問題に向き、アルタチョがクローズアップされてしまうと、革命家に冷静さを求めた〔PIR 431-1〕。また同手紙では、アルタチョ自身がガイド役となって、彼の出身地のイロコスにアメリカ軍を招き入れるのではないかと懸念も明らかにしている。

しかし、アルタチョが第1フェーズ時に独立のために奔走していた経緯を知っている人々は、彼の転向を容易には信じなかった。『フィリピナス・アンテ・エウロパ』は、第

25 号の「平和への動き Labor de Paz」という記事でアルタチョに言及し、アルタチョは 1896 年から独立のために働いてきた人物であり、彼がアメリカ支持を書いたことは信じないと述べている〔*Filipinas ante Europa* N°25 Octubre 25, 1900〕。したがって、以下の 4 点、1) お金を巡るアルタチョとアギナルドの対立、2) 独立を支持していたアルタチョのアメリカ併合支持への転向、3) 南イロコス出身のアルタチョとカビテ出身のアギナルドとの間の地域集団対立、4) アルタチョへの憎悪が増幅していくメカニズム——は、今後再検証の必要がある。

5-5-(4). 杜撰な金銭管理

海外での活動の分裂状態は時を経るごとに深まり、1899 年 8 月 12 日の香港のデ・サントスからアギナルドへの手紙では、名指しは避けている²⁰⁵ものの、自分達の中に裏切り者がいると書いている〔PIR 479-2〕。組織の主だった構成員が対立する状況になり、協力して何かを成し遂げるといった状況ではなくなっていった。その上、いい加減な資金管理はそのまま放置されていた。8 月 12 日のサントスからアギナルドへの手紙では、活動資金はリチャウコ²⁰⁶が所有しているのだが、実際はリチャウコの兄²⁰⁷が管理しており、それにもかかわらず、レシートの名義は別人にしると指示してある。そしてその理由は、法律上の資金の名義人はそのレシートの人間の名前になっているからだとしている〔PIR 455-4〕。香港委員会は第 2 フェーズの活動開始から、資金管理やレシートの管理でもめてきた。1 年以上が過ぎても未だに資金管理がクリアになっておらず、武器調達と資金管理の人間を分けて管理するなどの改善も行われなかった。過去の失敗に学ばず、緻密な財政管理が出来なかったということも、組織維持が出来なかった原因であろう。

PIR の手紙のやりとりでは銀行とのトラブルについての記述は見つからなかったが、1899 年 8 月 8 日の『オーバーランド・チャイナ・メール』では、C. リチャウコとグレゴリオ・アゴンシーリョ Gregorio Agoncillo (G. アゴンシーリョ)²⁰⁸がアギナルドの弁護士

²⁰⁵ 手紙の中で裏切り者などに関する話題を扱う場合、革命運動家は名指しを避ける傾向があり、誰を指しているのか判らないことも多い。

²⁰⁶ ここにはリチャウコとしか書かれていないが、C. リチャウコのことと思われる。第 2 フェーズでも述べているが、アリソナの本によると、アパシブレ体制が始まった時に、C. リチャウコが財政係になったと書いてあるので、このまま C. リチャウコが名目上の財政係を続けたようである。

²⁰⁷ F. リチャウコ。

²⁰⁸ G. アゴンシーリョはアゴンシーリョの甥。

として、香港上海銀行に対して、1月3日に預け入れた20万ドルと金利の返還を求めているが、銀行は裏書条項によって支払いを拒否し、訴訟になっているという記事が載っている〔*Overland China Mail*. August 8, 1899〕。

その他にも、香港委員会はワイルドマン総領事との金銭トラブル²⁰⁹を抱えており、財政状況は厳しさを増していった。

5-6. 第2次フィリピン委員会活動開始以降の香港委員会（1900年3月—）

1900年3月にはアメリカの第2次フィリピン委員会が、民政設立を目標として活動を開始した。その後委員会は立法府になり、行政権はしばらくアメリカ軍に付与された。同月3日の時点では、香港委員会のリエゴ・デ・ディオスは比米戦争でのフィリピン側のゲリラ戦略を高く評価しつつも、フィリピン領内の多くの集落がアメリカの手に落ちたことを認め、領内にいる仲間のイシドロ・トーレス Isidro Torres（トーレス）に向けて、外交は助力にしか過ぎず、武器を持って戦うしか勝つ道はないと叱咤激励している〔PIR 530-7〕。

1900年6月21日にマッカーサー准将は、フィリピン人が持つ武器の買い取りと恩赦を始め²¹⁰、元アギナルドの閣僚だったパテルノとブエンカミノが、マッカーサー准将に戦争終結の条件書を提出した。マッカーサー准将はこれを受け入れなかったが、香港のリエゴ・デ・ディオスはこの様子を知り、トーレスに対して、パテルノとブエンカミノは、敵の金で雇われた人に過ぎず、すでに革命家の仲間ではないと切り捨てた〔PIR 530-3〕²¹¹。6月20日には中国大陸で義和団の乱も始まり、国際社会の関心はすでに、フィリピン革命ではなく義和団の乱に向いていた。

1900年はアメリカ大統領選挙の年であり、11月に投票が行われることになっていた。7月17日に香港委員会が出したスペイン語の印刷物には、この選挙を「共和党」対「民主党」、「ウイリアム・マッキンレー」対「ウイリアム・ジェニングス・ブライアン」、「独占

²⁰⁹ この金銭トラブルに関しては、第4章で述べる。

²¹⁰ アギナルドは、7月7日、革命軍のトリアスに対して、ゲリラたちが戦闘停止に応じないようにと釘を刺した〔PIR 612-2〕。第2章で述べるが、この3ヵ月ほど後に、トリアスは日本陸軍の参謀本部員と密会する。

²¹¹ アギナルドも8月4日、トリアス将軍に対して、パテルノには和平に関する宣言はすでにないことを述べている〔PIR 612-1〕。また8日にはアギナルドは、アメリカは、我々の愛する国の自由を売る人間にお金をオファーしているが、人々の自由や独立を守り支持するのは、各フィリピン人の義務だとも述べている〔PIR 638-5〕。

主義の新しい傾向と植民地主義」対「反トラスト・反拡張主義」の戦いと位置付け、パテルノとブエンカミノは、アメリカとの和平協議は理想を傷つけ、マッキンレー大統領の再選を助けるだけであると述べた〔PIR 610-4〕。

1900年11月の大統領選挙でマッキンレーは再選した。11月10日に香港委員会は、アメリカ議会がフィリピン領有に歯止めをかけてくれることに期待し、独立達成のために我慢するように呼びかける通達を出した〔Taylor 1971: Vol. V 372-376〕。しかし11月20日になると、サンディコが、ヌエバ・エシハ Nueva Ecija の北部のキャンプから、アメリカ将校に対して、停戦のために、アギナルドや他の革命軍の将軍たちとの仲介役になる用意があるとの手紙を出した〔PIR 567-9〕。大統領の再選を境に、領内と領外の革命家の方向性の違いが明らかになっていった。

1900年12月23日にはマニラで、パルド・デ・タベラら親米イラストラドスの一部がフェデラル党 Partido Federal / Federal Party を結成した。パルド・デ・タベラは1900年9月3日に、トーレスに宛てて、以下の2点、1) 比米戦争初期は、革命軍はアメリカ人に対して戦闘を行っていたが、ある時から戦闘はフィリピン人に向かっている、2) 政治的に罰すると称して、革命側がフィリピン人の誘拐や踏みにじりを行っている——を非難した〔PIR 613-2〕。親米フィリピン人は、自身がアメリカを支持する政党を作ったことで、公的かつ明確にアメリカ併合を支持する姿勢をフィリピン領内外の人々に示し、アメリカ当局に公然と協力するようになった。1901年1月になると、第2次フィリピン委員会がフィリピンの町法と州法を作り、マビニなど、強硬に独立を主張していた革命家を、グアムに追放することを決定した²¹²。それに危機を感じた領外革命家たちは、完全独立を支持する人々がまだ領外にいることをアピールした。日本にいるポンセは、2月13日に日本語に翻訳した『南洋之風雲』というフィリピン革命についてのプロパガンダ本を、日本で出版した。その1ヵ月後、マドリッドで発行された革命家の新聞『フィリピナス・アンテ・エウロパ』の第34号「香港のフィリピン人中央委員会」（1901年3月10日）は、香港委員会についての記事を掲載した。この記事の要約は、以下の通りである：

香港委員会では、委員長のアパシブレが不在なのでリエゴ・デ・ディオスと、デ・サントスが代表を代行している。発言権のある委員としてビセンテ・ディオニシオ・

²¹² 1902年10月頃アメリカ忠誠宣言を拒否したマビニを、輸送船で日本に連れてくる案が浮上したが〔外務省外交史料館文書 米西戦争一件 雑 第一巻 馬尼刺人ニ関スル報告 428-429〕、結果的には実行されなかった。1903年マビニは忠誠宣言をしてマニラに戻ったが、その後死亡した。

フェルナンデス Vicente Dionisio Fernández、ビセンテ・エンカルナシオン・イルストレ Vicente Encarnacion Ilustre (イルストレ) とカエタノ・ルクバン・イ・リリエス Cayetano Lukban y Rilles (C. ルクバン) がおり、書記にはアゴンシーリョの甥²¹³がいる。香港委員会は外国のフィリピン人代表たちの中心に位置する。香港委員会から、命令やインストラクションが、領外委員会やフィリピン諸島のいろいろな場所に発信されている。アギナルドがフィリピン諸島のいろいろな場所と連絡を取り合うことができないため、香港委員会はアギナルドから、必要時には代理を務める許可を受けている。

革命委員会は無償でそして自由意思で活動している。香港委員会は、ヨーロッパ、アメリカ、アジア、オセアニアからニュースを受信し、それらの中から元気が出るものを拾い集め、革命ゲリラたちに送る。そしてゲリラたちは、香港委員会に戦闘日誌を送る。香港委員会はタイプライターの他に、印刷所を所有し、他の場所にある委員会（複数）に軍事活動の日誌（複数）を伝える。委員長はその服まで質に入れねばならないほど困窮している。

マッキンレー大統領は、マニラのアメリカ当局に協力するフィリピン人を使ったとしても、比米戦争を終わらせることはできない。アパシブレは、アメリカで積極的なプロパガンダを行い、もうすぐ香港に帰還するだろう。みんなが不平を言わずに働いている。

[*Filipinas ante Europa* N°34 Marzo 10, 1901]

この記事の中では、アギナルドはすでに司令塔としての役割を果たしておらず、香港委員会が取りまとめを行っていることが読み取れる。それを示すかのようにこの後すぐに、アギナルドはアメリカ当局に降伏した。1901年3月23日、アギナルドがアメリカ軍に降伏 [T. Agoncillo 1990: 227]²¹⁴すると、香港委員会は4月8日にフィリピン領内にいる将軍たちに戦闘継続を呼びかけた [Taylor Vol. V 377-380]。しかし香港委員会の努力もむなしく、4月18日のサンバレス Zambales 州²¹⁵におけるアメリカ軍のレポートでは、サンバ

²¹³ G. アゴンシーリョ。

²¹⁴ イレートは、アギナルドは5月23日に逮捕されたと述べているが [イレート 2005: 263] [Ileto 1997: 161]、本稿では T. アゴンシーリョの3月23日を採用する。

²¹⁵ ルソン島マニラ近郊の州で、フィリピン革命が起こったタガログ8州（現在のパンパンガ、ブラカン、リサール、カビテ、バタンガス、ラグナ、タルラック、ケソンの8州）の中には入っていないが、一時期アギナルドの政府があったタルラックや、港が整備されたバタアンと隣接した州であり、革命運動は盛んであった。

レスの多くの住民がフェデラル党の代表やエージェントになり、アメリカの主権を認め当局に協力し、州の完全な平和のために努力している様子が報告されている〔PIR 650-7〕²¹⁶。その後4月19日、アメリカ当局からアギナルドの服従宣言が出された。5月には第1フェーズから活動していたアレハンドリノが降伏し〔Alejandrino 194-196〕、6月20日、香港委員会は、アギナルドの後継者にミゲール・マルバール・イ・カルピオ Miguel Malvar y Carpio（マルバール）²¹⁷がなることを宣言した〔Taylor 1971: Vol. II 426〕。しかし、この後7月4日には、タフトがフィリピンの初代民政長官に就任し、9月1日には民政が開始され、パルド・デ・タベラや、B. ツアソン、ホセ・ルイス・デ・ルスリアガ Jose Ruiz de Luzuriaga などが、委員会に加わり〔Worcester 2010: 6〕、軍事行動とともに、アメリカの「民政」は着々と進んでいった。

その直前の8月28日、革命軍司令部にいた総司令官マリアノ・ノリエル Mariano Noriel（ノリエル）からの通達書の中で、司令部は海外の中央委員会、つまり香港委員会に従うとの宣言がなされた〔PIR 568-3〕。司令部のノリエルは9月になると、南の港²¹⁸で武器の積み下ろしに成功したこと、マッキンレー大統領が銃撃されたことを通達しており、全ての町や州で兵器廠を作るように要請した〔PIR 568-3〕。同報告書内でノリエルは、海外の委員会に対して、寄付を軍事当局に送ってほしいと要求している。香港委員会はフィリピン領内にいるわけではないのに、軍事行動の司令も出し、資金の調達も行わねばならなくなつた（巻末 人物相関図4）。

領外革命家は苦肉の策として、ヨーロッパにフィリピン政府を設立しようとした。大統領にエドゥアルド・デ・レテ Eduardo de Lete（デ・レテ）²¹⁹、外務大臣にトーマス・アレホラ・イ・パデリャ Tomás Aréjola y Padilla（アレホラ）²²⁰、内務大臣にデ・ロス・レ

²¹⁶ テイラーの本によると、5月17日の段階でフェデラル党の党員は15万人おり、アメリカ当局はフェデラル党員を利用して、ゲリラの懐柔・降伏を進めていった〔Taylor Vol. II 284〕。

²¹⁷ マルバール（1865-1911）はフィリピン革命軍の将軍。ビアク・ナ・バト協定の後、アギナルドと共に香港に移り住むが、第2フェーズ開始後にフィリピンに戻り、武力闘争に参加した。アギナルドの降伏後は、アギナルドの後継者として戦闘を継続したが、1902年4月16日、ジェームス・フランクリン・ベル James Franklin Bell（ベル）准将に降伏した。

²¹⁸ 場所の記載はない。

²¹⁹ デ・レテ（デ・ロス・レイエスはレテと呼んでいた）は『ラ・ソリダリダッド』の編集のメンバーの1人。ヨーロッパ在住のフィリピン人革命家。『フィリピナス・アンテ・エウロパ』にも寄稿した。

²²⁰ アレホラは、マドリッド委員会の委員長。デ・ロス・レイエスと作った会社の設立趣

イエス²²¹、財務大臣にアパシブレ、パブリック・インストラクションのセクレタリーに C. ルクバン、戦争大臣にリエゴ・デ・ディオスが任命されることになっていた〔Taylor Vol. IV 381〕。しかし、少なくともアパシブレ、C. ルクバンが香港におり、アレホラ²²²も香港にいた可能性があり、デ・ロス・レイエスは10月15日にはマニラに帰国していることを考えると、実際に政府として機能したとは思えない。革命組織の体力が落ちていたこの時に、香港ではなくヨーロッパで政府を設立したこと自体、無謀な決議であったと言える。帰国後デ・ロス・レイエスはすぐに『マニラ・タイムス Manila Times』のインタビューを受け、香港委員会は戦い続ける気持ちを持っていると述べ、フェデラル党に対抗する政党としてナショナリスト党を作ることを提言した〔Manila Times. October 19, 1901〕。

5-7. 破たんを始める香港委員会

1901年12月14日、上海から第3歩兵隊のチャールズ G. ドワイアー Charles G. Dwyer (ドワイアー) 大尉が、マニラの陸軍情報局 Military Information Division 宛てに送った書類によると、ドワイアー大尉が12月10日に香港を通過した際、委員会の人事は、委員長がリエゴ・デ・ディオス、第1メンバーがアパシブレ、第2メンバーがイルストレ、第3メンバーがロドリケス Lodriques²²³、セクレタリーが C. ルクバンであった〔PIR 903-5〕。したがってメンバーの顔触れは7ヵ月前とそれほど変化はない。

この報告書からは、S. ロペスがこのドワイアー大尉と密かに話し合いを行っており、ドワイアー大尉が香港委員会の上記メンバーとも話をした様子が伺える。この報告書の中で、ドワイアー大尉は以下のように述べている：

1. S. ロペスはマルバル將軍に戦闘を止めるようにアドバイスをしたいが、何のアレンジメントも約束もなく、やみくもに戦闘をやめろと言っても無理である。
2. 香港委員会のメンバーは、アメリカに協力したブエンカミノや、その後降伏したアギナルドを認めていない

意書には、彼は自身を弁護士で、カマリネスの地主と書かれている〔PIR 630-4〕。

²²¹ 1901年10月19日の『マニラ・タイムス』のインタビューの中で、デ・ロス・レイエスは、マルバルから内務大臣の任命を受けたと述べている〔Manila Times. October 19, 1901〕。

²²² アレホラは1901年11月9日に香港から、フィリピンのデ・ロス・レイエスに手紙を送っている〔PIR 903-5〕。

²²³ 史料はカーボン・コピーのため、qかgの判別がつかないので、ロドリゲス Lodriguesの可能性もある。フルネームで記載されていないので、苗字のみ記す。

3. 在香港アメリカ副総領事は香港委員会が多くの資金を持っていると述べているが、ドワイアー大尉は違う意見である。イルストレの友人はマニラで多くの資金を作っており、イルストレも、マニラに戻れば職を得ることができると考えている。
4. ロドリゲスは快活な青年だが、過激な活動はしたくない。
5. 彼らは、武器を購入することを望んでいるわけではない。
6. バーサは影響力を持っていない。
7. ドワイアー大尉が見た中では、S. ロペスが一番まっすぐなフィリピン人であり、マルバール将軍に降伏してもらいたいと思っている。
8. S. ロペスは、忠誠宣言をすれば仲間から暗殺されると思っているので、マルバール将軍を取り込むためにも、S. ロペスに忠誠宣言をさせずにマニラに行かせることを勧める。
9. S. ロペスや他の人々も、アメリカが1898年に、独立の約束を暗に行ったと思っている。S. ロペスはフィリピン人の大多数が望むとわかったら、アメリカを支持するだろう。[PIR 903-5]

この報告はアメリカ軍のものであり、このまま全てを信じるわけにはいかないが、少なくともアメリカ側も香港委員会も、委員会の活動を停止するために、両者の落としどころを探っていたことは確かであろう。香港委員会は、自分たちの意見がフィリピン人の大多数の意見から乖離して、孤立しているのではないかと危惧し、アメリカとの和解も視野に入れてアメリカの腹を探っていた。そして以前と違いラディカルな行動をすることを控えて、武器調達に積極的ではない様子も伺える。一方のアメリカ側は、S. ロペスを使ってマルバール将軍を降伏させようと画策していた。1902年3月6日のマニラのフェデラル党員アルトゥロ・ダニエル Arturo Daniel という人物からマルバール将軍に出された手紙には、アパシブレ、S. ロペスや他の香港委員会のメンバーは、平和の必要性を信じていると記されており、S. ロペスはダニエルに以下の2点、1) S. ロペスはフィリピン人として無条件で早急な平和を望んでおり、2) 戦闘勃発の前、S. ロペスはその意見をアギナルドに伝えた——を述べている。その上でダニエルは、以下の2点、1) 香港委員会から聞いた話では、アパシブレも同じような意見を持っている、2) 多くの香港委員会のメンバーは、フィリピンで起こっていることをわかっていないのは確かだ——と、現在の香港の革命家の状況を述べている [Taylor 1971: Vol. V 390]。これが功を奏したのかはわからないが、1902年4月、マルバール将軍は降伏した。

1902年春、アパシブレは日本を訪問し日本のフィリピンに対する感情を確かめに行ったが、日本の政治指導者たちはフィリピンの大義への共感を示すものの、列強に抗う意志を表さなかった〔Alizona 1971: 140〕。しかし、アリソナのアパシブレに関する本では、アパシブレの談として、日本政府自体はフィリピン人革命家たちを助けてはくれなかったが、香港委員会が、革命軍に不足している多くの日本陸軍の予備役の将校たち、そして大砲の技術者たちや、工廠の技術者たちを、フィリピンに送り込み、それらの軍人が革命闘争を助けてくれた旨が書かれている〔Alizona 1971: 141〕²²⁴。ただし、これはアパシブレが1902年に日本に行った際の感想ではなく、米西戦争・比米戦争を通した第2フェーズ全体の時期の日本に対する感想だと思われる。

1902年12月16日の神奈川県知事報告の秘甲第549号によると、当時日本にいた革命家のポンセは、香港のアパシブレから電報をもらい、香港に戻るようになった〔外務省外交史料館文書 米西戦争一件 雑 第一巻 馬尼刺人ニ関スル報告 430〕。したがってこの時期、香港で何か大きな決断が下されたことが伺える。また1903年6月19日の神奈川県知事報告の秘甲第309号は、香港にいるポンセの仲間からの来信として以下の3点、1) ポンセが7月下旬に日本に来る予定である、2) 香港でアメリカ官吏に宣言をして故国の実母と面会する、3) アメリカを漫遊する予定を立てている——ことを報告している〔外務省外交史料館文書 米西戦争一件 雑 第一巻 馬尼刺人ニ関スル報告 434〕。

その後1903年7月31日香港付けで、C. ルクバンが以下の宣言を記した：

私はこの日、海外で設立されたフィリピン中央委員会が解散することを謹んでお知らせする。マリアノ・ポンセ氏は財務、公文書、ライブラリーそして他の所有物に関する任務を負う。

香港 1903年7月31日 カエタノ・ルクバン セクレタリー

I have the honor to advise you that on this date the Comité Central Filipino established abroad is officially dissolved. Mr. Mariano Ponce has taken charge of its funds, archives, library, and other properties.

Hong Kong, 31 July 1903 Cayetano Lukban, Secretary

〔Alizona 1971: 136〕

このようにして、香港委員会は終焉をむかえることになった²²⁵。アパシブレは1903年

²²⁴ これに関しては第2章で扱う。

²²⁵ 秘受第88号によると、ポンセは1903年7月7日に日本に戻って、大阪の博覧会を観

12月12日に汽船「スンキアン Sungkian」でフィリピンに到着した。アゴンシーリョのフィリピンへの帰国はそれよりも遅く、1905年になってからであった〔De Ocampo 1977: 105〕。

6. 小括

アギナルドとその仲間たちは、ビアク・ナ・バト協定によって戦闘を停止し香港に追放されたが、その後もフィリピン領内ではスペインへの反乱が続いていた。アギナルドと一緒に、フィリピン領内で戦闘を行っていた革命家たちが流入したことで、香港では、価値観の多様化が起こり、一枚岩の合理的な組織が作り辛い状況に陥っていた。アメリカはスペインとの開戦に備えて、アギナルド及び香港の革命家に接触した。しかし香港の革命家の中にも、スペインがフィリピン人に対してスペイン人と同等の権利と自治を与えるのなら、スペインという国家の枠組み内に残ったほうがいいと思う人間もいた。一方でアメリカという国の出現でアメリカという国家の枠組みの中に入ることを考える人も現れた。

アメリカ側は比米戦争勝利と言う当面の目的を達成するために、革命家を利用した。アメリカ側、特に香港とマニラにいたアメリカ当局者から見れば、革命家たちはスペイン当局に対してレジスタンス運動をしているグループのメンバーに過ぎなかった。したがって、革命側を利用できる反スペイン組織と見て、革命家と確認文書も作らず、陸戦のサポートをさせた。しかし一方で、革命側もスペインを倒すために、武器調達などでアメリカを利用しようとした。

米西戦争マニラ湾海戦直後のアメリカ軍の海底電線切断で、香港委員会はフィリピン領内と領外の革命家を結ぶ「リレー・ポイント」として、革命組織の中で大きな役割を果たすようになった。アメリカは革命家のスペイン当局への反抗という内乱と、米西戦争という国家間戦争をうまく同調させて、フィリピンを侵略していった。フィリピンでの米西戦争は、革命側の協力により順調に勝利へと向かっているように見えた。

しかし、アメリカとの関係が深まるにつれて、アメリカとの付き合い方を巡り、香港内のみならず、領内革命家の間でも意見が分かれ、今後の状況の推移が読めない状態になっていった。アギナルドは香港を出発する前、香港の革命家たちに対して明確な役割分担を

覧し、横浜に移動した〔外務省外交史料館文書 米西戦争一件 雑 第一巻 馬尼刺人ニ関スル報告 435〕。そして秘受第 1621 号之 2 によると、10月29日にまた香港に戻った〔外務省外交史料館文書 米西戦争一件 雑 第一巻 馬尼刺人ニ関スル報告 440〕。

せず、フィリピンに到着してからも彼らに対して、組織として有機的に活動するための具体的な指示を行わなかった。アギナルドによる細かな指示がないため、香港の革命家は、それぞれが主張を押し通そうとした。1898年6月初旬、アゴンシーリョと他の革命家との諍いなどにより、香港委員会は分裂した。しかし、アゴンシーリョと対立した一部の革命家がアギナルドを追ってフィリピンに帰ったことで、香港委員会は組織を立て直すことができた。アギナルドは、1898年5月24日の独裁宣言、そして6月23日の革命政府樹立以降も、将来へのビジョンや具体的な行動計画を示せなかった。香港でアメリカ併合支持の立場をとっていた一部のイラストラドスはアギナルドに期待をよせず、アギナルドから離反した。

1898年8月13日のスペイン敗北後、アギナルドはマロロスに政府を移し、制憲議会を開催した。しかし、国内外の問題に対する現実的なビジョンはやはり出せないままであった。第1フェーズ時に「反スペイン・ナショナリズム」で協力していたフィリピン領内外の一部の革命家は、スペインという相対化する敵を失うことで、反スペイン・ナショナリズムを失った。したがって彼らも、ビジョンの無いアギナルドの政府への協力意欲も失ってしまった。その後も組織や命令系統、そして責任の所在がはっきりしない状態は依然として続いており、香港の革命家は「革命の成功のために」と独自に物事を進めていくこともあった。ワシントンD.C. とパリでは、アゴンシーリョがパリ和平会議に向け、ロビー活動を行ったが、結果は芳しくなかった。その上香港委員会が中心となった武器調達も不調に終わった。

フィリピン領外では、アギナルドを頂点とした有機的な活動ができず、比米戦争への備えも不十分な状態が続いた。1899年1月23日に、アギナルド側は共和国を宣言したものの、その後すぐ、2月4日に比米戦争が始まった。フィリピン共和国政府は、アメリカ側の電信の検閲、マロロスからの首都の移転、マビニからパテルノへの内閣交代などで、香港委員会と上手く意思疎通が取れなくなっていった。こうして共和国政府は、近代的法治国家として対外政策をコントロールする機能を失っていった。

政府は領外革命家をコントロールすることができず、その状態がまた、領外革命家や支持者を制御不能にするという悪循環が起きた。イギリス人支持者のブレイは革命組織を見限って離脱した。意思疎通の欠如が革命家同士の不安を増幅し、香港側は応答のないフィリピン側に不満を募らせ、フィリピン側は武器調達を成功させない香港側に対してその焦りを訴えた。そして、1889年初夏になると、アメリカでのロビー活動の問題で、アゴンシ

ーリョと他の革命家の対立が起こった。この対立が人事にまで影響し、アギナルドですらこの対立をコントロールできなくなっていった。

アメリカはフィリピン委員会を通して、フィリピン人に近代的政府を作ることをアピールし軍政を開始した。1900年に入ると、アギナルドの政府を担っていた知識人たちが次々とアメリカ併合支持の姿勢を明確にし、アギナルドの政府の瓦解が明確になっていった。1901年3月のアギナルドの降伏後は、香港委員会はもはや政府と呼べる組織をフィリピン領内に持たず、マルバール将軍が率いる「共和国政府無きフィリピン・ゲリラ軍」を直接サポートすることになった。アギナルドの逮捕後、領外活動化の一部は香港に移動して活動を続け、一時はヨーロッパにフィリピン人の政府を置く構想も生まれた。

しかし、1901年9月には、アメリカによる民政がフィリピンで開始された。自分たちがフィリピン領内の流れから取り残されていることに気が付き始めた香港委員会の領外革命家たちは、マルバール将軍を降伏させることを考え始めた。その後1902年4月、マルバール将軍もアメリカに降伏し、同年7月4日、アメリカはフィリピン平定を宣言した。同年12月には、香港委員会は日本にいる革命家に帰還命令を出し、1903年7月末に香港委員会を解散した。

香港を中心とする領外革命家は、フィリピン領内の革命の推移と世論を読み切れず、フィリピン領内からも国際社会からも取り残され、時流にのれなかった香港委員会は解散する結果になったのである。

第2章 革命家の日本での活動と、日本の参謀本部の援助

1896年8月30日、フィリピンで革命が始まってから、日本帝国陸海軍は、東南アジアで初めて始まったこの革命に注目をしてきた。その中でも参謀本部²²⁶は、1898年5月の米西戦争マニラ湾海戦勃発から1902年初めまで——途中に一時期中断はあったもの——革命を視察するために参謀本部員を派遣していた²²⁷。しかし参謀本部は単なる視察目的だけではなく、台湾以南の進出の可能性を探るために、軍人及び軍関係者を派遣していたのである。1898年5月1日、米西戦争マニラ湾海戦を皮切りにフィリピンでの米西戦争が始まり、革命側はこの戦争に乗じて第2フェーズをスタートさせた。しかし偶然に近い形で第2フェーズを始めてしまったフィリピン人革命家たちは、独力でこの武力闘争を成功させることは難しいと感じていた。したがって、彼らにとって、どこかの国や団体と軍事的同盟を結び、物質的・軍事的援助を受けられるかどうかは、革命を達成できるか否かの一番重要なファクターであった。

PIRで押収された文書は、主に革命側の人間から押収しているため、日本帝国陸軍の軍人から革命家たちに発信された手紙が多い。逆に革命家たちから軍人たちへの手紙は、あるとするならば日本に存在するはずであるが、今のところ彼らの手紙を発見するに至っていない。その上、現在日本に現存する史料は、日本帝国陸軍の軍人による報告書や日本国内の警察などによる報告書などが主で、いわゆる日本の「当局側」の公的史料が多い。したがって、日本側に現存する史料とPIRを利用すると、当然の帰結として日本側の活動を中心とした記述ができ上がってしまう。しかしそうだとした場合、手紙や報告書の行間から滲み出た書き手の感情や発言を拾ってゆくと、日本とフィリピンで、フィリピン人革命家と参謀本部の軍人がどのような活動をしようとしていたのか、おぼろげながら見える部分がある。したがって、この章では1898年の米西戦争マニラ湾海戦勃発から1902年初頭まで、フィリピン革命に対して、日本の参謀本部²²⁸、特に福島安正（福島）大佐（1900年4

²²⁶ 以下特別に明記しない限り、本稿においての参謀本部は日本帝国陸軍の参謀本部を指す。

²²⁷ 海軍も、米西交戦視察員として海軍少佐築山清智と同大尉吉田増次郎を、医務衛生視察として海軍々医少監の戸祭文造をフィリピンに派遣した〔外務省外交史料館文書 米西戦争一件 雑 第二巻 米西交戦視察員トシテ海軍少佐築山清智同大尉吉田増次郎西領「マニラ」へ派遣ノ件 565-574、同巻 米西交戦ニ付医療衛生視察トシテ海軍軍医少監戸祭文造交戦地へ派遣ノ件 595-617〕

²²⁸ 平時において参謀本部は天皇に直隷する組織のため、本稿では政府と参謀本部とは明

月より少将)²²⁹が指揮する情報収集部門²³⁰が、どのように関与したのかを、PIR と日本の外務省外交史料文書と国会図書館憲政資料室文書を主に利用しながら明らかにする。

先行研究は主なものとして：

アンダーソン・ベネディクト著 山本信人訳 『三つの旗のもとに アナーキズムと反植民地主義的想像力』 NTT 出版株式会社 2012 年

Anderson, Benedict, *Under Three Flags: Anarchism and the Anti-colonial Imagination*. Manila: Anvil Publishing, Inc., 2006.

思想史としてのアプローチ。フィリピン革命における領外革命家の活動とアナーキズムの影響を同時代的に描く。日本の活動に関してはポンセを、取り上げて分析している。

池端雪浦 「フィリピン革命と日本の関与」 池端雪浦・寺見元恵・早瀬晋三『世紀転換期における日本・フィリピン関係』 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所 1989 年 1-36 頁

フィリピン史からのアプローチ。対スペイン闘争期と 1899 年初頭までの陸軍払下げ銃購入未遂までを扱っている。

波多野勝 「フィリピン革命運動と日本の対応」『アジア研究』 アジア政経学会 1988 年 第 34 巻第 4 号 69-95 頁

波多野勝 『近代東アジアの政治変動と日本の外交』 慶應通信株式会社 1995 年

日本政治史からのアプローチ。日清戦争後の参謀本部の南方視察と、第 1 フェー

確に分けることにする。

²²⁹ 福島は戊辰戦争に参戦し、その後開成校中退を経て、1873 年司法省十三等出仕（翻訳課）に所属、1874 年陸軍省十一等出仕等を経て参謀本部に参加した〔秦 2002: 135〕。したがって士官学校出身の将校ではない。

²³⁰ 本稿で福島が指揮する情報部門というのは、1896 年 5 月から 1899 年 1 月までは陸軍参謀本部第三部（外国の軍事およびその地理・諜報・軍事統計）1 月に改変が行われた後は、陸軍参謀本部第二部（大阪以西の師団管区を管轄し、主として台湾・清国《満州を除く》および英国・オランダ・イタリア・スペインなどとその植民地・中近東・アフリカ・東南アジア・南北アメリカ大陸の作戦・情報）とする〔秦 2002: 319, 508〕。

ズ時の革命家の日本での動き、そして米西戦争中の参謀本部員の活動と、「布引丸」事件を扱っているが、やはりフィリピン側の一次史料を使っていないため、フィリピン側の動きの細部があいまいである。

平間洋一 「フィリピン独立戦争と日米比関係」『法学研究』 慶應義塾大学法学研究会
2000年 第73号第1号 237-267頁

日本軍事史からのアプローチ。1896年の対スペイン期から始まり、「布引丸」事件とその後の日米外交について述べており、フィリピン側の一次史料を使っていないので、フィリピン側の動きの細部があいまいである。

Mojares, Rasil B., “The Itineraries of Mariano Ponce” *Isabelo’s Archive*, Mandaluyong City: Anvil Publishing Inc., 2013, pp.155-178

日本を中心としたポンセの領外活動についてと、ポンセのその後の人生についてを述べている。ポンセの生い立ちから触れ、その後日本での活動について述べている。

Saniel, Josefa M., *Japan and the Philippines 1868-1898*, Quezon City: University of the Philippines Press, 1969 (rpt. of 1963).

フィリピン史からのアプローチ。文字通り 1868年から 1898年までの日本とフィリピンの関係を論じている。

アンダーソンは、領外革命家の1人、ポンセの日本での活動を取りあげている。アンダーソンはこの著書の中で、アナーキズムと幾人かの領外革命家の関係を扱っているが、ポンセに関してはアナーキズムとの関係ではなく、ポンセと日本人知識人との交流を取り上げ、孫逸仙との関係にも触れている。「布引丸」事件の関連で川上操六（川上）参謀長の名前を挙げているが、基本的に陸軍との関係には触れていない。したがって、もう1人の日本にいた革命家のラモスへの言及もない。

これに関しては Mojares（モハレス）も同じである。モハレスは、以下の5点、1) ポンセと朴泳孝などの朝鮮人亡命者との交友、2) 康有為などの中国人亡命者などとの交流、

3) 孫逸仙との親交、4) 犬養毅(犬養)・大倉喜八郎(大倉)・中村弥六(中村)代議士²³¹の3人と「布引丸」事件、5) 中村代議士の武器売却と着服とそれに対する宮崎滔天の反発——に触れている。他にもポンセの日本でのプロパガンダ活動なども述べているが、これはすでに先行研究などで述べられてきているものである。ポンセに関しては以下の3点、1) 彼自身が知識人として書き物を残している、2) 彼の書簡集がすでに1932年に出版されている、3) 孫逸仙の研究の中でポンセと孫逸仙の関係が扱われることがある——の理由から、研究し尽くされている感がある。本稿でもポンセには触れるが、比米戦争が始まった後は、ポンセ自身が日本人知識人と中国・朝鮮の革命家との交流、そしてプロパガンダ活動に重きを置いて活動してきたため、本稿では参謀本部と関わりのあったとみられるラモスを中心に活動を追う。

池端はPIRの一次史料を使い、1899年初頭までの参謀本部や日本人との関わりを、緻密に分析している。フィリピン人革命家個人の経歴などにも詳しい説明がなされ、当時の日本の政治状況も加味した上で、革命家の活動を分析している。それにもかかわらず、同時期を本章で再度扱う理由は以下の3点である：

1. フィリピン人革命家が出会った日本人の名前と経歴が不明確である。
2. 1898年の参謀本部砲兵大尉時澤の米西戦争観戦に関して、時澤の書いた報告書である「米西戦争ニ関スル陸軍武官報告書A798、A826、A833」〔国会図書館憲政資料室〕、同参謀本部歩兵少佐明石元二郎(明石)²³²の書いた「米西戦争に関する陸軍報告書A800」〔国会図書館憲政資料室〕を利用せず、尾崎卓爾(尾崎)の『弔民坂本志魯雄』を参考にしている。『弔民坂本志魯雄』は坂本志魯雄(坂本)の日記を尾崎がまとめて1932年に出版したものである。この本は坂本の日記であるため、両参謀本部員の動きはある程度わかるが、あくまでも坂本の目を通した見解であり、両参謀本部員の細かな活動と思考までは読み取ることができない場合がある。フィリピン革命中から太平洋戦争中にかけて書かれたフィリピン革命についての記述には、「革命に共感した日本人(志士)たちがフィリピン人に協力した」というコンテキストで描かれるものが多い。言い換えると、日本ではそのように信じていた人が、フィリピン革命関連の文書を残したとも言える。そ

²³¹ モハレスは中村代議士に関して、号の「背山」で呼んでいる。

²³² 明石は1883年12月、6期士官生徒として陸軍士官学校を卒業し、1889年に陸軍大学校を卒業した。1896年から参謀本部第三部部員として福島大佐の部下になった。日露戦争中には参謀本部の資金でロシア革命の支援をしたと言われている。

の記述の中には参謀本部員も志士として扱われているものも多く、これらの史料を扱う際には注意が必要である。このような志士伝説に加え、戦前の大アジア主義や国威発揚の影響によって、フィリピン革命に関与した日本人全てが「アジアの同志の解放運動に協力した」ように語られてしまうことも多い。戦後の研究者も、この見方に大きく影響を受けていることがある。これに関しては次のサニエルの先行研究で事例を述べる。参謀本部員は日本人革命家と違い、あくまでも国益を中心に考えて行動した日本帝国軍人であり、民間人と行動を共にしていたとしても、その部分で線引きをして冷静に分析をする必要がある。

3. フィリピン側が日本の援助のみを期待していたような感を受ける論文であるが、実際にはフィリピン側は、日本以外の援助も模索しており、日本側もフィリピン人革命家の二枚舌・三枚舌は承知の上で、彼らに接していた。

1. に関しては、文章にするとわかりにくくなるので、箇条書きにして明示しておきたい。

- A. 革命家と接触を持った平田という人物を法学博士「平田徳衛」〔池端: 1898 11〕としている。→J. Hirata/II. Hirata という記述や他の史料から弁護士「平田譲衛」(平田)²³³とした
- B. 横浜の警視 Ikariyama〔池端 1898: 23〕→碓山晋(碓山)横浜壽町(1898年7月6日より横浜加賀町)警察署長
- C. 和田(大尉?)〔池端: 1898: 23〕→和田連次郎(和田)歩兵大尉²³⁴
- D. 大阪の商人鈴木(真一?)〔池端 1898: 25〕→日本側の史料から鈴木真一が東京九段の写真師兼武器商人であり、石井は『比律賓独立戦争秘聞』では「大阪の商人鈴木某」〔石井 1942: 5〕と述べ、鈴木真一に関しては「鈴木真一」〔石井 1942: 23〕とフルネームで記載しているので、本稿では大阪の商人のスズキが鈴木真一または真一ではないと考えることから、スズキのままにする。本稿でも、鈴木真一は鈴木真一のままで記し、スズキはスズキと記す。

²³³ この平田に関しては、アンダーソンの翻訳を行った山本信人も、本文中に括弧で注記している〔アンダーソン 300〕。PIR 上でも、英語で J. Hirata または、スペイン語表記で II. Hirata となっているので間違いはない。

²³⁴ 和田は、1890年7月に1期士官候補生として陸軍士官学校を卒業。時澤大尉の一期下である〔外交時報社 卒業人名簿 17〕。

これらの人々に関しては、初出の段階で脚注にて再度明記する。

2. に関しては、別節で明らかにする。

3. に関しても、別節で明らかにする。

参謀本部の側も革命側も、事態に応じて柔軟に対応しているのが、参謀本部と革命家との関係、参謀本部と革命運動への関与に関してはもう少し、柔軟に見る必要がある。なお、1898年後半に行われた陸軍の使用済み払下げ銃の購入に関しては、サニエルと池端が明らかにしているのが、本稿では先行研究をまとめる形で要約し、脚注で述べる。

サニエルの著書は自身の博士論文をもとにしたものである。1956年に日比賠償協定が締結したとは言え、サニエルが論文を執筆した時代は、フィリピンの対日感情がかなり悪い時代であった。しかしサニエルは、戦後の悪感情を持ち込まず冷静に分析をしており、明治20年代の日本の国内状況も細かく調べ、日本の史料を大量に引用し、出典も明示した論文を執筆した。この時代に日本人以外の研究者によって、これだけの論文が執筆されたのは驚きに値する。

サニエルの著書の序文では、サニエルが博士論文のリサーチを行う際に、多くの日本人からサポートを受けたことが記されている。学術面でサニエルをサポートした日本人が、木村毅（1894-1979）、岩生成一（1900-1983）、箭内健次（1910-）であった。戦後20年強という年月を考えると、彼ら日本人研究者のサポートの原動力の一部は、日本の侵略に対する研究者の贖罪の感情や、戦前のアジア人連帯幻想への郷愁であったのではないかと推測される。木村は自身が出版した著書『布引丸 フィリピン独立軍秘話』の序で、「孤軍よく健闘し、刀折れ、矢つきるも屈せず、ついに最後はアメリカの奸謀によって捕えらるに至ったアギナルド將軍の悲運に一掬の涙をそそぐとともに、また剣侠の日本人がその応援に赴いているのに思わず血を踊らさざるを得なかった・・・」〔木村 1981: 1〕と述べている。この文から少なくとも木村に関しては、フィリピン革命中から戦前の国威発揚時代に、日本国内で伝説のように語り継がれた「日本人が義侠心からフィリピン独立運動を助けた」という言説にとらわれていることがわかる。サニエルの論文が多少、日本政治史に傾き、汎アジア主義 Pan-Asianism を過大評価し、フィリピン革命をサポートする参謀本部員を「軍人の志士 *Miliraty shishi*」〔Saniel 1969: 244〕²³⁵と呼んでいるのは、日本語

²³⁵ ここでサニエルは脚注に、木村の1941年に春陽堂から出版されたとする『布引丸』を挙げている〔Saniel 1969: 244〕。しかし国会図書館で確認した限りでは、『布引丸』の出版年は1941年ではなく1944年であるので、この1944年版のことだと思われる。その後、

史料の読解及び翻訳を助けた日本人研究者に影響されたせいであろう。宮崎滔天、平山周らの「志士」と、「軍人の志士」を分けたかった意図は理解するが、参謀本部員は国益で動いていたと考えるのが妥当であり、志士と考えるのには問題がある。福島に関してサニエルは、「時澤が、フィリピン人の自由の戦士たちと、意義のあるコンタクトをとったフィリピンでの「軍の志士」であるならば、東京の参謀本部の極東セクションの長である福島大佐が、日本で「軍の志士」であった In the Philippines Tokizawa was the Japanese “Military *shishi*” who made significant contacts with the Filipino freedom fighters; in Japan, it was Colonel Fukushima, Chief of the East Asia section of the Tokyo General Staff Office...」〔Saniel 1969: 244〕と書いている。しかし、福島を志士とするのには無理がある。

サニエルの論文があるのにもかかわらず、本章で同時期を再度触れている理由は以下である：

1. 第2フェーズ初期の米西戦争期に関しては、テイラーの『フィリピン諸島における日本と反乱者たちと日本の関係を示す書類の翻訳 Translation of documents showing relations between the insurgents in the Philippines and Japan, (1898-1900)²³⁶』に基づいており、先に述べた「米西戦争ニ関スル陸軍武官報告 A798、A800、A826、A833」〔国会図書館憲政資料室〕を利用していない。
2. 池端と同様に「米西戦争ニ関スル陸軍武官報告 A798、A826、A833」、「米西戦争に関する陸軍報告書 A800」〔国会図書館憲政資料〕を利用せず、尾崎の『市民坂本志魯雄』を利用している。

1. と 2. によって、サニエルの論文では、参謀本部員の思惑や革命家の思惑、駆け引きが読み切れておらず、基本的な行動日時にも間違いが生じている。サニエルは尾崎の本を利用してため、時澤大尉とアギナルドとの会見を、論文中で「しかしながら、7月半ばになって初めて時澤はアギナルドに会った It was not until mid-July, however, that Captain Tokizawa was able to meet the rebel leader, Emilio Aguinaldo」〔Saniel 1969: 236-237〕と書いたが、6月20日の第21報告で時澤大尉は、アギナルドに面会したことを報告している〔国会図書館憲政資料室 米西戦争ニ関スル陸軍武官報告 A798〕。

この『布引丸』は1981年に再販された〔木村 1981〕。

²³⁶ 池端の論文の注(1)によると、この文書は史料説明の部分で述べる PIR-622 と同じ文書である〔池端 1898: 32〕。

6月20日頃は、アギナルドが革命政府を宣言したころであり、アメリカ軍との関係もまだ表面上は悪化していない時期であったが、7月半ばになると米西戦争のアメリカの勝利が世間で噂されてくる時期に入る。微妙なずれではあるが、この時期のずれは史料のテキスト分析に大きな影響を与える。

また、上記のテイラーの史料には1898年7月から10月にかけて、サンディコの手紙が多く引用されている。第1章でも彼の手紙を史料として扱ったが、サンディコは自己保身にたけ、口がうまい人物である可能性があり、彼の手紙の中の記述や発言には、場当たりの言い逃れ、そして自己保身のための歪曲や隠ぺいが存在する可能性が高い。その理由は以下の3つである：

1. サンディコは1898年5月から6月にかけて、アギナルドの政敵であったアルタチョと行動を共にして、ワイルドマン領事が絡んだ武器調達を行い失敗した。その後フィリピンに戻った際、アルタチョは逮捕されたのにもかかわらず、サンディコだけが逮捕を逃れてアギナルドの側近として残り、フィリピン領内で活動を続けた。
2. サンディコはいろいろな領事館に出入りして援助話を持ち掛けている。
3. 彼の手紙は、事実と違う点が見られることがある。例えば、米西戦争初期にアギナルドがアメリカ側と会った件について、仲間のマニユエル・ティニオ Manuel Tinio (ティニオ)²³⁷とフランシスコ・マカブロス Francisco Macabulos (マカブロス) に送った手紙の中で、サンディコは、アギナルドがシンガポールでデューイ提督と会合を開き、デューイ提督がスペインの圧政からタガロ民族 Pueblo Tagalo を救って、フィリピンに与えられるべき自由と独立を与えるためにフィリピンに行くことを明確に述べたと書いている [PIR 509-6]。会談の中で独立を約束したかどうかを検証する前に、アギナルドがシンガポールでプラット総領事と会った際、デューイ提督は香港にいたことから、デューイ提督との会合自体が事実ではない。この様に、彼の話には裏付けが必要な場合がある。

しかしサニエルはサンディコの記述を精査することなく使用していることがある。また逆に日本領事から政府への報告書を引用することに関しても注意が必要である。報告書で

²³⁷ 1897年末、香港にアギナルドと一緒に自己追放された。戦争時にブラス・ビリャモール Blas Villamor の下に参加。1901年5月1日、アギナルドの要請にしたがってアメリカのベル准将に降伏。1907年ヌエバ・エシハの知事となる。

はサンディコの談として日本に好意を寄せている旨を記しているが、先の3でも述べたように、実際には日本の領事がサンディコの二枚舌に気が付いていた可能性は大きい²³⁸。日本の貿易の拡大や日本人商人保護のため、再開したばかりの在マニラ日本領事館が継続するように、領事が政府に対して、フィリピン人の日本への好意を強調した可能性もある。

サニエルも池端と同じく、1898年から1898年末までの日本国内での革命家の武器調達の際緯を詳しく説明している。池端の論文と同様、陸軍払下げ銃の件に関しては、異論・反論はないので、本稿では池端の論文とともにその経緯を脚注にて明記する。

波多野の論文も以下の理由から本章で同時期を再度扱う：

1. フィリピン人革命家と接触した平田という人物を、平田徳衛としている〔波多野 1995: 14〕。
2. 米西戦争勃発以降の日本での活動に関しては観戦武官報告を合わせて6頁ほどの記述しかなく、更なる詳細説明が必要である。
3. フィリピン側の動きは池端の論文を参考にしており、一次史料をチェックしていない。
4. 1898年8月から9月頃、「独立軍が日本への期待を暫時高めていく」〔波多野: 1995 23〕ことで日本側が躊躇する姿を描いているが、実際は革命側は、他の国にも話をもちかけている。
5. 「布引丸」事件が日米に与えた政治的インパクトにより、参謀本部は南進から北進に転じたとしているが、その後も参謀本部はフィリピンで活動している。

1. に関しては、先に述べたように、本稿では「平田讓衛」を採用する。

2. に関しては、波多野の論文は、日本のフィリピン革命への関与を、日本政治史から分析しているので、日本側の史料内の細かい記述よりも、政治的に重要性のある出来事に注目している。しかし本章はフィリピン革命第2フェーズの領外革命家たちと参謀本部の対応を分析することがテーマであるので、もう少し史料の細かい部分まで読み込んで分析を試みたい。

3. に関しては、日本政治史の観点からの論文であるため止むを得ない。したがって特に本章の4-2では、参謀本部が直接的な軍事援助をした例として、フィリピン側の史料や日本の史料を使って、参謀本部が原禎（原）砲兵大尉²³⁹とその他の陸軍軍人たちをフィリ

²³⁸ これに関しては、別項で述べる。

²³⁹ 原は1889年陸軍士官学校7月卒業、第11期士官生徒。卒業名簿の名前は原貞となっ

ピンに送り込んだ出来事について、追加説明を試みたい。

4. に関しては、前述したように日本にのみ救いを求めているわけではなかった。

5. に関しては、後述するように義和団の乱の間もその後も、参謀本部は密かにフィリピンに人を送っていた。

波多野は論文内で「布引丸」事件を扱っている。「布引丸」事件は日本政治史などで詳しく述べられており、フィリピン側の史料でも新たな発見はないので、本稿では扱わない。

「布引丸」事件は革命側に武器が届かなかつたばかりか、日本の関与がアメリカの知る所となったという点で、日本とフィリピン革命側に二重にダメージを与えた。しかし日本国内では、その後「布引丸」に積み込まなかつた武器の処分の過程で、中村代議士のスキャンダルが持ち上がり、日本政治史にもインパクトを与える事件となった。

平間に関しても、以下の理由が言える：

1. 米西戦争勃発から比米戦争までが 2 頁と少ない。
2. 日米関係という観点から書かれた日本のフィリピン革命への関与がテーマの論文なので、フィリピン側の一次史料が使われていない。
3. 比米戦争勃発後すぐに「布引丸」事件に触れ、原大尉の送り込みに約 2 頁半を費やしている。

1. に関しては、本章では参謀本部の関与に注目しているので、その点に関してももう少し詳しく説明を加えたい。

2. に関しても、平間の論文が日本史の観点からの論文であることを考えると当然のことであり、本章では日本側では手に入らない史料も加味して、論を進めていきたい。

3. に関しても、波多野の場合と同じく、PIR を利用して他の活動を埋めていきたい。

波多野と平間については、日本側の史料だけを使っているという制約があるため、米西戦争後は、「布引丸」事件に飛んでしまうという欠点がある。また、両者ともに日本政治史、日本史の観点から論文を書いているために、日本中心史観が強い。池端もサニエルも、基本的には日本とフィリピンのどちらにも偏らずニュートラルに書いているが、1899 年に入ってからの記事はそれほど詳しくない。したがって、本稿では 1898 年の出来事を再度見直した後、1899 年以降の参謀本部の活動を明らかにしていく。また、革命家と参謀本部員の活動を細かく見るためには、政治史や経済史などの 1 つの専門分野に拘らずに、彼らの活動を見ていく作業を行う必要があるため、専門分野には拘らずに出来事を追っていき

ている。時澤大尉とは同期になる。1899 年当時は砲兵大尉であった。

い。

日本側の資料は、主に外務省外交史料館文書の米西戦争関連史料、国会図書館憲政資料室の米西戦争関連史料を利用し、その他の史料は随時記載する。

この章で利用している PIR のフォルダーは主に以下の 5 つである：

PIR 903-5——基本的には奈良原忍（奈良原）大尉²⁴⁰とラモスとの活動に関する書類一式で、1902 年 1 月 10 日付けでアメリカ軍フィリピン司令部が准将 General²⁴¹に向かって書いたレポートが一緒に入ったフォルダーである。その他にも、アメリカ当局のスパイに関する調査報告書なども含まれている。

PIR 622——1898 年から 1900 年にかけて、アメリカ軍が集めたフィリピンと日本の関係を示す 59 の書類を翻訳したフォルダーで、作成されたのは 1901 年 1 月 4 日である。

PIR 780B——主にフィリピン人革命家と日本人支援者——特に参謀本部とその関係者との書簡や電信、メモなどがファイルされているフォルダーで、その書簡はかなりの数になる。

PIR 2036——比米戦争関連文書の分析官であったテイラーが、日本の参謀本部とフィリピン人革命家たちとの関係を、時系列に再構築し分析した文書が入ったフォルダーである。アメリカ陸軍省諸島局がテイラーに対して、日本との関係についてレポートを上げるように口頭で命令し、テイラーは桂—タフト会談²⁴²の 2 ヶ月ほど前の 1905 年 5 月 1 日に、この PIR-2036 を上げた。この中でテイラーは、独立側を支援したのは軍の集団 Military Party だと明言し、日本政府はアメリカと戦争する状況を好まなかったが、それが参謀本部への抑止力にはならなかったと、暗に日本政府と参謀本部の乖離を指摘している。このレポートには、フランク・マッキンタイア Frank McIntyre（マッキンタイア）諸島局局長のメモも含まれており、レポートが陸軍長官と大統領

²⁴⁰ 陸軍士官学校の卒業名簿では奈良原「忍」の名前を見つけることはできなかったが、時澤大尉と原大尉の 1 期前の卒業生の中に奈良原「矢太郎」という名前を見つけた〔外交時報社 卒業人名簿 13〕。それ以外、1900 年前後で大尉になっている可能性のある奈良原という苗字の卒業生はいない。この卒業名簿によると、「奈良原矢太郎」は明治 37～8 年戦役で亡くなっており、「奈良原忍」も 1905 年頃に亡くなっている。両者ともに砲兵ではなく歩兵であることから、同一人物であろうと思われる。

²⁴¹ この准将が誰を示すのかは史料には記載されていない。

²⁴² 桂太郎内閣総理大臣兼外務大臣と、タフト陸軍長官の会談は、当時は秘密裏に行われ、アメリカが朝鮮への介入をしない代わりに、日本はフィリピンに介入しないことを密約した。

から、1905年5月22日に戻ってきたと書かれている。当時の大統領はルーズヴェルト、陸軍長官はタフトである。このファイルは桂—タフト会談の交渉カードの1つに使われた可能性がある

PIR Books C-15——ラモスの義妹（日本人妻の妹）からマニラのラモスに宛てた手紙である。手紙の内容は日本から送った植木や物品などの、他愛もない日常の話題である。興味深いのは、このファイルの最初に収められた、1916年6月21日付けマッキンタイア局長宛の、テイラー²⁴³のレターである。このカバーには、同月19日付けのマッキンタイア局長の手紙が添付され、アメリカ陸軍が日本語を完全に理解できるオフィサーを持つべきだとの、テイラーの提案が添付されている。1900年のラモスの義妹の手紙を1916年に再度見直している様子から、第1次世界大戦中になっても、アメリカ側が当時の参謀本部の行動に疑念を持ち続けていることがわかる。

本章ではこれら5つの史料を、アメリカ軍の手によって編集・ファイルされたことを鑑みて、その史料の偏向性を十分理解し、精査した上で利用する。PIRは押収史料が主であるため、押収元によって、その情報に偏りが生じる。事実、日本関係の押収史料は、ほとんどが参謀本部員とラモスの書簡であり、その他の革命家とのやりとりはあまりない²⁴⁴。したがって、その他にも、適宜、PIRや他の史料を使い引用する。

日本にきた革命家は、プロパガンダ活動も行い、日本の知識人や大陸浪人とも関係を持ったが、本稿では革命運動の成否を左右する軍事活動と、その後のアメリカのフィリピン政策に大きな影響を及ぼした参謀本部の活動に限定して、論を進めていきたい。

1. 米西戦争マニラ湾海戦勃発までの概略（1895年8月—1898年4月30日）

1890年代に入り、フィリピン領内でフィリピン人からの改革要求が高まる中、スペイン当局の弾圧を逃れるために、1895年8月にラモスが日本にきた。1896年5月7日付け神奈川県警部長吉田弘蔵から警保局長小野田元照に対する報告書の秘甲第164号には「同人ハ去二八年中英国ヲ経テ日本ニ来リシト云ウ」〔外務省外交官史料文書 米西戦争一件 雑第一巻 馬尼刺人ニ関スル報告 281〕と書かれている。この報告書の別紙報告には、ラモスはフィリピンが自力で独立することを諦め、他の国の保護の下での独立することを望ん

²⁴³ テイラーは当時、軍のライブラリー担当になっていた。

²⁴⁴ 本章8-1で扱うが、アメリカのシークレット・サービスが、1901年12月29日にラモス宅を家宅捜索した際に押収した書類ではないかと思われる。

でおり、大隈重信に面会した後大隈の言葉に感じ入り、まずはラモス自身が日本に帰化して、その後マニラに日本人の移住を計ろうと決意した旨などが記されている。つまり、大隈のアドバイスかラモス独自のアイディアかどうかは別として、1896年5月の時点ですでにラモスは日本への帰化を考え、フィリピンに日本人を送り込み、日本の保護下での独立を考えていたことになる。その後のラモスの行動を考えると、この考え方はこの後、ラモスの活動のベースとなった。この大隈との接触は法律家の平田を通して行われた〔外務省外交史料館文書 米西戦争一件 雑 第一巻 馬尼刺人ニ関スル報告 285〕〔PIR 780B〕。平田は法学博士、弁護士〔越山 1900: 341-343〕で、東京専門学校（現：早稲田大学）で法律を教えていた。平田はフィリピン人革命家のアドバイザー的存在であり、1897年の2月1日の神奈川県知事の秘甲第32号では、平田がマニラ人から武器買入れを託された旨が記されている〔外務省外交史料館文書 米西戦争一件 雑 第一巻 馬尼刺人ニ関スル報告 306-207〕。1897年当時に平田が書いた手紙にはアルタチョについての言及もあり、同年12月17日には、ラモスがロンドンの平田に対して引っ越しの挨拶を行っている〔PIR 780B〕。1899年3月、平田は孫逸仙と共にフィリピン人革命家ポンセの家に泊まり〔Ponce 292-296〕、逆にポンセは1901年2月24日、香港へ休暇で向かう途中に、大阪市にいた平田に会いに行った。その後も平田は1901年の7月9日、8月3日に、神戸栄町一丁目のオフィスからラモスに向けて手紙を送り、ラモスや参謀本部員にアドバイスを行っている〔PIR 903-5〕。この他にもラモスの支持者の手紙や、神奈川県知事から外務大臣への報告などに平田の名前が散見されることから、平田は少なくとも5年間は、フィリピン革命家や参謀本部員と交流していた。

上記秘甲第164号〔外務省外交史料館文書 米西戦争一件 雑 第一巻 馬尼刺人ニ関スル報告 286-294〕と1896年10月の在日スペイン公使からのクレームに関する書簡〔外務省外交史料館文書 米西戦争一件 雑 第一巻 比律賓島独立ノ陰謀ヲ企テタル在本邦西班牙国人ノ件ニ関シ本邦駐在荷同国公使ヨリ申出ノ件 229-251〕には、D. コルテスの一族が来日し、日本の著名人との交流を図った様子が記されている。上記スペイン公使のクレームの中には、ラモスがイサベロ・アルタシヨ・イ・ビキユスというフィリピン人らと、神戸で会合を開いたことが書かれている。このイサベロ・アルタシヨ・イ・ビキユスは、後にアギナルドと対立するアルタチョであろうと思われる。同年12月19日には、アレハンドリノが来日し、その後ラモス宅に滞在した〔外務省外交史料館文書 米西戦争一件 雑 第一巻 馬尼刺人ニ関スル報告 301-304〕。アレハンドリノは日本で武器を調達

しようとしたが〔Alejandrino 1949: 64〕、資金不足に悩まされた〔Saniel 1969: 257〕。日本のラモスとアレハンドリノ、そしてアルタチョの関係は1898年に入っても続いており、1898年2月2日のラモスからアルタチョへの手紙では、ラモスは最後に愛をこめてと記している〔PIR 780B〕。また、米西戦争勃発後の7月13日にもラモスはアルタチョに手紙を出し、5月4日と9日のアルタチョの手紙を受け取ったこと、そして米西戦争前にアルタチョが日本に来なかったことを残念に思っていることを記している〔PIR 780B〕。少なくともこの時ラモスは、アルタチョを、日本に援助を求めている同志と思っていた。しかし、この後、比米戦争中にラモスは何回かアルタチョとコンタクトをとろうとしたが、アルタチョから拒絶されてうまくいかなかった〔PIR 780B〕。こうやってラモスを中心に一部のフィリピン人革命家たちは、日本で活動基盤を築いていった。

2. 新たなフィリピン人革命家の来日と比米戦争までの活動（1898年6月19日—1899年1月）

1898年5月1日²⁴⁵にマニラ湾海戦が勃発し、フィリピンにおける米西戦争が始まった。香港委員会は、革命運動に対する日本の援助の可能性を探るため、1898年6月19日にフィリピン人活動家のポンセを、日本に差し向けた〔PIR 477-6〕。当初はF. リチャウコも一緒に来るはずであったが、アゴンシーリョが体調不良となったためにF. リチャウコは一時的に香港に残った〔PIR 477-6〕。ポンセは6月29日に日本に到着した〔Ponce 1932: 116〕。7月5日、F. リチャウコは香港を出発した。7月26日のアゴンシーリョ宛てのポンセの手紙では発信者がポンセとF. リチャウコとなっている²⁴⁶〔Ponce 1932: 131〕ので、7月26日にはF. リチャウコは日本に到着していた。日本の援助を求めめるために、ポンセたちはアゴンシーリョによって、「10項目の任務を革命委員会から与えられた」〔池端 1989: 22〕²⁴⁷。

²⁴⁵ 米西戦争中の1898年5月から7月にかけて、宮崎滔天が、『九州日報』に孫逸仙の『Kidnapped in London』を「清国革命党領袖孫逸仙幽閉録」と翻訳し紹介した〔陳・安井 2002〕。つまり孫逸仙の著作を、日本の民間人である「志士」たちが、日本に紹介したのである。こうして、日本人、中国人、フィリピン人革命家たちがこの後、つながっていく基盤が築かれていった。

²⁴⁶ 1898年7月12日のポンセの手紙に、「リチャウコが到着したならすぐに、我々は返事を決めるであろう（後略）En quanto llegue aquí dicho amigo Lichauco, acorderemos las contestaciones,...」〔Ponce 1932: 129〕という一文があるので、F. リチャウコは12日から次の手紙の26日の間に日本に到着した。

²⁴⁷ サニエルもこの10項目を論文上に掲載している〔Saniel 1969: 258-259〕。

ポンセは到着後、碓山壽町警察署署長²⁴⁸を紹介され、1898年7月の初め頃に、碓山署長に伴われて福島大佐の部下の和田大尉の家を訪ね〔Ponce 1932: 116-120〕、和田大尉が高島鞆之助陸軍大臣への仲介をする段取りをすることになった。日本国内で福島大佐とフィリピン人革命家たちの連絡役になったのは、この和田大尉であった。サニエルは、「フィリピン人が自由のために戦うことに共感する日本の志士との仲介者として、ラモスが役に立った。横浜〔港?〕の本部長の碓山を紹介したのは、このラモスであった（後略）Ramos served as his contact man with the Japanese *shishi* sympathetic with the Filipino's fight or freedom. It was Ramos who introduced him to Ikariyama, Superintendent [of port?] of Yokohama...」〔Saniel 1969: 261〕と述べ、民間人以外の協力者も志士にカテゴライズしているが、碓山署長は警察署長の職務として、参謀本部から頼まれた外国人の諸問題に対応していたのであって、フィリピン革命に強く共感していたとは思えない。『碓山警視頭彰録』を読むと、外国人居留地などを抱える横浜の警察署長の職域は、現在ほど限定されていた訳ではなく、多様な要請に対して、かなり柔軟に対応していたようである。またサニエルは、福島大佐、和田大尉、碓山署長、他が、「帝 The Mikado」によって作られたと言われるフィリピン問題のメンバーの一員であるとも述べている〔Saniel 1969: 261〕。そのことは確かにポンセの手紙にも書かれているが〔Ponce 1932: 117〕、天皇がフィリピン問題に関して関与をほのめかした史料は見つけておらず、天皇と革命家との関係に関しては、本稿では保留としたい。

1898年7月17日には、福島大佐がフィリピン人革命家に送った質問への答えが、ラモスによって英語に翻訳され、福島大佐に送られた〔PIR 420-7〕〔PIR 622〕。ここには以下の6点、1) アギナルドの政府の現状、2) アルタチョとアギナルドの関係、3) 戦争に投資する金額、4) 革命組織の外交、5) 香港委員会、6) 武器の輸送の可能性——についての答えが述べられており、フィリピン側と日本側がお互いの状況を把握しようとする様子が伺える。

²⁴⁸ 他の論文では碓山と記しているものもあるが、1898年7月4日のアゴンシーリョとF. リチャウコに宛てたポンセの書簡に「S. イカリヤマ氏は彼の名刺によると統括職にあり Sr. S. Ikariyama, que es Superintendente según reza su targeta」〔Ponce 1932: 117〕と記されていることから、本稿では『碓山警視頭彰録』で記されている「碓山晋」をS. イカリヤマだと断定する。碓山署長は東京外国語学校で学び、後に警察官になった人物で、英語に通じていることから、外国人居住者の多い横浜壽町（1898年7月6日より横浜加賀町）の警察署長になり、犯罪だけでなく、外国人の絡む諸問題、頼みごとなど多方面に対応していた。碓山署長はこの後、横浜に住むポンセやラモスと東京にいる参謀本部の大尉たちとの連絡役になり、フィリピン人革命家たちの世話をしたりしていた。

この後 7 月 20 日に香港のアゴンシーリョがアギナルドに書いた手紙には平田と外務次官 Vice Secretary²⁴⁹によって、ポンセが福島大佐と会合を持ったことが記されている [PIR 2036]。ラモスからアゴンシーリョへの手紙によると、福島大佐に会ったのは 7 月 8 日であった。ポンセは福島のことを「ミスター福島は軍事問題に関して学識深い人物とみなされている。(中略) 彼は本当に学識深い。彼は地理学を熟知しており、自国語以外にフランス語、英語、ドイツ語、中国語を話す Mr. Fukushima es tenido aquí como sabio en cuestiones militares...Es muy ilustrado efectivamente. Le es muy familiar la geografía y habla francés, inglés, alemán y chino, además de su natal idioma...」 [Ponce 1932: 127-128] と述べており、その後 9 月 16 日の手紙でも「福島大佐は我々の大義に熱狂的になる人々の 1 人である Este coronel (Fukushima) es uno de los entusiastas por nuestra Causa」 [Ponce 1932: 181] と述べて、とても高い評価を下している。

この頃ポンセと F. リチャウコは武器調達を積極的に行っており、1898 年 8 月 20 日、アゴンシーリョに対して、「今日の午後ラモスが、ライフル・システムの見本を我々に持ってきた。情報によるとバンドル²⁵⁰でオーストリア軍が所有していた Este tarde vino Mr. Robertoson á traernos muestra de un rifle sistema Werndle que según la nota perteneció al ejército austriaco」 [Ponce 1932: 150] と報告している。バンドル銃購入の提案は拒否されたが、8 月 23 日にはまた別の武器購入の提案を行い [PIR 420-9] [PIR 622]、翌日にアゴンシーリョに対し購入したいモーゼル銃の金額の訂正を行うなど [Ponce 1932:157-158]、ポンセと F. リチャウコの 2 人は、武器調達に関する活動を精力的に行った。

またこれと同時期の 1898 年 8 月 30 日、福島大佐は日本陸軍が使っていた村田銃の購入の方法をポンセと F. リチャウコに伝えた [PIR 420-9] [PIR 622]。ポンセは、日本軍払下げの村田銃に関する話を進める一方で、9 月 4 日の香港のアゴンシーリョ²⁵¹への手紙で、様々なライフルや武器、特に荷下ろしに関してドイツ領事の保証書が付くモーゼルの価格なども記している [PIR 420-9] [PIR 622] ことから、日本国内でポンセと F. リチャウコが彼らの持つ全てのチャンネルを使って、武器購入のために活発に動いている様子が伺える。村田銃の取引の具体的な話についても、ポンセが 9 月 12 日にアパシブレに [Ponce

²⁴⁹ 小村寿太郎だと思われる。サニエルも小村だと断定している [Saniel 1969: 262]。

²⁵⁰ ライフル銃の名前

²⁵¹ この時には、すでに香港の代表はアパシブレに代わっていたが、まだこの時はアゴンシーリョの偽名である W.ジョーンズ Jones 宛てで手紙が書かれていた。

1932: 168-171)、そして翌 13 日にはマビニに [Ponce 1932: 177-179] に説明している。しかし、香港側で F. リチャウコを必要としていたらしく、9 月 18 日にアギナルドは、F. リチャウコ²⁵²に代わって、フランシスコ・リベロ Francisco Rivero (リベロ) が、日本でポンセと活動するようにと命令し、信用状を送った [PIR 390-2]。これにより 11 月半ばからは、リベロが日本で活動するようになった。

1898 年 9 月 8 日に福島はラモスに対して、「親愛なるラモス (中略) その会社は東京、銀座にある大倉カンパニーで、東京銀座大倉組である (後略) Dear Mr. Rams...The Firm is Okura Company, Ginza Tokyo, 東京銀座大倉組, very big and noted company in Japan...」²⁵³と大倉の会社を紹介する手紙を送った [PIR 780B]。そして 9 月 19 日のラモスへの手紙では、「私はミスター大倉に手紙を書いた I wrote Mr. Okura」 [PIR 780B] と、福島大佐自身が大倉に直接手紙を書いたことを述べている。大倉がかつて武器商人であったことを考えると、この紹介も武器がらみの可能性が非常に高く、政商大倉とフィリピン人革命家は、このように結びついていった。

福島が結びつけようとしたのは政商だけではなかった。1898 年 9 月 25 日にポンセは「一昨日福島大佐の家に中国の大使がいた。後者は前者に、ルソンの人々は極東地域のあるべき例となると述べた。それはつまり部外者の支配を拒絶するということである Estando anteayer el embajador chino en casa del coronel Fukushima, éste dijo á aquél que los luzones están dando ejemplo de lo que se debe hacer en est región del Extremo Oriente, que es rechazar toda dominación estraña」 [Ponce 1932: 192-193] と中国人に会ったことを述べている。10 月 16 日に 20 万²⁵⁴の「レシート半券 resguardo」と共に香港を発った G. アゴンシーリョ [PIR 431-12] は、秘甲第 767 号によると、11 月 8 日に日本に到着した²⁵⁵ [外務省外交史料館文書 米西戦争一件 雑 第一卷 馬尼刺人ニ関スル報告 367-369]。その後 11 月 9 日にポンセは G. アゴンシーリョとともに、当時平河町に住んでいた康有為 Kwang Yu-wei ²⁵⁶の秘書と思われる人物とも会った [Ponce 1932: 224]。翌

²⁵² 1898 年 11 月 10 日、F. リチャウコは日本を発って香港に帰り、11 月 22 日にリベロが日本に到着した。

²⁵³ 東京銀座大倉組の部分は漢字で記されている。

²⁵⁴ ドル (銀) かペソと思われる。

²⁵⁵ G. アゴンシーリョは為替手形の換金で失敗し 12 月 7 日に香港に戻った [Ponce 1932: 251]。

²⁵⁶ または Kwang Tu-wei と書かれている。米西戦争観戦武官としてフィリピンと香港を往復していた明石歩兵少佐は、1898 年 7 月 17 日の報告で、香港で入手したと思われる康

日ポンセはアパシブレに対して、康有為が光緒帝 Emperor Kwang Hou とともに光緒に権力を戻すための革命を準備しているとして、以下を述べた：

しかし、革命の用意と流れのために、日本の助け以外にも、我々²⁵⁷の助けが必要とされている。このために、康有為は我々の政府と諜報活動をするのを望んでいる。日本政府の指示や、その庇護と保護のため、亡命中国人改革主義者たちはここにいる。

Pero para las preparaciones y curso de la revolución se necesita, además de la ayuda del Japón, la ayuda nuestra y con este objeto quiere Kwang Yu-wai ponerse en inteligencia con nuestro Gobierno, á indicación del mismo Gobierno japonés, á cuya salvaguardia y protección están aquí los emigrados chinos reformistas.

[Ponce 1932: 224]

この手紙の中でポンセはアパシブレに対し、中国人革命家を擁護することは正しいことであり、中国人たちの資金と武器もフィリピン革命に利用できることを強調している。これに対して香港のアパシブレはアギナルドに対して、12月14日に、中国革命党のメンバーとの密かな関係をアレンジしたいと書いている [PIR 390-4] [PIR-622]。しかし在香港アメリカ領事の報告書を見る限りでは、中国の港における香港委員会の武器入手は商人を通して行っており、香港のフィリピン人たちが中国人革命家及び、彼らのブローカーと武器のやり取りをしたかどうかは不明である²⁵⁸。

1898年11月10日以前に「福島大佐は勝海舟伯爵にポンセを紹介した el colonel Fukushima le presentó al conde Katsu」 [PIR 2039] [Ponce 1932: 223]。勝はフィリピン革命に興味をもっており『氷川清話』の中で、ラモスのことについて大きい人物だと評している。しかし翌年1月に勝は急死した。11月12日にはリベロも日本に到着し、武器調達に関する活動が本格的に始動した [Ponce 1932: 237-238]。1898年10月19日のポンセの手紙によると、香港委員会と一緒に武器調達を行っていた天津にあるルイス・スピッツェル社 Louis Spitzel and Co.の、ルイス・スピッツェル Louis Spitzel (スピッツェル)²⁵⁹がアメリカから帰国する際、日本に立ち寄っている。これに関しては参謀本部関連の武

有為の動向についての情報を伝えている [国会図書館憲政資料室 米西戦争ニ関スル陸軍武官報告 A800]。戊戌の政変で、康有為は上野季三郎香港領事の手を介して、宮崎滔天とともに10月19日に香港を出発し、24日に神戸に到着、その足ですぐに汽車で東京に向かった [陳・安井 2002 43]。

²⁵⁷ フィリピン人革命家たち

²⁵⁸ 孫逸仙とポンセの間には、武器についての相互了解があったとされている。

²⁵⁹ スピッツェルは天津のルイス・スピッツェル社 Louis Spitzel and Co.の社長。香港委

器調達と関係するのかは不明であるが、この手紙には、上海のスピッツェル社のスターマンがスピッツェルを迎えに日本に来たと書いてある。したがって、10月19日あたりに天津の武器調達エージェントの会社の人間が2人、日本にいたことになる〔Ponce 1932: 212-213〕。第4章で詳しく述べるが、この後南京や上海の武器調達では、香港委員会が武器ブローカーとともに、武器を日本からきたように偽装することも行っている。その後30日のポンセからマビニへの手紙では、新たな武器交渉が始まることが示唆されている〔Ponce 1932: 245-248〕。

ポンセからアパシブレへの手紙では、リベロとその家族は、2日間ラモスの家に逗留した後、ラモスの家の寒さには耐えきれない、と居留地のホテルへ引っ越してしまった〔Ponce 1932: 242〕。彼らの滞在費に関しては²⁶⁰フィリピン側から何も指示もなく、ポンセは不満を漏らしている〔Ponce 1932: 242-243〕。リベロの滞在費を誰の勘定で払うのかがはっきりしない間に、リベロがホテルに移動してしまったことに関して、ポンセは戸惑いを見せており、香港同様、組織に多少の軋みが生じていた。しかも武器交渉に関して福島大佐は、ラモスに対して第2次山県有朋内閣が成立するまで数日間は待つと連絡してきた〔Saniel 1969: 248〕。しかし、池端によると、この武器購入交渉は、「福島を交渉相手とする武器購入交渉は12月初めには再び明るい展開を見せるようになった」〔池端 1989: 25〕。陸軍の村田銃払下げの経緯とその失敗については池端とサニエルがその論文で明らかにしている〔池端 1989: 24-30〕〔Saniel 1969: 262-268〕²⁶¹。

員会の武器調達に関わっていた。シルベスターのビジネス・パートナーでイギリス臣民。李鴻章のパートナーだと自称している。ワイルドマン総領事の報告からすると、ユダヤ人であったようである。中国大陸のエージェントを使った武器調達は第4章で述べる。

²⁶⁰ ラモスに関しては、日本政府から月40ドルが支払われていることを、リベロが手紙で述べている〔PIR 622〕。

²⁶¹ 払下げ銃購入未遂について先行研究を要約すると以下になる。1898年8月30日、福島大佐はポンセらに、陸軍で使っていた村田銃の払下げの可能性を示唆した。ポンセはこの村田銃購入の利点を、マビニに書いて送った。香港委員会のG. アゴンシーリョは、10月中旬に購入資金を携えて日本に向かった。しかし、10月下旬、日本において、政権の座にあった憲政党が分裂し第1次大隈内閣は辞職したため、大隈内閣と進めてきた購入交渉は一時頓挫した。その後の第2次山県内閣では、フィリピン問題に共感する軍部が優勢を占め、憲政党と連携して議会を乗り切れる見通しがついたので、福島との武器購入交渉は再開された。アギナルドは武器を至急調達するようにラモスに求め、資金の目途も立てた。この契約のため、12月末にリエゴ・デ・ディオスが来日した。ポンセらは12月末まで、福島を日本の軍部並びに政府を代表する人物と理解していた。しかし、1899年1月9日に、ポンセらは、日本政府がアメリカを恐れて武器払下げを行わないと判断して、この武器購入交渉を中止した。〔池端 1989: 24-30〕。サニエルは山県内閣が11月8日に成立した後も何も進展がなく、12月1日まで、福島から連絡がなかったとしている。12月7日、

1898年12月1日にポンセは青木周蔵外務大臣の友人の大阪の商人、スズキ²⁶²を紹介してもらったことを、アパシブレに手紙で述べている〔Ponce 1932: 250-251〕：

機会が到来した時のために、ついに、ある人に会った。その人は大阪の商人のミスター・スズキで、現外務大臣の青木伯爵の友人である。彼は貸汽船をオファーしている。純然たる日本人たちだけが乗務し、台湾への多くの調達を行ったので、荷揚げに関してこのクラスにはなれているという利点がある。

Para cuando llegue la ocasión, por fin se ha encontrado á uno, comerciante de Osaka, Mr. Suzuki, amigo del conde Koki²⁶³, actual Ministro de Estado para Negocios Extranjeros, que ofrece su vapor para alquilar. Hay la ventaja de que va tripulado por puros japoneses y está acostumbrado á esa clase va tripulado por puros japoneses y está ya acostumbrado á esa clase de desembarcos, por las varias expediciones que hizo á Formosa.

アギナルドはポンセにこの村田銃を買うように命令した〔Saniel 1969: 262-268〕。

²⁶² 史料などからこの時期革命家と関係のあったスズキという人物は少なくとも、以下の2人がいた：

1) 九段の写真師鈴木眞一（本名：岡本圭三）——ラモスは、九段で写真店を営み海運業も行っていた二代目鈴木眞一と親しくしていた。初代鈴木眞一は、横浜の写真師下岡蓮杖の弟子として横浜に写真館を開いた。この初代鈴木眞一は、同じ下岡蓮杖の弟子の岡本圭三という人物を二代目鈴木眞一にし、東京九段の支店を任せた。二代目鈴木眞一は、日清戦争後に海運業に手を出して財産を失ってしまった（よこはま人物伝 162-165）〔F・ベアド写真集 I 198〕。しかし、フィリピン人革命家の手紙や日本の当局側の報告書からすると、1900年のこの時期には、二代目鈴木眞一はまだ、武器商売を行っていたようである。また、1899年5月31日の「秘甲第94号」には、「昨年十月ニ至リ反徒ノ大統領「アギナルト」ノ秘書官「ポンセ」ハ麴町区飯田町三丁目五十三番地写真師鈴木眞一ニ銃器ノ周旋方ヲ依頼シ鈴木ハ故川上大将ノ眷顧ヲ受ケ居ルヨリ大将ハ陸軍大臣及福島大佐ニ謀リ遂ニモーゼル、スナイドルノ両銃ヲ合セテ六万挺ヲ払下クルニ（後略）」〔外務省外交史料館文書 米西戦争一件 雑 第一巻 中村弥六ナル者馬尼刺反徒援助ノ目的ヲ以テ兵器類密輸送ニ関スル件 152〕と書かれており、鈴木が関わった武器購入の顛末が報告されている。この報告から、二代目鈴木眞一が、銃器、船に関して、参謀本部と関わりがあることがわかる。1899年2月3日には、鈴木眞一本人からラモスに電報が打たれており〔PIR 780 B〕、九段の鈴木眞一とラモスは直接やりとりを行う関係でもあった。

2) 大阪の商人スズキ——石井は『比律賓独立戦争秘聞』で「大阪の商人鈴木某」〔石井 1942: 5〕と述べており、ポンセは青木周蔵外務大臣の友人と述べ〔Ponce 1932: 250-251〕、台湾と関係があるということから、神戸の鈴木商店の可能性も考えたが、A) スズキの場所が大阪であること、B) 鈴木よねは女性でありミスターではなく実際に会社を動かしていたのは番頭の金子直吉であること、C) 鈴木商店が樟脳取引の販売権を手に入れたのが1899年であり多少のずれがあること——の3点から鈴木商店の可能性を排除し、スズキとしておく。

²⁶³ PIR 390-6 と PIR 622 にある同じ手紙では Aoki になっているので青木と翻訳する。

[Ponce 1932: 250]

大倉の時もそうであるが、彼らは軍や政府の高官を通して日本の商人との関係を築き、台湾を経由した武器調達も視野にいれて活動していた。



『フィリピナス・アンテ・エウロパ』 第34号 日本におけるフィリピン人革命家と孫逸仙 1900年頃

3. 陸軍観戦武官を中心としたフィリピン領内での革命家との交流(1898年5月—11月)

1898年5月29日、参謀本部の時澤砲兵大尉が、新任の三増二等領事とともに、軍艦「秋津洲」で米西戦争の観戦武官としてマニラに来た〔尾崎 1932: 363〕。1898年7月27日の陸軍大臣桂太郎に宛てた陸軍省の甲第1787号によると、香港に派遣中の時澤大尉を、アメリカ軍の視察に行かせる旨の報告がなされているので〔外務省外交史料館文書 米西戦争一件 雑 第二巻 米西戦況視察トシテ陸軍砲兵大尉時澤右一米国軍隊へ従軍ノ件 619-620〕、時澤大尉は香港をベースにしてマニラで活動を行っていた。時澤大尉は1894年6月、大崎正吉、鈴木天眼、日下寅吉らと、福岡に向かいその後天佑侠²⁶⁴に参加し〔玄洋社々史編纂會 1917: 439〕、日清戦争では天佑侠の東面軍の大將として戦った〔玄洋社々史編纂會 1917: 462〕²⁶⁵。米西戦争中、マニラでは明石歩兵少佐も時澤大尉と共に活動しており、1898年6月22日には、マニラから第27報告を送っている²⁶⁶〔国会図書館憲政資料室 米西戦争ニ関スル陸軍武官報告 A800²⁶⁷〕²⁶⁸。

1898年6月20日第21報告²⁶⁹で、時澤大尉はアギナルドに面会したことを報告している〔国会図書館憲政資料室 米西戦争ニ関スル陸軍武官報告 A798〕。1898年7月8日にサンディゴは、日本領事館にいる時澤大尉に対して、マラボン Malabon のサンディゴを訪ねてほしいと頼む手紙を送っている〔PIR 416-9〕〔PIR 622〕。1898年7月14日の第30報告で、時澤大尉は「アギナルド」若シクハ「サンリーコ」ナル者ニ就イテ質ス最良トスレドモ「アギナルド」ハ性忧黙ニシテ多ク語ラズ且ツ多忙ニシテ長時間ノ談話ヲ試

²⁶⁴ 1894年に朝鮮で起きた東学農民反乱に参加する目的で、結成された日本人有志のグループ。しかし実態は時澤大尉のような軍人と玄洋社（アジア主義を唱える政治団体）の社員で構成されていた。

²⁶⁵ 池端は「時澤は群馬の出身で、軍職にありながら荒尾精に私淑し、日清戦争時には休職となって天佑侠に参加した人物であった」と述べている〔池端 1989: 17〕

²⁶⁶ 6月14日のアゴンシーリョと思われる人物からアギナルドへの手紙では、アカシ Acasi という名前が出てくるので、明石少佐が香港で香港委員会のメンバーと会った可能性がある〔PIR 507-6〕。

²⁶⁷ A800は明石少佐の報告書で、A789は時澤の報告書である。

²⁶⁸ 奈良原大尉も尾崎の『弔民坂本志魯雄』によると、1898年の米西戦争時に明石少佐や時澤大尉と共にマニラにいたことになっているが、明石少佐や時澤大尉の報告書、または海軍の「秋津洲」艦長の齋藤實の1898年7月22日の報告書にも、明石少佐と時澤大尉、そして三井物産社員小林正直、神山辰次郎の名前しか挙がっていないため確認できなかった。

²⁶⁹ 明石少佐も時澤大尉も、報告書の番号をそれぞれに連番をつけていた。「国会図書館憲政資料室 米西戦争ニ関スル陸軍武官報告」は通してページ番号が打たれていないため、報告番号を本文中に記す。

ミ難ク「サンリーコ」ハ多知ニシテ容易ニ信ジ難シ左ニ参考トナルベキモノ数件ヲ記ス²⁷⁰
〔国会図書館憲政資料室 米西戦争ニ関スル陸軍武官報告 A798〕と述べ、サンディゴに多少胡散臭さを感じていた。また同報告書の中では「過刻「サンリーコ」小官ノ宿舍ニ来リ面謁ヲ求メタレドモ小官ハ些カ思ウ所アリテ故ラニ面談ヲ謝絶セリ」とも記しているの
で、時澤はやはりサンディゴを警戒していたようである。アギナルドと時澤大尉の面会に
関しては、マニラ領事館の機密第 16 号にも記されており、時澤大尉がアギナルドと談笑
している際にアメリカ士官が来営したと書かれている〔外務省外交史料館文書 米西戦争
一件 第二巻 697-699〕。したがってこの時はまだ、アギナルドとアメリカとの関係も表
向きは良好であった。

一方で時澤大尉はアメリカ側との接触も行っており、1898 年 7 月 17 日の明石少佐²⁷¹の
第 38 報告では、時澤のアメリカ軍への従軍をすでに許可したと述べている〔国会図書館
憲政資料室 米西戦争ニ関スル陸軍武官報告 A800〕。時澤大尉はドイツの動きについても
第 21 号報告で以下のように報告している：

独艦ノ当港ニ碇泊スルモノ現在四隻中現在中将「アドミラル」某アリ

西人風説ニ依レバ「馬尼刺砲撃ハ独乙ノ好ム所ニ非ズ」ト独乙「アドミラル」ヨリ米
ノ「アドミラル」ヘ通知セシ由「吾ガ眼ノ黒キ間ハ米ハ勿論何レノ邦国モ菲律賓ニ於
テ意ヲ恣ママニスルコト能ワズ」ト独乙領事ハ放言セリ

近来西人大ニ独乙ニ好意ヲ表シ領事ト総督トノ往来稍頻繁ナリ

〔国会図書館憲政資料室 米西戦争ニ関スル陸軍武官報告 A798〕

しかし、時澤大尉は 1898 年 8 月 8 日の第 40 報告でアギナルドに関して、「米人ハ「ア
ギナルド」ヲ称シテ「彼ノ「バコール」ノ馬鹿者ト呼ブ然レドモ目下●²⁷²ホ辞ヲ低クシテ
歡心ヲ失ハザルコトヲカム土人ハ（後略）「アギナルド」ハ少シク驕傲ノ風ヲ生ゼリ衣ヲ替
ユルコト日ニ二回其妻舞踊ノ稽古ヲ初ム久シケレバ人望地ニ墜ツベシ」〔国会図書館憲政資
料室 米西戦争ニ関スル陸軍武官報告 A798〕と、アギナルドの人氣が落ちつつあること
を指摘している。そして、同報告ではアメリカに関して、サンディゴが、革命軍が武器弾

²⁷⁰ 性格が物静かという意味で書いたと思われる。

²⁷¹ 「国会図書館憲政資料室 米西戦争ニ関スル陸軍武官報告 A800」での明石の動きをま
とめてみると、明石は一旦マニラに入ったが、1898 年 6 月 28 日に、一時マニラを出て香
港に行き、香港ではフィリピンの情報だけでなく、劉英福・康有為などの情報も調べ、7
月 13 日にマニラへ出発したが、またすぐ香港に戻った。5 月 2 日から香港—マニラ間の海
底電線が切断されていたため、極秘情報を迅速に運ぶため往復したと思われる。

²⁷² 一字判読不能

薬を無駄にできない理由は、新しい敵に立ち向かわねばならないからだ、と述べていると報告し、革命側がアメリカが敵になる可能性を考えていることを示唆した。サンディコと時澤大尉が連絡を取っている様子は、PIRからも確認することができる。8月9日のサンディコのアギナルドに対する報告では、日本の大尉²⁷³がサンディコに対して、在香港日本領事館と横浜にいる大尉の上司への、2通の推薦状を渡したことを述べている〔PIR 466-10〕〔PIR 622〕²⁷⁴。

1898年8月12日付で香港領日本事館上野季三郎二等領事から小村外務次官へ、「馬尼刺反将 Aguinaldo ノ態度ニ関スル私見」が送られた〔外務省外交史料館文書 米西戦争一件 第二巻 782-794〕。上野二等領事は報告書で、訓令によりこの報告書をまとめたこと、そしてアギナルドの挙（行動）の発端は香港から起こっており、それについて私見としてまとめたことを述べている。この中には、以下の8点、1) 第1章で述べた5月9日と13日に香港で行われた革命家たちの会合の様子²⁷⁵の再説明、2) コルテス²⁷⁶、アルタチヨ、フィリピン革命家のアメリカへの不快感、3) 比米間の軋轢、4) 日本への期待、5) フィリピン側の脆弱性、6) 米西講和条約の行方、7) 今後の革命家たちの動向、8) 革命家のアメリカ保護下での共和政体設立への希望——を事細かに述べている。これらは、時澤大尉が情報収集を行い、明石少佐が香港に送った情報をもとに作られたものだと思う。

三増二等領事は1898年8月23日の機密第21号で、サンディコが時澤大尉を訪問し、武器弾薬を60万円ほど買いたい意向を伝えたことを報告した〔外務省外交史料館文書 米西戦争一件 第三巻 989-990〕。三増二等領事は同報告で、アメリカは初めから独立を認めないことを胸の奥に秘めていたのだろうと推測し、メリット准将のもとにはマッキンレー大統領から独立を容認するなどの訓令が来ているとの噂があることを書いている。そして反乱側も当初からアメリカを信用してなかったのではないかと推測している。この23日の報告に関して、サニエルはその論文で、「(三増) 領事の所見で明白なのは、日本人(革命家)・中国人(革命家)・フィリピン人革命家との連帯を日本人に考えさせるようにす

²⁷³ 時澤大尉だと思われる。

²⁷⁴ 同手紙でサンディコは、フランス領事とベルギー領事の手紙も持っていることをアギナルドに明かしている。

²⁷⁵ この会合については、5月12日の機密第11号、5月21日の機密第12号に詳しい報告が上げられている〔外務省外交史料館文書 米西戦争一件 雑 第一巻 在香港馬尼刺反徒秘密集会ニ関スル件 209-221〕。

²⁷⁶ ドロテオかマキシモかは記載がなく、不明。

る汎アジア主義の考えである。これは日本との関係下でのアジアの連帯の夢であった
Apparent in the Consul's observation is the idea of Pan-Asianism which stimulated
many Japanese to think of an alliance between the Japanese and the Chinese and
Filipino revolutionists. This was a dream of Asian unity under Japanese relationship」
〔Saniel 1969: 241〕と述べ、その証拠として、この三増二等領事の報告書の最後の部分
を英訳し²⁷⁷引用している。しかし、この報告書の結びの原文は「・・・其米国保護ノ下ニ
立ツコトアルモ不得止ニ出スルモノニシテ其上乗ノ希望ハ日本カ同シク亜細亜ノ列国トシ
テ最善隣ノ与国トシテ人種ニ於テハ近似ノ情国トシテ殊ニ東方ニ於ケル第一等文明国トシ
テ侠勇無比ノ義ニ出テシコトヲ夢想スルモノト謂ウヘキ乎²⁷⁸」〔外務省外交史料館文書
米西戦争一件 第三巻 992〕である。つまりこの文は、フィリピンが米国保護下に置かれ
ることになってもそれは止むを得ないからそうなのであって、「革命側は、(革命側に
とって) 最前の方法として、日本が極東の第一文明国として、侠勇の精神で支援してくれ
るのが一番よいと夢想している」と分析しているだけであり、三増二等領事がアジアの連
帯を理想としているという旨の文章ではない。

三増二等領事は再度、1898年9月1日に日本領事館をサンディゴが訪問したことを機
密第22号で報告しており、「吾人ノ最熱望スルトコロノモノハ日本政府保護ノ下ニ独立セ
ント欲スルニアリ」〔外務省外交史料館文書 米西戦争一件 第三巻 1058〕と記し、サン
ディゴが1週間以内に日本に出向いて日本政府に「哀訴」をしに行く予定で、彼の来日は
全島民の意向だと述べている²⁷⁹。サニエルの論文ではサンディゴが「同様にフィリピン人

²⁷⁷ サニエルは最後の部分を「反乱者たちにとって、再び戦うことは不可避であろう。ア
ジアの一国家、一隣国になり、彼らの独立を得る手助けを日本がしてくれるだろうと願っ
ている。そしてフィリピンの隣国として、特に極東の近代国家として・・・it would be
unavoidable for the rebels to fight again. And the rebels desire that Japan would help
them attain their independence being a country in Asia, a neighboring country and as
a nation akin to her, especially the civilized country in the East...」〔Saniel 1969: 241〕
と訳し、この英訳を証拠として、三増二等領事の発言に汎アジア主義が存在するとしてい
る。しかし日本語の原文でわかるように、この文章は革命側の希望的観測を観察したにす
ぎない文章である。先行研究分析の部分で述べたように、サニエルは論文執筆に関わった
日本人知識人に影響を受けた可能性がある。

²⁷⁸ 其の米国保護の下に立つことあるも、やむを得ず出るものにして、その上乘の希望は、
日本が同じくアジアの列国として最善隣の与国として人種においては、近似の情国として、
殊に東方における第一等文明国として、侠勇無比の義に出でしことを夢想するものと云う
べきか。

²⁷⁹ しかし、サンディゴは日本には行かなかった〔外務省外交史料館文書 米西戦争一件
第三巻 1173〕。これに関して三増二等領事は機密第24号で、パリで行われている和平会

の自由の戦士を助けることに関して、日本の冷淡さを嘆いた **also complained about Japanese indifference to aiding the Filipino freedom fighters**」〔Saniel 1969: 242〕と、日本の無関心に関して不平を述べたことも説明している。しかし、サニエルはサンディコの「哀訴」に関しては説明し翻訳も行っているが、サンディコのこの行動が、革命組織内ではコンセンサスがとれていないものであることを明確にしていない。この報告書においてサンディコが「哀訴」しに行く旨が書かれた次の文章には、「若夫レ能フベクンハ其援助ノ全然公明ナランコト固ヨリ希望スルトコロナレ共之ヲ敢テスルハ又不明ノ謗リヲ免レス故ニ日本政府可能限ノ暗助ヲ得テ余カ帰国ノ錦栄ト為サント欲ス」〔外務省外交史料館文書 米西戦争一件 第三巻 1059〕と、サンディコは、援助の件を公表すると色々な中傷や支障が出てくると予想されるので、できるなら援助の件は公表せずにおいて、日本政府の「暗助」という良い結果を持ってフィリピンに帰国したいと考えている旨が述べられている。しかもこの後には、三増二等領事はサンディコが「以上談話中西国トノ調停ヲ試サント申告セシハサンディーコニ於テ敢テ名言セサリシモ全ク独逸領事タルコト疑ナキハ従来独逸挙動ト云ヒサンディーコノ姿容ニ由テ推知セラル（後略）」〔外務省外交史料館文書 米西戦争一件 第三巻 1059-1060〕と報告しており、ドイツ領事から調停の話があったことをサンディコはあえて明言してはいないが、サンディコが醸し出す雰囲気から三増二等領事自身はそれに気が付いていると述べている²⁸⁰。このあたりに両者の駆け引きが見て取れる。

同日、時澤大尉の第 55 報告でも、サンディコが日本に来て保護を願う可能性があることが述べられているので〔国会図書館憲政資料室 米西戦争ニ関スル陸軍武官報告 A798〕、サンディコが日本に行き手柄を立てたいと考えていたことには間違いはない。時澤大尉はこの報告書の中で原住民がアメリカの保護を喜ばない主な理由は以下の 2 点、1) 「排異血思想²⁸¹」と、2) アメリカの統治の中で自立を忘れることへの憂い——だとし、2) のほうは見過ごしてはいけなと注意を喚起した。この第 55 報告で興味深いのは、フィリピン人は日本人を慕っており、日本が冷淡であるとの思いが一般の愚直な原住民の脳中に伝播すれば、「他日我が南進ノ妨害タルコト決シテ少ナカラザルベシ」〔国会図書館憲政資

議でフィリピンの独立・自治が危うくなり、当時党内に緊急の件が発生したからとしている〔外務省外交史料館文書 米西戦争一件 第三巻 1348〕。

²⁸⁰ このサンディコの希望に対して三増二等領事は、「彼等」が将来日本を「欽仲」する気持ちをなくし、敬慕の念が一転して怨恨の感情に変わらないように、日本はサンディコに相応の待遇と、幾分かの手土産と成果を与えたほうが良いとのアドバイスをしている〔外務省外交史料館文書 米西戦争一件 第三巻 1061〕。

²⁸¹ 時澤は中国人排斥などに見られる、異なる血を排斥する思想と説明している。

料室 米西戦争ニ関スル陸軍武官報告 A798]と、「南進」という言葉を使っている点である。このことから少なくともこの時期には陸軍の中にフィリピンを拠点とした「南進」の意思が芽生えていたことがわかる。本心からかは定かではないが、前述したように、サンディコも三増二等領事と時澤大尉の前では、ドイツからのオファーの可能性のある雰囲気醸し出しながらも、日本からの援助、そして日本の保護を第一義に置いて話を進めているふりをしてきた。1898年9月4日のサンディコからアギナルドへの手紙では、ベルギー領事からアギナルド宛の手紙を預かったとして、その手紙をアギナルドに送る旨が記され、日本と他国を天秤にかけていることが伺えることから〔PIR 466-11〕〔PIR 622〕、やはりサンディコは、日本一筋に動いていた訳ではなかった。

同日時澤は第 56 報告の中で、フィリピン革命政府内のアメリカ派も日本に頼むのは得策だとはわかっているのだが、日本が躊躇した時のことを考えて日本に頼むことをよしとてはいないと述べ、アギナルドの政府内でも、意見の一致をみていない曖昧な状態であることを述べた。しかも同報告には「未ダ政府党ノ行為ニ日本ヲ「ダシ」ニ使ウガ如キ形跡ヲ認メス」と書いて、日本がドイツと同様に、他国との交渉のカードの1つに使われていることに不快感を表している〔国会図書館憲政資料室 米西戦争ニ関スル陸軍武官報告 A798〕。

1898年9月14日の第 59 報告によると、時澤大尉は9月15日のマロロス議会開会²⁸²を傍聴しないつもりであると述べている²⁸³〔国会図書館憲政資料室 米西戦争ニ関スル陸軍武官報告 A798〕。その後時澤大尉は19日の第 61 報告で「西班牙ノ前馬尼刺総督「ハウデネス」氏ヨリ全島旅行ノ承認ヲ得タリ目下不必要ナレトモ一ハ他日用意ノ為メ一ハ彼レノ気色ヲ見メニ訪問セリ」〔国会図書館憲政資料室 米西戦争ニ関スル陸軍武官報告 A798〕と報告した。時澤大尉は、革命側には賛同するような態度をとりながらも、一方では「不必要」ではあっても前スペイン人総督を訪問するというように、フィリピン人、ア

²⁸² 1898年6月12日、アギナルドはフィリピンの独立を宣言し、1898年9月15日、ブラカン州マロロスで制憲議会を開いた。この時期になるとフィリピン人の独立に消極的なアメリカ軍とアギナルド側との間の対立が明らかになってきており、フィリピンがスペインの手に戻されるのかアメリカが占領を続けるのかの結論もまだ出ていなかったため、日本政府も参謀本部も、革命家、アメリカ、スペインの3者に対して曖昧な態度をとった。

²⁸³ 三増二等領事は自身の欠席理由を機密第 23 号にて、9月27日にサンディコが来館した際に、サンディコが独立式典に反対しており、彼から式典に「来臨」しないでくれと頼まれたからと述べている〔外務省外交史料館文書 米西戦争一件 第三卷 1177〕。なぜアギナルド側に立っていたサンディコが独立式典に反対したのかは、不明であるが、それだけ革命組織内部の人間関係が複雑であったと言える。

メリカ人、スペイン人の間で政治的バランスをとりながら行動していた。

1898年9月26日の第64報告での、アギナルドの政治能力とフィリピン人議員に対する時澤大尉の評価はとても低く、フィリピン人議員に関しては「饒舌議員ニシテ革命政府ヲ弱カラシムルモノハ必ス亦此議員ナラン「アギナルド」ヲ翻弄シテ自家ノ利ヲ為サントスルモノ是ヨリ生セン 党派ノ軋轢国内ノ分裂亦タ之レヨリ生セン（後略）」〔国会図書館憲政資料室 米西戦争ニ関スル陸軍武官報告 A798〕と述べ、アギナルドに関しては「「アギナルド」ハ好將軍ナルモ好政治家ニ非ス地方ノ人望ハ熾ンナリト雖トモ群雄ヲ凌駕スル材幹乏シ」〔国会図書館憲政資料室 米西戦争ニ関スル陸軍武官報告 A798〕と厳しい判断をしている。

1898年10月31日サンディゴは、時澤大尉が日本領事館で行われたバンケットにサンディゴを招待し、そのパーティーには日本とフィリピンの旗が飾られ、時澤大尉は革命側が支配する州を廻る際に、当局者が心配りをしてくれたことに対して感謝の意を表したと記録している〔PIR-622〕。その後、1898年11月28日にポンセが、マニラから帰国した時澤大尉より、ゲリラ戦の優位性をアドバイスされた旨の手紙を書いているので、この日までは時澤大尉は日本に帰国したことになる〔Ponce 1932: 240-241〕〔PIR 420-3〕〔PIR 622〕。

しかし、在マニラ日本領事館とサンディゴの関係は続いており、三増二等領事は11月30日の機密第24号で、サンディゴが来館して以下の2点、1)「リエゴ、デ、リラス²⁸⁴」、「ホアン、ルナ²⁸⁵」、「ローザダ」、「マリアノ、マルチ」が日本に行く、2) フィリピン側は米国に頼らずに建国を獲得する決意した——を伝えたことを報告している〔外務省外交史料館文書 米西戦争一件 第三巻 1347-1356〕²⁸⁶。サンディゴの訪問と彼の発言を三増二等領事は以下の6点にまとめている：

1. 1898年11月25日、サンディゴが今度渡日する1人を伴って来館した
2. フィリピンの志士が企図した独立・自治はまだ成功していないが、困難を一つ一つ乗り越えながら進んでいる。

²⁸⁴ リエゴ・デ・ディオス

²⁸⁵ J. ルナ

²⁸⁶ 1898年12月13日、兵庫県知事大森鐘一は外務大臣に兵発秘第561号で、「ジェー・ルーナ、マリアノ・ポンス・エム・マーテ・バルゴス、イー・リーゴ・デ・デオス、ドテウル・ジョセフ・ロサダ」がこの日の朝に「山口丸」で渡来したことを、そして兵発秘561の1号では、この4人が仏郵便船「サラージ」で横浜に向けて出発したことを報告している〔外務省外交史料館文書 米西戦争一件 雑 第一巻 馬尼刺人ニ関スル報告 318〕。

3. スペイン政府を屈服させたことで、フィリピン人の勇敢さを知らしめることができた。
4. 今回スペインを倒したことで、革命側は独立建国の千載一遇のチャンスに巡り合えた。
5. 狡猾なアメリカ人にうまく操られ、アメリカに甘えている状態では、革命側の建国は永久にできない。
6. アメリカはマニラとカビテしか占領していないが、それで気を緩めると失敗するので、革命軍は目的に向かって真っすぐ進む

この報告書内で三増二等領事はサンディコの件以外にも、革命側の財政は枯渇しているが、革命政府は人々の支持は得ていることを報告している。また、日本に行く4人については、表向きはアメリカに渡航することになっており、日本に行くことは極秘であると伝えている。この内容から、アメリカが敵となりえる可能性が大きくなっていると革命側が感じているのが読み取れる。

池端は時澤大尉の任務について以下のように述べている：

時澤ら観戦武官の一部は戦況観察という表向きの陰で、革命軍のてこ入れというもう一つ重要な任務を託されていた。先述したように、日本軍部及び日本政府の一部には、アメリカのフィリピン占領を日本の国益を脅かす重大な危機と捉え、これを阻止する工作をしなければならないと考える勢力が存在した。時澤はその勢力によってフィリピンへ派遣されたいわゆる諜報将校であった。

[池端 1898: 17]

つまり時澤大尉の任務は、革命側から日本に支援を求めるように仕向けるようにすることであったと分析している。サンディコが日本側と接触している様子を説明した後、池端は「参謀本部派遣の時澤大尉、日本領事館、そして日本政府使節らはこのようにして革命政府首脳部を日本依存への方向に誘引していった」[池端 1898: 20]と述べているが、前述の三増二等領事の報告から見ても、サンディコが日本との関係を強調しているに過ぎず、そのサンディコですら、他国とも接触していた。そして、その後に払下げ銃購入未遂が起こることを考えると、この時点で日本側が「日本依存の方向に誘引した」とはいい難い。池端とサニエルの先行研究で考察されなかった時澤の報告書を詳細に分析する限りでは、この米西戦争観戦武官の時期に、参謀本部にそこまでの意図はなかったように思われる。日本政府には政府の考え方があったであろうが、参謀本部に関しては、南進を念頭に置き、

革命側の動向を分析し、革命側との関係を作り、米西間の戦後処理の出方を見ていたと考える方が自然であろう。参謀本部の活動方針に関しては、米西戦争期と、アメリカのフィリピン領有が決定した比米戦争期とでは、分けて考える必要がある。

先行研究では、時澤大尉とサンディコの関係について「時澤はしだいにサンディコとアギナルドの信頼を獲得していった」〔池端 1898: 19〕とあるが、これも疑問が残る。この時期革命側も日本側も相互信頼関係を持つには至っていない。しかし、時にお互いを他国との交渉のカードとして利用し、時に「相互互助の相手」として利用していたというのが正しい状況だった。しかし、この米西戦争観戦武官時に築いた、フィリピン人との関係が、今後の比米戦争中のフィリピンにおける参謀本部の活動の基盤となったことは確かである。

4. 軍事インストラクターの派遣（1899年2月—1900年7月）

4-1. 長野義虎歩兵大尉の派遣

フィリピン革命軍の近代化は、革命家たちにとって急務であった。したがってフィリピン人革命家は、軍事的援助を日本に求めようとした。この長野義虎（長野）大尉²⁸⁷の派遣に関しては、池端が論文で触れているが〔池端 1989: 30〕、詳細は述べていない。しかしこのミッションは比米戦争が始まって最初の、革命家と参謀本部の関わりという点で、とても重要であるため、本稿でいきさつを述べておきたい。

ポンセの手紙では、1898年9月25日頃、日本から革命運動側へ軍事インストラクターを送る話が持ち上がった〔Ponce1932: 190-191〕。1898年11月28日、ポンセとリベロはアパシブレへの手紙で、時澤大尉を一時除隊させて、翌年1月に革命軍の軍事インストラクターとしてフィリピンに送ることに関し、福島大佐には異論は無いと述べ〔Ponce240-241〕〔PIR-420-3〕〔PIR-622〕、後日マビニに宛てた手紙でも、時澤大尉はスペイン語が少し話すことができ、「我々の大義と我々の政府に対して熱心である *es entusiasta por nuestra Causa y nuestro Gobierno*」〔Ponce 1932: 246〕との追加説明を行い、時澤が革命側につけば、彼を仲介して、または彼の情報のおかげで、彼らが必要としている援助が、より容易に得られるようになるとのメリットを挙げている〔Ponce

²⁸⁷ 長野は、1896年歩兵中尉として、台湾の玉山の登頂に成功した。陸軍士官学校の卒業生名簿で「長野義虎」の名前を見つけることはできなかった。1900年前後で大尉になっている卒業生で長野という名前は、和田大尉の卒業年度である1890年第1期士官候補生の長野準四郎だが、こちらの長野は砲兵なので別人である。

1932 : 247]。そして、「(前略) もし我々のリソース²⁸⁸と願いに沿って我々が成長できるように、我々に任せてくれるのなら、10年で我々は日本と同じ高さにいるだろう²⁸⁹..., siendo de esperar que si nos dejan desarrollarnos conforme á nuestros recursos y deseos, en diez años estaremos á la altura del Japón」〔Ponce 1932: 246-247〕とも述べた。

1899年1月初めには、革命側への日本軍払下げ銃購入未遂があった〔池端 1989: 22-29〕が、その後も革命家と参謀本部との関係は続いており、1899年1月20日、ラモスからA. ルナ宛ての手紙には、日本にいるフィリピン人革命家と共に、陸軍士官学校や青山練兵場を見学したことが述べられている〔PIR 446-2〕〔PIR 622〕。1月12日には福島大佐はラモスに、和田大尉の家を14日の12時に尋ねてほしいと述べており〔PIR 780B〕、互いの家を訪問する関係も続いていた。また1月25日には小石川東京砲兵工廠 Tokyo Military Arsenal のカミヤマ Kamiyama²⁹⁰という人物からラモスに手紙があり、ラモスが砲兵工廠を見学した際にラモスが工廠側にリクエストした問題について、エガワ大尉 Captain Egawa²⁹¹の意見を聞いたことも書かれており〔PIR 780B〕²⁹²、ラモスたちが兵器廠などに関する知識なども精力的に吸収していたことがわかる。

1月27日になると、ポンセは香港の仲間に、独立軍の軍事インストラクターとしてフィリピンへ行く長野大尉を紹介する手紙を書き、香港に到着したら長野大尉にマニラへ行く方法を彼に教えてほしいと頼んでいる〔PIR 446-7〕〔PIR 622〕。1月31日、ポンセは再度香港の仲間に、長野大尉は福島大佐と明石少佐が高く評価している人物で、長野大尉にはマニラまでの旅行費用と準備に220ドルを渡したと述べ、長野大尉が独立軍の訓練をすと書いている〔PIR 446-3〕〔PIR 622〕〔Ponce 1932: 268-269〕。これを裏付けるように、明石少佐はラモスに以下のような手紙を書き、費用の上乗せを要求している：

²⁸⁸ フィリピン人が共有する資源や富のこと。

²⁸⁹ 「我々の資金を最大限に利用し我々の願望に見合った成長をするために、我々のすることに信頼を置いてくれるのなら、我々は10年後には日本と同じレベルに達することができる」という意味であろう。

²⁹⁰ このカミヤマという人物について、詳細は不明である。史料には P. T. Kamiyama 21-Nichoume Ichigaya Tamachi Ushigomeku Tokyo と記してある (PIR-780B)。尾崎の本や「秋津洲」艦長の齋藤實の報告書からは、米西戦争時にマニラに神山辰次郎という人物が存在していたことが確認できるが、同一人物かどうかはわからない。

²⁹¹ この文章からでは特定できないが、旧11期明治22年7月卒の江川誠の可能性もある。

²⁹² 比米戦争勃発後、やはりカミヤマと思われる人物から弾のカートリッジ・ケースの製造に何らかの経験がある人物が紹介されている〔PIR 780B〕

私は、長野があなたと協議をし、物事は上手くいっていると聞いている。彼の話の中で、彼が旅費と準備の費用に 200 円を受け取ることで契約したと述べたと私は申し上げます。しかし彼は旅費がいくらになるのかよく知らないのだ。私は、横浜―香港の旅費は約 80 円、香港―マニラは約 100 円だと考えている。したがって、旅費は約 150―180 円になる。その上、彼は旅行の準備をせねばならず、上陸後も多少のお金が必要になる。したがって、もしあなたが、50 円か 100 円を上乗せしてくれるのなら、彼はとても喜ぶだろうと私は考えている。

I have heard Mr. Nagano has deal with you and the thing has gone well. In his speech, I say that he has contracted to receive 200 yens for the expenses for voyage and its preparation, but I think, he don't²⁹³ how much the voyage cost, I think, the expenses of voyage Yakohama-Hong Kong about 80 yens, from Hong Kong to Manila about so 100 yens: then it does about 150-180 for voyage and he must beside preper²⁹⁴ for voyage and after the desembarque²⁹⁵ he must have a little money, then I think, if you can give him 50 yens or 100 yens more, he shall be very happy.

[PIR 780B]

1899 年 2 月 20 日に香港の活動家がアギナルドに向けて、この手紙の運搬人はポンセが送った日本の将校であるとしている [PIR 493-13] [PIR -622] ので、軍事インストラクターとして日本を発った長野大尉がこの時期に、香港を出発しようとしていたことがわかる²⁹⁶。長野大尉はフィリピンで話されている言語に関しての素養は無く、1899 年 1 月 31 日に、時澤大尉は手紙でラモスにそのことについて謝っている [PIR 780B]。そして 3 月 13 日に、アパシブレはアギナルドに対して、日本の将校がアパシブレの手紙と書類を持ってアギナルドの下に向かったが、その将校がアギナルド側に到着したかどうかを手紙で訪ねている [PIR 532-3]。

しかし 1899 年 4 月 25 日には、長野大尉は日本に戻ってきており、帰国の際に香港で長

²⁹³ know がないのは原文通り

²⁹⁴ prepare だと思われる

²⁹⁵ スペイン語で上陸の意味

²⁹⁶ 1900 年 4 月 22 日付けの『オーバーランド・チャイナ・メール』に、スペイン人将校でフィリピン人の捕虜になっていたデ・ソパス De Sopas という人物の談として、3~4 人の日本人将校が独立軍に在るとの記事が載っている。日本人将校の参加はこのように噂になっていた。

野大尉が渡しそびれたとして、香港の革命家たちへのアギナルドの手紙を、日本から香港へ送っている〔PIR 780B〕。帰国時、香港で手紙を革命家たちに渡せない程、長野大尉には帰国を急ぐ事情があったのだと推測される。1899年5月13日に長野大尉は和田大尉のところにも立ち寄っている〔PIR 780B〕。

日本とフィリピンの往復と、アメリカ軍のスパイに見つからずにマニラとルソン島内部を移動することを考えると、長野大尉がルソンの革命軍にいた時間は2ヵ月を切る。したがって長野大尉は軍事インストラクターとしてマニラに行ったにもかかわらず、途中からはこの後に行われた「布引丸」による日本からの武器輸送²⁹⁷と、原砲兵大尉たちの独立軍への参加のミッションを、計画し始めていたのではないかと思われる。それを示すように、1899年4月16日の、マビニからアパシブレとデ・サントスへの手紙では、セルへ Serge²⁹⁸ に関して、長野大尉は仕事が完了次第、再度フィリピンに来て援助すると約束しているので、マビニ側は長野大尉をサポートする旨が書かれている。そして4月25日のポンセからアパシブレの手紙では、長野大尉とデュカツ ducats²⁹⁹を船積みする計画をしており、原大尉を仲間に入れたいと述べている〔Ponce 333-336〕。

この後、長野大尉は「布引丸」事件に参加している〔平間 2000: 248〕〔波多野 1995: 27-36〕。1898年11月に日本側で陸軍軍人派遣の問題が持ち上がったことについて、池端は「福島ら「日本政府」の本意は革命軍のテコ入れと革命軍内部に日本軍の勢力を扶植することにあつたと考えられる」〔池端 1989: 27〕と述べているが、次に述べる原大尉たちも含め、参謀本部は革命軍に「勢力を扶植」し、影響を与えられる程の人員は送っておらず、陸軍が革命家を援助する姿勢を見せ、革命家と良好な関係を保ちたかたに過ぎないと考えた方が妥当であろう。

4-2. 原砲兵大尉たちの派遣

原大尉³⁰⁰を含む数人の軍人派遣に関しては 平間と波多野がその論文で触れている〔平

²⁹⁷ 「布引丸」事件に関しては、フィリピン史のみならず、日本政治史の面からも多くが語られているので、本稿では割愛する。

²⁹⁸ スペイン系男性の名前。ここでは武器調達を示す暗号として使われた。

²⁹⁹ 武器を示す暗号。

³⁰⁰ 波多野は原大尉について以下の4点、1) 台湾総督府幕僚であった、2) 1899年6月1日に休職、3) 近藤五郎と変名、4) 7月7日に離婚している——を挙げ、原の経歴は「フィリピンに向かう陸軍将校としての理由に十分妥当性を持たせるものである」〔波多野 1995: 30〕と述べている。入江も、近藤五郎という陸軍大尉が現職を辞して参加したと述

間 2000: 249)〔波多野 1988: 87〕が、ここではフィリピン側の史料を含めることで、更なる詳細と結末を明らかにしておきたい。

1899年6月8日になると、「布引丸」によるフィリピンへの武器密輸と同期して、日本から6人の将校が独立軍に参加する旨の手紙がポンセから香港の活動家に送られた〔Ponce 1932: 352〕。この6人は原大尉、西内真鉄陸軍少尉、稲富朝次郎陸軍少尉、宮井啓蔵陸軍軍曹、中森三郎(中森)陸軍火工曹長と平山周(平山)である〔平間 2000: 249〕³⁰¹。彼らは「布引丸」で送られた武器を受け取るための要員だった〔入江 1997: 206〕とされているが、前項で述べたようにポンセの手紙からもその可能性は高い。

1899年8月25日、在マニラ日本領事館三増二等領事の機密第8号の報告によると、アメリカ軍の記録には彼らは7月6日に入国したと記載されている〔外務省外交史料館文書 米西戦争一件 雑 第一巻 馬尼刺府ニ於テ本邦人米軍ニ捕縛セラレタル件 012〕。7月30日のタルラック Tarlac のレイバ Leyba 大佐から、この都市³⁰²の軍政知事 Sr. General Gobernador Militar de esta Plaza に対して5人の日本軍の将校が午後5時に到着すると連絡がなされている〔PIR 637-7〕。同機密8号とPIRによると、8月19日には、フィリピン内で彼らを案内した独立軍側のサンチェス Sanchez 大尉が逮捕され、独立軍への日本陸軍軍人の介入がアメリカに対して明るみになってしまった〔PIR483-10〕。彼らの中で、原大尉、中森火工曹長、平山が独立軍に残り、他の人物もアメリカには捕まらず、何とかフィリピンを去ることができた〔PIR-483-10〕。機密11号によるとその後、平山もマニラに戻り〔外務省外交史料館文書 米西戦争一件 雑 第一巻 馬尼刺府ニ於テ本邦人米軍ニ捕縛セラレタル件 036-037〕、原大尉と中森火工曹長の2人が残った。

1899年9月1日のマルティン・ガルシア Martin Garcia という人物の手紙の中に、彼らのキャンプに日本人が参加している旨が書かれ〔PIR 903-5〕、1900年3月2日のパウラ・パルド Paula Pardo という人物からアンブrosia Ambrosia に送られた手紙の中にも、フィリピン軍の中に1人の日本人上官と2人の日本人将校がおり、上官は砲兵隊出身で2人の将校はエンジニア部隊の出身である旨が記されている〔PIR 2035-3〕。トーマス・エ

べている〔入江 1997: 206〕。平間は、原大尉は予備役に回され、個人の資格で参加したと述べている〔平間 2000:249〕。

³⁰¹ 1899年6月8日と6月10日のポンセからアパシブレの手紙では、Hara、Inatomi、Nishiuchi、Nakamori、Miyai と Hirayama と書かれており〔Ponce 1932: 352-353〕、その前の6日の手紙でその中のHが砲兵大尉だと書いている〔Ponce 1932: 351〕。『比律賓独立戦争秘聞』〔石井 1942: 21〕と照らし合わせると、名前が合致するので間違いはない。

³⁰² タルラックであろうと思われる。

チェニケ・マスカルド将軍 General Tomás Echenique Mascardo (マスカルド)³⁰³宛ての手紙では、マスカルド将軍が日本人将校のサービスを利用できるように、通訳者を用意する意志があることも述べられている〔PIR 390-3〕〔PIR 622〕。これからすると、原大尉と中森火工曹長以外にもフィリピン軍に参加していた日本人の軍人がいた可能性も捨てきれない。

1900年5月1日、香港のデ・サントスはアギナルドに、「それらの銃はまだ日本にあり船積みを待っていた。日本から来た原大尉はそれらの銃を持ってきて、カスコ船で台湾から運ぶと約束した...the guns are still there in Japan awaiting shipment. Capt. Hara who came from there promised to take the guns and ship them from Formosa by casco」³⁰⁴と書いている〔PIR-2036〕〔PIR-516-6〕³⁰⁵。後日マニラで作成されたアメリカ軍のライフルに関する報告書では、1900年5月か6月にフィリピンで荷揚げされたと思われる新しい日本のライフルを、独立側の人間が10丁うけとり、同年11月か12月には、別の人間が300丁もの新しい日本の銃を持っていたと書かれている〔PIR 693-7〕。これからすると、原大尉は軍事インストラクターだけでなく、武器調達援助もしていたようである。

その後、『比律賓独立戦争秘聞』によると、原大尉は1900年7月6日にサンバレスでマスカルド将軍から、貢献をたたえられ別れを惜む内容の感謝状を贈られた〔石井 1942: 53〕と書かれており、原大尉は約1年間革命軍に参加していたことになる。先に述べた通訳の件も合わせると、原大尉はマスカルド将軍の下で活動していた可能性が大きい。

5. 時澤右一砲兵大尉の活動（1899年2月—1901年12月）

5-1. 陸軍視察員としての活動

1898年11月末に軍事インストラクターとしてフィリピンに行く話が持ち上がった時澤大尉ではあったが、1899年2月7日³⁰⁶、ラモスに宛てた手紙でフィリピン行きに対して以下のようなためらいを見せている：

決意することはとても難しいだろう。しかし、少なくともこれが私の躊躇の原因にな

³⁰³ マスカルド (1871-1932) は革命軍の将軍。アギナルド降伏後の1901年5月にアメリカ軍に降伏した。

³⁰⁴ PIRに残る史料が英訳史料であったので、英訳を掲載。

³⁰⁵ テイラーは複数の村田銃がフィリピンで押収されたことを挙げて、時期は不明ではあるが、日本から村田銃が運ばれたと結論つけている〔PIR-2036〕。

³⁰⁶ この時、時澤大尉は讃岐善通寺の砲兵隊にいた。

らざるを得ない。名誉あるポジションと職務から起こる厳しく辛い一撃、それは家族の、特に私の愛する年老いた母の嘆きと悲しみである。なぜなら彼（女）らは私の真意などわからないからだ。

It will be so much difficult to make that decision, but this must be cause of the hesitation at best; the severe and painful blow which occur from the abandonment of honorable position and service; the lamentation and calamity of family, especially of beloved old mama, because they can not understand my real mind...

[PIR 780B]

1899年2月中旬になると時澤大尉はラモスに、横浜弁天通りのホテルから、26日の汽船に乗るので、ホテルまで推薦状を持ってきてほしいとたのんでいる [PIR 780B]。この後、時澤大尉は日本に向けて『陸軍視察員報告』[外務省外交史料館文書 米西戦争一件 雑第二巻 陸軍視察員報告 721-1015] を送っていることから、時澤大尉は陸軍大尉というステータスのままでフィリピンに行くことを選択した。2月20日、川上参謀総長は、参秘第61号第1で、時澤大尉が米西戦争中に「総督以下諸将校ヨリ懇篤ナル待遇ヲ蒙リ（中略）何卒貴官ヨリ米公使可然御挨拶相成●³⁰⁷極致度、此段申進候也」[外務省外交史料館文書 米西戦争一件 雑 第二巻 米西戦況視察トシテ陸軍砲兵大尉時沢右一米国軍隊へ従軍ノ件 627] ³⁰⁸と青木周蔵外務大臣に願い出た。その後2月21日に起草し23日に発遣した青木外務大臣の在アメリカ小村公使に向けた命令書では、川上参謀総長の申請文をコピーして、米西戦争では時澤大尉がアメリカ軍の「懇篤」な待遇を受けたのでアメリカ軍に感謝を示して「右謝意米国政府へ伝達方、可然御取斗相成度此段申進候」と、しかるべく、アメリカに取り計らってほしいと述べている [外務省外交史料館文書 米西戦争一件 雑 第二巻 米西戦況視察トシテ陸軍砲兵大尉時沢右一米国軍隊へ従軍ノ件 628-629] ことから、ここでは、時澤大尉が正式にマニラに出張することがわかる。したがって、この節では主にPIRと『陸軍視察員報告』を利用して、時澤大尉とフィリピン人革命家の動きや考えなどを明らかにしたい。

³⁰⁷ 1文字判読不能。

³⁰⁸ この書類は「陸軍視察員報告」ではなく「米西戦況視察トシテ陸軍砲兵大尉時沢右一米国軍隊へ従軍ノ件」の最後にファイルされている。



1899年頃、フィリピンのアメリカ軍を視察中に撮影されたと思われる時澤大尉の写真（時澤大尉の部分をつリミングし拡大した）

Our Islands and Their People: As seen with Camera and Pencil. Vol. II, 1899, p.759

1899年3月6日、時澤大尉は香港から、秘報第27号〔外務省外交史料館文書 米西戦争一件 雑 第二巻 陸軍視察員報告 730-734〕を送り、3月10日にマニラに到着した。比米戦争が始まっていたマニラにおいて、時澤大尉はラモスに、「マニラの光景は去年と変わっていない。しかし私はカティプーナンの旗とその兵を、道でもプエブロでも見ることができなくてとても悲しい The view of Manila does not change than the before year, but ³⁰⁹muy triste que no puedo ver la vandela³¹⁰ del Catipunan y Soldado de ella en la calle en en³¹¹ la pueblo de ella」〔PIR 780B〕と述べている。その後、14日に時澤大尉はマニラから日本へ秘報第31号〔外務省外交史料館文書 米西戦争一件 雑 第二巻 陸軍視察員報告 735-739〕を送っている。翌15日の秘報第32号では、以下のように述べ、アメリカ当局から正式に許可を受けて比米戦争を視察することになった：

小官本日第一師団長「マカーサー」少将及ヒ其幕僚と書—³¹²餐ヲ共ニス卓上「近日「パンパン」大河ノ魚ヲ以テ貴官ニ餐セン」トノ語アリ米軍ノ意気察スヘシ（中略）小官今日迄ヲチス將軍ヨリ順次ニ諸種ノ特許ヲ得タリ本營、諸隊、諸部、諸環衛ニ出入シ及ヒ守備線巡覽ノ自由等是レナリ又是レカ為メ將軍ハ懇篤ナル訓示ヲ各長官ニ向ケテ発シタリ（中略）思フ所アリ自ラ好シク第一師団（カローカン方面擔当）參謀本部
アツタツシエ
附 属³¹³ト為レリ明後十七日ヨリ当分戰場ニ留マル

〔外務省外交史料館文書 米西戦争一件 雑 第二巻 陸軍視察員報告 741-750〕

しかし、1899年3月17日の時澤大尉の秘報第35号では、「市内ニアル重ナル土人及ヒ『サンリーコ』ノ兄ノ語る所ニ依レバ」〔外務省外交史料館文書 米西戦争一件 雑 第二巻 陸軍視察員報告 755〕と書いてあるところから、何かしらの形で革命側とも連絡をとっていたとみられる。

1899年2月4日の戦闘勃発によって、革命を推進していた人々はアメリカにとって反乱者となってしまったことから、時澤大尉は革命家と日本人との関係が親密であると思われぬように最新の注意を払った。たとえば、3月21日の秘報第42号³¹⁴では、日本に関する様々な噂がマニラで飛び交い、おまけに『マニラ・タイムス』と思われる新聞には志

³⁰⁹ この前に es があるものとして訳す。

³¹⁰ bandera だと思われる。

³¹¹ 史料で en が2回記されている。

³¹² 実際には史料は縦書きで、書と餐の間に横線が引かれている。

³¹³ この振り仮名は、時澤大尉の報告をそのまま書き写したものである。

³¹⁴ 理由は不明であるが、1899年3月23日の報告は秘報第39号で、3月21日の報告が秘報第42号となっている。

賀重昂³¹⁵が日本でフィリピン人密使を饗したなどの電報も掲載されたことに、時澤大尉は以下のように苦言を呈した：

(前略) 九、『マロロス』政府ハ目下大ニ英国ヲ恐レ始メタリ
日本ニ仲裁ヲ請フ為メ密使二名日本ニ行キタリト風説ス
十、当地米新聞ハ時々日本カ何事ヲカ比島ニ野心ヲ懷キ居ル旨ヲ記ス
過日モ兵器ヲ密輸入シ米軍艦ニ押ヘラレタリトノ記事アリ我カ領事ハ倉皇車ヲ飛バ
セ米ノ政庁ニ到リテ虚実ヲ質シタリ
本日又志賀(重昂手)朝比奈(和泉手)ノ二紳士比律賓ノ密使ヲ饗シタリトノ電報ヲ
掲載セリ
何卒如此露骨的不注意ノ挙動ナキ様其筋ノ注意ヲ望ム」

[外務省外交史料館文書 米西戦争一件 雑 第二卷 陸軍視察員報告 765-766]

この手紙からは、時澤大尉や在マニラ日本領事がアメリカ当局に対して気を使っている様子が感じられる。

フィリピン革命家との関係に焦点を当てると、どうしても時澤大尉と革命家との関係やその活動だけに注目しがちになるが、時澤大尉は視察員として戦闘状況を詳細に伝えており、彼のフィリピン駐在はフィリピン革命側とのコンタクトだけが目的ではなかったことを、ここで明記しておきたい。時澤大尉の第 48 号報告は、1899 年 3 月末の戦闘の詳細や、過酷な暑さの中での戦闘でアメリカ兵が疲弊している様子なども記録されており、比米戦争のマロロス攻防戦の戦闘記録としても興味深いものとなっている。

日本領事と時澤大尉の気遣いにもかかわらず、秘報第 50 号では「米軍近来小官ニ対シ稍々敬遠主義ヲ採ルヤノ傾向アリ然レドモ未タ甚シカラズ小官ハ総統府及び市庁ニ住所ヲ報告シ又米医ノ診察ヲ受ケ且ツ服用ヲ為シ土人ト直接ノ交通ヲ避け居レリ之レヲ要スルニ未タ患フルニ足ラス」[外務省外交史料館文書 米西戦争一件 雑 第二卷 陸軍視察員報告 800-801] とあるところから、アメリカ側が時澤大尉を敬遠している様子が伺える。その後の時澤大尉の報告は、正式な軍の報告書という性質もあってか、アギナルドの政府、戦闘、フィリピンの状況を淡々と伝えており、革命側に特別な思い入れがあるようには感じられない。時澤大尉は精力的に動いていたようで、1899 年 4 月 10 日の秘報第 55 号で

³¹⁵ 志賀は、外務参事官、殖民協会会員。『比律賓独立秘聞』などでは、フィリピン人革命家と志賀の接触は 1899 年となっているが〔石井 1942: 7〕、PIR-780 では、1898 年 9 月 10 日の和田大尉からラモスへの手紙で、和田大尉はラモスのことを志賀に話したと述べているので、すでに志賀とフィリピン人活動家は 1898 年に日本で会っていた可能性がある。

は、「小官本夜「ラグナ」ヨリ帰馬³¹⁶ス不日「ビサヤス」島ヲ視察セントスル企望ヲ有シ居レリ但シ当地ノ形勢ニ依リテハ延引ス可シ」〔外務省外交史料館文書 米西戦争一件 雑第二巻 陸軍視察員報告 824〕と述べて、ビサヤにまで視察を拡大したい意思を表明している。その後秘報第 86 号では「小官ハ両三日中ニ「サンフェルナンド」ニ到ル心算ナリ但シ異状ナケレバーニ³¹⁷日滞在ノ上帰馬スヘシ」、〔外務省外交史料館文書 米西戦争一件 雑 第二巻 陸軍視察員報告 858-859〕そして、5月9日のラモスへの手紙では「あなたは私がとても忙しいと考えている。東はラグナのサンタ・クルスまで、西はポロ、マロロス、カルンピットのプエブロまで、北はマルキナ、ノルサガライ、アンガット、サン・ラファエル（後略） *piensa que soy muy ocupado, éste to Santa Cluz de la Laguna, West to the pueblos of Polo, Malolos, Calumpit, San Fernand north Marquina, Norzagarai³¹⁸, Angat, San Rafael,...*」〔PIR 780B〕と書いてあることから、少なくとも時澤大尉は、マニラ近郊を広範囲に動き回って視察を行っていた様子が伺える³¹⁹。

時澤大尉は革命家との接触について、1899年4月15日の秘報第61号で大佐、中佐の称号を持つ革命側のスパイ³²⁰から得た情報を以下のように記している：

欧州及ヒ土人ノ探偵頗ル多ク寸時モ油断ナラス為ニ時トシテ緊秘ノ情報ヲ得ルニ困難ヲ感スルコトアリ内地トノ連絡ハ稍ヤ確実トナレリ当地在留ノ秘密委員（多クハ大中佐ノ称号ヲ有シ其数七人アリ）ヨリ答弁ニ窮スルカ如キ問題ヲ提出サレ時々困難スルコトアリ但シ未タ特報スヘキ程ノ事ナシ

〔外務省外交史料館文書 米西戦争一件 雑 第二巻 陸軍視察員報告 830-831〕

また5月3日の秘報第73号でも「信ス可キ情報ニ拠ルニ土軍ノ情報左ノ如シ」〔外務省外交史料館文書 米西戦争一件 雑 第二巻 陸軍視察員報告 974〕と記して、その情報を載せている。したがって革命側との接触がなかったわけではないが、報告はやはり淡々としたものになっている。

³¹⁶ マニラに帰ってきたという意味である。

³¹⁷ 横書きのため読みづらくなっているが、1～2日という意味である。

³¹⁸ Norsagaray だと思われる。

³¹⁹ 1899年6月8日の秘報第103号では、6日にサン・フェルナンドに赴き、バリワグを経て8月の朝にマニラに帰って来たとのあるので、かなり迅速に行動していたようである。

³²⁰ 1899年4月半ばに捕虜交換のためにアメリカから通行証を得たフィリピン人の大佐のことについて、秘報第63号で「此大佐ハ元来「アギナルド」ヨリ馬尼刺駐在ヲ命セラレ居ル秘密探偵ノ一人ニシテ両三日前迄ハ局躋トシテ潜伏シタル者ナリ」〔外務省外交史料館文書 米西戦争一件 雑 第二巻 陸軍視察員報告 847〕と述べていることから、7人の内の1人はこの大佐の可能性がある。

1899年4月24日のラモスへの手紙では、視察員としてアメリカ軍に従軍シマロロスの攻防戦を見て、革命軍の欠点を以下のように述べた：

戦いは1週間、先月25日から31日までだった。私はとても残念に思う。私はアメリカ軍に従軍しながら、見たと言うか、実際に調査した。彼ら原住民将校はどう戦うのか全く無知である。(中略) もちろん、彼らは軍事教育や近代戦法をほとんど学んでいない。

el combates una semana desde 25 hasta 31 de pasado mes, I am very very sorry that I have seen, actually inspected attaching American troop, they, the native officers are so much ignorant how to fight...of course they have very few military education and modern tactical knowledge...

[PIR 780B]

その一方で革命軍の持つメリットについては「とてもとても素晴らしい戦略の下で戦っていた。だから実際の交戦は避け、多くの損失を退けた。(中略) したがってこれからは、原住民の兵士は、彼らの敵から守る力を持つ。これはとても良いことだ they have fight under very very fine strategy so that avoid sober³²¹ engagement and had not many loss...therefore, now and future the native troop have the power to defence³²² their enemy. This is all very fine」[PIR 780B]と述べている。つまり、革命軍にはやはり何等かのトレーニングが必要ではあるが、革命軍がマロロスを放棄したことでマロロス防衛に人員を割かずにコンパクトに戦闘を続けられる可能性を示唆した。この発言が時澤大尉の率直な感想なのかはこの記述からは分析できないが、戦法・軍事力の発言は、日本での陸軍軍人派遣と時間的に一致した発言を行っており、革命家に対して日本陸軍軍人のサポートの必要性をさりげなくアピールした内容にもなっている。

1899年5月9日³²³に時澤大尉は彼の住居³²⁴から、ラモスに以下の手紙を送った：

私の任務について、アメリカ人に監視され、その上私は断続的な熱に襲われ、そして

³²¹ 時澤大尉がどのような意味で sober を使ったのかは不明。スペイン語の sobre (～について、～に関して、～の上に) と書こうとした可能性もある。

³²² Defense だと思われる。

³²³ 1898年5月に川上参謀総長が亡くなり、5月16日には大山が参謀総長になっている。

³²⁴ 手紙にはビノンドの住所が記されており、No.500 Calle Magdalera Binondo となっている。臺灣鐵道隊經理係の坂本が台湾の陸軍参謀本部の楠瀬幸彦中佐の推薦でフィリピン調査の任に就いて住んだのが「ビノンド区レーナ・レヘンテ街三番」[尾崎 1932: 286]で、坂本はここで大阪貿易會社の支配人なども引き受けたことがあった。その坂本と時澤大尉は米西戦争観戦武官の時から面識があり、その関係からビノンドに住んだ可能性がある。

重大な時局で、ベッドの上で横になっている。このことがとても悲しい。今まであなたの政府に行くための良い機会を得ることができない。しかし私はあえてリスクを冒して手紙を書いた。

Tengo mucha vigilancia de yankee sobre mi servicio, y ademas es muy triste that I am attacked by intermitiendo³²⁵ fever and laying donde on the bed at critical time...Hasta hovro³²⁶ no puedo coger buena ocacion³²⁷ para ir á su gobierno³²⁸. Pero he escrito á menudo, daring several risk.

[PIR 780B]

そして追伸で、碓山署長に「私のコンプリメント mi Complimento³²⁹」[PIR 780B]を伝えてほしいと頼んでいる。この手紙は時澤大尉が手書きし、しかも実地で学んでいったと思われるスペイン語を使っている³³⁰ため、記述の一部は意味不明の部分がある。第三者には意味不明であっても、時澤大尉とラモスの間では理解できるものであったのだろう。

しかし、時澤大尉の共和国政府に対する見方はシビアであった。1899年5月25日の秘報第93号では、パテルノ内閣が作られたことに関して「曩キニ風説ノ儘報告セシ「パテルノ」以下ノ軟派土人内閣ヲ組織セシハ事実ナリキ」〔外務省外交史料館文書 米西戦争一件 雑 第二卷 陸軍視察員報告 873〕と述べ、パテルノ内閣を軟派とし、硬派は「重ナルモノハ「アギナルド」「サンリーコ」「ピヨデルピラール」「ソリマン」等トス」〔外務省外交史料館文書 米西戦争一件 雑 第二卷 陸軍視察員報告 874〕と述べて、共和国政府が2つに分かれていることを指摘している。この報告の中では、硬派が全勝して武器の輸入に成功すれば、この後数年の抵抗はできるだろうが、軟派が勝てば自治を甘諾するだろうと予想しており、その時にはアギナルド一派は「政府ヲ去リテ別ニ一政府ヲ組織シテ山林要害ニ割拠スルナルベシ（後略）」〔外務省外交史料館文書 米西戦争一件 雑 第二

³²⁵ intermitente (断続的)と思われる。

³²⁶ この単語は意味不明であるが、hastaが「～まで」という意味なので、今までという旨を表したかったと思われる。

³²⁷ ocasión だと思われる。

³²⁸ gobierno だと思われる

³²⁹ 単語自体は補足するもの・完璧な状態という意味だが、時澤大尉が何を言おうとしたのかは不明である。

³³⁰ 1899年2月12日に時澤がラモスに送った電報は、カタカナで「ドンデエスタセニヨルワダアヲラ」[PIR 780B]と書いており、これはスペイン語に表記しなおすと¿Donde esta señor Wada ahora? (和田はどこにいるのか?)となる。このように、時澤大尉はラモスとコンタクトをする際、彼の出来る限りのスペイン語を使うような気遣いをしている。

卷 陸軍視察員報告 882] と判断している。その後秘報第 98 号では「馬尼刺ノ事米派ハ運動稍々活発ナリ」〔外務省外交史料館文書 米西戦争一件 雑 第二卷 陸軍視察員報告 892] と述べ、アメリカ当局と関係を持ち、いくらか活発になったフィリピン人たちのことを、「米派」と報告している。したがって、この時には時澤大尉の軟派と米派の定義には、アギナルドの政府の中にいる人物か否かの意味が含まれていたと考えられる。先に述べた秘報第 93 号は 26 ページにも渡る長いもので、戦況報告以外に、以下 3 点に対する時澤大尉の見解、1) 革命政府、2) 革命運動、3) フィリピン人に対する見方——が垣間見られる報告書である。時澤大尉は、フィリピン人に関しては以下のように評した：

比律賓人ノ土人ハ祖国ナク歴史ナク言語ナシ故ニ国民トシテノ価値ハ頗ル少ナシ從テ彼等カ囂々スル所謂独立自由ナルモノモ全体島民ノ頭腦ニ幾許ノ感應ヲ与フヘキ乎トハ西人一般ノ口ヨリ発スル所ノ嘲語ナリトス事或ハ然ラン而シテ小官ヲ以テ之ヲ見ルニーノ注目ス可キモノアリ即チ妙齡兒童ノ有スル觀念トス (後略)

〔外務省外交史料館文書 米西戦争一件 雑 第二卷 陸軍視察員報告 884-885〕

そして彼らは武器を好み、「カチプナン (一致連合ノ意ニシテ土人国旗ニ名ツク)」³³¹の国歌を暗記して唱えるのだと、そしてアギナルドが再びこの言葉と旗を以て一時全島を風靡したが、「土人政府ハ此語ヨリ生シ来レル多頭政体ヲ採用シ沐猴冠的ニ共和政府ヲ組織シ今ヤ之レカ統一ニ困難シ居レリ (後略)」〔外務省外交史料館文書 米西戦争一件 雑 第二卷 陸軍視察員報告 887] と述べている。ここで「沐猴^{もつこう}にして冠す」³³²の言葉を使っていることに、時澤大尉のフィリピン人への見方がよく表れている。したがって時澤大尉は、決してフィリピン人を評価している訳ではなかった。フィリピン人の日本人への感情に関しては、「土人カ日本人ニ対スル好意ハ近来一層甚タシ (軟派ハ然ラス)」〔外務省外交史料館文書 米西戦争一件 雑 第二卷 陸軍視察員報告 890] と述べて、好意的であることを述べている。

1899 年 6 月に入り、時澤大尉は突然ラモスにフィリピンへの帰国を促すようになった。

6 月 4 日³³³、時澤大尉はラモスに対して、「今君が島³³⁴に帰り、共和国とアメリカ当局の

³³¹ 「共和国の時代に「カティプーナン」という用語は、公式に「国家」を意味するものとして定義された」〔イレート 2005: 283] ので、「カチプナン」の国歌は、共和国の国歌という意味である。

³³² 《「史記」項羽本紀の故事から》猿であるのに冠をかぶっている。見かけは立派だが心が卑しく思慮分別にかけ人物のたとえ。地位にふさわしくない小人物であることのとえ〔大辞泉〕。

³³³ 史料の手紙は 4/6/99 となっており、4 月 6 日の可能性もあるが、アメリカが雨期によ

間に立って『以前のように行動する』時期ではないのか Don't you think now is time that you fly back to the Island and by standing between both side the Republic and American "manejar³³⁵ and como ante" [PIR 780B] と、そして 6 月 24 日には、「私は、現状を見るため、そしてあなたの内務への、あなたの未来の決断のために、あなたが何とかして 1 度マニラに戻ることを希望する I hope you will come back Manila somehow once to see actual affair and to make your future decision³³⁶ for your home affair」 [PIR 780B] と頼んでいる。この 2 日後の 6 月 26 日の手紙でも、以下のようにかなり強い調子でアドバイスをしている：

(前略) 比米戦争は長く続くだろう。そして愛国者か偉大な人物が、時宜を得るべきだ。多くの原住民と市民が、現在の危機を知らないことに関して、眠ると言うよりは動揺している一方で、私は将来の出来事のために、基準となる地位を築くために、あなたがここ³³⁷に飛んで帰ってくることができると確信している。あなたはその左手に『萬朝報』のペンをとるよりは、ここにいた方がいい：あなたはそうは思わないか？あなたはここでは安全であろう。

...the hostility will continue more longer³³⁸ and the patriotic or great man should be have the time. I am sure you can do better flying here in order to make standard position for the future affair while many native³³⁹ and citizen³⁴⁰ are fluctuating rather to say sleeping as to be do not know actual crisis, you should better here rather than catch a pen of Yorozuchoho in the left hand: don't you think so? You will be very safe at here.

[PIR 780B]

短期間のうちに 3 回も帰国を促すということは、以下の 3 点の理由—— 1) この後の「布引丸」による武器調達、2) 原の革命軍への派遣、3) 日本にはポンセが駐在している——から、陸軍が日本の事情がわかるラモスを、サポート役としてマニラに置きたかったの

ってサン・イシドロ、他を放棄した事とマビニの辞任の記述があるので、6 月 4 日とした。

³³⁴ ルソン島

³³⁵ manejar は「操る、扱う」などの意味がある。

³³⁶ decision だと思われる。

³³⁷ マニラ

³³⁸ 比較級が並ぶのは史料通り。

³³⁹ 史料では、単数形になっている。

³⁴⁰ 史料では、単数形になっている。

ではないかと推測される。

この時期、時澤大尉からラモスへの手紙は、参謀本部の人間を経由して行われていた。たとえば 1899 年 6 月 29 日、東京の参謀本部にいたと思われる明石少佐³⁴¹から横浜にいたラモスへの手紙には、マニラにいる時澤大尉の手紙に関して、「私は、ミスター時澤があなたへ送ってほしいと私に託した手紙を、受け取った。なので、私はそれを同封する（この手紙の封筒の中に）。そして私は何の問題も起こらずにそれを受け取ることを望んでいる I have received yesterday a letter from Mr. Tokizawa which he charged me to send you. Now I enclose it (in this letter's envelope together) and I hope you receive it no incident」〔PIR 780B〕と書かれている〔PIR 780B〕。一年前の 1898 年 8 月 13 日の和田大尉の手紙でも、フィリピンにいた時澤へラモスが手紙を送りたいのなら、和田大尉の手紙と一緒に送る旨の記述があり〔PIR 780B〕、ラモスの手紙は、参謀本部の人間の手紙の中に同封して送られていた。

1899 年 8 月には、原大尉の件で述べたように、革命軍のサンチェス大尉がアメリカ当局に捕まり、日本が革命軍に軍人を送ったことがアメリカ側に露呈してしまった。この件に関して時澤大尉が直接関与していたのかは不明である。ただ先にも述べたとおり、マロスでの戦いにおいて、革命軍の能力が低かったことを指摘した手紙から推測すると、陸軍軍人が潜入することは承知していたのであろう。

1899 年 10 月には時澤大尉は帰国し、この任務は陸軍参謀本部の小池安之（小池）歩兵大尉³⁴²が引き継いだ。小池大尉の秘報第 167 号には「馬尼刺ニ在ル独立軍有志者ハ曰クア

³⁴¹ 明石少佐はこの時期にラモスのために、ラモスに近づく身元のわからない人物の調査を行っている。1899 年だと思われる 6 月 2 日の明石少佐からラモスへの手紙には、「私は、あなたが私に素性と職業を尋ねてくれとたのんだヨシダ氏を調査した（筆者注：asked for などの訳に関して、多少意味が通るように意識した）。しかし、私はそれを見つけられなかった。警察官は、有楽町ではその名前は知らないし、名前はたぶん間違いであろうと述べた。そして、私は、訪問者はそのように呼ぶようなフリをしたのではないかと懸念した（筆者注：「偽名を伝えた」という意味であろう）。警察官が誓ったので、私はあなたにそのようなヨシダという名前は、麴町 3 丁目有楽町 1 番では見つけれなかったと回答する I asked for Mr. Yoshida whose character and profession you charged me to inquire. But I found it not. The policeman said me that he don't know this name in Yurakucho and that the name might be perhaps mistaken. Then I doubted that this visitant might be any man who pretended to call so. By the swearing of policeman, I reply you that the name of Yoshida didn't find herself in No. 1 Yurakucho 3 chome Kojimachi」と記されている。

³⁴² 小池大尉は 1886 年に第 8 期士官生徒として陸軍士官学校を歩兵で卒業し〔外交時報社卒業人名簿 9〕、1899 年 10 月にマニラに着任する。この時は福島の部下であった。1900 年 4 月にこの任務を終え帰国してから、小池大尉は一時福島少将の下を離れた〔秦 2002:

ギナルドハ^{タルラク}Tarlacヨリ^{セントニコラス}S.Nicolas方面ニ退却セシガ（後略）」³⁴³〔外務省外交史料館文書 米西戦争一件 雑 第二巻 陸軍視察員報告 917〕とあり、時澤大尉同様、小池大尉も独立側のスパイと接触していた。また1900年1月5日の秘報185号では「明朝ヨリ直に従軍スルコトナルヘシ」〔外務省外交史料館文書 米西戦争一件 雑 第二巻 陸軍視察員報告 1002〕と、そして16日の秘報第186号では、「小官ハ本月六日第一師団司令部ニ附属シテ^{イムス}Imus、^{シラン}Silanヲ経テ（中略）従軍ニ就イテハ総督部ハ小官ノ為ニ乗馬及従卒ヲ用意シ総督ノ秘書ヨリハ野戦用ノ疊●●³⁴⁴ヲ送り来ル等懇切ナル取扱ヲナセリ」³⁴⁵〔外務省外交史料館文書 米西戦争一件 雑 第二巻 陸軍視察員報告 933〕と記していることから、アメリカ軍の視察も続けていた。

軍の報告書という部分はあるものの、陸軍から視察員として派遣された時澤大尉と小池大尉は、表向きはアメリカ軍の従軍報告と現地で得たフィリピンの状況を日本に連絡しながら、革命側ともコンタクトを取り、時折彼らのスパイから得た情報も報告書に載せていた。革命家に対しては、表向きは共感する姿勢を示しながらも、実際は彼らを冷静に分析し、報告書の中ではフィリピン人に対して「沐猴冠的」とかなりシビアな分析を行っていた。

5-2. 土筆ヶ岡養生園での静養

1899年11月³⁴⁶、時澤大尉は「養生園 Yojoen³⁴⁷」〔PIR 780B〕からラモスに手紙を出している³⁴⁸。同年11月28日に時澤大尉は、ラモスに対して1月中は養生園を出られないと告げており〔PIR 780B〕、その後12月27日、時澤大尉は以下のように書いている：

フィリピンのできごとについてあなたの意見は至極妥当である。私は、一番の重要な問題は、東洋文明によって文明化された反アメリカの若者を多く作ることだと思う。

62〕、小池大尉は1900年1月16日の秘報186号で、アメリカ軍内で働くフィリピン人斥候兵を「売国奴」と呼び、白人たちが戦いの形勢が悪くなるとフィリピン人斥候兵を見捨てて逃げるのを見て、「黄人種ニ対スル白人種ノ根性ナルカ」〔外務省外交史料館文書 米西戦争一件 雑 第二巻 陸軍視察員報告 930〕と述べている。

³⁴³ 傍線と振り仮名は史料通り。

³⁴⁴ 二字判読不能であるが、野戦の際の装備品であると思われる。

³⁴⁵ 振り仮名は史料通り。

³⁴⁶ この時期には福島大佐は直接ラモスに手紙を送っており、福島大佐からラモスの手紙には、1899年11月3日に陸軍大学校を見学できる通行証を4つ同封したので、11月3日の朝8時半に来てほしいと述べられている〔PIR 780B〕

³⁴⁷ 土筆ヶ岡養生園は、北里柴三郎博士が福沢諭吉の協力を得て作ったサナトリウム。

³⁴⁸ 1899年11月には、和田大尉も養生園に入院してしまう〔PIR 780B〕。

この問題について、あなたと話す機会を持ちたい。

As for Philippine affair your opinion is very reasonable and I think the most important question is to make many anti-American youths who are civilized by oriental civilization, about this question I shall have the occasion to speak with you.

[PIR 780B]

1900年2月5日にも時澤大尉は、反欧米的ともとれるようなニュアンスの以下の手紙をラモスに送っている：

そして、私はあなたが双方の原住民が相互につながる用意をしていることを、そしてその方法を見つけていることをとてもうれしく思う。我々が次に会合を持つ際、その詳細を私は知るのだろう。もちろん私があなたと合意したなら、私は倫理的のみならず、物質的にもあなたを助けるだろう。なぜなら、それは私の生涯の任務で、オリエントで大きなことを行う最初のステップとなる2つの国の、相互交流を行うためだからである。

And very much glad that you are preparing to make mutual connect the two natives and find that way, in the our next interview learn from you about that detail; of course I will help you not only moral also material if I agreed with you because to make mutual contact of two nations as the first step to do some great thing in Orient in my lifelong service.

[PIR 780B]

最初の手紙は、参謀本部がフィリピンに食い込むための一つの方策として、親日協力者の養成を間接的に示唆している。そして、2番目の手紙では、「オリエントでことを起こす」というコンセプトを、明確にフィリピン人革命家に対して掲げるようになっている³⁴⁹。時澤大尉は1898年9月に「南進」という言葉を使い、1899年11月、比米戦争の視察後になると「オリエントで活動する」³⁵⁰というコンセプトを、手紙の中で持ち出すようになった。

³⁴⁹ モハレスは、フィリピン人のアジアニズムについて、ポンセは日本に来る前に、リサーチなどがフィリピンをマレー世界の中に据えて考えていたことを指摘し、そのディスコースの中で革命家たちは、革命によってフィリピン人と日本人の人種的・領土的類似性と、マレー世界で植民地化された人々の解放に、革命家たちが道を開いたと考えた、と分析している [Mojares 2013: 169]。

³⁵⁰ 1898年11月28日のポンセからアパシブレの手紙には、日本に帰国した時澤大尉の「談」として「極東全体の人種の中で、フィリピン人種（筆者注：la Filipinaの女性形は、人種

た。これは時澤大尉自身が変化したと言うよりも、参謀本部全体がアジアという枠組みの国家戦略を全面に持ち出してきたことを示している。日清戦争で興亜論から拡張主義へと舵を切り始めた参謀本部が、アジアを戦略的に考え始めたのである。日清戦争直後は、台湾とその南方に目がいていた陸軍も、その後中国にも本格的に目を向け始め、中国や朝鮮などの「北進」を含めた全アジア進出を本格的に狙うようになった影響が、この時澤大尉の手紙の「オリエントで大きなことを行う」という言葉に現れてきたのであろう。この後、ロシアや中国での日本軍による謀略や諜報活動を考えると、この時期から参謀本部はアジア進出のために、利用できる人材は、アジア主義者でも革命家でも誰でも利用しようとしたと思われる。1900年1月13日に、香港に一時的に休養滞在していたポンセは孫逸仙に対して、「私は近い将来、あなたが最終的には、我々の大義で満ち足りることができるだろうと望んでいる。我々の大義は、人類と極東全体の大義である I hope that in the near future you will at last succeed for the welfare of our cause, which is the cause of humanity and of the whole Far East too³⁵¹」〔Ponce 1932: 463〕と述べており、フィリピンの独立もさることながら、やはりアジア全体に目を向けるような記述を行っている。フィリピン人はアジアの人々の「軛からの解放」、つまり欧米の白人支配からの脱却を目指し、参謀本部はアジアへの「進出」を目論んでいた。つまりフィリピン人のアジア主義と参謀本部の考えは食い違っていた訳である。

翌年春、時澤大尉は養生園を退院して1900年3月11日に、自身の出生地と思われる群馬の住所からラモスに手紙を送っており、「大佐 Sr. Colonel」³⁵²がラモスのプランに合意したと書いている〔PIR 780B〕。

5-3. ホセ・アナクレト・ラモスの「帰国」

という単語の *la raza* の女性形に対応している) は近代化や進歩を望み熱望した最初の人種である (後略) *de entre todas las razas del Extremo Oriente, la Filipina es la primera en el deseo y aspiraciones de civilización y progreso...*」〔ponce 1932: 240〕という記述がある。1年前にもオリエントのコンセプトは漠然と考えられていたが、その考えが徐々に具体化していった。

³⁵¹ ポンセから孫逸仙への手紙は、英語で書かれている。Welfare の訳については、スペイン語の *bienestar* を念頭に書いたのではないかと推測して日本語に訳した。ポンセは孫逸仙が彼らの極東における大義 (アジアでの革命の成功) を成し遂げてくれると言いたかったと思われる。

³⁵² 福島大佐のことだと思われる。ラモスのプランが具体的に何かは書かれてはいないが、この次の節で述べるラモスのフィリピンでの活動のことだと思われる。

1900年6月1日、東京に戻っていた時澤大尉はラモスに対して、准将 General³⁵³はあなたに対して250円を送ることに成功し、ラモスは警官³⁵⁴の手を通して通達を受け取るであろうと書いている〔PIR 780B〕。また6月4日には、大阪の紳士³⁵⁵の到着を待っており、ミスター・スズキを訪ねてラモスの要求を伝えると述べ、ラモスの日本人への帰化については、政治的亡命者の肩書を持っている方が得策かもしれないから、碓山署長に相談すべきだとアドバイスしている〔PIR 780B〕。そして、6月12日には、以下の2点、1)ラモスが250円のお金を受け取ったのか、2)福島少将³⁵⁶に会いに6月15日に時澤大尉の家³⁵⁷に来るのであれば、事前に連絡してほしい——を述べている〔PIR 780B〕。これからすると、ラモスは当時何がしかの目的で、大阪に住む商人とやり取りをしながら、福島少将から250円もお金を貰い、活動をしていたことになる。しかし、250円は武器購入にも船の購入にも安すぎる価格なので、1ヵ月後にラモスがフィリピンに戻るための費用であったのかもしれない。

しかし、時澤大尉はラモスに対して頻繁に手紙を送る一方で、1900年6月24日に彼の上司にあたる宇都宮太郎（宇都宮）少佐³⁵⁸の家を訪ね、任務の継続に関する相談をしている。宇都宮少佐の日記³⁵⁹には「時澤大尉、その身上につき来談あり。依然その職を取るべきことを勧む。同人は病気のため激務に耐えざるの恐れあるにつき、進退について相談ありしなり」〔宇都宮太郎 2007: 80〕とある³⁶⁰。当時、時澤大尉は自身の体調不安から、ラ

³⁵³ 1900年4月に少将に昇進した福島のことだと思われる。

³⁵⁴ 碓山署長、または彼の部下のことだと思われる。

³⁵⁵ この大阪の紳士は平田なのか、ミスター・スズキなのかわからない。

³⁵⁶ 1900年6月17日には義和団問題で、福島少将は中国大陸に向けて新橋を出発している。

³⁵⁷ この時には時澤大尉は大森に住んでいた。

³⁵⁸ 宇都宮は1885年12月に第7期士官生徒として歩兵で卒業。明石の1期後輩である。少なくとも1896年5月から福島大佐〔秦 2002: 319〕のもとで、参謀本部第三部員をしていた〔秦 2002: 25〕。一時福島大佐の下を離れたが、1898年10月には少佐となり〔宇都宮太郎 2007: 7〕、1899年1月の参謀本部担当業務改編で福島が第二部長に移動した際〔秦 2002: 319〕に、福島大佐の下に戻り第二部員をしていた〔秦 2002: 25〕。

³⁵⁹ 2007年、『宇都宮太郎の日記』〔宇都宮太郎 2007〕が公開・出版されたが、公開された日記は1900年2月3日から7月12日までと、1907年以降のため、本稿で利用できるものは、1900年2月3日から7月12日のみとなっている。本稿では、出版された日記を引用しているために、カタカナではなく平仮名を使用している。

³⁶⁰ この後1900年7月9日になると宇都宮少佐は、義和団に関しての作戦計画を作るようにと参謀総長と次長から命令され〔宇都宮太郎 2007: 90〕、7月12日には作戦計画を持って清国へ行くように命令された〔宇都宮太郎 2007: 91〕。宇都宮少佐は8月4日に新橋に戻ってきて〔斎藤聖二 2006: 134〕いるが、日記はそれ以後がないので、フィリピンへの関与についてはわからない。

モスとの任務を続行すべきかどうか迷っていた。宇都宮少佐が任務の継続を勧めたことで、時澤大尉はその後も「現役軍人³⁶¹」として任務を遂行することになる。時澤大尉からラモスへの書簡では体調不良のことは書かれていても、任務から外れることに関しての相談や示唆は一切書かれていない。このように時澤大尉は任務としてフィリピン革命に関与していたのであり、サニエルの述べる「志士 *shishi*」〔Saniel 1969: 244〕は、時澤大尉には当てはまらない。

その後ラモスが日本人に帰化すると、時澤大尉は 1900 年 7 月 7 日にラモスに宛てて、以下の祝辞を述べた：

親愛なる友よ。私はあなたの帰化を心から歓迎する。私は兄弟をもう一人持った。オーラッ！ 私はあなたにある額のお金を送ることができた。その額は、あなたが私にリクエストした以上のものだった。このお金は、たぶんあなたが出発する前に、あなたの手元に届くだろう。実際に私は、長い病気による惨めな結果で、私のポケット・マネーを出すことはできないが、それゆえに別の方法で成し遂げた。

Dear friend: I congratulate heartily your nationalizing, I get one more Brother! Hola! I have succeed to send you some quantity of money more than that you had request³⁶² to me; this money probably will reach to your hand at before your departure: indeed I am very poor in consequence of long ill so I can't separt³⁶³ from my own pocket therefore I work through other way.

〔PIR 780B〕

しかし、翌日の 1900 年 7 月 8 日には、先に述べたお金を渡したいのだが、体調が悪く行けず、大森の彼の家に来てほしいとラモスに頼んでおり、体調ははかばかしくなかったようである。

秘甲第 271 号と秘甲第 272 号によると、この後 1900 年 7 月 13 日に、ラモスは日本に来ていたフィリピン人活動家と共に、日本人石川保政³⁶⁴としてマニラへ向かった³⁶⁵。この 1 ヶ月後の 8 月 16 日、時澤大尉は第 1 師団司令部御用掛兼勤を命じられている〔官報 第

³⁶¹ 士官は退役後も制服とその地位が残るため、退役していないとの意味で現役と述べた。

³⁶² 原文通り。

³⁶³ 原文通り。前後関係から、「自分の持ち金から捻出して援助する」という意味で使いたかったと想像される。

³⁶⁴ 他論文では保正と記しているものもあるが、本発表では外務省史料、及び、PIR に記されていた保政を採用する。

³⁶⁵ ラモスは、翌年 1901 年 3 月 26 日に日本へ戻ってくる。

五千百三十七號 明治三十三年八月十六日]。

5-4. スクーター船の購入と武器の輸送

第4章でも述べるが、武器の購入もさることながら、革命家たちの中には購入した武器をフィリピンまでどう運ぶかが大きな問題となっていた。武器を購入するだけであれば中国で行うことができたが、武器をフィリピンに持ち込み、革命家のもとへ届けるのは非常に難しかった。なぜならアメリカ当局はフィリピン人革命家のフィリピンへの武器持ち込みを水際で阻止しようとしていたからである。

興味深いことに、参謀本部は1901年3月にアギナルドが降伏しても、まだ革命側への援助を続けており、時澤大尉は日本でスクーター船を購入しようと奔走していた。1901年4月2日、フィリピンで植木の輸出入を始めて横浜に戻ってきたラモスに対し、時澤大尉はビジネスの基本的なできごとを知らないと言った理由から、以下の2点、1) 大阪か神戸にあるはしけとスクーター船の価格と使用年数、2) 神戸からマニラまで30~40トンのはしけを引くために郵船会社に支払う費用——の質問を行った。これらの連絡において、ラモスと時澤大尉は日本国内にいるのにもかかわらず、お互いに細心の注意を払って手紙のやり取りをしていた。4月19日の手紙からは、比米戦争の陸軍視察員の際の時澤大尉と同じく、アメリカ当局に名前を知られていない和田大尉の住所を利用して手紙のやり取りをしている様子が伺える〔PIR 903-5〕。連絡のやり取りに関しては、時として碓山署長を介していたこともあり、1901年5月23日の手紙で時澤大尉は、碓山署長に手紙を書いたので彼から連絡を受け取るだろうと書いている³⁶⁶〔PIR-903-5〕。

他の点においても、時澤大尉は慎重に行動していた。たとえば、1901年4月2日のラモスへの手紙では、嗅覚の鋭い商人が時澤大尉のプランを嗅ぎ付けないようにするため、時澤大尉自身はスクーターに関する調査を行えない状況にあることが述べられ〔PIR 903-5〕、6月14日のラモスへの手紙ではライバルたち *rivals*³⁶⁷がすでに気が付いている旨を報告している〔PIR 903-5〕。これらからこの時期、時澤大尉は、近隣の人間が彼らの行

³⁶⁶ 直接会って話せない場合、手紙では難しいコミュニケーションは、碓山署長に日本語で手紙を書いて、碓山署長から英語で伝えてもらったと思われる。つまり、「時澤大尉——（日本語の手紙）——→碓山署長——（手紙の翻訳・通訳）——→ラモス」と言うプロセスを経たものと思われる。

³⁶⁷ このライバルたちが誰を指すのかは不明であるが、福島少将・時澤大尉・ラモスに敵対する人々であろう。

動に気が付かないように注意していた様子が伺える。

1901年6月19日の時澤大尉の手紙は、時澤大尉のライセンス licence³⁶⁸について触れられており、以下の2点、1) 福島少将³⁶⁹が中国大陸から参謀本部に戻って間がないので、状況を把握するために時間が欲しがっている、2) 福島少将が、制服 uniform は持っている必要はないと述べていた——が書かれている [PIR 903-5]。7月2日には、神奈川県知事の報告書秘甲第231号には、ラモスが「横浜市本牧町居住独逸人エッチ・ビー・エデン 所有（表面ハ妾杉崎ハルノ名義）」の「西洋形帆船」の購入を、アメリカ人の斡旋により5,700円で売買契約することになったが、価格の点で相違が生じており、現在は交渉中であるとの報告が上がっている [外務省外交史料館文書 米西戦争一件 雑 第一巻 馬尼刺ニ関スル報告 420]。これ以後の彼らの行動を考えるとこの時点ですでに、スクーター入手と同時に、時澤大尉が再度フィリピンに向かう計画が立てられていたものと思われる。

1901年7月7日、ラモスは中国大陸から帰国した福島少将と面会している。その結果、時澤大尉は7月9日のラモスへの手紙で、問題が生じたので日本を離れるのが数日遅れると述べている [PIR 903-5]。このスクーター船購入に関しては、弁護士の平田が絡んでいくらしく、7月9日、平田は6日付けのラモスの手紙に対して、いくつかのアドバイスを記した手紙を、神戸栄町にある平田のオフィスからラモスに送っている。 [PIR 903-5]。また、先の7月9日の時澤大尉からラモスへの手紙にはミスター・スズキ Mr. Suzuki がラモスに多大な迷惑をかけて恥じ入っていると言うくだりがある [PIR 903-5]。このスズキが、大阪に住む商人のスズキ [Ponce 1932: 250-251] か、もう1人の九段の写真師鈴木眞一 [PIR 780 B] [外務省外交史料館文書 米西戦争一件 雑 第一巻 中村弥六ナル者馬尼刺反徒援助ノ目的ヲ以テ兵器類密輸送ニ関スル件 151-152] かは不明である。どちらかのスズキと思われる人物がスクーター船の購入の件でトラブルを起こした。同じ7月に書かれたと思われる時澤大尉の別の手紙には、「何と情けない問題だろう。問題は殆ど決裂している。(中略) とうとう私は怒りだし、自身で調査しろと言った。事実私はそのようなフラフラした男と一緒に、問題を話したくない。だから私は、2,500円のために新しいパートナーを探さねばならない (後略) What a matter so pittty, the matter is almost broken,...At last I grow up angry and told him that he might study himself. Indeed I

³⁶⁸ 内容からすると、軍人として任務を行うのか、一時退役して任務を行うのかなどの身分 status の意味で使われたと思われる。

³⁶⁹ 1901年6月には福島少将は、義和団征伐の任務を終え、日本に戻っている。

don't like to talk with a matter together such fluctuating man so I must find new partner for the 2500 yen's Capital...」〔PIR 903-5〕と書かれている。これから推測するとスクーター船購入に関し、何かの事情でパートナーが躊躇してしまい、2,500 円を出す出資者を再度探さねばならない状態にあったようである。このように参謀本部が介入しても、スクーター船の購入は簡単にはいかなかった。

この後、スクーター船の購入に関して、1 ヶ月後の 1901 年 8 月 8 日の神奈川県知事の秘甲第 239 では、以下のような報告がなされている

石川保政（元馬尼刺人ラモス事）ハ帆船購入ノ計画アル趣七月二日●³⁷⁰秘甲第二三一
号ヲ以テ及報告置候處杉崎ハル所有ノ帆船ハ価格ノ相違ヨリ相談不調トナリ其後更
ニ東京市京橋区築地某船会社所有ノ西洋型帆船（百二十八噸積）³⁷¹一隻ヲ代価四千二
百円程ニテ購入ヲ了シ本邦人木村其他四名ヲ乗組コレヲ一両日中ニ馬尼刺へ航送ス
ル筈ナリト聞ク

〔外務省外交史料館文書 米西戦争一件 雑 第一巻 馬尼刺ニ関スル報告 421〕

したがって、時澤大尉とラモスは、何とかスクーター船購入に漕ぎ着けたようである。

しかし秘甲第 298 号によると、時澤大尉とラモスはこのスクーター³⁷²ではなく、日本郵船の「春日丸」³⁷³で 1901 年 8 月 9 日にマニラに向かった〔外務省外交史料館文書 米西戦争一件 雑 第一巻 馬尼刺ニ関スル報告 423〕³⁷⁴。不思議なことに秘甲第 366 号によると、ラモスはこの出発から 2 ヶ月もたたない 9 月 30 日に神戸を經由して横浜に帰り、時澤大尉も 29 日にやはり日本郵船の「八幡丸」³⁷⁵で帰国している〔外務省外交史料館文書 米西戦争一件 雑 第一巻 馬尼刺ニ関スル報告 425〕³⁷⁶。この後、ラモスは 11 月

³⁷⁰ 1 文字判読できず。

³⁷¹ スクーター船

³⁷² このスクーターの件をアメリカ側は認識していない。また『日本陸海軍総合事典〔第 2 版〕〕〔秦 2002〕でも、この時澤のマニラ出張の記録は残っていない。アメリカ軍の報告書にもラモスの到着は述べられているが、時澤の名前はない。

³⁷³ 「春日丸」は日本郵船所有の汽船〔日本郵船株式会社 1935: 642〕。

³⁷⁴ 秘甲第 298 号では、時澤大尉の名前が右一ではなく、陸軍大尉時澤兵七と書かれている。アメリカ側の報告書では、ラモスはマニラに「一団と一緒に with troupe」来たとある〔PIR 903-5〕。

³⁷⁵ 「八幡丸」は日本郵船所有の汽船〔日本郵船株式会社 1935: 642〕。

³⁷⁶ 秘甲第 366 号ではやはり時澤大尉の名前が右一ではなく、兵七と書かれている。この時期に時澤、奈良原、ラモスがマニラに集結した訳であるが、何をしていたのかについての史料は発見できていない。この後 12 月に奈良原はアメリカ軍にルソン島を回る許可願いを提出した。

25日に再度「春日丸」でマニラに到着していることが、アメリカ当局によって確認されている〔PIR 903-5〕が、この時に時澤が一緒であったかは不明である。しかし、12月18日付けのアメリカ軍の書類では、時澤大尉はマニラにおいて、日本の汽船会社 Steamship Line の代表となっていると書かれている〔PIR 903-5〕ので、フィリピンで何がしかの活動をしていた可能性は否めない。記録上は、時澤大尉は1902年に病気退役している〔秦2002: 14〕³⁷⁷。

時澤大尉は米西戦争の観戦武官であった時に、「南進」の益になるとして革命家たちと関係を築いた。その後、時澤大尉は、比米戦争が始まると陸軍の視察員としてフィリピンに戻り、アメリカから正式に視察を認められ、戦闘とフィリピン国内の様子を日本に報告した。時澤大尉は革命側ともコンタクトをとり、彼らから情報を集めた。しかしこれは、革命家に共感していたからでも、彼らを評価していたからでもなく、任務として彼らに共感する姿勢を見せたからにすぎなかった。その後の「布引丸」事件や陸軍軍人潜入などの参謀本部の革命軍への援助などもあり、革命側も時澤大尉と秘密裏にコンタクトをとっていた。時澤大尉は、帰国後もラモスと連絡を取り続けた。その後比米戦争中になると、陸軍がその視野を「オリエント」に拡大していくにつれ、時澤大尉のラモスたち革命家への対応も変化していった。参謀本部側は革命家の活動をサポートすることを革命家にアピールし、彼らを利用することで、その後の陸軍及び日本のアジア進出の足掛かりをつかもうとした。アギナルドが降伏した後も参謀本部がサポートを続けたのは、フィリピン人のみならず、この時代にアジアで「革命家」と呼ばれた人たちに対して、参謀本部が協力する姿勢を見せる意図があった可能性も否定できない。

6. 奈良原忍歩兵大尉の活動（1900年5月—1901年12月）

6-1. マニラ駐在

1900年4月25日、青木周蔵外務大臣はアメリカ合衆国特命全権公使アルフレッド・イライアブ³⁷⁸・バック Alfred Eliab Buck に対し、帰任命令の出ている参謀本部の小池大尉の後任として、奈良原歩兵大尉に関する推薦状をオーティス准将に向けて書いてほしいと

³⁷⁷ 退役後もフィリピンで活動を続けていたのかどうかは、現在史料がないのでわからない。

³⁷⁸ またはエリアブ。

頼んでおり〔PIR 903-5〕、これに対してバック公使はオーティス准将に対して奈良原大尉の紹介状を書いている〔PIR 903-5〕。アメリカ軍の史料によると、奈良原大尉は5月末には汽船「スンキアン」でマニラに到着している〔PIR 903-5〕。奈良原大尉が書いた1900年6月21日付け秘報第228号には、「(前略) 当地総督部副官ノ語ル所ナリ」や「総督部将校答ヘテ曰ク (後略)」〔外務省外交史料館文書 米西戦争一件 雑 第二巻 陸軍視察員報告 993-994〕などの記述があり、マニラ着任当初は、奈良原大尉は「陸軍視察員」としてアメリカ当局にも出入りしていた。しかしその後、奈良原大尉はアメリカ軍の戦闘を視察しなかったらしく、1902年1月10日に、日本陸軍の活動について提出されたアメリカ側の史料には、「今までわかっているところでは、この男³⁷⁹はアメリカ軍と反乱者たちとの戦闘を1回も見えていないし、前線で我々の兵を観察しようとする意向を見せたこともない...So far as is known this man has never witnessed a single action between United States troops and the insurgents nor has he shown any disposition to observe our troops in the field,...」〔PIR 903-5〕と書かれており、アメリカ当局は奈良原大尉が視察員として活動をしていなかったと断定している。

この時期、奈良原大尉も時澤大尉同様、宇都宮少佐の家を訪問していた。福島少将が義和団の件で多忙を極めていた³⁸⁰1900年5月3日、奈良原大尉本人が宇都宮少佐の家を訪問し〔宇都宮太郎 2007: 77〕。その後、5月14日には奈良原大尉の妻が宇都宮宅を訪問している〔宇都宮太郎 2007: 80〕。奈良原大尉がマニラで活動を始めた後、7月6日には宇都宮少佐が奈良原大尉の留守宅を訪問している〔宇都宮太郎 2007: 90〕。日記の一連の書き込みから、当時福島少将の直属の部下である宇都宮少佐が、奈良原大尉の面倒を見ていたことがわかる。

6-2. マリアノ・トリアス・イ・クロサス将軍との会見

1900年10月11日、マニラの日本領事館事務代理・領事館書記生の北條太洋(北條)³⁸¹

³⁷⁹ 奈良原大尉のこと。

³⁸⁰ 1900年9月から翌年1901年6月まで、福島少将は北清連合軍総司令官幕僚として正式に中国に駐在した。この時期参謀本部では、寺内次長が参謀本部の藤井大尉に福建省の調査測量を、明石少佐に山海付近の調査を命令している〔北清事変と日本軍 267〕。しかし、現段階で奈良原大尉に対してどのような命令を行っていたのかについては、史料を見つけていないので不明である。

³⁸¹ 論文によっては北条という漢字を採用しているものもあるが、本稿では始末書での自身のサイン「北條太洋」に基づき北條を採用した。機密乙第63号では北條の身分を「北

が、革命軍のトリアス將軍とカビテで会った。この後 12 月に、アメリカ軍がこの時の会見記録を独立運動側から押収した。その際、会見記録と北條書記生の名刺の他に、奈良原大尉とラモスの名刺も押収している〔PIR-2036〕〔PIR-466-11〕。アメリカ軍のクレームにより、北條書記生は反乱軍の上官と直接会ったことを問題視され、日本に帰国させられ、1901 年 1 月 31 日に「比律賓島叛将マリアノ、トリアス氏ト会談ノ始末」〔外務省外交史料館文書 米西戦争一件 雑 第一巻 比律賓叛徒ト我領事館事務代理トノ協謀ニ関シ在本邦米公使申出ノ件 491-502〕というタイトルの始末書を提出させられた。北條書記生はフィリピン人ドクトル・ホクソン Jocson³⁸²とカビテ市で会い、その際トリアス將軍と彼の幕僚 5~6 人と会って話をした。トリアス將軍本人が日本に出向くことを希望していたが、北條書記生はそれに対し、回答する権限がないと返答したと報告している。そして北條書記生は始末書の最後で、フィリピンの現状は独立を完結する要素を備えているのかと疑問を投げかけている。しかしこの始末書には、同行していたと思われる奈良原大尉とラモスのことには全く触れられていない。北條書記生は自分の会談について、「一旅客トシテ面会」し、「書記官(其名ヲ逸ス)」が、トリアス將軍を北條書記生に紹介したとだけ書いている。なぜ北條書記生が奈良原大尉とラモスの名前を取って報告書に書かず、外務省にもこの 2 人の存在を伏せたのは謎である³⁸³。したがって、日本側の史料のみを利用した論文には、奈良原大尉とラモスが同席していたことは記されていない。

トリアス將軍から奈良原大尉に向けられたと思われる 1900 年 12 月 22 日付けの手紙の下書きも、アメリカ軍に押収された。トリアス將軍の手紙には、独立側にはアメリカによる保護の可能性はもはやなく、この国は状況の不確実さから悲惨な状況になり、国家は日本の人々と友愛的な強い結びつきを求めている旨が書かれている〔PIR-621-4〕〔PIR-622〕。北條書記生とトリアスとの会見記録の押収により、アメリカ軍は奈良原大尉とラモスの家

條書記生」と記している〔外務省外交史料館文書 米西戦争一件 雑 第一巻 比律賓叛徒ト我領事館事務代理トノ協謀ニ関シ在本邦米公使申出ノ件 518〕。

³⁸² ラルドウィン・トリアス Raldwin Trias の主治医

³⁸³ 現在、外務省外交史料館に残されている「陸軍視察員報告」も、時澤大尉の報告に関しては番号が飛んでおり、収録されていない報告書がある。小池大尉の場合も、1899 年 11 月 7 日の秘報第 157 号から 1900 年 5 月 5 日の秘報第 221 号までの間、収録されているのは 4 報告しかない。奈良原大尉に至っては、1900 年 6 月 21 日の秘報第 228 号しか残されていない。奈良原大尉は 1902 年 1 月末まではマニラにおり、報告書を日本に送っていたと思われるが、現在のところ、その報告書は見つけていない。比米戦争中及び、その後の視察員の行動が史料としてのこされていない理由は不明である。〔外務省外交史料館文書 米西戦争一件 雑 第二巻 陸軍視察員報告 721-1015〕

を監視するようになった〔PIR-2036〕。アメリカから強いクレームがあったのにもかかわらず、奈良原大尉とトリアス將軍の部下とのコンタクトは続いており、1901年3月23日の奈良原大尉からラモスでの手紙では、「私はミスター・ビリャ³⁸⁴から、トリアスは全く日本に行きたがってはならず、彼は忙しいと聞いた I have heard from Mr. Villa that Trias never like to go to Japan and he is very busy now」と述べ、トリアス將軍の代わりに、ホクソンと会う話も浮かんでいることを伝えている〔PIR 903-5〕。このように奈良原大尉はラモスを通じて革命家との交流を広げていった。

6-3. 物流・人的交流・資金サポート

1901年1月28日に、同年1月13日付け参謀本部参秘26号第1で、奈良原大尉の号外第1報告を、寺内正毅（寺内）参謀本部次長が、大山巖（大山）参謀総長の名前で外務省に対して上げた。それは以下の通りである：

当地反徒ノ参謀大佐ニシテ^{マルセリノゴメス}Marcelino Gomez³⁸⁵ナルモノ我日本ニ脱走ノ目的ヲ以テ昨十二日当地寄港ノ郵船会社汽船春日丸ニ乗込テ首尾克ク同日出帆致シタル由ニ付此段及御報告候也 追テ横浜ニ上陸スル筈ニ聞及候 近来反徒ノ形勢日々に非ナルニ従ヒ此ノ如キ輩ニシテ我国ニ出奔セント欲スルモノ追テ増加セントスル情況ニ察セラレ候

〔外務省外交史料館文書 米西戦争一件 雑 第一巻 馬尼刺人ニ関スル報告 393-394〕

この報告からは、日本に逃れようとする革命家を奈良原大尉が助けている様子が伺える。また、大山参謀総長に報告が上げられている事実から、奈良原大尉の活動は福島少将の独断ではなく、大山参謀総長も寺内参謀本部次長も承知しており、義和団征伐のための出兵の間も、参謀本部が組織的にフィリピンに関与していたことになる。

1901年2月、アメリカ軍で主に独立側の文書の翻訳・分析を担当していたテイラーが、奈良原大尉に会っている〔PIR 903-5〕〔PIR 621-8〕。この際、奈良原大尉は、第2次フィリピン委員会による民政がフィリピンに定着したら、すぐに帰国するつもりであるとテイラーに伝えた〔PIR 621-8〕。これは先に述べたトリアス將軍との会見記録の押収されたことが原因になっていると思われる。しかしそれは口先だけであり、奈良原大尉はフィリピ

³⁸⁴ サイメオン A. ビリャ Simeon A. Villa（ビリャ）については6-3で触れる。

³⁸⁵ 振り仮名は史料通り。

ンで活動を続けた。

1901年3月9日³⁸⁶、奈良原大尉は、マニラを発って日本に向かったラモス³⁸⁷に対して、以下の4点、1) アルタチョが面会を拒否した、2) 「(日本) 領事館が手紙の到着を教えてくれなかったので手紙の受け取りが遅れた the Consulate did not give any notice to me about the arrival of the letter」〔PIR 903-5〕、3) トリアスは日本に来ることができないだろう、4) 帽子を送るだろう——を述べている〔PIR 903-5〕。奈良原と日本との手紙のやり取りには、在マニラ日本領事館副領事成田五郎(成田)も手を貸していた。成田副領事が1901年4月21日にラモスに宛てた手紙には、「親愛なるミスター石川。この手紙で、私はあなたに書類を送る。その中にはアギナルド将軍の演説³⁸⁸がある。私は時間がある時に再度あなたに手紙を書くだろう。ここでは全てがうまく行っている。敬具 成田五郎 Dear Mr. Ishikawa. By this mail I send you a paper, in which you will find the address of General Aguinaldo. I will write you again when I have time. All is well here. Yours truly (Sgd.) Goro Narita」〔PIR 903-5〕との記載がある。

奈良原大尉は、アギナルド降伏後の1901年3月23日にも、ラモスの人脈でアギナルドの主治医だった Dr. ビリャ³⁸⁹に会い、彼が北里柴三郎博士のもとで学ぶ希望があるので、5月19日の「ろせった丸」³⁹⁰で日本に行かせ、できるだけ援助したいと述べている〔PIR 903-5〕³⁹¹。奈良原大尉によると、結局彼らは「ろせった丸」には乗れなかったが、「ミスター成田から東京の大学教授のドクター・ドイト、スペイン語を流暢に話すことのできる外務省の役人宛ての紹介状を得て have get some letters of introduction from Mr. Narita to Dr. Doi, the professor of University in Tokyo, and one officer at Department of

³⁸⁶ 1901年3月、アギナルドが降伏した。

³⁸⁷ 高秘第135号によると、ラモスは3月27日に長崎に到着した〔外務省外交史料館文書 米西戦争一件 雑 第一巻 馬尼刺人ニ関スル報告 409-410〕。

³⁸⁸ アギナルドの降伏宣言のことだと思われる。

³⁸⁹ ビリャは、アギナルドと行動を共にしていた革命家。医者ではあったが、PIR 666-3によると、武器調達にも関与しており、独立側がスペインから押収したタバコ会社に対して、武器調達に関する要求を行った旨の手紙を書いている。1902年に帰国。

³⁹⁰ 1900年12月から1901年12月15日まで「ろせった丸」は日本郵船所有の汽船であった〔日本郵船株式会社 1935: 643〕。

³⁹¹ 結局ビリャたちは、切符が完売し「ろせった丸」には乗れず、次の船で正規の過程を経て来日した〔PIR 903-5〕。その後秘甲第176号によれば、1901年5月29日に日本に到着している〔外務省外交史料館文書 米西戦争一件 雑 第一巻 馬尼刺人ニ関スル報告 419〕。奈良原大尉はこの一件に関し、ビリャ一行が奈良原大尉に相談してくれれば、奈良原大尉は切符がなくても乗船できるように頼むことができたと書いている〔PIR 903-5〕。

foreign affair who can speak Spanish language fluently」〔PIR 930-5〕、別の船に乗った。

1901年6月3日の手紙で奈良原大尉は、「日本のパーティーのメンバーがあなたのエネルギーと影響でどんどん増えていると述べるのは嬉しく、ビリャや他の人々を日本のパーティーに入れてほしい It is very happy to say that the member of Japanese party are increasing by your energy or influence more and more. Please capture also Messers Villa, Manalo and others into the Japanese party.」〔PIR 903-5〕とラモスに頼んでおり、日本において、親日協力者の育成をすることを示唆した³⁹²。ラモスの帰国を報告した3月27日の長崎県知事荒川義太郎の高秘第135号では、「同人ガ馬尼刺出発ノ際同地出張ノ日本陸軍大尉奈良原某ハ八幡丸へ同伴同船事務長ニ対シ依頼スル所アrinto（後略）」〔外務省外交史料館文書 米西戦争一件 雑 第一卷馬尼刺人ニ関スル報告 409-410〕と書かれており、前日の26日に、この汽船「八幡丸」で、ラモスと一緒に6人のフィリピン人が長崎に到着したことを報告している。

逆に奈良原大尉はラモスが日本に行きマニラを不在にしている間、マニラにおける彼らの物流と情報の窓口となっていた。1901年5月2日、奈良原大尉はラモスに対して、「八幡丸」が到着しラモスの小包をミスター・イシバシ Ishibasi³⁹³から受け取ったので、「全ての小包と手紙を、すぐに宛先に送った all packets and letters I have sent to their destination immediately」〔PIR 903-5〕と書いている。

時には、奈良原大尉はラモスにお金の都合もつけていた。1901年5月18日、奈良原大尉はラモスに対し、「どうか同封した300円の為替手形を受け取ってくれ。今あなたが緊急に必要なと思うからだ Please receive the draft of 300 yen enclosed, thinking that you are necessary for money urgently at present,...」〔PIR 903-5〕と記している。その後1901年7月1日にも、奈良原大尉は以下のように口止めを行っている：

現在、私は私費をあなたに送ることはできない。残念ながら、以前先渡しした金は私のものではないと、あなたに言わねばならない。そのお金は私の政府から7月と8月のために先渡しされたものの一部である。個人的に私はこのことを伝える。どうか私のために、誰にも言わないでほしい。

³⁹² 秘甲415号では、ビリャは1902年9月11日にポンセの家で横浜在留のフィリピン人たちと宴会を開いたとの記録が残っている〔外務省外交史料館文書 米西戦争一件 雑 第一卷 馬尼刺人ニ関スル件 426〕

³⁹³ 1901年6月15日の手紙によると日本郵船の汽船のセカンド・パーサーである〔PIR 903-5〕。

No money to send you from my pocket now and I am very sorry to let you know that the money which I advanced you before, not belong to me, it was part of the advanced money to me from the Government for July and August, privately I tell you this, please do not speak toward any person about this on my account.

[PIR 903-5]

その後、同報告書内で再度「どうか300円の為替手形のことは話さないでほしい。しかし、私はその為替手形があなたのお腹の危機を救い、あなたの加減がよくなり始め、今では稲光が消えていることを知り、とても嬉しい Please do not mention about the draft of 300 yen, but I am very glad to know that the draft has saved the crisis of your stomach and you have begun to feel in good humor and the Relampaqueo³⁹⁴ is disappearing now」[PIR 903-5]と、他言無用を念押ししている。このやりとりから、革命軍側から活動費が出ていた長野の場合と違い、奈良原大尉の活動費は公的なお金、または陸軍参謀本部機密費³⁹⁵から出ていた可能性がある。しかし、このお金の融通のことは、本当に参謀本部に知らせずに行ったのかはわからない。

7. ビジネス関係の構築

7-1. ツアソン社構想

1899年12月27日に日本にいる時澤大尉は、ツアソン Tuason という人物の述べたことに関して福島の所に行ったと手紙を書いている [PIR-780B]。ツアソン一族はバンコ・エスパニョール・フィリピン Banco Español Filipino という銀行を設立した富裕なフィリピン人ファミリーである [Karnow 1989: 63]。日本側の史料には1899年6月16日の秘甲239号に「馬尼刺人エム・チュアソン夫妻ハ小兒八名ヲ連レ昨日十五日入港仏国汽船シドニー号ニテ香港ヨリ来着シ（中略）左人ハ馬尼刺ノ豪商ニシテ銀行業ヲ営ミ同地独立軍一味同志ノモノナル趣ナリ而シテ渡来ノ目的ハ単ニ漫遊ノ為メナリシト云フ（後略）」と記載されている [外務省外交史料館文書 米西戦争一件 雑 第一巻 馬尼刺人に関スル報告 336]。

³⁹⁴ Relampaqueo のことだと思われる。

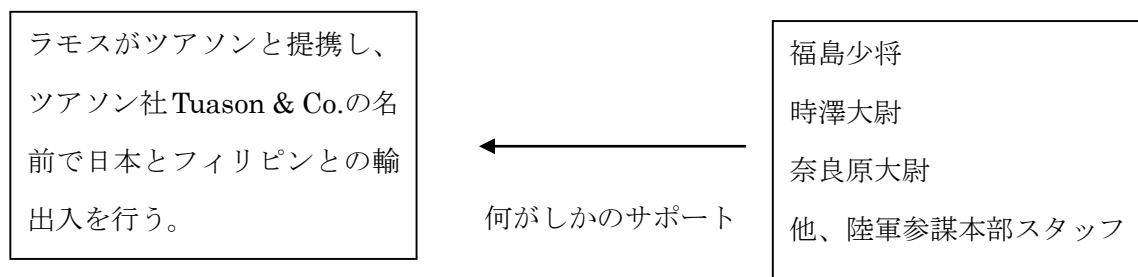
³⁹⁵ 辛亥革命中に宇都宮少将が革命派を援助し、「資金は参謀本部の機密費や振武資金という勘定から出されていることが諸種の資料から判明する」[櫻井 2009: 90] ことから考えると、この資金の出所も同じであった可能性はある。

福島大佐は、1899年12月19日付けのラモスへの手紙で、「なぜあなたは彼³⁹⁶をミスター大倉のところに連れて行かないのか？ 私は異論はないと思う（後略）Why do you not take him to Mr. Okura, You know? I think it is no objection...」〔PIR 780B〕と述べて、ツアソンを大倉の所に連れて行くようにアドバイスしている。

先の27日の手紙で、時澤大尉はラモスに対して、福島大佐は兵器廠見学は不可能ではないが、ツアソンを日本に滞在させるように福島大佐自身からラモスに話すことには躊躇があると話していると述べ、福島大佐の躊躇の理由を、陸軍の兵器廠は私的なものではない上に、福島大佐の発言には責任が伴うからだろうと書いている〔PIR-780B〕。つまりこの件に関して、福島大佐は表に出ることを避け、商人の間で関係を築いていくことを望んだ。したがって、福島大佐は「郵船会社のチーフ・マネージャーのR近藤」³⁹⁷を紹介する旨を伝え、時澤大尉はツアソンが長く滞在することを望んだ〔PIR 780B〕。1900年4月29日、時澤大尉はラモスに、「ミスター・ツアソンとのコミュニティー³⁹⁸がうまくいっていることを喜んでいる I am very glad to hear that the community between you and Mr. Tuason is going better」〔PIR 780B〕旨の手紙を書いている。

1900年4月26日、福島少将がラモスに宛てて「数日前、私はミスター大倉に会った。彼はマニラ麻の取引をしたいので、マニラの現状を知りたがっており、ラモスがツアソン社の名前でミスター大倉のもとに行くよい機会になればよい...few days ago I saw Mr. Okura and he told about the present condition at Manila, having the hope to make the trade of the Manila hemp. So I think it is very good opportunity for you to go to Mr. Okura on the name of Mr. Tuason and company」〔PIR 780B〕と述べた。

この手紙の内容をまとめ、図にすると以下になる：



³⁹⁶ 史料では、この通りに代名詞でしか書かれておらず、名前は明記されていないが、ツアソンではないかと思われる。

³⁹⁷ 日本郵船の社長近藤廉平と思われる。

³⁹⁸ 史料の言語通りに記した。多分会社を作るか、提携・連携・協力するという意味で使ったものと思われる。

この後、このツアソン社がどうなったのかは、史料が見当たらないので不明であるが、参謀本部が、軍事力以外の方法でフィリピンに食い込もうとした一例にはなるだろう。

7-2. ホセ・アナクレト・ラモスへのビジネス・サポート

1900年7月、ラモスがフィリピンに一時帰国をした時から、ラモスは彼の日本人妻の家族とラモス自身の家族などの協力を得て、日本とフィリピンで植木などの輸出入を始めた³⁹⁹。植物の輸出入やその他のことについて、妻の妹イトからラモス夫妻に送られた手紙が、1900年10月以降、何通か残されている〔PIR Books-C15〕。11月頃には、イトは植物の種だけではなく、自家消費用か商売用であるかは不明であるが、缶詰や絹などもフィリピンに送ったと述べている〔PIR Books-C-15〕。1901年2月に入っても、イトのラモス夫妻への連絡は続いており、イトは植木屋の注文が届いたかどうか尋ねている〔PIR Books-C15〕。

1901年5月2日の奈良原大尉の手紙では、植物の植木鉢は全て受け取ったが、割れていて、小包・柳細工のバスケット・植木は、船のオフィサーのイシバシの機転のきいた行動で関税を払わなかったとある〔PIR 903-5〕。また、6月15日にはラモスの姉妹からラモスに送ってほしいと頼まれた植物のケースを「八幡丸」のセカンド・パーサーに頼んだとも述べており〔PIR 903-5〕、ここでもラモスのビジネスのサポートに日本郵船が関わっていた。奈良原大尉はラモスの植木輸出入などのビジネスを手伝い、日本郵船を利用して便宜を図っていた⁴⁰⁰。

1901年7月1日に奈良原大尉はラモスに宛てて、利益になる植物を買うためにコンザロ Conzalo が100円、パテルノ Paterno が20円、トリンギング・パテルノ Tringing Paterno が30円を送ると述べ〔PIR 903-5〕、日本のラモスと、フィリピン人の送金の仲介を行っている。また、この手紙ではラモスの植木ビジネスに関しても、ラモスがお金を得るために1年はマニラに留まった方がいいので、ラモスが計画している滞在期間以上に、ラモスの妻と一緒にマニラにいてほしいと頼んでいる。また、次の12月1日からルソン島内の

³⁹⁹ 植木ビジネスがツアソン社と関連があったのかは不明なため、項を分けた。

⁴⁰⁰ 1901年6月21日のマニラのマリア P. デ・パテルノ Maria P. de Paterno からラモスへの手紙では彼が最初に送った植木の6鉢は割れ、最後に送った32の植物のうち6つが生き残ったと述べている〔PIR 903-5〕ことや、奈良原大尉からラモスへの手紙でもパテルノの名前が出て来ることから、この植木ビジネスにはマリア P. デ・パテルノとその夫ホセが関わっている可能性がある。

旅行を始めたいことや、参謀本部の許可が下りれば南方の島々も旅行したい希望も述べている [PIR 903-5]。

1901年7月16日の奈良原大尉からラモスの手紙では、6月20日のラモスの手紙を受け取り、ラモスが一人ではなく時澤大尉も連れて、マニラに戻ってくると理解したと述べ、日本で活動しているリカルド Licaldo⁴⁰¹、マナロ Manalo、時澤大尉によろしくと書いている [PIR 903-5]。つまりアギナルドがアメリカ当局に降伏した後も、日本ではポンセとラモス以外にも、2人のフィリピン人が活動していたことになる。この手紙の中で、奈良原大尉はラモスに対して、ラモスの日本人妻のヤスも連れて長期滞在してほしいと希望している [PIR 903-5]。奈良原大尉はルソン島内の視察旅行を計画しており、視察旅行でマニラを不在にする間、事情を熟知し、日本語がわかるヤス夫人が、マニラで必要であったのだろう⁴⁰²。

1901年3月23日から1901年7月16日までの間、マニラの奈良原大尉からラモスへの手紙では、ミスター・ハヤシ Mr. Hayashi またはミセス・ハヤシ Mrs. Hayashi の名前が6回出てきている(3月23日、4月1日、5月2日、5月22日、6月3日、7月13日)。ハヤシはマニラに住んでいたが、何らかの事情で一時日本に行き、マニラにはハヤシの妻が残っていた。日付は記載されていないが、日本にいるイトの手紙にも「林さまとかた、おいでにあそばさしに候らえども(後略)」[PIR-Books C-15] というくだりがあり、ラモスとハヤシ夫妻、奈良原大尉は親しい関係にあったようである。このハヤシという人物に関しては、ファースト・ネームまたはイニシャルの記載がないので、特定するのは難しいが、吉川の論文中にある商業関係者リスト 1905-1906 [吉川 1980: 42] の中には、マニラ・バザーのクラークにハヤシ・ミチオ Hayashi Michio という人物がおり、そのハヤシの可能性もある⁴⁰³。ちなみに、このリストにはラモスの名前もあり職業は養鶏・農業となっている⁴⁰⁴。

植木ビジネスは、日比間で生きるラモスの生業にするために起業したのであろうが、参

⁴⁰¹ スペルは史料通り。

⁴⁰² 1901年12月29日のアメリカ当局の家宅捜索の件に関する書類には、ラモスの妻の記述もあることから、少なくとも12月末にはラモスの妻もマニラに滞在していた。

⁴⁰³ 吉川の先行研究で、この時代、マニラで手広く商業を営み、日本人社会の中で知名度が高かった人物は田川森太郎であることが明らかになっているが、今回扱った奈良原大尉、時澤大尉の書簡からは、田川の名前は一切でてこない。

⁴⁰⁴ PIR Books C-15 の中に、これを監修したテイラーが1916年になってから再度書き入れたコメントがあり、そこにはラモスはマニラ郊外で養鶏と植物でまだ、生計を立てていると書かれている [PIR Books C-15]。

謀本部の隠れ蓑としても利用されていたようである。したがって、ラモスの事業を、日本軍、日本領事館、日本郵船、在比日本人などがサポートしていた。参謀本部はフィリピン人に便宜を図り、親日フィリピン人を作ろうとしていた。またラモスもアジアの連帯という考えに賛同したからこそ、共同事業を行ったのであろう。両者は、お互いを利用しながら、互いの利益になる関係を築いていた。

8. ミッションの終了（1901年12月—1902年初旬）

8-1. アメリカ当局の家宅搜索

ここで、この奈良原大尉のミッションの結末についてだけ簡単に述べておきたい。フィリピンのアメリカ当局は、北條大洋書記生とトリアスの会見についての議事録を押収した時点から、奈良原大尉とラモスを監視し始めた。そして、アメリカ当局は、ついに1901年12月2日、ラモスについてのレポートを〔PIR 903-5〕⁴⁰⁵、12月8日には奈良原大尉についてのレポートを作成した〔PIR 903-5〕。その中でアメリカ当局は、ラモスのことを日本のダミー会社 *Theatrical company* のディレクターと呼んでいる。その後12月13日、アメリカ軍が、「ホセ・ラモスに関するメモランダム **MEMORANDUM REGARDING JOSE RAMOS**」⁴⁰⁶〔PIR 903-5〕を作成した。このメモランダムは、基本的には12月2日のレポートを具体化したものだが、事実関係に多少の誤りも見られる⁴⁰⁷。アメリカ軍は同時に、「日本帝国陸軍奈良原忍大尉に関するメモランダム **MEMORANDUM REGARDING CAPTAIN SHINOBA**⁴⁰⁸ **NARAHARA, IMPERIAL JAPANESE ARMY**」〔PIR 903-5〕⁴⁰⁹も作成しており、その中でアメリカ軍は、「彼は時に、公的寄合を行い、レセプションを行う際には、日本領事と一緒にいて、ミリタリー・アタシェのふりをしてい。しかし、最近の調査によれば、彼は公的資格を持たない **He often accompanied the Japanese consul when making official calls and attending receptions, posing as Military Attache, but upon recent investigation it was learned that he has no official status**」〔PIR 903-5〕と報告している。

⁴⁰⁵ 確かに1901年7月23日の日本のイトからの手紙は、「**J. A. Robertson Esq. C/O Casimiro Esqre No.11 Victria Street Walled City Manila**」〔PIR Books C-15〕となっている。

⁴⁰⁶ タイトルは全て大文字でタイプされている。

⁴⁰⁷ ラモスの妻、石川ヤスが奈良原の姉妹であるとの報告をしている。

⁴⁰⁸ **SHINOBA** のスペルは史料通り。

⁴⁰⁹ タイトルは全て大文字でタイプされている。

アメリカ軍は、「時澤右一大尉に関するメモランダム MEMORANDUM REGARDING CAPTAIN YUICHI TOKIZAWA JAPANESE ARMY」⁴¹⁰ [PIR 903-5] も作成している。その中で時澤大尉は米西戦争中に観戦武官をしており、その後反徒に共感し1899年2月、つまり比米戦争時に再度視察でフィリピンを訪問し、現在、日本の汽船会社の代表になっていることが記載されている [PIR 903-5]。また同日18日の軍事情報史料 **Military Information** から師団長 **Division Commander** へのレポートでは、時澤大尉と奈良原大尉の公的なステータスを、東京のミリタリー・アタシェ⁴¹¹に教えてくれるように頼んだと記している [PIR 903-5]。アメリカ当局がこのような動きをしている中で、奈良原大尉は12月20日にフィリピンを廻る許可をアメリカ当局に要請した。[PIR 903-5] [外務省外交史料館文書 米西戦争一件 雑 第二巻 在マニラ陸軍大尉奈良原忍ニ関スル件 679]。1902年1月10日の機密第1号に残るこの時の提出書類の複写によると、ルソンのいくつか州と他の島々を訪問したいので、必要な許可を書いてほしいと願い出ている [外務省外交史料館文書 米西戦争一件 雑 第二巻 在マニラ陸軍大尉奈良原忍ニ関スル件 679-685]。

⁴¹⁰ タイトルは全て大文字でタイプされている。

⁴¹¹ 東京のミリタリー・アタシェはオリバーE. ウッド Oliver E. Wood である。



アメリカ軍史料 PIR 903-5 に残る奈良原の訪問希望地を記したルソン島の地図

(奈良原大尉が提出したもの、またはその複写だと思われる。)

1901年12月20日の、第21歩兵隊の大尉 Capt. 21st U.S. Infantry が作成したアメリカ軍の軍事情報史料の情報では、奈良原大尉の記録について師団長と軍政長官の両方の記録を調べたが見つからなかったと述べ、以下の3点、1) もし奈良原大尉がアメリカ軍の軍事行動を視察する公式な代表として反徒のラモスとつながっているなら、近代国家を司る全てのルールに違反し、2) 今までのところ奈良原大尉は戦闘を視察した形跡がなく、3) この資金は福島少将から出ている事実があり、アメリカ軍はこれに関して、明確な証拠を持っている——を述べている [PIR-903-5]。ここでは、奈良原大尉には正式な記録がないと報告されている

しかし1901年12月23日、第6騎兵隊の大尉 Capt. of 6th Cavalry は、奈良原大尉に対して、1900年4月25日付けの在日本・アメリカ合衆国特命全権公使バックが紹介状を書いていることを認識していると前置きした上で、奈良原大尉に警告ともとれる以下の文面を送りつけた：

フィリピン陸軍総司令官は、私に20日付けのあなたの手紙を受け取ったと知らせるように指示している。(中略) 私はあなたがフィリピンに到着してから、あなたは軍事行動の場を視察する機会を全く利用していない事実があると、あなたに知ってもらうように命令されている：あなたは、戦場でアメリカ兵の軍事行動など全く視察せずに、ずっとマニラに居続けた。あなたが悪名高き J. A. ラモス、または J. A. ロベルトソン、または J. A. 石川と名乗る男と一年間同じ家に住み、親密な関係にあった。そして、今もそうであることは、フィリピン陸軍総司令官のよく知るところである。陸軍総司令官は、あなたがここで1年間居住し、あなたが望んでいた軍事行動の視察は、十分に行う時間があったと信ずる：したがって、司令官は、あなたが手紙で述べていた滞在延長要求を許可しない。

Sir:

Commanding General, Division of the Philippines, directs me to acknowledge receipt of your letter, dated the 20th instant...I am directed to invite your attention to the fact that you have never availed yourself of the opportunity to observe the scene of military operation since your arrival in the Philippine Islands: that you have remained constantly in Manila, observing not at all operations of the American troops in the field. It is well known to the Commanding General of the Division that you have been and are intimately associated with a notorious

insurgent, Mr. J. A. Ramos, alias J. A. Robertson, alias J. A. Ishikawa, living in the same house with him for a year...The Commanding General believes that your residence here for a year and a half has afforded you ample time to make any observation of war operations you desired to make: He is not therefore disposed to cause you to prolong your stay here by complying with the request contained in your letter.

[PIR 903-5]

アメリカ当局の警告はこの手紙に留まらなかった。12月29日午後5時半、アメリカ軍関係者は、奈良原大尉・ラモス宅の家宅捜索を行うシークレット・サービスと一緒に、両宅に入った⁴¹²。家にはラモスの姉妹であるレイムンダ・ラモス Reymunda Ramos と日本人女中 a Japanese servant girl しかおらず、トランクや引き出しの鍵はラモスの妻が持っていたので、シークレット・サービスの人間が、外出しているラモスの妻のもとに、鍵を取りに行った。その間に酔った奈良原大尉が帰ってきて、捜査員とひと悶着があった。鍵を取りに行ったシークレット・サービスの人間が、ラモス夫妻と帰ってきて家宅捜索が始まり、ラモスの住居部分は家宅捜索が行われたが、アメリカの文書からは奈良原大尉の住居部分の家宅捜索が遂行されたかどうかはわからない⁴¹³ [PIR-903-5] [PIR-2036]。

しかし、日本側の史料からは、奈良原大尉の住居部分も家宅捜索が行われたことがわかる。1902年1月11日の、成田副領事から小村外務大臣の機密第2号を要約すると以下になる：

マニラの在留「フィリピン」人として本邦に帰化した石川保政（ラモス）が、絹のハンカチ密輸の容疑を蒙り、12月29日午後10時頃⁴¹⁴、家宅捜索令状を携帯したアメリカの「探偵吏」⁴¹⁵によって家宅捜索を受け、数通の書類とハンカチ1枚を押収された。ラモス宅に同居している奈良原大尉の住居も捜索されそうになり、奈良原大尉はそれを拒んだが、探偵吏はそれを了承せず、ついに奈良原大尉の部屋も捜索された。

⁴¹² 両宅の入口は共用で、ラモス宅と奈良原宅は入って右と左に分かれていた [PIR 903-5]。

⁴¹³ この部分は一つの報告書では、行われたとなっており、別の報告書では奈良原大尉の部屋は捜索できなかったと書かれている。少なくとも現在マイクロフィルムとして残っている PIR の書類からは、奈良原大尉宅から押収されたと思われる書類は残っていない。

⁴¹⁴ アメリカ側と日本側の記録に時差があるのは、鍵を取りに行ったりした時間があつたからだと思われる。

⁴¹⁵ 探偵吏という言葉は、アメリカ側の報告書のシークレット・サービスという名前と合致する。

もちろん、探偵吏はどんな物品も押収できなかつた。家宅搜索令状の写しを書面で届けるように（アメリカ当局に）申し入れたが、現在まで届出はない。搜索令状を精査しない限りは、簡単にことを断定はできない。奈良原大尉はすでに、参謀総長へ「請訓」⁴¹⁶中である。「回訓」⁴¹⁷が来た場合には、成田副領事に届けると奈良原大尉は私信で述べている。成田副領事は、司法事件に属するものであれば、相当の裁判所へ出訴すると、奈良原大尉とラモスには述べ、成田副領事が弁護士を紹介することを2人に了解させたが、出訴はしないことにした。

〔外務省外交史料館文書 米西戦争一件 雑 第二巻 在マニラ陸軍大尉奈良原忍ニ関スル件 713-716〕。

その前日の1902年1月10日の成田副領事の機密第1号では、1901年12月23日のアメリカ当局の手紙を要約し、奈良原大尉が戦況視察をすることもなく1年間ラモス宅に住んだことを理由に、アメリカが奈良原大尉の旅券発給を拒絶したことを報告し、アメリカの「陸軍師団司令本部長（比律賓陸軍総督）」が奈良原の所為を訝り、ラモス宅に同居していることを嫌悪し、奈良原大尉の挙動を嫌疑していると述べ、添付書類乙として先に述べたアメリカ軍の12月23日の書類の複写と訳文を、そしてこれに加えて反論の手紙と訳文を添えている〔外務省外交史料館文書 米西戦争一件 雑 第二巻 在マニラ陸軍大尉奈良原忍ニ関スル件 679-712〕。

公開されているこの2つの報告書からは、奈良原大尉がフィリピン在留中、何をしていたのかについては、全くわからず、アメリカの司令官が個人的な嫌悪で奈良原大尉の旅券発行を拒否し、不当に家宅搜索を行ったようにも読み取れるものになっている。しかし、トリアスとの会見でもわかるように、日本側の外交書類で名前が記されていなくても奈良原大尉は革命側とコンタクトをとっており、密かに革命家をサポートしていた。領事館付武官の家を家宅搜索すると言うアメリカ当局の行動は、日米両国の外交問題にも発展しかねない賭けであったが、それでも行ったということは、それ程、目に余ったということであろう。しかもこれらの報告書からは、奈良原大尉が大山参謀総長と連絡を取っている様子も伺える。この家宅搜索により、奈良原大尉のミッションは、終了せざるを得なくなった。

⁴¹⁶ 指示を求めていること。

⁴¹⁷ 本国からの指示。

8-2. 奈良原忍歩兵大尉の講話

成田副領事の公第 13 号によると、1902 年 2 月 1 日、奈良原大尉は「ロセッタ」号でマニラを後にした〔外務省外交史料館文書 米西戦争一件 雑 第二巻 在マニラ陸軍大尉 奈良原忍ニ関スル件 719-720〕。1902 年 3 月 14 日付けの官報では「参謀本部附被免参謀本部出仕被仰付 陸軍歩兵大尉奈良原忍」〔官報 第五千六百五号 明治三十五年三月十四日〕となっている。帰国後奈良原大尉は、「陸軍砲兵大尉」として皇族講話会で、フィリピンについての講話をしている⁴¹⁸。奈良原は講話の中で、以下の 5 点を述べた：

1. フィリピン人は一致団結するのが困難で、アギナルドの場合は「独立」という名目があったから団結できた。
2. アメリカは、米西戦争に勝つためにフィリピン人を利用した。
3. フィリピン人は、訓練すれば用いるに足りる軍隊を編成できる。
4. フィリピン人はアメリカに服従しているが、内部に入って探ると仮面服従の間人もいて、近いうちに混乱が起きるのは明白である。
5. 義和団事件以来、フィリピン人は、より一層日本に心を寄せている。

これらに加えフィリピンの現状なども説明し、最後に今のうちになるべくフィリピンに日本人を送りこみ散在させ、商業や労働に従事させながら日本人の勢力を植え付けていくことを勧めている〔講和會談話筆記第九〕。しかし奈良原少佐は日露戦争において、夭折したと思われる⁴¹⁹〔外交時報社 卒業人名簿 13〕〔弔民坂本志魯雄 313〕⁴²⁰。

この奈良原大尉のアドバイスが生かされたのかはわからないが、PIR-2036 の 1903 年 8 月 3 日付けのアメリカ軍の書類には、少なくとも 5 人の日本人がフィリピンを調査し、日本人が船（複数形）を送ってデータを収集しており、アメリカ軍もそれを把握し警戒して

⁴¹⁸ この奈良原大尉の講話の筆記には、行われた日の日付がない。ちなみに、奈良原大尉の次の皇族講話会は 1902 年 9 月 27 日に行われ、秋山真之海軍少佐が米西戦争について話をしている。

⁴¹⁹ 1905 年、桂—Taft 協定が結ばれたこの年に、奈良原少佐は満州で、アメリカのミリタリー・アタシェの訪問を受けている。この時のレポートでは「1905 年に満州のアメリカ合衆国ミリタリー・アタシェの克蘭ダー大佐の訪問を受けた奈良原大尉は、現在近衛師団の少佐である。福島少将と（不明）は反アメリカである・・・Capt. Narahara was seen by col. Crander U.S. mil. Attaché in Manchuria in 1905, is now major in the Imperial Guard. Gen. Fukushima Col. Chief of Gen. staff and （一字不明の形容詞）anti-American...」〔PIR-2036〕と書かれている。1904 年 1 月 27 日の官報には、奈良原少佐の肩書は、近衛歩兵第 4 連隊大隊長となっている〔官報 六千六百六十九号 明治三十七年一月二十七日水曜日 印刷局〕

⁴²⁰ 1907 年の『宇都宮太郎の日記』にも、奈良原少佐に関する記載が一切ない。

いと書かれている。その後、1915年6月15日、軍のライブラリー担当になっていたテイラーのもとに、陸軍省の諸島局の局長のフランク・マッキンタイア准将から、手紙やメモランダムと一緒に、PIRの日本関連のファイル Books C-15が再度送られてきた。その前年の1914年、第一次世界大戦により日本は南洋諸島を占領した。この時の陸軍長官は、トーマス・ウッドロウ・ウイルソン Thomas Woodrow Wilson（ウイルソン）⁴²¹大統領と対立関係になった拡張主義者のリンドリー・ミラー・ガリソン Lindly Miller Garrison（ガリソン）⁴²²であった。テイラーへの要請は、この Books C-15についてノートを書くことであった。この要請に対して、テイラーはノートをつくって返却することはやぶさかではないと前置きをしながらも、完璧な日本語教育を受けた陸軍のオフィサーの必要性を説いている。テイラーはこの Books C-15に思い入れがあるのか、日本語から英語に翻訳された他愛もない内容の手紙の書類を1年後に再度見直している。そして、テイラーはこの書類に、1916年12月18日の日付とともに「これは文字通りにとるのかそうでないのか。もちろん、これは暗号だ(後略) This may be taken literally or it may not. It of course may be a cipher...」と手書きでコメントを付け加え、手紙の中に書かれた鶏などの日本語の単語に疑念を抱いていることを記し、ラモスの消息も添えている。

9. 小括

フィリピン人にとって日本は精神的にも距離的にも一番近い島国であり⁴²³、近代化を推進するにあたって、当面の目標と成り得る国であった。そして、日本もまた欧米列強に追いつこうとしている時代であった。フィリピン人革命家は革命軍の前近代性を十分自覚しており、日本軍のサポートを必要としていた。参謀本部も米西戦争時の視察により革命軍の力量を見極め、革命軍の近代化をサポートしようとする姿勢を見せた。米西戦争後から比米戦争初期は革命軍に対して、軍事インストラクターの送り込みや武器援助など、直接的な軍事援助を行い、フィリピン側もそれを好意的に受け入れた。しかし、参謀本部は、アギナルドの政府の脆弱性を十分に理解しており、革命側が勝利しフィリピン独立を成し

⁴²¹ ウイルソン（1856-1924）は、1913年から1921年までアメリカ合衆国大統領を務めた。

⁴²² ガリソン（1864-1932）は、1916年2月にウイルソン大統領と対立し、陸軍長官を辞任した。

⁴²³ これはアメリカ人にも言えるようで、香港領事もシンガポール領事も家族を連れた旅行の申請の行先を日本としている。

遂げるとは思っていなかった。参謀本部は、マニラ領事館に領事館付武官、つまりミリタリー・アタシェを派遣し、革命家とアメリカ双方の接触を図りながら、フィリピン情勢に関して情報を収集していた。

しかし、「布引丸」事件以降、参謀本部の動きがアメリカ側に明らかになったこともあり、その活動は、親日協力者養成とビジネス関係の構築へと、次第に変化していった。その中で参謀本部は武力を伴わない援助を密かに行うようになっていった。参謀本部の目標が「南進」から「アジア全体」へと変化したことで、革命家に対する接し方にも変化が現れた。

「東洋文明の共有」「アジアの連帯」「オリエントで物事を成す」という壮大ではあるが曖昧な理想を革命家に提示しながら、日本の商人とフィリピンの商人の結びつけや、革命家の事業の援助、革命家の来日援助、留学の誘いなどを行い、親日フィリピン人を増やそうとした。日本にいた革命家はこの援助を受け、事業を行う一方で、革命家や友人を参謀本部員に紹介した。参謀本部は、軍事力によるハードな「北進」と、諜報によるソフトな「南進」でアジアの侵略を進めようとした⁴²⁴。また革命家も、軍部との関係を作り、ビジネスでの協力関係を構築していくことで、自分たちの生き残りを模索した。

革命家と参謀本部との関係は、1901年3月にアギナルドが降伏した後も続いた。ポンセとラモス以外にも日本で継続的に活動をしていたフィリピン人がいた可能性は否めない。革命家と参謀本部はスクーター船を使って何がしかの事業か活動を始めようとしたが、最終的にはアメリカが、ラモスのみならず、領事館付武官の参謀本部員に対しても家宅捜索を仕掛け、一歩間違えば日本政府から国際法抵触で抗議を受けかねないようなやり方で、彼らの活動を阻止した。この家宅捜索により参謀本部はフィリピンから表向きは撤退することになった。しかし、この出来事は、のちに日米比を巻き込み、アジアそして太平洋を巻き込む大きな戦争へと発展する第一歩となったのである。

⁴²⁴ 矢野暢は『「南進」の系譜 日本の南洋史観』の中でフィリピン革命とアジア主義者の関与について考察している〔矢野 2009: 220-222〕。その中で矢野はアジア主義者として、明石、乃木希典、宮崎滔天、犬養、内田良平、坂本などを挙げ、「このような「南進」の現地でのできごとに関わった日本人たちは「南進論」者であったといえるのだろうか。むろん私の答えは「否」である。」と述べている。南進論を提唱していたか否かと言う前に、この著書の中で矢野は、「志士」と呼ばれた人々と軍人を同列に考えている。しかも、参謀本部員である時澤が1898年9月1日の報告で、「南進」という言葉を使っていることを考えれば、軍は明らかに南進を視野にいれて行動しており、明石や時澤は陸軍の方針に沿って任務を遂行していたに過ぎない。矢野の本の初版が出版された1975年の時点では、サニエルの著書はすでに出版されていたが〔Saniel 1969〕、矢野は自身の著書の中で、陸軍の組織的関与については触れていない。この点から、本章は日清戦争と日露戦争の間における、日本の南進問題の空白の一部を埋めるものになるはずである。

第3章 マドリッドの革命新聞 『フィリピナス・アンテ・エウロパ』の主張

第1章では、香港での対外活動の内容と、その活動を通して革命運動がどう推移したのかにも触れ、第2章では、日本とフィリピンにおける日本の参謀本部の革命への関与を明らかにしてきた。本章ではスペイン・マドリッドでの定期刊行物によるプロパガンダ活動を取り上げ、領外活動家の論理と主張を明らかにしたい。

フィリピン領内でも革命側は、機関誌とも言える新聞『ラ・インディペンデンシア』を発行していたが、この新聞は1900年末に発行を停止してしまった。一方マドリッドでも1899年10月25日から1901年6月10日まで、革命新聞『フィリピナス・アンテ・エウロパ』が発行されていた。マドリッドにおいて、フィリピン人革命家がプロパガンダ活動を行うことができたのは、以下の3つ——1)『ラ・ソリダリダッド』の時代から、スペインでプロパガンダ新聞を発行する伝統が根付いていた、2)アメリカの圧力がかかりやすかった香港やマニラと違い、スペインはアメリカからは心理的にも距離的にも遠くにあった、3)英語圏ではないマドリッドの方が、比米戦争中は「比較的」発言が自由にできた——の理由があげられる。1899年2月4日に比米戦争が始まり、フィリピン領内外で革命運動や革命家たちに対する憶測や不正確な情報が流れるようになり、正確な情報をフィリピン領内外に向けて定期的に発信する必要性が出てきたことも、新聞の出版を後押しした。フィリピン領内では1899年3月に第1次フィリピン委員会がマニラに到着し、アメリカ当局側が領内にいるフィリピン人知識人たちに対して聞き取り調査を始めた。しかし、海外にいる活動家は、その親米知識人たちに直接異議を唱えることも、アメリカ当局に対して意見を言うこともできない状況にあった。このことも、プロパガンダ活動を始める大きな原動力になったと思われる。

この第3章では、マドリッドでフィリピン人革命家デ・ロス・レイエスによって発行されたプロパガンダ革命新聞『フィリピナス・アンテ・エウロパ』について分析し、ヨーロッパの地で発行されたこの定期刊行物がどのような主張を展開したのかを、明らかにしていきたい。

デ・ロス・レイエスや『フィリピナス・アンテ・エウロパ』を扱った先行研究としては、以下の2つがあげられる：

アンダーソン・ベネディクト著 山本信人訳 『三つの旗のもとに アナーキズムと反植
民地主義的想像力』 NTT 出版株式会社 2012 年

Anderson, Benedict, *Under Three Flags: Anarchism and the Anti-colonial Imagination*,
Manila: Anvil Publishing, Inc., 2006

アンダーソンは、19 世紀末から 20 世紀初めのヨーロッパとフィリピンの社会情勢を分析しながら、アナーキズムの国際的潮流をベースにして、主にフィリピン以外の地で活動したホセ・リサル、ポンセ、そして、デ・ロス・レイエスらの人生を鮮やかに描いている。この著書では、この『フィリピナス・アンテ・エウロパ』という新聞を、デ・ロス・レイエスの活動の 1 つとして取り上げている。

しかし、序章でも述べたように、このアンダーソンの著書には、議論以前に、その史料選択と分析に問題がある場合がある。例えば、デ・ロス・レイエスとアナーキズムとの関連を示すための引用は主に、ウィリアム・ヘンリー・スコット William Henry Scott の『民主的労働組合：フィリピン最初の労働組合 The Union Obrera Democratica: First Filipino Labor Union』〔Scott 1992〕に依拠している。アンダーソンの引用したスコットの本の引用部分は、全てが「イサベロ・デ・ロス・レイエス上院議員がアナーキズムと彼の理想について話す El Senador Isabelo de los Reyes habla de Acracia y de sus Ideales」と言う『ラ・オピニオン La Opinión』1927 年 3 月 30 日号の記事からである。1900 年前後の出来事を、約 26 年後のデ・ロス・レイエスへのインタビュー記事だけでカバーするのは、多少無理がある。確かに 1900 年前後にデ・ロス・レイエスがアナーキズムや労働運動をスペインで目の当たりにし、アナーキストと交流を持った証拠にはなるが、彼が受けた影響に関しての「後付」の感想に関しては、精査が必要である。しかもフィリピン人の「国家」創造は、アナーキズムとは対極にある思想であり、彼が 1900 年前後に、アナーキズムを心から信奉していたと考えるのには矛盾がある。この問題に関しては、本章のアナーキズムの節で詳しく述べたい。

アンダーソンは『フィリピナス・アンテ・エウロパ』に関しても言及しているが、その扱いは、デ・ロス・レイエスの活動と思想の例として、この新聞の記事のいくつかのセンセーショナルなタイトルを紹介するに留まっており、新聞全てを分析するには至っていない〔アンダーソン 2012: 305-308〕。

Mojares, Resil B., *Brains of the Nation Pedro Paterno, T.H.Pardo de Tavera, Isabelo de los Reyes and the Production of Modern Knowledge*, Manila: Ateneo de Manila University Press, 2006.

モハレスはその著作の中で、デ・ロス・レイエスの一生と活動を、詳細な史料を交えて描き、その中でやはり『フィリピナス・アンテ・エウロパ』について言及しているが、この新聞の分析などはなされていない。

両者は、この新聞に関して創刊号から最終号までを分析しているのではなく、あくまでも主体は、デ・ロス・レイエスの活動にある。したがって、本章では当時の原史料にこだわって、新聞の創刊から最終までの全 36 号に目を通し、以下の 2 点に重点を置いて分析を行いたい。

1. 『フィリピナス・アンテ・エウロパ』の主張は主にどのようなもので、その主張はどのように変化していったのか。
2. 発行期間中にフィリピン革命はどのように変化したのかを、記事の行間から読み取る。

1. 新聞について

1-1. 『フィリピナス・アンテ・エウロパ』の概要

比米戦争期に、マドリッドに国外追放になったデ・ロス・レイエスが発行したスペイン語新聞で、フィリピン人の意見や、フィリピン人及びフィリピン諸島などの状況について取り上げている。詳細は以下のとおりである：

1. 発行——月 2 回発行（10 日と 25 日）で、1899 年 10 月 25 日創刊。最終号である第 36 号は、1901 年 6 月 10 日に発行された（ただしアギナルド降伏後の第 35 号と第 36 号は変則発行で、第 34 号は 1901 年 3 月 10 日、第 35 号は 1901 年 4 月 10 日、第 36 号が 1901 年 6 月 10 日である）。
2. 発行部数——不明。創刊号は増刷した。
3. 印刷所——マドリッド市内の複数を使用（スペイン当局の訴訟により押収などがあったため）。
4. 対象読者——フィリピン諸島内外のスペイン語が読めるフィリピン人教養層、及び、フィリピン問題に興味のあるスペイン人とスペイン語の読める外国人、フィ

リピン統治に関係するアメリカ人⁴²⁵。

5. 広告料——1 区画で 10 ペセタ

6. 購読料——6 ヶ月前払い原則

マドリッド 1 ヶ月 1 ペセタ

外国 半年 8 フラン、

フィリピン 3 ペソ

第 8 号（1900 年 2 月 10 日）からは「60 センティモ」と 1 部の価格も第一面欄外に記載された。

しかし、前払いがないまま、新聞だけを契約者に送ったらしく、第 10 号、第 11 号「時評欄 Crónica」（1900 年 3 月 10 日、3 月 25 日）⁴²⁶、第 12 号の欄外（1900 年 4 月 10 日）では、この新聞の性格を、「営利目的ではなく、踏みにじられたフィリピン人のための、ヨーロッパで唯一の組織を維持するためのものである no se trata de ninguna industria, sino solamente de sostener este único órgano en Europa, de los Filipinos atropellados」と述べ、それがわかっていながら購読料を支払わない購読者のことを、第 11 号（1900 年 3 月 25 日）では「信じ難いと思う parece increíble」と非難している。第 11 号「時評欄」（1900 年 3 月 25 日）では、新聞の「通信員たち corresponsales」に対して 6 ヶ月の前払いをしない人には配達しないように指示し、第 16 号（1900 年 6 月 10 日）では、その「通信員たち」に対し、集金した購読料の送金を要求している。

創刊 1 周年の 1900 年 11 月 10 日の第 26 号では、半年の定期購読料を 4 ペソに値上げすると発表し、第 30 号では、以下のように価格を改定した。

マドリッド 1 ヶ月 1.50 ペセタ

外国 半年 10 フランかシリング

フィリピン 2 ドル

⁴²⁵ 第 23 号「タフト・コミッションへ トンドの裁判所での輿論 我々から正義を盗む!!! Á la Comisión Taft. Un Escándalo en el Juzgado de Tondo. ¡¡¡La Justicia nos roba!!!」（1900 年 9 月 25 日）では、新聞によって、第 2 次フィリピン委員会（タフト委員会）に対して、裁判所の不正を伝えたいとの記述がある。

⁴²⁶ 以後記事のタイトルに関しては、新聞の号数「日本語に翻訳したタイトル＋一字分のスペース（スペイン語の特性上、疑問符や感嘆符が単語の前に来るため）＋原語のタイトル」＋（発行年月日）を記載する。原語のタイトルに改行して副題、その他がある場合は主題にピリオドを付けて、続けて記載する。

広告 1 区画 2 ドル

欄外の 1 部あたりの価格は 75 センティモ

改正後はフィリピン国内の価格がペソではなくドルで表示されており、フィリピンの独立を叫びながらも、フィリピン領内の実体経済に合わせた表記を行っている。第 35 号の「時評欄」では通信員が取り立てたものを着用したことが書かれており、購読料の徴収には苦勞していたようである。

7. 平均ページ数——特別号を除き 1 号あたり記事は 8 ページである。

『フィリピナス・アンテ・エウロパ』の名前の由来については、記事内で明らかにされてはいない。しかし、このタイトルを英訳すると *Philippines anti Europa* となり、「フィリピンはヨーロッパと対等に向き合い、ヨーロッパに対して主張を行っていく」という新聞の強い意志が読み取れる⁴²⁷。

1-2. 発行者のイサベロ・デ・ロス・レイエスについて

デ・ロス・レイエスについては、モハレスの著書で詳細に述べられている。モハレスの著書をまとめると、新聞発行までのデ・ロス・レイエスの経歴は以下のようになる：

彼は 1864 年 7 月 7 日にビガン Vigan で生まれ、1889 年、マニラのコレヒオ・デ・サン・フアン・デ・レトラン Colegio de San Juan de Letran を卒業し、卒業後はジャーナリズムの道に進んだ。1884 年に結婚、同年サント・トーマス Santo Tomas 大学に入学、1883 年に卒業し、1889 年から 1896 年まで、スペイン語—イロカノ語新聞の『エル・イロカノ El Ilocano』を発行した。1896 年 8 月 30 日、「フィリピン革命」が始まり、1897 年 2 月 12 日、カティプーナンの活動家、自由主義者などと一緒に逮捕され、ビリビッド Bilibid 刑務所⁴²⁸に投獄された⁴²⁹。1897 年 5 月 17 日の国王誕生日に恩赦を受けたが、その後再逮捕され、6 月にスペインのモンジュイック Montjuich 刑務所⁴³⁰に送られた。当時のモンジュイックは、アナーキスト・サンディ

⁴²⁷ 第 1 号の「ミスター・マッキンレーへ *Á Mr. Mac-Kinley*」ではマッキンレー・アメリカ合衆国大統領とその仲間に対して、*usted*（あなた）または *ustedes*（あなたたち）ではなく、*tu*（君）または *vosotros*（君たち）の動詞変化を使い、形容詞に *vuestro*（君たちの）を使っている。

⁴²⁸ マニラ郊外にある刑務所

⁴²⁹ この時期は、スペイン当局が疑心暗鬼な状態に陥り、ありとあらゆる人々をなりふり構わず逮捕していた時期である。

⁴³⁰ バルセロナにあるモンジュイック城が刑務所として使われていた。

カリスト⁴³¹、その他の過激派で一杯であり、彼はその影響を受けた。1898年1月7日、彼はビアク・ナ・バト協定の影響で、釈放されたが、スペインを去ることを禁じられ、バルセロナ⁴³²に住むことになった。しかし、警察の締め付けで、バルセロナからマドリッドに移らざるを得なくなり、1898年5月、アレホラと、マドリッドでフィリピン人向け代行会社「アヘンシア・デ・アストス・フィリピノス *Agencia de Asuntos Filipinos*」⁴³³を設立した。その後1899年11月10日⁴³⁴、ドミナドール・ゴメス *Dominador Gomez* (D. ゴメス)⁴³⁵と協力して『フィリピナス・アンテ・エウロパ』を発行した。[Mojares 2006: 255-270]。

アメリカ軍の記録によると、デ・ロス・レイエスは、『フィリピナス・アンテ・エウロパ』の最終号の後、1901年10月15日にフィリピンに戻った [PIR 903-5]。その後すぐに『フィリピナス・アンテ・エウロパ』の元編集者として、『マニラ・タイムス』のインタビューを受けている [Manila Times. Oct. 19, 1901]。ここでデ・ロス・レイエスは、完全独立の理想を強調しながらも、合法的・平和的に活動する意図を示した。アメリカ当局は12月に、第2章で扱った日本帝国陸軍の奈良原大尉、時澤大尉、ラモス、そしてリベロとともに、デ・ロス・レイエスのレポートも作成した [PIR 903-5]。そのデ・ロス・レイエスに関するレポートが以下である：

イサベロ・デ・ロス・レイエスについてのメモランダム

イサベロ・デ・ロス・レイエスはイロコス州の原住民で、貧しく無名の素性である。1896年の革命勃発時、彼は反乱の混乱の中で逮捕された。しかし国王誕生日の1897年5月17日、彼は恩赦宣言で放免された。その後6月、彼は同じ理由でビリビッドに投獄され、同月13日にスペイン・バルセロナのモンジュイック刑務所に追放され

⁴³¹ 労働組合至上主義

⁴³² バルセロナは当時工業都市であった。例えば、建築家アントニオ・ガウディは1878年にマタロ労働組合社を設計し、その後もこの労働組合社の装飾などを手伝っている。当時のバルセロナにはこのような労働者の文化が根付いていた。

⁴³³ 5月1日のアヘンシア・デ・アストス・フィリピノスの設立趣意書は、アレホラとデ・ロス・レイエスの両名の名前で作成された。このアヘンシアは、弁護士のアレホラと、新聞編集者のデ・ロス・レイエスの、両者の得意分野を生かして設立されたフィリピン人向け代行業者である [PIR 630-4]。

⁴³⁴ この日付はモハレスの間違いで、1898年10月25日である。

⁴³⁵ D. ゴメスは医師、革命家、そしてプロパガンダニスト。ホセ・リサールやデル・ピラールとともに、フィリピンの改革を働きかけた。第10号「革命の人々 *Los Hombres de la Revolución*」(1900年3月10日)ではドクター・D. ゴメスは、雄弁な演説家であると述べられている。

た。この場所で彼は、1896年の革命について、広範囲にわたるメモリアルを著した。そのメモリアルは、植民地大臣⁴³⁶のセニョール・モレにとって釈放するに値するものだった。(中略)そして、(デ・ロス・)レイエスはマドリッドで、新聞『フィリピナス・アンテ・エウロパ』を発行し始めた。その後、『エル・ディフェンソール・デ・ラ・フィリピノス』を発行した。それら中で彼は、ここ⁴³⁷でのアメリカの権力を攻撃し、独立への闘争を強く擁護した。彼は9月某日にマニラへと出発し、1901年10月15日、ここに到着した。スペインを去る前の最後の記事はフィリピンアメリカ当局者に対して、極端に厳しいものであった。

MEMORANDUM REGARDING ISABELO DE LOS REYES

Isabero de los Reyes is a native of the Province of Ilocos and of poor and illiterate parentage. At the breaking out of the revolution of 1896 he was arrested for complication in the rebellion, but on the King's birthday, May 17, 1897, he was set at liberty by an amnesty proclamation. The following June he was thrown in Bilibid for the same cause and on the 13th of the same month was deported to the Castle of Montjuich in Barcelona, Spain. In this place he published an extensive memorial on the revolution of 1896, a memorial of such value that he was set at liberty by the Minister of Foreign Affairs, Señor Moret ...and Reyes began the publication of a newspaper in Madrid, "Filipinas Ante⁴³⁸ Europa", and later "El Defensor de la Filipinos", in which he attacked the power of the United States here and defended bitterly the struggle for independence. He left Spain for Manila some time in September arriving here on October 15, 1901. His last articles before leavins Spain were extremely bitter against the authority of the United States in the Philippines.

[PIR 903-5]

⁴³⁶ 史料から訳すと外務大臣になってしまうが、実際には植民地大臣なのでここでは植民地大臣とする。

⁴³⁷ フィリピン領内

⁴³⁸ 原文のメモランダム通りに ante も大文字で表記する。



『フィリピナス・アンテ・エウロパ』第34号 デ・ロス・レイエスと彼のサイン

第 32 号「誠実さとともに *Con Sinceridad*」(1901 年 2 月 10 日)では、在マドリッド・アメリカ大使 *Embajador norte-americano en Madrid* がデ・ロス・レイエス側に不足部数の送付を要求している旨が書かれている。したがって、フィリピンのアメリカ当局も、『フィリピナス・アンテ・エウロパ』の記事の詳細を知っていた。アメリカ当局がデ・ロス・レイエスに対して上記のかなり厳しい評価を下したのはそのためであろう。アメリカ当局は、奈良原大尉やラモス同様、フィリピンに帰国したデ・ロス・レイエスも監視下においたと思われる。

新聞の第 11 号「フィリピン諸島の改革のためのスペインでの私の仕事 *Mis Gestiones en España en pró⁴³⁹ de reformas para Filipinas*」(1900 年 3 月 25 日)では、デ・ロス・レイエス自身が「私は——作者が書いている——このメモリアを書いて国外追放になり、スペインに到着していた。そしてバルセロナの国立刑務所で厳重な接見禁止に置かれた *Acababa yo—escribe el autor—de llegar á España, deportado por haber escrito esta Memoria, y estaba rigurosamente incomunicado en las cárceles nacionales de Barcelona*」と述べ、彼がいかに悲惨な状況に置かれていたかを語っている。その記事の内容をまとめると以下ようになる：

1897 年にデ・ロス・レイエスがモンジュイックに投獄されている間に、一緒に投獄されていたアナーキストたちの助けを借りて、マドリッドの新聞『エル・プログレソ *El Progreso*』に、彼の作成した記事を送った。モレが海外植民地大臣に就任した時、デ・ロス・レイエスはモレに対してフィリピンの改革案を送った。モレはそれを受けてデ・ロス・レイエスに対して彼の下に来るように命令した。モレはデ・ロス・レイエスをそばに置くことで、一部の新聞から非難を受けた。米西戦争直前、デ・ロス・レイエスは、革命側がアメリカに協力すると決議したことを知らなかった。したがって、フィリピン人とスペイン人が協力しアメリカのフィリピン上陸を阻止するため、フィリピン内で 1,000 人の志願兵の連隊を作り、アメリカを撃退することをモレに提案した。そして、修道士の利権が亡くなれば、フィリピン人が反乱を起こす理由もなくなるので、彼らの利権の廃止も提案した。

つまり、デ・ロス・レイエスはスペインの自由主義者⁴⁴⁰のサポートにより職を得て、マ

⁴³⁹ 現在は **pro** にアクセント記号を付けないが、新聞のタイトルでは **pro** にアクセント記号が付いている。

⁴⁴⁰ 自由派はフィリピン統治に対しても、ある程度の自治を与える示唆を行っていたため、

ドリッドで生活しながら新聞を発行していたのである。デ・ロス・レイエスは 1900 年 3 月の時点では、以下の 2 点、1) 修道士問題、2) スペインのフィリピンに対する扱い— が改善すれば、フィリピンはスペインの下にあっても構わないと主張していた。

1-3. 新聞の性格

新聞は、第 7 号「時評欄」(1900 年 1 月 25 日)の中で、新聞自体は個人的なもので、「この雑誌は個人的な事業で、フィリピン委員会⁴⁴¹からは独立したものであると我々は明記する。とは言え、我々はフィリピン委員会を我々の国家の政府の真の代表になるということとで尊重している *Hacemos constar que esta Revista es una empresa particular, independiente de los Comités filipinos, á quienes sin embargo, acatamos por ser la representación genuina del Gobierno de nuestra nación*」と述べている。しかも『フィリピナス・アンテ・エウロパ』の顔である第 1 面には、アギナルドの肖像が毎号印刷され、創刊号の「時評欄」(1900 年 10 月 25 日)で、「我々は敬愛するフィリピン共和国大統領、ドン⁴⁴²・エミリオ・アギナルドに兄弟の挨拶と、より熱い支持を送る *Enviamos fraternal saludo y nuestra más entusiasta adhesión al honorable presidente de la República Filipina, Don Emilio Aguinaldo*」と述べている。また、新聞記事の多くはフィリピン委員会から送られたもので、第 1 面のアギナルドの写真の横には、アギナルド及び各地のフィリピン委員会委員長 *Presidente de Comité* や、アゴンシーリョなど著名な革命家のコメントも毎号印刷された。

前述したフィリピン領内で発行されていた革命新聞『ラ・インディペンデンシア』の廃刊後、第 27 号「マニラのニュース欄へ *Al “Noticiero de Manila”*」(1900 年 11 月 25 日)では、香港委員会⁴⁴³の『フィリピナス・アンテ・エウロパ』への賞賛コメントが掲載され、アギナルドがこの新聞の出版継続を望んでいることが書かれている。したがって、『ラ・インディペンデンシア』廃刊後、この新聞は或る意味でフィリピン共和国政府の機関紙化していた部分があると見ていいであろう。しかし、記事の多くはデ・ロス・レイエスが書い

フィリピン人革命家たちは自由派に属するスペイン人と交流を深めていった。

⁴⁴¹ 在外フィリピン人が、その居住地で作った革命委員会で複数存在するために、複数形になっている。

⁴⁴² *Don* はスペイン語の敬称。女性の場合は *Doña* ドーニャ。

⁴⁴³ 前章の整合性をとるため、『フィリピナス・アンテ・エウロパ』では、「地名+フィリピン委員会」、つまり香港の場合、「香港フィリピン委員会」と記載されているが、以後は前章と同じく「地名+委員会」と表記する。

ており⁴⁴⁴、他のフィリピン人革命家の意見とデ・ロス・レイエスの記事が混在し、新聞の主張に多様性と矛盾が生じることもあった。しかし、独立支持、革命継続という点では革命側の主張を代弁する新聞であった。



『フィリピナス・アンテ・エウロパ』第1号第1面上半分

(左上にアギナルドの写真、その右側にはアギナルド、アゴンシーリョ、ボンセ、各委員会の委員長などのコメントが印刷されている。1面のこのスタイルは毎号変わらないが、人事に入れ替わりがあると、新委員長のコメントにかわる。)

⁴⁴⁴ 本章の本文だけでは、誰がどの記事を書いたのかわかり辛いので、記事の全タイトルと著者は巻末の別資料で記す。

1-4. 投稿者

デ・ロス・レイエス本人か、ヨーロッパ在住のフィリピン人、香港委員会幹部、またはフィリピン領内で戦闘を行うフィリピン人将軍や幹部などが、記事または、手紙などの形で投稿している。無記名の記事の中にもデ・ロス・レイエスが書いたであろうと思われる記事もある。新聞は、第8号「時評欄」（1900年9月10日）で、「記事を送る人は述べたいことを2〜3枚にまとめて、電信のスタイルで送ってほしい」と述べている。しかし、当時電信料が高額であることを考えると、特に長い記事は以下の2つの方法で集められた可能性が高い：

1. ヨーロッパか香港在住のスペイン語を書くことができるフィリピン人が、原稿を書いて編集部へ郵便で送った。
2. フィリピン国内で書かれた手紙や記事は、香港まで密かに持ち出され、そこからマドリッドに郵送された。その手紙や記事がタガログ語の場合は、マドリッドのフィリピン人がスペイン語に翻訳して掲載した。

編集は主にデ・ロス・レイエスが行ったと思われるが、デ・ロス・レイエスがパリやロンドンを旅行している時でも新聞は定期的に発行されていたので、友人のアレホラなど、マドリッドに住むフィリピン人知識人も手伝っていたと思われる。

1-5. 創刊の辞

新聞発行にあたって、創刊号（1899年10月25日）の最初の記事「我々のモットー *Nuestro Lema*」では、「全ての国民に対して *á todos los pueblos*」挨拶をし、リサールの写真と詩を掲げて以下の7点を述べた⁴⁴⁵：

1. ベイツ協定⁴⁴⁶への批判
2. 我々は戦争を明示する一方で、「戦術を普及させ、習慣・教育・宗教のみならず、全ての分野での革命を促すだろう *popularizaremos el arte militar y*

⁴⁴⁵ アンダーソンは、『フィリピナス・アンテ・エウロパ』のモットー *lema* に関して、「完璧な編集モットーは“*Contra Norte-América no, contra el imperialismo, sí*”（「反北アメリカにノー、反帝国主義にイエス、徹底的に」）であった」〔アンダーソン 2012: 305〕と述べているが、これは第3号の3番目の記事のタイトルであって、新聞のモットーとしては十分ではない。新聞では第1号の最初の記事で、我々のモットー *nuestro lema* というスペイン語を題名に掲げて、そのモットーを明確にしている。その記事を完結に纏めると、上記7点の主張が浮かび上がる。つまり反帝国主義だけが、新聞の主張ではなかった。⁴⁴⁶ 記事内ではベイツ協定という言葉は使っていないが、この協定のことを指して批判している。

promoveremos una Revolución, no solo en las costumbres, en la enseñanza y en la relación, sino en todos los ramos」

3. 「我々の中で多くの人々が、本当とは思えない伝説を信じている。それは我々が欧米の人種よりも実際に劣っているというものである *no pocos de nuestros compatriotas creen la inverosímil leyenda de que somos, en efecto, inferiores como raza á los europeos y americanos*」
4. 独立の下での近代化⁴⁴⁷を熱望する。
5. 帝国主義者、仕事嫌いの人、アメリカの余剰労働者はフィリピンに入れてはならない。
6. 武装解除拒否。自治の施しは受けない。
7. アメリカが約束を果たそうとする瞬間が、アメリカとの合意を始めるスタート地点となる⁴⁴⁸。

1-6. フィリピン委員会との関係

第 32 号（1901 年 2 月 10 日）の記事によると、フィリピン委員会は、フランス、スペイン、イギリス、オーストリア、イタリア、ベルギー、他にあったとされる。フィリピン人 3 人が集まると委員会ができると記事内では書かれている。したがって、どこまで実態があったのかは不明である。記事からその活動が追えるのは、香港、マドリッドだけで、かろうじてパリ委員会⁴⁴⁹はその存在がわかるが、新聞からは委員長がラモン・アバルカ Ramon Abarca に代わっていることぐらいしかわからなくなっている。

1-6-(1). 香港委員会

⁴⁴⁷ 新聞は多くの記事の中で *civilización* という言葉を多用している。新聞内においてこの言葉は、文明や文明化から近代化、西洋化まで、広い意味で使用されている。したがって、記事のコンテキストに応じて、*civilización* の訳語を適宜、充てる。

⁴⁴⁸ 新聞は米西戦争前に、フィリピン人のアメリカ軍への協力と引き換えに、アメリカがフィリピン人に独立を約束したというベースの上でこの主張を展開している。

⁴⁴⁹ アゴンシーリョがパリ和平会議へのロビー活動のためにパリを訪れた際に、パリにも委員会の設立が必要だと主張した。この主張によってパリ委員会は 1898 年 11 月 16 日に、パリで設立された。設立時の委員長はホセ・ラミレス Jose Ramirez、セクレタリーにフェリクス M. ロハス Felix M. Roxas、フェルナンド・ソベル Fernando Zobel、会計係にラモン・アバルカ Ramon Abarca、相談役に、フェリクス・リサーレクシオン・イダルゴ（またはヒダルゴ）Felix Resurrección Hidalgo、ベルヘル、そして、ラモン・ラミレス Ramon Ramirez であった [T. Agoncillo 1960: 319]

第1章で述べたように、香港委員会は革命の第2フェーズを始める際、領外活動の中心地と通信・物流の中継所という点で、重要な地位を占めるようになった。新聞が発行されてからしばらくは、香港委員会は重要な発言をすると言うよりも、フィリピン国内の戦況を現地から得て、新聞にそのニュースを送る中継点の役割を担っていた。しかし第2次「アメリカン・コミッション *Comisión Americana*」⁴⁵⁰の到着後、1900年6～7月頃には、共和国時代にアギナルドの閣僚であった革命家が、あからさまにアメリカ支持に傾く行動をとるようになり、香港委員会は独立を主張するために新聞に意見を送るようになった。第20号「我々の伝道に従え *Conforme con Nuestras Predicaciones*」(1900年8月10日)では、1900年6月付けのアパシブレによる戦争終結の条件提示も掲載された。このように独自の主張を送ることもあったが、1900年11月くらいまでは、香港委員会は、フィリピン国内にいる活動家の手紙を中継して、マドリッドに送る仕事を行うことの方が多かった。

しかし、1900年11月にマッキンレー大統領の再選が決定し、12月にフィリピン人知識人たちによって、アメリカ併合を支持するフェデラル党が結成されるようになると、完全独立を支持する知識人の数が減少し、革命運動内部では、海外で革命運動をしている知識人のプレゼンスが相対的に高まった。第34号「香港のフィリピン人中央委員会」(1900年3月10日)では、香港委員会の人事と活動内容を紹介し、読者の気持ちを高揚させようとする記事を掲載している。

この努力も虚しく、この後すぐ、3月23日にアギナルドが降伏したため、アギナルドの部下、つまり革命を担った主要な革命家も多くが降伏し、革命側のフィリピン領内での軍事・行政機構が壊滅状態に陥った。第35号のデ・ロス・レイエスの署名記事「誰が後継者になるのか? ¿*Quien Será el Sucesor?*」(1901年4月10日)では、香港の中央委員会が政府の代行をすることを認め、香港委員会の重要性を述べている。

⁴⁵⁰ 『フィリピナス・アンテ・エウロパ』での「アメリカン・コミッション」は、第1次フィリピン委員会であるシャーマン委員会と、第2次フィリピン委員会であるタフト委員会を指す。『フィリピナス・アンテ・エウロパ』はフィリピン人の視点から書かれているため、フィリピン委員会ではなく、「アメリカン・コミッション」や、「ヤンキーのコミッション」などの言葉を使っている。本稿の中立性の維持のために比・米のどちらの呼び方を使用すべきか悩んだが、一般的にはフィリピン委員会という名称が使われているので、革命側の引用以外ではフィリピン委員会という名称を使い、革命側の主張の名称を使う際には「」をつけて使用する。

1-6-(2). マドリッド委員会

マドリッド委員会は1898年12月14日に設立された。設立時の委員長はRafael del Pan デル・パン、副委員長はアレホラ、セクレタリーはIsauro Gabaldon イサウロ・ガバルドン、アシスタント・セクレタリーはパスカル H. ポブレテ Pascual H. Poblete、会計係がデ・ロス・レイエス、相談役がモデスト・デ・ロス・レイエス Modesto de los Reyes、C. ルクバン、ラモン・トリアス Ramos Trias とイルストレであった [T. Agoncillo 1960: 319]。

第21号と第22号の「武装したフィリピン人たちへ マドリッド委員会のマニフェスト *Á los Filipinos en Armas. Manifiesto del Comité de Madrid*」(1900年8月25日、9月10日)によると、マドリッド委員会⁴⁵¹はスペインにいるフィリピン人やスペイン人自由主義者と交流を持ち、デル・パンがアパシブレと共にアメリカに行くことになったことで、アレホラが委員長となった。マドリッド委員会の新聞での扱いは、創刊時はデ・ロス・レイエスが委員長のアレホラについての記事を書いたくらいで、それほど重いものではなかった、1900年半ばあたりにフィリピン人知識人がアメリカを支持する傾向が見えるようになってくると、マドリッド委員会もマニフェストを公表するようになった。この2つの記事では、マドリッド委員会がアメリカと和解を画策する一部のイラストレードスの行動に対し懸念を示し、フィリピン領内で戦っているフィリピン人に向けて声援を送っている。

その記事の第1行目には、「君たちは憤慨して、汚名と共にある平和は拒絶しろ *Rechazad indignados una paz con oprobio*」と書かれており、以下のようにスペインにいるフィリピン人は武装闘争の継続を希望すると述べた：

全ての君たちの兄弟たちと、そしてスペイン全土で参加している多くのマドリッド委員会のフィリピン人たちは、その野や森で、海岸や山々で、武器を持って戦うことを願っている。そこで、我々の名誉と我々の独立が容赦なく決定するのだ。

Todos vuestros hermanos, y los numerosos filipinos adheridos en toda España, del Comité de Madrid, desean ansiosos, combatir con las armas en esos campos y bosques, en esas playas y montañas, donde se ventilan á sangre y fuego nuestro honor y nuestra independencia

そして第2次フィリピン委員会を、マッキンレー大統領と彼にすり寄る人々で合意をするために作られた委員会だと批判した。そしてカトリックらしく、「ただ**完全独立**だけが、

⁴⁵¹ スペイン独立委員会とも呼ばれた。

フィリピン殉教のカルバリ⁴⁵²の丘の全てを購入できるであろう *Tan solo con la más absoluta Independencia se podría comprar todo el Calvario del martirio filipino*」と太字と斜体で記し、完全独立のみが、独立のために戦って死んだ人々に報いる道であると主張している。

第 22 号（1900 年 8 月 10 日）では、アメリカの支配の下で自治を得ようとする人々を「マドリッド委員会の抗議 *La Protesta del Comité Filipino de Madrid*」で非難したが、この後マドリッド委員会から読者に向けて、直接語りかける記事は一時姿を消した。1900 年 11 月のマッキンレー大統領の再選に関しても、言及はない。この後マドリッドの委員会名で記事が登場するのは、アギナルドの降伏後の第 35 号になってからである。最終号となる第 36 号「新しいエレメンツの必要性 マドリッドのフィリピン人委員会の重要なセッション *Necesidad de Nuevos Elementos. Sección Importante del Comité de Madrid*」（1901 年 6 月 10 日）では、マドリッド委員会の会合の様子をレポートして、以下の 4 点を主張している。

1. 5 月 24 日に 60 人が集まった。
2. マドリッド委員会は戦争の継続と独立の路線を守る。
3. 委員会全てのメンバーの命と財産を守る。
4. 戦争の継続に関する気力の衰えに対して抗う。

3. と 4. の主張からは、活動を続けるにあたって、マドリッド委員会内部に何らかの躊躇と不安があることが伺える。これからすると、マドリッドの委員会内部では、以下の 2 点、1) フィリピン領内の知識人がアメリカ側につき、要職を得て行く様子を見て離反が起きている、2) 独立活動に関わることでフィリピン領内の親族に対し、アメリカ当局から弾圧を加えられることを恐れて人々が弱腰になった——が起きた可能性がある。モハレスの研究によると、「1901 年 4 月 19 日のアギナルドの降伏宣言の後でマドリッドの委員会は解散し、イサベロ（デ・ロス・レイエス）は『フィリピナス・アンテ・エウロパ』の最終号を出版した *After Aguinaldo's surrender proclamation of April 19, 1901, the Madrid Comité Filipino disbanded and Isabelo published the last issue of Filipinas ante Europa*」〔Mojares 2006: 274〕となっているが、5 月 24 日までは、マドリッド委員会は継続していたようである。しかし初期のメンバーであった C. ルクバンとイルストレ

⁴⁵² カルバリと巡礼についてはイレートが著書で触れている〔イレート 2005: 117〕が、本稿は宗教分析を主としていないので、細部に渡る宗教的分析は行わない。

は、第 34 号「香港のフィリピン人中央委員会」（1901 年 3 月 10 日）で、すでに香港委員会のメンバーとして紹介されている。その上、アレホラも 1901 年 11 月 19 日に、香港からマニラのデ・ロス・レイエスに手紙を送っている〔PIR 903-5〕ことから、5 月 24 日にはマドリッド委員会は、ほとんど機能していなかった可能性がある。

1-7. 新聞発行への障害

新聞はアメリカ当局からの弾圧を受けた。スペイン当局からも、宗教上の問題で訴訟を起こされた。また、発行者自身も資金不足に悩んだ。

1-7-(1). 新聞記事に関するスペイン当局からの訴訟問題

発端は第 15 号に掲載されたデ・ロス・レイエスの署名記事、「フィリピンの教会 I Iglesia Filipina I」（1900 年 5 月 25 日）であった。この記事がスペイン当局から、教会（カトリック）への冒涇と見られた。したがって、アメリカの弾圧とは全く違う次元で、デ・ロス・レイエスはスペイン当局の訴訟に苦しむことになった。この記事の内容をまとめると以下の 6 点になる：

1. 「フィリピンではプロテスタンティズムが驚異的な速さで広まっている。なぜなら修道士たちがカトリズムを、自己中心的な・聖職売買の・狂暴にする・偶像崇拜の宗教に変換したからである El Protestantismo se propaga en Filipinas con admirable celeridad, porque los frailes convirtieron el Catolicismo en religión egoísta, simoníaca, embrutecedora y hasta idolátrica⁴⁵³」
2. フィリピン人は修道士たちを拒絶すると述べる一方で、教皇の代表は教皇の許可がない限り修道士は去れないとした。
3. 教皇代理のプラシド・ルイス・シャペル Placide Louis Chapelle (シャペル)⁴⁵⁴は、フィリピン人聖職者を裏切りながら、不当な大義を保護する⁴⁵⁵。

⁴⁵³ 史料通り。

⁴⁵⁴ シャペルは、1842 年フランス生まれ。以前はニュー・オーリンズの司教であったが、1899 年 8 月 9 日に教皇代理に任命され、1900 年 1 月 24 日にローマ教皇の代理人としてフィリピンに着任し、1905 年ニュー・オーリンズで亡くなった。英語・スペイン語・フランス語に堪能であった。英語読みではシャペルになるが本稿ではフランス語読みを採用する。

⁴⁵⁵ 教皇の名の下に、スペイン人修道士たちをフィリピンに居住させ続けることを支持しているという意味。

4. 「ローマはもうたくさんである。我々が確固として、自身の修道会を、そしてローマン主義の良いところを全て保ち、フィリピン人の教会を作れたらと思う *Basta ya, pues, de Roma, y formemos sin vacilaciones⁴⁵⁶ una Congregación propia, una Iglesia filipina, conservando del Romanismo todo lo bueno que tenga*」
5. ローマのキリスト教は、ごまかしの、そして道理を説く神学者の気まぐれの集団そのものである。
6. 教皇が譲歩しない限り、我々は離脱する。

第 15 号が発行された後、スペイン当局はすぐに動き、翌第 16 号の第 1 面「告訴された我々の雑誌 告訴され差し押さえを受けた編集長 *Nuestra Revista Denunciada. El Director Procesado y Embargado*」(1900 年 6 月 10 日)では、裁判所が差し押さえを行う前に、当局が新聞の回収と各関係機関への家宅捜索・押収を行った旨が書かれている。そして、「我々の唯一の目的は、我々が彼ら⁴⁵⁷の軽信を悪用することを考える人たち⁴⁵⁸から、それらの人々⁴⁵⁹のこれら⁴⁶⁰を守ることだったのだ。しかし、絶対に彼らの宗教を愚弄する目的ではない *Nuestro único objeto era defender á éstas de los que creíamos y creemos que abusan de su credulidad, pero jamás escarnecer la Religión de los mismos*」と述べ、プロパガンダのために真剣に編集・発行し、世界の人々に見てもらおうとしている新聞上で、スペインの教会を愚弄するつもりはないと主張した。

デ・ロス・レイエスにも意地があったのか、同第 16 号「フィリピンの教会 II *Iglesia Filipina II*」(1900 年 6 月 10 日)で、当局の措置に対して再度反論を行い、同号「時評欄」では訴訟の様子も掲載し、検事が 5,000 ペセタの罰金を要求していることを述べた。

その後第 17 号「時評欄」(1900 年 6 月 10 日)で、デ・ロス・レイエスに保釈が認められたことが掲載され、第 28 号「時評欄」(1900 年 12 月 10 日)では、裁判が継続していることが、第 34 号「我々の裁判 *Nuestro Proceso*」(1901 年 3 月 10 日)では、マドリードの裁判所の検事が、軽犯罪刑務所で 4 年 9 ヶ月と 10 日という禁固刑と、付随的な罰金 250 ペセタを求刑し、弁済不能で費用の支払い不能のケースでは刑務所に行くことを要

456 主語が我々なので複数形。

457 フィリピン人聖職者たち。

458 原文を忠実に訳すと「(過去に) 考えた人々と、(現在) 考えている人々」となる。

459 フィリピン人聖職者たち。

460 宗教的権利。

求していることが述べられている。しかし、その後アギナルドの降伏という重大事件が起こったために、デ・ロス・レイエスの裁判の行方は第 35 号「時評欄」(1901 年 4 月 10 日)で、簡潔に 1 文で「編集長は新聞に関する裁判で完全に赦免された」とだけ記されるに留まった。

スペイン当局は、あくまでも宗教への冒涇という観点から新聞に対して訴訟を起こしたのであって、アメリカ政府に頼まれて新聞に何らかの弾圧を加えたのではない。しかし記事そのものはバチカンからの離脱を示唆したものであり、バチカンへの反逆と見られても仕方のないものであった。

1-7-(2). アメリカの弾圧

フィリピン領内でのアメリカ当局の検閲の酷さから考えると、創刊時から、アメリカの『フィリピナス・アンテ・エウロパ』及びその関係者への弾圧は、間接的に何か行われていた可能性はあるが、発行者兼編集長であるデ・ロス・レイエスがスペインにいたこともあり、創刊から 1 年弱の間は、記事から新聞への直接的な弾圧や暴力は読み取れない。デ・ロス・レイエスへの弾圧が書かれたのは、1900 年 9 月 10 日の第 22 号のトンドでの土地に関する裁判であるが、これは新聞に対する弾圧とは多少意味が違うので、裁判所の節で述べたい。

1900 年夏頃は、まだデ・ロス・レイエスとフィリピン領内の友人は連絡をとることが可能であった。1900 年 8 月 2 日、彼はビノンドに住む人物に対して、『フィリピナス・アンテ・エウロパ』の第 2 号から第 14 号までのコピーを 5 部と第 25 号を送り、プロパガンダのために資金が必要であることを述べている [PIR 630-1]。

新聞への直接的な弾圧が書かれているのは、第 25 号 (1900 年 10 月 25 日) 1 面「1 周年 Un Año de Vida」からで、以下のような記述がある：

最近の手紙は、ヤンキーたちは発言とプレスとの自由を与えるとの繰り返された約束を否定して、我々の創刊号第二版と (中略)『革命と独立!』のパンフレット 2,500 部が入った郵便小包を没収したというニュースをもたらしている。

El último correo nos trae la noticia de que los yankis, desmintiendo sus repetidas promesas de concedernos libertad de opinión y de prensa, han cogido la segunda edición de nuestro primer número, ...y 2,500 ídem de nuestro último folleto *¡Independencia y Revolución!* ...

この後、新聞やデ・ロス・レイエスに対する直接的な弾圧は見られないが、第 30 号「通信に関するとんでもない侵害 フィリピン諸島の郵便における盗みと他の行き過ぎた行為 アメリカ人長官とシビル・コミッションへ Escandalosa Violación de la Correspondencia. Robos y Otros Excesos en Correos de Filipinas. Al Gobernador Americano y á la Comisión Civil」(1901 年 1 月 10 日)では、フィリピンでアメリカ当局が、マドリッド委員会あての郵便物のチェックと没収を行った可能性を指摘しており、フィリピン領内では新聞への弾圧が水面下で起こっていたことが推測できる。

フィリピンでのアメリカ当局の弾圧は、没収に留まらず、人にまで及び始め、第 35 号「時評欄」(1901 年 4 月 10 日)では、アメリカ当局がデ・ロス・レイエスの親戚に対しても弾圧をかけたことを述べ、第 36 号「時評欄」(1901 年 6 月 10 日)では、以下の 5 点を指摘して、徹底した弾圧が行われていることを述べている：

1. カガヤンでは小包の封が解かれていた。
2. アメリカ軍当局は我々の秘密通信員だと指摘された人には、金で 5,000 ドゥーロを支払わせると通知した。
3. 多くの人々が新聞を送らないように頼んできた。なぜなら、アメリカが人々に対して、新聞に関係すれば国外追放すると脅迫しており、憲兵隊長にそうするように命令したからだ。
4. 通信員だとして逮捕された人もおり、スペイン人ですら、物を包む目的でも、スペインから新聞を持ち込めば逮捕すると言われている。
5. 結果的に我々はフィリピンで購読料を支払う定期購読者を持つことができない。新聞は存続できるのだろうか？

この後もアメリカ当局はデ・ロス・レイエスの監視を続けた。

2. フィリピン人の政府の正当性とアメリカの不当性

新聞はフィリピン人が設立した共和国政府及び独裁政府がいかにかに正当であるか、そしてアメリカがいかにかに不当なことを行っているのかについて、繰り返し書いた。

2-1. フィリピンが独立国である根拠

第6号「スピーチ Discurso」(1900年1月10日)⁴⁶¹と第11号「帝国主義政党⁴⁶²によって犠牲にされたアメリカ合衆国 Los Estados Unidos Sacrificados por el Partido Imperialista」(1900年3月25日)⁴⁶³の2つの記事をまとめると、以下の3点になる：

1. フィリピンはスペイン当局に対して1896年から武力闘争を行い、1898年6月には独立を宣言した。
2. 武力闘争の段階で、スペインはすでにフィリピンを掌握できていなかった。
3. 1と2故に、1898年12月10日のパリ条約以前に、事実上、「フィリピン共和国」という独立した国が出来上がっており、スペインはアメリカにフィリピンを売り渡すことはできない。しかも、フィリピン人は奴隷ではない。

新聞では、スペインがアメリカにフィリピンを売り渡す前の段階で、スペインがすでにフィリピンを掌握していなかった事実を述べている。1898年8月13日、スペインが米西戦争でアメリカに負ける前、6月の独立宣言の時点で、スペインのフィリピン領有は消滅していたとし、それゆえにスペインはフィリピンをアメリカに譲渡できないのだと述べている。この主張は1899年1月5日、アメリカのヘイ国務長官に宛てたメモランダムで革命側が展開した主張〔Taylor 1971: Vol. V 33〕であり、革命側の一致した見解であったと思われる。しかし、新聞はその独立がどこにも承認されていなかった事実には触れていない。

2-2. フィリピン人の統治能力

フィリピン人の統治能力は、革命家たちが強く主張したいことの1つであり、事あるごとに主張され続け、記事の量も多い。創刊号「ミスター⁴⁶⁴・マッキンレーへ Á Mr. Mac-Kinley」(1899年10月25日)、第3号「独力で自治を行うためのフィリピン人たちの能力 La capacidad de los Filipinos para Gobernarse por sí mismos」(1899年11月25日)などでは、フィリピン内の治安を悪化させたのは、侵略してきたアメリカ人の方であり、フィリピン人は国内の秩序維持や、政治・司法・行政・教育・宗教・軍の管理も自

⁴⁶¹ ポンセが東京で行ったスピーチの記事。この記事には日付がない。ポンセは1899年10月から1900年初頭まで、香港で療養していたので、このスピーチは少なくとも第6号発行から3ヵ月以上前に行われたものである。

⁴⁶² 革命家はアメリカの共和党を、帝国主義政党とも呼んだ。

⁴⁶³ トカヨ Tocayo と署名がある記事。

⁴⁶⁴ 新聞は、基本的にはスペイン人とフィリピン人にはセニョールやドンを使い、その他外国人にはミスターを使っている。

身でできる、と主張している。比米戦争前に秩序が存在していたと言う主張は、第 14 号「大統領のメッセージ III El Mensaje Presidencial III」(1900 年 5 月 10 日)でも行われ、1900 年 5 月現在の、フィリピン領内の混乱状態に関しては、彼らの側に非がないことを主張している。

2-3. スペイン刑法

新聞は、アメリカに協力する者、いわゆる「裏切り者 *traidor*」に対処するのには、スペイン刑法を持って罰すると述べている。彼らの処罰のガイドラインはスペイン刑法に依拠しており、革命側は法によって近代的に人を裁いているのだと主張し、フィリピン人の政府がリンチ⁴⁶⁵などを行うような野蛮な政府ではないことを示唆している。

第 7 号「アメリカのシビル・コミッションのレポートへの反論 I Contestación al Informe de la Comisión Civil Americana I」(1900 年 1 月 25 日)では、第 1 次フィリピン委員会が、フィリピン人たちはアメリカを支持すれば、革命家から殺されると恐れていると述べたことに対して、以下のように反論して、反逆者を最高刑で罰することは一般的なことだと述べている：

(前略) 死刑を廃止している数少ない国を除いて、どんな場所でも祖国の裏切りは最高刑を以て罰せられている。フィリピンでは、マロロス憲法によって暫定的に遵守を命令しているスペイン刑法によって、(祖国の裏切りは) 確立していたし、今も確立している。

...en todas partes se castiga con la última pena la traición á la patria, excepto en las contadas naciones donde esta abolida⁴⁶⁶ la pena de muerte, y en Filipinas así estaba y está establecido por el Código Penal español, mandando guardar provisionalmente por la Constitución de Malolos

その後、マッキンレー大統領が再選を果たすと、新聞はこの再選によるアメリカ支持のフ

⁴⁶⁵ アンダーソンによると、「イサベロが執拗に叩いたのはアメリカ合衆国での人種差別主義とリンチ法」[アンダーソン 2012: 306]であった。確かに、第 4 号「国のモラル La Moral de las Naciones」、同第 4 号「人種問題と捕虜たち La Cuestión de Razas y los Prisioneros」(1899 年 12 月 10 日)、第 29 号「カティプーナンという宗教 イサベロ・デ・ロス・レイエス著 La Religión del “Katipúnán” por Isabelo de los Reyes」(1900 年 12 月 25 日)などの記事で、リンチという言葉が散見され、リンチへの否定がなされている。リンチの対比として、新聞はスペイン刑法を持ち出し、革命側が裏切り者であっても刑法で裁いていることを際立たせようとした。

⁴⁶⁶ 単数扱いは史料通り。

フィリピン人が増加しないように牽制し、フィリピン共和国が近代的な法治国家であることを主張するため、スペイン法の適用に関する主張を増加させた。第 30 号「復讐！ 戦争、戦争！ ¡Venganza! ¡Guerra, Guerra!」（1901 年 1 月 10 日）、第 30 号「国家防衛 Defensa Nacional」（1901 年 1 月 25 日）、第 32 号「独立を支持する全員一致の投票 エル・セニョール・アパシブレ Voto Unánime por la Independencia. El Sr. Apacible」（1901 年 2 月 10 日）では、裏切り者や、国家に危害を与えるアメリカ人へのスペイン刑法の適用を言明している。

しかし、その後はアギナルドがアメリカに降伏してしまったために、スペイン刑法による刑罰の記事は姿を消している。マロロス政府時代に、一部のスペイン法の適用を決めたことが、スペイン刑法適用のベースとなった。運用実績はどうであれ、フィリピン人が野蛮ではないことを欧米に主張するためには、新聞上で近代法の適用を内外に知らしめる必要があった。

2-4. アギナルド独裁政府への支持

アギナルドは権力を集中させるために、1899 年 11 月に再度独裁を宣言した⁴⁶⁷。新聞は独裁制に対しては否定的な意見を持ちながらも、アギナルドの独裁政府に対しては一貫して支持を表明した。しかし、アギナルドが降伏すると、全ての独裁制を完全に否定するようになった。アギナルドを支持する新聞の性格を考えれば、当たり前と言える変化であった。アギナルド独裁への支持の記述はさほど多くはないが、アギナルド独裁支持の主張は一貫している。

アギナルドの独裁への支持は、まず第 3 号「戦争で戦争に報いる 独裁 La Guerra con la Guerra. La Dictadura」（1899 年 11 月 25 日）に現れ、「我々は独裁を好まない（中略）しかし、もしアギナルドの独裁が、野望を持つ帝国主義者たちとの妥協を終わらせることを目的にしているのであれば⁴⁶⁸、そしてエネルギーに戦争で戦争に応えることを目的にしているのであれば、来ていただきたいものだ⁴⁶⁹No nos gustan las dictaduras...pero si la dictadura de Aguinaldo tiene por objeto acabar con las contempORIZACIONES con los ambiciosos imperialistas, y contestar energicamente la guerra con la guerra, venga

⁴⁶⁷ アギナルドは香港からフィリピンに戻った後、彼に権力を集中させるために 1898 年 5 月 24 日から 6 月 23 日まで、一時的に独裁を行ったことがあった。

⁴⁶⁸ アメリカとの妥協の産物である「併合」を拒否するのであれば——という意味。

⁴⁶⁹ アギナルドの独裁を歓迎すると言う意味。

enhorabuena」と、独裁自体は支持しないが、アギナルドが独立を目指して戦争を続けるのであれば、アギナルドの独裁は受け入れる旨が述べられている。この後第 16 号「アギナルドと新しいアメリカのコミッション Aguinaldo y la Nueva Comisión Americana」(1900 年 6 月 10 日)では、本来ならアギナルドよりも法の方が上位に置かれねばならないことを強調しつつも、「にもかかわらず、状況ゆえに我々は、著名なアギナルドの軍事独裁を了承し、熱意すら持って受け入れたのだ *aceptamos, sin embargo, por imposición de las circunstancias, la dictadura militar del ilustre Aguinaldo y hasta abrazábamos con entusiasmo*」と述べ、アギナルド死亡の噂⁴⁷⁰に対して、再度アギナルドの生存を主張し、ビバ、フィリピンの独立！ 戦争よありがとう！ ビバ、アギナルド！ ¡Viva de Independencia de Filipinas! ¡Bendita sea la guerra! ¡Viva Aguinaldo! とアギナルドを称賛している。

新聞は、アギナルドのフィリピン国民への呼びかけを、第 26 号「フィリピン国民へ Al Pueblo Filipino」(1900 年 11 月 10 日)⁴⁷¹で掲載した。アギナルドはこの中で、過去の権力分散による失敗を反省し、自身の独裁の正当性について、以下の 3 点を挙げた：

1. 国民はアギナルドに権限を預け、アギナルドはその名において統治を行っているのだから、統治は諦めない。
2. アギナルドが信頼している人は廉潔な精神を持った人で、独立以外を望んでいない。
3. アギナルドはビアク・ナ・バトの失敗から、多くの人に権限を渡すことは失敗につながることを学んだので、国民の希望から逸脱しない範囲であれば、権限を渡した人であっても権限を剥奪する。

しかし、アギナルド降伏後の第 35 号「誰が後継者になるのか？」(1901 年 4 月 10 日)の中で、デ・ロス・レイエスは、アギナルドの独裁であったから、デ・ロス・レイエスはそれを受け入れただけであり、独裁そのものは否定する旨を述べた。署名はないが最終号の第 36 号「憲法が実現されるのなら *Que se Cumpla la Constitución*」(1901 年 6 月 10 日)では、独裁が完全に否定されている。

世界が独裁を否定する方向に動く中、新聞は、アギナルド、独裁、民主主義の 3 つのエ

⁴⁷⁰ アギナルドの死亡の噂は、何回も流された。

⁴⁷¹ このメッセージ自体は 8 月 3 日付けのものであり、マッキンレー大統領の再選を受けたものではなく、むしろパテルノのアメリカ支持への牽制であったと思われる。しかし 11 月にこのメッセージを掲載した新聞の意図は、反マッキンレー大統領であろう。

レメンツの整合性が取れる理屈を考えながら、アギナルドの独裁を支持したが、アギナルドの降伏でそれも無駄に終わった。

2-5. アメリカ軍政への異議

新聞はフィリピンにおけるアメリカの軍政と軍の不当性を主張することで、アメリカによって潰されようとしている共和国政府の正当性を主張しようとした。この主張に関してはかなりの量の記事があるので、記事の中からいくつかを拾ってみたい。

2-5(1). 残虐行為・不正行為・挑発行為

アメリカの不当性の例として、新聞はアメリカ統治域内の、残虐行為、不正行為、挑発行為を挙げている。これに関しては全期に渡って多くの記述が存在している。

残略行為について——略奪：第 4 号「残虐行為 Atrocidades」(1899 年 12 月 10 日)

無差別殺人：第 11 号「大統領のメッセージ II El Mensaje
Presidencial II」(1900 年 3 月 25 日)

婦女暴行：第 18 号「法の革命 Revolución en las Leyes」(1900
年 7 月 10 日)

略奪・非道行為：第 19 号「戦争のニュース Noticias de la
Guerra」(1900 年 7 月 25 日)

その他にも、飲酒による暴行、海への投げ込み、忠誠宣言拒否者への虐待などが書かれている。

不正行為について——着服：第 6 号「時評欄」(1900 年 1 月 10 日)

金銭要求：第 26 号「ヤンキーたちの野蛮さ 香港のフィリピン
中央委員会委員長のエミリアノ・リエゴ・デ・ディオス将
軍へ Salvajismo de los Yankis. Al General Sr. Emiliano
R. De Dios. Presidente del Comité Central Filipino de
Hong-Kong」(1900 年 11 月 10 日)

などが書かれている。

これらの記事では、アメリカ兵に対して、頻繁に「規律の乱れた部隊」の意味の「ソルダデスカ soldadesca」という単語が使われている。『マニラ・タイムス』などの、アメリカ側の息がかかった新聞が流す革命側兵士の残虐行為に対抗するために、『フィリピナス・

アンテ・エウロパ』も相手側の残虐性をアピールした。

2-5-(2). 裁判所問題

当時新聞が主張したテーマの1つに、裁判所問題がある。裁判所問題では主に以下の2つを主張している——1) フィリピンの裁判所にアメリカ人が介入してくる⁴⁷²、2) その裁判所内で不正や差別が行われている——である。それらの例として、新聞はデ・ロス・レイエスのマニラでの訴訟問題を例に挙げている。この裁判所問題は、フェデラル党結党に紙面を大きく割かなければならなかった1901年初めまで、掲載された。

アメリカ人の司法への介入と、裁判所内での不正と差別は、第1号「事実を述べる Hablen Hechos」(1899年10月25日)から始まっている。この記事では、以下の2点、1) 裁判所での人種差別、2) アメリカ当局とフィリピン裁判官の対立——が述べられ、アメリカ当局への協力者になってしまったフィリピン人裁判官たちですら、アメリカ当局者の人種差別に対して抗議を行ったとレポートした。その内容をまとめると、以下の5点になる：

1. オーティス准将の通訳がアメリカニスタのフィリピン人裁判官のヒポリト・マグサリン Hipolito Mag salin (マグサリン) を裁判所で罵った。
2. しかし、オーティスは通訳をかばった。
3. 裁判所のアレリャノはフィリピン人裁判官たちの辞職を示唆したが、オーティスは、辞職すれば逆に裁判官たちを国家反逆罪で逮捕する、と述べた。
4. 「ヤンキー」の司法官は彼らに対して、最初はスペイン、そして今度はアメリカも裏切るのかと罵った。
5. アメリカ人はフィリピン人を黒人のように扱う。

裁判所への苦情としては、第4号「あきれた自治! ¡Valiente Autonomía!」(1899年12月10日)で、アメリカ占領下のマニラに、フィリピン人司法官が多数を占めるコルテ・スーペリオール・デ・プレボステ Corte Superior del Preboste という軽犯罪裁判所が設立されたが、この裁判所は言い掛かりに近い罪で罰金を巻き上げる旨が書かれている。

その後も批判は続き、第23号「タフト・コミッションへ トンドの裁判所での鬻ぎ 我々

⁴⁷² 時澤大尉の1899年6月1日付け秘報第98号には、裁判所に関して「比律賓軍政長官ハ馬尼刺高等裁判所ヲ設ケ其職員十一人中所長以下八人土人ヲ以テ任命セリ之ヲ懐柔策ヲ人物登用上ニ実施スルノ第一着手トス」[外務省外交史料館文書 米西戦争一件 雑 第二卷 陸軍視察員報告 892]と記載されている。

から正義を盗む!!! *Á la Comisión Taft. Un Escándalo en el Juzgado de Tondo.*
!!!*La Justicia nos Roba!!!* (1900年9月25日)では、フィリピンの裁判所を「山賊の隠れ家 *guaridas de bandidos*」と形容し、第28号「モラルを強化するキャンペーン *Campaña de Moralización*」(1900年12月10日)では、「多くの人々が、正義を求めるためにフィリピンの裁判所に行くのを嫌がる。なぜならそこでは借金を回収するために裁判費用(7から14ペソ)を先払いしなければ、何の申し立ても受け入れてもらえない。もしかするとその借金や費用に達しない金額であってもである *Muchos tienen horror de acudir á los juzgados de Filipinas á pedir justicia, porque allá no admiten demanda alguna, si no se anticipa el pago de los costas, (de 7 á 14 pesos) por cobrar una deuda que acaso no llegue á esta cuantía*」と述べ、回収する金額よりも裁判費用の方が高い場合があることを指摘し、裁判システムの改正を求めている。

しかし、裁判所問題で新聞が一番力を注いだのが、デ・ロス・レイエスの訴訟の所有する不動産についての訴訟であった。新聞では、裁判所での不正の具体例として、彼の訴訟を掲載した。この訴訟は、革命勃発以前にデ・ロス・レイエスが、裁判所のパブリック・オークションで手に入れたトンド(マニラ)の土地の所有権に関するもので、これに関する記事は第22号から始まる。記事に書かれていた訴訟の経緯をまとめると、以下になる：

1. 革命第1フェーズ前に、デ・ロス・レイエスは、裁判所のパブリック・オークションで、弁済不能に陥った土地を手に入れた。
2. その後デ・ロス・レイエスは、スペインへと追放された。
3. 弁済不能でオークションにかけられた土地所有者の甥が、彼の土地の所有分返却を求めてデ・ロス・レイエスを告訴した。
4. 裁判所はデ・ロス・レイエスに出頭命令を出したが、デ・ロス・レイエスはスペインにいて出頭できなかった。
5. デ・ロス・レイエスが不在の間に、裁判所は甥の主張を全面的に受け入れてしまった。

この裁判所の決定に対して、第22号「哀れな復讐 *Venganza Pobre*」(1900年9月10日)で、デ・ロス・レイエスは署名記事で、以下のように非難・主張を行っている：

1. デ・ロス・レイエスのトンドの不動産についての訴訟で、マグサリンとアレリャノは、デ・ロス・レイエスが国外追放でフィリピンにいないことを利用し、彼の請願の手紙を無視して訴訟を進め、彼から土地を奪った。

2. マドリッドでデ・ロス・レイエスが、独立のための組織を貧しいながらも維持している一方で、デ・ロス・レイエスが憎んでいる人々やスペイン人弁護士は、私の土地と家を盗もうとする訴訟人を助けている。

第 23 号「タフト・コミッションへ トンドの裁判所での颯 我々から正義を盗む!!!」(1900 年 9 月 25 日)では、上記第 22 号の続きが述べられ、デ・ロス・レイエスがパブリック・オークションで合法的に土地を手に入れ、その土地に倉庫を建てたにもかかわらず、裁判所がそれらの土地を建物ごと訴訟相手に渡したと述べている。そして、その判決を下した裁判官のマグサリンを再度非難した。それでもデ・ロス・レイエスの口惜しさは収まらず、第 26 号「大声で罰を求める けがらわしい判決 *Sentencia Nefanda Que Pide á Voces Castigo*」(1900 年 11 月 10 日)でも、非難を繰り返した。

デ・ロス・レイエス自身は自分の訴訟を、アメリカ支配下での裁判所の不正と、アメリカ支配に反対する人々への弾圧の例として挙げ、その際最高裁判所のフィリピン人裁判官のトップにいたマグサリンやアレリャノを非難することで、彼らの後ろに控えているアメリカ当局を非難した。しかし、この訴訟に関する記事には、アメリカ当局が影で牛耳る裁判所への批判だけではなく、デ・ロス・レイエス個人の私怨の感情も入っていたことは否めない。

2-6. 人種差別

裁判所の部分でも多少触れたが、欧米に住む白人の人種差別に対しての非難も、新聞記事の中でいくつか言及されている。人種問題は 1901 年 3 月末のアギナルドの降伏まではコンスタントに触れられているが、アギナルド降伏後はその後の新体制を語ることで手一杯となり、人種問題に触れる余裕はなくなった。ここでは、『フィリピナス・アンテ・エウロパ』において、人種差別がどのように扱われていたか具体的な例を示したい。

2-6-(1). アメリカ人の人種差別

アメリカ人がフィリピン人に対して人種差別を行っているという批判は一貫して行っている。新聞やデ・ロス・レイエスがアメリカ人(*norte*) *Americano*⁴⁷³やヤンキー *Yankee* という言葉を単独で使う場合、無意識に有色人種を含まない白人のアメリカ人を示しているこ

⁴⁷³ 新聞ではアメリカ国民という意味で、*norteamericano* という単語を使い、その省略形として *americano* を使う。

とが多い。第1号「今が絶好の機会だ アメリ...カインか、アメリ...カニン...イスタ⁴⁷⁴か Ahora ó⁴⁷⁵ Nunca. Los Ameri...*káin* ó ameri...*kánin*...ista」(1900年10月25日)では、アメリカが独立を認めず、フィリピンに対して自治のみを与えようとすることを批判し、「偽装された奴隷制度は、アメリカ国内の赤い肌の人種として、フィリピン人種の根絶か、ゆっくりと進んでいく破棄を意味する *esclavitud disfrazada significa el exterminio ó la anulación paulatina de la raza filipina, como la de los pieles rojas en los Estados Unidos*」と述べ、アメリカがフィリピンを「慈悲深い同化 *Benevolent Assimilation*」⁴⁷⁶することは、フィリピン人を赤い肌の人種として奴隷にすることで、フィリピン人という人種を絶滅させることと同じだと警告した。そして同号「事実を述べろ」では、フィリピン人が、「アメリカ合衆国の黒人そのものであったとしても、白人のヤンキーたちによっていつも軽視されるだろう *Siempre los filipinos, aunque sean los mismos negros de los Estados Unidos, serán siempre despreciados por los blancos yankees*」と、フィリピンがアメリカに併合されてもフィリピン人は黒人として扱われ、白人から軽蔑されることを警告している。第2号「フィリピン人の暗い将来 帝国主義支配の下で *Negro Porvenir de los Filipinos. Bajo la dominación imperialista*」(1899年11月10日)では、自分たちが黒人の下での地位に置かれることを懸念して、以下のように述べている：

彼ら⁴⁷⁷がこれらの黒人たちとの諍いを避けるために、彼らは黒人をフィリピンに送るだろうと言われている。彼らが我々の主人たちになるために。したがって、我々はその奴隷の奴隷になるだろう。我々がヤンキーたちと現実の友愛に到達することは不可能である。なぜなら彼らは白人でない人々を劣等人種と考えるであろうからだ。

Ya se dice que para evitarse ellos el roce con estos negros, les enviarán á Filipinas, para que sean nuestros señores. Luego seremos esclavos de sus esclavos. Es imposible que llegue á ser real nuestra fraternidad con los yankees, porque ellos consideran de raza inferior á los que no son de su color blanco.

そして第4号、「人種問題と捕虜たち *La cuestión de Razas y los Prisioneros*」(1899年11月25日)で、「ヤンキーたちは、彼らのような白人たちによる自由な国民のモデル

474 アメリ...カニンと、アメリカニスタを合体させた言葉

475 アクセント記号は史料通り。

476 1898年12月21日、アメリカがフィリピン併合を行う際に、マッキンレー大統領が述べた理論的根拠。

477 白人のアメリカ人たち

である。一方で彼らは野蛮にも、有色民の同国人にリンチを行っているのだ *los yankees son modelo*⁴⁷⁸ *de naciones libres con blancos como ellos, mientras lynchan bárbaramente á sus compatriatas de color*」と、アメリカでの人種差別に対して、かなり強い言葉を使って非難している。

大統領選挙後、第 27 号「重要な手紙 *Carta Importante*」では、民主党大統領候補ブライアン支持のために、今まで批判を避けていた民主党員に対しても、人種差別をしていると述べている。

2-6-(2). 国際的人種差別の中での相対化

フィリピンはどのような人種で構成され、世界はフィリピン人や有色人種をどう扱うのかについて、やはり特別に記事を割いていることはない。しかし掲載記事の中の記述に、フィリピン領外で生活し、海外のニュースに晒されている彼らならではの見解がちりばめられているので、それをいくつか拾ってみたい。

第 2 号「アメリカ合衆国議会のコミッションの見解 *El Dictamen de la Comisión Parlamentaria de los Estados-Unidos*」(1900 年 11 月 10 日)で、多人種国家アメリカに対して、「そこ⁴⁷⁹では、マレーやネグリトの人々しかいない、しかし後者はせいぜい 5,000 人を超えるくらいである。全ては兄弟なのである *Allí no hay más que sino-malayos y negritos, pero éstos apenas pasan de cinco mil. Todos son hermanos*」と述べ、フィリピン人の殆どはマレーやネグリートで、領内には多くの伝統・習慣・方言が存在しているだけだとの自己規定を示している。つまりフィリピン国民を、ほぼ 1 つの人種または民族で構成されているとして捉え、フィリピン共和国をネーション・ステートとして見ようとしているのである。

国際的な人種差別に関しては、第 4 号「国々のモラル *La Moral de las Naciones*」(1899 年 12 月 10 日)で、「全ての社会のなかで、特にその人々自身に対し、近代化した人々のタイトルを我が物にした人々の社会⁴⁸⁰では、彼らは、彼らと同じ習慣や慣習を守らない人々を野蛮、反野蛮と呼ぶ *En todas las sociedades, principalmente en las de los hombres que se adjudican á sí propios el titulo de civilizados, y llaman salvajes ó semi salvajes á*

⁴⁷⁸ 史料も単数形となっている。

⁴⁷⁹ フィリピン

⁴⁸⁰ 欧米列強の社会

los que no observan sus mismos usos y costumbres」と述べている。そして、植民地間でも人種による格差があることを、同号「人種問題と捕虜たち」（1899年12月10日）で指摘している。そこでは、有色人種の植民地で反乱が起こる理由を、白人が植民地の人間を劣等人種として扱い、彼らの権利を制限し、宗主国の国民よりも大きな義務を課すからだ と非難⁴⁸¹、その他にも白人で構成される自治領と、有色人種で構成される植民地の違いを示している。

2-7. フィリピン委員会への異議

新聞ではアメリカ当局が正論として主張することに対して反論することで、アメリカの不当性を主張している。

2-7-(1). フィリピン委員会のステートメントへの反論

創刊初期から多くの記事が存在している。アメリカが民政化政策⁴⁸²をどんどん進めていく状況下で、最初の頃の反論を繰り返している記述も多い。しかし、フィリピン委員会の発表や行動に関しては、発表されたことに対してその都度反論を行うため、新しい反論も掲載されており、記事の量は極めて多い。この批判は主に3つに分けることができる。

第1は、アメリカ当局が作る議会・知事・政府への批判である。第7号「アメリカのシビル・コミッションのレポートへの異議申し立て I」（1900年1月25日）では、記事の題名通り、1900年1月2日に出された第1次フィリピン委員会へのレポートの反論を行った。その後第11号「大統領のメッセージ II」（1900年3月25日）では、アメリカ軍政下では、民政長官は意味を持たず軍政長官が権力を持つことを主張し、アメリカが裁判官まで任命している実態を述べて、「ヤンキー」が行政・立法・司法・税関・通信を持てば我々には何も残らないと批判している。第15号「革命家たちよ、警戒せよ！ ¡Alerta, Revolucionarios!」（1900年5月25日）では、民政と制限選挙について、具体的に以下の7点を挙げて批判している。:

1. マッキンレー大統領が議会に宛てたメッセージによると、地方改革はアメリカのフィリピン政策の基礎となるので、アメリカ人が宣言した州・町法には深刻な不適切と危機が含まれている。

⁴⁸¹ 換言すると、搾取するという意味である。

⁴⁸² 中央と地方においてアメリカ人指導により政府を設立する。

2. フィリピンにおいて選挙権を持つ人は制限される。アメリカでは制限選挙はないのに、なぜフィリピンでは行うのか。加えて、なぜフィリピン人はアメリカ国民ではなく、アメリカによって購入された領土の居住者として扱われるのか。
3. 市長の職に欠員が出た場合、議会ではなくアメリカ人州知事が後継者を任命するのはなぜか。
4. 助役や市町村会議員に就任するのに、26歳以上で信用があり、居住歴が1年以上で、英語と地方語を正確に読み書きする人物でなければならない理由は何なのか。地方語だけで十分ではないのか。
5. 地方行政の任務を遂行するのに、アメリカの支配を認める宣言にサインせねばならないのは祖国への裏切りだ。そうなれば、武装したフィリピン人に裏切り者として罰せられる。
6. 助役や地方議員の給料は、あまりにも高額である。
7. 当局が働いていないとみなした人物を、放浪者として逮捕・強制労働・国外追放ができる件は、働いていなくても簡単に肩書が持てる金持ちの子弟に有利である。

第30号「20世紀 規律の乱れた部隊！ ¡En el Siglo XX! La Soldadesca」（1901年1月10日）では、通貨政策にも触れ、フィリピン・ペソの価値をアメリカドルの半分にすることに反対をしている。

第2は、諮問機関内の人員構成の偏りである。この記述は当然ではあるが第2次フィリピン委員会が開始してから始まっている。1例を挙げると、第28号「タフト・コミッションの活動 Los Trabajos de la Comisión Taft」（1900年11月25日）において、9月1日に活動を開始した第2次フィリピン委員会がアメリカ人5人だけで構成され、ブリーフィングの際に参加するジャーナリストにフィリピン人がおらず、職員を任命する諮問委員会には、2人のアメリカ人と、アメリカ当局へ協力するフィリピン人のみが任命されていることを指摘している。

第3は、アメリカ人教師招致問題である。1901年にアメリカがフィリピンへアメリカ人教師を派遣することを決定したことに反発して、第34号「言葉、言葉、言葉 Words, Words, only Words⁴⁸³」（1901年3月10日）で、アメリカがフィリピンに600人のアメリカ人教師を送ることについて、その給料の高さと、それがフィリピン側の負担によって支払われることへの嫌悪を露わにしている。

⁴⁸³ これはハムレット2幕2場のセリフからとっているもので、タイトルは英語である。

2-7-(2). 国民投票

『フィリピナス・アンテ・エウロパ』は、フィリピン人の意思を知るために、フィリピン領内で「国民投票 plebiscito」を行うように、マッキンレー大統領やアメリカ当局に何回か呼びかけている。国民投票の主張は、創刊後の初期に数回登場し、その後は大統領再選直後に再度現れてくる。

第 8 号「アメリカのシビル・コミッションのレポートへの反論 II Contestación al Informe de la Comisión Civil Americana II」(1900 年 2 月 10 日)では、第 1 次フィリピン委員会が、反乱はタガログ 6 州のみで起こっていると述べていることを否定し、「フィリピン人たちは帝国主義者たちとの戦いを日々継続している。20 州もあるのだ! ⁴⁸⁴ los filipinos están sosteniendo diarios combates contra los imperialistas. ¡Nada menos que en veinte provincias!」と述べ、「反乱が国家的なものでないことが真実であるなら、どうして諸島全体の意見を聞くために国民投票をしないのか? 我々は国民投票を受け入れるだろうし、我々は無条件でその国民投票の決定を受け入れるだろう si es verdad que no es nacional la rebelión, ¿Por qué no proponen un plebiscito para oír la voluntad de todo el Archipiélago? Nosotros lo aceptaríamos y nos someteríamos incondicionalmente á lo que resolviera ese plebiscito」⁴⁸⁴と述べている。

第 14 号、第 15 号でも国民投票について触れており、第 15 号「イギリスとアメリカのメーソン支部すべてが我々の独立を支持している Inglaterra y Todos las Logias Masónicas de los Estados Unidos Apoyan Nuestra Independencia」(1900 年 5 月 25 日)では、アメリカのフリー・メーソン⁴⁸⁵ (メーソン) も、アメリカ政府がフィリピンで国民投票を行い、その結果を承認すべきとの意見を持っている旨が書かれている。

マッキンレー大統領再選後の第 26 号「時評欄」(1900 年 11 月 10 日)でも、新聞は国民投票に触れたが、再選したマッキンレー大統領が軍政から民政への移行に積極的になり、イラストラードスを抱き込んだ形で、民政を設立する政策に乗り出してからは、アピールすべき社会階層を失ってしまった。この時までは、新聞は国民投票を行えば、フィリピン領内のフィリピン人の多くがアメリカ支配に反意を示し、アメリカ支配の不適切性を明ら

⁴⁸⁴ 帝国主義と戦っている州は 20 州もあるという意味である。

⁴⁸⁵ フリー・メーソンはスペイン経由でフィリピンに入り、フィリピン人革命家に多大な影響を与えたといわれている。『フィリピナス・アンテ・エウロパ』はフリー・メーソンとは言わず、メーソンと記述している。

かにできるとして、時あるごとに国民投票をアピールしていた。しかし、政治と文字がわからない大衆に対して、どうやって国民投票を行うのかについては言及しなかった。

新聞の記述は国民投票という「民主・共和」の思想とアギナルドの「独裁」への支持の間で揺れていた。そこにアメリカ当局が、批判を受けていた軍政に代わって、形だけとはいえ、アメリカ内外の人々が納得する「フィリピン人と共に作る民政」の提示を行った。この民政設立はイラストラードスにも、受け入れられ、国民投票の主張はうやむやになってしまった。

2-8. アメリカ帝国主義への批判

新聞は、アメリカ批判を避け、反アメリカ帝国主義を掲げることで、アメリカ人全体からの反感を買わずに、反帝国主義的考えを持つ欧米人の共感を得ようと言う戦略をとった。したがって、これも繰り返し主張がなされている。

2-8-(1). アメリカ帝国主義と反帝国主義

第3号「新しい方向 Nueva Orientación」(1899年11月25日)では、明確に帝国主義とアメリカを分け、「我々はアメリカに抗っているのではなく、帝国主義に抗っている no vamos contra Norte-América, sino contra el imperialismo」と、そして同号「反アメリカ、違う。反帝国主義、そうだ。死ぬまで! Contra Norte-América, No. Contra el Imperialismo, sí, ¡Hasta la Muerte!」(1899年11月25日)ではやはり、フィリピン人はアメリカではなく、非人道的な帝国主義と戦っていると述べている。同様に第6号の「時評欄」(1900年1月10日)ではアギナルドがアメリカの捕虜を解放した理由を、アメリカではなく帝国主義者に対する防衛の戦争だからだとしている。

しかし実際にフィリピン領内でフィリピン人と戦っているのはアメリカ兵であるため、アメリカ兵に対しての言及は揺れている。たとえば、第3号の「フィリピンの暗い将来 帝国主義支配の下で (結論) Negro Porvenir de los Filipinos bajo la Dominación Imperialista (Conclusión)」(1899年11月25日)では、非社会的行動をとるアメリカ兵について言及し、アメリカ兵のことを「帝国主義の兵士たち los soldados imperialistas」と呼んでいる。第30号「20世紀! 規律の乱れた部隊」(1901年1月10日)の前半では、アメリカ兵との戦いの悲惨な状況が描かれており、戦場や占領地などでのアメリカ兵の残虐行為に怒りの目を向けている。帝国主義と戦うとしながらも、実際には一般のアメ

リカ兵たちと戦わねばならない論理矛盾に対しては、革命に対して敵対行為を働くもの全てを「帝国主義に属する者、または組織」とすることで、解決している。

アメリカ帝国主義批判は、大統領選挙前にかなり多く見られる。これはこの時期にフィリピン独立という観点からマッキンレー大統領を攻撃するためには、マッキンレー大統領を帝国主義者としてラベリングして攻撃した方が、国内外の人々に理解しやすいからである。第 10 号「帝国主義に抗うアメリカ合衆国 Norte-América contra el Imperialismo」(1900 年 3 月 10 日)では、アメリカ帝国主義に対する『フィリピナス・アンテ・エウロパ』の姿勢を明確にしている。これをまとめると、以下の 7 点になる：

1. 帝国主義で利益を得るのは、労働組合、軍の上官、一部の民間人で、アメリカには不利益をもたらす。
2. 帝国主義は時が経てば、ミリタリズムに発展する可能性もある。
3. もし国家間戦争⁴⁸⁶が勃発すれば、フィリピン人はアメリカを助ける代わりに、その戦争をアメリカ支配を揺るがすチャンスとして利用する。
4. アメリカ保護の下の独立によって、フィリピン人はアメリカにアドバンテージを渡す。
5. クリーヴランド、シャーマン、コックラン⁴⁸⁷は帝国主義を非難し、ブライアンを反帝国主義の武器として選んだ。
6. 戦争による汚職で金持ちになる一部の人々が、帝国主義を支持している。
7. フィリピン人は、勝利はわが手にあると考えるべき。

次の第 11 号、「帝国主義政党によって犠牲にされたアメリカ合衆国」(1900 年 3 月 25 日)では、アメリカ人に向けて、「アメリカがミスター・マッキンレーとその子分たちの見当はずれによって犠牲者にかえられている *Que la República norteamericana⁴⁸⁸ se está convirtiendo en victim de los desaciertos de Mr. Mac Kinley y secuaces*」と述べ、アメリカもまたマッキンレー大統領とその子分たちの被害者で、人的・金銭的被害を蒙っている

⁴⁸⁶ ここでは、義和団の乱(1900 年 6 月 20 日～1901 年 9 月 7 日)を指していると思われ、アメリカが義和団の乱に出兵すればと言いたかったのであろう。

⁴⁸⁷ 記事には苗字しかないが、元アメリカ大統領のクリーヴランド、反トラスト法を作ったジョン・シャーマン John Sherman 元国務長官、下院議員だったウィリアム・バーク・コックラン William Bourke Cockran であると考えられる。彼らの名前はこの新聞の記事内で散見される。

⁴⁸⁸ 直訳するとアメリカ共和国となる。スペイン語は言葉の重複を嫌うこともあり、デ・ロス・レイエス及び『フィリピナス・アンテ・エウロパ』は記事の中で、アメリカのことを、度々、「República (共和国・共和政体)」と呼んでいた。

と、アメリカ国内の反帝国主義者にもアピールを行っている。第 13 号「スアン・タガログの反帝国主義キャンペーン ヤンキーの帝国主義に対して抗うキャンペーン I リサールの記念に 絶対にない 絶対にない 絶対にない! Campaña Anti-Imperialista de Zuan Tagalog. Campaña contra el Imperialismo Yankee I. Á la Memoria de Rizal. ¡Jamás, jamás, jamás!» (1900 年 4 月 25 日) と、第 14 号「ヤンキーの帝国主義に対するキャンペーン II リサールの記念に 死か自由か! Campaña contra el Imperialismo Yankee II. Á la memoria de Rizal. ¡Muertos ó Libres!» (1900 年 5 月 10 日) では、帝国主義を批判した記事を書いており、これら全てが、アメリカ大統領選挙を見据えた、マッキンレー大統領へのネガティブ・キャンペーンであった。

マッキンレー大統領の再選後の第 26 号の「戦争! 今のところは 今のところだけは! 不正が勝った ¡Guerra! Por Ahora ¡Solo por Ahora! Triunfó la iniquidad」(1900 年 11 月 10 日) では、ブライアンの敗因を、アメリカの多数を占めるトラストと金本位制の支持者たちと戦ったからだと分析し、マッキンレー大統領の勝利は、アメリカ国民がマッキンレー大統領の帝国主義を支持した結果ではないことを暗に示し、反帝国主義が敗北したのではないと主張した。そして同号、「ヤンキーたちの野蛮さ 香港のフィリピン中央委員会⁴⁸⁹委員長のエミリアノ・リエゴ・デ・ディオス將軍へ」(1900 年 11 月 10 日) では、ティニオからリエゴ・デ・ディオスに宛てたの手紙を紹介した。その手紙でティニオは比米戦争の性質を、「私は帝国主義者たちと反帝国主義者の間で大きな戦争が始められたように思う Veo empeñada una lucha grande entre imperialistas y anti-imperialista」と述べ、フィリピン人はアメリカ建国の理念を尊重し、独立のためには 10 年でも戦うという主張を展開した。

当時アメリカにも反帝国主義同盟などがあり、反帝国主義を掲げる人々が欧米にもいたことから、革命側がアメリカ建国の理念に共感しており、彼らは反アメリカではなく、反アメリカ帝国主義者だと主張する論陣を張った。

2-8-(2). 帝国主義アメリカの搾取の構図

新聞ではアメリカ帝国主義の商業問題と労働問題も論じている。そしてこの 2 つの問題を扱うことで、アメリカがフィリピンをいかに搾取しているかを非難している。

第 3 号「フィリピンの暗い将来 帝国主義支配の下で (結論)」(1899 年 11 月 25 日)

⁴⁸⁹ 香港委員会

では、フィリピン人の企業家や地主がアメリカ人の言いなりになるのではないかと懸念し「後者⁴⁹⁰のほとんどは商業問題には立ち入らなかった。商業に従事していたわずかな人々が、大きなライバルであった。ヤンキーたちはしばしば、略奪の方法について言い訳をするために、*商業界は血も涙もない*と述べる *éstos casi no se metían en asuntos de comercio, y los pocos que se dedicaban á él, eran tremendous rivales. el comercio no tiene entrañas, dicen los yankees con frecuencia, para disculpar sus procedimientos de rapiña*」と述べ、アメリカ人商人は利益のためには何でも行おうと非難している。また、その血も涙もない商業界のために、「労働者 *los obreros*」が何度もストライキを宣言するだろうと予想し、サンディカリストにアピールをしている。第 10 号「フィリピン諸島での帝国主義政策（フィリピンの地方からの手紙） *Politica Imperialista en Filipinas (Carta del Campo Filipino)*」（1900 年 3 月 10 日）では、将軍たちや軍人たちはアメリカの一部の商人たちと結びつき、商人たちは軍の商品として割り当てられたからとして関税を支払わず、武力すら利用することがあると述べ、フィリピンにおける軍と商の癒着の構図をアピールしている。

第 19 号「ヤンキーの商人たちが我々の商人たちを踏みにじる *Los Mercaderes Yankees Empiezan á Atropellar á los nuestros*」（1900 年 7 月 25 日）では、ヤンキーの商人が、サン・ミゲールのビール工場 *La Fábrica de Cerveza de San Miguel*⁴⁹¹ に関して悪い噂を流して追い落としを図っていると主張し、同号「リオ・パッシング *Rio Pasig*⁴⁹²」のサインがある記事「マニラのプレスが述べないこと *Lo que no dice la prensa de Manila*」（1900 年 7 月 25 日）では、マニラでは多くのアメリカの商會が設立されたことを述べた後で、アメリカの実態を「要するに、星条旗は、文明のシンボルからは程遠く、それ一重に、搾取・放蕩・抑圧のシンボルなのである *En fin, la bandera estrellada, lejos de ser simblolo de civilización, sólo lo es de explotación, libertinaje*⁴⁹³ *y opresión*」と皮肉っている。

ここでは公正な競争をしない一部のアメリカ人と、アメリカ軍の癒着、フィリピンおよ

⁴⁹⁰ 前の文からこの後者とはスペイン人たちのことである。

⁴⁹¹ 1890 年に設立。その後フィリピン最大のビール・メーカーに成長する。サン・ミゲールは『フィリピナス・アンテ・エウロパ』に少なくとも 2 回は広告を出している。

⁴⁹² スペイン語でパッシング川のこと。パッシング川はマニラを流れる川である。このペンネームからも皮肉が読み取れる。

⁴⁹³ 史料通り。

びフィリピン人への搾取が書かれ、労働問題とも絡めながら⁴⁹⁴、アメリカ支配がいかにも墮落して不当なものかを世界に対して主張している。

3. 宗教問題と思想

宗教問題と思想は、デ・ロス・レイエスの主張がにじみ出ているものが多い。

3-1. 宗教問題

宗教問題は、この時代のフィリピン人にとっても重大な問題であるので、多くの記事が掲載された。

3-1-(1). キリスト教徒としての神の摂理と信念

新聞のみならず、フィリピン革命を分析するにあたって、約 300 年のスペイン統治時代を通して、フィリピン諸島に広く深く浸透していったキリスト教の影響を無視することはできない。この新聞でも、キリスト教を基盤にした宗教観念がにじみ出ている場所が随所に見られる。しかし、新聞は科学的考察や政教分離を主張する世界の潮流を考慮し、この 2 つを重要視していることを強調したい意図も持っていた。したがって、新聞の記述の中には、科学的思考と宗教的感情の整合性に対して、多少の無理がある部分が散見される。宗教問題としては、次項で述べる修道士問題の方が重大であったこともあり、その他にも、革命運動が劣勢に立たされたことから、そちらの方の主張に紙面を割かれ、神の摂理や信念は 1900 年終わりごろにはあまり主張されなくなった。

第 1 号「勝利は我々にかかっている 我々を打ち負かすのは不可能だ *El Triunfo Depende de Nosotros. Es Imposible que nos vengzan*」(1899 年 10 月 25 日)では、「信念は奇跡を起こす。同様に信念を欠いているであろうものは、何の価値もないだろう。最初のうちは誰もカティブネロ⁴⁹⁵を何がしか重要視していなかったのにもかかわらず、彼らは勝利した。なぜなら堅固な信念があったからだ *La fe hace prodigios, así como el que carezca de ella no irá á ninguna parte. Los Katipuneros triunfaron á pesar de que nadie les daba importancia alguna al principio, porque tenían inquebrantable fé*」と信念と奇跡を強調した。第 2 号「アメリカ合衆国議会のコミッションの見解」(1899 年 11

⁴⁹⁴ 労働問題とアナルコ・サンディカリズムに関しては、アナーキズムの部分で触れる。

⁴⁹⁵ カティブネロは、カティブナーンのメンバーを意味する。

月 10 日) では、「フィリピン人よ、君たちは帝国主義に期待せずに、それ⁴⁹⁶を心得ておけ。
Filipinos, sabedlo, nada esperéis de los imperialistas」では「そして帝国主義者は、フィ
リピンの併合を達成するのだろうか？ おお！その時に神の正義は作り話になるのであろ
うか。そんなことはない；フィリピンの国民は神の摂理を信じる *¿y conseguirán los
imperialistas la anexión de Filipinas? ¡Ah! Entonces sería un mito la justicia de Dios.
No; el pueblo filipino tiene fe en la Providencia divina*」と述べている。このように、記
事の行間からは、キリスト教をベースとした信念が垣間見えていた。

第 17 号「フィリピンの教会 III *Iglesia Filipina III*」(1900 年 6 月 25 日) では、デ・
ロス・レイエス自身が記事を書き、「神は存在する！ どうして神を信じない人が存在する
のか、私には考えられないのは事実である。 *¡Dios existe! En verdad no concibo como⁴⁹⁷
haya personas que no crean en Él⁴⁹⁸*」と述べ、神は時にバサラ⁴⁹⁹、ブラーマ、アラーな
どの別の名で呼ばれるとしながらも、彼が国外追放などで辛かった時期に「神は私の唯一
の安らぎだった *Dios fué mi único consuelo*」と、彼の心の中にある神への絶対的な帰依⁵⁰⁰
を明確にしている。後に、デ・ロス・レイエスがフィリピン独立教会設立に動くことを考
えれば、彼が編集する新聞の中に「神の摂理」と「信念と奇跡」の記述が当然のことのよ
うに現れてくるのは、仕方のないことでもある。スペイン人、またはスペインによって生
活から考え方までカトリック化されたフィリピン人読者⁵⁰¹にとって、疑問も持たずに自然
に受け入れることのできる主張であったはずである。デ・ロス・レイエスや新聞は、フィ
リピン人の独立やフィリピン国家を、キリスト教のコンテクストの中で、「本来あるべき姿
＝神の摂理」と捉え、自分たちの持つ正義を「神の正義」と捕らえており⁵⁰²、そしてこの
考えが、デ・ロス・レイエスが編集する『フィリピナス・アンテ・エウロパ』の土台とも

⁴⁹⁶ 神の正義

⁴⁹⁷ *Cómo* として訳す。

⁴⁹⁸ 大文字は史料通り。*Dios* (神) のこと。

⁴⁹⁹ フィリピンではバタラとも呼ばれる。ここではフィリピンの話というよりも、一般論
として語っている。

⁵⁰⁰ 帰依は基本的に仏教用語だが、ここでは「すぐれたものに対して、全身全霊を持って
依存する」意味で使う。

⁵⁰¹ ムスリムのリアクションに関しては史料がないので不明である。

⁵⁰² ウースターの本に掲載されている香港のホセ・バーサの 1898 年 5 月 16 日付けの手紙
にも「神の摂理は、我々が我々の独立を確保することのできる場所に、我々を置いてくれ
Divine Providence places us in a position to secure our independence...」[*Worcester
2010: 23*] という記述があり、これは当時のフィリピン人としては当たり前の主張であ
ったと思われる。

なっているのである⁵⁰³。しかし、政教分離の項でも述べるが、キリスト教の神の摂理と戦争・政治問題を同じ土俵上に上げて語ろうとしたことは、ムスリムの存在を無視したことにもなり、また、この新聞記事の信頼性を減ずることにもなった。

3-1-(2). 修道士問題と聖職者の現地人化

スペイン人修道士問題は、新聞と言うよりも、いわゆる「フィリピン革命」が起こる大きな引き金の1つであった。聖職者の現地人化、つまり当時スペイン人修道士が聖職を牛耳っていた状況を打破し、聖職をフィリピン人の手に取り戻すことに関しては、創刊号（1899年10月25日）の「宗教問題 La Cuestión Religiosa」から主張を繰り返している。この記事ではフィリピンのカトリックの特殊性に触れ、聖職をフィリピン人に「戻す」ことを要求している。この記事をまとめると以下の3点になる：

1. ロンドンから教皇代表が、スペイン人修道士の利権確保と、司教や司祭職のアメリカ人聖職者への委譲のために、マニラに来るとの手紙が来た。
2. もしバチカンがフィリピン人聖職者の存在を認めなければ、我々は分派を作る。
3. ロンドンのある人物がデ・ロス・レイエスのパンフレットを読んで満足し、プロテスタントの監督にならないかと申し出た。その人物は、フィリピンの宗教がダトゥー⁵⁰⁴やバタラ⁵⁰⁵の伝統の上に成り立っており、迷信を捨て科学的方向に向かいながらも、伝統を守ろうとしていることを賞賛した。

この後、第3号「破門された司教総代理 終わりの始まり Un Vicario General Excomulgado. Principio del Fin」(1899年11月25日)では、アギナルドを支持して行動を共にしている聖職者のグレゴリオ・アグリパイ Gregorio Aglipay (アグリパイ)⁵⁰⁶の離教示唆と、アグリパイ支持、そしてデ・ロス・レイエスがマドリッドでの教皇大使と話し合いを行った様子が述べられている。その後スペイン人マニラ大司教ベルナルド・ノサ

⁵⁰³ 新聞は人・国家の独立についてはくどいほど述べているのに、神の下の平等ということにはあまり触れていない。新聞は支配・被支配、人種差別には敏感ではあるが、神の下の平等には言及しない。

⁵⁰⁴ ダトゥーは、スルタンの下に位置するムスリムの族長

⁵⁰⁵ フィリピンの神話の神

⁵⁰⁶ アグリパイ(1860-1940)は、フィリピン共和国側について活動したフィリピン人司教。1899年5月5日にフィリピンの聖職界を仕切るスペイン人のノサレダ・マニラ大司教から、破門された。彼は後に、デ・ロス・レイエスらが設立したフィリピン独立教会に参加する。

レダ・イ・ビリャ Bernardino Nozaleda y Villa (ノサレダ)⁵⁰⁷の批判も続いている。新聞はフィリピン革命における宗教問題の原点は1872年にあるとみなしており、第9号(1900年2月28日)では、通常より多い11頁半に渡って「祖国の殉教者たちへ *Á los Mártires de la Patria*」という特集を組み、1872年2月28日を強調して、「ゴン・ブル・サ」を追悼している⁵⁰⁸。しかし3人のフィリピン人聖職者の処刑日は2月17日であり、なぜ28日を強調しているのかは不明である。

このような経緯があるにもかかわらず、スペイン支配が終わった後の1899年5月27日になっても、スペイン人聖職者のノサレダがマニラの大司教に任命されたことは、聖職者の現地人化、つまりフィリピン人化を唱える人々の怒りを助長させたことは想像にかたくない。したがって、新聞のスペイン人修道士への恨みは激しく、第11号「帝国主義政党によって犠牲にされたアメリカ合衆国」では、アメリカ当局のスペイン人修道士への生ぬるい対応を批判し、翌第12号(1900年4月10日)から第21号(1900年8月25日)まで、毎回、宗教問題を取り上げる記事を掲載し、第14号「ベールの端(宗教問題) *La Punta del Velo (La Cuestión religiosa)*」では、再度フィリピン人聖職者に向かって、スペイン人修道士の復権への警戒を呼びかけている。そして教皇がこの修道士問題を無視するのであれば、教皇にそむく、つまり自らバチカンとの関係を断つと述べている。

新聞はアメリカ当局がフィリピンの宗教界まで牛耳ることを恐れ、3月12日共和国首都付けのアギナルドの政令を、第13号「とても的を射た措置 宗教問題について *Medida Acertadisima sobre la Cuestión Religiosa*」(1900年4月25日)で掲載し、アギナルドの政府がどのような人物を聖職者として認めるのか、この政令に従わなかった人物がどう処罰されるのかを明確にした。この中で、スペイン当局のデ・ロス・レイエスへの差し押さえが起きてしまうが、それでもデ・ロス・レイエスは第16号「フィリピンの教会II」(1900年6月10日)の中で、聖書の言葉や解釈などを多く多用しながら、フィリピンのカトリシズムに関して彼の見解を述べる非常に長い記事を書いた。彼はブルターニュやバスクの比較的時代遅れのカトリシズムですら、フィリピンで修道士が教えるカトリシズムよりは進歩的だと批判し、フィリピン人のカトリック教徒に、「もし君たちが進歩の征服と君たちの古風な教義を調和させ、その君たちの古風な教義に風を入れて近代化するようにしない

⁵⁰⁷ ノサレダは、1902年2月までマニラの大司教(1889-1902)を務めたスペイン人聖職者。

⁵⁰⁸ フィリピン委員会のフィリピン人知識人へのインタビューでは、知識人たちは革命の発端を1872年だと述べている。

のなら *si no oreáis y modernizáis vuestras arcáicas doctrinas, armonizándolas con las conquistas del progreso*」、今いる多くの信徒たちを失うことになるだろうと警告している。第 17 号「宗教上のポイント Punto Religioso」では、デ・レテが自身の意見を掲載し、スペインからの宗教的分離を主張しながら、「文化的に洗練された国々の中で、個人の法的な独立を肯定するために不可欠とされる有名なエレメンツの 1 つは、*信教の自由*である *Uno de los elementos reputados como esenciales para afirmar la independencia jurídica individual en Los Estados cultos, es la libertad religiosa*」と、フィリピンの国家とフィリピンの新しい宗教界の在り方を示し、修道士の呪縛からの解放を求めた。

修道士がフィリピンにおいて強権を持ち続け、遅々として進まない聖職者の現地人化に対する打開策として、デ・ロス・レイエス⁵⁰⁹はフィリピン人聖職者を、プロテスタントに協力を仰ぐグループと、できる限りの権限を得るために教皇に嘆願に行くグループの 2 つに分けるようにと、第 19 号の「フィリピンの教会 V Iglesia Filipina V」(1900 年 7 月 10 日) で、フィリピン人聖職者たちにアドバイスしている。

スペイン統治期に、修道士が原住民から不当に奪い取ったとされる土地や財産の返還要求も、新聞の宗教問題でしばしば扱われるトピックであった。特に第 18 号あたりからはその主張が顕著になって表れてくる。第 18 号「修道士たちの財産 Las Propiedades de los Frailes」(1900 年 6 月 25 日)、そして第 21 号「不快なテーマ Tema Ingrato」(1900 年 8 月 25 日) では、「修道士たちの追放はもとより、我々は戦争の賠償、または、正当な返却として、土地をその合法的な持ち主に返却するために、そして教会に、彼ら⁵¹⁰が持って行ってしまった富を返すために、彼ら⁵¹¹の財産全てが没収されることを要求する *Más que la expulsión de los frailes, exigimos que como indemnización de guerra ó como justa devolución, se confisquen todos sus bienes para devolver los terrenos á sus legítimos dueños, y á las iglesias municipales, sus tesoros que se han llevado aquellos*」と述べて、修道士によって奪われた財産の回収が急務であることを主張している。

3-1-(3). プラシド・ルイス・シャペル教皇代理への批判

1900 年 1 月 24 日に、ローマ教皇の代理人としてニュー・オーリンズの司教であったシ

⁵⁰⁹ この記事には I.R. というサインがあるので、デ・ロス・レイエスだと思われる。

⁵¹⁰ 修道士たち

⁵¹¹ 修道士たち

チャペルが着任した。チャペル司教の名前は第 7 号から登場してくる。米西戦争期にフィリピンに存在していたスペイン修道士問題に、アメリカの司教がからんできたことで、比米戦争期にはスペイン人修道士問題と独立問題が複雑に絡み合うことになった。したがって、スペイン人が支配してきたフィリピンのカトリックを、アメリカとバチカンがどうするのか新聞の大きな論点の 1 つになった。

チャペル司教が登場するのは、第 7 号からで、同号「宗教問題について *Sobre la Cuestión Religiosa*」(1900 年 1 月 25 日)では、チャペル司教がフィリピンの宗教問題についてアレンジを行うことに触れながらも、まだ厳しい批判は行っていない。しかし、第 12 号の「貧しいフィリピン人聖職者! ¡Pobre Clero Filipino!」(1900 年 4 月 10 日)では、チャペル司教への批判を本格的に開始し、チャペル司教のみならず、チャペル司教の下に集まったフィリピン人聖職者たちへの落胆を表明している。そして、フィリピン人聖職者に対して、フィリピン人聖職者こそがフィリピンの聖職につくべきであり、自分たちの主張を伝えるためにバチカンに人を送れと呼びかけを行い、以下の 7 点を主張した：

1. シャペル司教の家で、反修道士を主張していたフィリピン聖職者たちが、反修道士を覆してシャペル司教側についた。
2. ローマとアメリカの助けを借りて、修道士たちがフィリピンで失った影響力を取り戻そうとしている。
3. フィリピン人聖職者よ、目を開けろ。シャペル司教はハバナの司教位を自分のものにし、他のアメリカ人高位聖職者に司教位を与えようとして、キューバ人に拒絶された。
4. すでに欧米のプレスは、シャペル司教がマニラの大司教の職にいるとしている。
5. フィリピン人聖職者は、フィリピンの司教と小教区を占める権利がある。
6. フィリピン人聖職者は、君たちの弁護と伝えるべきことを権力者に伝えるために、ローマに信頼のおける人物 1 人を送るべきだ。シャペルと修道士、ラザリスト会とイエズス会の策術を監視するためにも、送らねばならない。
7. マドリッドの教皇大使 *Nuncio de S. S. en Madrid* のナバ・ディ・ボンティフェ *Nava di Bontifé* は、デ・ロス・レイエスに、教皇がフィリピン人聖職者のために会議を開いた際に、教皇は特別な愛を原住民聖職者に対して感じており、その権利と決定全てにおいて、光る正義をデ・ロス・レイエスに出し惜しまない準備をしている、と述べた。

シャペル司教の下へ集まるフィリピン人たちへの嫌悪への表現はだんだん感情的になっていき、第 15 号「フィリピンの教会 I」(1900 年 5 月 25 日)では、「お願いだから！ ミスター・シャペルの下に卑劣なおべっかを使って行かないでくれたら *no vayan ¡por Dios! con asquerosas lisonjas al Sr. Chapelle*」と懇願している。シャペル司教に対しての非難も回を増すごとに過激になり、第 25 号「ローマのフィリピン人聖職者の代表たち *Los Representantes del Clero Filipino en Roma*」(1900 年 10 月 25 日)では、「シャペルよ、出ていけ！ *¡Fuera Mr. Chapelle!*」と述べ、第 30 号「宗教問題」(1901 年 1 月 10 日)では、シャペル司教がフィリピンで主教や修道士をその配下に置いていると非難している。そして、やはりシャペル司教に対して「出ていけシャペル猊下！ *¡Fuera Mons. Chappelle!*」と、厳しい調子で述べている。

マッキンレー大統領の再選後、フィリピン人聖職者がシャペル司教に流れていく様子と、それにリンクする形で現れる新聞側の焦りの増幅は、同第 31 号「愚行であろう *Sería una Burrada*」(1901 年 1 月 25 日)に、以下を記していることから推測できる：

マニラの新聞は、何人かのフィリピン人聖職者たちが、設立された政府⁵¹²を認め、政治に立ち入らないことに抗議し⁵¹³、彼らによれば、教皇のドクトリンに従うと、ヤンキーに説明を提示したと述べた。我々はそれを信じることを拒絶する。

Un periódico de Manila dice que algunos sacerdotes filipinos han presentado una exposición á los yankis reconociendo el gobierno constituido y protestando de que no se meten en politica, siguiendo las doctrinas del Papa según ellos. Nos resistimos á creerlo.

そして、第 34 号「マニラの恐怖 平和を好む人は何千となく革命に寝返っている *Horrores en Manila. Los Pacificos se Pasan á Millares á la Revolución*」(1901 年 3 月 10 日)で、「その間、修道士はその手柄を冷笑し享受する；もちろん以前は彼らの異臭を放つ手でスペインを手中におさめ、現在はすでにその圧力の下でアメリカを手中におさめてい *á todo esto el fraile se ríe y goza de sus hazañas; pues sí antes tuvo en sus hediondas manos á España, hoy ya tiene bajo su presión á América*」と、アメリカ支配下になっても修道士の問題は何も変わっていないことを皮肉っている。

⁵¹² フィリピン委員会によって作られた政府

⁵¹³ フィリピン委員会によって作られた政府に参加したいと抗議したという意味。

3-2. 暴力の容認

新聞の中には暴力を容認するような記述が散見される。

3-2-(1). アナーキズムと暗殺

ヨーロッパ在住経験のあるフィリピン人活動家の一部は、アナーキズムの影響を受けていると、アンダーソン [アンダーソン 2012: 99-118] やモハレス [Mojares 2006: 268-269] が述べている。アンダーソンはスペインでのアナーキズムには言及したが [アンダーソン 2012: 157-164]、アナーキズムがどのように「反植民地主義」——つまりフィリピン革命——に影響したのかについては言及していない。また、デ・ロス・レイエスとアナーキズムにも言及しているが [アンダーソン 2012: 270-276]、デ・ロス・レイエスとアナーキズムとの邂逅を描いているに留まっており、革命時のデ・ロス・レイエスの思想にどのような影響があったのかについては分析されていない。したがって、ここでは、新聞の中で扱われているアナーキズムとデ・ロス・レイエスについて論じてみたい。

『フィリピナス・アンテ・エウロパ』の中にも、何回かアナーキスト、アナーキズムに関する記述がある。しかし、1つの記事としてアナーキズムを取り上げ、アナーキズムを称賛することはしていない。この時代のラディカルなアナーキストは爆殺などのセンセーショナルな方法で、要人を暗殺していたため⁵¹⁴、この新聞ではアナーキズムを便宜的に、フィリピンの独立に反対する人々への脅しのネタに使っていた。

第7号「皆が一つにまとまる Todos Unos」(1900年1月25日)でデ・レテは、マツキンレー大統領を「見捨てられた皇帝 El emperador del desvalido」と呼び、「人種の憎悪の中で、それぞれのグループ特有の利益対立の中で、支配の野望の中で、そして将来の混乱と抑制できない無政府状態の恐怖の中で、帝国主義の政治家たちと帝国主義の新聞たちは悪意の言い訳を探している En ódios de raza, en antagonismos de intereses peculiares á cada agrupación, en ambiciones de mando, en temores de futuros disturbios y anarquía incoercible, buscan pretextos á la mala fe, políticos y periódicos imperialistas」と、つまり帝国主義の政治家と新聞は暗殺を恐れて、自己の行動の正当性を主張していると述べた。その後、フィリピン国内の富裕層がアメリカ支持をあからさまに示し始め、第20号「暴君を殺すのは正当か? ¿Es Lícito Matar al Tirano?」(1900年

⁵¹⁴ 皮肉なことに、マツキンレー大統領は1901年9月、自称アナーキストのレオン・フランク・チョルゴッシュ Leon Frank Czolgosz によって暗殺されている。

8月10日)では、新聞は、アナーキストによる要人殺害を容認するような、以下の4点の発言をして、マッキンレー大統領を脅している：

1. 社会に危害を加えるものを阻止するのは正当なので、サント・トーマス⁵¹⁵の神学者やモラリストは、暴君を殺すのに肯定的である。
2. フィリピン、キューバ、プエルトリコで、アメリカ軍を打ち負かさなければ、彼らに何の資源が残るのか？ 最近では、確実に安上がりである点で、キューバ人がマッキンレー大統領の殺害をたくらんだ。しかし、我々はそのような乱暴な方法を受け入れることはできない。
3. しかし、絶望したフィリピン人は厄介な存在になるだろう。国外追放されたカティプネロたちは、外国の刑務所でアナーキストと知り合った。脅迫を実行する人を成り行きで指名するよりも、これらの人々をわずかな金で雇い、実行してもらった方が安楽である。
4. マッキンレー大統領がこの警告を真剣に受け取らないのなら、それでもいい。今は乱暴で行き過ぎたことをやるのも必要である。

これらの記述は、刺殺・爆殺を示唆し脅しは使っているが、記事内で新聞は基本的にアナキズムによる暴力を否定している。しかし、ある意味で、無政府主義者に殺害されてしまうマッキンレー大統領の死を予言しているような記事ではあった。

第30号「時評欄」(1901年1月10日)では、「マドリッドのアナーキストたちの機関誌で、有名な出版物の『レビスタ・ブランカ』⁵¹⁶は、デ・ロス・レイエスのサインがなされた讚美の伝記とともに、我々の忘れることのできない Dr. リサールのすばらしい肖像を掲載した *La notable publicación Revista Blanca, órgano de los Anarquistas de Madrid, publica un excelente retrato de nuestro inolvidable Dr. Rizal, con una laudatoria biografía que lleva la firma de Isabelo de los Reyes*」と、デ・ロス・レイエスとアナーキストとの交流を誇示している。その前号の第29号「カティプーナンという宗教 イサベロ・デ・ロス・レイエス著 *La Religión del “Katipunán” Por Isabelo de los Reyes*」(1900年12月25日)で、デ・ロス・レイエスは自身の書いた記事の中で、彼の理想としているアナキズムを、「哲学的なアナキズム *anarquismo filosófico*」という言葉で表してい

⁵¹⁵ 1611年マニラに創設されたドミニコ会の学校。現サント・トーマス大学。

⁵¹⁶ スコットによると、デ・ロス・レイエスは『レビスタ・ブランカ』の編集員でアナーキストのフェデリコ・ウラレス *Federico Urales* と知り合いであった [Scott 1992: 15]。

る：

筆者は、資本⁵¹⁷と労働者の間で少しの愛と正義で解決されると（筆者が）述べる社会問題を扱う。とりわけ、唯一の救い主として（筆者が）考える労働への愛によってである。（筆者が）公平にそれを行う（社会問題を扱う）としても、（筆者は）貧しい人々にもっと傾き、哲学的なアナーキズムによって優しく触れられたような解決を（筆者は）推奨する。

También trata el autor la cuestión social que dice se resolvería con un poco de amor y de justicia entre el capital y el obrero, y sobre todo, por el amor al trabajo que considera como el único salvador de todos. Aunque lo hace con imparcialidad, se inclina más á los pobres y preconiza soluciones acariciadas por el anarquismo filosófico.

この発言からは、アナルコ・サンディカリズムもしくは、単純にサンディカリズムの影響が感じられる。デ・ロス・レイエスがバルセロナにいた時代は労働運動が盛んであり、彼がその影響を十分に受けたのは、後にフィリピンで労働組合を作ったことでもわかる。filosóficoには「哲学的な」という意味のほかに「達観した」という意味もあり、この言葉の中にラディカルな暴力がからむようなアナーキズムからは、一線を画したいというデ・ロス・レイエスの思いも込められている。

アンダーソンは、1927年3月30日のデ・ロス・レイエスが述べたとされる記事を引用したスコットの論文を引用して、デ・ロス・レイエスがスペイン人アナーキスト、ラモン・センパウ Ramón Sempau を尊敬し、アナーキスト、ニヒリスト、ボルシェビキを評価していることを示している〔アンダーソン 2012: 274-275〕。しかし、この発言は、彼が新聞を発行していた時から25年以上も過ぎてからのものである。スペイン人アナーキストが、デ・ロス・レイエスを支援し、彼らと交流したのは、『フィリピナス・アンテ・エウロパ』からも確認できる。しかし、アンダーソンのこの時期のデ・ロス・レイエスに対する言及は、殆どがスコットの論文からの引用であり、それは上記1927年の記事を基にして書かれたものである。スコットが利用した記事の原文にあたることはできなかったが、リファレンスにはスペイン語のタイトルとスペイン語の新聞名が記されている。デ・ロス・レイエスがアナーキストとボルシェビキを並列して評価したのは、以下の2点、1) 1927年当時すでに国会議員となっていたデ・ロス・レイエスの、過去に世話になったスペイン人

⁵¹⁷ 新聞は資本家ではなく、el capital（資本）という単語を使っている。

に対する配慮と、2) フィリピンで労働組合を結成したデ・ロス・レイエスの、ソ連の共産党への配慮——があったと推測される。

アンダーソンの著書は、アナーキズムを際立たせるために、意図的にアナーキズムのセンセーショナルで急進的な部分を組み込み、フィリピン人革命家のいたヨーロッパがいかにかアナーキズムの嵐の中にあったかを強調した。確かにデ・ロス・レイエスは、新聞発行の時点では、複数の記事で労働問題などにも触れてはいるが、アナーキズムと関連するアナナルコ・サンディカリズムに関しては、「示唆」⁵¹⁸という形で留まっている。しかも、当時デ・ロス・レイエスは、フィリピン人の国家建設を望んでいた時期であり、国家と政府を望む彼の主張と、究極の個人主義のアナーキズムとは対極に位置するものであり、アナーキズムは便宜的に使ったに過ぎない。

デ・ロス・レイエスが新聞を出版する前にアナーキズムに出会い、アナーキストの援助を受け親交を深め、個人的に尊敬したことは確かであろうが、新聞発行時にアナーキズムそのものを無条件で支持していたと考えるのは難しい。当時の彼はあくまでも、フィリピン国家の下での、人々の平等や、労働運動を念頭に置いていたはずであり、その結実がフィリピン初の労働組合につながったと考えるのが自然であろう。

3-2-(2). 戦争の容認

戦争容認の記述は、アギナルド「逮捕」特集の第 35 号まで散見され、フィリピン人が戦争を行うことを擁護している。アナーキズムは究極の個人主義であるが、戦争は国家や政府が決定するものなので、本稿ではアナーキズムと暴力は完全に分けて考えたい。帝国主義の部分で述べたように、新聞はフィリピン共和国が、アメリカ帝国主義に対して戦争を行っていると考えているため、比米戦争をアメリカの侵略に対するフィリピン人の防衛として捉え、フィリピン人が行っている戦争に対し容認の姿勢をとっている。この姿勢は

⁵¹⁸ アンダーソンが参考にしたスコットの本には「イサベロは彼の新しい友人(サンパウ)によって仕掛けられた抗議運動に熱意を持って参加した。路上デモではリボルバーを持って、そして1度は鼻血を出したこともあった *Isabelo enthusiastically joined the protests mounted by his new friend, carrying a revolver in street demonstrations and once getting his nose bloodied*」〔Scott 1992: 15〕となっているが、アンダーソンはこの部分の直接的な引用を避け、「イサベロはリボルバーで武装した上で当時の急進的デモに運よくも飛び込んだが、誰も撃つことなかった。とは言え、時には顔面に一発を食らい鼻血をだすことはあった」と文章を変え、「誰も撃つことはなかった」〔アンダーソン 2012: 276〕と独自の一言を付け加えている。

第1号「我々のモットー」(1899年10月25日)から一貫して変化がない。しかも、時には戦争を容認するタイトルを記事にあからさまにつけている場合もある。

第7号「戦争でのアドバンテージ Ventajas de la Guerra」(1900年1月25日)では、新聞が戦争を支持する理由を以下の2点、1)戦争によって社会が是正される、2)副次的にインフラや商工業が発達する——だと述べている。第13号「スアン・タガログの反帝国主義キャンペーン ヤンキーの帝国主義に対して抗うキャンペーン I リサールの記念に 絶対がない 絶対がない 絶対がない！」(1900年4月25日)では、「勝利のために我々が必要とするたった2つの条件とは、軍事力と法である *Dos condiciones únicas necesitamos para vencer: La Fuerza y el Derecho*」とし、フィリピン人が戦い続ければアメリカ人は仕方なくフィリピンで戦い続け、海外の国々は、法によって国際的にフィリピン共和国が侵略をうけたと受け止めて、フィリピンの政治・司法・外交官を受け入れてくれるだろうとの、希望的観測を述べている。

第16号「アギナルドと新しいアメリカのコミッション」(1900年6月10日)では、「戦争で戦争をするという我々の考え *nuestras ideas de hacer la guerra con la guerra*」からプロパガンダを行っているのだと主張し、そして第17号「なぜ我々は戦争の支持者なのか *Por qué Somos Partidarios de la Guerra*」(1900年6月25日)では、以下4点を述べている：

1. 精神と知性が貧弱な人や、高貴な感情に欠ける人は、どんな犠牲を払っても戦争を支持することが理解できない。彼らは、結局は侵略者の甘言に乗せられて、領土をだまし取られる。
2. 我々はどんな犠牲を払っても戦争を望む。なぜなら我々は戦争によって独立を手にすることしか期待できないからだ。
3. 我々は今独立を得ようとして、いろいろな犠牲を払っている。
4. 我々は神の正義を信じる。

つまり、革命家には知性があり尊い感情を持つからこそ、神の正義を信じ犠牲を承知で戦争しているのであって、無知ゆえに、そして野蛮ゆえに戦争をしているのではないと強調している。

第25号「2,500部！ ¡2.500 Ejemplares!」(1900年10月25日)では、「我々は高貴な戦争を明示する *Predicamos una guerra noble*」、第33号「必ず独立 *Independientes con Toda Seguridad*」(1901年2月25日)では、スペインの新聞『エル・インパーシア

ル *El Imparcial*』の記載を引用し、フィリピンでは特定の状況下で、戦争が肯定的な力として見なされていると述べ、置かれた状況によっては肯定される戦争もありうると主張している。そして、アギナルド降伏後、最終第 36 号「新しいエレメンツの必要性 マドリッドのフィリピン委員会の重要なセッション *Necesidad de Nuevos Elementos. Sesión importante del Comité de Madrid*」(1901 年 6 月 10 日)では、「マドリッドのフィリピン共和国委員会⁵¹⁹は、戦争の継続か独立の中で、路線を堅持することを懇願する *el Comité republicano filipino de Madrid solicita una orientación firme en la prosecución de la guerra ó de nuestra independencia*」と戦闘継続の姿勢を示している。

新聞では戦争を容認する記述が散見され、比米戦争を擁護している。戦争の肯定と継続はこのように、度あるごとに紙面に現れ、第 1 号から最終号まで一貫している。逆に戦争を肯定しなければ、マニラでアメリカ併合を支持し戦争終結を求めるフィリピン人知識人と、差別化できなくなるとも言える。新聞は戦争を容認するとともに、容認することで自身の存在を差別化した。ここで新聞がベースとしているのは、聖戦論ではなく、あくまでもキリスト教をベースとした正戦論の中にある「戦争のため法 (*jus ad bellum*)」〔木村 2003: 111〕⁵²⁰である。

3-3. スペインとの関係、スペイン共和主義者・自由主義者の共感

スペインとの関係に関しては、創刊期は革命運動側が拘束していたスペイン人捕虜問題が大きかったが、その後はスペイン自由主義者との交流へと記述が変化する。1899 年 3 月 4 日、左派のプラクセデス・マテオ・サガスタ *Práxedes Mateo Sagasta* (サガスタ)⁵²¹ 首相の時代が終わり、首相が右派に移った。政権と言う責任がない分、左派は比較的自由にフィリピン人と付き合うことができた。アンダーソンは、「スペイン領アメリカにおける

⁵¹⁹ マドリッド委員会

⁵²⁰ 木村正俊は「正戦と聖戦」の中で、「戦争のため法」は戦争が正しい戦争となるための条件と、次の 5 つをあげている：1) 正しい理由の存在 2) 正当な政治組織権威による戦争の発動 3) 正当な意図や目的の存在 4) 最後の手段としての軍事力の行使 5) 達成すべき目的や除去すべき悪との釣り合い〔木村 2003: 111〕。これら全てを『フィリピナス・アンテ・エウロパ』は主張している。比米戦争におけるフィリピン側の主張としては、1) は人間の基本的権利である自由を守り、2) はフィリピン共和国が主体となった発動をしており、3) は独立が最終目標であり、4) はアメリカが最初に戦争を仕掛けたのであり、5) は達成すべき独立は何を差し置いても重いとなる。

⁵²¹ サガスタ (1825-1903) は、7 回、スペインの首相になった (1871-72、1874、1881-83、1885-90、1892-95、1897-99、1901-02)。

ナショナリストによる独立運動は、当時流行していた自由主義と共和主義という二つの思想抜きには起こりえなかった」〔アンダーソン 2012 : 2〕と述べているが、これはフィリピンにも当てはまる。『フィリピナス・アンテ・エウロパ』が発行されていた時代は、スペインはすでにフィリピンの宗主国ではなかったが、思想面でのフィリピン人への影響はすぐに消える訳ではなかった。

新聞は第1号「時評欄」(1899年10月25日)で、スペイン人捕虜を解放と引き換えにスペインからの援助を期待すると述べ、第9号「時評欄」(1900年2月28日)で、マドリッド委員会がスペイン人赤十字のビリャルボス Villalbos 侯爵とマドリッドで会食し、スペイン人捕虜解放交渉を行う準備をしていることをアピールした。第4号「残虐行為」(1899年12月10日)では、スペイン支配の方がアメリカよりもましであるという主張も行っている。この記事では、スペインですら、差し押さえた財産を所有者に返却しているのに、アメリカ当局は公的に略奪を行っていると主張し、第6号「大統領のメッセージ El Mensaje Presidencial」(1900年8月10日)でも、スペインが第2フェーズ以前にフィリピンに自治を認めていたら、フィリピンはまだスペインの保護下にあったであろうと述べ、やはりアメリカよりスペイン支配の方がましであったという主張がなされている。こうしてスペインは、アメリカとの比較の対象として利用された。

ブルメントリットは第6号と第8号「ヨーロッパの利益はフィリピンの独立を要請する オーストリア人教師フェルディナンド・ブルメントリット著 Los Intereses Europeos Piden la Independencia de Filipinas, Por El profesor Austríaco Ferdinand Blumentritt」(1900年1月10日、2月10日)で、スペインがフィリピン人を支持するメリットやスペインとのつながりの深さを以下のように強調した：

1. スペインはパリ条約により、フィリピンにおける商業的優位を約束されているが、アメリカが支配するフィリピンにおいて、スペインの産業がアメリカの産業に対して競争力を持つことは不可能である。したがって、スペイン人はフィリピン人を支持するだろう。
2. アメリカがフィリピンを支配すれば、スペイン語を話す人が減る。もしスペイン語を話す人が残っていれば、フィリピンがスペインの植民地ではなくなっても、スペインとの文化的つながりを持てる。

その他に新聞は、スペイン人大学教授のミゲール・モライタ・サグラリオ Miguel

Morayta Sagrario⁵²² (モライタ) がフィリピン人を無償で助けていることを第 10 号「革命の人々 Los Hombres de la Revolución」、第 20 号「オーロラ・ヌエバの報告 メーソンの通達 Boletín de la “Aurora Nueva” Circular Masónica」(1900 年 8 月 10 日) で示している。スペイン人知識人とのつながりは第 12 号「オーロラ・ヌエバ 祖国のアカデミー ‘Aurora Nueva’ Academia de la Patria」(1900 年 4 月 10 日) でも強調され、フィリピン人を啓蒙する組織「オーロラ・ヌエバ」の名誉メンバーの候補としてスペイン元大統領のニコラス・サルメロン・アロンソ Nicolas Salmeron Alonso (サルメロン)⁵²³、フランシスコ・ピ・イ・マルガリ Francisco Pi y Margall (ピ・イ・マルガリ)⁵²⁴、そしてモレ⁵²⁵などの名前を挙げている。

ここまでスペインとの関係を強調しているのにも関わらず、国家のあり方としては、新聞はスペインの政治体制を評価してはいなかった。第 16 号「彼らはすでにその無能を認めている Ya Reconocen su Impotencia」(1900 年 6 月 10 日) では、フィリピンが独立した際には、アメリカの体制は完全で自由で進歩的であるので、アメリカの体制を選ぶとして、スペインよりアメリカの自由主義体制を讃美している。

しかし、アギナルド降伏後の第 35 号「スペイン人著名人たち モレとキログ・バレストロス」(1901 年 4 月 10 日) は、モレとベニグロ・キログ・イ・ロペス・バレストロス Benigno Quiroga y López Ballesteros (バレストロス) という 2 人のスペイン人政治家を特集し、フィリピン人とスペイン人との強いつながりを強調し、米西戦争勃発時にはフィリピンがスペイン自由主義の政策下に置かれるのであれば、フィリピンはスペインの領土として残りたいと主張していたことを、1901 年 4 月になってから明らかにしており、フィリピン革命が行き詰まりを見せる中、スペイン自由主義へのノスタルジーが垣間見える。苦しい時に大国の権威を借りようとする思考パターンはある意味、アメリカ併合主義

⁵²² モライタ (1834-1917) は、マドリッドの大学教授。歴史研究者。マドリッドにあるメーソンの組織、グラン・オリエンテ・エスパニョールのグランド・マスター Gran Maestro de Gran Oriente Español でもあった。第 3 号 (1899 年 11 月 25 日) では、モライタの肖像写真を掲載しており、上記に付け加え、バレンシアの下院議員で、スペインの中央大学の正教授 Diputado por Valencia y Catedrático de la Universidad central de España と紹介している。

⁵²³ サルメロン (1838-1908) はスペイン第 1 共和制時代の大統領。

⁵²⁴ ピ・イ・マルガリ (1824-1901) はスペイン第 1 共和制時代の大統領。第 7 号 (1900 年 1 月 25 日) ではマルガリの肖像写真とサインを掲載している。

⁵²⁵ 第 35 号 (1901 年 4 月 10 日) では、アギナルド逮捕のニュースを掲載した第 1 面に、モレの肖像画も掲載している。

者と似ている。『フィリピナス・アンテ・エウロパ』は、宗主国であったスペインの著名人や政治家とのつながりを示して、新聞の権威付けを行った。革命家はアメリカの政治体制を理想とする発言をしてアメリカ反帝国主義者の共感を得るのか、スペインの自由主義体制に希望を託す発言をしてスペイン政治家の援助を得るのか、二者択一ができないまま日和見的発言を繰り返した。

3-4. フリー・メーソン

フリー・メーソンはフィリピン革命に多大な影響を与えたと言われている。新聞の中でも、メーソンの文字は散見されるが、メーソンが主となる記事は2つしかない。メーソンは主にアメリカの支配を非難し、修道院の神権政治を否定している。記事の中でメーソンとの関わりを示唆しているものもあるが、いずれにしても数は多くはない。

第15号「イギリスとアメリカのメーソン支部の全てが我々を支持している」（1900年5月25日）では、アメリカ南部のロッジの管轄権を持つチャールストンの最高委員の命令を掲載した。第20号「オーロラ・ヌエバの報告 メーソンの通達」（1900年8月10日）のモライタの通達では、以下の5点に言及している：

1. スペインは修道士にフィリピンを渡すという間違いを起こした。修道士はフィリピンを封土 feudo に変えた。フィリピン人は奴隷の身分と紙一重で生活せねばならなかった。
2. アングロ・アメリカの人々は、商業利益・退避港・便宜だけを得て、フィリピンを支配しない方がよかったのではないか。
3. フィリピンはスペインとの関係が切れた時から、独立する権利を持っているのに、住民は何も問われずアメリカに支配された。これは正義に反する。
4. アメリカは修道士たちを再度迎えて、各地に住まわせるだろう。
5. メーソンとして、フィリピン諸島にふさわしい独立・近代化・自由が確立し、修道院の神権政治から離脱したフィリピンの法律が確立するように懇願する。

第27号「光のページ マルセロ H. デル・ピラール、アントニオ・ルナ、そしてエドゥアルド・デ・レテ Paginas de Luz. Marcelo H. Del Pilar, Antonio Luna y Eduardo de Lete」（1900年11月25日）によると、デ・レテもメーソンのメンバーと言われている。しかしメーソンはフィリピン革命に大きな影響を与えたと言われているにもかかわらず、メーソンが主となる記事はほんのわずかである。編集長のデ・ロス・レイエスは噂ではメ

一ソンであったと言われることもあるが、実際にはわからない。

4. アメリカ協力者への批判

新聞はアメリカ協力者を徹底的に批判した。

4-1. アメリ...カイン、アメリ...カニン、アメリカニスタ

新聞は、アメリカ人に協力するフィリピン人の意味で、アメリ...カイン *ameri...káin*、アメリ...カニン *ameri...kánin*、アメリカニスタ *americanista*⁵²⁶という言葉を使った。アメリカニスタはアメリカ当局に協力するフィリピン人の総称のような形で使われ、アメリ...カインは、聖書でカインが兄弟を殺し最初に嘘をついた人物、そしてアメリ...カニンは、カインがタガログ語で「食べる」の意味であることから、アメリカとカインを結びつけ、フィリピン人を裏切りアメリカ人に寝返った、または独立という理想を捨てて自身の利益や財産のためにアメリカにすり寄ったフィリピン人のことを示した。したがって、アメリカニスタよりもアメリ...カインやアメリ...カニンの方が憎悪の度合いが強い言葉になる。たとえば、第8号（1900年2月10日）「残酷な欺瞞 彼らは我々にオファーした自治すらも渡していない！ Burla Sangrienta ¡Ya No Nos Dan Ni la Autonomía Ofrecida!」では、アメリ...カインを、「彼らの主人から彼らに投げられた固くなったパンのかけらで満足している *se contentan con cualquier mendrugo que les tiran sus amos*」と揶揄し、その後アメリ...カニンについても言及し、「もし我々がそれらの《とても稀な》アメリ...カニンの家系を調査したら、彼らは真のフィリピン人ではないのだ *Si vamos á examinar el linaje de esos 《muy contados》 ameri...kánin, no son verdaderos filipinos*」と軽蔑している。第14号（1900年5月10日）「ヤンキーの支配の下でのフィリピン人たちのぞっとする将来 *Pavoroso Provenir de los Filipinos bajo la Dominación Yankee*」では、「祖国を売った情けないアメリ...カニンたち *los miserables ameri...kains que les venden su Patria*」と述べている。

新聞は創刊時から、1898年10月にアギナルドと一緒にマロロスで活動し、後にアメリカ支持に転向した一部の人々への批判を行った。アメリカニスタという言葉は第1号の最

⁵²⁶ 第10号のタイトル「ラグナのフィリピン軍の司令官からのアメリカニスタへの返信 *Contestación á un Americanista del General Jefe de las Fuerzas Filipinas de la Laguna*」のスペリングを使用した。新聞は基本的にはこの *americanista* を使っている。

初の記事「我々のモットー」(1899年10月25日)から登場する。ただし、この記事の中では、アメリカニスタの数はほんの少しであることを強調している。そして同号「今が絶好の機会だ アメリ...カインか、アメリ...カニン...イスタか」(1899年10月25日)では、1899年3月に第1次フィリピン委員会がマニラに到着してすぐに、アメリカに協力したマニラのイラストレードスの一部について、以下のように述べている：

1. アメリカの支配を望む人は、少数ながらではあるが存在する。
2. 彼らは戦争によってではなく、間接的で安全な方法での独立を望んでいる。
3. 彼らは、著名人で愛国者としても有名なので、侮辱してはいけないと言われており、一時はアギナルドからも栄誉を授与された人々であった。
4. そのような人々がアメリカに寝返るのは、人々への心理的インパクトが大きいですが、ほとんどのフィリピン人には良心があるので、アメリカへの降伏はしない。

しかし、第8号あたりから、アメリカに協力するフィリピン人に対して、厳しい記述が見られるようになる。たとえば、同号「残酷な欺瞞 彼らは我々にオファーした自治すらも渡していない！」(1900年2月10日)では、アメリカへの協力者は自己の利益のみを追求していると非難し、さらに同号「裏切りに対して 大きな不正の力強い対策に *Contra la traición. Á Grandes Males Energicos remedios*」(1900年2月10日)では、聖書のカイン Cain の話を持ち出し、アメリ...カイン *ameri...kaín*⁵²⁷には処罰を要求している。しかし、第10号「ラグナのフィリピン軍の司令官からのアメリカニスタへの返信 *Contestación á un Americanista del General Jefe de las Fuerzas Filipinas de la Laguna*」(1900年3月10日)のフアン・カイリエス Juan Cailles (カイリエス)⁵²⁸の手紙では、B. ツアソンに対して、アメリカへの協力者に成り下がっていることに気づけと注意喚起を行っている。第11号「仮面の下で！ ¡Abajo Caretas!」(1900年3月25日)でデ・レテは、マニラにいるアメリカニスタはマロロス共和国時代にはアギナルドのもとにいた人物だとして、彼らを「理性を失わされた同国人たち *obcecados compatriotas*」と呼んだ。第14号「更なる賢明さ *Más Prudencia*」(1900年5月10日)では、アメリカニスタとして少なくとも12名の個人名を明確に明記し、彼らはアメリカからどのような職を貰うのかと皮肉を投げかけている。しかし、ここまで書いているのにもかかわらず、同号「ヤン

⁵²⁷ 筆者の感情や強調したいことによって、アメリカニン、アメリカイン、アメリカニスタの記述方法は微妙に変化する。

⁵²⁸ カイリエス (1871-1951) は、第1フェーズから革命運動に参加している革命家。

キーの支配の下での「フィリピン人たちのぞっとする将来」(1900年5月10日)では、まだフィリピンの知識人内では双方との交流があると主張し、イラストラードスやアギナルドの内閣が分裂していることを、紙面上では明確に認めてはいなかった。

1900年6月21日に、アーサー・マッカーサーJr.軍政長官がアメリカに忠誠を誓った人の恩赦を発表し〔Mojares 2006: 31〕、7月28日・29日にはパテルノがこれに感謝して、恩赦感謝パーティーを企画した〔Mojares 2006: 33〕。8月以降、フィリピン人知識人があからさまにアメリカ支持に動き始めてからは、新聞はフィリピンの知識人が二分されていることを隠そうとはしなくなり、主たる敵をパテルノとブエンカミノに定めて、激しい批判を展開した。パテルノに対する非難は、次節で取り上げる。第21号「迎合する人々に対するマニラからの2通の手紙」最初の手紙はアメリカニスタから、第2の手紙は独立支持者から *Dos Cartas de Manila contra los Pasteleros. La Primera de un americanista, y la segunda de un independiente*⁵²⁹ (1900年8月25日)では、最初にF.T.というアメリカニスタ⁵³⁰が意見を述べ、その後P.H.と言うナショナリスタ *Nacionalista*⁵³¹がそれに対して紙面上で反論を行っている。戦争中にもかかわらず、アメリカニスタから反論を送られるということは、彼らは何がしかの方法でフィリピン領内のアメリカニスタとも、コンタクトをとることができたということである。アメリカ大統領選挙を前にして、第25号のデ・ロス・レイエスの署名記事「平和への働き」(1900年10月25日)では、自身の『独立と革命』のパンフレットで公開した「オリーブの小枝 *Ramo de Olivo*」の記述を複写し、アメリカニスタと革命家の間での和解を提示している。創刊から1年は、アメリカに協力するイラストラードスを批判しながらも、民主党候補ブライアンが勝利しフィリピン独立を認められたときのために、イラストラードスが分裂しないよう、彼らとの交渉ルートも残しておこうとの思惑があったように見える。

マッキンレー大統領の再選後の、第30号「復讐！ 戦争！ 戦争！」(1901年1月10日)では、「アメリカニスタたち(フィリピン人たち)に対して裏切りが一旦証明されれば、

⁵²⁹ 文字上は独立独歩の人、つまり無所属の人ととれるが、ナショナリスタの主張なので、独立支持者とした。

⁵³⁰ 新聞がアメリカニスタとラベリングしたが、手紙を書いた人物は自分に対してアメリカニスタという言葉は使っていない。

⁵³¹ スペイン語では「民族主義者・国家主義者」。ここではフィリピン共和国支持者を指す。こちら手紙を書いた人物は自分がナショナリスタだとは述べていないが、新聞がそうラベリングしている。

スペイン刑法に応じて即決で罰が下されるだろう（中略）なぜなら、彼らはヤンキーたちよりも有害だからだ A los *ameri...kanins*⁵³² (filipinos), una vez comprobada su traición, serán penados sumarísimamente con arreglo al Código penal español...porque son más perjudiciales que los yankis」と、そして「下劣なアメリ...カニンはどれほどの犠牲を払っても、消滅させねばならない Hay que suprimir á toda costa al inmundos *ameri...kánin*」と、かなり強い口調でアメリカへの協力者の殲滅を断言し始めた。その後、フェデラル党⁵³³が結成されると、第 32 号「社会の寄生虫たちの政党 Partido de Vividores⁵³⁴」（1901 年 2 月 10 日）で、アメリ...カニンを「卑屈な *servilismo*」と形容し、この号ではアメリカ化した人々という意味で、「ヤンキニサードス *yankinizados*」という言葉を使うようになった。イルストラードスが次々とアメリカ支持を表明するにつれて、新聞側のアメリカニスタへの批判は強まっていった。

アギナルド降伏後の時期になると、新聞は遠慮なくアメリカニスタを罵っており、第 35 号「シビル・コミッションの見かけ倒しな物事 *Engañifas de la Comisión Civil*」（1901 年 4 月 10 日）では、「もしフィリピンでアメリカ支配が優位に立てば、ナショナリストたちの計り知れない犠牲から利益を得るであろう唯一の人々は、下劣なアメリ...カニンたちになるだろうと、我々はすでに述べた。そして、それは当然のことであろう Ya hemos dicho que si prevalece la soberanía Americana en Filipinas, los únicos que sacarán provecho de los inmensos sacrificios de los nacionalistas, serán los inmundos *ameri...kanins*, y esto sería muy natural」と述べて、タフトと協力しあう彼らを牽制している。その後最終号第 36 号「無能力と吸収合併 アメリカン・コミッションの《レポート》 *Impotencia y Absorción. El «Report» de la Comisión Americana*」（1901 年 6 月 10 日）でも、アメリカニスタを批判し続けた。

フィリピン国内でのアメリカ当局のアメリカ協力者への聞き取り調査は、すでに 1899 年春から始まっていたので、新聞は創刊時から、アメリカ協力者——いわゆるアメリカニスタ——の批判は行ってはいた。しかし、第 2 次フィリピン委員会の任命が行われる前の第 8 号（1900 年 2 月 10 日）から、新聞はアメリカニスタへの批判を強めた。しかし、こ

⁵³² ここでは、アクセント記号はない。

⁵³³ フェデラル党は、後節で言及する。

⁵³⁴ *Vividor* には、「他人を当てにして生活している者 寄食者 たかりや」〔クラウン西和辞典 三省堂〕「人生を謳歌する〔人〕；处世術にたけた〔人〕、社会の寄生虫」〔現代スペイン語辞典 白水社〕などの意味がある。

の時は第2次フィリピン・コミッションへ協力しようとするフィリピン人への牽制であり、当時のアギナルドの政権内での内部分裂を認めていなかった。しかしこの年の4月に、フィリピン共和国第2次内閣の長であるパテルノがアメリカに降伏したことで、第14号（1900年5月10日）になると批判を一步進め、アメリカ協力者の名前を挙げるようになった。それでも第14号までは、フィリピン人内部での分裂に関しての明言を避けたが、後述するパテルノがあからさまにアメリカ支持の行動をとるに至って、内部分裂を否定せず、ある程度特定の個人にターゲットを絞って、非難をするようになった。マッキンレー大統領の再選、そしてアメリカを支持するフィリピン人政党のフェデラル党が結成され、アメリカのフィリピン併合が進んでいくと、新聞はその批判をさらに先鋭化させていった⁵³⁵。

4-2. ペドロ A. パテルノ

新聞創刊当初、パテルノはフィリピン共和国第2次内閣の長であったので、新聞は、第1次内閣の長のマビニをラディカル、第2次内閣の長のパテルノを穏健とラベリングした。しかし、1900年8月ごろからは、パテルノやその他の一部のフィリピン人知識人が親アメリカ姿勢を明確にしたため、もはや知識人内の分裂を隠すことは不可能だとして、親アメリカ・フィリピン人知識人たちを攻撃するようになった。その中でも新聞が一番痛烈に批判したのが、1900年7月にアメリカ当局に対して恩赦感謝パーティーを企画したパテルノである。

第1号「フィリピン人たちとヤンキーたち *Filipinos y Yankees*」(1899年10月25日)では、アギナルドがタガログ語で書いたとされる手紙をスペイン語に翻訳して公開し、「ラディカルなマビニの内閣に取って代わったパテルノですら、平和協定を結ぶため、最近になって、戦争の継続を明示するマニフェストを公表した *Hasta el mismo Paterno, que entró á sustituir al radical gabinete Mabini, para concertar la paz, ha publicado últimamente un manifiesto predicando la continuación de la guerra*」と述べて、穏健派

⁵³⁵ アンダーソンは脚注にて、香港のバーサとロンドンのレヒドールがアメリカ併合支持者になり、デ・ロス・レイエスはこれらの人々を「ユダ（裏切り者）」〔アンダーソン 2012: 307〕と呼んだと書いているが、『フィリピナス・アンテ・エウロパ』第35号（1901年4月10日）では、デ・ロス・レイエスは、両者を尊敬する在外革命家として扱っている。アルタチョなどもそうであるが、デ・ロス・レイエスはこの時は第1フェーズ時代に領外で活動していた革命家に対する扱いは、慎重であった。

のパテルノも独立を主張しているのだと強調した。つまり革命家たちの中には、独立という方向性の中で穏健派と急進派が存在し、パテルノは穏健派に属している旨を暗に主張したのである。その後、第2号「アギナルドの首相⁵³⁶が話す Habla el Primer Ministro de Aguinaldo」(1899年11月10日)では、表題にあるようにパテルノを、「フィリピン共和国現内閣議長で著名な著述家 D.⁵³⁷ ペドロ A. パテルノ el notable escritor D. Pedro A. Paterno, actual Presidente del Consejo de Secretarios de la República Filipina」と紹介して、パテルノの著述を掲載している。パテルノの著述の内容をまとめると、以下の4点になる：

1. パテルノはフィリピン議会開始時から、平和、侵略者の拒否、他国の独立性の尊重を宣言していた。
2. アメリカはフィリピン人の国を評価しているように見え、米西戦争では一緒に戦ったために、フィリピン人は両国が永遠の絆で結ばれるという幻想を抱いた。フィリピンはアメリカから請われて、同盟を結んだ。
3. 人が人であることを放棄できないように、国が国であることも放棄できない。隷属を合法化する法律も協定もない。フィリピン人は自由で独立している。
4. スペインとの戦いの時のように、フィリピン人は戦う用意と覚悟ができています。フィリピン国民は自由と独立を守るためなら、武器をとる。フィリピン人は戦争を続ける。

したがって、この時点では新聞としては、パテルノが革命支持者だと紹介していた。

第7号でもまだ、パテルノを共和国第2次内閣の長として紹介し、第10号「革命の人々」(1900年3月10日)でも、パテルノをビアク・ナ・バトの功労者で、自由主義改革ベースでの国家の平和化を図ろうとする人物と述べて、彼のみならず、パテルノの仲介でスペインと結んだビアク・ナ・バト協定も評価している。

1900年6月21日、パテルノは自宅でミーティングを開き、アメリカに対して民政設立をアメリカに要求し、その後7月28日・29日、マッカーサーがフィリピン人捕虜を恩赦したことに感謝するために、恩赦パーティー *fiestas de la anmista* を開いた [Mojares 2006 : 33]。パテルノがあからさまにアメリカ当局支持へと傾いていったことで、新聞の

⁵³⁶ 英訳すると *Prime Minister of Aguinaldo* となるので、このように訳したが、意味としてはアギナルド政権で首相となったという意味である。

⁵³⁷ ドン Don の略。この時はまだパテルノにドンと言う敬称を付けていた。

記述にも変化が現れた。第 20 号「そのような平和はない！ ¡No Hay Tal Paz!」（1900 年 8 月 10 日）で、パテルノに対する当惑を見せ、それまで成功例として扱っていたビアク・ナ・バト協定を失敗例だと切り捨て、パテルノの提案は誰にも受け入れられないだろうと述べた。同号「えせ愛国主義者の会議 La Reunión de los Pseudo-Nacionalistas」では、パテルノの行ったミーティングの詳細を述べ、批判を行った。20 号以降は、パテルノの行動は、全て非難の対象となった。翌第 21 号（1900 年 8 月 25 日）では、パテルノを非難する記事「不快なテーマ」が掲載され、その中で、この時までパテルノを非難しなかった理由を 3 つ挙げた：

1. 他のフィリピン人の考えや行動について書くということは、フィリピン人内での分裂を促進することであり、敵はそれを利用するので、本当は書きたくない。
2. 現在パテルノは、ナショナリストたちを恐れて、昼間は自宅にいて夜に刑務所に行くと言う腹立たしい茶番を演じている⁵³⁸。
3. パテルノ、全てが滑稽で恥ずべきことだと、あなたは思わないのか？ たった 2 ヶ月前までは、新聞はマビニがあなたを非難したことに関して、あなたをかばっていた。

パテルノの行動に対する怒りは激しく、第 22 号（1900 年 9 月 10 日）でも、5 つの記事でパテルノ、もしくはパテルノの行動に言及し、自分たちには完全独立しかないことを強調している。第 23 号「終わらされた相違、全てのフィリピン人たちの団結万歳！ Divergencia Terminada ¡Viva la Unión de Todos los Filipinos!」（1900 年 9 月 25 日）では、フィリピン人内部の溝を深く掘ることは望まないとして、パテルノ以外のアメリカニスタに対しては和解する可能性があることを暗に示し、アメリカ大統領選挙前のフィリピン人の中で分裂が起これば、今後の活動に支障をきたす可能性があるのではないかとニュアンスを漂わせた。パテルノへの怒りは激しいものの、第 24 号「真のフィリピン人愛国者たちへ（地方からの手紙） Á los Verdaderos Patriotas Filipinos (Carta del campo)」（1900 年 10 月 10 日）では、パテルノたちを武器で制圧することはしないと声明している。これは、デ・ロス・レイエス自身が、ラディカルなアナーキズムを否定していることとも関連している。

創刊号から第 14 号までは、パテルノをアギナルドの内閣の人間として扱っているが、

⁵³⁸ フィリピン共和国を支持する人々からの報復を恐れて、夜は安全な場所（アメリカ当局が管理する刑務所）に逃げたという意味である。

第 20 号からはパテルノを完全に非難の対象とし始め、第 21 号では反パテルノの姿勢を明確にしている。その激しい怒りの元になったものは、宗主国に迎合しようとするビアク・ナ・バト協定時のパテルノの姿勢にあり、その「失敗の過去」を今度はアメリカに対して繰り返していることへの憤りである。しかし、パテルノへの激しい批判は第 24 号までで、その後、フェデラル党が結党されると、パテルノへの言及はほとんどなくなった。パテルノは、1900 年の夏から秋にかけて、紙面をにぎわせた泡のような存在であった。

4-3. フェリペ・ブエンカミノ

第 2 章の香港委員会での記述でも明確なように、フェリペ・ブエンカミノは領外革命家と多くの手紙のやり取りを行った。しかし、ブエンカミノは 1899 年 11 月 17 日頃にパンガシナン Pangasinan で逮捕された。ブエンカミノもパテルノと同じタイミングで親アメリカ行動をとったため、パテルノほどひどくはないとは言え、パテルノと同じ側に立つ転向革命家として新聞に非難されるようになった。

第 6 号「時評欄」（1900 年 1 月 10 日）で、ブエンカミノがパンガシナンのアメリカ人のところに降伏し、マニラの警察に拘留されているとのニュースが掲載された。彼の記述が増えてくるのは第 21 号（1900 年 8 月 25 日）の後、パテルノが恩赦パーティーを開いた記事の後あたりからである。

第 21 号「香港のフィリピン人たちによって判断されたいかさまのパテル—マルカミノ。フィリピン中央委員会からセニョール・D. イサベロ・デ・ロス・レイエス——マドリッドへ El Pastel Pater-Malcamino. Juzgado por los Filipinos de Hong-Kong. Comité Central Filipino. Sr. D. Isabelo de los Reyes.-Madrid」（1900 年 8 月 25 日）では、香港からの 1900 年 7 月 16 日付けの手紙で、「マニラでパテルノが議長を務めた（内閣の）もと大臣たちの陰謀、彼らはブエンカミノによってたくらまれ、騙された（後略）La pastelada⁵³⁹ de ex-Secretarios⁵⁴⁰ en Manila, presididos por Paterno, maquinados y engañados por Buencamino..」と、つまりアギナルドの内閣のメンバーのアメリカ支持への転向は、実はブエンカミノによって仕組まれたと書いており、しかもタイトルにマルカミノと言う造語を使っている。つまり、本来のブエンカミノ「Buen 良い+camino 道」ではなく、マルカミノ「Mal 悪い+camino 道」であるとタイトルで示して、彼への怒りを

⁵³⁹ 史料通り。Plot、snare という意味。

⁵⁴⁰ ministros ではないが、内閣のメンバーのことを示しているので、大臣と訳した。

表現しているのである。そして、第 23 号「苛々するからかい Burla Irritante」(1900 年 9 月 25 日)では、パテルノに続いてブエンカミノが、7 月 22 日にアメリカ支持のミーティングをひらいたとして、その様子を、皮肉たっぷりに掲載している。

ブエンカミノへの批判は、1901 年になっても現れてくる。フェデラル党結成後、党の設立メンバーの 1 人となったブエンカミノのことを、第 32 号「社会の寄生虫たちの政党」(1901 年 2 月 10 日)では、「永遠のガリンプラ⁵⁴¹eterno garimpla」と例えた。この記事では、その理由を、ブエンカミノがアギナルドの命令下にいた 1899 年 5 月には、すでにマッカーサーから彼に対して、フェデラル党結成の提案があったからだと述べている。つまり、新聞はブエンカミノが、革命側にもアメリカ当局側にも通じていたと判断したのである。第 34 号「力強い忍耐 Estómagos Fuertes」(1901 年 3 月 10 日)では、1901 年 1 月 8 日に、リサール劇場でアメリカニスタによって開催されたミーティングに出席した人々に対して反論を行い、ブエンカミノを色でたとえながら以下のように皮肉った：

ブエンカミノ、赤い学生、彼は修道士に反乱を起こした最初の学生だった(中略)ブエンカミノ、緑、彼はスペインのスパイ故にドン・エミリオによって捕えられた；ブエンカミノ、黄色、一番抜け目がない、彼はどんなことがあっても、アギナルドその人の大臣になった；そして今、ブエンカミノは汚い青、アメリカニスタになって、彼の以前の同意見の人々であったナショナリスタたちを残忍さとともに迫害する；(後略)

Buencamino, el estudiante *rojo*, que primero de se había sublevado contra los frailes...Buencamino *verde*, el que fué preso por D. Emilio por espía de los españoles; Buencamino *amarillo*, el listismo, que á pesar de los pesares, llegó á ser ministro del mismo Aguinaldo; y ahora el⁵⁴² Buencamino *azul sucio*, que habiéndose hecho americanista persigue con encarnizamiento á sus antiguos correligionarios los nacionalistas;...

記事では、彼の経歴は最後に汚い青で終わっている。

4-4. フェデラル党

アメリカニスタが正式に集まったのがフェデラル党である。この政党は 1900 年 12 月

⁵⁴¹ ガリンプラは、敵対するそれぞれのところに、互いをもめさせるような有害なニュースを持っていき、もめごとをさらにひどくする人のことを指す。

⁵⁴² ここには冠詞がついている。

23日に結成された。編集者の原稿執筆・編集・印刷の時差などから、政党結成から1ヵ月半後の第32号（1901年2月10日）から、この政党への言及が始まる。この党を結成した人々の多くは、マロロス時代に1度はアギナルドの下に集まった人々であった。したがって、フェデラル党に対する新聞の批判も痛烈なものになった。

第32号「社会の寄生虫たちの政党」（1901年2月10日）では、マッキンレー大統領の戒厳令について触れた後、フェデラル党の綱領について、以下2点のコメントを記した：

1. フェデラル党は1899年5月にマッキンレー大統領が申し出たことを、焼き直しただけである。その申し出はペテンであり、ごまかしだと認知されているので拒絶された。
2. 我々は、隷属的なアメリカニズムが綱領と呼ぶ、そのプログラムを新聞に掲載するが、我々はこの申し出を受け入れるつもりはない。

この記事は非常に長いもので、その綱領の条項1つ1つを掲載し、その各条項に皮肉を込めた反論を行った。それくらいフェデラル党の結成は、新聞にとって無念なことであったのだろう。この記事の最後の部分のファイナル・ノート *Nota final* には、フェデラル党の「基盤となるものは真のいかさまである *Las bases son un verdadero pastel*」と記されている。

同号の「マニラからの手紙 *Carta de Manila*」（1901年2月10日）でも、フェデラル党を取り上げている。これは1900年12月31日マニラ付けの記事で、フェデラル党結成から8日後に書かれた記事ではあるが、署名はない。たぶんアメリカからの弾圧を恐れて名前を公開しなかったのであろう。そしてこの記事では、フェデラル党がアメリカの指導のもと、アメリカ協力者によって作られたものであると批判した。その中でも主にパルド・デ・タベラ⁵⁴³を批判し、ナショナリストはフェデラル党への支持を表明しないだろうと述べている。

第33号「貧しい平和なフィリピン人！ 前代未聞 ¡Pobres Filipinos Pacíficos! Sin Precedente」（1901年2月25日）では、「《フェデラル》と自称させるアメリカニスタた

⁵⁴³ モハレスの先行研究によると、デ・ロス・レイエスは1899年11月30日のパルド・デ・タベラへの手紙の中で、彼は自身のファミリーに関してパルドに助けを求めている [Mojares 2006: 272]。そのせいか、パテルノの時と違い、彼への批判記事は多少筆が鈍い部分がある。25号（1900年10月25日）の「平和への働き *Labor de Paz*」の脚注で、デ・ロス・レイエスは、パルド・デ・タベラのことを「私の個人的な友人 *mi particular amigo*」と述べている。

ちのごろつきすべて *Toda la patulea de americanistas que se hace llamar 《Federal》* という厳しい表現を使い、「こんにち、アメリカニスタやフェデラリスタ⁵⁴⁴は同義語である *Americanistas ó federales, que hoy día son sinónimos*」と述べ、「フェデラル」は一般に言われる連邦主義ではなく、フィリピンにおけるフェデラルはアメリカ併合主義と同じであるのだと批判している。この記事ではフェデラル党とアメリカ当局が手を組めば、かつてのスペイン統治下での圧制と同じように、体制に従わないものは弾圧されるであろうと予想している。

フィリピン人がこれ以上、アメリカ支持に廻らないように、新聞は、1901年1月17日に発布したアギナルドの政令を第34号で掲載した。この第34号「香港のフィリピン中央委員会 自己防衛として センセーショナルな公示 *Comité Central Filipino de Hong-Kong. En Propia Defensa. Bando Sensacional*」(1901年3月25日)では、第3条で、フェデラル党の党員は、略式裁判での軍法会議にかけられることが述べられている。つまりこの時期になると、スペイン刑法で裁く余裕も、その姿勢を示す余裕もなくなっていたのであろう。

イラストラードスの中に、併合支持派と革命派が混在してしまったことで、政治に関係していない第三者は、誰がアメリカ支持で誰がアギナルド支持なのかわからなくなってしまった。新聞側もそれを懸念したのか、革命家とフェデラル党の党員を読者が混同しないように、第34号の「香港のフィリピン人中央委員会⁵⁴⁵」で香港委員会は、「フェデラルという社会の寄生虫たちの政党が我々の委員会を剽窃しているが、我々には我が祖国を防衛したいと抱く熱意があるので、彼らが同等になることは絶対にない *la partida de vividores llamada federal está plagiando nuestros Comités, jamás llegará á tenerlos iguales por el entusiasmo que nos inspira la defensa de nuestra patria*」と主張している。

アギナルド降伏後、第35号アレホラの署名記事「新しい指導者 新しい生活 *Caudillo Nuevo, Vida Nueva*」(1901年4月10日)で、彼は「目には目を、歯には歯を *ojo por ojo, diente por diente*」と、フィリピン人に対して軍事行動も辞さない姿勢を打ち出した。最終号第36号「頑張れフィリピン人! *¡Animo, Filipinos!*」(1901年6月10日)では、「フェデラル党が本当にフィリピン人に共感していると信じているお人よしは誰なのか? *¿Quien es el papamoscas que pueda creer que verdaderamente la partida federal*

⁵⁴⁴ フェデラル党を結成した人、または党に参加した人。

⁵⁴⁵ 先に述べた記事は第34号の最初の記事で、この記事は同号の6番目の記事になる。

es simpática á los fipipinos?」と、つまり、フェデラル党に共感するフィリピン人などいない、と断言している。

5. 近代化

この新聞の大きなテーマの 1 つが近代化である。スペインに住み、「近代化」の波に真っ向から晒されていた編集者たちにとって、近代化はフィリピンという国家が取り組まねばならない大きな目標の 1 つであった。近代化として、新聞は、教育改革、戦術、法律、ヨーロッパ化などを提示した。近代化の提案に関する具体的な記事は、第 12 号の「オーロラ・ヌエバ 祖国のアカデミー」（1900 年 4 月 10 日）から始まるが、近代化についての記述は、全てに渡り、新聞の随所で見られる。

第 1 号の「我々のモットー」（1899 年 10 月 25 日）では、「起源と同じくする日本の兄弟と同じく、我々は進歩を渴望し、欧米の近代化を熱望している *nostros, al igual que nuestro hermano de origen, el Japón, somos ávidos de progreso y entusiastas por la civilización europeo-americana*」とあり、彼らにとっての近代化というのは欧米化と同じ意味を持っていることもあった。ここでは、彼らの主張する近代化を、オーロラ・ヌエバ、戦術、法律、ヨーロッパ化、教育に分けて、項目別に述べる。

5-1. オーロラ・ヌエバ

オーロラ・ヌエバは、直訳すると「新しいオーロラ」となる。ここでのオーロラ・ヌエバはデ・ロス・レイエスが構想するフィリピンに設立したいアカデミーで、内容を一言で言えば、人々を教育し啓蒙する組織である。デ・ロス・レイエスはフィリピン国民の教育を最重要課題の 1 つとして考えていた。新聞創刊当時は、現実には起こっている戦争、アメリカへの希望など、目の前にある問題を扱っていたが、その後は、フィリピン革命のもう 1 つの側面であった社会改革についての意見が述べられるようになった。オーロラ・ヌエバはその顕著な例で、第 12 号（1900 年 4 月 10 日）のかなりの紙面を割いて、以下の 3 点、1) 理想、2) 組織内容、3) 構成——を述べている。その後、このオーロラ・ヌエバという名前は、フィリピン人を啓蒙する記事のシリーズの名前となり、第 12 号から第 23 号まで、第 21 号を除いて、毎号掲載された。

第 12 号「オーロラ・ヌエバ 祖国のアカデミー」（1900 年 4 月 10 日）をまとめると、以下になる：

1. プレスに携わる我々は、学究的で勤勉な祖国愛者たちのベースを作らねばならない。
2. 我々全員が戦争をする能力があるのではない。個人個人が、自分の能力を發揮できる分野で祖国に尽くす。
3. オーロラ・ヌエバは、祖国のアカデミーになるだろう。
4. 学校は名誉、科学、自由、進歩の4つの原理に支えられる。
5. ヨーロッパには最高指導者会議が置かれ、その会議は海外の様々な場所にいるフィリピン人住民たちで構成される。傑出した政治家や自由な哲学者たち——サルメロン、ピ・イ・マルガリ、モライタ、ブルメントリット——そしてヨーロッパ、アメリカ、日本の傑出した人々が、コンサルタントや名誉メンバーとして任命される。
6. 基本的には、人々を教育し啓蒙する組織である。
7. 最高指導者会議は、フィリピン諸島の全ての州とプエブロの委員会を任命する。フィリピン人教育のコレヒオやサークル全てが、オーロラ・ヌエバ 祖国のアカデミーの示唆の下に集まれるようにする。最高指導者会議は1人のエージェントかセクレタリーを置いて、オーロラ・ヌエバ 祖国のアカデミーのグループにインストラクションを送る。
8. グループ編成。
9. グループの規則。
10. 参加者の権利。
11. 研究プラン。
12. 『フィリピナス・アンテ・エウロパ』は、「オーロラ・ヌエバの報告」という記事始める。

この記事にはデ・ロス・レイエスのサインはないが、デ・ロス・レイエスが書いたと推測される。この新聞のオーロラ・ヌエバへの意気込みは大きく、やはり筆名は掲載されていないが、第13号「オーロラ・ヌエバの報告 Boletín de la “Aurora Nueva”」（1900年4月25日）では、オーロラ・ヌエバの活動について以下のような報告をしている：

1. オーロラ・ヌエバは、学術的な同盟で発展し続けている。
2. 最高会議は、フィリピン国内と地方の州とミュニシパル *municipales* の委員会の組織化を勧める命令を出した。

3. アメリカやヨーロッパのソサエティーの協力を促し始めた。
4. 最高会議議長は、アギナルドであると宣言された。
5. フィリピンにはキリスト教やスペイン語など、スペインとの精神的・物質的關係が残っている。
6. アメリカの帝国主義政党が我々の諸島を支配したら、それらはすぐに見えてなくなる。
7. この学術的同盟は、スペインとフィリピン諸島の関係を狭めることを目的としている。
8. プレスの人々を名誉会員として任命した。

このようにオーロラ・ヌエバを通して、多くの分野でフィリピン人を啓蒙していくことを強調した。しかし、上記第 12 号・第 13 号の両記事では、スペインの政治家とのつながりや学術的同盟に力点が置かれており、デ・ロス・レイエスたちが、スペインから精神的に独立できていない感は否めない。しかも比米戦争の混乱の中にあったフィリピンにおいて、1) この組織に関してどこまで実態があったのか、2) 本当にスペイン人著名人の協力があったのか——に関しては、疑問が残り、行間からはその実態は見えてこない。

5-2. 戦術

「オーロラ・ヌエバ」⁵⁴⁶シリーズの記事が最初に挙げたのは、戦術の近代化であった。もともとこの新聞はゲリラ戦を支持し、第 2 号や第 3 号など創刊初期から、ゲリラ戦に関する記述が散見される。第 10 号「フィリピン諸島での帝国主義政策（フィリピンの地方からの手紙）」（1900 年 3 月 10 日）では、フィリピン人は「ゲリラの体制を取り入れた、または、取り入れ続けるようにしてきた *adoptó y sigue adoptando el sistema de guerrillas*」と、紙面上でフィリピン軍のゲリラ戦への転換を明確にしている。したがって、ゲリラ戦に関する言及は、戦況報告を含めて最終号まで継続的に登場する。「オーロラ・ヌエバ」では、いかに「近代的な＝合理的な」ゲリラ戦を行うかを主眼に記事が書かれている。第 14 号「オーロラ・ヌエバの報告 戦術の基礎知識 奇襲、待ち伏せ、輸送隊の攻撃 I *Boletín de la “Aurora Nueva” Nociones de Arte Militar I. La sorpresa, la Emboscada y el Ataque de Convoy*」（1900 年 5 月 10 日）は、よく用意のできた奇襲は大

⁵⁴⁶ アカデミーの名前としてオーロラ・ヌエバが使われることもあるので、以下、オーロラ・ヌエバ・シリーズの記事のタイトルには「」を使用する。

きな結果を得ることができるとして、歴史上、奇襲で成功した名将の名前を複数名列挙し、彼らが教える軍事技術や、キューバ、トランスバール、オレンジで実践された戦術を、ゲリラに伝えたいとの掲載動機を述べている。

第 15 号「オーロラ・ヌエバの報告 戦術の基礎知識 II ゲリラ戦 Boletín de la “Aurora Nueva” Nociones de Arte Militar II. Táctica de guerrillas」(1900 年 5 月 25 日)では、以下を述べている：

1. ゲリラ戦は侵略者への攻撃を止めないという意思表示。
2. 敵はフィリピンの劣悪な気候で死ぬから、ゲリラ兵は野戦を行う必要がない。
3. キューバの焼き払いは、スペイン人が所有者だったから行われたのであり、フィリピンの場合は所有者がフィリピン人なので、ゲリラ兵は焼き払いは行わない。
4. 我々のゲリラ兵は、集落の人々の共感を得るために努力し、嫌悪を持たれないようにする。
5. ゲリラはヤンキーに対し、徹底的に損害を与えながら、平和な住民を外敵から守る。
6. 全ての人の大義を守れば、全てのプエブロが我々のゲリラを保護するので、ゲリラ戦は永遠に維持できる。

第 19 号「オーロラ・ヌエバの報告 戦術の基礎知識 Boletín de la “Aurora Nueva” . Nociones de Arte Militar」(1900 年 7 月 25 日)では、歩兵隊、砲兵隊、騎兵隊を組み合わせ、いかに奇襲を成功させるかについて書かれており、第 23 号「戦術の基礎知識 IV 即興で作られた塹壕—避難所 Nociones de Arte Militar IV. Trincheras-abrigos Improvisados」(1900 年 9 月 25 日)では、「オーロラ・ヌエバの報告」というタイトルは失念されていたが、第 14 号、第 15 号、第 19 号の続きで、当時地上戦では不可欠であった塹壕—避難所の 5 つのパターンが説明されている。しかし、どれだけフィリピン人がこれらの記事を実践していたかは不明である。ただし、当時のゲリラ戦という戦闘形態と制約の中で、塹壕などの作り方を含めて、彼らがいかに近代的かつ合理的に戦っているかを読者にアピールはしている。第 22 号「マニラの隣人たちの論述 La Exposición de los Vecinos de Manila」(1900 年 9 月 10 日)でも、軍が多くゲリラに分割されたことを読者に告げ、フェデラル党設立後の第 32 号「確実な勝利 ヤンキーへの異議申し立て Triunfo Seguro. Contestación á un Yanki」(1901 年 2 月 10 日)では、ゲリラ兵はきちんと食事をとり、集落のゲリラ援助をアメリカは妨害できないとし、銃が不足してもマチェ

テで武装してアメリカの分遣隊を攻撃すると警告している。

物量で劣る革命軍にとって、ゲリラ戦は勝つための唯一の戦法であった。したがって、戦争を支持する新聞としてはゲリラ戦を支持するのは当たり前のことであった。そして、この新聞が近代化のカテゴリーの中にゲリラ戦を加えたのには、以下の 2 つの意図、1) ゲリラ戦を、読者、特にフィリピン領内のフィリピン人知識人に理解してもらい、2) アメリカ当局と兵への警告——があったと思われる。記事に書かれたことを革命軍ゲリラが実践していたかどうかは別として、ゲリラ戦を続ける意志を革命側が持っていることは、これらの記事によって伝えることができた。

5-3. 法律家の育成

近代的な法の作成もさることながら、フィリピンの近代化を進めるためには、近代的な法を理解し運用する法律家の養成も急務であった。スペイン統治時代は、修道士とスペイン当局が、その利権を守るために法律家の育成に制限を加えていた。したがって、フィリピン人法律家養成機関の改革は必須であった。第 18 号「オーロラ・ヌエバの報告 法律の専門課程のための計画と方法（続き） Boletín de la “Aurora Nueva”. Plan y Método para el Estudio de la Carrera del Derecho (Continuación)」(1900 年 7 月 10 日) では、セレスティノ・ロドリゲス Celestino Rodoriguez (C. ロドリゲス)⁵⁴⁷が、法律の専門課程は、修道士が恣意的に作っていた学科を効率的なシステムに変え、多くの学科を包摂する必要があると説いている。

第 22 号「法律の専門課程のための計画と方法（結論） Plan y Método para el Estudio de la Carrera de Derecho (Conclusión)」(1900 年 9 月 10 日) ではタイトルに「オーロラ・ヌエバの報告」が抜けているが、法律の専門課程の最後において裁判所や弁護士事務所などで、実践的なトレーニングをさせるべきだと進言している。法律家を育成し、法で裁く社会を作り、その社会の中で即戦力になる弁護士を育成することを強く主張した。

5-4. ヨーロッパ化

新聞はフィリピンをヨーロッパ化させて、列強から独立を認めてもらわねばならないと

⁵⁴⁷ C. ロドリゲス (1872-1955) は 1892 年アテネオ・デ・マニラ Ateneo de Manila で BA 取得。1900 年マドリッド中央大学 La Universidad Central de Madrid で Bachelor of Laws を取得。1904 年にセブの町長 Municipal President、1907 年に代議士となる。『フィリピナス・アンテ・エウロパでは、署名記事をいくつか書いている。』

考えた。『フィリピンのフォークロア *El Folk-Lore Filipino*』を 1887 年に出版し、フィリピン独自の文化を大切にしようとしてきた編集長のデ・ロス・レイエスの主張からすると、ヨーロッパ化という発想は奇妙にも思えるが、スペイン植民地下においてスペイン語教育を受けたスペインに住むフィリピン人らしい発想であるとも言える。彼にとって、近代化 *civilización*⁵⁴⁸ とヨーロッパ化は、しばしば同義語として扱われた。したがって、ベイツ協定をアメリカと結び、非ヨーロッパ的なホロ（スルー王国）に対しては冷たい目を向けている。第 19 号「とんでもない！ ¡Quia!」⁵⁴⁹（1900 年 7 月 25 日）では、自分たちを「ホロのスルタンよりも、はるかに文明化され権力があり勇敢な我々 *nosotros que somos infinitamente más civilizados, más poderosos y valientes que el sultán de Joló*」と呼んでいる。世界の列強にフィリピンを認めてもらうためには、ヨーロッパ化するしかない現実もあったが、人種差別を批判する主張と矛盾する主張となっている。

第 17 号「オーロラ・ヌエバの報告 ヨーロッパ化しよう（習慣革命）I ヨーロッパ人たちの性格；彼らは尊厳をどう理解するのか *Boletín de la "Auroa Nueva". Europeicémonos*⁵⁵⁰ (*Revolución en las Costumbres*) I. *El Carácter de los Europeos; Cómo Entienden la Dignidad*」（1900 年 5 月 10 日）で、デ・ロス・レイエスは以下のよう述べている：

1. フィリピンの国民をヨーロッパ化するために、ヨーロッパの習慣に関して、我々の研究と観察を書く。
2. これを達成すれば、フィリピン人は独立を達成し、外国の我々の評価のグレードアップに貢献することになる。
3. ヨーロッパ人のモラルと、外見（洋服・身づくろいなど）や習慣を伝え、その後社会の様子を伝える。
4. フィリピン人は奴隷としての教育を修道士から受けているのでへりくだるが、ヨーロッパ人は自分の可能性を信じ、できる限り努力する。外国人の前で卑下せず威厳を保つ。威厳を維持して対等に付き合えば、外国人は我々を劣等人種と見な

⁵⁴⁸ 新聞ではフィリピン人の文化にも触れて、自身の文化に対するプライドも示しているため、この *civilización* は *bárbare*（野蛮）の反対語の文明ではなく、ヨーロッパ化の意味を含む「近代化」と訳す。この他の *civilización* または *civilizado/a* は、その文脈によって、近代化、または文明化と訳す。

⁵⁴⁹ この記事には署名がないので、誰が書いたのかは不明である。

⁵⁵⁰ *Europeicémonos* の *c* は史料通り。

い。

第 22 号「習慣の革命 我々のヨーロッパ化 II 服、洗顔、洗髪 *Revolución en las Costumbres. Europeizémonos*⁵⁵¹ II. Trajes, Aseo, Peinado」(1900年9月10日)は、以下のように述べている：

1. 貧しそうな服を着ないで服装のルールを守れ
2. きちんと服を着ている国民に対してなら、欧米人も独立不可能な国民とは呼ぶことはできない。
3. ヨーロッパの服を着て、相応の教養・文化・品位を身に着けつること。

このほかにも体の洗い方、女性の髪を整え方などが書かれている。

これは、ヨーロッパ人に馬鹿にされないように、ヨーロッパの文化に迎合する呼びかけがなされていると言っても過言ではない。近代国家の国民として欧米列強に認めってもらうために、フィリピン人を変えようとの主張が展開されている。自分の文化に誇りを見出したいと思いつつも、宗主国の文化に影響され、欧米の文化に迎合する姿が新聞からも読み取れる。しかも神の摂理の部分でも述べたように、ムスリムの存在を全く考慮せずに、発言している。

5-5. 教育

デ・ロス・レイエスはパリ万国博覧会の観光のため、1900年夏ごろ、パリとロンドンに旅行した。この経験はヨーロッパ化の考えのみならず、教育改革にも大きな影響を与えた。彼は旅行でパンフレットなどを集め、それをもとに、教育改革の記事を書いた。この教育改革に関しては、「オーロラ・ヌエバ」のシリーズではなく、リセオ関連記事として3回シリーズで掲載された。教育改革に関してはその他の記事でも言及されている。教育に関しては、デ・ロス・レイエスの署名記事が多いが、デ・ロス・レイエスだけではなく、イグナシオ・ビリャモール *Ignacio Villamor* (ビリャモール)⁵⁵²なども教育について論じている。

教育改革についての具体的な言及はデ・ロス・レイエスがパリから帰って来た頃から始まり、第23号1面「パリとロンドンにて I *Por París y Londres I*」(1900年9月25

⁵⁵¹ *Europeizémonos* の z は史料通り。

⁵⁵² ビリャモール (1863-1933) は、マロロス制憲議会のメンバー。フィリピンの教育政策に積極的に携わる。1915年6月7日には、フィリピン大学学長に任命された。

日)で、彼がパリとロンドンを旅行していたことが明らかにされ、同号「マニラのリセオ⁵⁵³への教育革命 I. 件のリセオのセクレタリーのセニョール・イグナシオ・ビリャモール *Revolución en la Enseñanza Al Liceo de Manila I. Sr. D. Ignacio Villamor, Secretario de Dicho Liceo*」(1900年9月25日)で以下の3点、1)ロンドンとパリから教育に関するパンフレットを多数持ち帰った、2)語学の効果的な学び方、3)法律に関する専門課程の改革——を主張した。基本的には、デ・ロス・レイエスはパリの教育システムをベースにプログラムを組むことを考えていた。

翌第24号「教育での改革 マニラのリセオへの教育革命 II. ロンドンとパリの博覧会での初等教育 *Revolución en la Enseñanza. Al Liceo de Manila II. La Instrucción Primaria en Londres y en la Exposición de París*」(1900年10月10日)は、デ・ロス・レイエスの署名記事で、スペイン語ではなく、英語の公用語化に肯定的な姿勢を示している。ここでの彼の主張をまとめると、以下になる：

1. 英語は、フィリピン諸島の公的言語にならねばならない。我々は初等教育でスペイン語を廃止するという、ラディカルな方法をとる⁵⁵⁴。
2. 日本が近代化に成功し発展したのは、教育に携わる外国人を迎えたからだ。
3. 先生たちは、元大臣のジュール・フェリー *Jules Ferry* (フェリー)⁵⁵⁵のように現実的で近代的な教育を行う。教育の場では宗教は介在しない。
4. 一番小さな子供たちのために、格言の書き写しによって、記憶の向上や善悪の意識を植え付ける。
5. フランスの全ての学校では、祖国について学ぶ。フィリピンでは、リサールやそ

⁵⁵³ 中・高等教育。

⁵⁵⁴ この記事では「我々の子供たちに我々が教えねばならない一番のことは、読み書き、そして英語である。Lo primero que debemos enseñar á los niños es la lectura, la escritura y el idioma inglés」[有用性の高さ故、世界中に広く普及している故、他の政治的理由故、この言語はフィリピンの公的言語になるべきだ *Esta lengua por su mucha utilidad, su gran extensión por el globo, y por otras razones políticas, debe ser la oficial en Filipinas*]「スペイン語で、我々はラディカルになり、その言葉を初等教育で廃止する *Con el castellano somos radicales en suprimir lo en la 1ª enseñanza*」という表現が使われている。

⁵⁵⁵ フェリーは1880年代のフランスの教育行政の大臣で、1881年に法による無料教育を始め、宗教と教育を切り離した。この時代にはスペイン人アナーキストのフランシスコ・フェレル・イ・グアルディア *Francisco Ferrer y Guardia* も、1)男女、貧富を問わない、2)教会が規制しない、3)無料の——教育を主張している。スコットによると、デ・ロス・レイエスとフェレルは面識があったようである [Scott 1992: 17]。

の他の詩人の作品を使って教育を行う。

第 33 号のデ・ロス・レイエスの署名記事「マニラのリセオへの教育革命 マニラのリセオ III. フィリピン人に適用するフランスの教育システム *Revolución en la Enseñanza al Liceo de Manila III. Sistema Francés de Enseñanza Elemental Aplicado á los Filipinos*」(1901年2月25日)では、デ・ロス・レイエスが計画した6歳から10歳までの子供たちのカリキュラムを、具体的に説明している。そして、ここでも、「私は英語を、スペイン語の代わりにすることを力説する。なぜならば、スペイン語はすぐに極東で滅びるであろうからだ。と言うのも、スペインは極東から永遠に撤退したからである *Insisto en sustituir con el idioma inglés al castellano porque este pronto desaparecerá en el extremo*⁵⁵⁶ *Oriente, toda vez que España se ha reitrado para siempre de allí*」と述べている。そして、香港、オーストラリア、シンガポール、ボルネオなどの英国植民地の人々は、英語に常に晒されていることを指摘し、「イエス、スペイン人たち自身ですら、現在彼らはヨーロッパ化する必要があると頻繁に繰り返しているのだから！ *¡Sí hasta los mismos españoles repiten ahora con frecuencia que necesitan europeizarse!*」と述べている。このことからデ・ロス・レイエスの中にあるヨーロッパ化とは、「イギリスやフランスの文化を基礎とした教育や生活習慣」を習得することだろうと思われる。

修道士によって委ねられていたフィリピンの教育を根本から変えることは、この時代の知識人の多くが主張していたことでもあったが、1900年の半ばにロンドンとパリ万博に行った後から、新聞及びデ・ロス・レイエスは、社会全般におけるスペインの前近代性を否定し、主にフランスの教育に着目しながら、商業言語としての英語の可能性を重視する方向へと転換した。ただし、言語に関しては、地方語とタガログ語の教育の必要性も主張し、それと共に、祖国についての教育の重要性も強調している。しかし、地方語とタガログ語の教育を規定したとは言え、勉強すべき公用語に混成語を作ることを主張せず、ルソンの地方語であるタガログ語を選択した時点で、彼の意識の中にルソン中心主義が潜んでいることがわかる。

デ・ロス・レイエスは、アメリカ帝国主義とは徹底抗戦すると主張していたのにもかかわらず、言語に関しては英語を主体とした教育を主張し始めた。タガログ語の他に、商業語である英語を共通の教育言語に設定した時点で、デ・ロス・レイエスの教育プランはアメリカが提示する教育とさほど変わらなくなった。スペイン語に見切りをつけ、安易に英

⁵⁵⁶ 最初の E が小文字なのは史料通り。

語の覇権を受け入れ英語教育を主張する段階で、デ・ロス・レイエス自身も他のフィリピン人併合派と同じ思考過程に陥っていたと言ってよい。

5-6. 政教分離

政教分離は、『フィリピナス・アンテ・エウロパ』のみならず、この時代のイラストレータスの大きな政治課題であった。したがって、マロロス憲法⁵⁵⁷の第5条でも、政教分離が明記されている [T. Agoncillo 1990: 207]。第18号「独立以外の解決はありえない No Cabe Otra Solución que la Independencia」(1900年7月10日)では、修道士問題に介入するアメリカに対して、政教分離を要求し、第23号「苛々するからかい」(1900年9月25日)では、「我々はもちろんそれ⁵⁵⁸を持てるのであろうか。なぜなら政教分離と信仰の自由は、マロロス議会によって公布された憲法のように、アメリカ合衆国の憲法によっても宣言されているからだ *Teníamos por descontado esto, porque están decretadas la separación de la iglesia y del Estado y la libertad de cultos, tanto por la Constitución de los Estados Unidos, como por la promulgada por la Asamblea de Malolos*」と、マロロス憲法では持っていた政教分離と信仰の自由が、アメリカ統治下では消えてしまうのではないかとの懸念を示し、マロロス憲法が政教分離の理念を持っていたことを強調している。その後、第34号「言葉、言葉、言葉」(1901年3月10日)では、マッキンレー大統領は絶対的な政教分離を主張しているのに、知事が小教区を預かる主任司祭を解任したことを非難している。つまりこの記事でも、アメリカは本国とフィリピンでは政教分離において正反対の政策、つまりフィリピンでは政教混同をしていると暗に述べている。

しかし、新聞自体も自己矛盾を抱えていた。政教分離を主張するのにもかかわらず、第8号「残酷な欺瞞　すでに彼らはオファーした自治すらも渡していない」(1900年2月10日)では、もしフィリピン人が奴隷になることを拒絶したら、「ミスター・ブライアンが、不滅のアメリカ合衆国憲法が支えられているキリスト教の原理そのものをベースとしてお互いが愛し合うべき2つの国民の間で結ばれた協定を、復元してくれるために *para que Mr. Bryan venga á restablecer la concordia entre dos pueblos que deben amarse sin más base que los mismos principios cristianos sobre los que descansa la inmortal Constitución norteamericana*」、マッキンレー大統領が失脚せざるを得ないだろうと述べ

⁵⁵⁷ 1899年1月にフィリピン共和国で制定された憲法。

⁵⁵⁸ 完全なる政教分離。

ている。アメリカとの関係に関して、キリスト教と政治を絡め、キリスト教に頼ろうとする考え方に、政教分離を主張するこの新聞の限界が垣間見える。

この時期のフィリピンにおける修道士の横暴、政治への介入などは、歴史的にも自明な出来事である。したがって、新聞は、宗教の政治介入の被害者という立場にフィリピン人を据えて、そこから政教分離を主張した。そして、共和国政府は政教分離を十分理解し実践していたことを読者に訴えた。しかし、フィリピン人以外の読者に、フィリピン人の政教分離への真剣さが伝わったか疑問である。

5-7. 日本

前節でも述べたように、第1号「我々のモットー」(1899年10月25日)では日本の近代化を例に挙げ、日本のような短期間での近代化を目標に掲げた。日本は近代化と称して欧米の文化を取り入れ、短期間で工業化を進めた先輩であった。そのよし悪しは別として、日本の急速な近代化・工業化を、新聞も理想とした。第24号「教育での改革 マニラのリセオへの教育革命 II. ロンドンとパリの博覧会での初等教育」(1900年10月10日)では、日本の近代化の成功には、教育に携わるヨーロッパ人を迎え入れたことを挙げており、英語を教えるアングロサクソンの教師の必要性を主張している。

第14号「時評欄」(1900年5月10日)では、ベルリンで日本人の玉井喜作(玉井)⁵⁵⁹によって発行されているドイツ語の雑誌『オスト・アジア Ost-Asien』⁵⁶⁰について言及し、そこでデ・ロス・レイエスの「フィリピン問題」の記事の完全翻訳が掲載されたことに感謝の意を表している。玉井とデ・ロス・レイエスがどのような関係にあったのかは不明ではあるが、やはりお互いヨーロッパにいるアジア人として、「東亜」という部分で共感するものがあつたのかもしれない。

6. 小括

『フィリピナス・アンテ・エウロパ』は、革命家の主張を掲載することを第1の目標に

⁵⁵⁹ 玉井(1866-1906)は、北海道で教師をしていたが、1892年から93年にかけて、福島中佐のシベリア大陸横断と同時期に、民間人としてシベリア大陸を横断し、その後ドイツに居を構え、ジャーナリストとして活動した。

⁵⁶⁰ 玉井が、ベルリンで1898年から刊行したドイツ語の新聞で、日本語名は『東亜』〔湯郷 1898: 128〕。デ・ロス・レイエスの主張は『東亜』第18号に載っている。

掲げた。したがって、新聞は創刊から最終号まで、完全独立を主張し、アメリカ帝国主義を批判し、アメリカの軍政・民政に関しても拒否の姿勢を貫いた。新聞は、アメリカ国民全体を敵に回さないために、アメリカ帝国主義を敵にする必要があったが、現実には戦場で戦っている相手はアメリカ兵であり、アメリカ兵に対する記述は揺れていた。

アメリカニスタに対する批判も一貫していたが、その中で、イラストラドス、特にフィリピン共和国の内閣にいた人々に対しての記述は、新聞を発行していた約1年半の間に大きな変化があった。創刊当初は内閣の中に革命を前提とした穏健派と急進派がおり、内閣自体が分裂しているわけではないとの主張をしていたが、穏健派が次々とアメリカ支持に回り、フェデラル党を作るに至ると、分裂を隠すことはしなくなった。1899年終わりから1900年前半にかけては、アメリカ支持者を単純に非難していたが、その後、1900年11月にマッキンレー大統領が再選するまでは、共和国第2次内閣の閣僚でアメリカ支持に転向したパテルノとその仲間を批判した。1900年12月にフェデラル党が結党されると、非難の矛先を、結党に参加した人々に変えた。領外革命家たちにとって、近代国家建設をアメリカに委ねた領内の革命家たちは、ただの裏切り者でしかなかった。

いわゆる「近代化」も一貫して主張されていたが、アギナルド降伏後はアギナルド後の新体制構築の記事に時間と紙面を割かれてしまい、扱いがなくなった。デ・ロス・レイエスや新聞が意味する近代化は、日本がかつて行ったような欧米化であった。しかし、記述にアメリカを入れるのに抵抗があったのか、それとも心理的に宗主国スペインの影響を受けたのかはわからないが、新聞は欧米化ではなく「ヨーロッパ化」という言葉を使った。欧米化を理想としたために、新聞では差別に関する主張にも矛盾をはらむことになった。彼らは人種などの差別を非難したが、ヨーロッパ化したキリスト教徒の「自分たち」と、ムスリムの「ホロの人々」の間で、近代化していないホロへの差別、つまりホロへの優越感情を持っていた。その差別を、ホロがアメリカとベイツ協定を結んだことに置き換えて、負の感情を誤魔化した。教育言語として現地語、タガログ語、英語を推奨し、フィリピン領内の共通言語をタガログと英語に設定した時点で、ルソン優位の感覚も現れていた。教育改革も、ヨーロッパの教育システムの導入を提案するものであり、ムスリムへの配慮はあまり見られないものであった。スペイン化した文化と自己は、デ・ロス・レイエスなど一部のフィリピン人イラストラドスの誇りであり、新聞は「ヤンキー」と「自分たち」の差異を、このスペイン性に求めた。したがって比米戦争下におけるこの時点では、新聞はスペインとの人的・文化的繋がりを重要視し、強調した。

宗教に関しても、修道士の追放、聖職者のフィリピン人化を主張することは一貫していた。創刊時は、比米戦争勃発後に就任したスペイン人のノサレダ・マニラ大司教に対して批判を行っていたが、アメリカから教皇代理のシャペルがフィリピンに来たことで、修道士や聖職者に関する問題が改善されない原因を、シャペルへと転化するようになった。聖職者の現地人化に関して、短時間にラディカルな改革を求める新聞側と、時間をかけて様子を見ようとするシャペル側との溝は埋まることはなかった。

戦争の容認もコンスタントに主張された。新聞は独立したフィリピンを正しい姿と考えて、「選択の余地のない手段」として「フィリピン人の政府」が戦争をしているのだとして「正戦」を主張し続けた。アナーキズムに関しては、フィリピン人国家設立の主張との整合性もあるので、脅しの手段として利用するに留まり、フェデラル党結成後になると言及しなくなった。強いて言うなら、アナルコ・サンディカリズムの影響が見られるくらいであった。フェデラル党結成のインパクトは大きく、国民全員が革命を支持しているという想定の下に行っていた国民投票の主張も、フェデラル党の結成後は立ち消えになってしまった。正戦はある意味、近代の戦争法とリンクした考え方であるが、アナーキズムは近代法とは正反対に位置するものであり、近代国家の設立を主張していくのには邪魔な存在であった。

新聞の記述からも、フィリピン領内のイラストラドスがアメリカ併合支持へ流れ、革命が弱体化していくのが見て取れる。しかし、欧米諸国から認められるために、生活習慣などのヨーロッパ化を主張した時点で、欧米の価値観を無条件に受け入れていることを読者に示し、この新聞は併合派に転向したアメリカ支持者たちと変わらない価値観を提示することになった。当時の国際社会で実をとるために、英語を学ぶべき⁵⁶¹と主張したということは、すでに精神的には欧米の商業覇権に服従していたと言っても過言ではない。独立を叫ぶこの新聞も、国内外のアメリカニスタ同様、アメリカ併合派と同じ道をたどっていたのである。

この新聞内において、アジア、特に中国に関する記述も散見はされるが、それはメディアを通して得た知識であった。デ・ロス・レイエスがフィリピンを去ったのは 1897 年であった。彼がフィリピンにいなかった間に、日本ではポンセが孫逸仙と交流を持ち、ラモ

⁵⁶¹ 1899 年 9 月 7 日のマヌエル・セレス・イ・ブルゴス Manuel Xerez y Burgos の証言によると、アメリカがフィリピンに来てから、英語を学びたいために、学校に通う子供が増加した〔*Philippine Commission* 1900: Vol. II 412〕。

スと懇意になった参謀本部がフィリピン領内で活動した。アジアでの活動はデ・ロス・レイエスにも、ある程度伝わってはいたのであろうが、新聞からは、ポンセの日本でのスピーチが掲載された以外、その他の状況を読み取ることができない。新聞の中では、中国の状況も、ボア戦争と同等の扱いか、若干ボア戦争の方に関心が向いており、その点からも、この新聞は、「列強と、後発植民地主義の日本とアメリカがせめぎ合い、有象無象が利益を求めて暗躍するアジア」に置かれたフィリピンとフィリピン人革命家の、当時の状況を確実に捕えておらず、フィリピンをアジアの中で見るというよりも、欧米に組み込んだロジックで捉えている傾向があることは否めない。

新聞が併合派やアメリカ支持者を批判すればする程、フィリピン内に革命離れが起きていることを、世間に知らせる結果になった。また、新聞の厳しいアメリカ批判は、アメリカ当局による弾圧を招いた。弾圧は、読者離れ、購読料の未徴収の増加、協力者の不足などを引き起こした。その後アギナルドが降伏し、アギナルド自身が親米宣言をしたことで、この新聞は創刊時から維持してきた理念を保てなくなり、廃刊に至った。新聞に関わった一部の人々は、香港に行き活動を続けたが、デ・ロス・レイエス自身はフィリピンに戻る道を選んだ⁵⁶²。

⁵⁶² アメリカ軍の史料によると、フィリピンに戻ったデ・ロス・レイエスは1901年11月28日、12月8日、12月10日にアギナルドに面会している〔PIR 903-5〕。この史料によると、アメリカ軍によるデ・ロス・レイエスの肩書は、「扇動者、マドリッドで発行された反乱者の新聞『フィリピナス・アンテ・エウロパ』の編集者 Agitator, Editor of “Filipinas ante Europa” an insurgent newspaper published in Madrid」となっている。

第4章 在香港アメリカ（総）領事報告から見た 香港委員会と在香港アメリカ（総）領事の対応

第1章で述べたように、香港は革命時の領外活動の拠点となった地であった。その香港において香港委員会の活動をつぶさに見ていたのは、在香港アメリカ（総）領事のワイルドマンであった。彼の国務省への報告には香港委員会の活動が多く記されている。特に1899年以降、彼は報告書内で執拗に香港委員会の批判を繰り返し、妨害工作を報告した。ワイルドマン総領事の非難と妨害は、香港委員会の活動に大きな影響を与えた。しかし、ワイルドマン総領事は、なぜ香港委員会を執拗に妨害したのだろうか。愛国心からの行動であったのだろうか。彼の行動を見直してみると、そこには別の姿が見えてくる。したがって、第4章では再度香港に立ち戻り、アメリカ（総）領事館報告から見た香港委員会と、武器調達を中心とした委員会の活動、そして香港委員会の最大の障害となったワイルドマン（総）領事の対応を細かく見ていきたい。

第1章では活動の全体像を説明するために、敢えて複雑な武器調達の話に言及することを避けた。しかし、武器調達は、プロパガンダとともに領外活動の主たる目的の1つであり、避けて通ることのできないトピックである。しかも、ワイルドマン総領事の報告書とPIRを組み合わせると、完全とは言えないが香港での武器調達の詳細もある程度明らかになる。本章では、ワイルドマン（総）領事の報告書を丁寧に読み込み、必要に応じてPIRや他の史料と組み合わせながら、ワイルドマン（総）領事の革命家たちへの感情・行動、そして香港委員会の武器調達や活動を明らかにしていきたい。

先行研究⁵⁶³として（総）領事館報告書を使ってアメリカ領事たちの活動を明らかにした
ものとしては：

Kennedy, Charles Stuart, *A History of the United States Consular Service, 1776-1914*,
Westport: Greenwood Press, 1990.

Kennedy（ケネディー）は、米西戦争期の在マニラ・アメリカ領事、在シンガポ

⁵⁶³ サニエルの論文でも、香港の武器調達には多少触れているが、比米戦争時について18行ほど触れているだけなので、先行研究には含めない [Saniel 1969: 251-252]。

ール・アメリカ総領事、在香港アメリカ（総）領事の報告書をもとに、彼らの活動を分析している。ケネディーは米西戦争期における総領事と領事の活動に注目し、主に上記 3 人の書いた報告書を利用して彼らの活動を分析している。そして、米西戦争初期、アメリカ本国からの指示の無い時に、この 3 人が愛国心から単独でアギナルドを支援したという構図を描いた。しかし、比米戦争には言及していないため、比米戦争期に、「米西戦争期の総括」として書かれた、ワイルドマン（総）領事が関わった武器調達に関する報告書には触れていない。ケネディーは領事側の報告書だけを使い、アメリカ人の視点からのみ書いているので、3 人の行動の理由を「愛国心」に置き、アメリカの領事や総領事の報告書の矛盾点には、ほとんど触れていない。

武器密輸という問題はアンダーグラウンドな活動が多く、その活動をトレースすることは非常に難しい。しかも、PIR に残る革命家たちの手紙の記述は、第 3 者が手紙を偶然見たことを考え、すぐには理解できないように書かれ、断片的で、誰が、いつ、何を、どうしたのかが分からない。その上、武器調達が失敗した際に、手紙の筆者である革命家が責任をとらなくていいように、そして他の革命家から恨みを買わないように、物事の過程や責任の所在をはっきりとは書いていない。したがって、本章では、香港（総）領事館報告書を中心に、PIR やその他の史料を照らし合わせながら、香港委員会の活動やワイルドマン（総）領事の対応を検証していきたい。また、ワイルドマン（総）領事の性格的な特徴も、彼の行動を分析するに際して重要であるので、ワイルドマン（総）領事の性格が表れている文章なども積極的に引用し、その裏に隠された事実を明らかにしていきたい。

本章で主として使う史料は：

MS Despatches from U.S. Consuls in Hong Kong, 1844-1906 Volume 19 and 20 United States National Archives and Records Administration

である。以下本章では、香港領事館報告書、または 1898 年 7 月 1 日の総領事館格上げ後は、香港総領事館報告書と記し、報告書番号を記載する。その他、適宜 PIR などを使用する。

1. ラウンズヴィル・ワイルドマン在香港アメリカ（総）領事の略歴

『Spanish-American and Philippine-American Wars. A Political, Social, and Military History』によると、ワイルドマンは1864年3月19日、ニューヨークのバタヴィアに生まれ、ベンジャミン・ハリソン大統領下、1889年から3年間、シンガポール総領事を務めた。その後1894年から1897年までは、サン・フランシスコの『オーバーランド・マンズリーOverland Monthly』の編集者であった〔Tucker 2009: Vol.II 698〕。

ワイルドマンは1897年6月30日、ニューヨークにおいて、『オーバーランド・マンズリー』の便箋で、国務長官に宛てて香港領事の任命を受諾する手紙を送っている〔香港領事館報告書 No.なし〕。彼は1897年8月5日にサン・フランシスコを出発し、1897年9月9日、日本経由で香港に到着した〔香港領事館報告書 No.17〕。その後1897年10月25日、ワイルドマンは香港領事館を総領事館へと格上げすることを願い出て〔香港領事館報告書 No.17〕、翌年1898年7月1日、国務省の同年6月5日のインストラクションにしたがって、総領事就任の宣誓をした〔香港総領事館報告書 No.57〕。

米西戦争勃発後は総領事館の扱う仕事の量が増加したため、ワイルドマンは彼の兄弟の E. ワイルドマンを、副総領事に推薦した。E. ワイルドマンは同年10月2日、香港に到着し、10月10日付けの国務省宛ての手紙で副総領事就任受諾を行った。その後1899年5月5日、E. ワイルドマンは副総領事を辞任している。

比米戦争が始まると、ワイルドマン総領事は香港委員会を執拗に追い詰め始めた。1897年にワイルドマンが領事に就任し、彼が1901年2月末に死亡するまで、彼が国務省に送った201の報告のうち、フィリピン人及びフィリピン人革命家について言及した報告は39にも及ぶ⁵⁶⁴。比較対象となる事例が他にないので、この数が多いのか少ないのかについて言及はできないが、通商のサポートという（総）領事本来の職務からは大きく逸脱していることは確かである。香港委員会関係のレポートは他の香港（総）領事館報告書に比べ、非常に力のこもった長文のレポートも存在する。1899年4月6日の香港総領事館報告書 No.104 などは、31ページにも及ぶものであった。通常の領事館業務以外にフィリピン人活動家及び香港委員会の問題を、これだけ長期に渡り、そして執拗に報告するのは異常と言わざるを得ない。

1899年6月と1900年6月、ワイルドマン総領事は休暇で日本に滞在した〔香港総領事館報告書 No.174、No.175〕⁵⁶⁵。しかし、一年半後の1901年2月21日、休暇のために一

⁵⁶⁴ 米西戦争関連の増員や要求は除いている。

⁵⁶⁵ これが単に休息目的なのか、それとも、香港委員会の武器調達調査のためであった

時帰国の途についてワイルドマン総領事とその家族は、乗船していた汽船「シティー・オブ・リオ・デ・ジャネイロ City of Rio de Janeiro」がサン・フランシスコ湾内で座礁し、溺死した。ワイルドマン総領事の死後から、香港総領事報告書 Vol.20 の最後となる 1901 年 9 月 23 日までの総領事館報告書をチェックしてみたが、「総領事代理」または後任の「総領事」からの、香港委員会及びフィリピン革命に関連する報告は一切行われておらず、通常の領事報告がなされているだけである。1901 年 3 月には、アギナルドが降伏したとはいえ、ワイルドマン総領事の死後も香港委員会は香港に存在し続けていたのにもかかわらず、ワイルドマン総領事の後任は、香港委員会にまったく触れていない。このことから、ワイルドマン（総）領事の香港委員会およびフィリピン情勢への入れ込みは尋常ではなかったことが伺える。

2. ラウンズヴィル・ワイルドマン在香港アメリカ（総）領事在任中の香港（総）領事館について

アメリカは 1843 年から領事を香港に置いた。ワイルドマンは前節で述べたように、1897 年に香港領事に任命された。その後米西戦争が始まると、香港（総）領事館の仕事は激増し、ワイルドマン総領事は何度も増員の要求を国務省に行った。最初は米西戦争に関する業務の増加による増員要請であったが、米西戦争終了後もアメリカ軍がフィリピンに駐留することになり、駐留軍のサポートを香港総領事館が担う必要性が生まれ、増員継続の要請を行わなければならなかった。情報の集散地、物資調達地という点では、香港委員会と同じ機能を、在香港アメリカ（総）領事館も担わされたのである。

ワイルドマン総領事からの最初の増員要請は 1898 年 7 月 5 日であった〔香港総領事館報告 No.58〕。5 月 1 日のマニラ湾海戦勝利後にアメリカ艦隊はカビテに上陸し、6 月 30 日には陸戦部隊がカビテに到着した。増加する仕事を前にワイルドマン総領事は、陸海軍の 30 袋にも及ぶ郵便を毎日受け取り、重さを計り、それに応じて切手を貼り、再度郵便局に投函しに行く業務や、マニラからの物品の購入要請に応じて、物品を購入してマニラへ送る業務などで、増員が必要となったと以下のように訴えている：

しかし月が経つほどに仕事は増え続け、暑い季節が来て、我々は仕事での重い負担を

のかは不明である。シンガポール総領事館報告書、または外務省外交史料館文書の来日フィリピン人の記録によると、在シンガポール総領事やフィリピン人も、「保養地」として日本を利用していた。

担うことが不可能になってきていることがわかる。オフィスでは今、艦隊と陸軍の事務のほとんど全てを行っている。我々は双方に行く⁵⁶⁶全てのメールを受け取り、取り扱っている。そして、アメリカ宛ての艦隊の手紙の全てに切手を貼っている。

But as months go by and the work increases and the hot weather comes on, we find it impossible to keep up the strain, The office now does nearly all the clerical work of the Fleet and Army. We receive and handle all mails going both ways, and put postage stamps on all Fleet letters going to America.

[香港総領事館報告 No.58]

この時点ではまだマニラと香港の海底電線は修復されておらず、在香港アメリカ総領事館は、米西戦争でのロジスティクスの全てを担わなくてはならなかった。その後、陸軍の増強部隊がマニラに到着したことを考えると、香港総領事館の仕事量は上記以上に増大したと思われる。

その増員に乗じて行われたのが、1898年7月28日に行われたワイルドマンの兄弟、E. ワイルドマンの副総領事への推挙であった。ワイルドマン総領事は E. ワイルドマンのことを国務省に、「Mr. ワイルドマンは私の兄弟で、生まれながらの共和黨員であり、そして共和黨員で奴隷制度廃止論者だった人物の息子である。彼は長年、『エルミラ・エコーズ』の編集者をしていた。彼はいつも党の政策で多忙である（後略）Mr. Wildman is my Brother, a life long Republican, the son of a Republican Abolitionist, and was for many years the Editor and Proprietor of the “Elmira Echoes”. He has always been active in party Politics,...」と、さりげなく共和黨員の父の存在をちらつかせながら紹介した〔香港総領事館報告書 No.64〕。前節でも述べたように、E. ワイルドマンは同年10月10日に副総領事に就任し、7ヵ月後に辞任した。

ワイルドマン総領事は、1898年10月5日、国務省に、副領事、通訳、検査官などの名前の確認と報告を行っている〔香港総領事館報告書 No.71〕。この報告書で、彼は香港総領事館がマニラ港の「クリーニング・ハウス Cleaning House」となっており、ビジネス、関税、港湾管理、中国人問題⁵⁶⁷に関して、全ての問い合わせが彼に行くことを述べている。1898年8月13日のアメリカの勝利の後、香港総領事館は、香港における雑務のみならず、

⁵⁶⁶ マニラからアメリカに行く手紙と、アメリカからマニラに行く手紙。

⁵⁶⁷ 米西戦争後アメリカ当局内では、アメリカがフィリピンにおいて中国人労働者をどのように扱うか、受け入れか締め出しか——で意見が分かれていた。

マニラへの「関所」としての仕事も課されていた。

その他でも予算の面で、香港総領事館は大きな問題に直面した。1898年11月4日の国務省への報告において、ワイルドマン総領事は国務省が通信費 352.43 ドル⁵⁶⁸を認めなかったことに対して異議を申し立て、その中で、米西戦争中には、マニラから船で送られてきた陸海軍の公的・私的メッセージを、香港から発信せねばならず、「戦争中、私は時に陸軍、海軍のため、そして私人たちのために⁵⁶⁹、1日に100もの電信を扱わねばならなかったというのが、私の唯一の言い訳である My only excuse is that during the war I handled sometimes as high as a hundred Cablegrams a day for the Army, Navy and for Private Individuals.」と反論している〔香港総領事館報告書 No.76〕。これは1章でも述べたように、アメリカ軍のマニラ湾での海底電線切断が影響している。

その後1899年7月17日に国務省から増員の継続が却下されたことについて、同月28日に反論を行い、マニラに行くアメリカ人のサポートや、商業的援助、そして来たるべきアメリカ民政下でのフィリピン全港の開放を鑑みて、却下を撤回するように求めている。このように、米西戦争、アメリカのマニラ占領、その後のアメリカ軍政による支配——とアメリカのフィリピン支配が進むにつれて、香港総領事館の仕事量と重要性も増し、「マニラ」との関係も密接になっていった。

3. ラウンズヴィル・ワイルドマン在香港アメリカ（総）領事のフィリピン人革命家・香港委員会への見解と態度の変化

3-1. 米西戦争初期から7月後半まで（1898年5月1日—7月25日）

ワイルドマン領事が、フィリピン人に関して国務省に初めて報告したのは、1897年11月3日の報告書内であった〔香港総領事館報告書 No.19〕。この報告書によると、ワイルドマン領事はアゴンシーリョの訪問を受け、アゴンシーリョから米西戦争勃発の際に、攻撃と防衛の面でフィリピン革命家たちと同盟することを提案された。しかし、ワイルドマン領事はこの提案を退けた。1897年末に、アギナルドは香港に「追放」されて来たが、その後半年ほどは領事館報告書に、アギナルド及びフィリピン人の記述は登場しない。

次にワイルドマンの報告書にフィリピン人の名前が挙がるのは、1898年5月6日の、

⁵⁶⁸ このドルはアメリカ総領事から国務省への報告であることから、ドル（金）であると思われる。

⁵⁶⁹ 私用の電信を打たされたという意味である。

D. コルテスやバーサなどの、フィリピン人富裕層のアメリカへの忠誠宣言を、マッキンレー大統領に送った時である〔香港領事館報告書 No.42〕。第1章でも述べたが、D. コルテスやバーサは、革命勃発前からスペインのフィリピン統治体制に反意を唱えて運動していた人々であった。ワイルドマン領事は、その後14日にも追加で4人のフィリピン人⁵⁷⁰の忠誠宣言をアメリカに送っている〔香港総領事館報告書 No.43〕。

1898年5月頃、ワイルドマン領事は革命軍への武器調達をサポートするために、香港のフィリピン人革命家たちと会っていたが、それについての詳細な報告書を国務省に挙げるのは1899年2月になってからである⁵⁷¹。

米西戦争初期、ワイルドマン領事は、在シンガポール・アメリカ総領事プラットから、香港にいるアメリカ海軍アジア艦隊のデューイ提督への電信を仲介し、武器調達の援助もした。したがって、米西戦争開始から1898年7月にかけての（総）領事館報告は、フィリピン人革命家は協力するに値する人物だというロジックで書かれており、フィリピン人に対してネガティブな印象の報告はあまり書かれていない。1898年5月27日と30日のアゴンシーリョからアギナルドへの手紙からは、アゴンシーリョが直接ワイルドマン領事と会っている様子も伺える〔PIR 471-8〕〔PIR 471-3〕。ワイルドマン総領事はシンガポール総領事を経験していることを理由に、自身はマレー系の人々に通じていると自負しており、1898年7月18日付けの報告書でフィリピン人についての見解を述べている〔香港領事館報告書 No.63〕。それをまとめると、以下の12点になる：

1. ワイルドマンは海峡植民地のマレー人たちの中で暮らした。ワイルドマン総領事はスルタンたちの名誉あるゲストにもなり、彼らの政府のシステムも知性も知っている。
2. フィリピン諸島の原住民 **Natives** はマレーの人種に属する。
3. アギナルド、アゴンシーリョ、サンディコは、どこの国でも、彼らの個々の部門でリーダーになりえる人物である。
4. 香港に住む富裕層は、どこにいても自分の銀行家と法律家を抱えるだろう。
5. 彼らは、第一に、アメリカとの併合のために戦っており、もしアメリカが併合を拒否すれば、独立するために戦うだろう。

⁵⁷⁰ セベリノ・ロテア・イ・ロペス Severino Rotea y Lopez、クラウディオ・ロペス Claudio Lopez、A.H. マルティ Marti、エウヘンシア・プローナ Eugenia Plona。

⁵⁷¹ 武器調達に関する詳しい説明は別節で行いたい。

6. アギナルドは私腹を肥やすために国を売ったと言われているが、実際は反乱による未亡人や孤児にお金を渡す目的を持っている。
7. 1897年9月⁵⁷²、アギナルドと彼のリーダーたちは、スペイン政府との契約で、武器を置いた。
8. アギナルドはシンガポールで、プラット総領事を通じてデューイ提督と交渉をしていた。
9. 「カビテに到着するとすぐ、アギナルドは香港出発前にワイルドマンによってアウトラインが書かれた宣言を発した。それは略奪を禁止し、中立の人々を不当に扱うことに刑事罰を課す、というものであった *Immediately on the arrival of Aguinaldo at Cavite⁵⁷³ he issued a proclamation which I⁵⁷⁴ had outlined for him before he left forbidding pillage, and making it criminal offence to maltreat neutrals*」
10. アギナルドは独裁政府を組織した。もし彼が原住民たちへのコントロールを維持し続けたいと望むなら、絶対的に必要なステップである。その日からアギナルドは戦場で成功し続け、政府の長として、威厳と正義を持ち続けている。
11. アギナルドは、スペイン人とドイツ人からアプローチを受けている。アギナルドはデューイ提督、O. F. ウィリアムズ領事、香港委員会によって注意深く見られている。
12. アメリカがフィリピン諸島を保持しなければ、彼らは独立要求を行う。

[香港総領事館報告書 No.63]

7. のスペイン政府との契約は、1897年12月に行われたビアク・ナ・バト協定を指すのだと思われる。この報告書が書かれた1898年7月18日の時点では、ワイルドマン総領事のフィリピン人に対する認識は、まだ不正確であった。つまり、ワイルドマン総領事は、米西戦争によるフィリピン人との一時的な協力という目先の出来事に囚われて、フィリピン人革命家たちの事情や経緯に詳しくなかったのであろう。ワイルドマン総領事は12. で、フィリピン人はアメリカとの併合を望んでいる、と国務省に報告している。ただし、これはワイルドマン総領事のアメリカ政府への記述であり、この報告書が彼の本心から作

⁵⁷² 史料の日付をそのまま記載した。

⁵⁷³ 史料通り。Cavite だと思われる。

⁵⁷⁴ ワイルドマン総領事。

られたものであったのかは、疑問である。なぜならこの時期は、米西戦争でのアメリカの勝利のために、フィリピン側と手を組んだと言う自身の行動を、正当化せねばならなかったからである。4-2 で触れるが、この時期、ワイルドマン総領事は革命側と共に武器調達を行っており、その点からも国務省には、フィリピン人に対して高い評価を下し、フィリピン人がアメリカとの併合を望んでいると主張せねばならなかった。

一方で、ワイルドマン総領事は7月25日、カビテのアギナルドに向けて、ワイルドマン総領事たちと一緒に協力して行動すればキューバのように自由になれるだろうと述べ、アメリカはキューバに自由を与えるために戦っているが、フィリピンに対しても同じ気持ちで臨んでいるという手紙を送っている〔Taylor 1971: Vol. IV 260-261〕。

3-2. 米西戦争後期から比米戦争勃発まで（1898年8月8日—1899年2月4日）

以下の3点、1) 武器調達問題でワイルドマン総領事とフィリピン人革命家との関係がこじれ始めた、2) マニラにおける米西戦争が終わりに近づいており、フィリピン人の協力を必要としなくなってきた、3) 革命側のプロパガンダ活動によって、ワイルドマン総領事、プラット総領事、デューイ提督の3人と、フィリピン人革命家の協力関係が新聞に掲載されるようになってきた——から、8月に入るとワイルドマン総領事の記述に、フィリピン人革命家と距離を置くような変化が現れ始めた。その兆しは、1898年8月8日の国務次官補 Assistant Secretary of State ジョン・バセット・ムーア John Bassett Moore (ムーア)⁵⁷⁵宛ての電報の中に見られる。翌9日に、ワイルドマン総領事は、米西戦争開始当時の詳細を国務省宛ての報告書に記しており、以下のように主張した：

1. 香港発の新聞のレポートに関して、ワイルドマン総領事が説明を行うことが正しいことだと思う。
2. 「第63号でウィリアムズ⁵⁷⁶領事と私⁵⁷⁷が、反乱者たち Insurgents がとる態度のアウトラインを簡単に書いたと述べた In my Dispatch No⁵⁷⁸ 63 of July 18th 1898, I tried to briefly outline the position Consul Williams and myself have taken towards the Insurgents.」が、ワイルドマン領事にはそれは必要なことで

⁵⁷⁵ ムーア (1860-1947) は、1898年4月から9月まで、国務次官補を務めた。その後パリ和平会議にもかかわった。

⁵⁷⁶ O. F. ウィリアムズ在マニラ・アメリカ領事。

⁵⁷⁷ ワイルドマン領事。

⁵⁷⁸ 史料通り。ピリオドはない。

あった。

3. ワイルドマン領事と O. F. ウィリアムズ領事は、当時、アギナルドを他のライバルたちよりも、リーダーシップの資質があると考えた。
4. ワイルドマン領事と O. F. ウィリアムズ領事は、彼に何の宣言もさせていない。させたことは、1) フィリピン諸島のアメリカ軍司令官に躊躇なくしたがう、2) 近代化されたライン上で戦争を行う、ということである。
5. 当時アギナルドは 1 ヶ月近く *nearly a month*、領事館を出入りし、ワイルドマン領事はアギナルドの才能を見定めた。ワイルドマン領事はアギナルドに何がしかの影響を与え、デューイ提督と O. F. ウィリアムズ領事の認識がつながるように努力した。
6. アギナルドは度あるごとに、ワイルドマン領事に手紙を書いた。
7. ワイルドマン領事は、アギナルドがフィリピン共和国の大統領になると信じていた。
8. ワイルドマン領事は、フィリピン人富裕層がアメリカ国民になりたいことを知っていた。一方、教育を受けていない大衆は、修道士の支配から救うものであれば、どんな支配でも満足するだろう。
9. アギナルドとの書簡のやり取りは極めて個人的なものである。アギナルドの手紙は子供っぽい。アギナルドは歴史で作る姿よりも、彼が運ぶサトウキビか、彼が着用する甲冑に興味がある。
10. アギナルドと彼のフンタ⁵⁷⁹は過激 *excessive* であり、とても疲れる。
11. アギナルドは、むら気のある人物 *a man of petty mood* である。
12. O. F. ウィリアムズ領事から、アギナルドの成功についてお祝いを述べるような友好的な手紙を書くようにリクエストされた。
13. 故に、ムーア國務次官補が言及したデイリー・メールの記事は、当時ワイルドマン領事の行動を間違っって解釈している。
14. アギナルドは 3 週間も、デューイ提督が言うところのうぬぼれの強い人 *a Big Head*⁵⁸⁰として振る舞い、不機嫌な子供っぽい手紙を書いてきたので、ワイルド

⁵⁷⁹ 香港委員会。

⁵⁸⁰ 史料でも大文字になっていることから、ワイルドマン総領事が強調したかった単語である。

マン領事はアギナルドに対して、アギナルドがアメリカ軍に協力すれば、歴史の中でアギナルドの名前は栄光あるものになると、そしてアメリカはキューバでキューバ人を救うために戦っており、アメリカはスペインの軛を投げ捨てるために戦っている、との手紙を書いた。

[香港総領事館報告書 No.66]

1898年7月のNo.63で、アギナルドの宣言のアウトラインはワイルドマン総領事が書いたものだと言ったにもかかわらず、ワイルドマン総領事は8月のNo.66では突然、O. F. ウィリアムズ領事との共同作業であることを主張し始めた。ワイルドマン総領事が8月の報告書で引き合いに出した7月のNo.63の記述には、宣言のアウトラインを書いた人物としてO. F. ウィリアムズ領事の名前はない。しかし、8月の報告書では、7月の報告書にO. F. ウィリアムズ領事の名前を入れたように装っている。それに加えて8月の報告書では、アギナルドの勝利を祝う手紙もO. F. ウィリアムズ領事に頼まれたから書いたと述べている。8月の報告書は、明らかにO. F. ウィリアムズ領事への責任転嫁が見られる。

アギナルドの性格を見極める時間を、1ヵ月近くと書いた部分にも疑問が残る。ワイルドマン総領事は自身の報告書で、アギナルドがシンガポールから戻ってきた日を1898年5月2日と記している〔香港総領事館報告書 No.63〕⁵⁸¹。そのワイルドマン総領事の記述を信用し、アギナルドが5月17日にカビテに向けて出発したことを考えると、1898年5月当時、領事であったワイルドマンとアギナルドが会う時間は約2週間しかなかったはずである。しかし、ワイルドマン総領事はここで1ヵ月近くという言葉を使い、自分は十分に彼を観察したにもかかわらず見誤ったのだというニュアンスを含ませている。したがって、ワイルドマン総領事の報告書を読む場合は、十分な注意が必要である。マニラにおける米西戦争の終了を目前にして、ワイルドマンは、彼とO. F. ウィリアムズ領事、デューイ提督の3人がアギナルドと手を組んだ理由は、あくまでも彼を利用するためであり、1898年5月の時点で、彼らはアギナルドにリーダーの資質があると考えていたが、今(1898年8月)になってみると、それは見当違いであったという主張を展開し、米西戦争中のワイルドマン自身の行動を、正当化するのに腐心した。No.63と比べてみると、No.66では、ワイルドマン総領事がアギナルドと香港委員会に対してネガティブな感情を隠そうとしていないのも、その表れであると言える。

⁵⁸¹ 第1章で述べたように、テイラーの5巻本の革命側の文書の翻訳では5月1日2時に香港に到着したとなっている〔Taylor 1971: Vol. I 448〕。

その後ワイルドマン総領事は国務省にマニラへの休暇を願い出たが、1898年10月5日、国務省の第3国務次官補のトーマス・ウイルバー・クライドラーThomas Wilber Cridler（クライドラー）は電報をワイルドマン総領事に打ち、休暇願いを却下した〔香港総領事館報告書 No.73〕。しかし、ワイルドマン総領事はあきらめず、1898年10月12日、国務省に対して、この休暇願の理由を説明した。そして、国務省が米西戦争開始から以降、フィリピン問題に関してワイルドマン総領事に意見を求めなかったことを非難し、休暇を再度、願い出た〔香港総領事館報告書 No.73〕。この報告書の中でワイルドマン総領事は、フィリピン人はマレー人であるから、海峡植民地に住んだことがあるワイルドマン総領事には、マレー人が理解できるとの自信を示して、以下のように述べた：

しかしながら、私はここで頼まれもしないアドバイスを提供することはしたくない。しかし、私は私がアギナルドに影響を与えることができるのだと自覚していることを、そして彼と彼の暫定政府を、完全にアメリカのライン内に留めることができるのだと自覚していることを、私自身が記載しておきたいと願うだけなのである。

However I do not here intend to offer any unsolicited advice, but I merely wish to put myself on record by saying that I know that I can influence Aguinaldo, and can hold him and his Provisional Government absolutely in line with American policy and American interest.

〔香港総領事館報告書 No.73〕

この時点でワイルドマン総領事は、自信過剰とも思えるくらいに、自身のアギナルドへの影響力を過大に評価した。結局同年11月に、ワイルドマンの代わりに、兄弟のE. ワイルドマン副総領事がマロロスにあるアギナルドの司令部を訪ねた〔E. Wildman 150-157〕⁵⁸²。

1899年8月19日の国務省への報告書では、比米戦争勃発前の香港委員会内の様子が報告された〔香港総領事館報告書 No.133〕。この報告書内には、以下のような記述がある：

ここで1月4日⁵⁸³に行われた香港委員会のミーティングで（その全レポートは翌日私⁵⁸⁴に届いた）、委員会の戦争支持派が勝ち、アギナルドに彼らの決定が打電された。

⁵⁸² E. ワイルドマンは、1901年に出版した本の中で、1898年11月にマニラーダグパン鉄道でマロロスに行き、アギナルドと会った様子を記している。アギナルドは彼に戦闘勃発を避けたいと述べ、E. ワイルドマンはアギナルドにスペイン人修道士の捕虜の問題について質問をした。そして話し合いの後、アギナルドがマロロスの自室を飾るための装飾品を部下に頼んでいる様子を見て驚いたと述べている〔E. Wildman 150-157〕。

⁵⁸³ 1899年1月4日。

⁵⁸⁴ ワイルドマン総領事。

その時戦争開始日として設定されたのは、1899年2月27日であった。この前もって決められていた開戦日が、実際にはもっと早まった日に、すなわち2月4日に起こってしまったと、国務省がマニラの当局者たちから知らされていたことは明白である。アギナルドの政府が、その設定された日にちより以前に戦闘が起きることを予期していなかったのは、彼らの弾薬・軍需品輸送隊、そして将校たちですら、前線に配置されていなかった事実が明確に示している。

At a meeting of the Junta here, January 4th (a full report of which reached me the next day) the war party of the Junta prevailed, and telegraphed their decision to Aguinaldo. The date set by then for the opening of hostilities was the 27th February 1899. The Department has no doubt been informed by the Manila authorities that this preconcerted outbreak actually occurred at an earlier date-to wit February 4th. That Aguinaldo's Government did not expect it until the date set, is clearly shown by the fact that neither their ammunition, their supply train, nor their officers were at the front.

〔香港総領事館報告書 No.133〕

報告書からは、1899年2月4日の比米戦争勃発はフィリピン人革命家が意図したものではないことを、そして国務省もそのことを承知していたことがわかる。この記述によって比米戦争中もその後も、アメリカ側が「フィリピン人が計画的に、2月4日に攻撃した」と主張していることは全くの嘘であることがわかる。

3-3. 比米戦争勃発後（1899年2月5日—）

革命側は、プラット総領事とアギナルドの会合や、米西戦争前のプラット総領事とワイルドマン領事によるデューイ提督への橋渡しを利用して、自分たちが有利になるようにプロパガンダ活動を活発化させた。このような状態の中で比米戦争が始まり、ワイルドマン総領事の革命家への、特に香港委員会への態度は、敵対的なものへと変化していった。

1898年8月13日にアメリカが勝利を収めた後のフィリピン人の感情に関し、ワイルドマン総領事は1899年2月25日の報告書の中で言及している。ワイルドマン総領事は、アゴンシーリョが1898年8月15日にマッキンレー大統領に宛てて、フィリピン・コミッションの中にフィリピン人を1~2名含めてほしいとの電報を打ったことを引き合いに出し、

「この電報を送った日、アゴンシーリョと彼の全ての仲間たちの唯一の恐怖は、この町⁵⁸⁵で公然と述べられているように、アメリカ合衆国が戦争後に彼らを見捨てることであった At the date of the sending of this Cablegram, the one great fear of Agoncillo and all his associates, as expressed publicly in this City, was that the United States would desert them after having finished the war」と述べている〔香港総領事館報告書 No.99〕。そして同報告書において、いかなる時もアメリカ側から独立の「約束」が革命家たちに対して行われたことはないと断言した。そして、1898年に香港でアメリカに忠誠宣言を行ったフィリピン人富裕層の中に、以下の2種類の人々、1) アメリカとの戦争の準備をしている者、2) そのままアメリカ併合の意見を持ち続ける者——がいることを指摘し、暗に国務省に対して、フィリピン人が行う忠誠宣言は信用できないと注意喚起を行った。

比米戦争勃発の原因に関するワイルドマン総領事の見解は、1899年6月5日の報告書の中に見られる〔香港総領事館報告書 No.118〕。その報告書でワイルドマン総領事は、武器を扱った商人たちについて語り、以下を述べた：

私⁵⁸⁶は、原住民とアメリカの間の平和的關係の全ての可能性を断ち切った2月4日の戦闘勃発を生じさせた一番強力な要因の1つは、香港とマロロスのフィリピン人リーダーたちへの、これら策士たちの悪い影響であると主張する。

I maintain that one of the most potent factors in bringing about the outbreak of February 4th which severed all possibilities of peaceful relations between the natives and Americans, was the bad influence of these adventurers on the Phillippino⁵⁸⁷ leaders in Hong Kong and Malolos.

〔香港総領事館報告書 No.118〕

つまり、第1次フィリピン委員会がフィリピンに到着し、フィリピン人との妥協点を見つける前に、革命側に武器を売ろうとする人々が、戦争を起こして武器を売り付けようとし、マロロスと香港のフィリピン人革命家たちがこれに乗せられてしまったことが原因だと、分析しているのである。

米西戦争前にデューイ提督とプラット総領事がアギナルドと関係を持ったことは、1900年に入ってから影響を及ぼした。1899年9月23日付けの、フィリピン側の革命の経緯

585 香港

586 ワイルドマン総領事。

587 スペルは史料通り。

についてのアギナルドの主張に対して⁵⁸⁸、プラット総領事は再度国務省に対して弁明をせねばならなかった⁵⁸⁹。1900年3月24日の記述でワイルドマン総領事は、アギナルドのこのステートメントを「ちんぶんかんぶん Greek」〔香港総領事館報告 No.166〕と形容している。特に1898年4月24日にシンガポールにおいてプラット総領事からデューイ提督に打たれた電信と、それに対するデューイ提督の返信に関して、ワイルドマン総領事は、当時領事だったワイルドマンは電信をリレーしただけで、実質的な返答はデューイ提督が行い、それはワイルドマン領事の「管轄範囲 Jurisdiction」〔香港総領事館報告 No.166〕ではない、との反論を行っている。そして、ワイルドマン領事、プラット総領事、デューイ提督が一番望んでいたのは併合であるとの見解を繰り返している〔香港総領事館報告 No.166〕。

1899年5月22日にワイルドマン総領事がまとめた、香港委員会に関する調査報告書では、香港委員会のことを、「ルソンの外にあるフィリピン人反乱者の最も有害な巢窟 the most mischievous nest of Filipino insurgent leaders outside of Luzon」と呼び、反乱軍への武器弾薬を供給し、反乱のバック・ボーンであると述べている〔香港総領事館報告書 No.143〕。同年8月19日の香港委員会に関するレポートでも、「これ（香港委員会）は緩やかに寄せ集められた難民たちの組織ではなく、その上、貿易の仲買機関として組織された委員会であり、その悪のパワーには際限がない。私は、これはフィリピン問題の平和的解決への、最大の障害物であると考える It is not a loosely thrown together body of refugees, but a body as well organized as a board of trade, whose power for evil is

⁵⁸⁸ 何に掲載されたものを国務省が読んだのかは不明であるが、このアギナルドの主張は「ドン・エミリオ・アギナルド、フィリピン共和国大統領による、フィリピン革命についての真相 *Reseña Verídica de la Revolución Filipina por Don Emilio Aguinaldo y Fami, Presidente de la República Filipina*」というタイトルで、『フィリピナス・アンテ・エウロパ』第7号（1900年1月25日）から第20号（1900年8月10日）にも掲載された。この主張は20パートに分かれたもので、革命のスタートから比米戦争が始まる2月4日までについて書かれ、最後にアメリカを激しく非難する内容になっている。この文章は1899年9月12日にブエンカミノがアメリカに行くアパシブレに、これを英訳してアメリカに持っていくように指示しているので〔PIR 396-3〕、プラット総領事はこの英訳版を読んだ可能性もある。しかし、この文章の作者はアギナルドではない可能性があり、この一部を訳したテイラーは彼の5巻本の中で、PIRにファイルされているのは、ブエンカミノの手書きの原稿であると述べている〔Taylor 1971: Vol. I 443〕。

⁵⁸⁹ この「ドン・エミリオ・アギナルド、フィリピン共和国大統領による、フィリピン革命についての真相 III 交渉」の中で、プラット総領事がデューイ提督はフィリピンの独立を認めると述べた旨がかかっている。また、ワイルドマン領事に武器調達として67,000ペソを渡したが着服されたとも述べている。

unlimited. I consider it the chief stumbling block in the way of a peaceful solution of the Philippine question」〔香港総領事館報告書 No.133〕と述べている。11月28日の報告でも、『ニュー・ヨーク・ジャーナル New York Journal』に言及し、全てのトラブルの原因は香港委員会であり、香港委員会は比米戦争において、起こってもいないアメリカ側の損害についてレポートすると苦言を呈している〔香港総領事館報告 No.148〕。そして香港委員会はワイルドマン総領事との戦いに満足していない、つまりワイルドマン総領事は香港委員会の活動を封じ込めているのだと自画自賛している。

1900年5月14日付けの報告書で、ワイルドマン総領事は、雨期に向けて香港委員会の活動が活発になることへの注意喚起を国務省に行っている。1899年から1900年にかけてワイルドマン総領事の反フィリピン革命、特に「反香港委員会」の感情はどんどん高まっていった。1900年8月27日にも、アメリカの新聞に、J. アレハンドリノ⁵⁹⁰からリチャード F. ペティグリュウ—Richard F. Pettigrew 上院議員と、ジョージ F. ホアー—Gorge F. Hoar 上院議員宛ての手紙が掲載された。このことが引き金となって、ワイルドマン総領事は国務省に再度、1898年5月当時のデューイ提督とフィリピン人革命家との橋渡しや、大鵬湾に停泊していたアメリカ艦隊に乗船したサンディコ、アレハンドリノ、ガルチトレナとの会合について詳しく説明をしなければならなくなった。

ワイルドマン総領事は2年越しの希望が叶って、1900年10月16日にマニラを訪問することができた〔香港総領事館報告 No.192〕。この中には、ワイルドマン総領事の香港での活動を含め、以下のことが書かれている：

1. 反乱政府の動きを監視するため、香港総領事館にジョン S.マロリー—John S. Mallory 中佐が配属された。
2. ワイルドマン総領事はアギナルドの政府の残党が、香港でいたたまれなくなるように努力している。その努力の障害となっているのが、アパシブレ、リエゴ・デ・ディオスなどの人物が、香港を出てマニラや他の国に行けることである。これでは、香港政庁が彼らを危険人物として追放したとしても、何の意味もなさない。
3. ワイルドマン総領事はタフトとともに、クラブ・インターナショナル Club International の舞踏会に出席した。そして、ブエンカミノ、パテルノ、パルド・デ・タベラのゲストになる榮譽を得た。「私⁵⁹¹の国への裏切者たち traitors to my

⁵⁹⁰ アレハンドリノだと思われる。

⁵⁹¹ この「私」はワイルドマン総領事である。

- country」や、「私の個人的な敵たち my personal enemies」と握手をさせられた。
4. 不和の種を蒔くことを反乱のリーダーに許している限り、平定はできない。
 5. 諸島の問題は、軍事よりも行政にあると考えられている。反乱は完全に壊滅させられた。しかし、2年前から平和には近づいていない。
 6. アメリカ軍は完全に諸島を管理し、重要な町は軍で満ちている。駐屯している軍はお互いに、そして司令部とも電信でつながっている。しかし、暗殺や強盗は日々起こっている。
 7. 治安は行政によって改善できない。中国人を諸島に入れてはいけない。、中国人の出国を促進させねばならない。
 8. 反乱側のリーダーは、国外追放されねばならない。
 9. カトリック教会は我々の敵かどうかを、見極めねばならない。
 10. フィリピンの港は開かれたものにする。関税は収入のためにあるもので、保護のためにあるものではない。
 11. ルソンは、海峡植民地よりも過ごしやすい。
 12. ワイルドマン総領事がアドバイスする方法が、かなりラディカルであることは自覚している。しかし、ワイルドマン総領事が支持している方法が、最後には採用されると確信している。

[香港総領事館報告 No.192]

この時点でワイルドマン総領事は、アメリカ当局に協力していたブエンカミノ、パテルノ、パルド・デ・タベラに対して、まだ「敵たち enemies」という認識を持っていた。しかし、「私の国への裏切り者たち」が誰を指すのかはわからない。彼は、フィリピンにおいて反乱が完全に壊滅させられたと述べる一方で、治安が改善されていないことに苛立ちを見せている。

3-4. イサベロ・アルタチョへの見解

この項では、アギナルドと袂を分かち、1899年夏にアメリカに対して忠誠宣言をしたアルタチョを、ワイルドマン総領事はどのように見ていたのかについて述べたい。

1899年7月25日の報告書は、アルタチョの経歴が書かれている。ここでは、アルタチョが1898年にアギナルドを相手取り、取り分を要求して訴訟を起こしたことや、その後フィリピンに戻りアギナルドに投獄され1899年6月末までルソン島内の刑務所をたらい

まわしにされた後、香港に逃れたことなどが述べられている〔香港総領事館報告書 No.126〕。同レポートでは、ワイルドマン総領事は、アルタチョを詳細にレポートした理由について、「アルタチョは後に諸島で傑出した人物になる可能性があるので、私はこのようにアルタチョの詳細に触れた I have gone thus into detail regarding Artacho, as it is possible that he may become a prominent figure later in the Islands」〔香港総領事館報告書 No.126〕と、そして「アルタチョはリーダーシップ競争から自主的に降りた。サンディコや他の人々は、アルタチョは、より⁵⁹²能力があり、最高指導者としてもより適していると彼らは考えていると私に繰り返し述べたのにもかかわらず Artacho withdrew from the contest for leadership, although Sandico and others repeatedly told me that they considered Artacho not only abler, but better fitted for the supreme command」〔香港総領事館報告書 No.126〕と述べている。つまり、ワイルドマン総領事は、米西戦争開始時のアルタチョとアギナルドの争いは、革命組織におけるリーダー争いであったとの見解を持っていた。そして、「アルタチョは北部ルソンに多くの支持者を持つ、影響力のある男であると知られている Artacho is known to be a very influential man, with a large following in Northern Luzon」〔香港総領事館報告書 No.126〕と、彼のルソンにおける潜在的な人気に注目した。

1899年11月13日、ワイルドマン総領事は、アルタチョが自費で出版した宣言⁵⁹³を英語に翻訳して国務省に送った〔香港総領事館報告書 No.145〕。1900年3月の報告書では、ワイルドマン総領事がアルタチョと、修道士問題について長時間話したことが書かれている。しかし、報告書を見る限り、ワイルドマン総領事とアルタチョの関係は、それほど親密なものには見えない。したがって、ワイルドマン総領事はアルタチョを、アメリカ統治下の北部ルソンにおいて、有利な駒の1つになると見ていたに過ぎないと考えるのが妥当であろう。

4. 武器・物品調達

武器調達に関するワイルドマン総領事の報告は、1899年2月16日から始まる。武器調達には主に香港委員会が関わっていた。武器調達問題は、先行研究などでも語られている

⁵⁹² この文章には比較の対象が明記されていないが、前後関係から「アギナルドより」という意味で比較級を使っている。

⁵⁹³ アルタチョは、1899年10月に自分の信念をつづった宣言と、アメリカ国民に向けた手紙、フィリピン人たちへの宣言を自費で印刷して配った。

が、全てが断片的でどのような経緯で推移したのかよくわからない。この章の最初でも述べたが、もともと武器調達にはアンダーグラウンドで行われることが多く、しかも、PIRに現存する多くの手紙は、武器調達に関しては、第三者に読まれる可能性を考えて、直接的な表現を避けており、数字も不明瞭にしていることが多い。したがって、これらの手紙からは、全体像を掴むことは難しい。また手紙の書き手も、調達に失敗した際に責任を問われることを恐れて、誰が、いつ、何を、どこで、どうやって——をきちんと書いていない。書き手が失敗を犯した張本人ではなくても、告げ口をしたとして関係者から恨みを買わないように、手紙ではやんわりと失敗理由をぼかしていることも多く⁵⁹⁴、その手紙だけでは調達の全体像を理解することができない。

香港領事館報告書でも武器調達に関しては、以下の2つの理由、1) 1つの調達行動に関して、複数の香港総領事報告書で細切れに詳細が語られている、2) 当事者が複数の報告書で証言を行っている——から、全ての報告書を1つに纏めないと武器調達の全体像がわからない。そのため、この節では武器調達に関わる8つの報告書を1つにまとめ、PIRと組み合わせて香港での武器調達の経緯を明らかにしたい〔香港総領事館報告書 No.98、No.104、No.118、No.133、No.142、No.166、No.169、No.197〕。特にNo.104では一部の武器調達に関わったジョセフ・ヘンリー・グリメス Joseph Henry Grimes (グリメス)⁵⁹⁵という人物がワイルドマン総領事に対して行ったかなり具体的な証言である。ワイルドマン総領事が証人となっている証言なので、ワイルドマン総領事に有利に記録されている可能性は高い。しかし、現時点でグリメスの証言以外の明確な証言及び記述が見つかっていないので、一部の調達にはグリメスの証言をベースにして武器調達の実態を見ていくこと

⁵⁹⁴ 武器調達は基本的には、香港委員会という小さな世界に住むフィリピン人革命家で行われているミッションであるため、なるべく、摩擦は避けたいという心理が働いたのであろう。

⁵⁹⁵ グリメスは香港生まれのイギリス臣民で、1899年3月14日当時、29歳であった。15年前に香港を離れていたが、1897年に上海のL.スピッツェル社に参加。本人の自白によると1898年2月に革命家と親しくなり、月125ドルと経費を受け取ることで革命側の武器調達に関係することになった。彼はスピッツェルとフィリピン人の間の通訳も行った〔香港総領事館報告 No.104〕。その後グリメスの逮捕や、分け前についての仲間割れが起こり、1899年3月14日、グリメスは、彼がかかわった武器調達に関して、ワイルドマンに証言を行った〔香港総領事館報告 No.104〕。1900年4月19日の『マニラ・タイムス』「ミスター・スピッツェルが説明している」〔*Manila Times*, April 19, 1900〕によると、ルイス・スピッツェル社のスピッツェルは、上記香港総領事館報告書 No.104で行ったグリメスの自白について、グリメスが中身を知らずにサインさせられた旨の手紙を、ワシントンの政府高官に送っている。

にする。武器密輸という特殊な活動のため、どうしても不明確な部分が出てきてしまうが、不明瞭ながらもその活動から、革命敗北の一因を作った出来事も見えてくるので、この節ではフィリピン革命側の史料である PIR も最大限に利用しながら、武器・物品調達をできる限り明らかにしたい⁵⁹⁶。

4-1. 汽船「アビー」を使った調達

1898 年 5 月から革命側の海外での武器調達は本格的に行われるようになった。香港委員会ではいくつかの会社⁵⁹⁷を通して武器調達を行った。この汽船「アビー Abbey」を使った調達では、天津のルイス・スピッツェル社 Louis Spitzel and Co. のパートナーの W. F. シルベスター W. F. Sylvester (シルベスター)⁵⁹⁸がアギナルドの代理となり、この会社に雇われたグリメスが計画の推進者となった。グリメスは米西戦争宣言の前にアゴンシーリョに会い、アゴンシーリョのリクエストで、上海に住むフィリピン人のブエナVENTOURA Buenaventura⁵⁹⁹という男と面会し、ブエナVENTOURAと共に香港に戻った。アゴンシーリョは1万丁のライフルと弾薬の調達をグリメスに依頼した。その後グリメスはアゴンシーリョに頼まれて武器購入の資金援助を要請するために、デューイ提督の旗艦「オリンピア」に乗船し、アゴンシーリョのメッセージを、海軍将校 Flag Lieutenant のトーマス M. ブランバイ Thomas M. Brumby (ブランバイ) 大尉を通してデューイ提督に渡してもらった。これに対してデューイ提督は、革命家を援助する権限はないが、スペインと戦うために、革命家が入手した戦争必需品全てを、デューイ提督の輸送船でルソンに運ぶ意思

⁵⁹⁶ PIR に関しては、随時フォルダー番号を掲載する。

⁵⁹⁷ これらの会社は会社という名前はついていたが、違法と合法の間を渡り歩くような活動を行って利益を得るような集団であった。

⁵⁹⁸ シルベスター (別名 W. F. スターリー Sutterlee) のことをワイルドマン総領事は、反乱者のために、香港またはこの沿岸にある武器・弾薬をルソンに密輸入する組織の、頭か主導者 moving spirit [香港総領事館報告書 No.98] と述べている。同報告書 No.98 でワイルドマンは、シルベスターはフィラデルフィアにあったキーン・スターリー社 Keen. Sutterlee and Co. の社長であったが、1895年にその会社は消滅しており、シルベスターに関しては、フィラデルフィアのスミス刑事部長がよく知っているはずだと報告している。1899年1月26日の香港のデ・サントスからアギナルドの手紙でデ・サントスは、シルベスターは彼の本名ではないと述べている。

⁵⁹⁹ 1896年スペイン政府から大隈外務大臣に宛てられた手紙の翻訳では、マニラに於いて行われた裁判の様子が記されており、当時ラモスなどと交流のあった人物の中にビュエナヴァンチュラという名前が記載されている [外務省外交史料館文書 米西戦争一件 雑第一巻 比律賓島独立ノ陰謀ヲ企テタル在本邦西班牙国人ノ件ニ関シ本邦注筋同国公使ヨリ申出ノ件 235]。このビュエナヴァンチュラとブエナVENTOURAは同一人物だと思われる。

はあると彼に伝えた。しかし、次の武器調達で、彼らはデューイ提督を利用しなかった。

1898年5月末にシルベスターが香港に来て、アゴンシーリョや他の革命家たちと毎日連絡をとった⁶⁰⁰。しかし、米西戦争中、中立を宣言している香港からフィリピン向けの武器を船積みすることは、香港政庁が許可しないことは明白だったので、武器は天津向けであると当局に申請して船積み許可を得た。香港のアゴンシーリョと思われる人物から敬愛する友人に向けた手紙（両者ともに名前の記載なし）には、6日の夕方に、香港の近くのある港に向けて「パッシング Pasig」という汽船が出発し、その後調達を行い、調達品の船積みが終われば、上海から持ってきたマキシム・ガンを載せ、グリメスとシルベスターが乗船してフィリピンに向かうと書かれている〔PIR 540-3〕。

グリメスと香港委員会は、1898年6月7日に以下で契約を結んだ：

500 丁 ⁶⁰¹	11 ミリ・モーゼル・ライフル ⁶⁰²	10 ドル/1 丁	50,000 ドル ⁶⁰³
1,000,000	カートリッジ	33 ドル/1,000	33,000 ドル
2	マキシム・ガン		10,000 ドル
	船代		38,000 ドル
	糧食と雑費		7,000 ドル
	合計		138,000 ドル

5,000 丁のライフル、50 万カートリッジは香港のジームセン社 Siemssen and Co.⁶⁰⁴から運ばれた。革命側はグリメスに、契約金として 9 万ドルを渡した。残りの 48,000 ドル（メキシカン）は、5,000 丁のライフルとマキシム・ガン 2 砲が荷下ろしされた時点で支払われることになり、武器は「パッシング」に積み込まれた。同 6 月 7 日、グリメスは香港

⁶⁰⁰ 1900年4月19日の『マニラ・タイムズ』「ミスター・スピッツェルが説明している」〔*Manila Times*. April 19, 1900〕でスピッツェルは、当時シルベスターに対して、安全のためフィリピン人とはなくアメリカ人と取引するようにアドバイスしたと、言い訳をしている。この記事の中でスピッツェルは汽船「アビー」の件は知らなかったと述べ、彼に向けられている嫌疑の目に抗議している。ワイルドマン総領事はこの記事の感想として、汽船「パッシング」の購入代金は、フィリピン人側がチャータード・バンク・オブ・インディア・オーストラリア・アンド・チャイナから引き出されたお金ではないかと推測している〔香港総領事館報告書 No.169〕。

⁶⁰¹ 文章からすると、5,000 丁のタイプミスである可能性が高い。

⁶⁰² 1871年のモーゼル・モデルの変化形と思われる。

⁶⁰³ 計算は合わないが、史料通りに掲載した。数字に関しては PIR も香港総領事館報告書も間違いが多い。

⁶⁰⁴ ジームセン社に関しては、イギリス側も確認しており、植民地省 Colonial Office のルカスの 7 月 2 日の手紙には、植民地での法 Local law はジームセン社の方が熟知しているはずだとの記述がある〔イギリス国立公文書館文書 FO 881/7267 No.732-2〕。

のビクトリアに住むタン・アム・ユン Tang Aam Yung という人物から、この「パッシング」を購入していた。そして翌 6 月 8 日、「パッシング」はイギリスの登記所で登記され、「パッシング」関連の書類は全てイギリス臣民のグリメスの名前で作られた。

しかし、スペイン領事が香港政庁にクレームを入れた⁶⁰⁵。この事実は 1898 年 6 月 14 日付けの、香港委員会のベラルミノからアギナルドへの手紙でも確認できる⁶⁰⁶ [PIR 455-9]。6 月 20 日のアゴンシーリョからアギナルドへの手紙では、アゴンシーリョはシルベスターとグリメスの契約が「失敗」したと伝えており、失敗の原因を、裏切り者がいたからだとして述べている [PIR 477-6]。手紙によると、武器の船積みは天津向けとして申請していたが、そこにスペイン領事が異議を唱えたとなっている。名前の記載はないが、香港にいるフィリピン人の誰かがスペイン当局に情報を漏えいした。したがって、この時点で、この船積みは一度頓挫した。

シルベスターとグリメスは香港当局から船舶の保持は認められたが、7 月 8 日に港湾警察に武器を没収され、他の積荷は船から降ろすように命令された⁶⁰⁷。しかし、シルベスターとグリメスは、「パッシング」は天津向けの船であると主張し続けた。当時シルベスターは在広東アメリカ領事のエドワード・ベドロ Edward Bedloe (ベドロ) と親しかった。ベドロは中国政府への架空売買で、武器を広東に移すことをシルベスターに提案した。ベドロの助けで、香港当局に押収されていた武器を広東に移すことができた。7 月 20 日付けのアゴンシーリョからアギナルドへの手紙では、7 月 21 日の午前 2 時にグリメスが広東からアゴンシーリョのところに到着すると書かれている。その他にも、グリメスの情報として、汽船「パッシング」がイギリス船籍からアメリカ船籍へと変更された旨が記されている [PIR 471-2]。このアゴンシーリョの手紙によると、この時の武器調達の最終目的

⁶⁰⁵ この件に関しても、イギリス側の史料に記載がある。6 月 6 日の午後 2 時 55 分に香港当局は、イギリス本国から香港当局に向けて、3 万丁のモーゼルと 300 万発のカートリッジが、アメリカ提督あてに送られたとスペイン領事に対して連絡があったが、それに対して情報は得ていないと回答している [イギリス国立公文書館文書 FO881/7267]。このスペイン領事のクレームが、この調達を指していたかどうかは別として、スペイン領事がフィリピン向けの武器輸送に神経をとがらせていたことは確かであった。

⁶⁰⁶ この手紙では、この汽船「アビー」による武器調達と、後述する汽船「ウイン・フリー」による武器調達が平行して行われたことが伺える。

⁶⁰⁷ 興味深いことにテイラーの 5 巻本の中には、7 月 14 日のワイルドマン総領事からアギナルドの手紙が掲載されており、その手紙にはエバンスを使った調達（次の項で述べる）が失敗したことを謝り、汽船「パッシング」はマカオで搭載品を積み込み、そこから広東へ武器を積むために向かうと報告して、調達がうまく行くことを望んでいる旨が書かれている [Taylor 1971: Vol. IV 267]。

地は、バタンガス Batangas かタアル Taal であった。

両広総督 Viceroy が広東での検査後に購入を中止することを前提にして、ライフルを広東の副王に売ることに成功した。ところが近くの地域で反乱が起きたために、副王は 4,500 丁を手元に置き、500 丁だけをシルベスターに返した。しかし、粵海関の税務司 Commissioner of the Imperial Maritime Customs at Canton で、「アメリカ合衆国市民 American Citizen」のエドワード B. ドリュー Edward B. Drew（ドリュー）は、残りのライフル、カートリッジ、マキシム・ガンの船積みを許可しなかった。汽船「パッシング」の所有者はまだ、イギリス臣民のグリメスだったので、この船を名目上、アメリカ人のシルベスターに売却し船名も変更し、汽船「パッシング」はアメリカ船籍の汽船「アビー」に変更された。この売買でお金は動いていなかった。売買・委譲証明 Bill of Sale and Transfer は在広東アメリカ領事館で作られた。この武器をアギナルドの下に運ぶ人物のために、アゴンシーリョは 1898 年 8 月 1 日にアギナルドに手紙を書き、この手紙を持っていく人物が調達を行った人物である旨を記している [PIR 436-12]。そしてその後、1898 年 8 月 6 日付けの香港のアゴンシーリョからと思われるアギナルド宛の手紙では、ベドローが香港でシルベスターたちと話し合い、翌日にでも行動を起こすと述べたと報告している [PIR 493-6]。

「シンガポール向けのアメリカ人所有のアメリカ船籍の汽船の積荷が、ベドローに委ねられた」という形がとられたことで、ドリューは船積みを拒否できなくなった。その代りドリューは、シルベスターに 1 万ドル（メキシカン）の証書 Bond を預けるように要求した。1898 年 8 月 25 日、証書の日付から 6 週間以内に、500 丁のライフルと 50 万のカートリッジがシンガポールに到着し、シンガポールの「アビー」の船上で、シンガポール領事が証明書にサインして封かんし、その証明書が配達されたら契約が完了することで、合計 15,000 庫平銀 Kuping Taels の優良で合法的馬蹄銀 good and lawful Sycee silver をドリューに支払うことを約束した⁶⁰⁸。先の 10,000 ドル（メキシカン）の証書も、それまでドリューが預かることになった。

⁶⁰⁸ 史料において、この部分の記述はとても不明瞭だが、15,000 庫平両は期限内にシンガポールに届かなかった際のペナルティーではないかと推測される。この件に関しては、武器がシンガポールに届かず 15,000 両が支払われなかったと言うことで、1899 年 3 月 17 日にドリューからシルベスターに訴状が作成され、1899 年 3 月 25 日、アメリカ領事館員によって汽船「カレドニアン」の船上で、シルベスターに渡された [香港総領事館報告書 No.104]。

「アビー」はシンガポールに行くつもり、広東を出発した。広東を去る際、副王はドリューのリクエストに応じて、シンガポールに汽船が到着して証書がシルベスターに渡るまでは、武器代金 1,200 両（テール）Taels を支払わないとした。「アビー」の船長は G.W. エリス Ellis で、8 月 27 日ころに黄埔^{こっほ}を出発した。その時の積荷は以下であった：

496 丁のライフル

マキシム・ガン 2 砲

マキシム弾 2,000 ラウンズ

出発前に副領事の H.R. ウィリアムズ Williams (H.R. ウィリアムズ) ⁶⁰⁹が船と積み荷の全ての写真をとった。彼の任務は、フィリピン人にこれらの武器の使い方を教えることであった。シルベスターは、グリメスにデューイとワイルドマンが取引の全容を知っていると述べた。

グリメスを乗せた汽船「アビー」は、1898 年 8 月 31 日頃にバタンガスに到着した。グリメスは船を下りて、バコールのフィリピン人総司令部にいるアギナルドに報告しに行った。9 月 2 日にグリメスはアギナルドに会ったが、アギナルドはライフルの量が少ないことを残念がり、更なる武器調達を望んだ。グリメスはアギナルドからの新しい注文を持って、9 月の最初に、香港に向けてマニラを発った。9 月 2 日には、シルベスターも香港でアパシブレ⁶¹⁰と話し合いを行っている。[PIR 431-8]

スペイン側はこの動きを察知していた。8 月 13 日のスペインの降伏により、フィリピンにおける米西戦争は実質的に終了したとはいえ、フィリピンは諸島であり、他の地域や島々ではスペインの支配が続いている場所もあった。1898 年 9 月 3 日、イギリス外務省のフランシス・ハイド・ビリエ Francis Hyde Villiers のメモランダムでは、ファン・アントニオ・ラスコン・ナバロ Juan Antonio Rascón Navarro 在イギリス・スペイン大使が同日昼に訪ねてきて、革命側が香港で船を買い、スペインのコントロール下にある場所を攻撃するために、2 隻の船⁶¹¹が武装して、香港を出発しようとしていると述べたことが記されている [イギリス国立公文書館文書 FO 881/7267 No.890]。そして、同日、イギリス植民地

⁶⁰⁹ 在マニラ領事の O.F. ウィリアムズと区別するために、H.R. ウィリアムズと記す。

⁶¹⁰ アパシブレは同手紙の中で、シルベスターがアギナルドと面会を望んでいるので紹介状は書くが、シルベスターの人物像に関してはアギナルド自身で判断してほしいと述べ、アパシブレはシルベスターがフィリピン人革命家たちにとって便利だから使っていると書いている [PIR 431-8]。

⁶¹¹ 2 隻の内訳は不明である。

大臣のチェンバレンから香港当局者に対して、その船を阻止するようにとの命令が打電されている〔イギリス国立公文書館文書 FO 72/2097〕。スペイン側は香港委員会が、ビサヤなどのアメリカの非制圧地域を革命側が攻撃するために、武器調達をしていると考えていた。

1898年9月23日、ワイルドマン総領事は、イギリス船籍の「パッシング」が広東でアメリカ船籍の「アビー」と命名されたと、デューイ提督に電報を打った⁶¹²。その電報を受け、9月25日、アメリカの軍艦「マカロック」が「アビー」をバタンガスで捕まえた⁶¹³。

4-2. ジャクソン・アンド・エバンス社を使った調達

革命家たちはジャクソン・アンド・エバンス社 Messrs Jackson and Evans Co. を使った調達も行った。イギリス臣民のウォルター・ジャクソン Walter Jackson とアメリカ人のトーマス E. エバンス Tomas E. Evans (エバンス) ⁶¹⁴は、一時期、香港委員会の武器調達を引き受けていた。最初はジャクソンが革命家と連絡を取り、1898年5月1日の米西戦争マニラ湾海戦後、サンディゴとアルタチョから 15,000 ドルで、アギナルドと彼の部下たちをカビテまで送るようにとの依頼を受けたが、それは実行されなかった。その頃エバンスがバンコクから戻り、ジャクソンと一緒に仕事をするようになった。アギナルドは最終的には 17 日にアメリカの軍艦「マカロック」でカビテに向かったが、カビテに戻る前にエバンスが彼らのエージェントとして活動し、武器を購入してカビテまで届けることで、エバンスと合意に達していた。

1898年5月末、エバンスは第1回目の調達に成功し、デューイとの合意で 3,000 丁のモーゼル・ライフルと大量のカートリッジを陸揚げした。この陸揚げは、サンディゴが行った第1回目の調達であった〔PIR 401-1〕。当初第1回目の調達は、蒸気船に 21,000 ドル、船長に 15,000 ドル、2,000⁶¹⁵丁の銃剣なしのライフルに 14,000 ドル、20 万カートリ

⁶¹² なぜワイルドマン総領事がわざわざこのような電報を打ってアビーをデューイに捕まえさせたのか、その真意は不明である

⁶¹³ この後この汽船「アビー」による武器輸送は、何回かメディアで蒸し返されることになった。たとえば、1900年4月19日の『マニラ・タイムス』の「ミスター・スピッツェルが説明している」〔*Manila Times*. April 19, 1900〕で、スピッツェルが汽船「アビー」の件で弁明したことに関して、ワイルドマン総領事はスピッツェル側の動きに関して、国務省に注意喚起を行っている〔香港総領事館報告書 No.169〕。

⁶¹⁴ ワイルドマン総領事の報告書によると、エバンスは、アメリカ人で、No.5 Santo Tomas, Intramuros-Manila でビジネスを行う代理商 Commission merchant であった。

⁶¹⁵ 資料では 2,000,000 となっているが、史料の書き手の癖などから、2,000 だと思われる。

リッジを 6,000 ドルで行う予定であった。1898 年 5 月 27 日のアゴンシーリョからアギナルドに向けた手紙では、最終的に 2,000 丁の銃剣なしのライフルに 12,000 ペソ、20 万カートリッジに 6,000 ペソ、中国人名義の蒸気船に 21,000 ドルを支払い、この汽船の船長に 15,000 ペソと芋を運ぶことを許可し、ワイルドマン領事には 4,000⁶¹⁶を支払ったことを報告している [PIR 471-8]⁶¹⁷。そして、ライフルが少なくなった理由に関して、この調達を行ったサンディコの返答を引用して、船長が多く銃と武器を運ぶのを恐れたからだとして記している。第 1 回目の調達についてワイルドマン領事は、「(前略) ジャクソン・アンド・エバンスによる汽船「ウイン・フー」を使った武器の船舶輸送は、デューイ提督とウィリアムズ領事⁶¹⁸が承知し、同意されて行われた。(中略) デューイ提督は、彼の旗艦に横付けした「ウイン・フー」を迎え入れた...the shipment of arms by the “Wingfoo” to Cavite by Jackson & Evans, was with the knowledge and consent of Admiral Dewey and Consul Williams...Admiral Dewey received the “Wingfoo” alongside his Flagship...」[香港総領事館報告書 No.104] と、あくまでもデューイ提督と O. F. ウィリアムズ領事の同意があった上で行われたことを念押しして、ジャクソン・アンド・エバンスを利用した武器調達の成功を認めている。そして、「反乱者たちが限られた数の武器の供給を受けることを許可されるべきだというのは、1898 年 5 月時点ではよい戦争措置だと、考えられていた That the Insurgents should be allowed to supply themselves with a limited amount arms, was considered a good war measure in May 1898」[香港総領事館報告書 No.104] と、彼らの行動を自己弁護している。1900 年 3 月 24 日のワイルドマン総領事の報告書では、1898 年 5 月 8 日にデューイ提督の部下のブランバイ大尉が、当時のワイルドマン領事に、ワシントン D. C. からの電報を見せ、そこにはフィリピン諸島に関してデューイ提督に自由裁量を与えられた旨が書かれていたので、ワイルドマン領事はアギナルドに武器を渡すか否かの判断はデューイ提督にあったと認識していたと、責任回避のための言い訳をしている。

1898 年 5 月 23 日、アゴンシーリョは、アゴンシーリョがワイルドマン領事に会った際、

⁶¹⁶ 史料に通貨単位の記載はない。

⁶¹⁷ この調達に関して、アゴンシーリョは、最初の約束通りに調達を行ってれば費用が増大することもなかったと、特に船長への支払いと、蒸気船の購入に関してアギナルドに不満を述べ、これらの支払いがなければ、3,000 丁のライフルが見込めたと書いている。そのため、アゴンシーリョは船長と値引き交渉をしたと手紙で述べている。

⁶¹⁸ 在マニラ・アメリカ領事の O. F. ウィリアムズ。

ワイルドマン領事が、革命家たちに勝手に武器交渉を行わないように要求したと述べ、その理由をワイルドマン領事が武器調達に参加したいと望んでいるからではないかと推測している〔PIR401-4〕。アルタチョはルイス・スピッツェル社のシルベスターとグリメスを信用せず、ジャクソン・アンド・エバンスに調達を任せたいと希望した。チャータード・バンクから払い出された 15 万ドル（メキシカン）の使い方を考えるために、アゴンシーリオの住居で開かれた武器調達に関するミーティングで、マルバール、アルタチョ、サンディコはエバンスを使うことを主張し、アゴンシーリオはシルベスターを支持した。したがって、アゴンシーリオは 1898 年 5 月 30 日付けの手紙で、サンディコがアゴンシーリオたちとは別に武器調達をしたいと主張していることを、アギナルドに報告している〔PIR 471-3〕。武器調達を行うため、シルベスターに 9 万ドルを使い⁶¹⁹、残りの 6 万ドルは、アルタチョがアギナルドに対して起こした訴訟を取り下げることによって、アルタチョが使ってよいことになった。その 6 万ドルを元手に、アルタチョはジャクソン・アンド・エバンスに調達を行わせることにした⁶²⁰。第 1 章でも述べたように、アゴンシーリオはこの調達に対して異議を唱え、完全な無視を決め込んだ。1898 年 6 月 3 日頃、6 万ドルの中から、47,000 ドルを武器調達費用としてワイルドマン総領事に預けた⁶²¹。6 月 14 日付けのベラルミノからアギナルドへの手紙では、サンディコが香港から別の場所で武器調達を行おうとしている旨が書かれている〔PIR 455-9〕ので、このころエバンスと組んだ武器調達も行われていたようである。このことから以下の人間関係が見えてくる：

ワイルドマン領事——ジャクソン・アンド・エバンス、アルタチョ、サンディコ、他⁶²²
ベドロー領事——シルベスター、上記以外の香港委員会メンバー

1898 年 9 月 14 日にアパシブレからアギナルドに向けた手紙では、「ウイン・フー」が、革命側の多くの品物とワイルドマンやサンディコたちの調達品を載せて、香港に到着していることが書かれている。ワイルドマン総領事と香港委員会の関係が悪化しつつあるこの

⁶¹⁹ これが前述の「アビー」による調達の購入資金となったと思われる。

⁶²⁰ サンディコの手紙によると、6 万ドルのうち、1 万ドルはマキシモ・コルテスの寄付であった〔PIR 513-4〕。

⁶²¹ サンディコはこの 47,000 ドルの件で、日付は記載されていない手紙の中、彼は、(1898 年) 6 月 3 日に預け入れ、その後カビテに行ったが、第 2 の調達が到着しなかったので、ワイルドマン（総）領事宛てに調達品の不達についての手紙を書いたと述べている〔PIR 513-4〕。また、訴訟を止めさせるために、アルタチョに 4,000 ドルを渡したと述べている〔PIR 513-4〕。

⁶²² 日付はないが 1899 年 4 月以降であろうと思われるサンディコの手紙によると、ジャクソンはその後、エバンスやワイルドマン総領事と仲たがいをした〔PIR 513-4〕。

時期に、ワイルドマン総領事の調達品と革命側の調達品が同じ船に載せられているのは、かなり奇妙なことである。このワイルドマン総領事の調達品の内容についての記載はないが、ワイルドマン総領事が革命側の武器調達に乗じて、何か私的な活動を行っていた可能性は否めない。そして同手紙では、ワイルドマン総領事に渡したお金に関して、アパシブレの不满が書かれており、ワイルドマン総領事は武器調達を行っておらず、サンディコがワイルドマン総領事に渡した武器調達費用の返却を求めるためにも、サンディコを香港に送ってほしいと述べている〔PIR 458-11〕。したがって、香港委員会としては、前記の 47,000 ドル分の武器調達は行われなかったとの認識を持っていた。ワイルドマン総領事はこのお金で武器を買ったと主張しており、この金銭問題は、後述するワイルドマン総領事への訴訟につながった。1898 年 9 月 16 日にエバンスは「ウイン・フー」をワイルドマン総領事に売り渡した⁶²³。その 1 ヶ月後の 10 月 17 日のアパシブレからの手紙では、10 月 16 日にアパシブレがワイルドマン総領事を 3 回も訪問したのに、ワイルドマン総領事は面会を拒否したと書かれている〔PIR 476-1〕⁶²⁴。1898 年 11 月 16 日のアパシブレからマビニへの手紙では、ワイルドマン総領事から早くお金の回収を行うことが必要だとアギナルドに伝えてくれと要請しており〔PIR 476-2〕、金銭問題を巡って、ワイルドマン総領事との関係が破たんし始めているのが垣間見える。

香港総領事館報告書のグリメスの証言には、エバンスは香港にあるドイツのカロウィッツ社 Carlowitz and Co. と 55,000 ドル相当の武器購入契約を行い、21,000 ドルを内金として入れたが、マニラ湾を通る許可⁶²⁵がデューイ提督から取り下げられたので、1899 年 3 月 14 日の時点で、武器はまだカロウィッツ社にあると記載されている。

1899 年 1 月 9 日、アパシブレやサンディコなどが、この 47,000 ドルに関して、香港最高裁判所にワイルドマン総領事を訴えた⁶²⁶。1899 年 1 月 11 日、香港委員会が利用している武器ブローカーの仲間の 1 人、チェスニー・ダンカン Chesney Duncan (ダンカン) は、

⁶²³ 売り渡された汽船「ウイン・フー」をワイルドマン総領事がどうするつもりであったのかは、報告書からは読み取れない。

⁶²⁴ ワイルドマン総領事が 1898 年 10 月 12 日に国務省に対して、マニラへの休暇願を再度提出しており〔香港総領事館報告書 No.73〕、11 月には兄弟の E. ワイルドマン副総領事がマロロスを尋ねていることを考えると〔E. Wildman 150-157〕、この行動は不可解ではあるが、ワイルドマン総領事は香港委員会の人間よりも、まずはアギナルドと会って話をすることが先決だと考えたのではないかと思われる。

⁶²⁵ マニラ湾へのスペイン船の出入りを監視するため、アメリカ海軍はマニラ海戦勝利後に湾を封鎖し、船の出入りをチェックした。

⁶²⁶ 香港最高裁判所訴訟番号 1899-6。

ロンドンの Advertiser という人物に、香港委員会がワイルドマン総領事との関係を断ち切り、前年 6 月のフィリピン独立資金 47,000 ドルのディポジットの回収のためにワイルドマン総領事に対して訴訟を起こしたとの手紙を書いている [PIR 516-3]。この訴訟でアシブレたちは、革命家たちがワイルドマン総領事に 47,000 ドルを預け入れ、その後返却を求めたにもかかわらず、払い戻しがなされなかったとして、訴訟当時までの利率 8 パーセントを加えた金額を払い戻せと主張した。それに対してワイルドマン総領事は 1899 年 5 月 21 日付けの書類で、以下の反論を行っている：

1. 1898 年 6 月 3 日頃に、合計 47,000 ドル（メキシカン）を預けられたことは認める。しかしそれはアルタチョの取り分のお金であり、原告がそのお金に対する権利を要求することはできない⁶²⁷。
2. 47,000 ドルが預け入れられた時は、サンディコはアルタチョのエージェントとして、このお金をジャクソン・アンド・エバンス社のエバンスに渡すように頼んできた。
3. サンディコのリクエストにしたがって、1898 年 6 月 4 日に 25,000 ドル、1898 年 6 月 11 日に 500 ドル、1898 年 6 月 25 日に 26,000 ドルの合計 51,500 ドルをエバンスに支払った。その時 47,000 ドルの全てを支払に使った。
4. 被告はこの武器支払いに関して、この 47,000 ドルを使うことで合意していた。
5. 原告は最初 1898 年 12 月に 47,000 ドルを戻すように私に要求したが、私は、すでにこのお金を彼らの要求にしたがって使ったことを彼らが知っているはずである——と回答した。

その上で、ワイルドマン総領事は 47,000 ドルで購入された武器は、カロウィッツが所有していたと述べ⁶²⁸、その全てのレシートとバウチャーを持っていると主張した。そして、香港委員会はその購入された武器を手に入れようとしたが、ワイルドマン総領事は香港政府の協力を仰ぎ、革命家たちにそれらの武器が渡らないようにしたと述べている。ワイルドマン総領事は 47,000 ドルをエバンスに渡した際には、サンディコも一緒にいて、サン

⁶²⁷ サンディコの手紙によると、サンディコはこの 47,000 ドルはアルタチョに属するものではないとの見解を持っていた [PIR 513-4]。

⁶²⁸ この証言からも、エバンス、ワイルドマン（総）領事、カロウィッツ社がつながる。グリメスの証言による 1899 年 3 月時点でカロウィッツ社に残されている武器というのが、47,000（筆者注：ドルだと思われる）で購入した武器であり、ワイルドマン総領事は 47,000 ドルを着服しておらず、またアメリカの国益を考えてその武器がフィリピン委員会に渡らないようにしているのだと、ワイルドマン総領事側は主張したいのだろうと推測される。

ディコは手持ちの 5 万ドル（メキシカン）が差し押さえられてしまうことを恐れて⁶²⁹、この 5 万ドルもワイルドマン総領事の金庫に置いてほしいとリクエストしたのだと主張し⁶³⁰、当時、香港委員会がワイルドマン（総）領事に全幅の信頼を置いていたことを暗に匂わせ、ワイルドマン総領事は香港委員会のお金を預かったにすぎないと主張した。

1899 年 5 月 31 日のアパシブレからサンディコへの手紙でも、ワイルドマン総領事の弁護士は、お金はアルタチョから出たもので、香港委員会に返済する必要はないと主張したと記している。一方香港委員会側は、そのお金は革命運動に必要なものであり、香港委員会に返済する義務があると反論した〔PIR 493-10〕。

この後、1900 年 9 月 13 日の報告書では、裁判所がこの訴訟を棄却し、原告である香港委員会が裁判費用なども併せて 8,000 ドルを支払うことになりそうだと述べている〔香港総領事館報告書 No.189〕。9 月 14 日にロサリオがアギナルドに対して送った手紙では、この件に触れており以下の 2 点、1) ワイルドマン総領事が受け取りとして書いた 47,000 ドルのレシートには、香港委員会のメンバーがアルタチョのエージェントになりうるとは書かれていない、2) この受け渡しの際、サンディコとワイルドマン総領事との間で、フィリピン人の利益のために使うとの合意があったことは明白であるが、そのあたりの詳細はサンディコしか知らない〔PIR 401-2〕——を述べ、当事者のサンディコがフィリピンにいて裁判に出廷できず、香港委員会が裁判で不利な立場にたっていることを暗に示した。前項で述べた「アビー」を使った調達や、本項のジャクソン・アンド・エバンス社を使った調達を見る限り、ワイルドマン（総）領事もベドロー領事、もアメリカ領事または総領事の肩書を使いながらも、個人的に武器ブローカーとつながっていた可能性がある。香港委員会のメンバーは、米西戦争初期にワイルドマン総領事の表と裏の顔の差に気が付かず、ワイルドマン総領事をアメリカ総領事として信用してしまったことが、後々彼らを大きく苦しめることになったと考えられる。

⁶²⁹ 当時ワイルドマン領事は、この 5 万ドルの前にも、マキシモ・コルテスからの寄付 1 万ドルを預かっている〔香港総領事報告 No.104〕

⁶³⁰ T. アゴンシーリョは、「アギナルドはワイルドマンに対し 2,000 丁のライフルと 20 万発の弾のために、5 万ペソを支払い、アギナルドがフィリピンへ出発する前に別の武器の船積みとして 67,000 ペソを支払った。しかし最初の 5 万ペソ分の船積みは届いたが、その次の 67,000 ペソ分の武器は届かなかった。それにもかかわらず、ワイルドマンは未着だった分の支払金に関して返金しなかった」〔T. Agoncillo 1990 : 191〕と述べている。この数字に関して T. アゴンシーリョは根拠を示してはいないが、上記 47,000 ドルがこの 67,000 ペソの一部であった可能性はある。

4-3. 上海からの調達失敗と巨額の損失

革命側は、アメリカが関与しない武器調達の方法を探していた。1898年5月28日の香港のアゴンシーリョからアギナルドへの手紙によると、アゴンシーリョがワイルドマン領事の絡まない武器調達も視野にいれていたことがわかる〔PIR 471-8〕。第3章で述べたように、1898年後半には、日本でも陸軍払下げ銃購入への交渉が行われていた。また、この交渉と同時期に、上海でも武器調達が行われていた。この上海での調達は先の2つのケースとは違って、話が錯綜しており、全ての情報を組み合わせても、武器調達の全体像を明らかにすることはできない。しかし香港委員会はこの武器調達で大きな損害をだし、ブローカーたちに食い物にされた。この調達は、比米戦争準備の大きな妨げとなり、武器不足の一因となった例として重要なので、本項で記しておきたい。

1898年10月17日のアパシブレからアギナルドへの連絡では、彼らが持つ40万ドルの中で18万ドルを、ソウサ Sousa という人物が行う武器調達のために残しておくとの記述がある〔PIR 476-1〕。グリメス⁶³¹の証言によると1898年12月の初旬に、シルベスターは香港在住のポルトガル人ホセ・デ・シルバ・エ・ソウサ Jose de Silva e Souza (ソウサ) に会ったとあるので、アパシブレの手紙のソウサという人物は、このポルトガル人だと思われる。

11月19日、M. カルロス Carlos (カルロス)⁶³²という人物が香港からアギナルドに対して、20万ドルが10日以内に到着するとアパシブレが述べた、と書いている〔PIR 436-5〕。12月1日の手紙でアパシブレは兄弟⁶³³と呼ぶ相手に対して、ソウサに対して悪い想像をしており、武器の船積みが終わるまで、ソウサたちにお金を払うことには同意するなどと警告している〔PIR 458-12〕。グリメスの証言では、12月の時点でソウサはアギナルドと、2万丁のライフルと1,000万ラウンドのカートリッジ⁶³⁴を供給する契約を結んでいた。その間に天津のルイス・スピッツェル社のスピッツェルが、ヨーロッパから日本経由で香港

⁶³¹ 「アビー」での調達に加わったグリメスは、1898年11月3日にフィリピンでアメリカ当局によって逮捕され、このソウサの調達からはずされた。その後、グリメスは釈放されたが、アメリカ当局に情報を流したのではないかと香港委員会から疑われ、香港委員会から報酬の支払を拒否された〔香港領事館報告書 No.197〕。

⁶³² グリメスは自身の証言で、カルロスのことを「アパシブレのエージェント」と呼んでいた〔香港総領事館報告書 No.104〕。

⁶³³ 仲間という意味。

⁶³⁴ グリメスの証言は1899年3月14日に行われており、数字に関しては記憶違いの可能性もある。またこの契約に関して、彼は直接参加していないので、日本での調達と記憶が混同している部分がある可能性がある。

に戻った。グリメスの証言では、この後 1898 年 12 月 13 日、アパシブレがフィリピン政府代表として第 2 パートで契約⁶³⁵、ソウサが第 3 パートで契約を行うことになった。その件は 1899 年 1 月 24 日のアパシブレの手紙でも書かれており、12 月 13 日にアパシブレ、ソウサ、スピッツェルで三者合意がなされたと述べられている [PIR 453-4]。

12 月 16 日付けの香港からアギナルドと思われる人物への手紙では、ソウサが上海で単発のモーゼル銃を 1 丁あたり 11.30 ドル、カートリッジは 100 あたり 4 ドルで契約を終えたと打電してきたので、2,000 丁のライフルと 500 万のカートリッジを、全支出込みの価格で、船積み時の支払い⁶³⁶で注文し、次の日曜日に上海に行くとソウサに回答したとの報告がなされている [PIR 390-4] [PIR 622]。

12 月 12 日のアパシブレからアギナルドの手紙では、前日の 11 日に、武器と一緒に運ぶ商品の契約も行われていた [PIR 476-6]。この手紙でアパシブレは、中国の革命のお陰で武器が不足し価格が上がってきていることを指摘し、ソウサが 1,000 トンの蒸気船を月 15,000⁶³⁷でチャーターする機会を得たので、アパシブレがソウサに、半額の 7,500 を前払いしたと記している。そして、武器調達に関して、機会を逸したりしないために以下の 2 点、1) アギナルドが武器調達を続けたいのか否か、2) お金は到着するのか否か——を質問し、汽船「アビー」の武器調達の際に雇った中国人船員を再度雇いたいと願い出ている。しかも、この船員のチケットと必需品、そして 600 ドルはバタンガスの臨時プレジデント Presidente local de Batangas Interino のヒラリオ Hilario が出すと述べた [PIR 476-6]。

12 月 12 日のアパシブレの別の手紙には取引の詳細が述べられている：

鉄管 13.75 ドル × 20,000 = 275,000 ドル

100 個入り (5.25 ドル) ⁶³⁸ × 5,000,000 = 262,500 ドル⁶³⁹

小麦粉 11 ドル / バレル × 1,000 = 11,000 ドル

塩 18 ドル / ピコ × 15 トン = 11,040 ドル

(上記に関しては商品が船積みされた時点で、価格の半分は香港で支払われ、残りの

⁶³⁵ 史料には第 1 パートが誰であるのかは書かれていないが、経緯から見てルイス・スピッツェル社のスピッツェルであろうと思われる。

⁶³⁶ 現在の FOB (Free on Board) と同じ条件だと思われる。

⁶³⁷ 単位は書いていないが、ドル (メキシカン) と思われる。

⁶³⁸ 何であるかは不明だが、鉄管ということから火薬が推測される。

⁶³⁹ これは、計算ミスか写し間違いなどがあったと思われる。

半分はアギナルド側が受け取る時点で支払われる)

[PIR 476-7]

上記調達品に契約したモーゼル銃を加えて、前払いした汽船に乗せるのがアパシブレの計画であった。12月13日のアパシブレからアギナルドの手紙では、現在香港には40万ペソがあることを報告されている [PIR 420-3] [PIR 622]。

アパシブレの手紙によると、12月29日の時点で彼は上海で契約を済ませていた [PIR 396-4]。ソウサはこの時点で契約者に支払うため、15万ペソの小切手を持っていた。契約後、スピッツェル、ソウサ、シルベスターは上海に行った。武器は日本から中国政府に売ったようにするため、スピッツェルは、南京で両広総督 Viceroy の劉坤一 Liu Kunyi のセクレタリーで地方官 Local Magistrate⁶⁴⁰であった余瑞雲 Yue Shui Wan⁶⁴¹を通して行わずであった。しかし、武器は1月10日⁶⁴²までに南京に届かなかった。上海で取引を行うはずであった武器が本当に日本から来たものであるのか、または第2章の脚注で述べた陸軍拵下げ銃と何か関連があるのかは、グリメスの証言などからはわからない。

1899年1月3日、シルベスターは南京ではなく上海で、武器の船積みを行う用意ができたこと、南京に到着していたアパシブレのエージェントのカルロスに電報を打った。カルロスは1899年1月3日には南京に到着していた。カルロスは、スピッツェルとシルベスターから船積みは1月3日に終わっており、輸送の遅れは大きなリスクを伴うので、1899年1月4日の夜に出航するとの連絡を受けた。カルロスは、代金の30万ドル⁶⁴³のうち半分の15万ドルを持っており⁶⁴⁴、船積みが終わった段階でその15万ドルを支払うことにな

⁶⁴⁰ この Local Magistrate の訳を地方官とするかは意見が分かれる部分であるが、基本的には劉坤一のブレインの1人であろう。

⁶⁴¹ 1899年2月20日のワイルドマン総領事から、在上海アメリカ領事のジョン・グッドナウ John Goodnow (グッドナウ) に向けた手紙によると、余瑞雲は1876年頃に場所は不明ではあるが、アメリカ領事館の通訳であった。その際に中国の印鑑 Chinese Seal か、または領事館の官印 Chop of the Consulate を、中国政府による武器購入において、個人的な目的のために持ち出して解雇された。余瑞雲はその後上海に移り英国の法律事務所で働いていたが、彼の妹の権利移転書を偽装し最高裁判所に訴えられたために、上海から逃げた。しかし余瑞雲は、また上海に現れ、シン・タク・ファン Sin Tak Fan という名前でエバンスのオフィスでビジネスを行った。ワイルドマン総領事は、彼のビジネスは、ルイス・スピッツェル社によって香港で組織された中国人の会社とつながりがあると考えた。

⁶⁴² 1月10日に何の約束があったのかは不明。

⁶⁴³ 3万 (メキシコ) ドルと思われる。

⁶⁴⁴ この最初の支払の15万の小切手は、前段落でアパシブレが述べているようにソウサがすでに受け取って持っていたのか、それともグリメスの証言のようにカルロスが南京に持って行ったのかは不明である。この取引の代金の受け渡しは、不明瞭な点が多い。

っていた。カルロスは全ての武器が船積みされたと思込まされ、5 つに分割された合計 15 万ドルの為替手形 drafts をスピッツェルに渡した。スピッツェルは、このお金をすぐにロンドンに送り、香港の C. リチャウコが持っている残りの 15 万ドルを要求したが、C. リチャウコから為替手形が送られてこなかったため、シルベスターはその 15 万ドルを引き取りに香港に向かった。カルロスは、アパシブレの指示を持ったペドロ船長⁶⁴⁵を待つように指示を受けたので、シルベスターとスピッツェルに出航を待つことを提案した。しかし、1899 年 1 月 5 日になってもペドロ船長は来なかった。したがって、その後南京から武器を送ることはやめ、武器は長江のランチ（貨物船）に余瑞雲気付けで残されてしまった。同時期、1899 年 1 月 9 日の横浜からアギナルドの手紙には、上海のスピッツェルとカストロ Castro⁶⁴⁶に対して、日本での陸軍払下げ銃購入がうまく行かなかったことについて手紙を書くように命令しており [PIR 520-2] [PIR 622]、この時期、日本と上海で同時に武器調達に失敗したことがわかる⁶⁴⁷。

スピッツェルはこの調達の失敗の全ての責任は、C. リチャウコにあると述べた。そして 1899 年 1 月 24 日、アパシブレ、シルベスター、ソウサは、C. リチャウコの失敗を認めて、書類にサインした。この書類へのサインに関しては、アパシブレの手紙にも載っており、C. リチャウコの失敗で全ての関係者がダメージを受け、アパシブレ側がルイス・スピッツェル社に 15 万ドルを支払うことで合意した旨が書かれている [PIR 453-4]。1899 年 1 月 26 日の香港のデ・サントスからアギナルドへの手紙では、この失敗の原因に C. リチャウコが英語を読めなかったことを挙げている [PIR 479-8]。1 月 30 日のデ・サントスからアパシブレの手紙では、調達失敗の総括が行われ、レシートの書き方の不備や、大量の資金を失ったことが書かれている [PIR 436-13]。百戦錬磨のブローカーたちは、自分たちの損失を、武器ビジネスに疎い香港委員会に押し付けて、損失を逃れたのである。香港委員会はブローカーたちに食い物にされ、資金を失い、武器も手に入れることができなかった。

⁶⁴⁵ 次の項で述べる小規模な調達の部分で、PIR 471-2 にペドロ・フランシスコ Pedro Francisco という名前の人物が挙げられている。この人物がここで書かれているペドロ船長の可能性が高い。

⁶⁴⁶ 上海で活動している革命家。1898 年 8 月 20 日、横浜のポンセと F. リチャウコがカストロと連絡をとり [PIR 420-9] [PIR 622]、8 月 23 日にも彼らの手紙にはカストロの記述がある。

⁶⁴⁷ この武器調達と、日本での陸軍払下げ銃購入未遂との関連を示す史料は、現段階では見当たらないが、このような命令があるので、関連があった可能性も否めない。

スピッツェルは 1899 年 4 月 28 日の『ニュー・ヨーク・ジャーナル』に対して、彼はイギリス臣民 **British subject** であり、ビジネスとしてフィリピン人に武器を供給しており、アギナルドはフィリピン諸島をコントロールできる唯一の人物で、スピッツェル自身は中国のリ・フン・チャン **Li Hung Chang**⁶⁴⁸のパートナーだと主張した。しかし香港委員会はこの調達失敗の後、1899 年 1 月 26 日付けデ・サントスの手紙で、ソウサとスピッツェル社は悪人だとの評価を下した [PIR 479-8]⁶⁴⁹。

香港委員会は同時期に、日本と上海での武器調達に失敗した。しかも、上海の調達では、高額な資金を失い、武器不足のまま比米戦争に突入することになった。比米戦争の前に十分な武器を得られなかったことは、革命運動に大きなダメージを与えたものと思われる。

4-4. その他の武器調達と関連する出来事

上記 3 つのような大規模な調達ではないが、小規模な調達も行われており、その様子は香港総領事館報告や PIR から多少は透けて見える部分がある。

1898 年 7 月 20 日のアゴンシーリョからアギナルドへの手紙では、領事からの情報で、7 月 19 日にペドロ・フランシスコと **Pedro Francisco**⁶⁵⁰とレクリオ **Leclio** という人物が小さな汽船に武器を積んで、すでにフィリピンに到着しているはずだと連絡している。そして、領事が持っている 54,000 ドルについて説明を求めたいのであれば、アパシブレに聞いてほしいと述べている [PIR 471-2]。この領事というのがワイルドマン総領事だとするならば、ワイルドマン総領事は国務省には報告していないような武器調達にも関与していた可能性がある。

また、1898 年 10 月 23 日のアパシブレの手紙には、アギナルドに対して、シャルベ **Charvet** という人物からマキシム・ガン用の 1,000 カートリッジを受け取ったかどうかを知りたい、と問い合わせている [PIR 476-8]。更に、この手紙でアパシブレは、香港で 2,000 カートリッジを用意したが、運び手を探しており、輸送には 75,000⁶⁵¹かかると述べ、以下の船積みも報告している。

⁶⁴⁸ 李鴻章を指すと思われる。

⁶⁴⁹ この手紙の中には、グリメスがスピッツェル社に対して訴訟を起こしていること、ブレイがチャータード・バンクからもらった情報として、スピッツェル夫妻を信用してはいけないことが書かれている。

⁶⁵⁰ このペドロ・フランシスコという人物が先に述べた日本からの調達で名前の挙がっていたペドロ船長だと思われる。

⁶⁵¹ ドル（メキシコ）だと思われる。

A. ガルチトレナ：ウインチェスター・ライフル4丁

S. ナティビダッド Natividad：ウインチェスター・ライフル1丁、リボルバー2丁

J. ルナ：ウインチェスター・ライフル5丁、リボルバー2丁

この3人は、著名な革命家である。この数からすると、貨物として送ったというよりも、この3人が自身の荷物として武器を運んだ可能性が高い。その他には、10月31日に、アパシブレは、香港において17,000丁の銃と100万の弾が、送り出しを待っていることを書いている〔PIR 431-10〕。このように、史料不足から経緯を追いきれない調達も行われていたようである。たとえばグリメスは、ソウサの会社が「オスロ Oslo」⁶⁵²と言う汽船をチャーターして、フィリピンへ何回か航海し、香港からは糧食を運び、フィリピンからは砂糖とヘンプを持ち帰ってきているが、この船は2回、数百のライフルとリボルバーを運び、フィリピン人に売り渡したと証言している〔香港総領事館報告書 No.104〕。

グリメスがアギナルドに起こした1899年7月1日付けの報酬支払要求に関する訴状によると、「アビー」（別名「パッシング」）がアメリカ当局に捕まった後、グリメスは10月半ばに香港において、「アビー」でバタンガスに武器を運んだ成功報酬として、リチャウコ兄弟に25,000ドルを要求した〔香港総領事館報告書 No.197〕。しかし、彼らはグリメスに対して、報酬を支払う権限を持っていないと答え、アギナルドとマロロス議会の承認を得るように促した。グリメスはマロロスに行き、彼らのミーティングと活動に参加した。その後、グリメスはアパシブレ宛の暗号指示書を持って香港に帰ることになった。革命側は、500万ドル相当の戦争必需品を積んだ船を用意するために、ヨーロッパに行く計画を立て、グリメスはこの調達を成功させるために、グリメスが選んだ人物と一緒にヨーロッパに行くことになっていた。1898年10月31日、アパシブレから日本にいるG. アゴンシーリョと思われる人物に送った手紙では、マロロス議会が武器購入のために、シルベスターを調達メンバーに加えてヨーロッパに送ることを決定したと、グリメスが手紙に記してきたことが書かれている〔PIR 431-10〕。その際、シルベスターは、5パーセントの口銭を要求している。

この計画は、グリメスがマニラでアメリカ当局に逮捕されてしまい、頓挫した⁶⁵³。投獄

⁶⁵² この汽船「オスロ」の名前は1898年10月23日のアパシブレの手紙にも出てくる〔PIR 476-8〕。日本に武器調達に行くフランシスコ・リベロが香港に「オスロ」に到着したとの記述があるので、革命側は1898年秋には、人とモノの移動に「オスロ」を利用していた。

⁶⁵³ この後すぐ、上海からの調達が行われたが、グリメスはアメリカ当局に逮捕されたこ

に関して、アギナルドはグリメスに見舞金を送ったが、その後グリメスは香港委員会から、この逮捕時にアメリカ当局に情報を流したとの嫌疑をかけられ、調達に関する報酬を受け取れずじまいになってしまった。このような点ではある意味、香港委員会も武器エージェントの人間を利用し、利用価値が無くなれば捨てるという割り切った対応をしていた。

1899年、比米戦争が始まった後でも、香港での武器調達は活発に行われていた。1899年3月1日のアパシブレからアギナルドへの手紙では、香港において5.5ペソのモーゼル銃カートリッジを荷卸しし、武器調達を行っている旨が書かれている〔PIR 476-12〕。しかし、3月13日のアパシブレからアギナルドの手紙では、武器調達に関して、汽船の船主が躊躇し、協定を結べなかったため、汽船を購入したいと願い出ている〔PIR 532-3〕。

1899年8月19日のワイルドマン総領事の報告書では香港委員会について触れ、武器調達に関して以下のように述べている：

その諮問機関としての海外の（香港）委員会の主たる特徴は、ルソンへの武器、弾薬、必需品の輸入と輸出である。それは主にマカオを通して達成され、荷下ろしはルソンの東海岸で行われた。そこでは恒常的な沿岸パトロールができない。

The main functions of the Junta-outside of its advisory character, is the purchase and export of arms, ammunition and supplies to Luzon. This is principally effected via Macao, and a landing made on the East coast of Luzon, where do not keep a regular coast patrol.

〔香港総領事館報告書 No.133〕。

そして、ワイルドマン総領事は、武器輸出で香港委員会の幹部を逮捕するのが希望だとして、探偵を雇って委員会を監視していることを明らかにした。1899年8月25日の在マニラ二等領事の三増の報告書、機密第11号には以下のような報告がなされている：

近来当呂宋島沿岸ニ密航船頻リニ出没反軍ニ武器弾薬等ヲ供給スルトノ噂当地に喧伝セリ即当呂宋島東岸マラユ、ビナガナン三隻ノ密航船来リ密カニ貨物ノ陸上ヲナシツツアリタルニ遠ク米艦ノ来ルヲ見倉皇錨ヲ上げ逃去セリト（中略）近来密航船ノ頻リニ当呂宋島沿岸ニ出没スルハ殆ンド事実ナルガ如クニシテ当地発刊新聞紙ノ報道スル所ニヨレハ是等ノ密航船ハ大概上海港ヲ本拠トシテ武器弾薬其他ノ戦時禁制品ヲ密カニ反徒ニ供給スルモノニシテ之レ全テ支那税関吏ノ怠慢ニ帰スル（後略）

〔外務省外交史料館文書 米西戦争一件 雑 第一巻 馬尼刺府ニ於テ本邦人米軍ニ

ともあり、このミッションからは外されてしまった。

捕縛セラレタル件 039-040]

1 年後の 1900 年になっても、ワイルドマン総領事は執拗に香港委員会の武器調達を追いかけており、1900 年 5 月 14 日のワイルドマン総領事から国務省への報告書では、武器調達とそれに関連する以下の活動が報告されていた：

1. フィリピン人が先週木曜日⁶⁵⁴に、彼らの本部でバンケットを行った。
2. この 6 ヶ月間で、香港の命令で換金作物が売られ、50 万ドルを得た。オーティス准将は、これらの多くを押収した。
3. 上海のスペイン修道院の庶務担当修道士 **Procurator** のフェルナンデス **Fernandez** 神父がワイルドマンに、数日前の調査において香港委員会は戦争勃発から 1,600 万ドル（メキシカン）を近隣から受け取ったと判断したと述べた。ワイルドマン自身はこの数字は過大評価だとは思いますが、マニラから香港に恒常的にお金が流れていることは承知している。
3. タルラック陥落⁶⁵⁵前、香港委員会はパリのエージェントを通して、かなりの量の武器をドイツで購入し、それらの武器は 1900 年 2 月に香港に到着して、香港、マカオ、北の港 **the Northern Ports**⁶⁵⁶に置かれている。彼らはイタリアでも武器を購入し、その武器は香港にある。
4. リチャウコ⁶⁵⁷が、アギナルドやフィリピン人の財産と書類をどこかに運び去る目的で、5 艘のランチをマニラに送ろうとした。
5. 香港から 3 時間半のマカオに、彼らのベースがある。
6. 彼らは何艘かのランチをマカオで調達し、武器を購入した。

この報告書からは、香港委員会がフィリピンから農作物などの商品作物を海外に運んで売りさばき、その利益で武器を購入しており、ワイルドマン総領事は彼らのベースがマカオにあると考えていることがわかる。

米西戦争初期はアメリカの援助があったこともあり、武器調達はスムーズに行われた。先行研究では、初期にワイルドマン領事が武器調達援助を行ったことに触れ、以下の 2 点、

- 1) 初期にワイルドマン領事はアギナルドに感銘を受けた、2) アメリカ本国から指示が

⁶⁵⁴ 1900 年 5 月 3 日と思われる。

⁶⁵⁵ アメリカ総領事側の記述なので、「陥落」とする。

⁶⁵⁶ 史料ではこの 3 つの地名が並列して書かれている。Northern Ports がどこを指すのかは不明である。

⁶⁵⁷ 兄弟のどちらかは不明。

来なかった——を指摘し〔Kennedy 1990: 204〕、「そのようなアメリカの政策の中の空白で、領事たちが当惑し、時に間違っただけは驚きには値しない With such a vacuum in American policy it is no wonder that the consuls were confused and sometimes wrong」〔Kennedy 1990 : 205〕と述べ、ワイルドマン領事がアメリカ国益と善意から、米西戦争において革命側を助けたが、結局はそれが間違っただけの結果となったと述べている。しかし、この節で検証してきたように、ワイルドマン（総）領事は必ずしも、アメリカの国益だけで動いていたのではない。

比米戦争前は、アメリカの妨害とともに、香港の限られた人数で、同時にいくつもの武器調達を行ってしまったことが、武器調達の失敗の1因となった。その上、比米戦争勃発直前の1月、広東での武器調達の失敗で多額の資金を失ったことも、革命側の大きな痛手となってしまった。その後、香港委員会は、ワイルドマン総領事に見つからないように武器調達活動を行っていたが、ワイルドマン総領事は執拗に彼らの活動を追いかけ、彼らの拠点はマカオにあると考えるようになった。

5. ラウンズヴィル・ワイルドマン総領事の妨害工作

1898年8月6日の香港のアゴンシーリョからと思われるアギナルド宛の手紙では、ワイルドマン総領事がフィリピン人の手紙を開け、彼が「パッシング」の出航を妨げた人物ではないかとの推測を行っている〔PIR 493-6〕。このようにワイルドマン総領事は、次第に香港委員会の活動の障害になっていった。

5-1. ジョージ・デューイ提督の警護

1899年5月23日、デューイ提督は休暇のために、彼自身の旗艦「オリンピア」で香港に到着した⁶⁵⁸。前日の22日にワイルドマン総領事は、香港委員会の調査報告書を作成した〔香港総領事館報告書 No.143〕。その報告書内で、香港で生活に困窮したフィリピン人

⁶⁵⁸ デューイ提督の自伝〔Dewey 2009〕には、米西戦争前及び、米西戦争中の香港についての記述がある。しかし奇妙なことに、在マニラ・アメリカ領事の O. F. ウィリアムズと、在シンガポール・アメリカ総領事のプラットについては触れられているのに、ワイルドマン（総）領事または、香港（総）領事についての記述は一切ない。ワイルドマン（総）領事は米西戦争では、アメリカ陸海軍にかなり貢献したはずであるが、感謝の意どころか、記載すらない。デューイ提督は、自伝の中でワイルドマンの存在を、完全に消し去っている。

や香港委員会のメンバーが自暴自棄な行動に出れば、デューイ提督が彼らの最大のターゲットになる、つまり暗殺の対象になることを指摘した。ワイルドマン総領事は同日 5 月 23 日に香港の警察総監 Captain Superintendent of Police に対して、24 日からピーク・ホテル Peak Hotel に宿泊するデューイ提督のスケジュールを知らせ、警護を要請し、連絡はデューイ提督の部下のブランバイ大尉と直接行ってほしい旨を連絡した。5-3 で触れるが、この時にもワイルドマン総領事は、私的に探偵を雇って香港委員会の動きを監視している。在外領事が探偵を雇って調査させること自体は、それほど驚くべきことではないが、後述する探偵による調査も含め、ワイルドマン総領事の場合は異常なくらいに香港委員会に執着し、調査をしている。

5-2. マカオへの軍艦停泊要請

4-4 で述べたように、ワイルドマン総領事は、1900 年 5 月頃には、香港委員会がマカオに拠点を持っていると確信していた。1900 年 5 月 14 日付けの報告書では、香港委員会がマカオでランチを持ち、武器調達を行っている件を述べ、香港委員会を調査するには、以下の 2 つの障害、1) 捜査官を雇い情報を得るための資金がない、2) ワイルドマンがマカオでの公的身分を持っていない⁶⁵⁹——があることを述べている。そして香港委員会が、「私⁶⁶⁰が自費で支払っているスパイと私から身を守るため、警察のチーフに保護を訴えた I have appealed to the Chief of Police for protection from me, and from my paid informers」ことも、ワイルドマン総領事の活動を妨害する要因となったと、ワイルドマン総領事自身は分析している〔香港総領事館報告書 No.170〕。しかし、この警察の件に対しては、本心かどうかはわからないが、ワイルドマン総領事は、香港の裁判所に行くことは恐れていないと報告書で述べており、革命家たちを徹底的に追い詰める姿勢を示している。またこの報告書では、アメリカ海軍がマカオに砲艦を停泊させることを提案している。理由としては：

1. マカオに軍艦を停泊させていれば、香港委員会が、ポルトガル人や中国人を船員として雇用しようとする際の、抑止力となり、委員会は船員を調達することができない。

⁶⁵⁹ 現在、香港領事館は、香港・マカオ・アメリカ合衆国総領事館 Consulate General of the United State Hong Kong and Macau として、マカオもカバーしている。

⁶⁶⁰ ワイルドマン総領事。

2. ワイルドマン総領事の管轄をマカオにまで拡大すれば、ポルトガルとアメリカが不和になるような出来事を、回避することができる。

1900年7月30日の報告書によると、ワイルドマン総領事はすでに1年半前から、つまり1899年の初頭から、マカオに砲艦1隻を送ることを提案していたようである〔香港総領事館報告書 No.178〕。アリソナのアパシブレの伝記では、アパシブレは以下のように回想している：

私は香港政庁が我々を、礼儀正しくだけでなく、仁愛を持って扱ってくれたことを告白せねばならないし、そのように喜んで公言する。(中略) アメリカのシークレット・サービスとの我々のいざこざで、イギリス当局は我々を適切に助け保護した。イギリス当局の係官たちは、我々が植民地の法律に違反せず、戦いにおいてイギリスが宣言した中立を破らなければ、我々はイギリス当局の保護を受けることができ、安心することができる」と明言し、(中略) 武器と他の戦争必需品の船積みは中国の複数の港と、広範囲に渡り殆ど警備されていない沿岸で行われていた。

I must confess, and I am glad to say it publicly, that the British Government of Hong Kong had treated us, not only with decorum, but with benevolence...In our conflicts with some agents of the American secret service the British Government helped us and protected us properly, its officials declaring that so long as we complied with the laws of the colony and we did not violate the avowed neutrality of England in the conflict, we could rest assured that we would receive the protection of the British government...the shipments of arms and other war materials were made at the Chinese ports and coasts which were extensive and hardly guarded.

[Alizona 1971: 61-62]

これらの文章は、ワイルドマン総領事の報告を裏付けるものである。

1900年6月8日の報告書で、ワイルドマン総領事は香港にあるフィリピン人の武器の存在について、海軍長官が情報を欲しいのであれば、調査すると自分から提案し、それらの武器は香港政庁の許可がない限り、港から出すことはできないが、もし武器の売却先がマカオの会社ということで、香港の船積み許可が下りてしまった場合には、追跡するのは不可能だと述べている〔香港総領事報告書 No.173〕。ワイルドマン総領事はこの報告書の中で以下のように述べている：

私⁶⁶¹はマカオで公的身分を持たず、個人的な調査人としての資格しか持たないので、それら⁶⁶²を追跡することができない。もし私がマカオ長官の前に公的に出向き、船積みがなされた多くの武器がマカオの会社に売られたことを私が知っていると、そして、それらの武器が最終的にはフィリピン諸島向けであったと私が信じていると、話すことができたなら、私は彼のとついでそれらの動きを補足し続けることができるのにと、主張できるだろう。

I have no official status in Macao, and cannot trace them up except in the capacity of a private detective. If I could go officially before the Governor of Macao and say that I knew that a large shipment of arms had been sold to a firm⁶⁶³ in that Colony, and I believed that they were destined ultimately for the Philippine Islands, I could claim his good offices is keeping track of their movements.

〔香港総領事報告書 No.173〕

前後するが、1 ヶ月程前の 1900 年 5 月 14 日、ワイルドマン総領事は、戦争で多額のドルを使うくらいなら、香港で数千ドルを使って香港委員会のコミュニケーションを遮断するほうが効果的だ、と国務省にアドバイスしている〔香港総領事館報告 No.170〕。ワイルドマン総領事はこの報告の追伸で、アメリカ海軍のジョージ・コリアー・リーミイ George Collier Reamy (リーミイ) 提督が海軍次官から断片的にマカオに軍艦を停泊させる話を聞かされ、リーミイは軍艦「ドン・ファン・デ・オーストリア」にマカオ行きを命令することができる、とワイルドマン総領事に連絡してきたことを述べている。そして、暗に海軍がそこまで用意しているのに、国務省が動かないことを批判し「(前略) そして、もし、我々が完全に協調して仕事ができないとしても、それは私の落ち度ではない。私は国務省に、私の電報の一部に対して、早急な留意を、お願いするのである...and it will not be my fault if we do not work in perfect harmony in this matter. I have to thank the Department for the prompt attention it gave to a part of my Telegram」と述べている。

先の No.178 の報告書では、リーミイ提督は広東にいて、マカオに行く必要性を主張しており、ワイルドマン総領事は、マカオがポルトガル領であることを理由にワイルドマン総領事の提案を退けた国務省に対して、自身の領事許可状 Exequatur を、マカオに拡大し

⁶⁶¹ ワイルドマン総領事

⁶⁶² 武器

⁶⁶³ 史料通り。firms だと思われる。

てほしいと再度主張している。それほどにまで、ワイルドマン総領事はマカオにこだわった。

5-3. 私的調査員の雇用

ワイルドマン総領事は、「我々のマニラ占領から、マニラの軍政の支払いで、多くのイギリス人や中国人の情報提供者を雇っていた Since our occupation of Manila, I had in my employ a number of English and Chinese informers paid for by the Military Government at Manila」〔香港総領事館報告書 No.104〕と公的費用でスパイを雇ったことを報告しているが、その他の報告書では、私的にも調査員を雇っていた様子が伺える。

1898年7月8日に汽船「パッシング」が武器を没収された後、ワイルドマン総領事は香港委員会に対して、香港では武器の荷卸しをさせないと警告し、武器ブローカーのシルベスターと彼の右腕 chief lieutenant のルイス・レオナルド・エツェル Louis Leonard Etzel に対して、これ以上ことを起こせば国家反逆になると警告した〔香港総領事館報告書 No.98〕。ワイルドマン総領事自身は、香港委員会と武器調達でかかわっているのにもかかわらず、シルベスターとエツェルには手を引くように脅していたのである。しかし、前述のように、彼らは汽船「パッシング」の船名と船籍を変更することで、バタンガスへと武器を運ぶことに成功した。本章 3-1 で述べたように、ワイルドマンは、7月18日の報告書で、自己弁護の目的でアギナルドたちを評価する文面を送ってはいしたが、6月末からアメリカ陸戦部隊がフィリピンに到着し始めたことで、革命軍に武器を送る必要もなくなり、本章 4-2 で述べたようにワイルドマン（総）領事とライバル関係にあったシルベスターと香港委員会が組んだ武器調達には、抑制をかけるようになった。

その後 1899年1月半ばにワイルドマン総領事は、「私は情報提供者から、エツェルの文字圧のついたタイプライターのカーボン紙を受け取り I received from my Informers the carbon sheets from Etzel's Typewriter, containing an impression of the said letter」と述べているように、探偵を雇って彼らの動きを見張らせた〔香港総領事館報告書 No.104〕。また同報告書では彼らの仲間として、スピッツェル⁶⁶⁴、ベドロー領事、H.R. ウィリアム

⁶⁶⁴ 1900年4月19日の『マニラ・タイムス』「スピッツェルが密輸の嫌疑をかけられる」〔*Manila Times*, April 19, 1900〕によると、スピッツェルは1900年4月18日に、アメリカ当局によって、彼の仲間と一緒に宝飾品の密輸容疑で逮捕された。その後8月3日の報告書内で、ワイルドマン総領事はこの逮捕を素直に喜んでいる〔香港総領事館報告書 No. 181〕。

ズ副領事⁶⁶⁵、エツェル、グリメス、ブレイ、ダンカン、クリックシャンク Crickshank⁶⁶⁶、ジョンソン Johnson、エリス Ellis などの名前を挙げ、彼らは商業的身分を持って表向きは商人として活動しており、商業活動として彼らが行動する以上、ワイルドマン総領事が彼らの活動を阻止することは難しいと述べている。特に興味深いのは同報告書内で、同じアメリカの領事であるベドローが、ワイルドマン総領事に対してあらゆる非難の手紙を作ったとグリメスが告白したと、述べている部分である。一方、ワイルドマン総領事もエツェルに関係した第三者に対して、エツェルが危険人物であることを伝え、エツェルの人脈を潰そうとしたことがある⁶⁶⁷ [香港総領事館報告書 No.120]。ワイルドマン総領事のネガティブ・キャンペーンの対象の中には、ベドロー領事と H.R. ウィリアムズ副領事も含まれていた。これに関しては、前述した通り、米西戦争時ワイルドマン総領事が武器調達において、広東領事の知り合いであるシルベスター社ではなくエバンス社を押していたことが一因であった可能性がある。先の総領事館報告書 No.104 の中でワイルドマン総領事は、以下のように述べている：

昨日汽船「キング・シン」でマニラからここに到着したエドワード・ベドロー広東領事（そして、その名前はエツェルの手紙内で目立って述べられていた）に関して、私は現在彼に対して正式な告発をする用意はない。彼はシルベスター一派と非常に仲良くしている。

⁶⁶⁵ 1899年8月19日の香港総領事館報告書 No.133 では、1898年8月当時、在広東副領事であった H.R. ウィリアムズが香港委員会の本部に出入りしていたことを記している。

⁶⁶⁶ ワイルドマン総領事は 1899年4月6日、クリックシャンクについてレポートを送っている [香港総領事館報告書 No.104]。それによると、クリックシャンクはスピッツェルとシルベスターの共犯者として、4月6日当時、アメリカ軍当局に逮捕されていた。彼の支出全て、ホテル代、上海とマニラの渡航費はエツェルによって支払われた。報告書によるとクリックシャンク自身はニュー・ヨーク・インシュアランス社 New York Insurance Company の香港代表であると主張していた。1898年12月7日頃、マニラから香港に到着し、ホン・コン・ホテル Hong Kong Hotel でシルベスターと暮らし、1899年1月7日にマニラに向けて出発した。1899年1月17日、ワイルドマン総領事はフィリピンのアメリカ当局に対してクリックシャンクの引き留め要請を電報で行った。ワイルドマン総領事は、1899年2月20日現在、クリックシャンクがマニラの刑務所に拘留されていることを確認している。このことからクリックシャンクは、2ヵ月以上も拘留されていたようである。その後ワイルドマン総領事は 1899年9月13日の報告で、クリックシャンクと思われる人物に関し警戒するように促し、その人物の名刺上の名前は A.R. マイエルス Myers で、スピッツェル社の仲間であり、国籍はわからないがユダヤ人で、ホン・コン・ホテルでスピッツェルと同じ部屋に暮らしているとレポートしている [香港総領事館報告書 No.137]。したがって、クリックシャンクという名前は偽名である可能性が高い。

⁶⁶⁷ ワイルドマンによると、1899年6月15日の時点で、シルベスターとスピッツェルはヨーロッパに逃げ、スピッツェル社はエツェルに任されていた。

Regarding Consul Edward Bedloe of Canton who arrived here from Manila yesterday on the “King Sing” (and whose name is prominently mentioned in the Etzel letter), I am not prepared to make a formal charge against him at present. He has been intimately associated with the Sylvester crowd.

[香港総領事館報告書 No.104]

この記述はワイルドマン総領事特有の皮肉に満ちたものであり、自身はベドロー領事に関して正式に告発する用意はないと言いながらも、国務省にベドロー領事の不正を訴えて、追い落としをはかろうとしている様子が行間から伺える。そして、1899年6月15日の報告書でもベドロー領事の話蒸し返している〔香港総領事館報告書 No.118〕。

1898年11月にジョン・ウイアー大佐 Colonel John Weir (ウイアー) と名乗るアメリカ人が香港に到着した〔香港総領事館報告書 No.104〕。到着後ウイアー⁶⁶⁸は、シルベスター、グリメス、ベドロー、アパシブレ、リチャウコ⁶⁶⁹と会ったため、ワイルドマンは、「情報提供者 Informers ⁶⁷⁰」にウイアーを尾行させた。この報告書では、ホン・コン・ホテル Hong Kong Hotel で行われた会合で、ウイアーが3ヵ月以内にワイルドマンを職から追い出すと宣言したため、ワイルドマン総領事はこの会合から2ヵ月間、在香港アメリカ総領事館に夜警を置くことになったと、国務省に訴えている。その後の総領事館報告では、ウイアーは香港に来る前、1898年10月に香港委員会の委員長の手紙をもってマロロスに3回行き、アギナルドと話し合いを行った〔香港総領事館報告書 No.175〕と、ウイアーとフィリピン領内の革命側との関係も明らかにしている。この報告書ではワイルドマン総領事はウイアー⁶⁷¹のことを、反乱側に武器を売りたい会社の代表であったと結論付けている。このワイルドマン総領事、ベドロー領事、武器ブローカーたちの反目をどうとらえるのかは、難しいところである。しかし、武器調達のところでも述べたように、ワイルドマン総領事とベドロー領事がそれぞれのブローカーたちと個人的に繋がりを持ち、領事または総領事としてではなく、ビジネスマンとして行動していたと捉える方が説明がつく。また一

⁶⁶⁸ 自称「大佐」のため階級はつけない。

⁶⁶⁹ 兄弟のどちらかは不明。

⁶⁷⁰ 報告書であることを考慮して、ワイルドマン総領事は柔らかい表現を使っているが、ワイルドマン総領事の述べる「情報提供者」は、彼の雇ったスパイか探偵のことであると思われる。

⁶⁷¹ このウイアーという人物は、この後も香港とマニラの間を行き来し、香港ではワイルドマン総領事の友人と称して香港の副総領事に面会を求めたり、マニラではタフトのところに資本家のシンジゲートの代表だと称して面会を求めたりしており〔香港総領事館報告書 No.175〕、意味の分からない行動をしている。

方で、ブローカーたちも、その場その場で、自身の利益になる人物と組んでビジネスを行ったのであろう。しかし、彼らの関係を示すこれ以上の史料は現在見つけていないので、本稿はここで話を留めておきたい。

ワイルドマン総領事が雇った探偵による調査は、その後も続いた。エツェルがホン・コン・ホテルのオフィスのデスクで手紙を書き、インクを吸い取り紙で抑えた際、ワイルドマン総領事は探偵にその吸い取り紙を入手させた。ワイルドマン総領事はその吸い取り紙から手紙の内容を復元し、その内容を 1899 年 1 月 17 日にオーティス准将に告げた〔香港総領事館報告書 No.104〕。また、先に述べたように、1899 年 5 月にデューイ提督が香港に来た際の報告書では、提督の警護のためだけでなく、香港委員会を監視する特別な探偵も雇ったことを明らかにしている〔香港総領事館報告書 No.133〕。

1900 年 5 月 14 日の報告書では、ワイルドマン総領事が自費でスパイを雇っており、彼自身も、その行動が違法行為であることを自覚していると述べている：

私は 6 ヶ月前までの香港委員会の手紙の全ての綴りを入手することができた。しかし、私は私の弁護士と協議し、窃盗罪で逮捕される余地のある場所に自身の身を置くのは賢明ではないと決心した。しかし、私はこの綴りは我々にとって一番価値のあるものであろうと信じる。

I could have secured all of the letter books of the Junta up to six months ago, but after consultation with my Attorneys, I decided that it would not be wise for me to place myself in a position where I might be liable for arrest for theft; yet I believe the books would have been of the greatest value to us.

〔香港総領事館報告書 No.170〕

そして、香港総督と警察に対して断固たる処置と徹底的な監視を要請したことを付け加えている〔香港総領事館報告書 No.170〕。この綴りについては本人が直接盗んだ可能性は考えにくいので、やはりスパイか調査員を雇って入手したものと思われる。ワイルドマン総領事は、ここでも、香港委員会殲滅のためには、裏で違法な行為をしてでも情報を得る姿勢を、国務省に示した。

その結果、1900 年 6 月 12 日、休暇中であったワイルドマン総領事は、上海のアストール・ホテル Astor Hotel で、スピッツェルとシルベスターから、生きて町を出ることはできないと脅された。しかし、ワイルドマン総領事はグッドナウ在上海アメリカ領事に対し、英国領事にスピッツェルのことを報告してほしいと頼み、スピッツェルはその日のうちに

投獄された〔香港総領事報告書 No.181〕⁶⁷²。香港委員会のみならず、委員会に関わった商人たちも、ワイルドマン総領事の執拗な追及と妨害に苦しむことになった。つまり、ベドロー領事、そしてベドローと組んだブローカーたちに対し、ワイルドマン総領事は異常とも思える執念で追い落としを計ったのである。

5-4. 香港総領事館への軍人の派遣

1900年11月11日の香港総領事館報告では、ジョン S. マロリー中佐 *Lienenant Colonel John S. Mallory* (マロリー) が、香港委員会監視のために香港総領事館に来たことが書かれている〔香港総領事館報告書 No.192〕。1900年11月23日、北京のミリタリー・アタシェであったマロリー中佐は、早速、香港政庁に対して、香港委員会の申し立てを政府に提案し、29日に香港政庁と香港委員会弾圧について話し合った〔T. Agoncillo 1960: 321〕。しかし、この T. アゴンシーリョの本によると、香港政庁はやはり、香港委員会が法を犯さない限り、弾圧はできず、しかも委員会は不活発で広く分散していると述べ、積極的に動かなかったようである。

6. フィリピン人革命家の懸念

米西戦争開戦時から、革命家はワイルドマン総領事を 100 パーセント信用していたわけではなかった。1898年5月27日のアゴンシーリョからアギナルドへの手紙では、ワイルドマン総領事がフィリピン側の兵力を知ってしまうことがいいことなのか否かについて、疑問を呈しているものの、この時点ではワイルドマンとの関係を断つことは得策ではない旨が記されている〔PIR 471-8〕。しかし、1ヵ月後の6月20日のアゴンシーリョからアギナルドへの手紙では、他の国の領事たちは良心的なのにアメリカ領事、つまりワイルドマン領事は強欲だと述べ〔PIR 477-6〕、一緒に調達を行う間に気持ちに変化が起きた様子が伺える。また同月28日のアゴンシーリョが書いたのではないかと思われる手紙(宛名も不明)では、香港にいる領事⁶⁷³は野蛮で悪意を持っていると述べられている〔PIR 540-3〕。

1898年10月25日のアパシブレからアギナルドへの手紙に、ワイルドマン総領事が持

⁶⁷² ワイルドマン総領事は、「領事館の名誉を傷つけることを考えないのであれば、このユダヤ人紳士の顔をボクサーのようになるまで殴りつけたかった」と述べている。この時に、ワイルドマン総領事のファミリーも上海にいた。この後スピッツェルとシルベスターは、ヨーロッパに行った。

⁶⁷³ ワイルドマン領事だと思われる。

つ権限を取り上げるべきだと述べており、香港委員会がワイルドマン総領事との関係を断ちたいという姿勢が伺える〔PIR 431-11〕。同様に、アパシブレは、ワイルドマン総領事がアギナルドも参加する集合写真で、ワイルドマン総領事が起立して他が従属するように座っている写真を撮ることを要求したことに対して、大きな反発を示している〔PIR 431-10〕。

1898年11月16日、アパシブレはマビニへの手紙で、アメリカの新聞が、ワイルドマン総領事はアギナルドに対して大きな影響力を持っていると書いていと報告しており、ワイルドマン総領事がコミッションに任命される可能性を懸念している〔PIR 476-2〕。そして、ワイルドマン総領事からお金の回収を早く行うようにアギナルドを促し、もしワイルドマン総領事がコミッション⁶⁷⁴に任命されたら、フィリピン側が苦しむので、「したがって、私はより大きな損害を避けるためには、彼⁶⁷⁵のペテンを終わらせることがふさわしいと思う。きまりの悪い思いをさせる方策の1つとして、かの地⁶⁷⁶の我々の新聞が、ドン・エミリオとフィリピン人たちへの、吹聴された彼の影響力に言及している大げさな諸々にコメントをすることである *así es que yo creo ya conveniente acabar con su farsa para evitar mayores daños. Uno de los medios de ponerle en evidencia es, que nuestros periódicos de allí comenten los bombásticos que se refieren a su cacareada ascendencia sobre Don Emilio y los filipinos*」とアドバイスしている〔PIR476-2〕。この時点で、香港委員会はワイルドマン（総）領事が「アメリカ（総）領事」として彼らに対応してきたのではなく、ビジネスマンとして行動していることを「確信」し、ワイルドマン（総）領事の行動をプレスに公開していくことを決心していた。そして、1899年1月9日に、香港委員会は武器調達費用として当時のワイルドマン領事に渡した47,000ドルの件で、ワイルドマン総領事を訴えることになる。

7. 小括

1900年6月8日の報告でワイルドマン総領事は、革命家たちの情報について、ヘイ国務長官に向かって、「私は謹んで、そのような情報⁶⁷⁷は陸軍省とフィリピン軍政当局を通

⁶⁷⁴ これが何のコミッションだったのかは不明であるが、フィリピン委員会を指すと思われる。

⁶⁷⁵ ワイルドマン総領事。

⁶⁷⁶ マビニのいるフィリピン。

⁶⁷⁷ フィリピン関連の情報。

すよりも、この領事館に直接送る方が賢明であると進言するために（中略）注意喚起させて頂きたい I take the liberty of calling the attention...to respectfully suggest that it would be wise to forward such information to this Consulate directly rather than by the way of the War Department and the Military Government of the Philippines」〔香港総領事館報告 No.173〕と述べ、香港総領事館、ひいてはワイルドマン総領事の重要性を強調した。この過剰なまでの自信を支える理由として、彼はフィリピンの反乱者及び中国の反乱者に運ばれると予定されている武器は、香港を通過するか香港を経由しており、香港に流入した武器の多くが、香港政庁の監視をすり抜けてフィリピンに行くのは自明だからだ、と述べている。そして、1900年7月30日の報告書で、ワイルドマン総領事は、彼一流の威圧的な書き方で、「私は、国務長官と陸軍長官が、調査隊を香港で設立することが賢明であると思うであろうことを信じている I trust that the Secretaries of States and War will deem it advisable to establish a Fund for Detective Forces in this Colony」と述べ、国務長官と陸軍長官が香港での調査活動用の資金を、ワイルドマン総領事に与えることを提案している〔香港総領事館報告 No.178〕。

1900年3月3日の報告書では、フィリピン政策についても触れており、フィリピン諸島を素早くアメリカナイズするには、アメリカ商品や食料品を人々に認知させることが重要であり、そのためにアメリカ製品がフィリピンに入りやすい関税政策をとるべきだとの意見を述べている〔香港総領事館報告書 No.163〕。ワイルドマン総領事の管轄権は香港でありながら、しばしばその職務を逸脱し、フィリピン軍政及び民政長官の管轄となる問題に関して、独自の意見を報告書内で述べた。ワイルドマン総領事は、それくらい香港での革命運動の殲滅とフィリピン問題に入れ込んでいた。その原因は以下2点、1) 彼自身が東南アジアに関する知識人であるという自負、2) 米西戦争初期に香港委員会の武器調達に参加したことを帳消しにしたいという感情——であった。米西戦争時にワイルドマン(総)領事は、彼が懇意にしているブローカーを香港委員会に紹介し、武器調達を援助した。その後、広東領事のベドローが懇意にしているブローカーも香港委員会の武器調達をサポートし、香港委員会は1898年8月31日、バタンガスに武器を運ぶことに成功した。しかし、1898年9月に入ると、革命側がアメリカの敵へと変化していくために、ワイルドマン総領事は時あるごとに、武器調達への援助と香港委員会との関係に関して、国務省に自己弁護をせねばならなくなった。自己弁護の際、ワイルドマン総領事は自身の正義を相対化するものとして、対局に位置する不正のポジションに香港委員会やベドロー領事、そし

ベドロ領事と懇意にしているブローカーたちを置いて、彼らを激しく糾弾し、自分の「正当性」を暗に主張した。一方、ワイルドマン総領事に見切りをつけた香港委員会は、ワイルドマン総領事が香港委員会に対して返却を拒絶した武器調達資金に関して、ワイルドマン総領事を相手取って訴訟を起こした。この訴訟により、ワイルドマン総領事の自己保身に拍車がかかり、ワイルドマンは香港委員会を徹底的に追い詰め、その徹底攻撃の姿勢をアメリカ国務省とメディアに対して、より一層アピールせざるを得なくなった。

アジアのハブ港を抱える香港では、不審人物の出入りやモノの密輸入は日常茶飯事に行われており、当局に見つからない限りは、違法行為もある程度行うことができた。香港のみならず、他の疎開地でも状況は似たようなものであった。また、当時の総領事や領事は現代の外交官と違い、ある程度の権限が与えられ⁶⁷⁸、自由裁量で動ける部分が多かった。したがって、外交官として逸脱した行動もとりやすかった。ベドロ領事とワイルドマン（総）領事に見る武器エージェントとのつながりは、その一例だと言える。ワイルドマン（総）領事は時としてアメリカ（総）領事として、その地位や国際法上の保護を利用した。しかし一方で、合法と違法を行き来するような貿易エージェントとも関係を持ち、米西戦争初期にフィリピン人活動家と関係を持った。

香港委員会も米西戦争初期は、多少の疑問は持ちながらも、ワイルドマン（総）領事やベドロ領事が、アメリカ政府の意思で武器援助をしてくれていると認識しようとした。しかし、実際には、ワイルドマン（総）領事もベドロ領事も、彼らが個人的に懇意にしているブローカーと組んでビジネスを行っていただけであった。革命家は彼らに疑念を抱きながらも、武器調達の際、彼らが懇意にしている武器ブローカーに必要以上に依存してしまった。香港委員会やアギナルドは、政府の本拠地のマロロスにまでブローカーを呼び込み意見を聞くなど、ブローカーに過度に依存した。ベドロ領事と懇意にする武器ブローカーが香港委員会と取引をしていることで、ワイルドマン総領事とベドロ領事の間に関係が生まれ、その反目がワイルドマンの香港委員会への憎悪を助長するという悪循環を生んだ。その後比米戦争が始まったことで、ワイルドマン総領事の感情的で執拗な妨害は更にひどくなった。

こうして香港委員会は、アメリカ（総）領事たちと有象無象のブローカーたちによって、資金をもぎ取られてしまった。その上香港委員会は、ワイルドマン総領事によって必要以上に活動を制限され、次第に弱体化していった。香港に於ける最大の障害であったワイル

⁶⁷⁸ 当時は領事裁判権を持つ領事がいた。

ドマン総領事が汽船沈没事故で死亡した時には、時すでに遅く、アギナルドは降伏せざるを得ない状況にあった。ワイルドマン総領事と言う障害が取り除かれたとは言え、1901年の春までにアメリカのフィリピンの領有は国際社会において認知され、香港においてフィリピン人革命家を保護してくれるものは何もなくなっていた。アギナルドが降伏すると、彼らは所属する政府の存続すらあやふやなまま、「独立」の目標を掲げてゲリラの支援を行うことになった。

終章

各章の要約

第1章では、アギナルドの香港到着から、フィリピン革命第2フェーズにおける香港を中心とした革命側の領外活動とその崩壊について、フィリピン領内の動きとシンクロさせながら説明を行った。1897年12月29日、アギナルドと革命を率いたリーダーたちが香港に追放されたことで、革命における香港の重要性は一気に高まった。そして米西戦争マニラ湾海戦直後、マニラとの通信がアメリカ軍によって遮断されたことで、全ての情報はモノと共にマニラから香港へ、いったん汽船で運ばれ、香港から再発送または再発信されることになり、香港は革命運動におけるモノと情報のリレー・ポイントになった。

第2フェーズのスタートは、1898年4月25日の米西戦争開戦がきっかけであった。米西戦争開戦により、再起を考えていた革命側と、革命側を利用して米西戦争に勝利することを考えていたアメリカ側が結びついた。これは一見お互いにとって都合の良いことのように見えたが、お互いの将来を冷静に考える時間的余裕を持てなかったという不幸を生んだ。1898年4月下旬、シンガポールでの、アギナルド、プラット総領事、ブレイの3者の出会いは、革命側とアメリカ側、そして革命を利用しようとした第三者の日和見的行動の始まりでもあった。この時にお互いが将来のビジョンを持てなかったことは、その後の混乱の元になった。アメリカ政府もキューバの扱いを第1に考えていたため、フィリピン政策に関してビジョンを示せず、フィリピン人革命家たちの不安を招いてしまった。そして、アギナルドもまた、自身が設立する政府のビジョンを提示できなかったことで、イラストラドスに属する革命家たちの離反の原因を作った⁶⁷⁹。アギナルドは領内のみならず領外活動の組織に関しても、リーダーとして具体的な行動指針や指示が出せなかった。統括する人物が存在しない領外組織は、有機的に活動できなかった。そのため、もともと「知識人」として高いプライドを持っていた領外革命家たちは、焦燥感から、各自の考えるや

⁶⁷⁹ 池端は「フィリピン革命のリーダーシップに関する研究」で第1フェーズ終盤の、ビアク・ナ・バトにおける和平政策を「無節操な和平政策」と評し、アギナルドの本質的性格を「(1) 機会主義的革命指導、(2) 民族的リーダーとしての力量不足、(3) 武力主義」の3点だと述べ、アギナルドの政府の中に「確固たる革命思想が確立していなかった」〔池端 1980:178〕と分析し、「かれはボニファシオのようにいかにして革命的主体を形勢するかという問題には余り関心を払わなかった」〔池端 1980:179〕と述べている。池端の研究から見ると、アギナルドの本質的性格は第2フェーズになっても変わらなかったと考えてよい。

り方がベストな活動方法だという自負を持ち、時に単独行動に出ることもあった。

米西戦争が終わると、戦後処理とスペイン植民地の扱いを決めるため、パリで和平会議が開かれることになった。1898年9月以降、香港委員会は以下の2点、1) アメリカのフィリピン領有を懸念して、パリ和平会議終了までに武器調達を行う、2) アメリカのフィリピン領有を阻止するため、アメリカでロビー活動を展開する——を主眼において活動したが、やはり有機的な活動ができず、結果は芳しくなかった。フィリピン人革命家の領外活動は空回りし、1898年12月10日、アメリカのフィリピン領有が決定した。パリ条約によりスペインという敵が消えてしまったため、「反スペイン・ナショナリズム」で結合していた革命組織は、豊かな国アメリカの提示する「慈悲深い同化」を前にして、空中分解を始めた。

1899年2月4日、比米戦争が始まり、在外革命家の焦りはどんどんエスカレートしていき、以前から領外革命家間に存在していた不協和音は、仲間割れという形で噴出し始めた。アギナルドの適切なリーダーシップがない組織は、それぞれの構成員の暴走を止められなくなっていた。協力者だった人々も革命組織に見切りをつけて離反し、アギナルドの内閣にいた革命家もアメリカ協力者へと転向していった。それを領外活動家は批判的な目で見ながらも、止めることはできなかった。領外革命家は、自分のプライドと帰属する国家の必要性からフィリピン共和国設立を夢見て、革命運動のサポートを続けるしかなかった。

1901年3月23日、アギナルドが降伏した後も香港委員会は継続し、フィリピン領内の「政府なき革命軍ゲリラ」をサポートした。しかし、この時フィリピン領内の世論の趨勢は、すでにアメリカ民政支持に傾き、香港委員会のメンバーもそのことは理解していた。したがって彼らは、領内の武力闘争が終わることを願うようになっていった。こうして香港委員会は、以下の3点、1) アギナルドのリーダーシップのなさ、2) 強すぎた個人主義と自己保身、3) フィリピン領内の趨勢との乖離——が原因で自滅し、1903年7月末に解散することになった。

第2章では、日本帝国陸軍とフィリピン人革命家の活動について触れた。フィリピン人革命家は参謀本部に、武器援助と革命軍の近代化を期待した。米西戦争観戦武官としてフィリピンに来た参謀本部員は、比米戦争が始まると、視察員としてマニラの日本領事館に駐在するようになった。比米戦争初期の段階では、参謀本部は革命側に直接的な軍事援助を行っていた。しかし、「布引丸」沈没による武器調達の失敗により、日本の政治家と参謀

本部のフィリピン革命への直接的な関与がアメリカ当局の知るところになると、参謀本部の活動は、ビジネスを隠れ蓑にして親日協力者を養成する方向にシフトした。参謀本部は革命家に対してアジアという大きなくくりを持ち出して、革命家との連帯という漠然とした構想を提示した。参謀本部のサポートがビジネス志向に変化していった時点で、日本にいたフィリピン人革命家が、武力闘争に勝利する確信を持っていたか否かについては疑問が残るが、領外革命家たちは日本・香港・フィリピンで活動を続け、旧知のフィリピン人が折に触れて日本を訪問するようになっていった。参謀本部は義和団討伐と称した「軍事的北進」の裏で、フィリピン人社会の中に密かに根を張っていくような「ソフトな南進」を行っていた。他方でフィリピン人革命家は、ビジネスマンへの転身を図りながら、参謀本部を利用して革命後のフィリピンで生き残る道を模索した。参謀本部との協力関係は1901年3月23日のアギナルド降伏後も続いたが、1901年末、参謀本部の動きを懸念したアメリカ当局が、革命家のみならず、日本領事館付武官であった参謀本部員の住居に対しても、家宅捜索という「警告」を行い、参謀本部を牽制した。家宅捜索は十分に警告の役目を果たし、1902年2月、参謀本部員は日本に帰国した。アメリカ当局は日本政府をと言うよりは、参謀本部を警戒した。

そして、この比米戦争当時のフィリピン人革命家と参謀本部との協力関係が、後に日本のフィリピン進出を牽制するアメリカの行動へとつながった。

第3章では、マドリッドの革命新聞『フィリピナス・アンテ・エウロパ』を分析し、領外革命家の主張を明らかにした。フィリピン領内で発行していた革命新聞『ラ・インディペンデンシヤ』の廃刊後、『フィリピナス・アンテ・エウロパ』は革命運動の機関誌としての機能も併せ持っていた。しかし、アギナルドが思想面での統括もできなかったことで、編集長デ・ロス・レイエスの主張、新聞の主張、共和国政府の主張、共和国以降のアギナルドの独裁政府の主張、投稿者の主張、無記名の記事などが入り交り、主張に少しずつズレのある、散漫さを感じる新聞になってしまった。その上、政治に宗教的感情を絡めてしまったことで、新聞が一貫して主張しようとした政教分離に対しても、矛盾が生じてしまった。修道士問題も、アメリカ人教皇代理を非難したことで、もともとスペイン宗教界との問題であった修道士問題に、アメリカとの争いを持ち込んでしまう結果になった。新聞が主張する近代化も、当時としては目新しいものではなかった。スペイン統治下で教育を受けた人々にとって、ひいては日本を含む当時のアジアの人々にとって、近代化は欧米化と同義語であり、ヨーロッパ化の勧めなどは、今さら新聞で主張すべきものでもなかった。

むしろ新聞で主張したことで、フィリピン人が近代化されていない印象を読者に植え付けることにもなりかねなかった。近代化の中で述べられたアカデミーや教育構想は大言壮語にしか感じられず、英語教育の主張もアメリカ当局が進めようとした教育政策とさほど変わらず、目新しいものではなかった。同じく、ゲリラ戦の近代化に関しても、既に領内で泥沼化していたゲリラ戦を前に、もはや現実的な提案と思われるものではなかった。

新聞内での併合派を標的とした非難は、アメリカのフィリピン占領が進み、フィリピン人がどんどんアメリカ支持へと転向していることを確信させる内容であった。この新聞のアメリカ批判のラディカルさは、フィリピンのアメリカ当局の許容範囲を超えていた。したがって、フィリピン領内のアメリカ当局は、領内にいる『フィリピナス・アンテ・エウロパ』の関係者に対して圧力をかけ始めた。領内のみならず領外の人々も、領内にいる親戚に危害が及ぶことを恐れ、結果的に新聞は、フィリピン領内外でのサポート役と読者を失うことになった。これに加えて、アギナルドが降伏したことで、「フィリピン人によって設立され、アギナルド大統領を頂点とした国家」を支持して創刊された『フィリピナス・アンテ・エウロパ』は、革命新聞としての役割を終えることになった。

第4章では、ワイルドマン在香港・アメリカ（総）領事の報告書を分析した。この分析を通して、在外活動の中心地であった香港で何が行われ、ワイルドマン（総）領事が香港委員会とその活動をどう見ていたのかを明確にした。ワイルドマン領事は、在シンガポール領事とデューイ提督との電信の橋渡しをし、アギナルドや香港委員会と本格的に関わるようになった。ワイルドマン（総）領事は香港委員会の武器調達にも関与し、彼が懇意にしているブローカーを、武器調達に絡ませようとした。しかし、比米関係に陰りが見えてくると、ワイルドマン（総）領事は、武器調達の援助を正当化しアメリカへの忠誠を示すための言い訳を、探さねばならなくなった。そのため武器調達でワイルドマン（総）領事を出しぬいた形になった在広東アメリカ領事ベドロー、そしてベドロー領事と懇意にしているブローカーたちを「不正行為者」として糾弾し、自己保身を図り、香港委員会に圧力をかけるようになった。

1898年秋以降、ワイルドマン（総）領事のベドローへの敵意、そして武器エージェントの裏切り、フィリピン側との連絡の不行き届きなど、様々なことが重なり、香港での武器調達は難しくなった。時として武器調達は不首尾に終わり、香港委員会が大損害を被ることもあった。1899年に入ってから、ワイルドマン総領事の執拗な妨害は、香港委員会の活動を苦しめた。それでも香港委員会は、武器調達の場所をマカオに変えて努力した。1901

年 2 月 21 日、ワイルドマン総領事が汽船事故で溺死し、香港委員会はワイルドマン総領事を気にせず活動できるようになったが、同年 3 月 23 日、アギナルドがアメリカ当局に降伏してしまった。ワイルドマン総領事の香港委員会への執拗な妨害と憎悪は、香港委員会の武器調達活動にかなりの制限とダメージを与えた。

結論

本稿は文献史学、つまり人文科学の分野から、フィリピン革命第 2 フェーズの崩壊の過程を、領外活動を通して「語って」きた。自然科学の分野ではなく、人文科学の分野の中で歴史を語る以上、語られた歴史は、人々の営みの積み重ねででき上がっていくものになる。人間はある事態に直面した際、個々が「そうするべきだ」と考えた方向に進む。その考えが利他的な思考の帰結だったとしても、結果的にはその「利他」も個人が望むこと、つまり欲に突き動かされた結果にしか過ぎない。歴史研究者は、その欲を冷静に見極め、その主体者の行動を客観的に分析しなければならない。そうしなければ、研究者は物事の本質を見極めることはできないからである。そして分析後に歴史を「語る」際には、当事者がいる一面からだけでなく、全てのアクターの動きが見える上空から俯瞰して見る必要がある。こうして人々の営みを中心に、フィリピン革命の崩壊の過程を領外活動から鳥瞰図的に語ると以下ようになる。

第 1 フェーズは、カビテを中心とした革命家が、血縁・地縁などを中心に仲間と活動を広げ、前近代的なスペイン当局と戦った「内戦」であった。しかし、第 2 フェーズでは新参のフィリピン人領外革命家、アメリカ関係者、革命で利益を得ようとする有象無象、そして日本の参謀本部も加わり、活動の舞台は拡大化、国際化、複雑化した。革命組織は、ゲマインシャフトからゲゼルシャフトへと変化していった。しかし、フィリピン革命第 2 フェーズの場合は、ゲゼルシャフトへの完全な移行は行われず、この 2 つが共存する状態となった。心理学者ハリー C. トリアンディスは、ゲマインシャフトは集団主義の概念に、ゲゼルシャフトは個人主義の概念に似ていると述べているが〔トリアンディス 2000: 8〕、このトリアンディスの考えを借りると、第 2 フェーズは以下の 3 つ、1) 第 1 フェーズ初期に存在したカビテ主義などに代表される地域集団主義、2) 革命に相乗りしてきたアメリカ人・個人革命家・有象無象の個人主義、3) アメリカ、日本、その他のフィリピンへの進出を狙っていた国々——が複雑に絡み合ったままで、進んでいった革命だと解釈できる。個々の欲望や理想を持ったアクターが増加し、そのアクターたちが革命組織にコミッ

トすればするほど、革命組織の統率はとれなくなっていく。その上、一部の領外革命家は自己認知した任務を、革命組織にとって最適な方法だと思い込んで独断で行動し、革命組織を更に混乱へと陥れた。

第2フェーズの直前の重大なポイントは、フィリピン革命側が信頼に足りうる組織であるかどうかを、当初第3パートとして参入した一部のアメリカ関係者にどれくらいアピールできるかであった。しかし、革命側は彼らとの出会いの場になった香港とシンガポールで、アメリカの信頼を勝ち得るところか、嘲笑される結果しか出せず、もともとフィリピン革命組織を利用しようと考えていたこれら一部のアメリカ関係者は、革命家たちを単なる戦いの駒としか見なくなってしまう。

香港では、ビアク・ナ・バト協定締結後、フィリピン領内で革命のリーダーシップをとっていた多くの革命家たちが移住してきたため、ビアク・ナ・バト以前から住んでいた革命家たちとの間に、ビジョンのズレが起こった。香港に来た革命家たちは、主にルソン島を中心とした領内で武力闘争を行ってきた人々であった。それに対して、香港に以前から住んでいた革命家は、国際社会のパワー・バランスを肌で感じながら、領内の戦いをサポートしてきた人々であった。このフィリピン領内と領外の経験差から来るビジョンのズレによって、米西戦争初期の香港の革命組織は不安定な状態に陥った。革命運動に参加するアクターが増加し、価値観が多様化した上に、革命運動を担った中心人物たちがフィリピン領内と領外に分かれて活動したことで、組織の団結は弱まってしまった。

本来であれば、アギナルドがシンガポールから香港に帰ってきた5月2日の時点で、領外活動に関してだけでも、その行動方針と、組織化、そして役割分担を明確に決めて、香港委員会内で合意に至っておけばよかったのであろうが、すでにアメリカ艦隊がマニラ湾海戦で勝利しカビテに上陸を開始しており、香港の革命家は領外活動の地固めをする時間がなかった。そのため香港の革命家たちとアギナルドは、アメリカを利用すると称して、アメリカの軍事力に安易にすがってしまった。その陰には、ワイルドマン（総）領事のオファーした武器調達援助への強い誘惑もあった。ワイルドマン（総）領事は知り合いのブローカーを使い、革命家の武器調達のサポートを行った。革命家はアメリカの総領事が革命をサポートすると考えたが、アメリカはキューバで手一杯であり、実際にはワイルドマン（総）領事は以下の2つの目的、1）米西戦争を助けた功績を国務省へアピールする、2）武器調達で個人的な利益を得る——で、革命家を利用したに過ぎなかった。アギナルド及び香港委員会も、ワイルドマン（総）領事に全幅の信頼を置いていた訳ではなかった。

しかし彼らにとって、ワイルドマン（総）領事が持つ人脈と権力は魅力的であり、利用しない手はなかった。デューイ提督が自身の回顧録で、在シンガポール総領事プラットや、在マニラ領事 O. F. ウィリアムズには言及しているのにも関わらず、米西戦争や比米戦争でアメリカ軍をサポートしたワイルドマン（総）領事に関しては、その名前どころか香港（総）領事という言葉さえも使わず、あたかも存在しなかったように一切言及していないのは、ワイルドマン（総）領事に何がしかの不適切な事実があったからであろう。

米西戦争開戦当初、革命家の一部は、ワイルドマン領事を通さない武器調達を望んだ。この時、香港委員会を纏める地位にいたアゴンシーリョは、ワイルドマン領事に対して不信を抱きながらも、ワイルドマン領事絡みの武器調達を拒絶することはなかった。しかし、ワイルドマン領事を介した武器調達を強く望んだのが、アゴンシーリョが嫌悪するアルタチョとサンディコだったこともあり、アゴンシーリョは自身の個人的な嫌悪の感情を優先させ、この2人の武器調達に関して、関わらない、つまり「放任」の姿勢をとった。本来なら、アゴンシーリョが香港委員会の活動を統括せねばならなかったにもかかわらず、統括責任者のアゴンシーリョが武器調達に関して責任を放棄したことで、香港内部にあった対立はより先鋭化してしまった。このことは香港委員会と領内革命組織の団結をそぐ結果にもつながり、革命運動の躓きの第一歩ともなった。

第2フェーズをスタートさせてからも、フィリピンに帰還したアギナルドや領内外の革命家の多くが、組織内部にある意見の相違を是正しようとせず、民族解放闘争と共に、解放後の人々の受け皿となる「近代国家と言う外枠」を作ることを急いだ。国家建設はフィリピン独立のための緊急な課題であり、本来であれば建設のために必要である地道な根回しや、コンセンサスが後回しになった。1898年5月24日、アギナルドは全ての権限を彼に集中させるために独裁制を宣言した。この時点では以下の2つの理由、1) 領外革命家たちは米西戦争とアギナルドの再起で気持ちが高揚していた、2) 活動を武器調達に集中していた——から、彼らの中でアギナルドの独裁宣言に異論を唱える者はほとんどいなかった。独裁宣言の後、アゴンシーリョとそりの合わなかった何人かの活動家が、香港からフィリピンのアギナルドの下に戻ったために、香港委員会は崩壊の危機を逃れ、活動を継続することができた。

ワイルドマン（総）領事は、1898年7月頃までは、アメリカ軍の勝利のためにアギナルドを積極的にサポートしたというコンテキストで、プラット総領事や O. F. ウィリアムズ領事よりも国家に貢献していることを国務省に対してアピールした。しかし、アメリカ

側が反比に傾き始めると、保身のために、このサポートの一部に関して O. F. ウィリアムズ領事も関与していたのだと、その主張を変化させた。

8月13日、アメリカが勝利をおさめると、革命側はスペインの敗北を独立の好機と捉え、まずは憲法制定と議会設立を計画した。フィリピン人革命家の多くはスペインの影響を受けていたので、共和制を理想とした。アギナルドは、1898年6月23日には、すでに独裁制から革命政府に政治体制を移行しており、1898年9月15日、憲法制定のためにマロロスで議会を招集した。しかし、この時アギナルドとその支持者たちは、1898年5月24日に打ち出していた「アギナルドを大統領とした独裁制」を崩すことができず、欧米近代社会と対等に渡り合えるような合議的政治組織を作ることができなかった。表向きは議会と内閣があり、各部門の長は決まっていたが、その下にある組織はあいまいなままであった。この状態のままで「アギナルド大統領」という偶像を掲げて、外交や領外活動を行った。領外革命家も、当然この影響を受けた。革命政府の下で、領外活動が組織的に動くことは不可能に近かった。各領外革命家の手紙を見る限りでは、領外活動組織は統括者を頂点とする縦に伸びるツリー状の状態にはならず、各自がアギナルドに承認を求める「横並び型」の組織になっていた。外部の間人である非フィリピン人武器エージェントですら、武器調達の話のアギナルドと直接行った。しかし、アギナルド自身は、当時の複雑な国際情勢の中で、近代国家のかじ取りができるほどの能力を持ち合わせてはいなかった。そのことは一部の革命家も、武器ブローカーも、アメリカ人も、日本の参謀本部も理解していた。日本の参謀本部員と領事はマロロス議会開催の際、様子見を兼ねて式典出席を控えた。

第1フェーズ時に「対スペイン・ナショナリズム」を持っていた香港とマニラの革命家の中の一部は、8月13日以降、スペインという敵を失ったことで、ナショナリズムを生み出す原動力を失い、闘争意欲を失ってしまった。また、D. コルテスやパルド・デ・タベラのような一部のフィリピン人知識人や革命家たちは、アギナルドの作った政府の無計画さと脆弱性に絶望し、フィリピンの舵取りをアメリカの手にゆだねることに決め、アギナルドの作った組織を去った。領外活動においても、確固とした組織体系と命令系統を持たなかった共和国政府は、資金管理や意思疎通を、香港委員会とうまく行うことができなかった。在外革命家は武器を含む調達活動に全精力を注ぎこんだが、フィリピン領内の共和国政府の無計画性と脆弱性によって、政府主導と言うよりも、香港委員会主導による日和見的活動を強いられることになった。その計画性の無さとコミュニケーションの悪さによって武器調達は失敗し、比米戦争を前にして大きな損失を出す結果になった。組織体系と

命令系統が存在しないために責任の所在が明確にならず、各自がアギナルドに言い訳の手紙を送りそれで終わりになってしまった。

アメリカは8月13日のマニラにおける米西戦争の勝利後、「占領」国の持つ権力を利用して、時には違法な手段すら使って、断続的に革命家に圧力をかけた。フィリピンのアメリカ当局は、戦後処理の話し合いが行われる前から、マニラの電信や郵便の管理・検閲を行った。国際社会は革命組織が作った政府の未熟さを見抜き、どの国もアメリカと敵対するというリスクを冒してまで、フィリピン人革命家を公的に支持しようとはしなかった。公的な支持、つまり国際社会にわかる形での革命軍支持を避けたのは、日本の参謀本部も同じであった。参謀本部は、フィリピンで出会った革命家や日本に来た革命家を手厚くもてなし、政商を紹介し、軍事的サポートをする姿勢を見せたが、アメリカ側の米西戦争処理の見通しが不透明であるため、あからさまな援助は控え、パリ和平会議の動向に注目していた。その後、パリ和平会議で、アメリカのフィリピン領有が決まると、参謀本部はアメリカ当局に分からぬよう、密かに革命運動をサポートすることに徹した。

1899年1月23日、革命側はフィリピン共和国を宣言し、2月4日に比米戦争が始まった。アギナルドを大統領とする共和国政府は、国家を守る近代的な軍を作れず、国内問題解決と戦闘に忙殺された。革命側は共和国政府設立を理由に、比米戦争はアメリカとの国家間戦争であると主張したが、当時の国際社会はその主張を無視して、比米戦争をアメリカ当局に対する反乱とみなした。アギナルドを長とした共和政体は組織として有機的に機能を果たすことができず、破たんの道を突き進んだ。

マロロス陥落（または放棄）⁶⁸⁰の後、香港委員会は武器調達も、共和国とのコミュニケーションも困難な状況に陥った。このような組織の緩さと意思伝達の不確実さは、武器調達のみならず、フィリピン領外で活動する革命家たちの心にも影響した。香港側の問いかけに応答しないフィリピン側に対して香港側は苛立ち、またフィリピン側も武器調達が進まない香港に苛立った。その苛立ちが対外活動内部の対立と離反を助長した。

アメリカ側と武力抗争に入ったということで、武器調達を行っていた香港委員会は、ワイルドマン総領事にとって、アメリカへの敵対行為を助長する目障りな集団となり、彼に香港委員会殲滅の口述を与えることになってしまった。しかし、香港委員会が、イギリス管理下の香港にある限り、フィリピンのアメリカ当局は委員会に対して直接的な介入はできなかった。イギリス側も香港という自由貿易港の性質上、香港委員会をある程度、紳士

⁶⁸⁰ 中立的な立場で考えると、どちらの状況でもあったと考える。

的に扱い自由に行動させた。国際法上はどの国家にも属せず、ただのフィリピン人の集まりという香港委員会の性質は、武器調達においては強みになり、国家関係や国際法を気にせず武器調達ができるというメリットもあった。しかし、法という庇護のない彼らの違法性は、武器密輸において、ブローカーたちに食い物にされることにもなった。

革命側のアメリカに対する軍事的劣勢をうまく利用したのが、日本の参謀本部であった。比米戦争初期、参謀本部は非公式に革命軍の軍事的サポートを行った。参謀本部は、アギナルドの共和国政府が、アメリカ当局を軍事的に制圧できるとは信じてはいなかった。参謀本部は革命軍に対して軍事的サポートを行うことで、フィリピン人社会の中に入り込むことを目論んだ。しかし、1899年7月の「布引丸」の沈没などで、参謀本部の関与が白日の下に晒されるようになると、以下の2点、1) フィリピンを近代国家へと生まれ変わらせたいと言う「フィリピン人の切実な願い」、2) オリエン特におけるアジア人の連帯と言う「曖昧な理想」——を巧妙に利用しながら、革命家を参謀本部の協力者になるように仕向け、フィリピン全土に親日協力者を散住させる方向に目標を変化させた。このような「ソフトな南進」への路線変更は、義和団討伐という「ハードな軍事的北進」の裏で密かに行われていった。欧米列強に対し軍事力で劣り、しかも義和団の乱に軍事力を割かれていた日本陸軍は、以下の2つを持つフィリピン人革命家たち、1) 近代化（西洋化・産業化）への憧れ、2) 革命軍の近代化への必要性——を取り込み、革命家の人脈を利用し、軍事力を使わずにフィリピンに進出しようとした。19世紀末から20世紀にかけて、領外革命家は次第に参謀本部の企みに飲み込まれていった。

比米戦争開始後、ワイルドマン総領事は自身の反香港委員会の立場を国務省にアピールするため、ベドロー在広東アメリカ領事の香港委員会への不正関与をほのめかし、ベドロー領事に敢然と立ち向かう自身の姿を強調し、自己の正当化に努めた。これ以降ワイルドマン総領事は香港委員会の行動を妨害し、ベドロー領事や彼の仲間の武器ブローカーの不正を国務省に暗に訴えることで、本国への忠誠とベドロー領事の不当性をアピールし続けた。ワイルドマン総領事の不正と着服を確信した香港委員会が、武器調達資金の未返還金の返却を求めて、ワイルドマン総領事を裁判所に訴えたことも、ワイルドマン総領事の香港委員会への憎悪に拍車をかけた。ワイルドマン総領事は自己保身のために、貿易のサポートと言う当時の総領事本来の職務を逸脱してまで、香港委員会に対して執拗に妨害工作を行った。彼のこの活動は、香港委員会の活動を大きく制限する結果になった。

マドリッドでは、1899年10月25日から、革命新聞『フィリピナス・アンテ・エウロ

パ』が、革命側の運動と主張を発信し始めた。新聞はアメリカから心理的にも距離的にも離れたスペインで発行されたために、スペインの自由主義の影響を受け、比較的自由に発言することができた。しかし、創刊時にはすでに比米戦争が、ゲリラ戦へとシフトして行こうとしている時期で、戦況は泥沼化していた。新聞は定期刊行物によって革命側の主張を発信していこうとしたが、逆の見方をすると、新聞はフィリピン領内でのアメリカの植民地化の進捗状況や、イラストラドスがアメリカ支持に傾いていく姿を、フィリピン革命家の側から領外の人々に晒すことになった。つまりアメリカ植民地化の進行度を外部に報告する新聞になってしまったのである。その上、新聞で主張された近代化には新鮮味はなく、むしろその大言壮語だけが目立ってしまう結果になった。この新聞は、フィリピンのアメリカ軍及びアメリカ当局、そしてアメリカ政府とマッキンレー大統領を厳しく非難したために、アメリカ当局の弾圧を引き起こし、フィリピン人の読者離れを促進することにもなった。

新聞は革命軍が戦っている相手をアメリカとせず、アメリカ帝国主義としてアピールした。しかし、米西戦争後、アメリカが「慈悲深い同化」と「民政設立」という言葉で、スペインが行っていた高圧的な植民地政策のイメージを払拭し、文字上では植民地色を薄めたため、反アメリカ帝国主義批判という主張は、イラストラドスの共感を得られなかった。イラストラドスの利益を守り、彼らを参加させたアメリカ民政は、この両者を抱き込むことに成功した。したがって、比米戦争で革命側が掲げた反アメリカ帝国主義は、フィリピン国家継続の動機にはなりえず、革命側が反スペイン・ナショナリズムを反アメリカ・ナショナリズムへと切り替える原動力にもならなかった。このため民族解放革命は糾弾すべき相手を絞りきれないままになった。一部の領外革命家は自身の「帰属意識の必要性」によって、完全独立とフィリピン国家存続のスローガンを維持し続けた。しかし領外革命家の一部は、日本の拡張主義による「汎アジア」という甘言と、中国で起きている革命の動きに影響されて、フィリピン革命本来の目的であったフィリピンの民族解放という意識を発展させ、アジアの連帯という曖昧な理想を追うようになっていった。以下の3点、1) 一部の領外革命家の目的が拡大してしまったこと、2) 領外活動のハブとなる香港においてワイルドマン総領事の強烈な妨害が入り、大規模な武器調達や資金調達がうまく行えなかったこと、3) 領内においてアメリカの民政を明確に支持するフィリピン人が出始めたこと——から、「正戦」であった民族解放武力闘争を支持する革命家の団結は崩れ始め、海外組織は空中分解し始めてしまった。『フィリピナス・アンテ・エウロパ』はアギ

ナルドを全面に押し出し、完全独立の主張を掲げ、フィリピン人の団結を訴えたが、アギナルドが降伏してしまうと、アギナルドを使った主張にも整合性がとれなくなり、廃刊に追い込まれた。

アギナルドが降伏した後、香港委員会は自身の活動を、領外活動における情報とモノのリレー・ポイントから、革命の司令塔へと転換しようとした。しかし、アギナルドの側近たちもアメリカ当局に降伏してしまったために、その流れに追随して、多くのフィリピン人がアメリカの提示した民政に傾倒していくことになった。アギナルドの政府がなくなり、マドリッド委員会も解散し、フィリピン領内の親米イラストラドスがアメリカの民政の要職に就いていく中、領外革命家は自身が帰属する政府もなく、宙に浮いた状態のまま、フィリピン領内で活動する革命ゲリラをサポートすることになった。彼らはフィリピン内の武力革命闘争が継続することよりも、その武力闘争が終わって「くれる」ことを望むような、つまり他力本願的な戦争終結を待つ状態に陥っていった。フィリピン人の国家の崩壊とともに対外活動の勢いも衰え、実質的には香港と日本にいた（または日本と関係していた）革命家たちだけが、かろうじて「フィリピン革命」を続けていった。しかし、先に述べたように革命の目標はフィリピンからアジアへ拡大していた。しかし、革命家をサポートしていた日本の参謀本部も、アメリカ当局の強力な妨害に会い、1902年初頭、表向きはフィリピンから撤退せざるを得なくなった。1902年7月4日、アメリカが平定宣言を行い、フィリピンが国際的にもアメリカの植民地として認知されたことで、香港委員会もその存在意義を失い解散することになり、日本にいた一部の革命家も香港に撤収することになった。1903年7月、香港委員会は正式に解散し、領外活動は終了した。

フィリピン革命第2フェーズは、スペインがフィリピンから撤退し、アメリカと日本が進出し始めたという点で、後発植民地時代の幕開けとなった出来事であった。フィリピン領内のスペイン化した自己や文化というものは、一部のイラストラドスのアイデンティティーであり、誇りでもあったが、米西戦争後、国際情勢は大きく動き、スペインはすでにフィリピンには何ももたらさない国となった。そのことは領外革命家も十分承知していたが、一部の革命家はスペイン化していることに誇りを持つことで「ヤンキー文化」に毒された人々との差別化をはかろうとした。しかし、武力と財力を兼ね備えたアメリカの民主主義の前で、スペインの自由主義は、革命の助力にはならず、『フィリピナス・アンテ・エウロパ』の廃刊とともに、革命家の一部はスペインから撤退した。

第2フェーズの革命家の領外活動は、日本に付け入る隙を与え、アメリカのフィリピン

領有を促進させる結果になった。特に第2フェーズの参謀本部と革命家との活動は、日露戦争中にアメリカ軍によって再検証された。そして、その再検証の2ヵ月後、「桂—タフト協定」が秘密裏に締結された。ミラーは、日露戦争が、アメリカが日本を脅威として見るきっかけを作り、アメリカの海軍スタッフは、日米戦争における海軍の重要性を認識し、1911年に「日本戦争論の理論的根拠を確立した」〔ミラー 1994: 29〕と述べている。ここでミラーは、日露戦争以前アメリカ軍が、日本軍の活動を脅威と見なしていなかったと分析しているが、アメリカ当局が国際問題になる可能性を視野にいれながら、日本の領事館付武官の家宅捜索を行おうとしたことは、やはり、1901年当時、日本を「将来、敵対する可能性がある存在」と見ていたと考えてよいだろう。だからこそ、第2フェーズでの参謀本部の活動が、「桂—タフト会談」の前に見直されたと考える方が自然である。この会談による密約で、アメリカはフィリピンの領有を確実にし、日本は韓国併合へと歩みを進めることになった。

中国などのアジアの革命家も、一時は「汎アジア」という参謀本部の考えに乗せられ、日本に援助を求めた。ここには東亜同文会などのアジア主義者の関与もあるが、それは次なる課題として本稿では言及しない。1905年に振武学校⁶⁸¹の校長となっていた福島参謀本部次長が潘佩珠^{ファンポイチョウ}と会い、彼の活動を援助し〔田中 2010: 97-103〕、中国人が日本に留学したのもつかの間のことで、日本の拡張主義は、この後アジアで摩擦を起こすようになっていく。日本と太平洋上で戦闘になることを予想したアメリカ軍は第1次世界大戦中に、第2フェーズの日本の活動を再度見直した。こうして、第2フェーズでの領外活動は、日露戦争、第1次世界大戦と、歴史のターニング・ポイントで見直され、結果的に太平洋戦争への道筋を作る機会を与え、アジアを巻き込む大変動の起点となった。つまり、第2フェーズ時のフィリピン人革命家の領外活動は、もはやフィリピン史の域を超えた出来事へと発展していく原点となったのである。

⁶⁸¹ 1903年、陸軍軍人を目指す中国人留学生を受け入れる目的で、牛込区河田町に設立された学校。蒋介石などが学んだ。

史料と参考文献

史料

(1) 未刊行史料

日本語

外務省外交史料館

米西戦争一件 第一卷 5-2-1-0-9 001

米西戦争一件 第二卷 5-2-1-0-9 002

米西戦争一件 第三卷 5-2-1-0-9 003

米西戦争一件 第三卷 5-2-1-0-9 004

米西戦争一件 雑 第一卷 5-2-1-0-9 2 001

馬尼刺府ニ於テ本邦人米軍ニ捕縛セラレタル件

中村弥六ナル者馬尼刺反徒の援助ノ目的ヲ以テ兵器類密輸送ニ関スル件

在香港馬尼刺反徒秘密集会ニ関スル件

比律賓島独立ノ陰謀ヲ企テタル在本邦西班牙国人ノ件ニ関シ本邦注箭同国公使
ヨリ申出ノ件

馬尼刺人ニ関スル報告

比律賓島叛徒ト我領事館事務代理トノ協謀ニ関シ在本邦米公使申出ノ件

米西戦争一件 雑 第二卷 5-2-1-0-9 2 002

米西両国交戦ニ付常備艦隊軍艦三隻軍事視察並ニ帝国臣民保護ノ為メ香港付近
及比律賓諸島へ派遣ノ件

米西交戦視察員トシテ海軍少佐築山清智同大尉吉田益次郎西領「マニラ」へ派遣
ノ件

米西交戦ニ付医務衛生視察トシテ海軍軍医少監戸祭文造交戦地へ派遣ノ件

米西戦況視察トシテ陸軍砲兵大尉時澤右一米国艦隊へ従軍ノ件

在マニラ陸軍大尉奈良原忍ニ関スル件

陸軍視察員報告

国立国会図書館憲政資料室

米西戦争ニ関スル陸軍武官報告 A798

米西戦争ニ関スル陸軍武官報告 A800

米西戦争ニ関スル陸軍武官報告 A826

米西戦争ニ関スル陸軍武官報告 A833

秋山眞之 1902「米西戦争（上）（明治三十五年九月二十七日）『講和會談筆記 第八』皇族講和會（東京大学総合図書館所蔵）

秋山眞之 1902「米西戦争（下）（明治三十五年十月四日）『講和會談筆記 第八』皇族講和會（東京大学総合図書館所蔵）

奈良原忍「ヒリッピン群島」『講和會談筆記 第九』皇族講和會（東京大学総合図書館所蔵）

外国語

イギリス国立公文書館 **The National Archives United Kingdom**

Consuls at Manila. Diplomatic (FO 5/2401)

Spain and United States: Corres. Spain and United States. War (FO 881/7267)

Consuls at Manila. Diplomatic (FO 72/2076)

War between United States and Spain. Observance of Neutrality. Vol. 7. (FO 72/2097)

Consuls at Manila. Walker, Harford, Ramsden. Consular Commercial and Treaty (FO 72/2081)

アメリカ国立公文書記録管理局 **United States National Archives and Records Administration**

MS Despatches from U.S. Consuls in Hong Kong, 1844-1906 Volume 19 and 20.

MS Despatches from U.S. Consuls in Singapore, Straits Settlements, 1833-1906 Volume 22.

Philippine Insurgent Records, 1896-1901, with Associated Record of United States War Department, 1900-1906. Microcopy: File No. 390, 396, 398, 401, 405, 412, 416, 420, 431, 436, 442, 445, 446, 449, 471, 476, 477, 479, 483, 485, 486, 491,

493, 503, 513, 516, 520, 523, 530, 532, 540, 567, 568, 575, 610, 612, 613, 521,
522, 630, 633, 636, 638, 650, 666, 693, 780B, 903, 1060, 2036, Books C-15
460532 (東京外国語大学アジア・アフリカ言語研究所文献資料室所蔵)

(2) 刊行史料

日本語

外務省編「事項三〇 米西戦争一件 附 比島革命始末」『日本外交文書』 日本國際連合
協会 東京 第31巻 第2冊 1954年 271-380頁
宇都宮太郎『日本陸軍とアジア政策 陸軍大将宇都宮太郎日記 I』 宇都宮太郎關係資料
研究会編 岩波書店 2007年

外国語

Philippine Commission, *Report of the Philippine Commission to the President*, Vol.II,
Washington: Government Printing Office, 1900.
Taylor, John R. M., *The Philippine Insurrection against the United States*, Vol. I-V,
Pasay City: Eugenio, Lopez Foundation, 1971.
Ponce, Mariano, *Cartas sobre la Revoluciòn 1897-1900*, Manila: Bureau of Printing,
1932.

(3) 雑誌

外国語

Outlook Dec. 1899: New York (University of the Philippines, Deliman, Main Library in
Gonzalez Hall 所蔵マイクロフィルム)

(4) 新聞

外国語

Filipinas ante Europa :

1899: 10/25, 11/10, 11/25, 12/10, 12/30 1900: 1/10, 1/25, 2/10, 2/28, 3/10, 3/25, 4/10, 4/25, 5/10, 5/25, 6/10, 6/25, 7/10, 7/25, 8/10, 8/25, 9/10, 9/25, 10/10, 10/25, 11/10, 11/25, 12/10, 12/25 1901: 1/10, 1/25, 2/10, 2/25, 3/10, 4/10, 6/10 (1899年11/25、1/25、4/10はStaatsbibliothek zu Berlin所蔵、1900年3/10、6/10、12/25、1901年2/10、2/25、3/10、4/10、6/10はBiblioteca Nacional de España所蔵、その他はPIR 460352に収録されたものを使用)

Overland China Mail:

1898: 3/12, 3/19, 4/9, 4/23, 5/14, 5/28, 2/18, 7/2, 8/20, 10/15, 11/18 1899: 4/28, 5/6, 6/17, 6/24, 7/22, 8/8 (国立国会図書館所蔵)

Straits Times: 1898 4/28 (National University of Singapore 所蔵マイクロフィルム)

Manila Times: 1901 10/19 (MS Despatches from U.S. Consuls in Hong Kong, 1844-1906 Volume 19. and 20.内収録)

(5) 官報 (国立国会図書館所蔵)

日本語

第四千四十四號 明治二十九年十二月十九日土曜日 内閣官報局

第五千百三十七號 明治三十三年八月十六日木曜日 印刷局

第五千六百五號 明治三十五年三月十四日金曜日 印刷局

第六千六百六十九號 明治三十七年一月二十七日水曜日 印刷局

参考文献

日本語 (50 音順)

- アゴンシルリョ・テオドロ A. 著 岩崎玄訳 『フィリピン史物語——政治・社会・文化小史——』（フィリピン双書 6） 勁草書房 1977 年
- 荒哲 「リカルテ将軍の政治思想について」『アジア研究』 アジア政経学会 2008 年 第 54 巻第 1 号 62-77 頁
- アンダーソン・ベネディクト著 白石さや・白石隆訳 『増補 想像の共同体 ナショナリズムの起源と流行』 NTT 出版株式会社 2003 年
- アンダーソン・ベネディクト著 糟谷啓介・高地薫ほか訳 『比較の亡霊——ナショナリズム・東南アジア・世界』 作品社 2005 年
- アンダーソン・ベネディクト著 山本信人訳 『三つの旗のもとに アナーキズムと反植民地主義的想像力』 NTT 出版株式会社 2012 年
- 池端雪浦 「〈講演記録〉フィリピン革命から百年——英雄像をめぐる論争」『上智アジア学』 上智大学アジア文化研究所 1998 年 第 16 号 109-121 頁
- 池端雪浦 「第一章 明治期日本人のフィリピンへのまなざし」 池端雪浦・ホセ・リディア・N・ユー編『近現代日本・フィリピン関係史』 岩波書店 2004 年 3-33 頁
- 池端雪浦 『フィリピン革命とカトリシズム』 勁草書房 1987 年
- 池端雪浦 「フィリピン革命と日本の関与」 池端雪浦・寺見元恵・早瀬晋三『世紀転換期における日本・フィリピン関係』 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所 1989 年 1-36 頁
- 池端雪浦 「フィリピン革命とプロパガンダ運動」 山本達郎博士古稀記念論叢編集委員会編『山本達郎博士古稀記念 東南アジア・インドの社会と文化 上』 山川出版社 1980 年 119-147 頁
- 池端雪浦 「フィリピン革命のリーダーシップに関する研究(1896 年 8 月～1898 年 4 月)」『東洋文化研究所紀要』 東京大学東洋文化研究所 1980 年 第 80 冊 41-194 頁
- 池端雪浦 「フィリピン革命——ビサヤの視点から」 池端雪浦・石井米雄・加納啓良・後藤乾一・斎藤照子・桜井由躬雄・末廣昭・山本達郎編集『岩波歴史講座 7 東南アジア史』 岩波書店 2002 年 111-134 頁

- 池端雪浦 1994 「フィリピン国民国家の原風景—ホセ・リサールの祖国観と国民観」『アジア・アフリカ言語文化研究』 1994年 第46-47号 東京外国語大学アジア・アフリカ言語研究所 43-77頁
- 池端雪浦 「フィリピン国民国家の創出」 池端雪浦編『変わる東南アジア史像』 山川出版社 1998年
- 池端雪浦 「フィリピン民族思想の創出とプロパガンダ運動」 永積昭編『叢書 アジアにおける文化摩擦 東南アジアの留学生と民族主義運動』 巖南堂書店 1981年 145-196頁
- 池端雪浦 「明治期日本におけるフィリピンへの関心」『アジア・アフリカ言語文化研究』 2001年 第61号 203-220頁
- 池端雪浦・生田滋 「フィリピン」『東南アジア現代史』 山川出版社 1992年
- 石井英太郎 『比律賓獨立戦争秘聞』 比律賓協會 1942年
- 入江寅次 『明治南進史稿』 アジア学叢書 23 大空社 1997
- イレート・レイナルド・C 著 川田牧人・宮脇聡史・高野邦夫訳 清水展・永野善子監修 『キリスト受難詩と革命 1840～1910年のフィリピン民衆運動』 法政大学出版局 2005年
- イレート・レイナルド・C ラファエル・ビセンテ・L キブイェン・フロロ・C 著 永野善子編・監訳『フィリピン歴史研究と植民地言説』 めこん 2004年
- 内海三八郎著 千島栄一・櫻井良樹編 (『ヴェトナム独立運動家 潘佩珠伝 ——日本・中国を駆け抜けた革命家の生涯——』 芙蓉出版 1999年
- 王曉秋著 小島晋治監訳 『アヘン戦争から辛亥革命——日本人の中国観と中国人の日本観』 東方書店 1991年
- 尾崎卓爾 『弔民坂本志魯雄』 弔民會 1932年
- 外務省歐米局第二課 『比律賓獨立問題』 1932年
- 外務省外交史料館日本外交辞典編纂委員会 『新版 日本外交史辞典』 山川出版社 1992年
- 外務省調査部編纂 『比律賓民族史』 日本國際協會 1941年
- 勝海舟 江藤淳・松浦玲編『海舟語録』 講談社 2009年
- 上垣外憲一 『日本留学と革命運動』 東京大学出版会 1982年
- 勝海舟 江藤淳・松浦玲編『氷川清話』 講談社 2006年

- 北岡伸一 『官僚制としての日本陸軍』 筑摩書房 2012年
- 木村毅 『日本に來た五人の革命家』 恒文社 1979年
- 木村毅 『布引丸 フィリピン独立軍秘話』 恒文社 1981年
- 木村毅 『ホセ・リサールと日本』 アポロン社 1961年
- 木村正俊 「第五章 正戦と聖戦」 小林正弥編『戦争批判の公共哲学 「反テロ」 世界戦争における法と政治』勁草書房 2003年 109-131頁
- 黒岩比佐子 『編集者国木田独歩の時代』 角川学芸出版 2007年
- グレロ・アマド 『フィリピン社会と革命』現代史叢書 8 北沢正雄訳 亜紀書房 1977年
- 玄洋社々史編纂會 『玄洋社社史』 玄洋社々史編纂會 1917年
- 小泉徹 『宗教改革とその時代』 世界史リブレット 27 山川出版社 2003年
- 越山茂太郎 『近畿辯護士列傳』 潜龍館 1900年
- コンスタンティーノ・レナト 『フィリピン・ナショナリズム論(上)』 鶴見良行監訳 勁草書房 1988年
- コンスタンティーノ・レナト 『フィリピン・ナショナリズム論(下)』 鶴見良行監訳 勁草書房 1991年
- コンスタンティーノ・レナト 『フィリピン民衆の歴史 I』 池端雪浦・永野善子訳 勁草書房 1991年
- コンスタンティーノ・レナト 『フィリピン民衆の歴史 II』 鶴見良行他訳 勁草書房 1991年
- 斎藤聖二 『北進事変と日本軍』 芙蓉書房出版 2006年
- 斎藤多喜夫 「鈴木真一 写真家(一八三五～一九一九) 二代にわたり横浜を記録」 横浜開港資料館編『よこはま人物伝 歴史を彩った 50人』 神奈川新聞社 1995年
- 斎藤多喜夫 『幕末明治 横浜写真館物語』 吉川弘文館 2004年
- 斎藤多喜夫 「横浜写真小史—F.ベアトと下岡蓮杖を中心に」 横浜開港資料館編『F.ベアト写真集 1 幕末日本の風景と人々』 明石書店 169-199頁 2006年
- 酒井一臣 『近代日本外交とアジア太平洋秩序』 昭和堂 2009年
- 坂本俊篤 「軍事上ヨリ觀察セル海底電線ノ効用」『講和會談筆記 第壹』 皇族講和會
- 櫻井良樹 『辛亥革命と日本政治の変動』 岩波書店 2009年
- 篠原正人 『陸軍大将福島安正と情報戦略』 芙蓉出版社 2002年
- 島田謹二 『アメリカにおける秋山真之 上』 朝日出版社 1975年

- 島田謹二 『アメリカにおける秋山真之 下』 朝日出版社 1975年
- 蔣永敬 「孫中山と潘佩珠」『孫文とアジア——1990年8月国際学術討論会報告集』 孫文研究会編 1990年
- 鈴木静雄 『物語フィリピンの歴史 盗まれた楽園と抵抗の 500年』 中公新書 1997年
- 砂川幸雄 『大倉喜八郎の豪快なる生涯』 草思社 1997年
- 高橋均 『ラテンアメリカの歴史』 世界史リブレット 26 山川出版社 1998年
- 高原秀介 『ウイルソン外交と日本 理想と現実の間 1913-1921』 創文社 2006年
- 立石博高・若松隆編 『概説スペイン史』 有斐閣 2000年
- 田中孜 『日越ドンズーの華 ヴェトナム独立秘史 潘佩珠の東遊 (=日本に学べ)運動と 浅羽佐喜太郎 明成社 2010年
- 谷川稔 『国民国家とナショナリズム』 世界史リブレット 35 山川出版社 2001年
- 陳錫祺 1993「孫中山のアジア観大綱」中村哲夫訳日本孫文研究会編『孫文とアジア——1990年8月国際学術討論会報告集』 汲古書院 10-24頁 1993
- 陳徳仁 安井三吉 『孫文と神戸 辛亥革命から 90年 補訂版』 神戸新聞総合出版センター 2002年
- 東亞經濟調査局 『經濟資料通卷第百九十六 最近の比律賓』 東亞經濟調査局 1936年
- トリアンディス・ハリー・C 著 神山貴弥・藤原武弘編訳 『個人主義と集団主義 2つのレンズを通して読み解く文化』 北大路書房 2003年
- 永井和 『近代日本の軍部と政治』 思文閣出版 1993年
- 中野聡 『歴史経験としてのアメリカ帝国 日比関係史の群像』 岩波書店 2007年
- 中野哲夫「孫文のアジア観」『孫文とアジア——1990年8月国際学術討論会報告集』 孫文研究会編 汲古書店 1990年
- 永野善子 「記憶からポストコロニアルへ——「知の植民地」状況を超えるために——」『神奈川大学評論』 神奈川大学評論編集専門委員会編 第39号 2001年 220-227頁
- 永野善子 『歴史と英雄 フィリピン革命百年とポストコロニアル』 神奈川大学評論ブックレット 11 御茶ノ水書房 2000年
- 並木頼寿 『日本人のアジア認識』 山川出版社 2008年

- 奈良久 『戦いの旗を高く掲げよ アリテミオ・リカルテ研究ノート』 新風舎 2007年
- 西尾幹二 『ヨーロッパの個人主義 人は自由という思想に耐えられるか』 講談社現代新書 176 講談社 1977年
- 日本無線電線株式会社 『世界海底電信線網』 1937年
- 日本郵船株式會社 『日本郵船株式會社五十年史』 日本郵船株式會社 1935年
- 沼田由美 「19世紀フィリピン革命と民族主義の萌芽」『海外事情研究報告』 拓殖大学海外事情研究所 第21号 1987年 129-141頁
- 野家啓一 『物語の哲学』 岩波現代文庫 岩波書店 2006年
- 箱田恵子 『外交官の誕生 近代中国の対外態勢の変容と在外公館』 名古屋大学出版会 2012年
- 秦郁彦編 『日本陸海軍総合事典〔第2版〕』 東京大学出版会 2002年
- 波多野勝 『近代東アジアの政治変動と日本の外交』 慶應通信株式会社 1995年
- 波多野勝 「フィリピン革命運動と日本の対応」『アジア研究』 アジア政経学会 1988年 第34巻第4号 69-95頁
- 早瀬晋三 「南方「移民」と「南進」——フィリピンにおける「移民」、外交官、軍事工作——」『岩波講座 近代日本と植民地 5』 岩波書店 1993年 57-76頁
- 早瀬晋三 『フィリピン近現代史のなかの日本人 植民地社会の形成と移民・商品』 東京大学出版会 2012年
- 早瀬晋三 『未完のフィリピン革命と植民地化』 世界史リブレット 123 山川出版社 2009年
- 早瀬晋三 『歴史研究と地域研究のはざままで フィリピン史で論文を書くとき』 法政大学出版局 2004年
- 平間洋一 「フィリピン独立戦争と日米比関係」『法学研究』 慶應義塾大学法学研究会 2000年 第73号第1号 237-267頁
- 藤原帰一 「序章 二つの帝国の物語 後発植民地主義としての日本とアメリカ」『アメリカの影のもとで 日本とフィリピン』 藤原帰一・永野善子編著 法政大学出版局 2011年 3-19頁
- 古田元夫 『アジアのナショナリズム』 世界史リブレット 42 山川出版社 2000年
- ベニテス・コンラド著 東亜研究所訳 『比律賓史 一政治・経済・社會史的研究—上卷—』

- 東亜研究所 1942年
- ベニテス・コンラド著 東亜研究所訳 『比律賓史 一政治・経済・社会史的研究—下巻—』
- 東亜研究所 1945年
- ホアキン・ニック 『物語 マニラの歴史』 明石書店 2005年
- ポンセ・マリアノ著 宮元平九郎・藤田季荘訳 『南洋之風雲』 東京博文館 1901年
- 満鐵東亜経済調査局 『南洋叢書第五巻 比律賓』 慶應書房
- 宮崎滔天 『三十三年の夢』 文藝春秋社 1943年
- ミラー・エドワード 沢田博訳 『オレンジ計画』 新潮社 1994年
- 安井祐一 『フィリピンの近代と文学の先駆者 ホセ・リサールの生涯』 芸林書房 2001年
- 矢野暢 『「南進」の系譜 日本の南洋史観』 千倉書房 2009年
- ラヌーサ・セザール・Z ザイデ・グレゴリオ・F 『日本におけるホセ・リサール』 アポロン社 1961年
- 李廷江 『日本財界と近代中国 辛亥革命を中心に』 御茶の水書房 2003年
- 陸軍士官学校 『陸軍士官学校の真相』 外交時報社 1914年
- リサール・ホセ著 岩崎玄訳 『ノリ・メ・タンヘレ——わが祖国に捧げる——』 東南アジアブックス 勁草書房 1986年
- リサール・ホセ著 岩崎玄訳 『反逆・暴力・革命——エル・フィリブステリスモ——El Filibusterismo』 フィリピン双書3 勁草書房 1976年
- リサール・ホセ著 村上政彦翻案 『見果てぬ祖国』 潮出版社 2003年
- 渡辺節夫「序論」 渡辺節夫編 『近代国家の形勢とエスニシティ 比較史研究』 青山学院大学総合研究所叢書 勁草書房 2014年
- 湯郷将和 『キサク・タマイの冒険』 新人物往来社 1989年
- ユウ・ホセ・リディア・N. 「比律賓中立化問題をめぐるフィリピン・アメリカ・日本三
国関係一九〇〇～一九三九年」 池端雪浦・ホセ・リディア N.ユウ編『近現代日本・
フィリピン関係史』 岩波書店 35—79頁 2004年
- 横浜市警察本部 『碓山警視顕彰録』 横浜市警察本部 1952年
- 吉川洋子「米領下マニラの初期日本人商業, 1898-1920——田川森太郎の南方関与——」
『東南アジア研究』 京都大学東南アジア研究センター 第18巻3号 387—421頁
1980年

外国語（アルファベット順）

- Aguinaldo, Emilio F., *My Memoirs*, Vol. I, trans. Colendrino-Bucu, Luz, Aguinaldo, Cristina Suntay, Manila: 1967.
- Aguinaldo, Emilio F., *Reseña Verídica de la Revolución Filipina*, Barcelona: WWW. Linkgua-digital.com, 2012 (rpt. of 1899).
- Agoncillo, Felipe, *Memorials from Señor Felipe Agoncillo and Constitution of the Provisional Philippine Government*, Montana: Kessinger Publishing, 2009 (rpt. of 1899, Anti-Imperialist League).
- Agoncillo, Teodoro A., *The Revolt of the Masses: The Story of Bonifacio and the Katipunan*, Quezon City: University of the Philippines, 1956.
- Agoncillo, Teodoro A., *Malolos: The Crisis of the Republic*, Quezon city: University of the Philippines, 1960
- Agoncillo, Teodoro A., *Filipino Nationalism 1872-1970*, Quezon City: R. P. Garcia Publishing Co., 1974.
- Agoncillo, Teodoro A., *History of the Filipino People*, Manila: Garotech, 1990 (8th ed. of 1960).
- Alejandrino, Jose, *The Price of Freedom*, trans. Alejandrino Jose M., Manila: M. Colcol & Company, 1949.
- Alip, Eufronio M., *In the Days of General Emilio Aguinaldo A Study of the Life and Times of a Great Military Leader Statesman, and Patriot Who Founded the First Republic in Asia*, Manila: Alip & sons, Inc., 1969.
- Alizona, Encarnacion, *Galicano Apacible*, Manila: National Historical Institute, 1971.
- Alvarez, Santiago V., *The Katipunan and the Revolution Memoirs of a General with the Original Tagalog Text*, trans. Malay, Paula Carolina S., intro. Paredes, Ruby R., Manila: Ateneo de Manila University Press, 1992.
- Anderson, Benedict, *Under Three Flags: Anarchism and the Anti-colonial Imagination*, Manila: Anvil Publishing, Inc., 2006.
- Barrows, David P., *A History of the Philippines*, rpt. of 1905 American Book Company, South Carolina: Nabu Press, 2010.

- Basa, Restituto C., "Pangasinan & the Philippine Revolution, 1896-1899." *Resistance and Revolution: Philippine Archipelago in Arms*, Churchill, Bernardita Reyes, ed., Manila: National Commission for Culture and the Arts, 2002, pp.8-23.
- Barnes, Mark R., *The Spanish-American War and Philippine Insurrection, 1898-1902: An Annotated Bibliography*, New York: Routledge, 2011.
- Baradi, Mauro, *Freemasons and Freemasonry*, Manila: Ledda Press Inc., 1956.
- Beede, Benjamin R., ed., *The War of 1898 and U.S. Interventions 1898-1934: An Encyclopedia*, New York: Garland Publishing, Inc., 1994.
- Blount, James H., *The American Occupation of the Philippines*, Quezon City: Malaya Books Inc., 1968.
- Bridt, Davud, *Visualizing American Empire: Orientalism and Imperialism in the Philippines*, Chicago: The University of Chicago Press, 2010.
- Causing, Juan 33^o, *Freemasonry in the Philippines: An Interesting Comprehensive Account of Masonic Activities during a Period of 209 Struggling, Glorious Years, 1756-1965*, Cebu: G T Printers, 1969.
- Cavite Historical Society, *Cavite en Siglo 19: Translation of Selected 19th Century Documents*, trans. Francisco, Michael C., 2002.
- Churchill, Bernardita Reyes., "Historiography of 1898 and a Critical Bibliography," *The Philippine Revolution of 1896: Ordinary Lives in Extraordinary Times*, Rodao, Florentino and Rodriguez, Felice Noelle, eds., Manila: Ateneo de Manila University Press, 2001, pp.277-300
- Constantino, Renato, *The Making of a Filipino (A Story of Philippine Colonial Politics)*, Quezon City: Malaya Books Inc., 1969.
- Constanino, Renato. *The Philippines: A Past Revisited (Pre-Spanish-1941)*. Vo.I, Manila: Renato Constntino, 2002 (19th rpt. of 1975).
- Constantino, Renato and Constantino, Letizia R., *The Philippines: The continuing Past*, Manila: The Foundation for Nationalist Studies, 1999 (8th rpt. of 1978).
- Cortes, Rosario Mendoza, Boncan, Celestina Puyal and Jose, Ricardo Trota, *The Filipino Saga: History as Social Change*, Quezon City: New Day Publishers, 2000.
- Cosmas, Graham A., *An Army for Empire: The United States Army in the*

- Spanish-American War*, Texas: Texas A&M University Printing, 2003.
- Cullinane, Michael, *Ilustrado Politics: Filipino Elite Responses to American Rule, 1898-1908*, Quezon City: Ateneo de Manila University Press, 2003.
- De Achútegui Pedro S. S.J. and Bernad, Miguel A.S.J., *Aguinaldo and the Revolution of 1896: A Documentary History*, Manila: Ateneo de Manila, 1972.
- De la Costa, Hiracio S.J. *Readings in Philippine History: Selected Historical Texts Presented with a commentary*, rpt. of 1965, Makati: Bookmark, Inc., 1992.
- Delmendo, Sharon, *The Star-Entangled Banner: One Hundred Years of America in the Philippines*, New Jersey: Rutgers University Press, 2004.
- De los Reyes, Isabelo, *El Folk-lore Filipino*, Vol.I, South Carolina: Nabu Press. 2011 (rpt. of 1889, Manila: Imprenta de Santa Cruz,).
- De los Reyes, Isabelo, *El Folk-lore Filipino*, Vol.II, South Carolina: Nabu Press, 2011 (rpt. of 1889, Manila: Imprenta de Santa Cruz,).
- De Ocampo, Esteban A., *First Filipino Diplomat Felipe Agoncillo (1859-1941)*, Manila: National Historical Institute, 1977.
- Dery, Luis C., "Actas De Capitulaciones. " *Cavite: Cultura e Historia*. Cavite: Cavite Historical Society, Inc., 2002, pp.5-18.
- Dewey, George, *Autobiography of George Dewey, Admiral of the Navy*. Charleston: Biblio Bazaar 2009 (rpt. of 1916, New York: Charles Scriber's Sons).
- Epistola, Silvino V. *Hong Kong Junta*. Quezon City: University of the Philippines Press, 1996.
- Escalante, Rene R. "The State of the Fraiar Lands of Cavite on the Eve of American Occupation," *Cavite: Cultura e Historia*, Cavite: Cavite Historical Society Inc., 2002, pp. 101-126
- Farrell, John T. "An Abandoned Approach to Philippine History: John R. M. Taylor and the Philippine Insurrection Records," *The Catholic Historical Review*, Vol.39, No.4, Wahington: Catholic University of America Press, 1954, pp.385-407.
- Ferrer, Ada. *Insurgent Cuba: Race, Nation, and Revolution, 1868-1898*, North Carolina: The University of North Carolina Press, 1999.
- Foreman, John. *The Philippine Islands*, intro. Rento Constantino, Mandaluyong:

- Chacho Hermanos, Inc., 1985 (rep. of 1906, The Scribner Book Co., Inc.).
- Francia, Luis H., *A History of the Philippines: From Indios Bravos to Filipinos*, New York: The Overlook press, 2010.
- Fujiwara, Kiichi and Nagano, Yoshiko, *The Philippines and Japan in America's Shadow*, Singapore: NUS Press, 2011.
- Goodman, Grant K., "General Artemio Ricarte and Japan" *Journal of Southeast Asian History*, Vol.7, No.2, Cambridge: Cambridge University Press on behalf of Department of History, National University of Singapore, 1966, pp.48-60
- Goodman, Grant K., *Four Aspects of Philippine-Japanese Relations, 1930-1940*, Yale University Southeast Asia Studies, 1967.
- Grand Lodge of Free and Accepted Masons of the Philippines, *Constitution of the Grand Lodge of Free and Accepted Masons of the Philippines (Masonic Law book)*, rev. 1962. Manila. 1962.
- Gurrero, Amado, 2006 *Philippine Society and Revolution*, Philippines: Aklat ng Bayan, Inc. 2006 (5th ed. of 1970).
- Ikehata, Setuho, "Japan and the Philippines, 1885-1905: Mutual Images and Interests," *Philippines-Japan Relations*, Quezon City: Ateneo de Manila University Press, 2003, pp.19-46.
- Ileto, Reynaldo Clemeña, "The 'Unfinished Revolution' in Philippine Political Discourse," *Southeast Asian Studies*, Kyoto: Center for Southeast Asian Studies Center, Vol. 31, No. I, June 1993, pp. 62-82.
- Ileto, Reynaldo Clemeña, *Pasion and Revolution: Popular Movements in the Philippines, 1840-1910*. Manila: Ateneo de Manila University Press, 1997 (4th ed. of 1979).
- Jose, Ricardo, "Tale of Two Occupations: Observations on the U.S. Occupation of the Philippines, 1898-1941 and the U.S. Occupation of Japan, 1945-1951." *Philippines and Japan: Directions and Challenges. Selected Papers from the Third and Fourth International Conferences on Japanese Studies*. ed. By Yu-Jose, Lydia and Palanca-Tan, Rosalina. Quezon City: Japanese Studies Program Ateneo de Manila University. 2000, pp.80-89.

- Kalaw, Teodoro M., *Philippine Masonary: Its origin, Development, and Vicissitudes up to Present Time (1920)*, trans. Stevens Frederic H. and Amechazurra, Antonio, Manila: McCullough Printing Company, 1956.
- Kalaw, Teodoro M., *The Philippine Revolution*, Quezon City: Jose B. Vargas Filipina Foundation, 1969.
- Karnow, Stanley, *In our image: America's Emire in the Philippines*, New York: Random House, 1989.
- Kennedy, Charles Stuart, *The American Consul: A History of the United States Consular Service, 1776-1914*, New York: Greenwood Press, 1990.
- Kirk, Donald, *Philippines in Crisis: U.S. Power versus Local Revolt*, Manila: Anvil Publishing, Inc., 2005.
- Mactal, Ronaldo B., *Hong Kong Junta/Comite Central Filipino: Pulitika at Kontrobersya*, Malate: De La Salle university Press, 2000.
- Majul, Ceasar Adib, *The Political and Constitutional Ideas of the Philippine Revolution*, Quezon City: University of the Philippines Press, 1996 (2nd ed. of 1967).
- May, Glenn Anthony, "Private Presher and Sergeant Vergara: The Underside of the Philippine-American War," *Reappraising an Empire*, Cambridge: Harvard University Press, 1984, pp.35-57.
- May, Glenn Anthony, *Inventing a Hero: The Posthumous Re-Creation of Andres Bonifacio*, Quezon City: New Day Publishers, 1997.
- Medina, Isagani R., *Andres Bonifacio*, Manila: Tahanan Books, 1992.
- Medina, Isagani R., *May Tainga ang Lupa...Espionage in the Philippines (1896-1902) and other Essays*, ed. by Medina, Miranda R., Manila: UST Publishing House, 2002.
- Millar, Edward S., *War Plan Orange: The U.S. Strategy to Defeat Japan, 1897-1945*, Anapolis: Naval Institute Press, 2007.
- Miller, Stuart Careighton, *Benevolent Assimilation The American Conquest of the Philippines, 1899-1903*, Massachusetts: Yale University, 1982.
- Miller, Stuart Careighton, "The American Soldier and the Conquest of the Philippines,"

- Reappraising an Empire*, Cambridge: Harvard University Press, 1984, pp.13-34.
- Mojares, Resil B., *The War against the Americans Resistance and Collaboration in Cebu 1899-1906*, Manila: Ateneo de Manila University, 1999.
- Mojares, Resil B., *The War against the Americans: Resistance and Collaboration in Cebu: 1899-1906*, Manila: Ateneo de Manila University Press, 2004 (2nd pt. of 1999).
- Mojares, Resil B., *Brains of the Nation: Pedro Paterno, T.H.Pardo de Tavera, Isabelo de los Reyes and the Production of Modern Knowledge*, Manila: Ateneo de Manila University, 2006.
- Mojares, Rasil B., *Isabelo's Archive*, Mandaluyong City: Anvil Publishing Inc., 2013.
- Neagles, James C., *U.S. Military Records: A Guide to Federal and State Sources, Colonial America to the Present*, Utah: Ancestry Incorporated, 1994.
- O'Connor, D. J., *Representations of the Cuban and Philippine Insurrections on the Spanish Stage 1887-1898*, Tempe: Bilingual Press, 2001.
- O'Toole, Gorge J.A., *The Spanish War: An American Epic-1898*, New York: W.W. Norton & Company, 1984.
- Pangilinan, Gervasio, *The Historic Cavite (La Historica Cavite)*, trans. Arespachoga, Lourdes, Cavite: Cavite Historical Society, 2001.
- Paredes, Ruby R., "The Origins of National Politics: Taft and the Paterno Federal," *Philippine Colonial Democracy*, Connecticut: Yale University Southeast Asia Studies, 1988, pp.41-69.
- Paterno, Pedro A., "The Pact of Biyak-na-bato" *The Pact of Biyak-na-bato and Ninay*, Manila: National Historical Institute, pp.1-120, 2004 (rpt. of 1897).
- Ramos, Jose A., *Articulos Varios de Isabelo de los Reyes y Florentino Sobre Etnografía, Historia y Costumbres del País*, South Carolina: Nabu Press, 2010 (rpt. of 1887, Librería Universal de Pendigueno).
- Robinson, William I., *Promoting Polyarchy: Globalization, US Intervention, and Hegemony*, Cambridge: Cambridge University Press, 1998 (2nd pt. of 1996).
- Saniel, Josefa M., *Japan and the Philippines 1868-1898*, Quezon City: University of the Philippines Press, 1969 (rpt. of 1963).

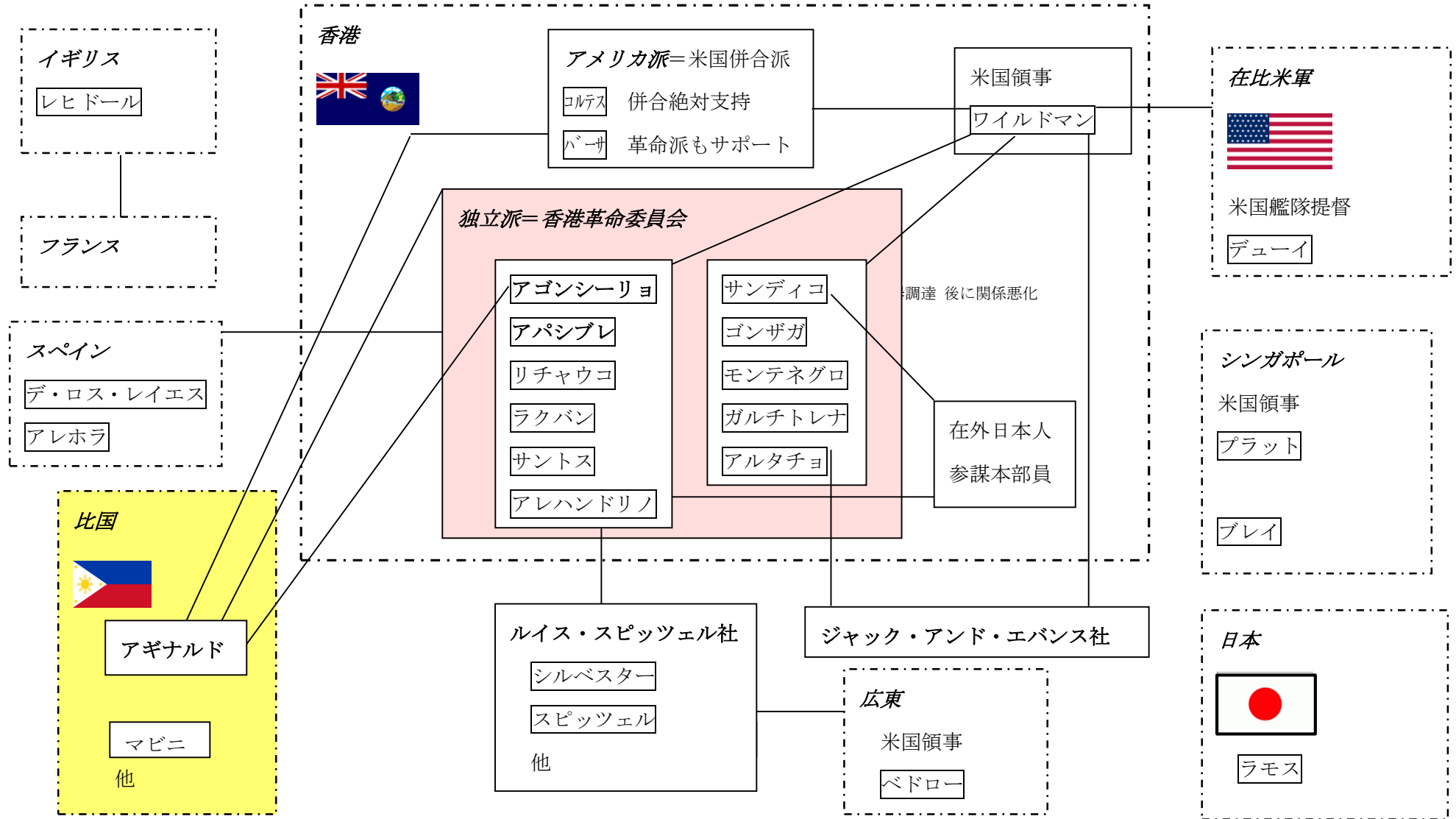
- Schumacher, John N. SJ., *Revolutionary Clergy: The Filipino Clergy and the Nationalist Movement, 1850-1903*, Quezon City: Ateneo de Manila University Press, 1998 (3rd pt. of 1981).
- Schurman, Jacob Gould, *Philippine Affairs, A Retrospect and Outlook: An Address (1902)*, Montana: Kessinger Publishing, 2010 (rpt. of 1902, New York: Charles Scribners sons).
- Scott, William Henry, *The union Obrera Democratica: First Filipino Labor Union*, Quezon City: New Day Publishers, 1992 (rpt. of 1921).
- Sheridan, Richard Brinsley, *The Filipino Martyrs: A story of the Crime of February 4, 1899*, intro. Rento Constantino. Mandaluyong: Chacho Hermanos, Inc. 1986 (rpt. of 1900, London, John Lane: The Bodley Head).
- Silbey, David J., *A War of Frontier and Empire: The Philippine-American War, 1899-1902*, New York: Hill and Wang, a Division of Farrar, Straus and Giroux, 2007.
- Skillin, Don., *Magdalo: The Story of Emilio Aguinaldo: Revolutionary Hero of the Philippines*, Baltimore: Publish America, LLLP, 2006.
- St. Clair, Francis. *The Katipunan: or, The Rise and Fall of the Filipino Commune*, Carolina: Biblio Bazaar, 2009 (rpt. of 1902, Manila: Amigos del Pais).
- Tan, Samuel K., *The Filipino-American War 1899-1913*, Quezon City: University of the Philippine Press, 2002.
- Tucker, Spencer C. ed., *The Encyclopedia of the Spanish-American and Philippine-American Wars: A Political, Social, and military History*, Vol.I, California: Abc-Clio, LLC. 2009.
- Tucker, Spencer C. ed., *The Encyclopedia of the Spanish-American and Philippine-American Wars: A Political, Social, and military History*, Vol.II, California: Abc-Clio, LLC. 2009.
- Tucker, Spencer C. ed., *The Encyclopedia of the Spanish-American and Philippine-American Wars: A Political, Social, and military History*, Vol.III, California: Abc-Clio, LLC. 2009.
- Turot, Henri, *Emilio Aguinaldo*, trans. Castro Pacifico A., Metro Manila: Solar

- Publishing Corporation, 1969.
- Yu-Jose, Lydia N., "Philippine, American, and Japanese Relations as Seen through the Issue of Neutralization, 1900 to 1939." *Philippines-Japan Relations*, Quezon City: Ateneo de Manila University Press, 2003, pp.47-80.
- Wildman, Edwin, *Aguinaldo: A Narrative of Filipino Ambitions*, Montana: Kessinger Publishing, 2010 (rpt. of 1901, Boston: Lothrop Publishing Company).
- Wildman, Rounsevelle, *The Panglima Muda*, Hathi Trust (rpt. of 1894, from the collection of the University of Michigan Library's digital collections).
- Wildman, Rounsevelle, *Tales of the Malayan Coast, from Penang to the Philippines*, Hathi Trust (rpt. of 1894, from the collection of the University of Michigan Library's digital collections).
- Wildman, Rounsevelle, *China's Open Door: A Sketch of Chinese Life and History*. Memphis: General Books LCC, 2012 (rpt. of 1900)
- Worcester, Dean C., *The Philippines Past and Present*, Vol.I, Montana: Kessinger Publishing, 2010 (rpt. of 1914, the Macmillan Company).
- Zaide, Gregorio F., *Philippine Government: Development, Organization and Functions*, Manila: The Modern Book Company, 1967.
- Zaide, Gregorio F., *Great Filipinos in History*, Manila: Verde Book Atore, 1970.
- Zaide, Gregorio F. and Zaide Sonia M., *Philippine History and Government*, Quezon City: All Nations Publishing Co., Inc., 2007 (6th ed. Of 2004)
- Zaide, Sonia M., *The Philippines: A Unique Nation*, Quezon City: All Nations Publishing Co., Inc., 1999 (2nd ed. of 1994).
- Our Islands and Their People: As seen with Camera and Pencil*, Vol. II, intro. Major-general Joseph Wheeler, New York: The Thompson Publishing Co., 1899.

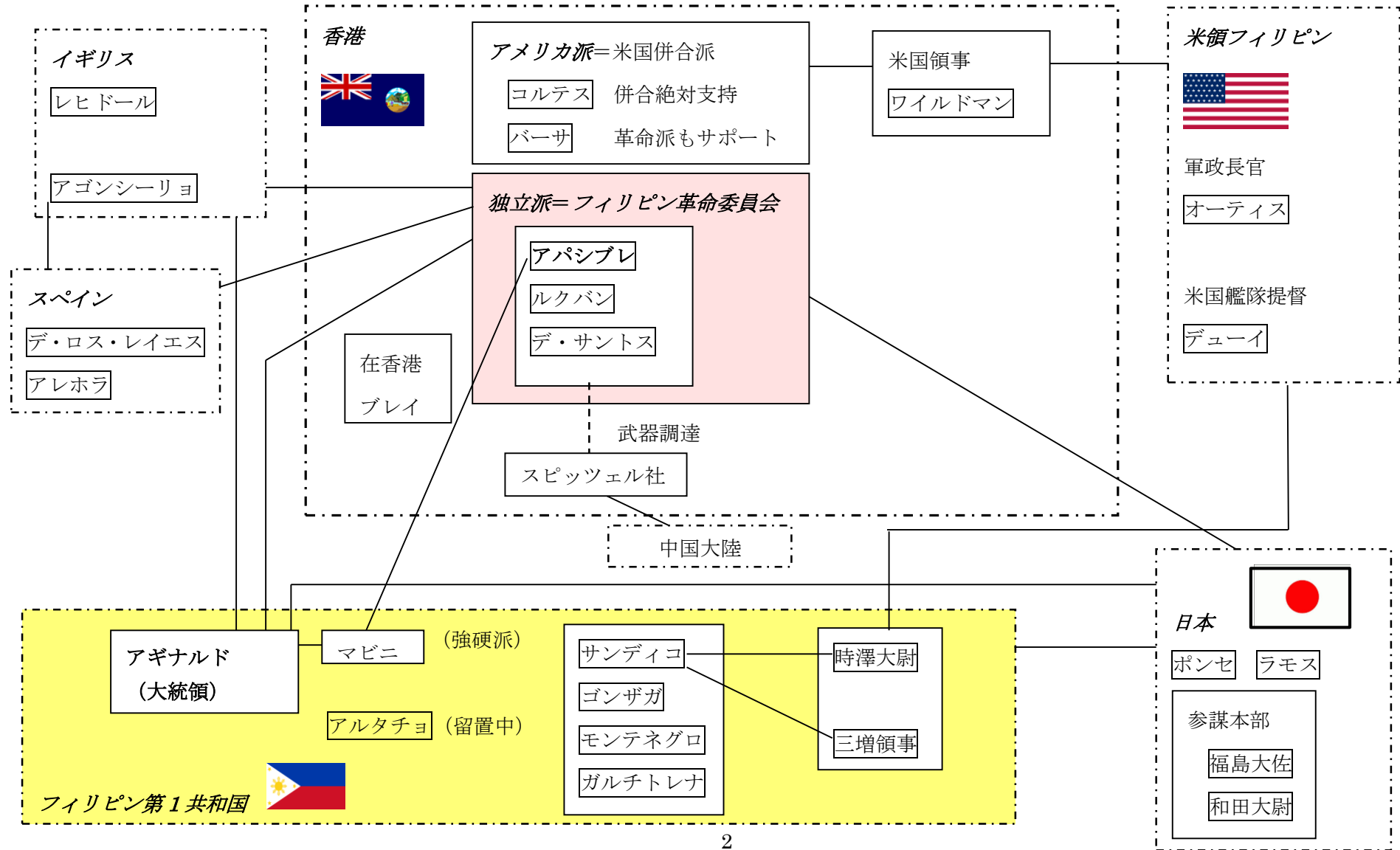
卷末資料

1. 卷末 人物相関図	-1-
人物相関図 1	1
人物相関図 2	2
人物相関図 3	3
人物相関図 4	4
2. 年表	-5-
3. 人物プロフィール	-18-
4. 『フィリピナス・アンテ・エウロパ』 目次	-42-

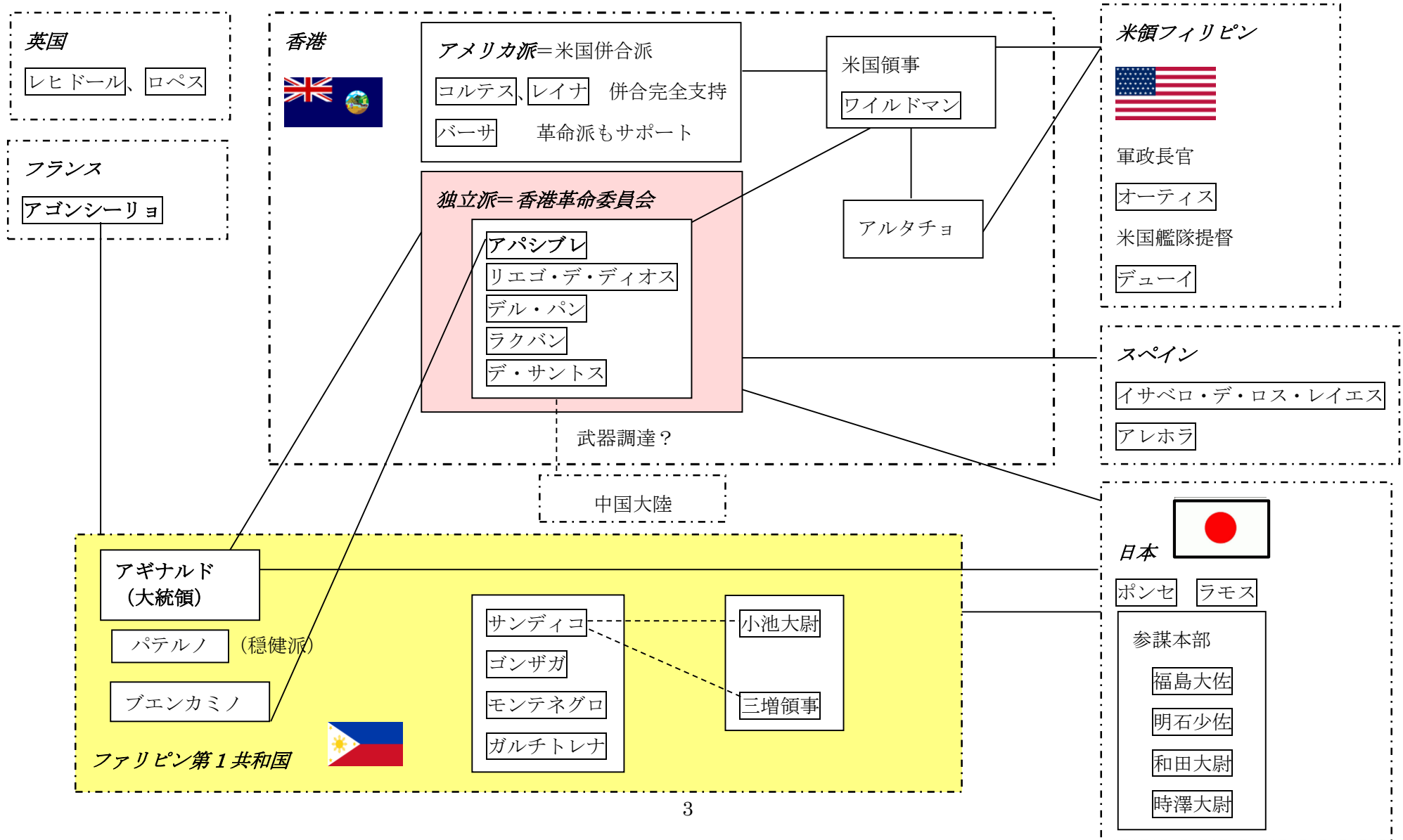
人物相関図 1 (1898年5月～ アギナルド帰還直後)



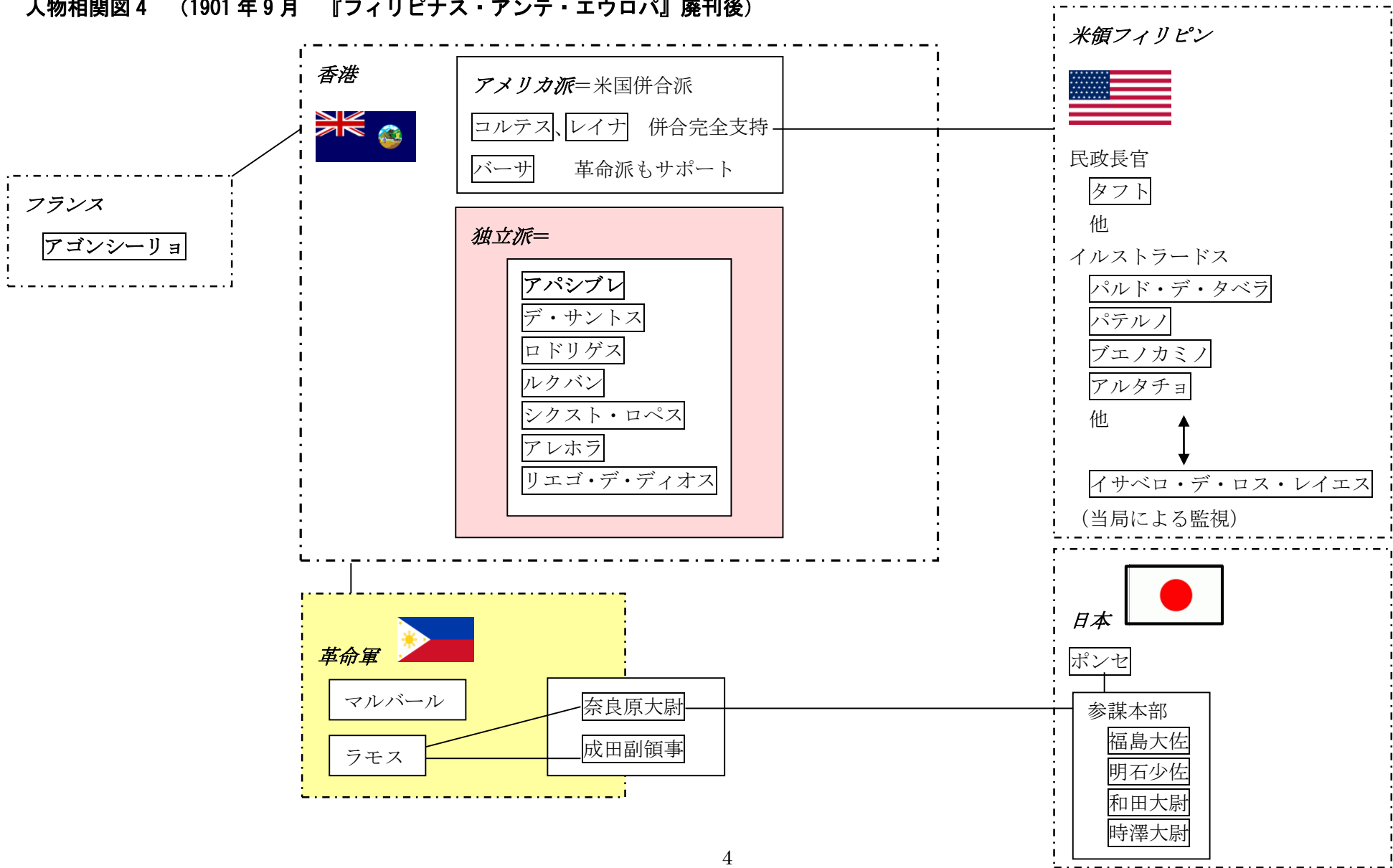
人物相関図 2 (1899年3月 比米戦争開始後)



人物相関図3 (1899年9~10月頃 『フィリピナス・アンテ・エウロパ』創刊直前)



人物相関図4 (1901年9月 『フィリピン・アンテ・エウロパ』 廃刊後)



年表¹

西暦	月	日	国・地域	出来事
1868			北米	*第1次キューバ独立戦争が始まる(1878年まで)。
1872			フィリピン/ 香港	*カビテ兵器廠反乱が起こる。その後、スペイン人が独占していた聖職をフィリピン人に戻すように運動をしていたホセ・ブルゴス、ハシント・サモラ、マリアノ・ゴメスの3人のフィリピン人聖職者が、スペイン当局によって処刑される事件が起こる。スペイン当局に追放されたり、弾圧をおそれてフィリピンを去ったりした人々(バーサなど)が、香港に住むようになる。
1873			スペイン	*王政が倒れる。
1874			スペイン	*王政復活。自由派と保守派が交互に政権をとるようになる。
1877			スペイン/ 北米	*スペインがキューバに自治を認める。
1889			スペイン	*ロペス・ハエナ、ポンセ、アパシブレ、リサール、他が、マドリッドで『ラ・ソリダリダッド』を創刊する。
			シンガポール	*ワイルドマンがシンガポール領事になる(3年間)。
1893	11	26	フィリピン	*マニラの日本領事館の閉鎖(1896年10月23日まで)。
1894			北米	*ワイルドマンが『オーバーランド・マンズリー』の編集者になる(1897年まで)。
1895	3	23	スペイン	*保守派が政権をとる(1897年10月まで)。
	8		日本	*ラモスがイギリスを経由して来日、定住。
			北米	*第2次キューバ独立戦争が始まる(1898年まで)。
1896	1		香港/ 日本	*香港に住む富裕なフィリピン人ファミリーのD. コルテスの一族が来日。同時期にイサベロ・アルタチョも日本で活動。
	4		フィリピン	*アゴンシーリョがバタンガスを追われる(その後、横浜を経由して香港に移り住む)。
			北米	*アメリカ合衆国(アメリカ)大統領のクリーヴランドが、キューバの改革をスペインに提案。
	5		フィリピン	*日本の軍艦の「金剛」がマニラに到着。在比邦人の田川を通訳にして、世良田艦長が、カティプーナンの創設者ポニファシオと会う。
	7 ~ 8		日本	*ラモスがアルタチョと画策し、日本兵を移民に偽装してフィリピンに送ろうとした(と言われている)。スペインが、日本からの武器密輸を牽制する。
	8	30	フィリピン	*フィリピン革命武力闘争がスタート(第1フェーズ始まる)。
	9 ~ 10		フィリピン	*香港から清水領事がマニラに派遣される。台湾総督府から派遣された楠瀬砲兵中佐が清水領事と同行。その後3ヵ月ほどフィリピンに滞在する。
	10		フィリピン	*在マニラ日本領事館再開。
	12 頃		日本	*アレハンドリノがラモスとともに、日本で武器調達活動を行う。
	12	30	フィリピン	*リサールが処刑される。
1897	1		香港	*香港のD. コルテスが、在香港アメリカ領事に、スペイン王政下のフィリピンの状況を示し、フィリピン革命の援助を願い出る。
	2	12	フィリピン	*デ・ロス・レイエスが逮捕されビリビッド刑務所に投獄される。
	3		台湾/ フィリピン	*臺灣鐵道隊經理係の坂本が、台湾総督府参謀の楠瀬砲兵中佐によって、マニラに送られる(フィリピン革命側は坂本に武器を購入してもらおうと、秘密裏に会っていたと言われている)。
			北米	*マッキンレーがアメリカ大統領になる。
	4		日本	*ラモスが日本で武器調達に奔走する。日本で活動するフィリピン人革命家を、スペイン領事が雇った探偵が尾行。
	5		フィリピン	*ポニファシオが、カティプーナンの選挙・分裂の結果、処刑される(香港のポンセはこの時のカティプーナンの選挙に疑問を呈する)。これ以降、アギナルドがカティプーナンのトップに立つ。

¹ 本稿で扱った出来事、あるいは参考になるとと思われる出来事を年表にまとめた。年表のため、なるべく簡潔に記す。人名(フルネーム)・地名・その他の固有名詞の言語は本文中に記したので、ここでは省略する。

西暦	月	日	国・地域	出来事
1897	5	17	フィリピン	*デ・ロス・レイエスが恩赦される。しかしその後再逮捕される。
	6		日本	*日本からの武器が中国の港で恒常的に船積みされ、ルソンに運ばれているとの噂が流れ、在日本スペイン大使が日本の外務大臣に面会を求める。
			スペイン	*デ・ロス・レイエスがバルセロナのモンジュイック刑務所に送られる。
		30	北米	*『オーバーランド・マンズリー』の編集員であったワイルドマンが香港領事就任を受諾する。
	7		香港	*ワイルドマンが香港に到着、香港領事となる。
			フィリピン	*アギナルドがビアク・ナ・バト共和国設立の準備を始める。
			米国	*アメリカ海軍次官ルーズヴェルトが、マッキンレー大統領に、スペインとの戦争の際にはフィリピンを攻撃すると示唆。
	10	4	スペイン	*自由派のサガスタがスペインの首相になる(1899年3月まで)。
		25	香港	*ワイルドマン在香港アメリカ領事が、在香港アメリカ領事館の総領事館への格上げを願い出る。
	11	1	フィリピン	*ビアク・ナ・バトでは、キューバの憲法を模したと言われるビアク・ナ・バト憲法が發布される。
		2	フィリピン	*ビアク・ナ・バト共和国が発足し、アギナルドが大統領に、トリアスが副大統領に、モンテネグロが外務大臣に、アルタチョが内務大臣に、リエゴ・デ・ディオスが陸軍大臣に、B. アギナルドが財務大臣に就任。
		3頃	香港	*香港のアゴンシーリョが、在香港アメリカ領事ワイルドマンを訪ねて、アメリカの援助を要請するが、ワイルドマン領事は返答を避ける。
	12	24	フィリピン	*パテルノを仲介者として、スペイン当局とアギナルドのグループの間で、ビアク・ナ・バト協定が締結され、アギナルドが80万ペソを3回に分けて受け取ることを交換条件に、独立闘争の中核を担ったリーダーたちと香港に追放されることを了承。
		27	フィリピン	*アギナルドが香港に向けて出発(第1フェーズ終了)。
		29	香港	*アギナルドが香港に到着。
	1898	1		香港
			日本	*ラモスが、「もし革命を一時的に停止するのなら、アギナルドに日本に来てほしい」と打電したと言われている。
			日本	*長崎に、デューイ提督が指揮するアメリカ海軍アジア艦隊が寄港。
7			スペイン	*バルセロナのモンジュイック刑務所から、デ・ロス・レイエスが釈放されたが、彼はフィリピンに帰ることは禁じられた。
2		14	香港	*アギナルドがフィリピンから一緒に追放されたメンバーを集めて最高会議を作る。
		15	北米	*キューバのハバナで、「メイン」号爆発。
		25	北米/ 香港	*香港にいたアメリカ艦隊のデューイ提督に、アメリカ海軍次官ルーズヴェルトが戦争に備えるように命令する。
3			フィリピン	*ビアク・ナ・バト協定に関係なく、フィリピン領内では武力闘争が散発する。
		6	ドイツ/ 中国	*ドイツは独清条約により、膠州湾に租借地を作る(1919年まで)。
4		9	フィリピン	*マニラに、オーガスティン総督が着任(7月24日まで)。
		13	香港	*アルタチョがアギナルドに対して、スペインが支払ったお金の中の自分の取り分を要求し、香港最高裁判所への訴状にサインする(訴訟番号1898-31)。
		19	香港	*アメリカ海軍アジア艦隊は軍艦を戦闘色に塗りなおした。
	21 ~ 26	シンガポール	*サイゴン経由でシンガポールに入ったアギナルドが、イギリス人ブレイの仲介で、プラット・アメリカ総領事と会う。プラット総領事が、香港のワイルドマン領事経由でデューイ提督に、アギナルドの件で連絡を取り、デューイ提督はアギナルドに香港に来るように返電したため、アギナルドは香港に戻るようになる。	

西暦	月	日	国・地域	出来事
1898	4	25	北米/ スペイン/ 香港	*米西戦争開戦。香港政庁は中立維持のため、アメリカ艦隊に退去を求め、アメリカ艦隊は大鵬湾に退去。
		26	香港/フィリピン	*アギナルドが汽船「マラッカ」でシンガポールを去り香港に向かい、O. F. ウィリアムズ在マニラ・アメリカ領事がマニラを去る。
		27	香港	*O. F. ウィリアムズ領事が大鵬湾に停泊中のアメリカ海軍アジア艦隊に合流。ワイルドマン領事がアメリカ海軍アジア艦隊に、ガルチトレナ、サンディコ、アレハンドリノの3人のフィリピン人革命家を連れて行き、アレハンドリノがアメリカ艦隊の船に乗ってフィリピンに戻るようになる。
	5	1	フィリピン	*アメリカ海軍アジア艦隊は夜間航行でマニラ湾に入り、未明からスペイン艦隊に砲撃を始め、マニラ湾海戦で勝利を収める（アメリカ艦隊には新聞記者も複数同船しており、日本人記者浜野米造も軍艦「ベトレル」に同乗）。
		2	香港	*香港に、アギナルドが戻る。
			フィリピン	*マニラ湾内で、アメリカの輸送船「サフィロ」がマニラー香港の海底電線を切断。
		4	香港	*フィリピン人革命家が集会を開く。
		6	香港	*D. コルテス、M. コルテス、その妻、パーサ、他2名がアメリカ忠誠宣言をワイルドマン領事経由で提出する。
		7	香港	*アメリカ海軍の軍艦「ヒュー・マカロック」がマニラ湾海戦後初めて、香港に戻り、戦闘状況を世間に明らかにする。
		9	香港	*フィリピン人革命家が集まる。
		13	香港	*フィリピン人革命家が集まる。
		14	香港	*ワイルドマン領事が、香港の4人のフィリピン人のアメリカ大統領への忠誠宣言を國務省に送る。
		17	香港	*アギナルドがアメリカ海軍の軍艦「ヒュー・マカロック」で香港を出発する。ワイルドマン領事とその妻もアギナルドを見送る。
		19	香港/ フィリピン	*アギナルドが、香港からカビテに到着（第2フェーズ始まる）。
			シンガポール	*マリナス・スペイン領事からイギリス当局に対して、プラット総領事の行動に関してクレームがなされる。
		23	香港	*アゴンシーリョが、サンディコが行った武器調達を非難し、アギナルドに外交をさせてほしいと願い出る。
		24	フィリピン	*フィリピンのアギナルドが独裁宣言など、3つの宣言を行う。
		29	フィリピン	*参謀本部の時澤大尉が、新任の三増二等領事とともに軍艦「秋津洲」で米西戦争観戦武官としてマニラに来る。この後時澤は、明石少佐とフィリピンで観戦任務につきながら、革命家とコンタクトする。
			香港	*ベラルミノが香港委員会内部で分裂が起きていることを報告する。
			スペイン	*マドリッドで、デ・ロス・レイエスがアレホラとフィリピン人のためのビジネス・サポート会社を設立。
		末 頃	香港	*ナバロ・スペイン領事が、香港政庁に向かって、革命家がフィリピンに武器を密輸しようとしているとのクレームを行う。
				*香港委員会のジャック・アンド・エバンス社の汽船「ウイン・フー」を使った第1回目の武器調達が成功する（この調達は、ワイルドマン在香港アメリカ領事とデューイ提督も承知していたと思われる）。
	*サンディコがジャック・アンド・エバンス社を使った武器調達をしたいと、アゴンシーリョに申し出る。			
	6	3		*サンディコが47,000ドルを武器調達費用としてワイルドマン領事に渡す（この47,000が後に、香港委員会とワイルドマン（総領事の訴訟の原因になる））。
		7	香港	*ルイス・スピッツェル社のグリメスが香港委員会と武器の購入契約で合意（後の汽船「アビー」を使った調達）。
		9	シンガポール	*シンガポールに住むフィリピン人が集まり、その席でプラット総領事がスピーチを行う。

西暦	月	日	国・地域	出来事	
1898	6	10	シンガポール	*マリナス・スペイン領事が、9日のプラット総領事の行動に関してクレームを入れる。	
		12	フィリピン	*アギナルドが独立宣言をする。	
		14	香港	*ナバロ・スペイン領事がルイス・スピッツェル社の武器購入に関して、香港政庁にクレームを入れる。	
		19	香港	*ポンセが日本で活動するために、香港を出発する。	
		～ 20	フィリピン	*時澤大尉がアギナルドに会う。	
		21	フィリピン	*香港から、アルタチョとサンディコがアメリカの輸送船「サフィロ」でフィリピンに戻るが、その後アルタチョはアギナルドによって逮捕・拘置される。	
			グアム	*アメリカ陸軍のアンダーソン准将が、フィリピンに向かう途中、スペイン人を降伏させる。	
			フィリピン	*イギリスは軍艦6隻を派遣。	
		23	フィリピン	*アギナルドが革命政府を宣言し、アギナルドが大統領になる。政令31条で海外に委員会を作ることを宣言。	
		29	日本	*ポンセが到着。	
	30	フィリピン	*アメリカ陸軍のアンダーソン准将と陸上部隊が到着し、カピテに司令部を設立。		
	7		1	フィリピン	*アンダーソン准将がデューイ提督に会う。その後、アギナルドに次々と援助の要求をする。
			香港	*ワイルドマン領事が総領事就任の宣誓をする。	
	7 初旬		日本	*ポンセが、碓山晋(碓山) 壽町警察署署長(横浜)や、参謀本部員たちと面識を持つようになる。	
			フィリピン	*ドイツの巡洋艦「イレーネ」がスービック近くで、革命軍の船に海域を去るように警告し、それを不満とした革命側がアメリカ海軍に通報し、アメリカの軍艦2隻がスービックへ急行し、「イレーネ」を追い払う。	
		5	香港	*F. リチャウコが日本で活動するために香港に出発。ワイルドマン総領事が国務省に総領事館の人員の増員を要請する。	
		8	香港	*ルイス・スピッツェル社の調達中の武器が、香港の港湾警察に没収される。その後ワイルドマン総領事は、武器ブローカーのシルベスターとエツェルに、これ以上関わると国家反逆罪になると脅す。	
			日本	*ポンセが福島大佐に会う。	
		～ 17	フィリピン	*時澤大尉がフィリピン内のアメリカ軍を回ることを許可される。	
		香港	*ワイルドマン総領事が、アギナルドらを評価する報告書を国務省に送る。		
	19	フィリピン	*香港からペドロとレクリオが運んだ武器が到着する。		
	7 半ば頃		北米/フィリピン/香港	*キューバでの戦闘もアメリカ側に有利に進んでおり、フィリピンや香港などでは、米西戦争が終わりに近づいているとの憶測が飛び交い、革命側に動揺がはしるようになる。	
			20	日本	*ポンセが福島大佐と会合を持つようになる。この後ポンセとF. リチャウコが日本で武器調達活動を活性化させる。
			中国	*広東では汽船「パッシング」が、ルイス・スピッツェル社の武器調達に使うために、ペドロ在広東アメリカ領事のサポートで、イギリス船籍からアメリカ船籍に変わり、船名も「アビー」に変更される。	
	7 後半		北米	*ワシントン D. C. では、スペインの代理を務める在ワシントン・フランス大使のカンボンが仲介に入り、米西の和平交渉が始まる。	
			24	フィリピン	*ハウデネスが総督職に就任する(8月13日まで)。 *ベルギー領事のアンドレが仲介に入り、米西間の和平交渉が始まる。
			25	フィリピン	*メリット准将が到着する。
			28	香港	*ワイルドマン総領事が、自身の兄弟、E. ワイルドマンを副領事に推挙。
			31	フィリピン	*マッカーサー准将が到着する。

西暦	月	日	国・地域	出来事	
1898	8	2	フィリピン	*マニラでは、在マニラ・アメリカ領事不在中に、アメリカ領事館の任務を代行していたローソン・ウォーカー・イギリス領事が亡くなる。	
		10	フィリピン	*アギナルドが大統領権限で領外駐在員を任命する	
		12	北米	*ワシントン D. C. では、デイ国務長官とカンボン在ワシントン・フランス大使の間で、米西戦争の戦闘中断の合意が行われる。 *キューバでの米西戦争が事実上終了する。 *アメリカがハワイを編入する。	
		13	フィリピン	*マニラ市内でアメリカとスペインによる「見せかけの戦闘」が行われ、午後 1 時、イントラムロスに白旗が上がり、アメリカ軍が勝利する。この戦闘の間、革命側はマニラ市内での戦闘に参加できず、この戦闘以後革命側はマニラ市内に入ることができなくなる（マニラ市内はアメリカが占領）。	
		13	香港/フィリピン	*香港のアパシブレがフィリピンに戻る。	
		14	フィリピン	*マニラではスペインによる正式な降伏が行われ、フィリピンの初代アメリカ軍政長官にメリット准将が就任する。	
		15	香港	*アゴンシーリョは、ワイルドマン総領事に対して、米西戦争処理を目的とするパリ和平会議への、フィリピン人参加を要求する。	
		17	フィリピン	*マニラでは、アメリカ当局がフィリピンの郵便業務を引き受ける。	
		19	北米/スペイン	*アメリカとイギリスが海底電線修理で合意する。	
		21	フィリピン	*アメリカ陸軍のオーティス准将が到着する。	
		22	香港/フィリピン	*マニラー香港間の海底電線が復帰する。この後アメリカは電信に厳しい検閲を課すようになる。	
		23	フィリピン	*アギナルドがバコールで、アパシブレに対して香港の代表になるように要請。サンディコが日本領事館を訪ね、日本から武器弾薬を 60 万円程買いたいとの意向を示す。	
		24	フィリピン	*アギナルドが海外に革命委員会を設立し、その任務は——①プロパガンダ、②外国政府との交渉、③武器購入・船積み——とすることを命令。 *カビテで、アメリカ兵がフィリピン兵に殺される事件が起きる。	
		25	頃	中国	*広東で、ルイス・スピツェル社の武器が汽船「アビー」に船積みされる。
		27	頃	中国	*黄埔を、ルイス・スピツェル社の武器が積まれた「アビー」が発航する。
		28	フィリピン	*オーティス准将がフィリピンの第 2 代アメリカ軍政長官となる（1900 年 5 月 5 日まで）。	
		29	香港	*香港に住むフィリピン人 4 人の忠誠宣言が、ワイルドマン総領事からアメリカ国務省に提出された。	
		30	フィリピン	*メリット准将とグリーン准将がパリ和平会議のためにアメリカに帰国。同じ汽船でアパシブレも香港に向かう。	
			日本	*福島大佐が革命家に村田銃購入の方法を伝える。	
		31	フィリピン	*ルイス・スピツェル社の武器を積んだ汽船「アビー」がバタンガスに到着する。	
		9	1	香港	*アパシブレが到着。
				フィリピン	*時澤大尉が、報告書の中で「南進」という言葉を使う。 *サンディコが日本領事館を訪ね、日本保護下での独立の可能性を探る。
			2	香港	*アパシブレが香港委員会委員長に就任。香港からは、アゴンシーリョと、S. ロベスが、メリット、グリーン両准将と、同じ汽船でアメリカに向かう。
			3	イギリス	*ロンドンでは、ナバロ・スペイン大使がイギリス外務省に出向き、香港委員会の武器調達に関してクレームを行う。
	8		日本	*福島大佐がラモスに大倉を紹介する。	
	10		フィリピン	*アギナルドが自身の政府をマロロスに移動する。	
	14	頃	香港	*ジャック・アンド・エバンス社の「ウイン・フー」が革命側の品物と、ワイルドマン総領事の調達品を載せて香港に到着する。	

西暦	月	日	国・地域	出来事	
1898	9	15	フィリピン	*マロロスで制憲議会が設立され、パテルノが議長に就任する。時澤大尉、三増二等領事は出席せず。	
		16	香港	*ブローカーのジャック・アンド・エバンス社が、調達に使っていた汽船「ウイン・フー」をワイルドマン総領事に売り渡す（ワイルドマン総領事が「ウイン・フー」をどう処理したかは不明）。	
		25頃	日本	*ボンセが福島大佐宅で「中国の大使」に会う *革命運動側に日本から軍事インストラクターを送る話が持ち上がる。	
		25	フィリピン	*バタンガスで、アメリカの軍艦「マカロック」が汽船「アビー」を捕まえる。	
	10	1	北米	*ワシントン D. C. で、アゴンシーリョが個人の資格でマッキンレーに会う。	
			フランス	*パリで和平会議が始まる。	
		4	香港	*マルコーニ（無線電信の機械）を買う計画をたてる（実際には革命家が望む性能の電信機械は、当時はまだなかった）。	
		5	香港	*ワイルドマン総領事が国務省にマニラへの休暇願の電報を送る（国務省は却下する）。	
		8	北米	*ワシントン D. C. のアゴンシーリョはパリ和平会議に参加できる方法を模索するために、会議が行われるパリに向かう。その後和平会議のメンバーとも個人的に会う。	
		10	香港	*ワイルドマン総領事の兄弟 E. ワイルドマンが、在香港アメリカ総領事館副総領事に就任する。	
		16	香港	*ワイルドマン総領事が、アパシブレの総領事館訪問を無視した。	
		17	香港	*ソウサとの武器調達の案が浮上。	
		20頃	香港/ 北米	*香港在住のコルテス・ファミリーとレイナ・ファミリーがアメリカに行く。	
		31	フィリピン	*時澤大尉が在マニラ日本領事館で開催されたバンケットに、サンディコを招待する。	
		?	日本	*福島大佐の紹介で、川上参謀総長が目をかけていた写真館経営の鈴木真一（本名：岡本圭三）にボンセが武器の斡旋を依頼する。	
		11	3頃	フィリピン	*マニラで、ルイス・スピッツェル社のグリメスがアメリカ当局に1週間ほど拘束される。
				日本	*ボンセが康有為の秘書と思われる人物と会う。
	~ 10		日本	*ボンセが勝海舟に面会する。	
	中旬		香港	*香港委員会は、ワイルドマン総領事に預けた「武器調達費用47,000ドル」の回収を真剣に考え始める。	
	18		イギリス	*パリのアゴンシーリョが武器調達の可能性を探りにロンドンに行く。	
	19頃		日本	*香港委員会の武器エージェントであるルイス・スピッツェル社のスピッツェルが、日本に立ち寄る。	
	19		フィリピン	*サンディコが日本領事館を尋ね、フィリピン人革命家4人が日本に行くことを伝える。	
	28		日本	*マニラから帰国した時澤大尉がボンセにゲリラ戦の優位性についてアドバイスをする。その後ボンセが、アパシブレに、時澤大尉を一時除隊させて、翌年1月に軍事インストラクターとしてフィリピンに送る計画があることをほのめかす。	
	~ 30		フィリピン	*サンディコが在マニラ日本領事館を訪ねる。	
			フィリピン	*E. ワイルドマン在香港アメリカ副総領事が、マロロスのアギナルドを訪ねる。	
	後半		香港	*香港委員会の武器エージェント、ルイス・スピッツェル社のグリメスが、フィリピンのアメリカ当局から解放され香港に戻る。	
			日本	*ボンセが、青木外務大臣の友人の大阪の商人スズキを紹介してもらう。	
	12 初旬			香港	*シルベスターが、ソウサに合う。
	12	10	フランス	*アメリカとスペインの間で、パリ条約が成立。	

西暦	月	日	国・地域	出来事	
1898	12	11	香港	*上海から武器と一緒に運ぶ商品（鉄管など）の契約が行われる。	
		13	香港	*香港委員会、ルイス・スピッツェル社、ソウサの3者の間で、上海からの武器調達の契約が結ばれる。 *香港委員会は40万ペソを保持（自称）。	
		14	スペイン	*マドリッド委員会が設立される。	
		16	香港	*ソウサが上海から運ぶモーゼルなどの武器の契約を行う。	
		21	北米	*アメリカ大統領マッキンレーが「慈悲深い同化」を宣言する。	
		25 前後	北米	*パリのアゴンシーリョがワシントン D. C. に戻る。	
1899	1		香港	*ワイルドマン総領事が個人的に探偵を雇って、香港委員会関係者及び武器ブローカーを尾行させ始め、タイプライター・カーボン拾わせ、手紙の文面を復元したりするようになる。	
		4	フィリピン	*オーティス軍政長官が領有宣言をする。 *在マニラ、ドイツ領事館の秘書ケオクが、サンディコとコンタクトをとる。	
			香港	*香港委員会がミーティングを開き、アメリカに対する攻撃開始を2月27日に設定したと言われている。	
		5	北米	*ワシントン D. C. の S. ロベスはアメリカ国務長官に面会を要求する。	
			フィリピン	*アギナルドがオーティスの領有宣言に抗議する。	
			中国	*上海から運ぶはずの「ソウサが調達した武器」が、長江のランチに残される。	
		9	フィリピン	*この日から1月中に革命側は複数回、アメリカ軍事当局と話し合いを行う。	
			香港	*香港では、香港委員会がワイルドマン総領事に預け入れた47,000ドルを巡って、香港最高裁判所にワイルドマン総領事を訴える（訴訟番号1899-6）。	
		10	中国	*ソウサの調達した武器は結局、南京に不着。	
		初旬	日本	*日本陸軍払下げ銃購入未遂。	
			中国	*上海では、ルイス・スピッツェル社とソウサと香港委員会の3者で組んだ上海からの武器調達が失敗に終わったことが判明。	
		11	日本	*日本陸軍払下げ銃購入を諦めた日本のリエゴ・デ・ディオスが、香港のアパシブレに、リベラとともに日本で武器調達活動続けるべきかを問う電信を打つ。	
		～ 20	日本	*フィリピン人革命家が陸軍士官学校、青山練兵場を見学。	
		23	フィリピン	*第1次フィリピン共和国 ² が発足し、第1次内閣のマビニ内閣が始まる（5月7日まで）	
		24	香港	*アパシブレ、シルベスター、とソウサとで、上海からの武器調達の失敗についての後始末を話し合い、香港委員会が15万ドルの損失を被ることで合意する。	
		25	日本	*リエゴ・デ・ディオスとリベラがサン・フランシスコに向け、横浜を出発する。	
		27	日本	*ポンセが、香港の仲間に対して、独立軍の軍事インストラクターとして長野大尉がフィリピンに行くことを紹介する。	
		2	4	北米	*比米戦争勃発。この後ワシントン D. C. のアゴンシーリョは、ワシントン D. C. からモントリオールへと逃げる（その後アゴンシーリョはヨーロッパに渡る際、ファウンドランドで船が座礁し旅行荷物と全ての書類を失ったとされている）。
			6	北米	*アメリカ上院がパリ和平条約を批准。
			13	日本	*第1次フィリピン（シャーマン）委員会のウースターが横浜に到着。
20 頃	香港/ フィリピン		*香港に、長野大尉が寄港し、その後フィリピンに行く。		

² 以下第1は省略。

西暦	月	日	国・地域	出来事
1899	2	20 頃	フィリピン	*マニラで、香港委員会の武器エージェント、スピッツェルとシルベスターの仲間であったユダヤ人のクリックシャンクが、アメリカ軍当局に拘留される(4月6日の時点でもまだ拘留されていた)。
		24	香港	*香港に、第1次フィリピン委員会が到着。
		26	日本/フィリピン	*日本の時澤大尉が比米戦争視察員として横浜から汽船でマニラへ向かう。
		末 頃	香港	*香港のアパシブレが、香港に寄港した第1次フィリピン委員会のウースターと会う。
			香港	*香港委員会が武器調達を行う(成否は不明)。
	3	4	フィリピン	*第1次フィリピン委員会がマニラに到着(第1次フィリピン委員会は1900年3月16日まで)。
			スペイン	*自由派のサガスタ首相が退任、その後保守派が政権をとる。
		6	日本	*孫逸仙が日本のポンセ宅に宿泊(この前から孫逸仙とポンセは交流していたと思われる)。
		6 頃	香港	*時澤大尉が、香港を通過。
		9 頃	イギリス	*ロンドンに、アゴンシーリョが到着する。
		10	フィリピン	*マニラに、時澤大尉が到着。
		14	香港	*ルイス・スピッツェル社にいたグリメスが、ワイルドマン総領事に対して、香港委員会の武器調達についての証言を行う。
		15	フィリピン	*時澤大尉がマッカーサーに会い、その後正式な許可を受け、マニラ近郊の戦闘を視察する。
		20	スペイン	*スペインがパリ和平条約を批准。
		31 頃	フィリピン	*アギナルドがマロロスを放棄する(=アメリカがマロロスを陥落する)。その後、アギナルドはバリワグを経てサン・イシドロに政府を置く。
		4	14	フィリピン
	18		フィリピン	*E. ロペスが第1次フィリピン委員会に証言を行う。
	21		フィリピン	*トレンティノとバルド・デ・タバセラが第1次フィリピン委員会に証言を行う。
	24		ヨーロッパ	*アゴンシーリョがドイツ人エージェントと会う(5月24日の可能性もある)。フィリピンのアギナルドが、アゴンシーリョをヨーロッパ全権大使にする。その後、アゴンシーリョはウイヘルムII世に拝謁する。
	25 頃		日本	*フィリピンから長野大尉が戻る。
	27		フィリピン	*カルデロンが第1次フィリピン委員会に証言を行う。
	5	7	フィリピン	*マビニが辞任し、その後をパテルノが引き継ぎ、フィリピン共和国第2次(パテルノ)内閣が発足。
		13	日本	*長野大尉が和田大尉を訪問。
		21	香港	*ワイルドマン総領事が裁判所に対して、香港委員会が起こした「武器調達費用47,000ドル返還」訴訟への「反論書」を提出。
		23	香港	*デューイ提督が、休暇のために到着。
		27	フィリピン	*スペイン人のノサレダがマニラの大司教に任命される。
		末 頃	フィリピン	*フィリピンの革命軍の武器不足が顕著になる。
	6	4	フィリピン	*時澤大尉が、日本のラモスにフィリピンに戻ってほしい旨の手紙を書き、その後24日、26日もラモスにフィリピンに戻るよう勧める。
		5	フィリピン	*A. ルナがアギナルドの側近に殺害される。
		6	フィリピン	*タルラックがフィリピン共和国の首都となる。
		8	日本	*ボンセが、香港の活動家に、軍人を含む6人の日本人が独立軍に参加する旨を連絡。
		16	日本	*M. ツアソン夫妻とその子供が日本に来る。参謀本部が接触を図ろうとする。
		末 頃	フィリピン/ 香港	*アルタチョがフィリピン内の拘留場所から、香港に脱走する。
日本			*ワイルドマン総領事は休暇で日本に滞在する。	

西暦	月	日	国・地域	出来事
1899	7	6	フィリピン	*フィリピンに、陸軍大尉原、陸軍少尉西内、陸軍少尉稲富、陸軍軍曹宮井、陸軍火工曹長中森と平井の6人が入国する。
		19	香港	*アルタチョがワイルドマン総領事を訪ねる。その後『チャイナ・メール』の編集部も訪問。
		21	中国	*上海沖で、革命側の武器を積んだ「布引丸」が沈没。
		27	フィリピン	*革命側は複数の国に対して、スペイン人捕虜を人道的に扱っており、アメリカの指図は受けないと通達。
		30	フィリピン	*フィリピンに入国した日本人6人のうち5人がタルラックに到着。
	8		フィリピン	*アメリカ当局が原住民に対して、警察官の募集を始める。
		5	香港	*香港委員会側について公報活動をしていたイギリス人のブレイがアパシブレに、活動費を要求。その後香港委員会はブレイに報酬を支払う。
		19	フィリピン	*マニラで、日本人6人を案内したサンチェス大尉がアメリカ軍に逮捕される。
		20	フィリピン	*アメリカとホロ（スールー王国）のスルタンの間で、ベイツ協定が締結。
		22	フィリピン	*パルド・デ・タバラが第1次フィリピン委員会に証言を行う。
			フィリピン	*香港委員会が調達した武器が、ルソンの東海岸あたりで荷下ろしされる（この時期上海に移っていた武器調達の場が、マカオにも拡大していった可能性がある）。
	9		フィリピン外	*領外革命家は資金不足に陥る。
		初旬	香港	*香港委員会側について活動をしていたイギリス人のブレイが香港委員会を離れる。
		13	香港	*香港最高裁判所が、香港委員会の47,000ドルの支払いを巡るワイルドマン総領事への訴訟を棄却。
		23	フィリピン	*アギナルドが「ドン・エミリオ・アギナルド・イ・ファミイ、フィリピン共和国大統領による、フィリピン革命についての真相概要」を発表。
	10		香港	*アルタチョが自分の信念をつづった宣言と、アメリカ国民に向けた手紙、そしてフィリピン人に向けた宣言を自費で印刷し配る。
			フィリピン	*マニラでは、時澤大尉が病気で帰国。後任として、小池大尉が陸軍視察員としてマニラに着任。
		16	香港	*ワイルドマン総領事が、マニラに行く。
		25	スペイン	*マドリッドで革命新聞『フィリピナス・アンテ・エウロパ』が創刊。
	11		日本	*時澤大尉が養生園に入院。和田大尉も養生園に入院。
			香港	*香港のアパシブレがアメリカに旅立つ（1901年3月に香港に帰還）。
			フィリピン	*アギナルドがゲリラ戦への移行を宣言。
		17頃	フィリピン	*パンガシナンでブエンカミノが捕まる。
28		日本	*時澤大尉が、「東洋文明」と「反アメリカ」を強調した手紙をラモスに送る。	
1900	1	2	フィリピン	*第1次フィリピン委員会のレポートが公開される。
		24	フィリピン	*マニラに、ローマ教皇代理としてニュー・オーリンズのシャペル司教が着任。
	3	初旬	日本	*時澤大尉が郷里の群馬に戻る。
		16	フィリピン	*第2次フィリピン委員会（タフト委員会）がスタート（1901年7月4日まで）。
	4		日本	*ラモスとM.ツアソンとの商業的關係がうまく進む（成否は不明）。 *福島大佐が少将に昇進。
			フィリピン	*パテルノがアメリカに降伏。
		15	フィリピン	*ブエンカミノが釈放される。
		19	フィリピン	*マニラで、香港委員会の武器エージェントのスピッツェルが宝飾品の密輸容疑で、アメリカ当局に逮捕される。

西暦	月	日	国・地域	出来事
1900	4	25 頃	日本	*在日本アメリカ特命全権公使バックがオーティス准将に対して、奈良原大尉に関する推薦状を書く。
		26	日本	*福島少将がラモスに対して、M. ツアソンを大倉のところに連れて行くようにアドバイス。
	5	3	日本	*奈良原大尉が宇都宮少佐の家を訪問。
			香港	*香港委員会がバンケットを開催。
		14	香港	*ワイルドマン総領事は国務省に対して、領事管轄権をマカオに広げてほしいと要求(1899年の初頭からマカオに砲艦を置くことも主張)。
		14	日本	*奈良原大尉の妻が宇都宮少佐の家を訪問。
		25 ～	スペイン	*マドリッドのデ・ロス・レイエスが、自身の書いた記事によってスペイン当局から差し押さえを受け、訴訟を起こされる。
		末 頃	フィリピン	*奈良原大尉は汽船「スンキアン」でマニラに到着。
		末 か6 月初	スペイン	*デ・ロス・レイエスが『フィリピナス・アンテ・エウロパ』第15号「フィリピンの教会」の記事で、スペイン当局から告訴され差し押さえを受けたが、新聞の発行は継続される。
	6	1	日本	*時澤大尉がラモスに、「福島少将から 250 円を送る」旨の手紙を送る。
		8	香港	*ワイルドマン総領事が国務省に対して、再度領事管轄権をマカオに広げるように示唆。
		12	中国	*ワイルドマン総領事が、休暇で立ち寄った上海のアストール・ホテルで、スピッツェルとシルベスターから脅される。その日のうちにスピッツェルは投獄される。
	6	17	日本	*福島少将が義和団問題で、中国大陸に向けて新橋を出発。
		20	中国	*義和団の乱が始まる(1901年9月まで)。
		21	フィリピン	*マッカーサーがアメリカに忠誠を誓った人の恩赦を発表。フィリピンでパテルノとズエンカミノがマッカーサーに戦争終結の条件書を提出したが、却下される。
		24	日本	*時澤大尉が宇都宮少佐の家を訪ね、体調不良から任務の継続をすべきか否かに関して相談をする。
		28・ 29	フィリピン	*パテルノが、マッカーサーの恩赦に対して感謝のパーティーを開く。
			日本	*日本で、ワイルドマン総領事が休暇を過ごす。
	7	6	フィリピン	*サンバレスで原大尉が、マスカルド将軍より感謝状を与えられる。
			日本	*宇都宮少佐が奈良原大尉の留守宅を訪問。
		7 頃	日本	*ラモスが日本人に帰化し石川保政となる。
		13	日本	*ラモスが日本人石川保政としてマニラに向かう。
		30	香港	*ワイルドマン在香港アメリカ総領事が領事管轄権をマカオに広げ砲艦を1隻マカオに置くように提案。
	8	16	日本	*時澤大尉が「第一師団司令部御用掛兼勤」を命じられる。
	夏 頃		ヨーロッパ	*デ・ロス・レイエスがロンドンとパリを旅行し、パリの万国博覧会を見学、その後、教育に関するパンフレットを持ち帰る。
	9	1	フィリピン	*第2次フィリピン委員会(タフト委員会)が、フィリピンでの行政と立法の権限を持つ。
	10	10	スペイン	*『フィリピナス・アンテ・エウロパ』の値上げ。
		11	フィリピン	*在マニラ日本領事館事務代理・領事館書記生の北條、ラモス、奈良原大尉の3人が、革命軍のトリアス将軍とカビテで会う。
		16	フィリピン	*ワイルドマン在香港アメリカ総領事がマニラを訪問。
	11	初 め	香港	*北京のミリタリー・アタシェのマロリー中佐が香港委員会監視のために、香港領事館に来る。
			北米	*アメリカでは、マッキンレーが大統領に再選する。
			日本	*ラモスの日本人妻の妹のイトが、植物の種、缶詰、絹などをフィリピンに送る。
		20	フィリピン	*サンディコがヌエバ・エシハから、アメリカ将校に対して、アギナルドとの交渉の仲介役になる用意があると手紙を出す。

西暦	月	日	国・地域	出来事
1900	12		フィリピン	*日本領事館事務代理・領事館書記生の北條とトリアスの会見についての革命側の議事録が、アメリカ軍に押収される。
		23	フィリピン	*マニラの親米イラストラードスの一部がフェデラル党を結成し、アメリカ併合を支持。
1901	1		フィリピン	*第2次フィリピン委員会がフィリピンの町法と州法を作り、マビニなどの独立強硬派をグアムに追放することを決定。
		13	日本	*寺内参謀本部次長が、大山参謀総長の名前で、フィリピン人の日本への避難に関する奈良原大尉の報告を、外務省に上げる。
	2		フィリピン	*アメリカ軍の情報分析将校のテイラーが奈良原大尉に会う。
		~ 10	スペイン	*マドリッドのアメリカ大使が、デ・ロス・レイエスに『フィリピナス・アンテ・エウロパ』の不足部数の送付を要求する。
		13	日本	*ボンセが『南洋之風雲』を出版する。
		21	北米	*サン・フランシスコで、ワイルドマン総領事が一時帰国のため乗船していた汽船「シティー・オブ・リオ・デ・ジャネイロ」がサン・フランシスコ湾内で沈み、ワイルドマン総領事が家族と共に死亡する。
		3	4	日本
	6		スペイン	*自由派のサガスタがスペインの首相になる(1902年12月6日まで)。
	23 26		フィリピン 日本	*アギナルドがアメリカ当局に降伏。 *植木ビジネスを始めたラモスが日本に一時的に戻る。その後日本国内で、時澤大尉とスクーター船購入に奔走。
	4		日本	*時澤大尉がスクーター船購入についての手紙を、ラモスに送る。
		8	香港	*香港委員会は、フィリピン領内にいる將軍たちに戦闘継続を呼びかける。
		~ 10 19	スペイン フィリピン	*デ・ロス・レイエスは『フィリピナス・アンテ・エウロパ』の記事に関するスペイン当局からの訴訟で、赦免される。 *アギナルドが降伏宣言をする。
	5	18 頃	フィリピン	*奈良原大尉がラモスのために300円を用立てる。
		24	スペイン	*マドリッド委員会の会合で60人が集まる(その後、マドリッド委員会は解散したとみられる)。
		末 頃	日本 フィリピン	*アギナルドの主治医だったDr.ピリヤが、奈良原大尉と成田副領事の手助けにより来日。 *アレハンドリノが降伏。
	6		日本	*福島少将が義和団討伐の任務を終えて帰国。
		10	スペイン	*マドリッドで発行していた革命新聞『フィリピナス・アンテ・エウロパ』の最終号が発行される。
		19 頃	日本	*時澤大尉がマニラに行く話が持ち上がる。
		20	香港	*香港委員会はアギナルドの後継者に、マルバール將軍を宣言。
	7	4	フィリピン	*タフトが初代民政長官となる。
		7	日本	*ラモスが中国大陸から帰国した福島少将に会う。
		16	フィリピン	*フィリピンにいる奈良原大尉が日本のラモスに対して、ラモスが時澤大尉を連れてマニラに戻ることを了解する。
	8	初 旬	日本	*ラモスと時澤大尉が、スクーター船を購入し、この船をマニラへ送る。
		9	日本	*ラモスと時澤大尉がマニラに向けて「八幡丸」で出発。
	9		スペイン/ フィリピン	*スペインにいるデ・ロス・レイエスがマドリッドを出発しマニラに帰る。
		1	フィリピン	*民政が開始される。パルド・デ・タベラや、B. ツアソン、他が、フィリピン委員会に加わる。
		6	北米	*マッキンレー・アメリカ大統領が、自称アナーキストのチャールズ・グッシュに銃で撃たれる。
		14	北米	*マッキンレー・アメリカ大統領死亡。
		29	日本	*時澤大尉が「八幡丸」で日本に帰国。
		30		*ラモスが神戸を経由して、横浜に帰国。
	10	15	フィリピン	*デ・ロス・レイエスがマニラに帰国。

西暦	月	日	国・地域	出来事
1901	11	25	フィリピン	*マニラにラモスが「春日丸」で到着（時澤大尉に関しては確認できず。しかし12月18日付けのアメリカの書類では、時澤大尉は、マニラにおいて日本の汽船会社の役員になっていると記載されている）。
		28	フィリピン	*デ・ロス・レイエスがアギナルドに面会。
	12	2	フィリピン	*アメリカ当局がラモスについてのレポートを作る。
		8	フィリピン	*アメリカ当局が奈良原大尉のレポートを作る。 *デ・ロス・レイエスがアギナルドに面会。
		10	香港	*アメリカ軍のドワイアー大尉が、香港委員会のメンバーと会い、会談。
			フィリピン	*デ・ロス・レイエスがアギナルドに面会。
		13	フィリピン	*アメリカ軍が「ホセ・ラモスに関するメモランダム」、「奈良原大尉に関するメモランダム」「時澤大尉に関するメモランダム」を作成。
		20	フィリピン	*奈良原大尉がアメリカ当局に対して、ルソンを回る許可を要請。
		23	フィリピン	*アメリカ当局は奈良原大尉に対して、彼の出したルソン視察要請を却下。
29	フィリピン	*アメリカ当局が、ラモスと奈良原大尉の住居に、家宅捜索をしかける。		
1902	1	4	フィリピン	*アメリカ当局が、フィリピンと日本の関係を示す59の書類を集めたPIR 622を作成。
		10	フィリピン	*アメリカ当局が、日本の参謀本部との関係について扱っているPIR 903-5を作成。
	2	1	フィリピン	*奈良原大尉がマニラを退去。
		4	フィリピン	*ノサレダがマニラの大司教を退く。
	春頃			*奈良原大尉が皇族講和会でフィリピンについての話をする。
	4		フィリピン	*アギナルドの後を継いで戦闘を継続していたマルバール将軍が、アメリカに降伏。
	7	4	フィリピン	*アメリカ平定宣言（第2フェーズ終了）
		8	フィリピン	*フィリピン平定後PIRがアメリカに送られる。
	10	24	北米	*テイラーがPIRをワシントンD. C. で受け取る。
	12	半ば	日本	*ボンセが香港のアバシブレから電報をもらい香港に戻るようになる。
不明		日本	*時澤大尉は病気退役。	
1903	6		香港	*香港にいるボンセが、アメリカ当局に対して忠誠宣言をする意志があることを明らかにする。
	7	31	香港	*香港の、C. ルクバンが香港委員会の解散を宣言。
	8	3頃	フィリピン	*フィリピンのアメリカ軍が、5人の日本人がフィリピンを調査していることを確認。
	12	12	フィリピン	*アバシブレが、汽船「スンキアン」でフィリピンに帰国。
1905	5	1	北米	*ワシントンD. C. で、日本とフィリピン革命家との関係をまとめた報告書PIR-2036が作成され、諸島局局长、陸軍長官、大統領に上げられる。
	7			*桂一タフト会談が行われる。
	不明		中国	*満州で、奈良原少佐がアメリカのミリタリー・アタシェの訪問を受ける。
	不明		中国	*日露戦争で奈良原少佐が戦死したと思われる。
	不明		フィリピン	*アゴンシーリョがフィリピンに帰国。
1906			北米	*テイラーが『The Philippine Insurrection Against the United States: A Compilation of Documents with Note and Introduction』を出版しようとしたが、差し止めになる。
1915	6	15	北米	*アメリカ軍のライブラリー担当であったテイラーのところに日本関係のPIRの一部が送られてきて、ノートを作るように要請される。
1916	12	18	北米	*テイラーがBooks C-15の日本語に疑念を持つ。テイラーのメモによると、ラモスはまだマニラ郊外で、養鶏と植物で生計を立て暮らしているとなっている。

西暦	月	日	国・地域	出来事
1940			北米	*PIR が国立公文書館に移される。
1949	3	31	北米	*テイラーが死亡。
1953			北米	*PIR アクセス制限解除。
1957			北米	*PIR のマイクロフィルム化とフィリピンへの返却がアメリカで可決。
1971			北米	*テイラーの 5 巻本『The Philippine Insurrection against the United States』が出版される。

人物プロフィール

人物プロフィールは、引きやすいように、本文中の略名で順序をつけた。日本人は 50 音順で、外国人はアルファベット順に並べた。

日本人 (50 音順)

* 明石

明石元二郎

明石は、1864 年生まれ。1883 年 12 月に 6 期士官生徒として歩兵で卒業。1889 年には陸軍大学校を卒業。1896 年から参謀本部第三部部員として福島大佐（後に少将）の部下になる。1898 年の米西戦争中は観戦武官の時澤砲兵大尉の上官として（当時は大佐）、マニラと香港を往復し、東京に報告を上げた。その後、参謀本部員として、日本で活動するフィリピン人革命家をサポートした。日露戦争中には参謀本部の資金でロシア革命の支援をしたと言われている。

* 碓山

碓山晋

碓山は、東京外国語学校で学び、後に警察官になった人物で、英語に通じていることから、外国人居住者の多い横浜壽町（1898 年 7 月 6 日より横浜加賀町）の警察署長になり、犯罪だけでなく、外国人の絡む諸問題、頼みごとなど多方面に対応していた。碓山署長はこの後、横浜に住む革命家のボンセやラモスと、東京にいる参謀本部の大尉たちとの連絡役になり、ラモスやボンセを訪ねてきたフィリピン人革命家たちの世話もしていた。

* イト

(石川?) イト

イトはホセ・ラモスの日本人妻ヤスの妹

* 上野

上野季三郎

上野季三郎は、在香港・日本領事館の二等領事。

* 宇都宮

宇都宮太郎

宇都宮は（1861-1922）は、1885年12月に第7期士官生徒として歩兵で卒業。明石元二郎の1期後輩である。少なくとも1896年5月からは、福島のもとで、参謀本部第三部員をしていた。一時福島の下を離れたが、1898年10月には少佐となり、1899年1月の参謀本部担当業務改編で福島が第二部長に移動した際に、福島の下に戻り第二部員をしていた。のち1919年に陸軍大将となる。

*楠瀬

楠瀬幸彦

楠瀬幸彦（1858-1927）は、フィリピン革命時は砲兵中佐。高知藩士の長男として生まれ、1879年12月卒業第3期士官生徒。フランス留学、その後ロシア公使館付を経て、1894年に中佐となる。閔妃事件で入獄されるが、軍法会議で無罪となる。1896年台湾総督府参謀となる。

*小池

小池安之

小池（1864-1931）は、1886年に第8期士官生徒として陸軍士官学校を歩兵で卒業している。1899年10月、時澤大尉の後任として、歩兵大尉の階級でマニラに着任。この時は福島の下であったが、1900年4月にこの任務を終えて帰国してから、小池は一時、福島の下を離れる。その後少佐となり、1904年、満州総司令部の時代になると、第二課（諜報）で再度福島の下で働く。1916年に中將になり1921年に予備役となる。

*スズキ

スズキ Suzuki

大阪の商人で、青木周蔵の友人だと紹介された人物。日本での武器調達及び、武器輸送に関わった可能性があり、台湾との輸送の経験が豊富な人物だとしている。（スズキに関しては、台湾と関係があるということから、神戸の鈴木商店の可能性も考えたが、1）場所が大阪であること、2）鈴木よねは女性でありミスターではなく、実際に会社を動かしていたのは番頭の金子直吉であること、3）鈴木商店が樟脳取引の販売権を手に入れたのが1899年であり多少のずれがあること——の3点から鈴木商店の可能性を排除した。）

*鈴木

鈴木眞一

鈴木は、東京・九段の写真師、二代目鈴木眞一で、本名は岡本圭三。初代鈴木眞一は横浜の写真師下岡蓮杖の弟子として横浜に写真館を開き、弟子の岡本という人物を二代目に指名して、東京九段の支店を任せた。九段の二代目鈴木（岡本）は日清戦争後に海運業に手を出して財産を失ってしまった。しかし、フィリピン人革命家の手紙や日本の当局側の報告書からすると 1900 年には、二代目鈴木（岡本）は、武器や海運に関する商売を行っていたようである。

***時澤**

時澤右一

時澤（1864-没年不明）は、群馬で生まれた。1889 年、第 11 期士官生徒として陸軍士官学校を卒業。日清戦争時は天佑俠に参加。1897 年砲兵大尉となり、同年、年参謀本部出仕となる。1898 年に福島安正の部下として米西戦争の観戦武官としてフィリピンに行く。米西戦争後一時帰国したが、1899 年 3 月から比米戦争の視察員として再度フィリピンを訪れ、情報収集活動を始める。しかし 1899 年秋に病氣帰国し、その後日本で参謀本部員としてフィリピン人革命家と接触を続けた。その後 1902 年に病氣退役した。

***長野**

長野義虎

長野は、1896 年歩兵中尉として台湾の玉山の登頂に成功した。陸軍士官学校の卒業生名簿で長野義虎の名前を見つけることはできなかった。1900 年前後で大尉になっている卒業生で長野という名前は、和田連次郎歩兵大尉と同期の 1890 年第 1 期士官候補生の長野準四朗だが、こちらの長野は砲兵なので別人である。長野義虎は 1899 年 2 月フィリピン革命軍を訓練する目的でフィリピンに行ったが、4 月末には日本に戻り、その後「布引丸」に参加した。

***奈良原**

奈良原忍

奈良原は、1899 年当時は歩兵大尉。陸軍士官学校の卒業名簿で奈良原「忍」の名前を見つけることはできなかったが、時澤大尉と原大尉の 1 期前の第 10 期士官生徒の歩兵の卒業生の中に奈良原「矢太郎」という名前を見つけた。それ以外、1900 年前後で大尉になっている可能性のある年代の卒業生の中に奈良原、または忍の名前を見つけることはできなかった。小池大尉の後任として、1900 年 5 月末から在マ

ニラ日本領事館付武官としてマニラに着任し、1902年2月日本に帰国した。卒業名簿によると、奈良原矢太郎は明治37～8年戦役で亡くなっており、奈良原忍も1905年頃に亡くなっていること、そして両者ともに砲兵ではなく歩兵であることから、同一人物であろうと思われる。

***原**

原禎

原は1889年陸軍士官学校7月卒業、第11期士官生徒。卒業名簿の名前は原貞となっている。時澤大尉とは同期になる。1899年当時は砲兵大尉であった。1899年7月にフィリピンに潜入し、フィリピン革命軍のインストラクターとして、主にマスカルド将軍の下で1年間働いたと思われる。潜入時の階級及び所属は不明。

***平田**

平田謙衛

平田は法学博士、弁護士で、早稲田で法律を教えており、ラモスはこの平田の仲介で大隈重信に面会している。アルタチョとも面識があった。米西戦争中の1898年8月5日頃には和田大尉が平田に会い、1899年3月、平田は孫逸仙と共にポンセの家に泊まった。1901にも時澤大尉にアドバイスを行っている。このことから平田は少なくとも5年ほど、フィリピン人革命家の日本でのアドバイザーを務めていたと思われる。

***福島**

福島安正

福島（1852-1919）は、1852年9月15日松本藩足軽の家に生まれる。戊辰戦争に参戦し、その後開成校中退を経て、1873年司法省十三等出仕（翻訳課）に所属。1874年陸軍省十一等出仕等を経て参謀本部に参加。1898年当時は大佐であったが、1900年4月に少将に昇進する。

***三増**

三増久米吉

三増は、在マニラ日本領事館の二等領事。

***ヤス**

石川ヤス

ヤスは、ラモスの日本人妻

*和田

和田連次郎

和田は、1890年7月に1期士官候補生として陸軍士官学校を卒業。時澤大尉の一期下。米西戦争・比米戦争当時は歩兵大尉で福島の部下であった。

外国人 (アルファベット順)

*A. ルナ

アントニオ・ルナ Antonio Luna (フィリピン人)

A. ルナは、著名な画家 J. ルナの弟で、1898年6月にアギナルドの軍に参加した人気のある武闘派の革命家であった。しかし1899年6月、アギナルドの側近によって殺害されてしまう。

*A. マッカーサー

アーサー・マッカーサー Jr. Arthur MacArthur, Jr. (アメリカ人)

A. マッカーサー Jr. (1845-1912) は、1898年5月、志願兵の指揮官に任命され、1898年8月13日のイントラムロスの「見せかけの戦闘」に参加。1900年1月にオーティス准将の後を継いで、在フィリピン・アメリカ軍の総司令官と軍政長官になる。その後日露戦争にも従軍した。

*アグリパイ

グレゴリオ・アグリパイ Gregorio Aglipay (フィリピン人)

アグリパイ (1860-1940) は革命側について活動したフィリピン人司教。1899年5月5日、当時フィリピンを統括していたスペイン人のノサレダ大司教から破門された。彼は後にデ・ロス・レイエスらが設立したフィリピン独立教会に参加する。

*アゴンシーリョ

フェリペ・アゴンシーリョ Felipe Agoncillo (フィリピン人)

アゴンシーリョ (1859-1941) は、バタンガスで生まれ。その後弁護士となった。しかし地元でスペイ

ン人の不正を糾弾したため、身の危険を感じてフィリピンを去り、1896年4月26日に来日。その後日本に約2週間滞在した後、香港へ行き独立活動を始めた。1898年5月にアギナルドがフィリピンで革命運動を再開すると、香港委員会のとりまとめ役になった。1898年9月、米西戦争の戦後処理のために開かれたパリ会議でフィリピン人の意見を述べるために、ワシントン D. C. などでロビー活動始める。比米戦争が始まるとアメリカを去り、ヨーロッパで革命運動を続ける。1903年7月の香港委員会解散後、1905年にフィリピンに戻り、弁護士活動を再開する。1909年、バタンガス選出の議員になる。1941年にマニラで死亡。

*アギナルド

エミリオ・アギナルド・イ・ファミイ **Emilio Aguinaldo y Famy** (フィリピン人)

アギナルド(1869-1964)は、カビテで生まれ、中等教育の途中で学校を辞め、未亡人となった母を助けるようになった。17歳で彼はカビテ・エル・ピエホのパランガイ(最少行政単位)の長になり、その後1895年に町長となる。この間に革命組織「カティプーナン」に参加し、1896年8月30日の武装闘争に参加、1897年5月10日にはカティプーナンの長であったアンドレス・ボニファシオに代わって、この革命組織の長となり武装闘争を率いた。

*アレハンドリノ

ホセ・アレハンドリノ **Jose Alejandrino** (フィリピン人)

アレハンドリノ(1870-1951)は、第1フェーズから参加している革命家で、アルタチョと共に日本に来て、ラモスと一緒に活動した。第2フェーズでは、香港でマニラ湾を攻撃しに行くアメリカ艦隊に同船し、アギナルドに先駆けてフィリピンに戻った。

*アパシブレ

ガリカノ・アパシブレ **Galicano Apacible** (フィリピン人)

アパシブレ(1864-1949)は、マドリッドの大学で学び、その後イギリス汽船サフィロの医者として働いていた。ホセ・リサルはアパシブレの親戚で、アパシブレは『ラ・ソリダリダッド』の立ち上げにも参加した。アギナルドとは、アギナルドが香港に追放された際に初めて会い、その後アギナルドの下に入って革命運動に参加し、1898年9月からは香港委員会の委員長となる。1899年秋にアメリカへロビー活動に行き、1901年春に香港に戻る。香港委員会解散後、1908年にはバタンガスの知事になる。

*アレホラ

トーマス・アレホラ・イ・パデリャ **Tomás Aréjola y Padilla** (フィリピン人)

アレホラ (1865-1926) は、1899年の『フィリピナス・アンテ・エウロパ』の創刊当時は、マドリッド委員会の委員長であった。革命家のルドビコ・アレホラの兄弟。彼がマドリッドで設立したフィリピン人向け代行エージェンシー「アヘンシア・デ・アストス・フィリピノス」の設立趣意書に、彼は自身を、「弁護士、カマリネスの地主」と記している。1901年後半頃に活動の場を香港に移す。

*アレリャノ

カエタノ S. アレリャノ **Cayetano S. Arellano** (フィリピン人)

アレリャノは、アメリカ統治下の裁判所で裁判官を行い、1901年アメリカ支配下のフィリピンで、最高裁判所裁判官となった。

*アルタチョ

イサベロ・アルタチョ **Isabelo Artacho** (フィリピン人)

アルタチョ (1859-没年不明) は、南イロコス州ビガン出身。第1フェーズ時、日本の援助を求めて活動し、1897年11月1日に発布されたビアク・ナ・バト憲法を起草し、11月2日にアギナルドが大統領となったビアク・ナ・バト内閣では内務大臣となる。その後第2フェーズを目の前にしてビアク・ナ・バト協定でスペインから支払われたお金に関して、彼の取り分を要求し、アギナルドに対して香港最高裁判所に訴訟を起こした。その後も香港で、武器調達の方法などでアゴンシーリョと対立した。1898年6月末にフィリピンに帰った際、アギナルドによって逮捕され拘束された。アルタチョは1年後、香港への逃亡に成功し、アメリカ併合支持を宣言する文書を発表し、革命派と完全に袂を分かった。

*B. アギナルド

バルドメロ・アギナルド **Baldomero Aguinaldo** (フィリピン人)

B. アギナルドは、アギナルドの従兄弟。第1フェーズ時、カビテ州カウイットにあったマグダロ人民評議会の議長であった。

*B. レガルダ

ベニト・レガルダ・イ・ツアソン **Benito Legarda y Tuason** (フィリピン人)

B. レガルダは、革命運動の活動家の一人であったが、その後アメリカに忠誠を誓い1901年9月1日か

ら 1907 年 10 月 31 日までフィリピン委員会に籍を置いた。母方になると思われるツアソン・ファミリーはバンコ・エスパニョール・フィリピノという銀行を設立した富裕なフィリピン人の一族である。

*バーサ

ホセ・マリア・バーサ **Jose Maria Basa** (フィリピン人)

バーサ (1839-1911) は、1839 年にマニラの裕福な家庭に生まれた。その後ビジネスマンとして成功を収めていたが、聖職者現地人化運動に参加していたため、1872 年の「ゴン・ブル・サ」の処刑後、スペイン当局によってグアムに追放された。1874 年スペイン当局はバーサに対して恩赦を行い、バーサは香港に移住し、商人として成功を収めた。香港では、リサールの小説や『ラ・ソリダリダッド』をフィリピンに密輸する援助をしていたと言われている。革命後の 1911 年、香港で死亡する。

*ベドロー

エドワード・ベドロー **Edward Bedloe** (アメリカ人)

ベドローは、1898 年の米西戦争開戦時、在広東アメリカ合衆国領事だった。香港委員会の武器調達を行っていたルイス・アンド・スピッツェル社の、W. F. シルベスターと親しい関係にあったとされ、香港委員会とシルベスターが組んだ武器調達では、シルベスターに協力した。その他でも、ベドローはシルベスターや彼の仲間と香港で会うこともあった。ベドローの行動を快く思っていなかった在港アメリカ合衆国 (総) 領事ワイルドマンは、ベドローと H. R. ウィリアムズ在広東アメリカ副領事の行動を警戒していた。

*ベラルミノ

ビト・ベラルミノ **Vito Belarmino** (フィリピン人)

ベラルミノは第一フェーズでカビテ州カウイトにあったマグダロ人民評議会で、アギナルドと共に活動し、その後も共に戦った生え抜きの革命家。

*ブルメントリット

フェルディナンド・ブルメントリット **Ferdinand Blumentritt** (オーストリア=ハンガリー人)

ブルメントリット (1853-1913) は、オーストリア=ハンガリー帝国のライトメリッツの教師でリサールとも親交があり、フィリピン革命を支持した人物。リサールや他のフィリピン人のプロパガンダ活動を助ける。アゴンシーリョがウイヘルム II 世に拝謁した際、通訳を務めた。

*ブレイ

ハワード W. ブレイ **Howard W. Bray** (イギリス人?)

現段階ではブレイの身元は確認できていない。革命側が新聞記事に出した情報では、もと英領インドの文官で、フィリピンにはプランターとして 15 年住んでいたが、スペインのせいで財産を捨てることになり、フィリピンを去らなければならなかった経歴を持ち、アギナルドとも旧知の仲となっている。しかし、イギリスの史料を調べる限りでは、イギリス領インドのベンガル管区の官吏に同姓同名の人物がいるが、同一人物か判別できない。アメリカの書類の中には、1896 年 3 月 7 日にビコール地方で彼がアシエンダの売買を行った記録が残されている。こちらの書類はアメリカの押収資料にある売買契約書なので、本人の契約書には間違いはないと思われる。1898 年 4 月末にアギナルドがシンガポールに着いた際に、アギナルドを在シンガポール総領事のプラットに引き合わせ、その後シンガポールや香港で、革命側の宣伝活動が無償で助けたが、1899 年夏に突然給料を要求し、革命運動から距離を置くようになった。

*ブランバイ

トーマス M. ブランバイ **Thomas M. Brumby** (アメリカ人)

ブランバイは、デューイの部下の海軍将校 Flag Lieutenant。

*ブライアン

ウィリアム・ジェニングス・**William Jennings Bryan** (アメリカ人)

ブライアン (1860-1925) は、1896 年、1900 年、1908 年のアメリカ合衆国民主党の大統領候補。

*ブエンカミノ

フェリペ・ブエンカミノ **Felipe Buencamino** (フィリピン人)

ブエンカミノ (1848-1929) は、ブラカン州生まれ。1899 年 5 月 8 日に共和国第 2 次内閣の外務大臣となったが、その後 1899 年 11 月にアメリカに降伏した。

*C. リチャウコ

クリサント・リチャウコ **Crisanto Lichauco** (フィリピン人)

C. リチャウコは中華系富裕層に属するメスティーソ。兄弟のファウスティノ・リチャウコと共に香港で

革命活動を行う。香港委員会の財務係を担ったとの研究もあるが、兄と弟のどちらが財務係だったのかは不明。

*C. ルクバン

カエタノ・ルクバン・イ・リリエス Cayetano Lukban y Rilles (フィリピン人)

C. ルクバンは、ビアク・ナ・バト協定によってアギナルドと共に香港へ来たビセンテの兄弟（ルクバンは3人兄弟）。1901年以前は確認がとれないが、1901年以降は香港委員会で活動をしている。1903年7月31日、「カエタノ・ルクバン」の名前で香港委員会の解散を宣言した。

*カイリエス

フアン・カイリエス Juan Cailles (フィリピン人)

カイリエス (1871-1951) は、第1フェーズから革命運動に参加している革命家。

*カノバス

アントニオ・カノバス・デル・カスティーリ ≡ **Antonio Cánovas del Castillo** (スペイン人)

カノバス (1828-1897) は、スペインの保守派の政治家。

*チェンバレン

ジョセフ・チェンバレン Joseph Chamberlain (イギリス人)

チェンバレン (1836-1914) は、米西戦争時イギリス、ソールズベリー内閣の植民地大臣 (1895-1903)。

*シャペル

プラシド・ルイス・シャペル Placide Louis Chapelle (国籍不明)

シャペル (1842-1905) は、フランス生まれ。アメリカ合衆国ニュー・メキシコのサンタフェの大司教 (1894-1897) を経て、ニュー・オーリンズの大司教 (1897-1905) となったが、1899年8月9日に教皇代理に任命され、1900年1月24日にローマ教皇の代理人としてフィリピンに着任する。英語・スペイン語・フランス語に堪能。本稿ではフランス読みを採用した。

*クリーヴランド

スティーヴン・グローバー・クリーヴランド Stephen Grover Cleveland (アメリカ人)

クリーヴランド (1837- 1908) は、第 22 代 (1885-1889) と第 24 代 (1893-1897) アメリカ大統領。

*コンスタンティーノ

レナト・コンスタンティーノ **Renato Constantino** (フィリピン人)

コンスタンティーノ (1919-1999) は、フィリピンの著名な歴史研究家。 *The Making of a Filipino (A Story of Philippine Colonial Politics)*、 *The Philippines: A Past Revisited* などの著書がある。

*D. コルテス

ドロテオ・コルテス **Doroteo Cortéz** (フィリピン人)

D. コルテスは、香港に住む富裕なフィリピン人ファミリーの、コルテス・ファミリーの長。1896年にファミリーで日本に来て、日本の保護の可能性を探ったこともある。息子はマキシモ。

*クリックシャンク

クリックシャンク **Crickshank** (国籍不明)

クリックシャンクのファースト・ネーム及び本名は不明。クリックシャンクは、ルイス・スピッツェル社のスピッツェルと、W. F. シルベスターの仲間であった。1898年冬から1899年にかけてマニラと香港を往復していたが、1899年2月20日の時点で、マニラの刑務所に拘留されていた。1899年9月13日の香港総領事報告には、クリックシャンクの名刺上の名前は、A.R.マイヤーズと書かれており、国籍はわからないがユダヤ人であるとなっている。

*デイ

ウィリアム・ルーファス・デイ **William Rufus Day** (アメリカ人)

デイ (1849-1923) は、1898年4月から9月までアメリカ合衆国国務長官であった。

*デ・レテ

エドゥアルド・デ・レテ **Eduardo de Lete** (フィリピン人)

デ・レテは、『ラ・ソリダリダッド』の編集メンバーの1人。ヨーロッパ在住のフィリピン人革命家。マドリードの革命新聞『フィリピナス・アンテ・エウロパ』第27号「光のページ」(1900年11月25日)によると、フリー・メーソンのメンバーであった。

***デ・ロス・レイエス**

イサベロ・デ・ロス・レイエス Isabelo de los Reyes (フィリピン人)

デ・ロス・レイエス (1864-1938) は、南イロコス州ビガンで生まれた。1897年、スペイン統治下のフィリピンで反逆の疑いをかけられ、バルセロナのモンジュイック刑務所に送られ、釈放後はフィリピンに帰ることを禁じられたためスペインで暮らし、スペインの自由派に属する政治家モレの下で働く。1899年10月25日から、マドリッドで革命新聞『フィリピナス・アンテ・エウロパ』を発行する。1901年10月にフィリピンに帰国。その後も政治的な活動を行った。

***デ・サントス**

イシドロ・デ・サントス Isidro de Santos (フィリピン人)

デ・サントスは、スペインで医学を学び、1898年末か1899年初頭に香港のアパシブレの下に入り、香港で活動する。1899年、香港で医者としての開業登録を行っている。

***デル・パン**

ラファエル・デル・パン Rafael del Pan (フィリピン人)

デル・パン (1863-1915) は、1899年秋、アパシブレとともにアメリカへロビー活動に向かった。

***デューイ**

ジョージ・デューイ George Dewey (アメリカ人)

デューイ (1837-1917) は、米西戦争マニラ湾海戦で勝利したアメリカ合衆国海軍アジア艦隊提督。旗艦は「オリンピア」。この海戦に勝利したことで、アメリカの英雄となり、1900年のアメリカ大統領選挙出馬を視野に入れ、ブライアンと民主党大統領候補を争ったが、途中で断念した。

***ドワイアー**

チャールズ G.ドワイアー Charles G. Dwyer (アメリカ人)

ドワイアーは、1901年12月10日頃に、香港委員会のメンバーと接触したアメリカ軍の第3歩兵隊の大尉。

***E. ワイルドマン**

エドゥイン・ワイルドマン Edwin Wildman (アメリカ人)

E. ワイルドマンは、在香港アメリカ合衆国（総）領事ワイルドマンの兄弟。アメリカ国内で『エルミラ・エコーズ』の編集者を経験した後、1898年10月から1899年5月まで香港副総領事を務める。1901年2月のワイルドマン総領事の死後、アギナルドとフィリピン革命に関する本を出版する。

***エツェル**

ルイス・レオナルド・エツェル Louis Leonard Etze（国籍不明）

エツェルは、香港委員会の武器ブローカーであった W. F. シルベスターの右腕。

***エバンス**

トーマス E.エバンス Tomas E. Evans（アメリカ人）

エバンスは、ジャクソン・アンド・エバンス社の一員として、香港委員会の武器調達に関わった。エバンスは、アメリカ人で、マニラ市イントラムロス内、サント・トーマス 5 番でビジネスを行う代理商であった。在香港（総）領事ワイルドマンに関係した武器調達を行った。

***F. リチャウコ**

ファウステイノ・リチャウコ Faustino Lichauco（フィリピン人）

F. リチャウコ（1859-没年不明）は中華系富裕層に属するメスティーゾ。弟のクリサントと共に香港で革命活動を行う。1898年7月から11月まで、日本で武器調達活も行っていた。

***F. ウイリアムズ**

オスカーF. ウイリアムズ Oscar F. Williams（アメリカ人）

O. F. ウイリアムズは、米西戦争時の在マニラ・アメリカ領事。米西戦争中は在マニラ・イギリス領事のローソン・ウォーカーに領事館業務を一時委託し、アメリカ艦隊と合流しアメリカ軍と行動を共にした。

***G. アゴンシーリョ**

グレゴリオ・アゴンシーリョ Gregorio Agoncillo（フィリピン人）

G.アゴンシーリョはアゴンシーリョの甥。香港委員会で活動し日本でも活動した。

***ゴン・ブル・サ**

ゴン・ブル・サ Gom-Bur-Za (フィリピン人)

1872年のカビテ兵器廠反乱の後、スペイン当局によって処刑されたホセ・ブルゴス、ハシント・サモラ、マリアノ・ゴメスの3人のフィリピン人聖職者。3人はフィリピンでの聖職者の現地人化を主張していた。

***ゴンサガ**

グラシオ・ゴンサガ・イ・レオン Gracio Gonzaga y Leon (フィリピン人)

ゴンサガは1899年1月21日のフィリピン共和国第一次内閣では、内務長官を務めた。

***グッドナウ**

ジョン・グッドナウ John Goodnow (アメリカ人)

グッドナウは、在上海アメリカ合衆国領事。

***グリメス**

ジョセフ・ヘンリー・グリメス Joseph Henry Grimes (イギリス人)

グリメスは、香港生まれのイギリス臣民で、1899年3月14日現在、29歳であった。15年前に香港を離れていたが、1897年に上海のルイス・アンド・スピッツェル社に参加。その後、香港委員会の武器調達にかかわる。本人の自白によると1898年2月に革命家と親しくなり、月125ドルと経費を受け取ることで香港委員会の武器調達に関係することになった。1898年9月から10月にかけては、マロロスでアギナルドに会うこともあったが、11月にアメリカ当局によって逮捕され、後に釈放された。この逮捕・釈放により、香港委員会から、アメリカ当局への情報漏洩の嫌疑をかけられ、武器調達の報酬の支払いを拒否された。1899年3月14日、グリメスはワイルドマン在香港アメリカ合衆国総領事に、武器調達に関して証言を行っている。しかしルイス・アンド・スピッツェル社のスピッツェルは、1900年4月19日の『マニラ・タイムス』の記事の中で、このグリメスの自白調書は、グリメスが中身を知らずにサインさせられたと主張している。

***H.R. ウィリアムズ**

H.R. ウィリアムズ Williams (アメリカ人)

H.R. ウィリアムズは、在広東アメリカ合衆国副領事。同地領事のベドローと同じく、香港委員会の武器調達を行っていたルイス・アンド・スピッツェル社の、シルベスターと親しい関係にあったとされる。

在香港アメリカ合衆国（総）領事ワイルドマンは、ベドロー領事と H.R. ウィリアムズ副領事を警戒していた。

***イレート**

レイナルド・カルメーニャ・イレート **Reynaldo Clemeña Ilet**（フィリピン人）

イレート（1946-）はフィリピンの著名な歴史研究家。代表的な著作としては、*Pasyon and Revolution : Popular Movements in Philippines, 1840-1910*がある。

***J. ルナ**

フアン・ルナ・イ・ノビシオ **Juan Luna y Novicio**（フィリピン人）

J. ルナ（1857-1899）は、著名なフィリピン人画家で革命家。1899年6月5日にアギナルドの護衛に殺されてしまったアントニオの兄である。J. ルナは1899年12月に香港で客死する。

***ジャクソン**

ウォルター・ジャクソン **Walter Jackson**（イギリス人）

ジャクソンは、ジャクソン・アンド・エバンス社の1人として米西戦争開戦時に、香港委員会の武器調達に関わったイギリス臣民。在香港アメリカ合衆国（総）領事ワイルドマンが関係する武器調達を行った。

***ルクバン**

ビセンテ・ルクバン・イ・リリエス **Vicente Lukbán y Rilles**（フィリピン人）

V. ルクバン（1860-1916）は、カマリネス・ノリテで生まれ、第1フェーズから参加し、ビアク・ナ・バト協定でアギナルドと共に香港に行った。米西戦争勃発後、アギナルドと一緒にアメリカの軍艦「マカロック」でカビテに戻り、戦闘に参加した。

***M. コルテス**

マキシモ・コルテス **Maximo Cortéz**（フィリピン人）

M. コルテスは、香港に住む富裕なフィリピン人ドロテオの息子。

***M. チュアソン**

エム・チュアソン（または、ツアソン） M. Tuason（フィリピン人）

エム・チュアソン（または、ツアソン）は、1899年6月に日本に来たフィリピン人ビジネスマン。日本側の記録にはチュアソン、PIRはツアソンとなっている。参謀本部とラモスはこの人物とビジネス関係を結ぼうとした。その結果は不明である。ツアソン一族はバンコ・エスパニョール・フィリピノという銀行を設立した富裕なフィリピン人の一族である。

***マビニ**

アポリナリオ・マビニ Apolinario Mabini（フィリピン人）

マビニ（1864-1903）は、バタンガスで生まれ、第2フェーズからアギナルドの活動に参加。その後のフィリピン共和国設立に関し、理論的な部分のサポートを行う。1899年1月23日の共和国設立で第1次内閣の長となるが、アメリカ当局との対応に関して内閣内で意見が分かれ、同年5月7日辞任。1899年12月にアメリカに逮捕され1901年1月にグアムに追放される。

***マルバール**

ミゲール・マルバール・イ・カルピオ Miguel Malvar y Carpio（フィリピン人）

マルバール（1865-1911）は、バタンガス生まれのフィリピン革命軍の将軍。ビアク・ナ・バト協定締結後、アギナルドと共に香港に移り住むが、第2フェーズ開始後にフィリピンに戻り、武力闘争に参加した。アギナルドの降伏後は、アギナルドの後継者として戦闘を継続したが、1902年4月16日、アメリカ軍のベル准将に降伏した。

***マスカルド**

トーマス・マスカルド Tomás Mascardo（フィリピン人）

マスカルド（1871-1932）は、第1フェーズ時代、アギナルドとともに、カビテ州カウイトにあったマグダロ人民評議会で活動した。第2フェーズではサンバレスなどでアメリカ軍と戦い、1899年7月頃からは参謀本部の原砲兵大尉を迎え入れて、革命軍の強化を図ったが、アギナルドの降伏後、彼も逮捕された。

***メイ**

グレン・アンソニー・メイ Glenn Anthony May（アメリカ人）

メイは、イエール大学で教鞭をとる歴史研究者。イエール大学で1966年にB.A.を取得し、同大学でPh.D

を 1975 に取得した。アンドレス・ボニファシオの英雄像を検証した *Inventing a Hero* を 1997 年に出版。

*マッキンレー

ウィリアム・マッキンレー **William Mckinley** (アメリカ人)

マッキンレー (1843-1901) は、第 25 代アメリカ大統領。1897 年に大統領に就任し、2 期目の 1901 年 9 月 6 日、自称アナーキストのチョルゴッシュに銃で撃たれ、同月 14 日に死亡した。

*メリット

ウェスリー・メリット **Wesley Merritt** (アメリカ人)

メリット (1836-1919) は、アメリカ陸軍准将で、アメリカのマニラ湾海戦勝利後、陸軍増援隊を指揮して 1898 年 7 月 25 日にフィリピンに到着した。8 月 14 日からマニラの初代軍政長官になったが、半月ほどでオーティス准将に職を引き継ぎ、8 月 30 日にマニラを去った。

*モンテネグロ

アントニオ・モンテネグロ **Antonio Montenegro** (フィリピン人)

モンテネグロは、1897 年 11 月 2 日のビアク・ナ・バト共和国内閣では外務長官であった。

*モライタ

ミゲール・モライタ・サグラリオ **Miguel Morayta Sagrario** (スペイン人)

モライタ (1834-1917) は、マドリッドの大学教授。歴史研究者。マドリッドにあるメーソンの組織、グラン・オリエンテ・エスパニョールのグランド・マスターでもあった。

*モレ

セギスムンド・モレ・イ・プレデガスト **Segismundo Moret y Prendergast** (スペイン人)

モレ (1833-1913) は、スペインの自由派に属する政治家。自由派はフィリピン統治に関してある程度の自治を与える示唆を行っていた。モレは、スペインにいたデ・ロス・レイエスを呼び、彼の下で働かせた。

*ノサレダ

ベルナルド・ノサレダ・イ・ビリャ Bernardino Nozaleda y Villa (スペイン人)

ノサレダ (1849-1927) は、1902年2月までフィリピンの大司教 (1889-1902) を務めたスペイン人聖職者。

***オーティス**

エルウェル・スティーヴン・オーティス Elwell Stephen Otis (アメリカ人)

オーティスは、1898年8月末にメリットからフィリピン軍政長官を引き継ぎ、1900年5月まで2代目軍政長官としてフィリピンを統治した。

***パルド・デ・タベラ**

トリニダッド・エルメネヒルド・パルド・デ・タベラ Trinidad Hermenegildo Pardo de Tavera (フィリピン人)

パルド・デ・タベラ (1857-1925) は、マニラ生まれの富裕層に属する知識人である。彼はパリで医学を学び、マドリッドではホセ・リサールとも面識がある。基本的には革命運動に参加せず、米西戦争後はアメリカともコンタクトをとる一方で、1898年9月のマロロス議会にも出席したが、アギナルドの作る政府に期待を持たず、10月にはアギナルドたちの下を去った。1899年3月に第1次フィリピン委員会が来比すると、同年4月21日に委員会に証言を始め、1900年12月23日、アメリカ併合を支持する政党であるフェデラル党を結成。1901年にフィリピン委員会のメンバーに加わる。

***パテルノ**

ペドロ A. パテルノ Pedro A. Paterno (フィリピン人)

パテルノ (1867-1911) は、富裕層のファミリーの出身で、マニラのサンタ・クルスに生まれ、マニラとスペインの大学で教育を受ける。1896年に起きたフィリピン革命においてパテルノは、スペイン当局とアギナルドや彼の仲間との仲介役を果たし、1897年12月両者の間でビアク・ナ・バト協定を締結させ、終戦合意にこぎつけた。革命の第2フェーズ勃発後は、1898年9月のマロロス議会に参加。1899年5月8日には共和国第2次内閣で、内閣の長になった。1900年4月25日にアメリカに降伏したとなっている。

***ピ・イ・マルガリ**

フランシスコ・ピ・イ・マルガリ Francisco Pi y Margall (スペイン人)

ピ・イ・マルガリは、スペイン第1共和制時代の大統領。

*ボンセ

マリアノ・ボンセ **Mariano Ponce** (フィリピン人)

ボンセ (1863-1918) は、ブラカン州バリワグに生まれる。1887年ヨーロッパに出発し1889年にマドリッドで医学を修める。1889年ロペス・ハエナを手伝って、『ラ・ソリダリダッド』を創刊。マルセロ・ヒラリオ・デル・ピラールの死後、香港に移住し、バーサ、アゴンシーリョなどと共に、革命運動を行った。1898年6月に革命への援助の可能性を探して、香港委員会から日本に派遣された。その後日本と香港で活動し、孫逸仙などとも交友を深めたが、香港委員会が解散することになり、1902年末か1903年初旬に香港に戻った。

*プラット

スペンサー E. プラット **Spencer E. Pratt** (アメリカ人)

プラットは、1886年から91年にかけてペルシャ駐在を経て、米西戦争中は在シンガポール・アメリカ合衆国総領事であった。1898年4月23日にイギリス人ブレイの紹介でアギナルドに会う。その後プラット総領事が仲介して、香港にいるアメリカ合衆国アジア艦隊のデューイ提督にアギナルドを紹介する。

*キログ・バレステロス

ベニグノ・キログ・イ・ロペス・バレステロス **Benigno Quiroga y López Ballesteros** (スペイン人)

キログ・バレステロス (1850-1908) は、スペインの自由党员、1906年に内務大臣となるが、1908年に死亡。

*ラモス

ホセ・アナクレト・ラモス **Jose Anacleto Ramos** (フィリピン人→日本人)

ラモス (1856-没年不明) は、1895年来日。その後日本の政治家・法律家・軍関係者と親交を持ちながら、革命運動を日本からサポートした。1900年7月に日本に帰化し、日本名は石川保政。日本とフィリピンを行き来して、J.A. Ramos、J.A. Robertson、石川保政、J.A. Ishikawa などの名前を時に応じて使い分けている。

*ローソン・ウォーカー

エドワード・ヘンリー・ローソン・ウォーカー **Edward Henry Rawson-Walker** (イギリス人)

ローソン・ウォーカーは、米西戦争時の在マニラ・イギリス領事。米西戦争によりアメリカ領事がマニラから撤退せねばならなくなり、在マニラ・アメリカ領事の仕事を引き継いだ。米西戦争が終了する前に、熱帯性の赤痢で衰弱死した。

*レヒドール

アントニオ・マリア・レヒドール・イ・フラド **Antonio María Regidor y Jurado** (フィリピン人)

レヒドールは、マニラで生まれ、1872年カビテ兵器廠反乱で逮捕され投獄された。グアムに流刑となり、その後ロンドンに移り住み、革命運動をサポートする。

*リエゴ・デ・ディオス

エミリアノ・リエゴ・デ・ディオス **Emiliano Riego de Dios** (フィリピン人)

リエゴ・デ・ディオスは、革命第1フェーズ時に革命に参加し、その後第2フェーズでは香港委員会で活動続ける。1899年秋から、香港委員会委員長のアパシブレがアメリカにロビー活動に行ったため、1899年11月から香港委員会のとりまとめを任された。

*ロドリゲス

セレスティノ・ロドリゲス **Celestino Roderiguez** (フィリピン人)

ロドリゲスは、1892年アテネオ・デ・マニラでBA取得。1900年マドリッド中央大学で法学士を取得。1904年にセブのミュニシパル長に就任、1907年に代議士となる。

*ルーズヴェルト

セオドア・ルーズヴェルト **Theodore Roosevelt** (アメリカ人)

ルーズヴェルトは、1897年から1898年にかけて海軍次官を務め、その後マッキンレー政権で副大統領を務めた。しかし、マッキンレー大統領が暗殺されたため、1901年9月14日から、1909年まで大統領を務めた。

*S. ロペス

シクスト・ロペス **Sixto Lopez** (フィリピン人)

S. ロペスは、1898年9月、アゴンシーリョがアメリカにロビー活動に行く際、アゴンシーリョに同行

した革命家。その後香港で活動を続ける。

*サガスタ

プラクセデス・マテオ・サガスタ Práxedes Mateo Sagasta (スペイン人)

サガスタ (1825-1903) は、自由派に属するスペインの政治家。7度スペインの首相になった (1871-72、1874、1881-83、1885-90、1902-05、1897-99、1901-02)。

*ソールズベリー

第3代ソールズベリー侯爵ロバート・ガスコイン＝セシル Robert Arthur Talbot Gascoyne-Cecil, 3rd Marquess of Salisbury (イギリス人)

ソールズベリー (1830-1903) は、イギリスの第3次ソールズベリー内閣 (1895-1902) の首相。

*サルメロン・アロンソ

ニコラス・サルメロン・アロンソ Nicolas Salmeron Alonso (スペイン人)

サルメロン・アロンソは、スペイン第1共和制時代の大統領。

*サンディコ

テオドロ・サンディコ Teodoro Sandico (フィリピン人)

サンディコ (1860-1939) は、第2フェーズスタート時に、香港で革命に参加し、1898年6月末にフィリピンに戻りその後フィリピン領内で活動し、アギナルドの側近となる。英語が話せることで重宝された。1898年6月から1898年末にかけては、頻繁に在マニラ日本領事、及び当時マニラにいた参謀本部の時澤大尉に接触した。この後1899年1月23日のフィリピン共和国第1次内閣 (マビニ内閣) では、外務長官になる。アギナルドの降伏によって、彼もアメリカに降伏し、後に上院議員にまで上り詰める。

*シャーマン

ヤコブ・グールド・シャーマン Jacob Gould Schurman (アメリカ人)

シャーマン (1854-1942) は、コーネル大学の学長で、第1次フィリピン委員会の長。

*ソウサ

ホセ・デ・シルバ・エ・ソウサ Jose de Silva e Souza (ポルトガル人)

ソウサは、香港在住のポルトガル人で、香港委員会の武器調達に関わった。1898年末から1899年初めにかけての上海の武器調達で、香港委員会、ソウサ、とシルベスターが組んで、武器調達を行ったが、これが失敗に終わり、香港委員会は大きな損害を被った。

*スピッツェル

ルイス・スピッツェル **Louis Spitzel** (イギリス人)

スピッツェルは天津のルイス・スピッツェル社の社長。香港委員会の武器調達に関わっていた。シルベスターのビジネス・パートナーでイギリス臣民。李鴻章のパートナーだと自称している。在香港アメリカ総領事のワイルドマンの報告からすると、ユダヤ人であったようである。

*シルベスター

W. F. シルベスター (国籍不明)

シルベスター (別名 W.F.スターリー) は、中国大陸に来る前は、アメリカのフィラデルフィアにあったキーン・スターリー社の社長であった。シルベスターも偽名である可能性が大きい。理由は不明ではあるが、1895年にキーン・スターリー社は消滅した。その後、フィリピン革命第2フェーズでは、天津のルイス・スピッツェル社のパートナーとして、香港委員会の武器調達に関わるブローカーとして暗躍した。

*T. アゴンシーリョ

テオドロ・アンダル・アゴンシーリョ **Teodoro Andal Agoncillo** (フィリピン人)

T. アゴンシーリョ (1912-1985)は、フィリピンの著名な歴史研究者。著作は *The Revolt of the Masses*、*Malolos: The Crisis of the Republic*、*History of the Filipino People* など。

*タフト

ウィリアム・ハワード・タフト **William Howard Taft** (アメリカ人)

タフトは、1900年、当時のアメリカ合衆国大統領マッキンレーによってフィリピン委員会の長に任命された。タフトは1901年から1903年まで、フィリピン初の民政長官となる。その後タフトは1904年から1908年までアメリカの国務長官を務め、1909年、アメリカ合衆国大統領となる。

*テイラー

ジョン・ロジャー・メイグス・テイラー John Roger Meigs Taylor (アメリカ人)

テイラーは、1885年にウエスト・ポイント陸軍士官学校を卒業。1889年に少尉に任命された際、彼は1865年1月13日に生まれたと述べている。1899年10月10日、大尉に任命され、フィリピンでの任務を言い渡され、押収された文書の翻訳・分析を担当した。テイラーは1949年3月31日、ウォルター・リード総合病院（現ウォルター・リード陸軍メディカル・センター）で死亡。テイラーが編集した *The Philippine Insurrection against the United States* は彼の死後、1971年に出版された。

*ティニオ

マニユエル・ティニオ Manuel Tinio (フィリピン人)

ティニオは、1897年末、香港へアギナルドと一緒に追放された。比米戦争時にフィリピンに戻りビリャモールの下で活動。1901年5月1日、アメリカ軍のベル准将に降伏。1907年ヌエバ・エシハの知事となる。

*トーレス

フロレンティノ・トーレス Florentino Torres (フィリピン人)

トーレスは、パルド・デ・タバラと共に1900年12月23日、アメリカ併合を支持する政党のフェデラル党を設立する。

*トリアス

マリアノ・トリアス・イ・クロサス Mariano Trías y Closas (フィリピン人)

トリアスは、1898年9月のマロロス政府では財政長官となり、その後比米戦争では、南ルソンの司令長官になる。1900年10月11日、日本領事館事務代理の北條書記生、参謀本部の奈良原大尉、ラモスとカビテで会う。1901年3月のアギナルドの降伏後、マニラにいた参謀本部の奈良原大尉はラモスへの4月1日付けの手紙で、トリアスがマラカニアンに頻繁に出入りしていることを記している [PIR 903-5]。その後トリアスはアメリカ軍に降伏した。

*ビリャ

サイメオン A. ビリャ Simeon A. Villa (フィリピン人)

ビリャは、アギナルドと行動を共にしていた革命家。医者ではあったが、武器調達などにも関与していた。1901年に日本に行き、1902年に帰国。

* ビリヤモール

イグナシオ・ビリヤモール **Ignacio Villamor** (フィリピン人)

ビリヤモール (1863-1933) は、マロロス議会のメンバー。フィリピンの教育政策に積極的に携わる。1915年6月7日、フィリピン大学学長に任命される。

* ウィアー

ジョン・ウィアー **John Weir** (国籍不明)

ウィアー本人は、大佐と名乗っている。1898年10月にマロロスでアギナルドと会ったとされている。11月に香港に到着。香港委員会のメンバーやシルベスターと面識がある。香港では、在香港アメリカ合衆国総領事ラウンズヴィル・ワイルドマンの友人と名乗り、副領事に面会を求めたり、マニラでは、タフトのところに資本家のシンジゲートの代表だと称して面会を求めたりするなど、意味不明な行動をしている。

* ワイルドマン

ラウンズヴィル・ワイルドマン **Rounsville Wildman** (アメリカ人)

ワイルドマン (1864-1901) は、ニューヨークのバタヴィアに生まれ、ハリソン大統領の時代に 1889年から3年間、シンガポール領事を務めた。その後 1894年から 1897年まで、サン・フランシスコの『オーバーランド・マンスリー』の編集者となり、1897年に香港領事となった。1898年香港領事館の総領事館への格上げと共に、香港総領事に就任した。1901年2月21日、アメリカに一時帰国する際に乗っていた汽船が沈没し、妻子とともに溺死した。1898年10月から翌年5月まで、香港副総領事を務めたエドウィンは兄弟。

* ウースター

デューン・コナン・ウースター **Dean Conant Worcester** (アメリカ人)

ウースター (1866-1924) は、アメリカの動物学者でミシガン大学の教授。かつてフィリピンをフィールドにして研究していた経歴もあり、第1次フィリピン委員会のメンバーの1人に選ばれた。

『フィリピナス・アンテ・エウロパ』目次

(スペル、感嘆符などはなるべく史料通りに写した³⁾)

第1号 1899年10月25日

- ①我々のモットー Nuestro Lema
- ②ミスター・マッキンレーへ A Mr. Mac-Kinley
- ③フィリピン人たちとヤンキーたち Filipinos y Yankees (イサベロ・デ・ロス・レイエス **Isabelo de los Reyes**⁴著)
- ④祖国の旗 La Bandera de la Patria (スアン・タガログ Zuan TAGÁLOG 著)
- ⑤宗教問題 La Cuestión Religiosa
- ⑥今が絶好の機会だ アメリ...カインか、アメリ...カニン...イスタか Ahora ó Nunca. Los Ameri...*káin* ó ameri...*káin*...ista (オステム OSTEM 著)
- ⑦国民の目覚め フィリピン軍へ El Despertar de un pueblo. Al ejército Filipino (LAURO MATAÁS ラウロ・マタアス著)
- ⑧勝利は我々にかかっている 我々を打ち負かすのは不可能だ El Triunfo Depende de Nosotros. Es Imposible que nos vengzan
- ⑨フィリピンでの戦争 La Guerra Actual en Filipinas (T. トイ T. Toy 著)
- ⑩事実を述べろ Hablen Hechos (ヒンディーアメリ...カニン *Hindi-Améri...KANIN*⁵著)
- ⑪戦争のニュース Noticias de la Guerra
- ⑫時評欄 Crónica

第2号 1899年11月10日

- ①アメリカ合衆国議会のコミッションの見解 El Dictamen de la Comisión Parlamentaria de los Estados-Unidos⁶
- ②アメリカ合衆国国民へ Al Pueblo de los Estados Unidos de la América del Norte (元フィリピンの内閣の長 アポリナリオ・マビニ APOLINARIO MABINI Ex-presidente del Consejo de

³ 感嘆符は、時にではあるが、英語と同じで、後方にしかついていない場合がある。スペルも英語を使う場合がある。植字印刷であるため、タイトルの植字は多彩で、大きさもバラバラである。そのためパソコンでは再現が不可能であり、特筆すべきもの以外は通常の打ち方をした。

⁴ 最初の署名記事ということもあり、名前は太字で印刷されている。

⁵ 斜体で印刷されている。以下署名が斜体のものは、斜体で記す。

⁶ Estados Unidos はタイトルによって、ハイフンのあるものとないものがある。

Secretarios de Filipinas 著)

- ③アギナルドの首相が話す Habla el Primer Ministro de Aguinaldo (ペドロ A. パテルノ Pedro A.Paterno 著)
- ④保護国 El Protectrado (イサベロ・デ・ロス・レイエス Isabelo de los Reyes 著)
- ⑤革命の人々 Los Hombres de la Revolución (J. L. 著)⁷
- ⑥フィリピン人の暗い将来 帝国主義支配の下で Negro Porvenir de los Filipinos bajo la Dominación Imperialista
- ⑦戦争のニュース Noticias de la Guerra

第3号 1899年11月25日

- ①新しい方向 Nueva Orientación
- ②破門された司教総代理 終わりの始まり Un Vicario General Excomulgado. Principio del Fin
- ③反アメリカではない、反帝国主義である いつまでも! Contra Norte-América, No. Contra el Imperialismo, sí, ¡Hasta la Muerte!
- ④ヒーローたちと殉教者たち Héroes y Mártires (Ramiro Franko⁸ラミロ・フランコ著)
- ⑤フィリピンの暗い将来 帝国主義支配の下で(結論) Negro Porvenir de los Filipinos bajo la Dominación Imperialista (Conclusión)
- ⑥戦争で戦争に報いる 独裁 La Guerra con la Guerra. La dictadura
- ⑦独力で自治を行うためのフィリピン人たちの能力 La capacidad de los Filipinos para Gobernarse por sí Mismos
- ⑧武装解除 絶対がない El Desarme, Jamás!⁹
- ⑨戦争のニュース Noticias de la Guerra

第4号 1899年12月10日

- ①死をかけた戦い Duelo a Muerte
- ②そして誰が勝つか ¿Y Quién Triunfará?
- ③国々のモラル La Moral de Las Naciones (T. トイ T. Toy 著)
- ④人種問題と捕虜たち La Cuestión de Razas y los Prisioneros (イピン Iping 著)

⁷ J.L.はJ. ルナだと思われる。

⁸ 史料では Franco ではなく Franko になっている。

⁹ 感嘆符は後のみ。

⑤ドクター・ドミナドル・ゴメス Dr. Dominador Gómez (I. R. 著)¹⁰

⑥あきれた自治! ¡Valiente Autonomía!

⑦残虐行為 Atrocidades

⑧地方からの郵便 Correo del Campo (M. デ・レオン M. de León 著)

⑨戦争のニュース Noticias de la Guerra

⑩時評欄 Crónica

第5号 1899年12月30日¹¹

①ニュース文書 臨時号とともに 多くの州でのフィリピン人たちの大きな勝利 アメリカ合衆国最高司令官¹²の死 Hoja de Noticias. Adjunta al Número Extraordinario. Grandes Victorias de los Filipinos en Varias Provincias—El General en Jefe Norteamericano Muerte

②時評欄 Crónica

第6号 1900年1月10日

①数世紀と人間性 Los Siglos y la Humanidad

②大統領のメッセージ El Mensaje Presidencial

③スピーチ Discurso (マリアノ・ポンセのスピーチの西訳)

④ヨーロッパの利益はフィリピンの独立を要請する オーストリア人教師のフェルディナンド・ブルメントリット著 Los Intereses Europeos Piden la Independencia de Filipinas. Por el Profesor Austriaco Ferdinand Blumentritt (フェルディナンド・ブルメントリット Ferdinand Blumentritt 著)

⑤D.フアン・ルナ・イ・ノビシオ D. Juan Luna y Novicio (J. ルナ J. Luna 著)

⑥自由か死か ¡Libertad o Muerte! (XZOBEL 著)

⑦戦争のニュース Noticias de la Guerra (Hindi Ameri...kánin 他)

⑧D. トーマス・アレホラ・イ・パデリャ D. Tomás Aréjola y Padilla (I. R. 著)

⑨革命の人々 フェリペ・アゴンシーリョ(続き) Los Hombres de la Revolución. Don Felipe Agoncillo (Continuación) (J. ルナ J. Luna 著)

¹⁰ I.R.はイサベロ・デ・ロス・レイエスの略だと思われる。

¹¹ アメリカ合衆国陸軍ヘンリー・ウェア・ロートン Henry Ware Lawton 将軍戦死追悼号

¹² ロートンは最高司令官ではないが、General en Jefeが「元帥、最高司令官」の意味なので最高司令官として翻訳する。

⑩スペイン人たちの解放 La Libertad de los Prisioneros Españoles

⑪時評欄 Crónica

第7号 1900年1月25日

①ドン・エミリオ・アギナルド・イ・ファミイ、フィリピン共和国大統領による、フィリピン革命についての真相概要 Reseña Verídica de la Revolución Filipina. Por Don Emilio Aguinaldo y Famy. Presidente de la República Filipina (Emilio Aguinaldo y Famy エミリオ・アギナルド・イ・ファミイ著)¹³

②アメリカのシビル・コミッションのレポートへの反論 I Contestación al Informe de la Comisión Civil Americana I

③皆が一つにまとまる Todos Unos (エドゥアルド・デ・レテ Eduardo de Lete 著)

④D. エミリアノ・レゴ¹⁴・デ・リオス將軍 香港中央委員会委員長 El General D. Emiliano Rego de Dios. Presidente del Comité Central de Hong-Kong (アントニオ M.^a レヒドール Antonio M.^a Regidor 著)¹⁵

⑤あなたたちは我々を打ち負かすのだろうか? 公的統計は何と答えるのだろうか ¿Nos Vencerán? Qué Conteste la Estadística Oficial

⑥戦争でのアドバンテージ Ventajas de la Guerra

⑦戦争のニュース Noticias de la Guerra

⑧宗教問題について Sobre la Cuestión Religiosa

⑨帝国主義の大きな秘密 El Gran Secreto del Imperialismo

⑩革命の人々 ドン・フェリペ・アゴンシーリョ (結論) Los Hombres de la Revolución. Don Felipe Agoncillo (Conclusión) (J. ルナ J. Luna 著)

⑪時評欄 Crónica

第8号 1900年2月10日

①残酷な欺瞞 彼らは我々にオファーした自治すらも渡していない! Burla Sangrienta ¡Ya No Nos Dan Ni la Autonomía Ofrecida!

¹³ 実際にアギナルドが書いたかどうかは不明であるが、最終回の第20号ではアギナルドの署名がなされている。

¹⁴ 印刷ミスのため、Riego de Dios が Rego de Dios になっている。

¹⁵ M.^a はマリアの略。

- ②ドン・エミリオ・アギナルド・イ・ファミイ、フィリピン共和国大統領による、フィリピン革命についての真相概要 *Reseña Verídica de la Revolución Filipina. Por Don Emilio Aguinaldo y Famy. Presidente de la República Filipina* (エミリオ・アギナルド・イ・ファミイ Emilio Aguinaldo y Famy 著)
- ③ヨーロッパの利益はフィリピンの独立を要請する オーストラリア人教授のフェルディナンド・ブルメントリット著 (結論) *Los Intereses Europeos Piden la Independencia de Filipinas. Por el Profesor Austriaco Ferdinand Blumentritt (Conclusión)* (フェルディナンド・ブルメントリット Ferdinand Blumentritt 著)
- ④裏切りに対して 大きな不正の力強い対策に *Contra la Traición. Á¹⁶ Grandes Males Enérgicos Remedios*
- ⑤完全な奴隷に *En Plena Esclavitud*
- ⑥国家間の嵐の来そうな大きな暗雲 沈みゆく帝国主義 *Entre las Naciones Nubarrón Tempestuoso. El Imperialismo en Baja*
- ⑦フィリピン人たちの文書に注目した科学セクション 筋肉の衰弱に関する研究 *Sección Científica Destinada á¹⁷ Escritos de Filipinos. Estudio de la Debilitación Musclar* (A. デ・アシス・イ・マカピンラク A. de Asis y Macapinlak)
- ⑧アメリカのシビル・コミッションのレポートへの反論 II *Contestación al Informe de la Comisión Civil Americana II*
- ⑨戦争のニュース *Noticias de la Guerra*
- ⑩ドーナ・ホセファ・デ・セビリャ・エ・ヒソン, デ・ロス・レイエスの三回忌 1897年2月13日 タンボボンにおいて34歳で亡くなった *Tercer Aniversario de Doña Josefa de Sevilla E Hison, de los Reyes. Falleció en Tambóbon en 13 de Febrero de 1897 á los 34 Años de Edad*
- ⑪時評欄 *Crónica*

第9号 1900年2月28日¹⁸

- ①祖国の殉教者たち ブルゴス、ゴメス、そしてサモラ 1872年2月28日 *A los Mártires de la Patria. Burgos, Gómez y Zamora. 28 de Febrero de 1872* (編集部 LA REDACCION¹⁹著)

¹⁶ 史料では A の上にアクセント記号が付いている。

¹⁷ 史料では a の上のアクセント記号が付いている。

¹⁸ 「ゴン・ブル・サ」追悼号

¹⁹ 史料では、タイトルの最初の A と REDACCION の I にアクセント記号はない。

②ゴメス神父へ 不滅の人 Al Padre Mariano Gómez. El “Inmortal” (1人のフィリピン人 UN FILIPINO 著)

③時評欄 Crónica (スアン・タガログ Zuan Tagalog 著)

第10号 1900年3月10日

①帝国主義に抗うアメリカ合衆国 Norte-América contra el Imperialismo

②マッキンレーは大うそつきで犯罪者なのか? ¿Mac-Kinley, Embustero y Criminal?

③フィリピン諸島での帝国主義政策 (フィリピンの地方からの手紙) Política Imperialista en Filipinas (Carta del Campo Filipino) (AP. ライオン (フィリピン人) AP. Lyon (filipino)著)

④ゲリラ戦 La Guerra de Guerrillas (J. ロドリゲス J. Rodríguez 著)

⑤革命の人々 Los Hombres de la Revolución

⑥ドン・イノセンシオ・ヘレラ Don Inocencio Herrera (トーマス・アレホラ著)

⑦ドン・エミリオ・アギナルド・イ・ファミイ、フィリピン共和国大統領による、フィリピン革命についての真相概要 Reseña Verídica de la Revolución Filipina. Por Don Emilio Aguinaldo y Famy. Presidente de la República Filipina (エミリオ・アギナルド・イ・ファミイ Emilio Aguinaldo y Famy 著)²⁰

⑧ラグナのフィリピン軍司総令官からのアメリカニスタへの返信 Contestación a²¹ un Americanista. Del General Jefe de las Fuerzas Filipinas de la Laguna (フアン・カイリエス De V. Atto y s. s. Juan Cailles 著)

⑨戦争のニュース Noticias de la Guerra (I. デ・サントス I. de Santos 著)

⑩リエゴ・デ・ディオス将軍が我々に以下を述べた:フィリピン人中央委員会 El General Riego de Dios Nos Dice lo Siguiete: Comité Central Filipino (フィリピン人中央委員会²²Comité Central Filipino から²³)

⑪マニラのリサールの三回忌 El Tercer Aniversario de Rizal en Manila (バナル Banal 著)

⑫リサールへ Á²⁴ Rizal (フェルナンド M. グレロ FERNANDO M. HUERRERO 著)

⑬あの世にいるペペ²⁵・リサールへ A²⁶ Pepe Rizal. En el otro mundo

²⁰ このタイトルには(continuación)の文字はついていない。

²¹ 史料ではこの a にアクセント記号はない。

²² 香港委員会の別名。

²³ 著したというよりも、香港委員会から送られてきた記事や手紙である。

²⁴ 史料ではこの A にアクセント記号がある。

²⁵ ホセの愛称

⑭時評欄 Crónica

第 11 号 1900 年 3 月 25 日

- ①交戦圏 El Teatro de la Guerra
- ②大統領のメッセージ El Mensaje Presidencial II
- ③ドン・エミリオ・アギナルド・イ・ファミ、フィリピン共和国大統領による、フィリピン革命についての真相 (続き) Reseña Verídica de la Revolución Filipina. Por Don Emilio Aguinaldo y Famy. Presidente de la República Filipina (continuación) (エミリオ・アギナルド・イ・ファミイ Emilio Aguinaldo y Famy 著)
- ④仮面の下で! ¡Abajo Caretas! (エドゥアルド・デ・レテ EDUARDO DE LETE 著)
- ⑤帝国主義政党によって犠牲にされたアメリカ合衆国 Los Estados Unidos Sacrificados por el Partido Imperialista (トカヨ Tocayo 著)
- ⑥フィリピン諸島の改革のためのスペインでの私の仕事 Mis Gestiones en España en pró²⁷ de Reformas para Filipinas
- ⑦革命の人々 D. フランシスコ・リベラ D. ピオ・デル・ピラール将軍 Los Hombres de la Revolución D. Francisco Rivera. El General D. Pio del Pilar
- ⑧戦争のニュース 我々の個人的な活動の電報 Noticias de la Guerra. Telegrama de Nuestro Servicio Particular
- ⑨我々は主人を望まない No queremos Amos (ホセ・インファンテ (サンボアンガ人) José Infante (zamboangueno) 著)
- ⑩セブからの手紙 Cartas de Cebú (シスネ・ハクロネファ Cisne Jacronefa 著)
- ⑪ネグロスで起こったこと Lo Occurrido en Negros (フィーブレ FEEBLE 著)
- ⑫イロイロからの手紙 Carta de Ilo-Ilo
- ⑬時評欄 Crónica

第 12 号 1900 年 4 月 10 日

- ①オーロラ・ヌエバ 祖国のアカデミー 'Aurora Nueva' Academia de la Patria
- ②フィリピンの女性たち Las Mujeres Filipinas (スアン・タガログ ZUAN TAGÁLOG 著)

²⁶ 史料ではこの A にアクセント記号はない。

²⁷ 史料では o にアクセント記号がある。

③貧しいフィリピン人聖職者！ ¡Pobre Clero Filipino!

④1896年から97年のフィリピン革命に関するイサベロ・デ・ロス・レイエスのセンセーショナルなレポート La Sensacional Memoria de Isabelo de los Reyes sobre la Revolución Filipina de 1896-97 (ミゲール・モライタ MIGUEL MORAYTA 著)

⑤戦争のニュース Noticias de la Guerra

第13号 1900年4月25日

①スアン・タガログの反帝国主義キャンペーン ヤンキーの帝国主義に対して抗うキャンペーン I リサールの記念に 絶対にない 絶対にない 絶対にない！ Campaña Anti-Imperialista de Zuan Tagalog. Campaña contra el Imperialismo Yankee I. ²⁸ la Memoria de Rizal. ¡Jamás, jamás, jamás! (スアン・タガログ ZUÁ²⁹N TAGÁLOG 著)

②とても的を射た措置 宗教問題について Medida Acertadísima sobre la Cuestión Religiosa (エミリオ・アギナルド *Emilio Aguinaldo* 著)

③フィリピン人将軍の意見 Opinión de un General Filipino (ベナンシオ・コンセプション VENANCIO CONCEPCIÓN 著)

④パリの万国博覧会 La Exposición Universal de París

⑤「オーロラ・ヌエバ」の報告 Boletín de la “Aurora Nueva”

⑥戦争のニュース 勇敢なリエゴ将軍からの手紙 フィリピン中央委員会 Noticias de la Guerra. Carta del Valiente General Riego Comité Central Filipino (E.リエゴ E. Riego から)

⑦時評欄 Crónica (ドドン Dódong 著)

第14号 1900年5月10日

①大統領のメッセージ III El Mensaje Presidencial III

②ヤンキーの帝国主義に対するキャンペーン II リサールの記念に 死か自由か！ Campaña contra el Imperialismo Yankee II. ³⁰ la memoria de Rizal. ¡Muertos ³¹ Libres! (スアン・タガログ Zuan Tagalog 著)

③ドン・エミリオ・アギナルド・イ・ファミイ、フィリピン共和国大統領による、フィリピン革命につ

²⁸ 史料ではアクセント記号がある。

²⁹ 史料ではアクセント記号がある。

³⁰ 史料ではアクセント記号はない。

³¹ 史料ではアクセント記号がある。

- いての真相 (続き) *Reseña Verídica de la Revolusi3n Filipina. Por Don Emilio Aguinaldo y Famy. Presidente de la Rep3blica Filipina (Continuaci3n)* (エミリオ・アギナルド・イ・ファミイ Emilio Aguinaldo y Famy 著)
- ④ヤンキーの支配の下でのフィリピン人たちのぞっとする将来 *Pavoroso Porvenir de los Filipinos bajo la Dominaci3n Yankee*
- ⑤ベールの端 (宗教問題) *La Punta del Velo (La Cuesti3n Religiosa)*
- ⑥「オーロラ・ヌエバ」の報告 戦術の基礎知識 I 奇襲、待ち伏せ、輸送隊の攻撃 *Bolet3n de la “Aurora Nueva” Nociones de Arte Militar I. La Sorpresa, la Emboscada y el Ataque de Convoy* (I. デ・ロス・レイエス *I de los Reyes* 著)
- ⑦権威のある意見 *Una Opini3n Autorizada* (エドゥアルド・デ・レテ *EDUARDO DE LETE* 著)
- ⑧革命の人々 *Los Hombres de la Revoluci3n*
- ⑨更なる賢明さ *M3s Prudencia*
- ⑩2月4日 愛国心によるドキュメント *El 4 de Febrero. Documento Patri3tico* (ラミロ・フランコ *RAMIRO FRANKO* 著)
- ⑪戦争のニュース *Noticias de la Guerra* (*Dr. I. デ・サントス I. de Santos* 著)
- ⑫時評欄 *Cr3nica*

第 15 号 1900 年 5 月 25 日

- ①革命家たちよ、警戒せよ！ *¡Alerta, Revolucionarios!*
- ②フィリピンの教会 I *Iglesia Filipina I* (イサベロ・デ・ロス・レイエス *Isabelo de los Reyes* 著)
- ③ドン・エミリオ・アギナルド・イ・ファミイ、フィリピン共和国大統領による、フィリピン革命について
の真相概要 (続き) *Reseña Verídica de la Revolusi3n Filipina. Por Don Emilio Aguinaldo y Famy. Presidente de la Rep3blica Filipina (continuaci3n)* (エミリオ・アギナルド・イ・ファミイ *Emilio Aguinaldo y Famy* 著)
- ④「オーロラ・ヌエバ」の報告 戦術の基礎知識 II グリラ戦術 *Bolet3n de la “Aurora Nueva” Nociones de Arte Militar II. T3ctica de Guerrillas* (I. デ・ロス・レイエス *I. DE LOS REYES* 著)
- ⑤我々は何の施し物も必要ない！ *¡No Necesitamos Limosna de Nadie!*
- ⑥フィリピン諸島の状況、アメリカ代表の判断 *La Situaci3n de Filipinas. Juicios de un Delegado Americano*

- ⑦イギリスとアメリカのメーソン支部の全てが我々の独立を支持している *Inglaterra y Todos las Logias Masónicas de los Estados Unidos Apoyan Nuestra Independencia*
- ⑧公的セクション 賞賛されるに値する態度 *Sección Oficial. Una Medida Digna de Aplauso* (トーマス・マスカルド・イ・エチェニケ *Tomas Mascardo y Echenique*³²)
- ⑨戦争のニュース *Noticias de la Guerra* (マヌエル・テニョ *MANUEL TINIO*, *General de Brigada*, 他著)
- ⑩時評欄 *Crónica*

第 16 号 1900 年 6 月 10 日

- ①告訴され差し押さえを受けた編集長 *Nuestra Revista Denunciada. El Director Procesado y Embargado*
- ②アギナルドと新しいアメリカのコミッション *Aguinaldo y la Nueva Comisión Americana*
- ③彼らはすでにその無能を認めている *Ya Reconocen su Impotencia*
- ④ゲリラ間での合図によるコミュニケーション *Comunicación por Señales entre las Guerrillas* (J.R. キューバのフィリピン人ゲリラ兵 J.R., *guerrillero filipino de Cuba* 著)
- ⑤フィリピンの教会 II *Iglesia Filipina II* (イサベロ・デ・ロス・レイエス *ISABELO DE LOS REYES* 著)
- ⑥ドン・エミリオ・アギナルド・イ・ファミイ、フィリピン共和国大統領による、フィリピン革命についての真相概要 (続き) *Reseña Verídica de la Revolución Filipina. Por Don Emilio Aguinaldo y Famy. Presidente de la República Filipina (continuación)* (エミリオ・アギナルド・イ・ファミイ *Emilio Aguinaldo y Famy* 著)
- ⑦民主主義の読み物 I *Lecturas Democráticas I*
- ⑧革命の人々 イシドロ・サントス *Los Hombres de la Revolución. El Dr. Isidoro de Santos*
- ⑨戦争のニュース *Noticias de la Guerra* (一人の不屈な反徒 *Un Insurrecto impenitente* 著)
- ⑩「オーロラ・ヌエバ」の報告 法律の専門研究のための計画と方法 *Boletín de la "Aurora Nueva". Plan y Método para el Estudio de la Carrera del Derecho*
- ⑪時評欄 *Crónica*

第 17 号 1900 年 6 月 25 日

³² 名前は史料通り。

- ①なぜ我々は戦争の支持者なのか Por qué Somos Partidarios de la Guerra
- ②ドン・エミリオ・アギナルド・イ・ファミイ、フィリピン共和国大統領による、フィリピン革命についての真相概要(続き) Reseña Verídica de la Revolución Filipina. Por Don Emilio Aguinaldo y Famy. Presidente de la República Filipina (Continuación) (エミリオ・アギナルド・イ・ファミイ Emilio Aguinaldo y Famy 著)
- ③宗教上のポイント Punto Religioso (エドゥアルド・デ・レテ EDUARDO DE LETE 著)
- ④「オーロラ・ヌエバ」の報告 ヨーロッパ化しよう(習慣革命) I ヨーロッパ人たちの性格;彼らは尊厳をどう理解するのか Boletín de la “Aurora Nueva”. Europeicémonos³³ (Revolución en las Costumbres) I. El Carácter de los Europeos; Cómo Entienden la Dignidad (イサベロ・デ・ロス・レイエス ISABELO DE LOS REYES 著)
- ⑤フィリピンの教会 III Iglesia Filipina III (イサベロ・デ・ロス・レイエス **Isabelo DE LOS REYES** 著)³⁴
- ⑥日本からの手紙 フィリピン代表——日本 Carta del Japón. Philippine Delegation.—Japan³⁵ (ヤンキー嫌い AYAW-KONG-YANKI 著)
- ⑦マニラからの手紙 Carta de Manila (バルサン BARZÁN 著)
- ⑧戦争のニュース Noticias de la Guerra (非アメリ...カニン *Hinde Ameri...kánin*、他著)
- ⑨時評欄 Crónica

第 18 号 1900 年 7 月 10 日

- ①独立以外の解決はあり得ない No Cabe Otra Solución que la Independencia
- ②フィリピン国民への他の屈辱 Otro Insulto al Pueblo Filipino
- ③修道士たちの財産 Las Propiedades de los Frailes
- ④フィリピンの教会 Iglesia Filipina IV (イサベロ・デ・ロス・レイエス ISABELO DE LOS REYES 著)
- ⑤ドン・エミリオ・アギナルド・イ・ファミイ、フィリピン共和国大統領による、フィリピン革命についての真相概要(続き) Reseña Verídica de la Revolución Filipina. Por Don Emilio Aguinaldo y Famy. Presidente de la República Filipina (Continuación) (エミリオ・アギナルド・イ・ファミイ Emilio Aguinaldo y Famy 著)

³³ Europeicémonos の c は史料通り。

³⁴ この著者名は太字にされている。

³⁵ このタイトルの後半は英語。

- ⑥法の革命 *Revolución en las Leyes*
- ⑦ヤンキーの無能 *La Impotencia Yankee*
- ⑧「オーロラ・ヌエバ」の報告 法律の専門課程のための計画と方法 (続き) *Boletín de la “Aurora Nueva”. Plan y Método para el Estudio de la Carrera del Derecho (Continuación)* (セレスティノ・ロドリゲス CELESTINO RODRÍGUEZ 著)
- ⑨我々は抗議する *Protestamos*
- ⑩戦争のニュース *Noticias de la Guerra* (非アメリ...カニン HINDI AMERI...KÁNIN 著)
- ⑪時評欄 *Crónica*

第 19 号 1900 年 7 月 25 日

- ①独立そして革命 *¡Independencia y Revolución!*³⁶ (イサベロ・デ・ロス・レイエス **Isabelo de los REYES** 著)³⁷
- ②とんでもない! *¡Quién!*³⁸ (マドリッド 1900 年 6 月 27 日付け *Madrid 27 de Junio de 1900*)
- ③タフト・コミッションの裏表のある言行 *La Comisión Taft y su Doble Juego*
- ④ドン・エミリオ・アギナルド・イ・ファミイ、フィリピン共和国大統領による、フィリピン革命についての真相概要(続き) *Reseña Verídica de la Revolución Filipina. Por Don Emilio Aguinaldo y Famy. Presidente de la República Filipina (Continuación)* (エミリオ・アギナルド・イ・ファミイ Emilio Aguinaldo y Famy 著)
- ⑤「オーロラ・ヌエバ」の報告 戦術の基礎知識 *Boletín de la “Aurora Nueva”. Nociones de Arte Militar (I. デ・ロス R. I. de los R. 著)*
- ⑥ヤンキーの商人たちが我々の商人たちを踏みにじる *Los Mercaderes Yankees Empiezan á Atropellar á los Nuestrós*
- ⑦フィリピンの教会 *V Iglesia Filipina V* (I.R. 著)
- ⑧Dr. アントニオ・マリア・レヒドール・Y・フラード *Dr. Antonio Maria Regidor y Jurado*³⁹
- ⑨香港からの身の毛もよだつような手紙 *Carta espeluznante de Hong-Kong* (イドソリオ IDSORIO 著)
- ⑩マニラのプレスが述べないこと *Lo que no Dice la Prensa de Manila* (パッシング// *Río Pasig* 著)

³⁶ 史料では o の上のアクセント記号はない。

³⁷ 著者名は太字にされている。

³⁸ 史料では a の上にアクセント記号がついている。

³⁹ 史料では Maria の i にアクセント記号はついていない。

⑩戦争のニュース 香港のフィリピン人中央委員会 Noticias de la Guerra (香港のフィリピン人中央委員会 Comité Central Filipino en Hong Kong から)

第 20 号 1900 年 8 月 10 日

- ①そのような平和はない! ¡No Hay Tal Paz!
- ②ドン・エミリオ・アギナルド・イ・ファミイ、フィリピン共和国大統領による、フィリピン革命についての真相概要 (最終回) Reseña Verídica de la Revolución Filipina. Por Don Emilio Aguinaldo y Famy. Presidente de la República Filipina (Conclusión) (エミリオ・アギナルド・イ・ファミイ Emilio Aguinaldo y Famy 著)
- ③我々の伝道に従え Conforme con Nuestras Predicaciones (フィリピン人中央委員会 G.アパシブレ著 Por el Comité Central Filipino, G. Apacible)
- ④-1 新しいセクション Nueva Sección
- ④-2 光のページ ドロレス・ロニョ・ピタ Páginas de Luz Dolores Loño Pita (ラミロ・フランコ Ramiro FRANKO 著)⁴⁰
- ⑤暴君を殺すのは正当か ¿Es Lícito Matar al Tirano?
- ⑥「オーロラ・ヌエバ」の報告 メーソンの通達 Boletín de la “Aurora Nueva” Circular Masónica (グラント・マスター ミゲール・モライタ El G Δ ⁴¹Maes Δ ⁴², Miguel Morayta 著)
- ⑦えせ愛国主義者の会議 La Reunión de los Pseudo-Nacionalistas
- ⑧エル・Dr.アントニオ・マリア・レヒドール・イ・フラド El Dr. Antonio María Regidor y Jurado
- ⑨人道的なプログラム Programa Humanitario

第 21 号 1900 年 8 月 25 日

- ①不快なテーマ Tema Ingrato
- ②私の愛する同国人へ A mis Amados Conciudadanos⁴³ (エミリオ・アギナルド EMILIO AGUINALDO 著)
- ③山賊! ¡Bandoleros!
- ④公示された悪意 Mala Fe Manifiesta

⁴⁰ 著者名は太字になっている。

⁴¹ 史料では三角形を示す点であるが、三角形で代用する。

⁴² 史料では三角形を示す点であるが、三角形で代用する。

⁴³ 史料では A の上にアクセント記号はない。

- ⑤香港のフィリピン人たちによって判断されたいかさまのパテルーマルカミノ⁴⁴ フィリピン中央委員会からセニョール・D. イサベロ・デ・ロス・レイエスへ——マドリッド *El Pastel Pater-Malcamino Juzgado por los Filipinos de Hong-Kong. Comité Central Filipino. Sr. D. Isabelo de los Reyes.-Madrid* (*Dr. バルサン Barzan* 著)
- ⑥武装したフィリピン人たちへ *A los Filipinos en Armas*⁴⁵ (スペインのフィリピン独立委員会——委員長、トーマス・アレホラ——セクレタリー、セレスティノ・ロドリゲス著 *Por el Comité de Independencia Filipina en España.El presidente,- Tomás Aréjola,- Celestino Rodoríguez, Secretario*)
- ⑦武装したビサヤ人たちの抗議 イロイロの山々で散開している国家ゲリラの団長であるマルティン・デルガード・エ・バルメホ将軍 *Protesta de los Visayas Armados. El General Martin Delgado y Bermejo, Jefe de las Guerrillas Nacionales Esparcidas por los Montes de Ilo-Ilo* (マルティン・デルガード *Martin Delgado*、他著)
- ⑧迎合する人々に対するマニラからの2通の手紙 最初の手紙はアメリカニスタから、第2の手紙は独立支持者から *Dos Cartas de Manila contra los Pasteleros. La Primera de un Americanista, y La Segunda de un Independiente* (F.T と P.H. 著)
- ⑨戦争のニュース *Noticias de la Guerra* (Carta del General Tinio ティニオ将軍の手紙、Carta del General Torres トーレス将軍の手紙)
- ⑩民主主義の読み物 アメリカ人の権利の宣言 *Lecturas Democráticas II Declaración de Derechos de los Americanos*
- ⑪時評欄 *Crónica*

第22号 1900年9月10日

- ①武装したフィリピン人たちへ マドリッド委員会のマニフェスト(結論) *A los Filipinos en Armas. Manifiesto del Comité de Madrid (Conclusión)*⁴⁶ (スペインのフィリピン独立委員会——委員長、トーマス・アレホラ——セクレタリー、セレスティノ・ロドリゲス著 *Por el Comité de Independencia Filipina en España.El presidente,- Tomás Aréjola,- Celestino Rodoríguez, Secretario*)

⁴⁴ フェリペ・ブエンカミノの苗字のブエンカミノをもじって、Buen (良い) + Camino (道) ではなく、Mal (悪い) + Camino (道) と皮肉っている。

⁴⁵ 史料ではAの上にアクセント記号はない。

⁴⁶ 史料ではAの上にアクセント記号はない。

- ②ボア軍の組織 Organización del Ejército Boer
- ③議会か Poto⁴⁷か ¿Asamblea ó “Poto”?⁴⁸ (トカヨ El TOCAYO 著)
- ④私の同国人たちへ Á mis Compatriotas⁴⁹ (一人のバタンガス人 UN BATABGUEÑO 著)
- ⑤習慣の革命 我々のヨーロッパ化 II 服・洗顔・洗髪 Revolución en las Costumbres. Europeizémonos II. Trajes, Aseo, Peinado⁵⁰ (I デ・ロス R. I de los R. 著)⁵¹
- ⑥マドリッドのフィリピン人委員会の抗議 La Protesta del Comité Filipino de Madrid
- ⑦哀れな復讐 Venganza Pobre (イサベロ・デ・ロス・レイエス ISABELO DE LOS REYES 著)
- ⑧マニラの隣人たちの論述 La Exposición de los Vecinos de Manila
- ⑨戦争のニュース Noticias de la Guerra
- ⑩法律の専門課程のための計画と方法(結論) Plan y Método para el Estudio de la Carrera de Derecho (Conclusión) (セレスティノ・ロドリゲス CELESTINO RODORÍGUEZ 著)
- ⑪時評欄 Crónica

第 23 号 1900 年 9 月 25 日

- ①パリとロンドンにて I Por París y Londres I (イサベロ・デ・ロス・レイエス **Isabelo de los Reyes** 著)⁵²
- ②終わらされた相違 全てのフィリピン人たちの団結万歳! Divergencia Terminada ¡Viva la Unión de Todos los Filipinos!
- ③苛々するからかい Burla Irritante
- ④マニラのリセオへの教育革命 I 件のリセオのセクレタリーのセニョール・イグナシオ・ビリャモール Revolucion en la Enseñanza. Al Liceo de Manila I. Sr. D. Ignacio Villamor, Secretario de dicho Liceo⁵³ (イサベロ・デ・ロス・レイエス ISABELO DE LOS REYES 著)
- ⑤戦術の基礎知識 IV 即興で作られた塹壕—避難所 Nociones de Arte Militar IV. Trincheras-Abrigos Improvisados
- ⑥革命の人々 ティニオ將軍 Los Hombres de la Revolución. El General Tinio

⁴⁷ Poto の意味は不明。Voto (投票) の可能性が高い。

⁴⁸ 史料では o の上にアクセント記号がついている。

⁴⁹ 史料では A の上にアクセント記号がついている。

⁵⁰ Europeizémonos の z は史料通り。

⁵¹ 著者名は太字。I にピリオドはついていない。

⁵² 著者名は太字になっている。

⁵³ 印刷が不鮮明なため、o の上のアクセント記号がない。

- ⑦「オーロラ・ヌエバ」の報告 マニラのリセオ Boletín de la “Aurora Nueva”. El Liceo de Manila
- ⑧タフト・コミッションへ トンドの裁判所での鬻ぎ 我々から正義を盗む!!! A la Comisión Taft. Un Escandalo en el Juzgado de Tondo. ¡¡¡La Justicia Nos Roba!!!⁵⁴ (I. デ・ロス R. I. de los R. 著)
- ⑨時評欄 Crónica

第 24 号 1900 年 10 月 10 日

- ①センセーショナル 最新のニュース Sensacional Noticia de Ultima Hora⁵⁵
- ②元気を出せ! ¡Arriba los Corazones!
- ③マニラの女性たちの組織 Un Instituto de Mujeres en Manila⁵⁶
- ④光のページ オリエントのミネルバたち Página de Luz. Las Minervas de Oriente (ラミロ・フランコ RAMIRO FRANKO 著)
- ⑤ブラス・カマンダグへ A “Blas Kamandag”⁵⁷ (セレスティノ・ロドリゲス スペイン系メスティーゾ Neztizo español CELESTINO RODORIEZ 著)⁵⁸
- ⑥マニラのリセオへの教育革命 II ロンドンとパリの博覧会での初等教育 Revolución en la Enseñanza. Al Liceo de Manila II. La Instrucción Primaria en Londres y en la Exposición de París (イサベロ・デ・ロス・レイエス ISABELO DE LOS REYES 著)
- ⑦革命の人々 マビニ Los Hombres de la Revolución. Mabini (I. R. 著)
- ⑧戦争のニュース フィリピン人たちの勝利 Noticias de la Guerra. Grandes Triunfos de los Filipinos
- ⑨真のフィリピン人愛国者たちへ (地方からの手紙) Á los Verdaderos Patriotas Filipinos (Carta del Campo) (T. サンディコ著)
- ⑩セブからの手紙 Carta de Cebú (マカブハイ著)
- ⑪時評欄 Crónica

第 25 号 1900 年 10 月 25 日

- ①一周年 Un Año de Vida (I. デ・サントス、他著)

⁵⁴ 史料では A にアクセント記号はない。

⁵⁵ 史料では Ultimo の U にアクセント記号はない。

⁵⁶ ③は次の④の導入も兼ねている。

⁵⁷ 史料では A にアクセント記号はない。

⁵⁸ 史料では RODORIGUEZ の I にアクセント記号はない。

- ②国民の品位と軍の名誉 La Dignidad de un Pueblo y el Honor de un Ejército
- ③光のページ 1年が過ぎ Paginas de Luz Después del Año (ラミロ・フランコ Ramiro FRANKO 著)
- ④ローマのフィリピン人聖職者の代表たち Los Representantes del Clero Filipino en Roma
- ⑤2,500部 ¡2,500 Ejemplares!
- ⑥パリとロンドンにて II 旅のコスト Por Paris y Londres II. El Costo del Viaje⁵⁹ (I. デ・ロス・レイエス I. DE LOS REYES)
- ⑦平和への働き Labor de Paz (I. デ・ロス・レイエス)
- ⑧パリのスペイン人たちとフィリピン人たち ヘラルド・デ・マドリッドの電報 セニョール・ロメロ・ロブレドとセニョール・アゴンシーリョの乾杯——重大な宣言——素晴らしい噂 Españoles y Filipinos en París. Telegramas del 《Heraldo de Madrid》. Brindis de los Sres. Romero Robledo y Agoncillo. --Graves declaraciones.--Rumor Estupendo.⁶⁰
- ⑨道徳性のキャンペーン Campaña de Moralidad
- ⑩マニラの隣人たちの論述 (続き) Exposición de los Vecinos de Manila (Continuación)
- ⑪戦争のニュース Noticias de la Guerra
- ⑫時評欄 Crónica

第 26 号 1900 年 11 月 10 日

- ①戦争！ 今のところは 今のところだけは！ 不正が勝った ¡Guerra! Por Ahora ¡Solo por Ahora! Triunfó la Iniquidad
- ②フィリピン国民へ Al Pueblo Filipino (エミリオ・アギナルド EMILIO AGUINALDO 著)
- ③経済的な物事の中で我々が奴隷になり始めている 不可能な新しい税金 Ya Empieza Nuestra Esclavitud en lo Económico. Nuevos Impuestos Imposibles
- ④マニラの隣人たちの論述 (結論) Exposición de los Vecinos de Manila (Conclusión)⁶¹
- ⑤光のページ グレゴリオ・デル・ピラール将軍 Paginas de Luz. El General Gregorio del Pilar (ラミロ・フランコ Ramiro FRANKO 著)
- ⑥大声で罰を求める けがらわしい判決 Sentencia Nefanda Que Pide á Voces Castigo (イサベロ・デ・ロス・レイエス ISABELO DE LOS REYES 著)

⁵⁹ 史料では Paris の i にアクセント記号はない。

⁶⁰ 史料では del の e が印刷されていないが、e があると解釈し、掲載する。

⁶¹ 史料では vecinos の i が消えているが i があるものとして解釈し、掲載する。

- ⑦修正を迫られるマッキンレー Mac-Kinley Rectificado
- ⑧中南米諸国及びスペインとポルトガル系アメリカ人の会議 El Congreso Ibero-Americano
- ⑨ヤンキーたちの野蛮さ 香港のフィリピン中央委員会委員長の R. デ・ディオスへ Salvajismo de los Yankis. Al General Sr. Emiliano R. De Dios. Presidente del Comité Central Filipino de Hong-Kong (マニエル・ティニオ Manuel Tinio 著)
- ⑩時評欄 Crónica

第 27 号 1900 年 11 月 25 日

- ①とても興味深い Interesantísimo
- ②マビニはでたらめを書かない Mabini No Escribe Disparates
- ③重要な手紙 Carta Importante (X 著)
- ④フィリピン人保守主義者たちの間にマニフェスト Manifiesto de los Conservadores Filipinos
- ⑤光のページ マルセロ・H. デル・ピラール、アントニオ・ルナ、そしてエドゥアルド・デ・レテ Paginas de Luz. Marcelo H. del Pilar, Antonio Luna y Eduardo de Lete (ラミロ・フランコ Ramiro FRANKO 著)
- ⑥戦争のニュース Noticias de la Guerra
- ⑦ヤンキーたちの踏みにじり Atropellos de los Yankis (Dr. バルサン Barzán 著)
- ⑧『マニラのニュース欄』へ Al “Noticiero de Manila”
- ⑨マニラのプレスが言わないこと Lo que No Dice la Prensa de Manila (パッシング// Rio Pasig、他 著)

第 28 号 1900 年 12 月 10 日

- ①タフト・コミッションの活動 Los Trabajos de la Comisión Taft⁶²
- ②ミスター・マッキンレーの冗談 Bromas de Mr. Mac-Kinley
- ③野蛮なヤンキー (マスカルド将軍からの手紙) Barbarie Yanki (Carta del General Mascardo) (マスカルド将軍 General Mascardo 著)⁶³
- ④モラルを強化するキャンペーン Campaña de Moralización (R. 著)
- ⑤ドクター・バルセロナの手紙 セニョール・アギナルドの医務官で、衛生検査副検査官 Dr. インドロ・

⁶² 史料では Trabajo の a と Taft の a が消えているが、あるものとして掲載する。

⁶³ 記事は最後に続くとなっているが、その後続きは掲載されていない。

- デ・サントスへ Carta del Dr. Barcelona. Médico del Sr. Aguinaldo y Subinspector General de Sanidad. Al Dr. Isidoro de Santos (S. バルセロナ Barcelona 著)
- ⑥ドン・ルドビコ・アレホラ 旅団の将軍でアンボス・カマリネスの軍事行動の上長 D. Ludovico Aréjola. General de Brigada y Jefe de Operaciones de Ambos Camarines (エスパルタコ ESPARTACO 著)
- ⑦構うものか! ¡Qué Importa!
- ⑧そしてすっかり終わる 《封筒のない手紙》スペイン系メスティーソ D. セレスティノ・ロドリゲスへ Y se Acabó. 《Carta sin sobre》 Al Mestizo Español D. Celestino Rodoriguez (A.バンケス・デ・アルダナ A. Vanquez de Aldana 著) Al Español Sr. A. Vazquez de Aldana スペイン人 A.バンケス・デ・アルダナへ (セレスティノ・ロドリゲス CELESTINO RODORIGUEZ 著)
- ⑨オフィシャル・セクション 祖国に対して偽証する人々に抗う政令 Sección Oficial. Decretos contra los Perjurios á la Patria (フランシスコ S. ディソン Francisoco S. Dizon 著)
- ⑩時評欄 Crónica

第 29 号 1900 年 12 月 25 日

- ①著名なアギナルド El Ilstre Aguinaldo (イサベロ・デ・ロス・レイエス ISABELO DE LOS REYES 著)
- ②これは天罰に値する! ¡Esto Clama al Cielo!
- ③カティプーナンの宗教 イサベロ・デ・ロス・レイエス著 La Religión del “Katipúnán” Por Isabelo de los Reyes (イサベロ・デ・ロス・レイエス ISABELO DE LOS REYES 著)
- ④真の独立 Independencia Verdad
- ⑤フィリピン諸島 Filipinas
- ⑥イロコス的女性たち 女たちよ、君たちに祖国とその旗を与えるように、君たちの男たちに要求したまえ Las Nujeres de Ilocos Mujeres, exijid⁶⁴ de vuestros hombres que os den una Patria y una bandera propia.
- ⑦オーロラ・ヌエバの報告 前へ! それが栄光への道である Boletín de la “Aurora Nueva”. ¡Adelante! Ese es el Camino de la Gloria (イグナシオ・ビリャモール Ignacio Villamor 著)
- ⑧マニラからの手紙 Carta de Manila (1 人の反旗を翻す若人 Un niño insurrecto 著)
- ⑨隠れた事実 Verdades Ocultas (マカパタイ MAKAPATÁY 著)

⁶⁴ 史料通り。Exigid で訳す。

⑩時評欄 危機の中の同盟 Crónica. Alianza en Peligro

第 30 号 1901 年 1 月 10 日

- ①20 世紀 規律の乱れた部隊 ¡En el Siglo XX! La Soldadesca
- ②復讐！ 戦争！ 戦争！ ¡Venganza! ¡Guerra, Guerra!
- ③アメリカ合衆国 一通の手紙と重要な電報 Los Estados Unidos. Una Carta y Telegramas
Importantes
- ④通信に関するとんでもない侵害 フィリピン諸島の郵便における盗みと他の行き過ぎた行為 アメリカ人長官と将来のコミッションへ Escandalosa Violación de la Correspondencia. Robos y Otros Excesos en Correos de Filipinas. Al Gobernador Americano y á la Comisión Civil
- ⑤香港からの手紙 Carta de Hong Kong (Dr. ベルナル Bernal 著)
- ⑥極東 そのへつらいの将来 El Extramo-Oriente. Su Halagüeño Porvenir
- ⑦国家防衛 Defensa Nacional
- ⑧アギナルドは死んでいなかった No ha Muerto Aguinaldo
- ⑨オーストリアからの手紙 Carta de Austria (F. ブルメントリット Blumentritt 著)
- ⑩宗教問題 La Cuestión Religiosa
- ⑪アングロボーア戦争 La Guerra Anglo-Boar
- ⑫そして誰が恐怖を述べたのか？ ¿Y quién Dijo Miedo?
- ⑬時評欄 彼らは屈し始めている Crónica ¡Ya Empiezan a ceder!

第 31 号 1901 年 1 月 25 日

- ①兄弟愛そのもの Fraternidad nada más
- ②我々の兵士たちへ 確固とした揺るぎなさと多くの本気 A los Nuestros. Mucha Firmeza y Mucha Seriedad⁶⁵
- ③オフィシャル・セクション 共和国大統領政府 D. エミリオ・アギナルド・イ・ファミイ、フィリピン共和国大統領で総司令官 Sección Oficial. Don Emilio Aguinaldo y Famy. Presidente de la República Filipina y Generalísimo de su Ejército (エミリオ・アギナルド Emilio Aguinalco 著)
- ④パナイの革命家たち Los Revolucionarios de Panay
- ⑤別の子供じみた行い ¿Otra Chiquillada?

⁶⁵ 史料では A にアクセント記号はない。

- ⑥愚行であろう Sería una Burrada
- ⑦デルガード将軍からの手紙 Carta del General Delgado (マルティン・デルガード Martín Delgado 著)
- ⑧我々は抗議する Protestamos
- ⑨戦争に関する真実 La Verdad sobre la Guerra
- ⑩驚くべき野蛮な行動 Increíbles Salvajadas (共和国警備隊の長 T. サンディコ T. SANDICO, *Jefe de la Guardia Republicana* 著)
- ⑪重要な電報 Telegramas Importantes
- ⑫時評欄 Crónica

第 32 号 1901 年 2 月 10 日

- ①誠実さとともに Con Sinceridad
- ②独立を支持する全員一致の投票 エル・セニョール・アパシブレ Voto Unanime por la Independencia. El Sr. Apacible
- ③どんな目的を携えて来たのか? ¿Qué Objeto Llevan?
- ④社会の寄生虫たちの政党 Partido de Vividores
- ⑤確実な勝利 ヤンキーへの異議申し立て Triunfo Seguro. Contestación á un Yanki
- ⑥我々はまだ恐れていない 諸島全体において、戒厳令か、それとも諸島の一部の人だけが利益を得る法律なのか ¡Ya Estamos Asustados! La Ley Marcial, ó del Embudo en todo el Archipiélago
- ⑦ゲリラ戦 (続き) Guerra de Guerrillas (Continuacion)⁶⁶ (J. ロドリゲス (様々な勲章と共にあるキューバ・ゲリラの中尉) J. RODORÍGUEZ. Teniente guerrillero en Cuba con varias cruces)
- ⑧適切な行動! 銃殺された山賊たち ¡Bien Hecho! Bandidos Fusilados
- ⑨それらの残忍な人々が罰せられた Castigad á Estas Fieras
- ⑩マニラからの手紙 Carta de Manila (マイ・ヒア MAY HIÁ 著)
- ⑪我々はすでに銃と資金を持っている Ya tenemos Fusiles y Dinero
- ⑫時評欄 Crónica
- ⑬追悼記事 ドーニャ・ホセファ・デ・セビリャ・エ・ヒソン・デ・ロス・レイエスが 1897 年 3 月 13 日に逝去。マドリッド 1901 年 2 月 10 日 Cuarto Anversario de D.^a Josefa de Sevilla e Hizon de los Reyes. Falleció en Tembobon el 13 de Febrero de 1897 á los 34 Años de Edad

⁶⁶ 史料では Continuacion の o にアクセント記号はない。

第 33 号 1901 年 2 月 25 日

- ①必ず独立 Independientes con Toda Seguridad
- ②貧しい平和なフィリピン人たち！ 前代未聞 ¡ Pobres Filipinos Pacíficos! Sin Precedente (キャプテン・ララ CAPITÁN LARA 著)
- ③フィリピン人たちではない No Son Filipinos
- ④マニラからの手紙 (結論) Carta de Manila (Conclusión) (マイーイカ *May-Íká* 著)
- ⑤ドン・ビセンテ・ソット Don Vicente Sotto
- ⑥フィリピン革命の先駆者たち 1872 年の人々 命日と歴史秘話 Los Precursores de la Revolución Filipina. Los de 1872. Un Aniversario y una Anécdota
- ⑦いまだに修道士 Todavía los Frailes
- ⑧マニラのリセオへの教育革命 III フィリピン人に適用するフランスの初等教育のシステム
Revolución en la Enseñanza al Liceo de Manila III. Sistema Francés de Enseñanza Elemental
Aplicado á los Filipinos (イサベロ・デ・ロス・レイエス ISABELO DE LOS REYES 著)
- ⑨パリとロンドンにて III Por París y Londres III (I. デ・ロス・レイエス *I. de los Reyes* 著)
- ⑩フィリピンへ A Filipinas⁶⁷ (L. タウ TAW⁶⁸ 著)

第 34 号 1901 年 3 月 10 日

- ①香港のフィリピン人中央委員会 自己防衛として センセーショナルな公示 Comité Central Filipino de Hong-Kong. En Propia Defensa. Bando Sensacional (E. アギナルド AGUINALDO 著)
- ②言葉、言葉、言葉 Words, Words, only Words
- ③力強い忍耐 Estómagos Fuertes
- ④イロイロの平和委員会へ Al Comité de Paz de Ilo-ilo
- ⑤我々の裁判 Nuestro Proceso
- ⑥香港の中央委員会 El Comité Central Filipino de Hong-Kong
- ⑦マニラの恐怖 平和を好む人々が何千となく革命に寝返っている Horrores en Manila. Los

⁶⁷ 史料では A にアクセント記号はない。

⁶⁸ 印刷状態が悪いので、リタウの可能性もある。

Pacificos se Pasan a Millares a la Revolución⁶⁹ (キャプテン・クラメ *El Capitán Crame* 著)

⑧フィリピンへ A Filipinas⁷⁰ (リタウ LITAW 著)

⑨我々がマッキンレーを否定したら Desmintamos a Mac-Kinley⁷¹

⑩ティニオ旅団の軍事行動日誌(イロコス)(続き) Diario de Operaciones de la Brigada Tinio (Ilocos)
(Continuación)

第 35 号 1901 年 4 月 10 日

- ①アギナルドが捕虜に！ 彼の敵たちの低劣な裏切り、それは彼らの無能を一番証明するものである。
もしそれらのずるで、今は我々を打ち破ったとしても、我々は再度反乱を起こす。 ¡Aguinaldo
Prisionero! La Indigna Traición de Sus Enemigos, Es la Mejor Prueba de Su Impotencia. Si con
Esas Malas Artes Nos Vencieren Ahora. Volveremos á Sublevarnos
- ②新しい指導者 新しい生活 Caudillo Nuevo, Vida Nueva (トーマス・アレホラ TOMÁS ARÉJOLA
著)
- ③いつも前へ(最速) Siempre Adelante (Rapidísima) (Dr. ラミロ・フランコマドリッド委員会副
委員長 RAMIRO FRANKO, Vicepresidente del Comité Filipino en Madrid 著)
- ④戦争の状況 El Estado de la Guerra
- ⑤スペイン人著名人たち モレとキログ・バレストロス Españoles Ilustres Moret y Quiroga
Ballesteros
- ⑥セニョール・D.ベニグノ・キログ・バレストロス 統治のサブ・セクレタリオ Exomo. Sr. D. Benigno
Quiroga Ballesteros. Subsecretario de Gobernación
- ⑦テレロ將軍 El General Terrero (Dr. F. デ・レオン F. DE LEON 著)
- ⑧誰が後継者になるのか? ¿Quién Será el Sucesor? (イサベロ・デ・ロス・レイエス ISABELO DE
LOS REYES 著)
- ⑨不名誉の不名誉 Infamia sobre Infamia
- ⑩シビル・コミッションの見かけ倒しな物事 Engañifas de la Comisión Civil
- ⑪裏切りの嫌悪すべき詳細 Detalles Odiosos de la Traición
- ⑫時評欄 Crónica

⁶⁹ 史料では 2 つの a はともに、アクセント記号はない。

⁷⁰ 史料では A にアクセント記号はない。

⁷¹ 史料では a にアクセント記号はない。

第 36 号 1901 年 6 月 10 日

- ①独立万歳！ (公的連絡の手紙) フィリピン共和国 ¡Viva la Independencia! (Grata Comunicación Oficial) República Filipina (メシア MESÍAS、他著)
- ②憲法が実現されるのなら Que se Cumpla la Constitución
- ③無能力と吸収合併 アメリカン・コミッションの《レポート》 Impotencia y Absorción. El 《Report》 de la Comisión Americana
- ④新しいエレメントの必要性 マドリッドのフィリピン委員会の重要なセッション Necesidad de Nuevos Elementos. Sesión Importante del Comité de Madrid
- ⑤フィリピン人聖職者のための世俗コミッション Comisión Seglar por el Clero Filipino
- ⑥アギナルド Aguinaldo
- ⑦がんばれフィリピン人！ ¡Animo, Filipinos!
- ⑧香港の出版 La Imprenta de Hong-Kong
- ⑨時評欄 Crónica